

# 林中原Ⅱ遺跡(2)

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第60集

## 林中原Ⅱ遺跡(2)

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第60集

二〇一八

国土交通省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2018

国土交通省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 林中原Ⅱ遺跡(2)

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第60集

2018

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





調査区遠景 建設中の不動大橋を臨む（西から）



Ⅰ号列石遠景（東から）

# 序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で24年目を迎えます。林中原Ⅱ遺跡は平成20・21年度に発掘調査を行った遺跡です。ダム建設に伴う生活再建事業の一環として、水没する国道145号線の代替道路としての八ッ場バイパス建設と町道建設に先立ち調査されました。

調査の結果、縄文時代から中世・近世に至る、良好な埋蔵文化財包蔵地であることが解りました。特に、縄文時代中期～後期にかけての集落跡として住居跡100軒以上が発見され、縄文時代の大型集落跡として位置付けられました。

本書は、その縄文時代集落跡のうち、町道建設に伴う調査区を扱った縄文時代編です。中期～後期の住居跡群とその豊富な出土遺物をはじめ、大規模な列石遺構がともなった集落遺跡です。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で未永く活用されることを願い序といたします。

平成30年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 中野 三智男



# 例 言

1. 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成20年度と21年度に発掘調査された『林中原Ⅱ遺跡』の発掘調査報告書である。本書は林中原Ⅱ遺跡で検出された縄文時代の集落跡を中心とした遺構・遺物および遺構外出土遺物を掲載しており、林中原Ⅱ遺跡の発掘調査報告書の第2冊目である。
2. 林中原Ⅱ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林984・985-1・985-2・986・988・989・990・991・992・993・1002-1-3・1003・1004-2・1005-1・1006-1・1007・1008・乙1009・1009-1・1011・1012・1018-1・1023・1024に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
3. 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。
4. 発掘調査は、平成20年10月14日から平成20年12月26日・平成21年3月1日～平成21年10月31日まで実施しており、今回報告する遺構・遺物は、調査対象区のうち町道建設にあたる調査区の、縄文時代に該当する資料を対象としている。
5. 発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当 平成20年度：飯田陽一、飯森康広、宮下 寛  
平成21年度：飯田陽一、坂口 一、麻生敏隆、飯森康広、須田正久、宮下 寛、平井 敦

遺跡掘削工事 平成20年度：吉澤建設株式会社  
平成21年度：株式会社歴史の杜
6. 整理期間は平成25年4月1日から平成30年3月31日である。
7. 整理体制は以下のとおりである。

編集 山口逸弘  
執筆 菅頭明日香、建石 徹、大工原 豊、二宮修治（第4章第1節）  
佐々木由香、米田恭子、バンダリ スダルシャン（第4章第2節）  
榎崎修一郎（第4章第3節）  
山口逸弘（上記以外）

石材同定 飯島静男（群馬県地質研究会）  
遺構写真撮影 各調査担当者  
遺物写真撮影 山口逸弘

依頼・委託 遺構測量および遺構図デジタル編集 株式会社測研  
石器実測 株式会社測研  
// 株式会社シン技術コンサル  
// 有限会社毛野考古学研究所

黒曜石産地同定 菅頭明日香（青山学院大学）  
土器種実圧痕同定 佐々木由香（パレオ・ラボ）  
人骨鑑定 榎崎修一郎（生物考古学研究所）
8. 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。
9. 発掘調査および調査報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。記して感謝いたします。  
国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会

# 凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
2. 調査範囲には4×4mのグリッド方眼を設定し、各グリッド呼称は南東隅の交点を充てている。
3. 遺構図の縮尺は、各挿図に示している。
4. 遺構番号は、基本的に調査時の番号を用いた。しかしながら、整理段階で各遺構の再検討を行っており、遺構名、遺構番号の変更も一部ある。変更した場合、その都度本文中に記した。
5. 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また●は土器、○は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号の無い遺物は出土位置を記録しなかったものである。遺構図土層註における黄色粒は浅間草津軽石（As-YPk）と類似する軽石粒を総称した。
6. 遺物図の縮尺は、各挿図に示している。
7. 写真図版中の遺物縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
8. 遺物観察表及び計測表の計測値単位はcmである。石器等の重量はすべて残存値である。色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。
9. 遺構図・遺物図中の網掛け部分は図中に説明を記している。
10. 遺構名称で、竪穴住居一般に関しては、住居跡あるいは号住、住と記す。土坑跡は土坑あるいは号坑、坑、焼土遺構は焼土、集石遺構は集石と記している。
11. 本文中、「郷土式」の名称に関しては、

桜井秀雄 2000 「郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市内3—』長野県埋蔵文化財センター

綿田弘実 2003 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会 p.105-159

関根愼二 2008 「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要』26（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

綿田弘実 2009 「郷土式・圧痕隆帯紋土器・大木系土器」『綜覧縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション p.444-449

藤森英二他 2011 「特集 郷土式は成立するか」『佐久考古通信No.107』佐久考古学会

山口逸弘 2015 「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相」『研究紀要』33（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

上記文献を元に、「郷土式」として呼称している。

# 目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

## 第1章 調査経過と調査の方法

- 第1節 調査に至る経緯…………… 1
- 第2節 発掘調査の経過…………… 1
- 第3節 発掘調査の方法…………… 2
- 第4節 整理業務の経過…………… 4

## 第2章 周辺の環境

- 第1節 遺跡の位置と地形…………… 5
- 第2節 周辺の遺跡…………… 5
- 第3節 林地区の縄文時代遺跡…………… 9

## 第3章 発見された遺構と遺物

- 第1節 遺跡の概要…………… 15
- 第2節 基本土層…………… 15
- 第3節 住居跡…………… 26
- 第4節 掘立柱建物跡…………… 296
- 第5節 土坑…………… 307
- 第6節 竪穴状遺構…………… 348
- 第7節 埋設土器…………… 353
- 第8節 焼土遺構…………… 359
- 第9節 集石遺構…………… 364
- 第10節 列石遺構…………… 365
- 第11節 流路及び溝…………… 381
- 第12節 遺構外出土遺物…………… 382

## 第4章 分析

- 第1節 林中原Ⅱ遺跡および長野原一本松遺跡出土黒曜石資料の産地分析…………… 397
- 第2節 レプリカ法による土器種実圧痕の同定…………… 414
- 第3節 林中原Ⅱ遺跡61区及び62区出土縄文時代焼骨…………… 428

## 第5章 総括

- 第1節 各時期の住居跡の様相について…………… 434
- 第2節 出入口部埋襲について…………… 436

遺構計測表・遺物観察表

写真図版

報告書抄録

奥付



# 挿図目次

第1図	林中原Ⅱ遺跡 位置図(国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)……………	1
第2図	林中原Ⅱ遺跡調査区区分り(斜線部分は町道)……………	2
第3図	調査区の設定……………	3
第4図	周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)……………	7
第5図	林中原Ⅱ遺跡周辺遺跡及び地形図……………	折り込み
第6図	基本土層図……………	16
第7図	林中原Ⅱ遺跡全体図(51・52・61・62区)……………	折り込み
第8図	林中原Ⅱ遺跡全体図(町道部分)1面目……………	折り込み
第9図	林中原Ⅱ遺跡全体図(町道部分)2面目……………	折り込み
第10図	林中原Ⅱ遺跡遺構配置図1……………	23
第11図	林中原Ⅱ遺跡遺構配置図2……………	24
第12図	林中原Ⅱ遺跡遺構配置図3……………	25
第13図	61区1号住居跡(1)……………	26
第14図	61区1号住居跡(2)……………	27
第15図	61区1号住居跡(3)……………	28
第16図	61区1号住居跡(4)……………	29
第17図	61区1号住居跡(5)……………	30
第18図	61区1号住居跡出土遺物(1)……………	31
第19図	61区1号住居跡出土遺物(2)……………	32
第20図	61区2号住居跡(1)……………	33
第21図	61区2号住居跡(2)……………	34
第22図	61区2号住居跡(3)……………	35
第23図	61区2号住居跡(4)……………	36
第24図	61区2号住居跡(5)……………	37
第25図	61区2号住居跡出土遺物(1)……………	38
第26図	61区2号住居跡出土遺物(2)……………	39
第27図	61区2号住居跡出土遺物(3)……………	40
第28図	61区2号住居跡出土遺物(4)……………	41
第29図	61区2号住居跡出土遺物(5)……………	42
第30図	61区2号住居跡出土遺物(6)……………	43
第31図	61区2号住居跡出土遺物(7)……………	44
第32図	61区3号住居跡(1)……………	45
第33図	61区3号住居跡(2)……………	46
第34図	61区3号住居跡(3)……………	47
第35図	61区3号住居跡(4)……………	48
第36図	61区3号住居跡(5)……………	49
第37図	61区3号住居跡(6)……………	50
第38図	61区4号住居跡……………	51
第39図	61区3・4号住居跡出土遺物(1)……………	52
第40図	61区3・4号住居跡出土遺物(2)……………	53
第41図	61区3・4号住居跡出土遺物(3)……………	54
第42図	61区3・4号住居跡出土遺物(4)……………	55
第43図	61区3・4号住居跡出土遺物(5)……………	56
第44図	61区7号住居跡(1)……………	57
第45図	61区7号住居跡(2)……………	58
第46図	61区7号住居跡出土遺物(1)……………	59
第47図	61区7号住居跡出土遺物(2)……………	60
第48図	61区8号住居跡(1)……………	61
第49図	61区8号住居跡(2)……………	62
第50図	61区8号住居跡(3)……………	63
第51図	61区8号住居跡出土遺物(1)……………	64
第52図	61区8号住居跡出土遺物(2)……………	65
第53図	61区9号住居跡(1)……………	66
第54図	61区9号住居跡(2)……………	67
第55図	61区9号住居跡(3)……………	68
第56図	61区9号住居跡出土遺物(1)……………	69
第57図	61区9号住居跡出土遺物(2)……………	70
第58図	61区9号住居跡出土遺物(3)……………	71
第59図	61区9号住居跡出土遺物(4)……………	72
第60図	61区9号住居跡出土遺物(5)……………	73
第61図	61区9号住居跡出土遺物(6)……………	74
第62図	61区9号住居跡出土遺物(7)……………	75
第63図	61区9号住居跡出土遺物(8)……………	76
第64図	61区9号住居跡出土遺物(9)……………	77
第65図	61区10号住居跡及び出土遺物……………	78
第66図	61区11号住居跡(1)……………	79
第67図	61区11号住居跡(2)……………	80
第68図	61区11号住居跡出土遺物(1)……………	81
第69図	61区11号住居跡出土遺物(2)……………	82
第70図	61区12・16・19号住居跡(1)……………	83
第71図	61区12・16・19号住居跡(2)……………	84
第72図	61区12・16・19号住居跡(3)……………	85
第73図	61区12号住居跡出土遺物(1)……………	86
第74図	61区12号住居跡出土遺物(2)……………	87
第75図	61区12号住居跡出土遺物(3)……………	88
第76図	61区12号住居跡出土遺物(4)……………	89
第77図	61区12号住居跡出土遺物(5)・19号住居跡出土遺物……………	90
第78図	61区16号住居跡出土遺物……………	90
第79図	61区17号住居跡(1)……………	92
第80図	61区17号住居跡(2)……………	93
第81図	61区17号住居跡(3)……………	94
第82図	61区17号住居跡(4)……………	95
第83図	61区17号住居跡出土遺物(1)……………	96
第84図	61区17号住居跡出土遺物(2)……………	97
第85図	61区17号住居跡出土遺物(3)……………	98
第86図	61区18号住居跡及び出土遺物……………	99
第87図	61区20号住居跡及び出土遺物……………	100
第88図	61区21号住居跡(1)……………	101
第89図	61区21号住居跡(2)……………	102
第90図	61区21号住居跡(3)……………	103
第91図	61区21号住居跡出土遺物……………	103
第92図	61区22号住居跡(1)……………	105
第93図	61区22号住居跡(2)……………	106
第94図	61区22号住居跡(3)……………	107
第95図	61区22号住居跡出土遺物(1)……………	108
第96図	61区22号住居跡出土遺物(2)……………	109
第97図	61区22号住居跡出土遺物(3)……………	110
第98図	61区23号住居跡(1)……………	111
第99図	61区23号住居跡(2)……………	112
第100図	61区23号住居跡(3)……………	113
第101図	61区23号住居跡出土遺物(1)……………	114
第102図	61区23号住居跡出土遺物(2)……………	115
第103図	61区24号住居跡(1)……………	116
第104図	61区24号住居跡(2)……………	117
第105図	61区24号住居跡(3)……………	118
第106図	61区24号住居跡(4)……………	119
第107図	61区24号住居跡出土遺物(1)……………	120
第108図	61区24号住居跡出土遺物(2)……………	121
第109図	61区24号住居跡出土遺物(3)……………	122
第110図	61区26号住居跡……………	123
第111図	61区26号住居跡出土遺物……………	124
第112図	61区27号住居跡……………	126
第113図	61区27号住居跡出土遺物……………	127
第114図	61区28号住居跡……………	128
第115図	61区28号住居跡出土遺物……………	129
第116図	61区29号住居跡……………	131
第117図	61区29号住居跡出土遺物……………	132
第118図	61区30号住居跡……………	133
第119図	61区30号住居跡出土遺物(1)……………	133
第120図	61区30号住居跡出土遺物(2)……………	134
第121図	61区31号住居跡及び出土遺物……………	135
第122図	61区32号住居跡(1)……………	137
第123図	61区32号住居跡(2)……………	138
第124図	61区32号住居跡(3)……………	139
第125図	61区32号住居跡出土遺物(1)……………	140
第126図	61区32号住居跡出土遺物(2)……………	141
第127図	61区32号住居跡出土遺物(3)……………	142
第128図	61区32号住居跡出土遺物(4)……………	143
第129図	61区32号住居跡出土遺物(5)……………	144
第130図	61区32号住居跡出土遺物(6)……………	145

第131图	61区32号住居跡出土遺物 (7).....	146
第132图	61区32号住居跡出土遺物 (8).....	147
第133图	61区33号住居跡.....	149
第134图	61区33号住居跡出土遺物 (1).....	150
第135图	61区33号住居跡出土遺物 (2).....	151
第136图	61区34号住居跡 (1).....	152
第137图	61区34号住居跡 (2).....	153
第138图	61区34号住居跡出土遺物.....	153
第139图	61区35号住居跡 (1).....	154
第140图	61区35号住居跡 (2).....	155
第141图	61区35号住居跡 (3).....	156
第142图	61区35号住居跡出土遺物 (1).....	157
第143图	61区35号住居跡出土遺物 (2).....	158
第144图	61区35号住居跡出土遺物 (3).....	159
第145图	61区35号住居跡出土遺物 (4).....	160
第146图	61区36号住居跡 (1).....	162
第147图	61区36号住居跡 (2).....	163
第148图	61区36号住居跡出土遺物 (1).....	164
第149图	61区36号住居跡出土遺物 (2).....	165
第150图	61区37号住居跡及び出土遺物.....	166
第151图	61区38号住居跡.....	167
第152图	61区38号住居跡出土遺物.....	168
第153图	61区39号住居跡 (1).....	169
第154图	61区39号住居跡 (2).....	170
第155图	61区39号住居跡 (3).....	171
第156图	61区39号住居跡出土遺物 (1).....	172
第157图	61区39号住居跡出土遺物 (2).....	173
第158图	61区39号住居跡出土遺物 (3).....	174
第159图	61区41号住居跡及び出土遺物.....	176
第160图	61区42号住居跡 (1).....	177
第161图	61区42号住居跡 (2).....	178
第162图	61区42号住居跡 (3).....	179
第163图	61区42号住居跡出土遺物 (1).....	180
第164图	61区42号住居跡出土遺物 (2).....	181
第165图	61区43号住居跡 (1).....	182
第166图	61区43号住居跡 (2).....	183
第167图	61区43号住居跡 (3).....	184
第168图	61区43号住居跡出土遺物 (1).....	185
第169图	61区43号住居跡出土遺物 (2).....	186
第170图	61区44号住居跡及び出土遺物.....	187
第171图	61区45号住居跡出土遺物.....	187
第172图	61区46号住居跡.....	189
第173图	61区46号住居跡出土遺物.....	190
第174图	61区47号住居跡及び出土遺物.....	191
第175图	61区48号住居跡出土遺物.....	192
第176图	62区 2号住居跡 (1).....	194
第177图	62区 2号住居跡 (2).....	195
第178图	62区 2号住居跡 (3).....	196
第179图	62区 2号住居跡出土遺物 (1).....	197
第180图	62区 2号住居跡出土遺物 (2).....	198
第181图	62区 2号住居跡出土遺物 (3).....	199
第182图	62区 3号住居跡及び出土遺物.....	200
第183图	62区 4号住居跡.....	201
第184图	62区 4号住居跡出土遺物.....	202
第185图	62区 5号住居跡 (1).....	203
第186图	62区 5号住居跡 (2).....	204
第187图	62区 5号住居跡 (3).....	205
第188图	62区 5号住居跡出土遺物 (1).....	205
第189图	62区 5号住居跡出土遺物 (2).....	206
第190图	62区 6号住居跡 (1).....	207
第191图	62区 6号住居跡 (2).....	208
第192图	62区 6号住居跡出土遺物 (1).....	209
第193图	62区 6号住居跡出土遺物 (2).....	210
第194图	62区 7号住居跡.....	211
第195图	62区 7号住居跡出土遺物.....	212
第196图	62区 8号住居跡.....	213
第197图	62区 8号住居跡出土遺物 (1).....	214
第198图	62区 8号住居跡出土遺物 (2).....	215

第199图	62区 9号住居跡 (1).....	217
第200图	62区 9号住居跡 (2).....	218
第201图	62区 9号住居跡 (3).....	219
第202图	62区 9号住居跡出土遺物 (1).....	220
第203图	62区 9号住居跡出土遺物 (2).....	221
第204图	62区 9号住居跡出土遺物 (3).....	222
第205图	62区 9号住居跡出土遺物 (4).....	223
第206图	62区 9号住居跡出土遺物 (5).....	224
第207图	62区 9号住居跡出土遺物 (6).....	225
第208图	62区 9号住居跡出土遺物 (7).....	226
第209图	62区 9号住居跡出土遺物 (8).....	227
第210图	62区 9号住居跡出土遺物 (9).....	228
第211图	62区 9号住居跡出土遺物 (10).....	229
第212图	62区 9号住居跡出土遺物 (11).....	230
第213图	62区 9号住居跡出土遺物 (12).....	231
第214图	62区10号住居跡.....	232
第215图	62区10号住居跡出土遺物 (1).....	232
第216图	62区10号住居跡出土遺物 (2).....	233
第217图	62区11号住居跡.....	235
第218图	62区11号住居跡出土遺物 (1).....	235
第219图	62区11号住居跡出土遺物 (2).....	236
第220图	62区12号住居跡 (1).....	237
第221图	62区12号住居跡 (2).....	238
第222图	62区12号住居跡出土遺物 (1).....	239
第223图	62区12号住居跡出土遺物 (2).....	240
第224图	62区12号住居跡出土遺物 (3).....	241
第225图	62区12号住居跡出土遺物 (4).....	242
第226图	62区12号住居跡出土遺物 (5).....	243
第227图	62区12号住居跡出土遺物 (6).....	244
第228图	62区12号住居跡出土遺物 (7).....	245
第229图	62区13号住居跡 (1).....	247
第230图	62区13号住居跡 (2).....	248
第231图	62区13号住居跡 (3).....	249
第232图	62区13号住居跡出土遺物 (1).....	249
第233图	62区13号住居跡出土遺物 (2).....	250
第234图	62区14号住居跡 (1).....	251
第235图	62区14号住居跡 (2).....	252
第236图	62区14号住居跡 (3).....	253
第237图	62区14号住居跡出土遺物 (1).....	254
第238图	62区14号住居跡出土遺物 (2).....	255
第239图	62区14号住居跡出土遺物 (3).....	256
第240图	62区15号住居跡 (1).....	257
第241图	62区15号住居跡 (2).....	258
第242图	62区15号住居跡 (3).....	259
第243图	62区15号住居跡 (4).....	260
第244图	62区15号住居跡出土遺物 (1).....	261
第245图	62区15号住居跡出土遺物 (2).....	262
第246图	62区15号住居跡出土遺物 (3).....	263
第247图	62区15号住居跡出土遺物 (4).....	264
第248图	62区15号住居跡出土遺物 (5).....	265
第249图	62区15号住居跡出土遺物 (6).....	266
第250图	62区16号住居跡 (1).....	267
第251图	62区16号住居跡 (2).....	268
第252图	62区16号住居跡出土遺物 (1).....	269
第253图	62区16号住居跡出土遺物 (2).....	270
第254图	62区17号住居跡 (1).....	271
第255图	62区17号住居跡 (2).....	272
第256图	62区17号住居跡 (3).....	273
第257图	62区17号住居跡出土遺物 (1).....	274
第258图	62区17号住居跡出土遺物 (2).....	275
第259图	62区17号住居跡出土遺物 (3).....	276
第260图	62区18号住居跡及び出土遺物.....	277
第261图	62区19号住居跡 (1).....	278
第262图	62区19号住居跡 (2).....	279
第263图	62区19号住居跡 (3).....	280
第264图	62区19号住居跡出土遺物 (1).....	281
第265图	62区19号住居跡出土遺物 (2).....	282
第266图	62区19号住居跡出土遺物 (3).....	283



第267図	62区19号住居跡出土遺物(4)	284
第268図	62区20号住居跡及び出土遺物	285
第269図	62区21号住居跡及び出土遺物	286
第270図	62区22号住居跡	287
第271図	62区22号住居跡出土遺物(1)	288
第272図	62区22号住居跡出土遺物(2)	289
第273図	62区23号住居跡及び出土遺物	291
第274図	62区24号住居跡(1)	292
第275図	62区24号住居跡(2)	293
第276図	62区24号住居跡出土遺物	294
第277図	62区25号住居跡及び出土遺物	295
第278図	61区1号掘立柱建物(1)	297
第279図	61区1号掘立柱建物(2)	298
第280図	61区1号掘立柱建物出土遺物	298
第281図	61区2号掘立柱建物(1)	299
第282図	61区2号掘立柱建物(2)	300
第283図	61区2号掘立柱建物出土遺物	300
第284図	62区1号掘立柱建物(1)	301
第285図	62区1号掘立柱建物(2)	302
第286図	62区1号掘立柱建物出土遺物	303
第287図	62区2号掘立柱建物(1)	304
第288図	62区2号掘立柱建物(2)	305
第289図	62区2号掘立柱建物出土遺物	306
第290図	土坑 61区(1)	309
第291図	土坑 61区(2)	311
第292図	土坑 61区(3)	314
第293図	土坑 61区(4)	316
第294図	土坑 61区(5)	319
第295図	土坑 61区(6)	321
第296図	土坑 61区(7)	324
第297図	土坑 61区(8)	325
第298図	土坑 61区出土遺物(1)	326
第299図	土坑 61区出土遺物(2)	327
第300図	土坑 61区出土遺物(3)	328
第301図	土坑 61区出土遺物(4)	329
第302図	土坑 61区出土遺物(5)	330
第303図	土坑 61区出土遺物(6)	331
第304図	土坑 62区(1)	333
第305図	土坑 62区(2)	335
第306図	土坑 62区(3)	337
第307図	土坑 62区(4)	340
第308図	土坑 62区(5)	342
第309図	土坑 62区出土遺物(1)	343
第310図	土坑 62区出土遺物(2)	344
第311図	土坑 62区出土遺物(3)	345
第312図	土坑 62区出土遺物(4)	346
第313図	土坑 62区出土遺物(5)	347
第314図	土坑 62区出土遺物(6)	348
第315図	61区3号竪穴状遺構及び出土遺物	349
第316図	61区4号竪穴状遺構	350
第317図	61区4号竪穴状遺構出土遺物(1)	350
第318図	61区4号竪穴状遺構出土遺物(2)	351
第319図	61区5号竪穴状遺構及び出土遺物	352
第320図	埋設土器 61・62区	355
第321図	埋設土器 61区出土遺物(1)	356
第322図	埋設土器 61区出土遺物(2)	357
第323図	埋設土器 61区出土遺物(3)	358
第324図	埋設土器 62区出土遺物	359
第325図	焼土 61・62区	362
第326図	焼土 61・62区出土遺物	363
第327図	62区1号集石及び出土遺物	364
第328図	62区2号集石及び出土遺物	365
第329図	1号列石配置図	折込み
第330図	1号列石(1)	369
第331図	1号列石(2)	370
第332図	1号列石(3)	371
第333図	1号列石(4)	372
第334図	1号列石出土遺物(1)	373

第335図	1号列石出土遺物(2)	374
第336図	1号列石出土遺物(3)	375
第337図	1号列石出土遺物(4)	376
第338図	1号列石出土遺物(5)	377
第339図	1号列石出土遺物(6)	378
第340図	1号列石出土遺物(7)	379
第341図	1号列石出土遺物(8)	380
第342図	2号列石及び出土遺物	380
第343図	61区1号流路及び出土遺物	381
第344図	62区1号溝及び出土遺物	381
第345図	遺構外出土遺物 61区(1)	383
第346図	遺構外出土遺物 61区(2)	384
第347図	遺構外出土遺物 61区(3)	385
第348図	遺構外出土遺物 61区(4)	386
第349図	遺構外出土遺物 61区(5)	387
第350図	遺構外出土遺物 61区(6)	388
第351図	遺構外出土遺物 61区(7)	389
第352図	遺構外出土遺物 61区(8)	390
第353図	遺構外出土遺物 62区(1)	391
第354図	遺構外出土遺物 62区(2)	392
第355図	遺構外出土遺物 62区(3)	393
第356図	遺構外出土遺物 62区(4)	394
第357図	遺構外出土遺物 62区(5)	395
第358図	種実圧痕同定資料(圧痕No78～83は1/5)	427
第359図	61区・62区 中期中葉～後葉前半段階の住居跡配置	434
第360図	61区・62区 中期後葉後半段階の住居跡配置	435
第361図	61区・62区 中期末葉～後期初頭段階の住居跡配置	436
第362図	林中原Ⅱ遺跡中期後葉住居跡配置図(51・52・61・62区)	437
第363図	林中原Ⅱ遺跡51・52区出入口埋襲諸例(1)	438
第364図	林中原Ⅱ遺跡51・52区出入口埋襲諸例(2)	439

## 表目次

表1	周辺の主な遺跡一覧	8
表2	林中原Ⅱ遺跡 黒曜石産地分析試料	399
表3	長野原一本松遺跡 黒曜石産地分析試料(比較検討用)	401
表4	関東地方周辺の主な産地黒曜石の6元素	401
表5	長野原一本松遺跡出土黒曜石資料の産地分析結果	402
表6	林中原Ⅱ遺跡出土黒曜石資料の産地分析結果	404
表7	上ノ平Ⅰ/三平Ⅰ/林中原Ⅱ遺跡出土土器圧痕資料の同定結果	414
表8	上ノ平Ⅰ/林中原Ⅱ遺跡出土土器圧痕資料の同定結果	416
表9	上ノ平Ⅰ/三平Ⅰ/林中原Ⅱ遺跡出土土器圧痕資料の同定結果	418
表10	林中原Ⅱ遺跡出土焼骨まとめ	432
表11	遺構計測表	441
	住居跡	441
	土坑	445
	61区遺構(その他)	446
	62区遺構(その他)	446
表12	遺物観察表	447
	61区1号住居跡	447
	61区2号住居跡	447
	61区3・4号住居跡	451
	61区7号住居跡	454
	61区8号住居跡	455
	61区9号住居跡	456
	61区10号住居跡	461
	61区11号住居跡	461
	61区12号住居跡	462
	61区16号住居跡	465
	61区17号住居跡	465
	61区18号住居跡	467
	61区19号住居跡	467
	61区20号住居跡	468
	61区21号住居跡	468

61区22号住居跡	468
61区23号住居跡	470
61区24号住居跡	472
61区26号住居跡	474
61区27号住居跡	474
61区28号住居跡	475
61区29号住居跡	476
61区30号住居跡	476
61区31号住居跡	477
61区32号住居跡	478
61区33号住居跡	482
61区34号住居跡	482
61区35号住居跡	483
61区36号住居跡	485
61区37号住居跡	487
61区38号住居跡	487
61区39号住居跡	487
61区41号住居跡	490
61区42号住居跡	491
61区43号住居跡	492
61区44号住居跡	493
61区45号住居跡	493
61区46号住居跡	493
61区47号住居跡	494
61区48号住居跡	494
62区 2号住居跡	494
62区 3号住居跡	497
62区 4号住居跡	497
62区 5号住居跡	497
62区 6号住居跡	498
62区 7号住居跡	500
62区 8号住居跡	500
62区 9号住居跡	501
62区10号住居跡	507
62区11号住居跡	508
62区12号住居跡	509
62区13号住居跡	512
62区14号住居跡	514
62区15号住居跡	515
62区16号住居跡	519
62区17号住居跡	520
62区18号住居跡	522
62区19号住居跡	522
62区20号住居跡	525
62区21号住居跡	525
62区22号住居跡	525
62区23号住居跡	527
62区24号住居跡	527
62区25号住居跡	527
61区 1号掘立柱建物	528
61区 2号掘立柱建物	528
62区 1号掘立柱建物	528
62区 2号掘立柱建物	528
土坑 61区	529
土坑 62区	534
61区 3号竪穴状遺構	537
61区 4号竪穴状遺構	538
61区 5号竪穴状遺構	538
埋設土器 61区	539
埋設土器 62区	540
焼土遺構	540
集石 62区	541
1号列石	541
2号列石	544
61区 1号流路	544
62区 1号溝	545
遺構外出土遺物 61区	545
遺構外出土遺物 62区	556

# 写真図版目次

P L. 1	1	調査区遠景 丸岩を臨む (東から)
	2	遺跡全景 (上61・62区 下51・52区)
P L. 2	1	61区1号住居跡全景 (西から)
	2	61区1号住居跡炉跡 (北から)
	3	61区1号住居跡遺物出土状態 (南から)
	4	61区1号住居跡遺物出土状態 (西から)
	5	61区2号住居跡全景 (南から)
	6	61区2号住居跡炉跡 (北から)
	7	61区2号住居跡遺物出土状態 (南から)
	8	61区2号住居跡埋喪 (南から)
P L. 3	1	61区3号住居跡全景 (南西から)
	2	61区3号住居跡炉跡 (南西から)
	3	61区3号住居跡埋設土器 (西から)
	4	61区3号住居跡遺物出土状態 (北東から)
	5	61区4号住居跡全景 (東から)
	6	61区4号住居跡遺物出土状態 (東から)
	7	61区7号住居跡全景 (南から)
	8	61区7号住居跡炉跡 (東から)
P L. 4	1	61区8号住居跡全景 (北から)
	2	61区8号住居跡炉跡 (北から)
	3	61区9号住居跡全景 (南から)
	4	61区9号住居跡炉跡 (東から)
	5	61区9号住居跡埋喪 (東から)
	6	61区9号住居跡埋喪 (西から)
	7	61区9号住居跡遺物出土状態 (南東から)
	8	61区9号住居跡遺物出土状態 (西から)
P L. 5	1	61区10号住居跡全景 (南から)
	2	61区10号住居跡炉跡 (南から)
	3	61区11号住居跡全景 (南東から)
	4	61区11号住居跡炉跡 (北東から)
	5	61区12・9・16号住居跡全景 (南から)
	6	61区12号住居跡炉跡 (東から)
	7	61区12号住居跡炉体土器 (東から)
	8	61区12号住居跡遺物出土状態 (西から)
P L. 6	1	61区16号住居跡全景 (南から)
	2	61区17号住居跡全景 (西から)
	3	61区17号住居跡炉跡 (東から)
	4	61区17号住居跡遺物出土状態 (南から)
	5	61区18号住居跡全景 (北から)
	6	61区19号住居跡全景 (南から)
	7	61区20号住居跡全景 (南から)
	8	61区21号住居跡全景 (北から)
P L. 7	1	61区22号住居跡 (北から)
	2	61区22号住居跡炉跡 (西から)
	3	61区22号住居跡石組 (東から)
	4	61区23号住居跡全景 (東から)
	5	61区23号住居跡炉跡 (北東から)
	6	61区23号住居跡床下全景 (南から)
	7	61区23号住居跡埋喪 (東から)
	8	61区23号住居跡埋喪 (東から)
P L. 8	1	61区24号住居跡全景 (東から)
	2	61区24号住居跡全景 (南から)
	3	61区24号住居跡炉跡 (南から)
	4	61区24号住居跡遺物出土状態 (東から)
	5	61区26号住居跡全景 (東から)
	6	61区26号住居跡遺物出土状態 (東から)
	7	61区27号住居跡全景 (南から)
	8	61区27号住居跡炉跡 (南から)
P L. 9	1	61区28号住居跡全景 (南東から)
	2	61区28号住居跡炉跡 (西から)
	3	61区29号住居跡全景 手前は23・28号住居跡 (南から)
	4	61区29号住居跡炉跡 (南から)
	5	61区29号住居跡埋喪 (東から)
	6	61区30号住居跡全景 (南から)

	7	61区30号住居跡遺物出土状態（南東から）				
	8	61区31号住居跡土層（東から）				
P L. 10	1	61区32号住居跡全景（北から）		P L. 19	1	62区13号住居跡全景（南から）
	2	61区32号住居跡炉跡（南から）			2	62区13号住居跡炉跡（南から）
	3	61区32号住居跡埋葬1（東から）			3	62区13号住居跡遺物出土状態（南から）
	4	61区32号住居跡埋葬2（南から）			4	62区13号住居跡遺物出土状態（南から）
	5	61区32号住居跡埋葬3（西から）		P L. 20	1	62区13号住居跡遺物出土状態（南西から）
P L. 11	1	61区33号住居跡全景（北から）			2	62区13号住居跡床下全景（南から）
	2	61区33号住居跡炉跡（北から）			3	62区14号住居跡全景（南東から）
	3	61区34号住居跡全景（北から）			4	62区14号住居跡埋葬（北東から）
	4	61区34号住居跡炉跡（南西から）			5	62区15号住居跡全景（南から）
	5	61区35号住居跡全景（南から）			6	62区15号住居跡炉跡（西から）
	6	61区35号住居跡炉跡（南から）			7	62区15号住居跡炉体土器（東から）
	7	61区35号住居跡遺物出土状態（南から）		P L. 21	1	62区15号住居跡遺物出土状態（南から）
	8	61区35号住居跡遺物出土状態（南から）			2	62区15号住居跡遺物出土状態（南から）
P L. 12	1	61区36号住居跡全景（南から）			3	62区15号住居跡遺物出土状態（南から）
	2	61区36号住居跡炉跡（東から）			4	62区15号住居跡遺物出土状態（南から）
	3	61区37号住居跡全景（北から）			5	62区16号住居跡全景（南東から）
	4	61区38号住居跡全景（南から）			6	62区16号住居跡炉跡（南から）
	5	61区38号住居跡炉跡（北から）			7	62区17号住居跡遺物出土状態（南東から）
	6	61区39号住居跡全景（南東から）			8	62区17号住居跡遺物出土状態（北から）
	7	61区39号住居跡炉跡（南から）		P L. 22	1	62区17号住居跡全景（南東から）
	8	61区39号住居跡埋葬（南から）			2	62区17号住居跡炉跡（東から）
P L. 13	1	61区41号住居跡全景（南東から）			3	62区17号住居跡遺物出土状態（南東から）
	2	61区42号住居跡全景（北から）			4	62区17号住居跡遺物出土状態（東から）
	3	61区42号住居跡炉跡（南東から）			5	62区17号住居跡床下全景（南東から）
	4	61区42号住居跡遺物出土状態（東から）		P L. 23	1	62区19号住居跡全景（南東から）
	5	61区43号住居跡全景（南から）			2	62区19号住居跡炉跡（南東から）
	6	61区43号住居跡遺物出土状態（南から）			3	62区19号住居跡遺物出土状態（北東から）
	7	61区44号住居跡全景（北西から）			4	62区19号住居跡遺物出土状態（北から）
	8	61区45号住居跡全景（南から）			5	62区19号住居跡遺物出土状態（北東から）
P L. 14	1	61区46号住居跡全景（南から）			6	62区19号住居跡床下全景（南東から）
	2	61区46号住居跡炉跡（南から）			7	62区20号住居跡炉跡（南から）
	3	61区46号住居跡埋葬1（東から）			8	62区20号住居跡遺物出土状態（南から）
	4	61区46号住居跡埋葬2（北から）		P L. 24	1	62区21号住居跡全景（南東から）
	5	61区46号住居跡埋葬3（東から）			2	62区21号住居跡炉跡（西から）
	6	61区47号住居跡全景（東から）			3	62区22号住居跡全景（南から）
	7	61区47号住居跡炉体土器（東から）			4	62区22号住居跡遺物出土状態（南から）
	8	61区47号住居跡埋葬（北西から）			5	62区23号住居跡全景（南から）
P L. 15	1	62区2号住居跡全景（南から）			6	62区24号住居跡全景（南から）
	2	62区2号住居跡炉跡（南から）			7	62区24号住居跡炉跡（南から）
	3	62区2号住居跡遺物出土状態（南から）			8	62区25号住居跡全景（西から）
	4	62区2号住居跡遺物出土状態（西から）		P L. 25	1	61区58号土坑遺物出土状態（南から）
	5	62区4号住居跡全景（南から）			2	61区74号土坑全景（北から）
	6	62区5号住居跡全景（南から）			3	62区10号土坑全景（北東から）
	7	62区5号住居跡炉跡2（北から）			4	62区14号土坑全景（南東から）
	8	62区5号住居跡埋葬（南から）			5	62区14号土坑骨出土状態（北西から）
P L. 16	1	62区6号住居跡全景（南東から）			6	62区21号土坑全景（南から）
	2	62区6号住居跡炉跡（北から）			7	62区21号土坑遺物出土状態（南から）
	3	62区6号住居跡埋葬（東から）			8	62区35号土坑全景（南西から）
	4	62区7号住居跡全景（南から）		P L. 26	1	61区1号土坑全景（南西から）
	5	62区8号住居跡全景（南から）			2	61区6号土坑全景（北西から）
	6	62区8号住居跡炉跡（北から）			3	61区7号土坑全景（南西から）
	7	62区8号住居跡埋葬（南西から）			4	61区10号土坑全景（南から）
	8	62区8号住居跡遺物出土状態（西から）			5	61区17号土坑全景（南から）
P L. 17	1	62区9号住居跡全景（南東から）			6	61区18号土坑全景（南から）
	2	62区9号住居跡炉跡（南から）			7	61区19号土坑全景（南から）
	3	62区9号住居跡埋葬（西から）			8	61区20号土坑全景（南から）
	4	62区9号住居跡遺物出土状態（北から）			9	61区21号土坑全景（東から）
	5	62区9号住居跡遺物出土状態（東から）			10	61区24号土坑全景（南から）
P L. 18	1	62区10号住居跡全景（南から）			11	61区37号土坑全景（南西から）
	2	62区10号住居跡炉跡（南東から）			12	61区38号土坑全景（東から）
	3	62区11号住居跡全景（南東から）			13	61区39号土坑全景（南から）
	4	62区11号住居跡炉跡（北東から）			14	61区43号土坑全景（南西から）
	5	62区12号住居跡全景（南東から）			15	61区44号土坑全景（東から）
	6	62区12号住居跡炉跡（南から）		P L. 27	1	61区45号土坑全景（西から）
	7	62区12号住居跡遺物出土状態（南東から）			2	61区51号土坑全景（東から）
	8	62区12号住居跡遺物出土状態（南東から）			3	61区52号土坑全景（南から）

	4	61区54号土坑全景 (東から)		12	62区46号土坑全景 (西から)
	5	61区56号土坑全景 (南から)		13	62区48号土坑土層 (南から)
	6	61区60号土坑全景 (南から)		14	62区49号土坑全景 (南西から)
	7	61区61号土坑全景 (南東から)		15	62区50号土坑全景 (東から)
	8	61区62号土坑全景 (西から)	P L . 32	1	61区3号竪穴状遺構全景 (北西から)
	9	61区63号土坑土層 (南西から)		2	61区4号竪穴状遺構全景 (南東から)
	10	61区64号土坑土層 (南から)		3	61区5号竪穴状遺構全景 (南から)
	11	61区65号土坑全景 (西から)		4	61区5号竪穴状遺構遺物出土状態 (南東から)
	12	61区66号土坑全景 (南から)		5	61区1号掘立柱建物全景 (北から)
	13	61区68号土坑全景 (南から)		6	61区2号掘立柱建物 (西から)
	14	61区69号土坑全景 (南から)		7	62区1号掘立柱建物全景 (南東から)
P L . 28	15	61区70号土坑土層 (南西から)		8	62区1号掘立柱建物全景 (南東から)
	1	61区73号土坑全景 (北から)	P L . 33	1	62区1号掘立柱建物全景 (南東から)
	2	61区75号土坑全景 (西から)		2	62区1号掘立柱建物全景 (南東から)
	3	61区76号土坑全景 (南から)		3	62区2号掘立柱建物全景 (南東から)
	4	61区77号土坑全景 (東から)		4	62区2号掘立柱建物全景 (南東から)
	5	61区78号土坑全景 (南東から)		5	61区1号埋設土器 (左)・2号埋設土器 (右) (南から)
	6	61区79号土坑全景 (南東から)		6	61区1号埋設土器全景 (北西から)
	7	61区81号土坑全景 (南から)		7	61区2号埋設土器全景 (北から)
	8	61区82号土坑全景 (南西から)		8	61区2号埋設土器全景 (西から)
	9	61区83号土坑土層 (南から)	P L . 34	1	61区3号埋設土器 (右)・4号埋設土器 (左) (東から)
	10	61区84号土坑土層 (北から)		2	61区3号埋設土器全景 (南から)
	11	61区85号土坑土層 (西から)		3	61区4号埋設土器 (北西から)
	12	61区87号土坑全景 (北西から)		4	61区4号埋設土器全景 (南東から)
	13	61区88号土坑土層 (北から)		5	61区6号埋設土器全景 (東から)
	14	61区92号土坑土層 (南から)		6	61区6号埋設土器土層 (東から)
	15	61区95号土坑全景 (西から)		7	61区7号埋設土器全景 (南から)
P L . 29	1	61区96号土坑全景 (北から)		8	61区7号埋設土器土層 (北から)
	2	61区99号土坑全景 (西から)	P L . 35	1	61区8号埋設土器全景 (南から)
	3	61区100号土坑全景 (南から)		2	62区1号埋設土器全景 (南から)
	4	61区101号土坑全景 (西から)		3	62区1号埋設土器全景 (北から)
	5	61区102号土坑全景 (西から)		4	62区2号埋設土器 (南から)
	6	61区103号土坑全景 (西から)		5	62区1号集石全景 (北から)
	7	61区104号土坑全景 (東から)		6	62区1号集石全景 (南から)
	8	61区105号土坑全景 (南から)		7	62区2号集石 (東から)
	9	61区107号土坑土層 (北東から)		8	62区2号集石 (南東から)
	10	61区109坑 (左)・110坑 (右) 全景 (北西から)	P L . 36	1	61区3号焼土土層 (東から)
	11	61区110号土坑全景 (北西から)		2	61区3号焼土検出面 (南から)
	12	61区111号土坑全景 (北西から)		3	61区4号焼土完掘 (東から)
	13	61区112号土坑全景 (北から)		4	61区7号焼土検出面 (西から)
	14	61区113号土坑土層 (北から)		5	61区9号焼土検出面 (北から)
	15	61区114号土坑土層 (北から)		6	61区10号焼土検出面 (南から)
P L . 30	1	62区2号土坑全景 (南から)		7	61区13号焼土検出面 (南から)
	2	62区4号土坑全景 (北西から)		8	61区14号焼土検出面 (西から)
	3	62区6号土坑全景 (南東から)		9	61区15号焼土検出面 (西から)
	4	62区8号土坑土層 (南から)		10	61区16号焼土完掘 (西から)
	5	62区11号土坑土層 (北東から)		11	61区17号焼土検出面 (西から)
	6	62区13号土坑全景 (南東から)		12	61区18号焼土土層 (南東から)
	7	62区16号土坑土層 (南西から)		13	62区1号焼土完掘 (南東から)
	8	62区17号土坑全景 (南から)		14	62区2号焼土検出面 (東から)
	9	62区18号土坑土層 (東から)		15	62区3号焼土検出面 (東から)
	10	62区20号土坑全景 (北から)	P L . 37	1	1号列石全景 (西から)
	11	62区22号土坑全景 (南東から)		2	1号列石全景 (南から)
	12	62区24号土坑土層 (北から)	P L . 38	1	1号列石全景 (北東から)
	13	62区26号土坑全景 (南から)		2	1号列石全景 (東から)
	14	62区27号土坑全景 (東から)		3	1号列石全景 (北東から)
	15	62区28号土坑全景 (南から)		4	1号列石近接 (北東から)
P L . 31	1	62区29号土坑全景 (南から)		5	1号列石近接 (東から)
	2	62区30号土坑全景 (南から)		6	1号列石近接 (西から)
	3	62区31号土坑全景 (南から)		7	1号列石近接 (東から)
	4	62区32号土坑土層 (南から)		8	1号列石近接 (東から)
	5	62区34号土坑全景 (北東から)	P L . 39	1	1号列石近接 (東から)
	6	62区37号土坑全景 (南から)		2	1号列石近接 (南から)
	7	62区39号土坑全景 (西から)		3	1号列石近接 (東から)
	8	62区41号土坑全景 (南から)		4	1号列石全景 (東から)
	9	62区42号土坑全景 (南から)		5	1号列石近接 (東から)
	10	62区43号土坑全景 (西から)		6	1号列石全景 (南から)
	11	62区45号土坑全景 (西から)		7	1号列石近接 (南東から)

- 8 61区1号列石近接(南から)
- P L. 40 61区1号住居跡出土遺物
- P L. 41 61区2号住居跡出土遺物(1)
- P L. 42 61区2号住居跡出土遺物(2)
- P L. 43 61区2号住居跡出土遺物(3)
- P L. 44 61区2号住居跡出土遺物(4)
- P L. 45 61区2号住居跡出土遺物(5)
- P L. 46 61区2号住(6) 3・4号住居跡(1)出土遺物
- P L. 47 61区3・4号住居跡出土遺物(2)
- P L. 48 61区3・4号住居跡出土遺物(3)
- P L. 49 61区3・4号住居跡出土遺物(4)
- P L. 50 61区7号住居跡出土遺物(1)
- P L. 51 61区7号住(2) 8号住居跡出土遺物
- P L. 52 61区9号住居跡出土遺物(1)
- P L. 53 61区9号住居跡出土遺物(2)
- P L. 54 61区9号住居跡出土遺物(3)
- P L. 55 61区9号住居跡出土遺物(4)
- P L. 56 61区9号住居跡出土遺物(5)
- P L. 57 61区9号住居跡出土遺物(6)
- P L. 58 61区9号住(7) 10・11号住居跡(1)出土遺物
- P L. 59 61区11号住(2) 12号住居跡(1)出土遺物
- P L. 60 61区12号住居跡出土遺物(2)
- P L. 61 61区12号住居跡出土遺物(3)
- P L. 62 61区12号住(4) 19号住居跡出土遺物
- P L. 63 61区16号住 17号住居跡(1)出土遺物
- P L. 64 61区17号住居跡出土遺物(2)
- P L. 65 61区17・18・20～22号住居跡(1)出土遺物
- P L. 66 61区22号住居跡(2)出土遺物
- P L. 67 61区22号住(3) 23号住居跡(1)出土遺物
- P L. 68 61区23号住居跡出土遺物(2)
- P L. 69 61区24号住居跡出土遺物(1)
- P L. 70 61区24号住居跡出土遺物(2)
- P L. 71 61区26号住 27号住居跡(1)出土遺物
- P L. 72 61区27～29号住居跡(1)出土遺物
- P L. 73 61区29号住(2) 30号住居跡(1)出土遺物
- P L. 74 61区30～32号住居跡(1)出土遺物
- P L. 75 61区32号住居跡出土遺物(2)
- P L. 76 61区32号住居跡出土遺物(3)
- P L. 77 61区32号住居跡出土遺物(4)
- P L. 78 61区32号住居跡出土遺物(5)
- P L. 79 61区32号住居跡出土遺物(6)
- P L. 80 61区32号住(7) 33号住居跡(1)出土遺物
- P L. 81 61区33～35号住居跡(1)出土遺物
- P L. 82 61区35号住居跡出土遺物(2)
- P L. 83 61区35号住居跡出土遺物(3)
- P L. 84 61区35号住(4) 36号住居跡(1)出土遺物
- P L. 85 61区36～38号住居跡出土遺物
- P L. 86 61区39号住居跡出土遺物(1)
- P L. 87 61区39号住居跡出土遺物(2)
- P L. 88 61区39・41・42号住居跡(1)出土遺物
- P L. 89 61区42号住(2) 43号住居跡(1)出土遺物
- P L. 90 61区43号住(2) 44～46号住居跡(1)出土遺物
- P L. 91 61区46号住(2) 47・48号住 62区2号住居跡(1)出土遺物
- P L. 92 62区2号住居跡出土遺物(2)
- P L. 93 62区2号住居跡出土遺物(3)
- P L. 94 62区3～5号住居跡(1)出土遺物
- P L. 95 62区5号住(2) 6号住居跡(1)出土遺物
- P L. 96 62区6号住居跡出土遺物(2)
- P L. 97 62区6号住(3) 7・8号住居跡(1)出土遺物
- P L. 98 62区8号住居跡出土遺物(2)
- P L. 99 62区9号住居跡出土遺物(1)
- P L. 100 62区9号住居跡出土遺物(2)
- P L. 101 62区9号住居跡出土遺物(3)
- P L. 102 62区9号住居跡出土遺物(4)
- P L. 103 62区9号住居跡出土遺物(5)
- P L. 104 62区9号住居跡出土遺物(6)
- P L. 105 62区9号住居跡出土遺物(7)
- P L. 106 62区9号住居跡出土遺物(8)
- P L. 107 62区9号住(9) 10号住居跡出土遺物
- P L. 108 62区11号住居跡出土遺物
- P L. 109 62区12号住居跡出土遺物(1)
- P L. 110 62区12号住居跡出土遺物(2)
- P L. 111 62区12号住居跡出土遺物(3)
- P L. 112 62区12号住居跡出土遺物(4)
- P L. 113 62区12号住居跡出土遺物(5)
- P L. 114 62区13号住居跡出土遺物(1)
- P L. 115 62区13号住(2) 14号住居跡(1)出土遺物
- P L. 116 62区14号住居跡出土遺物(2)
- P L. 117 62区15号住居跡出土遺物(1)
- P L. 118 62区15号住居跡出土遺物(2)
- P L. 119 62区15号住居跡出土遺物(3)
- P L. 120 62区15号住(4) 16号住居跡(1)出土遺物
- P L. 121 62区16号住居跡出土遺物(2)
- P L. 122 62区16号住(3) 17号住居跡(1)出土遺物
- P L. 123 62区17号住居跡出土遺物(2)
- P L. 124 62区18号住 19号住居跡(1)出土遺物
- P L. 125 62区19号住居跡出土遺物(2)
- P L. 126 62区19号住(3) 20号住居跡出土遺物
- P L. 127 62区21号住 22号住居跡(1)出土遺物
- P L. 128 62区22号住(2) 23・24号住居跡(1)出土遺物
- P L. 129 62区24号住(2) 25号住居跡 61・62区掘立柱建物出土遺物
- P L. 130 62区掘立柱建物出土遺物 61区土坑出土遺物(1)
- P L. 131 61区土坑出土遺物(2)
- P L. 132 61区土坑出土遺物(3)
- P L. 133 61区土坑出土遺物(4)
- P L. 134 61区土坑出土遺物(5)
- P L. 135 61区土坑(6) 62区土坑(1)出土遺物
- P L. 136 62区土坑出土遺物(2)
- P L. 137 62区土坑出土遺物(3)
- P L. 138 62区土坑出土遺物(4)
- P L. 139 62区土坑(5) 61区3号竪穴状遺構出土遺物
- P L. 140 61区3～5号竪穴状遺構出土遺物
- P L. 141 61区1～3号埋設土器出土遺物
- P L. 142 61区4号埋設土器出土遺物
- P L. 143 61区6・7号埋設土器出土遺物
- P L. 144 61区8号 62区1・2号埋設土器 61区焼土出土遺物
- P L. 145 61・62区焼土 62区集石 1号列石(1)出土遺物
- P L. 146 1号列石出土遺物(2)
- P L. 147 1号列石出土遺物(3)
- P L. 148 1号列石出土遺物(4)
- P L. 149 列石(5) 61区1号流路 62区1号溝出土遺物
- P L. 150 61区遺構外出土遺物(1)
- P L. 151 61区遺構外出土遺物(2)
- P L. 152 61区遺構外出土遺物(3)
- P L. 153 61区遺構外出土遺物(4)
- P L. 154 61区遺構外出土遺物(5)
- P L. 155 61区遺構外出土遺物(6)
- P L. 156 61区遺構外出土遺物(7)
- P L. 157 61区遺構外(8) 62区遺構外(1)出土遺物
- P L. 158 62区遺構外出土遺物(2)
- P L. 159 62区遺構外出土遺物(3)
- P L. 160 62区遺構外出土遺物(4)
- P L. 161 62区遺構外出土遺物(5)
- P L. 162 62区遺構外出土遺物(6)

# 第1章 調査経過と調査の方法

八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（現 国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町（現 東吾妻町）教育委員会が協議し、平成6年3月18日「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年4月1日、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で調査受託契約を締結し、同日同教育長と（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

## 第1節 調査に至る経緯

林中原Ⅱ遺跡の発掘調査は、国道145号線バイパス（八ッ場バイパス）と町道建設に伴い実施された。

既に、周知の遺跡として周辺は長野原町教育委員会が発掘調査を行っており、縄文時代中～後期の遺構・遺物を検出していた遺跡である。国土交通省より当遺跡内の国道及び町道建設に伴う埋蔵文化財調査の照会があり、平成20年3月、群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を行った。その結果、縄文時代中期の住居跡の存在が明らかになり、林中原Ⅱ遺跡事業対象地の殆どが、本調査が必要と判断された。平成20年4月国土交通省関東地

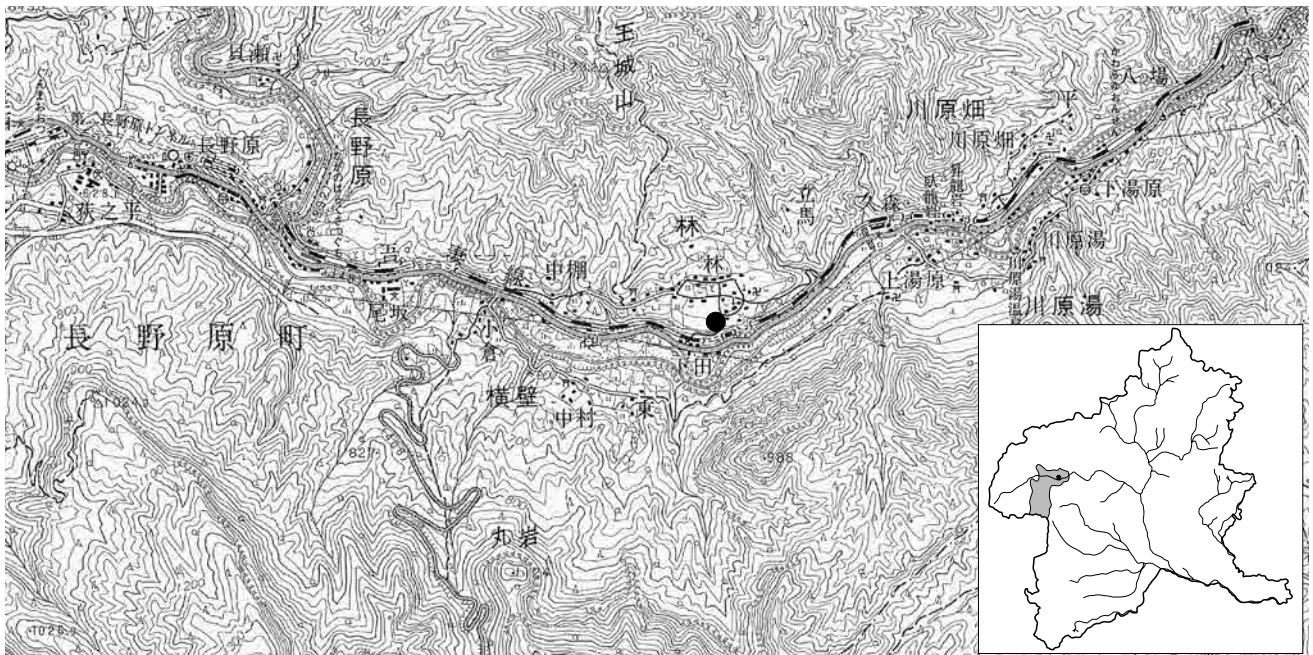
方整備局と平成20年度の発掘調査受託契約を締結し、平成20年10月より本調査に着手した。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成20年10月、調査対象地の南西部である52区より着手した。表土はバックホウにより遺構確認面まで掘り下げ、その後人力による遺構確認、掘削、精査を重ねた。遺構確認面は、遺跡全体に黒色土の堆積が厚く、中世建物跡や縄文時代の敷石住居跡など掘り込みの浅い遺構の存在が予想されたため、黒色土～黒褐色土中とローム漸移層、ローム層上面を各々確認面とし遺構検出に努めた。文化層としては2面調査であるが、確認面は複数枚が存在した調査である。平成20年度の調査は10月～12月、及び3月である。本来ならば、当地域の発掘調査は、凍結や積雪のため、1～3月間の冬季は行わない方針であるが、当該年度に限り、国道建設が急がれており、埋蔵文化財調査も急遽、冬季凍結の心配が若干ながら少なくなる、3月の1ヶ月間に調査を行った。

平成21年度は、調査区内未買地の問題も片付き、徐々に調査を本格化した。調査は国道部分の51区・61区南、町道部分である61区北と62区が対象となり、調査班を2班体制として順次進めていった。

4月は、近隣住民に本遺跡の重要性を理解してもらう



第1図 林中原Ⅱ遺跡 位置図（国土地理院5万分の1地形図「草津」使用）

## 第1章 調査経過と調査の方法

調査日誌抄（町道部分を中心とする）

平成20年度

- 10月14日 調査班1班（担当者3名）で調査着手。国道部分を先行
- 12月19日 町道部分の用地杭の確認
- 12月26日 一部の表土掘削着手

平成21年度

- 4月8日 前年度調査の継続。調査班2班5名体制。国道部分及び町道部分の調査を同時に着手する。町道部分表土掘削
- 4月13日 61区遺構調査着手 1号住など
- 4月25日 林地区住民対象の現地説明会を開催する。国道部分中心
- 5月13日 61区遺構密度濃く2～7号住、2号竪穴状遺構などの調査
- 5月25日 61区7～11号住などの調査を進める
- 6月8日 61区1号列石写真準備
- 7月1日 調査担当者2名増員
- 7月2日 61区空撮
- 7月7日 62区調査着手、重機による表土掘削を開始
- 7月22日 豪雨が続き、雨対策に追われる
- 7月31日 高所作業車による全景写真撮影（主に51区）
- 8月6日 61区27～35号住、62区1号住など調査継続
- 8月24日 62区2面目の調査へ
- 9月4日 62区弥生遺構が多く、3号坑や弥生集中地点調査
- 9月8日 町道部分を中心に空撮
- 9月16日 62区縄文住居跡、6～18号住調査継続。61区はだめ押し
- 10月1日 62区6～19号住調査継続。61区はほぼ終了へ
- 10月7日 台風による雨のため、調査は断続的
- 10月13日 62区7～20号住調査継続。
- 10月23日 高所作業車による全景写真撮影
- 10月31日 全地区の調査を終了する。器財など撤収。調査終了

ために現地説明会を行っている。

なお、51区南西部に南北に51区東部に東西に未調査区を残す。これは、地域住民の現道保護の要望が強く、やむなく調査が及ばなかった箇所である。

### 第3節 発掘調査の方法

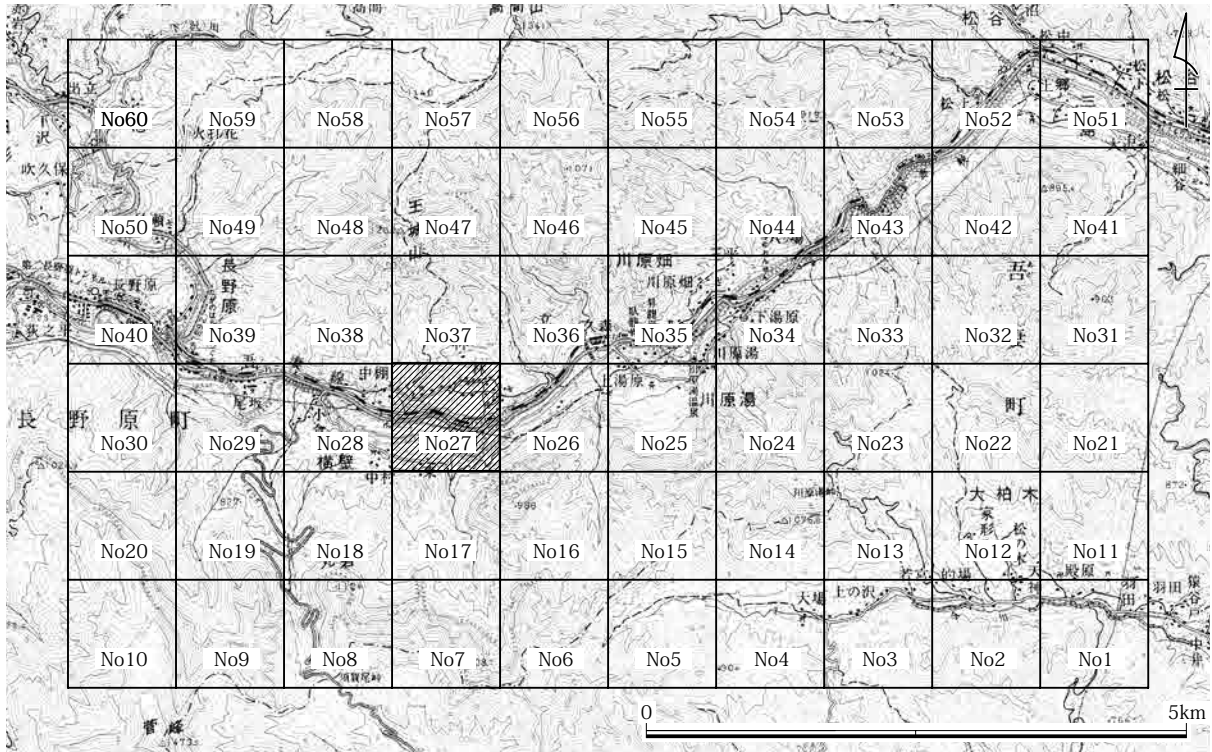
本書は、平成20・21年度における林中原Ⅱ遺跡発掘調査のうち、町道部分で検出された縄文時代遺構・遺物を扱っている。町道部分の調査は、平成20年度に着手されているが、工事工程の都合と調査による排土置場の確保のため、調査区内を幾つかに分割して調査を進めた経緯がある。この分割調査により、発掘調査は円滑に進んだが、同時に遺構も分割されることになった。国道部分、町道部分とも、全景写真としての記録化は、果たせなかった。

#### 1 調査の手順

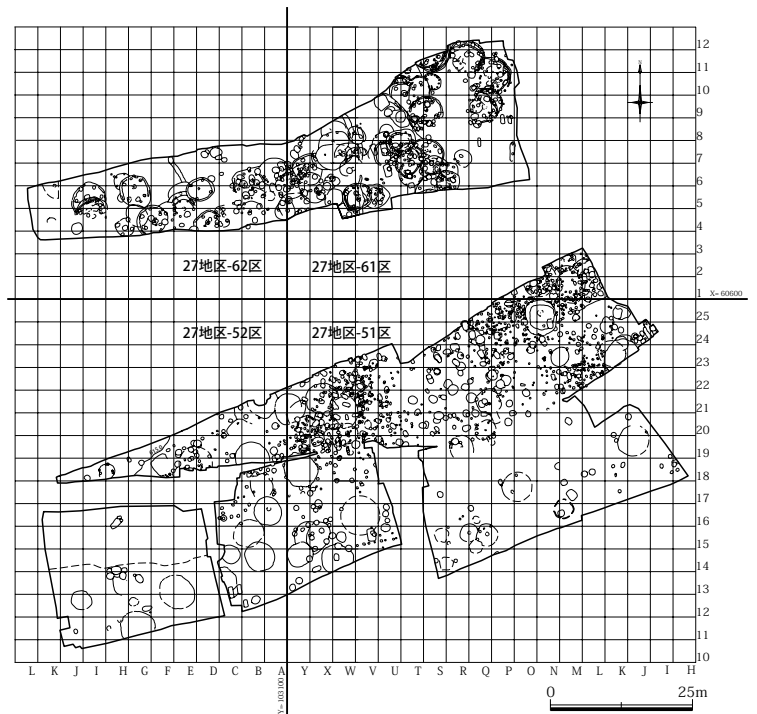
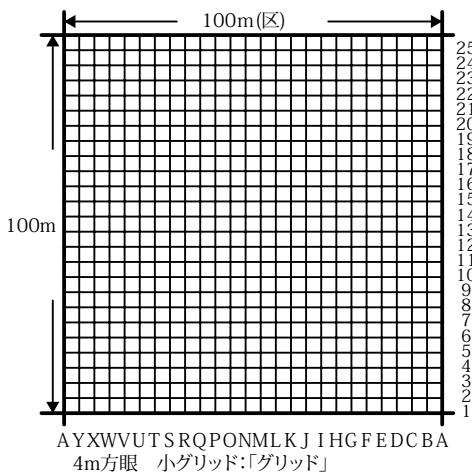
発掘調査はバックホウによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡



第2図 林中原Ⅱ遺跡調査区区分割り（斜線部分は町道）



		1km(地区)											
		NO.27 地区											
NO.28 地区	91	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	NO.26 地区	
	81	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81		
	71	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71		
	61	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61		
	51	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51		
	41	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41		
	31	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31		
	21	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21		
	11	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11		
	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
100m方眼 中グリッド:「区」													



第3図 調査区の設定



の現況は宅地・畑・道路であった。

遺構から出土した遺物は、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したのものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は、主に測量会社に委託して測量した。縮尺については、住居跡・土坑・配石等は1/20、炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・石垣・列石等規模の大きい遺構については1/40とした。全体図は1/100、1/200で作成した。

遺構の個別写真は、各調査担当者によるもので、主にデジタルカメラ35mmと6×7判モノクロームフィルムを用いた。

## 2 調査区の設定

調査区の設定については、1994（平成6）年度から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査における「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、『長野原一本松遺跡（1）』（群埋文2002）に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（X=58000.00, Y=-97000.00）と

した。そして、まずこの基点から1km四方の「地区」（大グリッド）を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の「区」（中グリッド）に区分し、東南隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区分した。さらに各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは東南を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせてグリッド名としている（例20区A-1グリッド）。

林中原Ⅱ遺跡国道部分の調査区は、「地区」では「27地区」に相当し、「区」では「51・52・61区」にあたる。

遺構名称は区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体となる区の番号を優先している。

## 第4節 整理業務の経過

本遺跡の整理作業は平成25年度に着手された。検出された遺構・遺物は膨大な量であり、縄文時代を中心とする住居跡も127軒を数えた。このような、大型遺跡の整理にあたり、整理期間も数年次にわたり、平成25年～平成29年の5年間を予定した。報告書も、縄文時代編国道部分を第1分冊（既刊）とし、第2分冊を縄文時代編町道部分（本書）、弥生時代以降編を第3分冊とし、3冊に分けた刊行を計画した。

第1分冊の整理作業にあたり、平成25年度は（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団本部で行った。平成26年度に、整理作業を（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所に移し、平成27年度に報告書『林中原Ⅱ遺跡（1）』を刊行している。

平成28年度、平成29年度に報告書第2分冊刊行に向け、町道部分で検出された縄文時代遺構と遺物の整理を行った。出土した焼骨の分析、黒曜石の産地分析、土器に印された種実圧痕の同定分析を各方面、業者に依頼、委託しさらに、石器実測・トレース委託を行い整理作業の迅速化を図った。



グリッド方眼に即した遺構確認調査風景

## 第2章 周辺の環境

### 第1節 遺跡の位置と地形

林中原Ⅱ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町林に所在する。林地区からは直接目視できないが、南西に浅間山（2,568m）、北西に草津白根山（2,171m）という活火山を中心とした山脈が連なり、上信国境の分水嶺を構成している。分水嶺の一つであり上信国境をなす鳥居峠（1,362m）付近に源を発する吾妻川は嬭恋村を経て、長野原町、東吾妻町を東流し、渋川市白井で利根川と合流する。

本遺跡が所在する長野原町林地区は、長野原町北部で東流する吾妻川左岸にあたる。周辺は吾妻川を挟み北に高間山（1,342m）、王城山（1,123m）、南に丸岩（1,124m）、管峰（1,473.5m）などが聳える峡谷地形が連続する。特に下流にある吾妻峡は国の名勝に指定されている。また、王城山と丸岩は当地域の示標でもあり、地元に密着した山々である。このような山々と分水嶺により流れる吾妻川とその支流によって、峡谷を地勢とする当地域の地理的特徴が景観となっている。

長野原町域に分布する遺跡の多くが、吾妻川が形成した河岸段丘に立地しており、近年の調査によって丘陵、山麓斜面にその分布域を広げている。吾妻川が形成した段丘面としては、最上位段丘面、上位段丘面、中位段丘面、下位段丘面が挙げられている。ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財包蔵地もこれら段丘面に位置しており、その対象地は広く、各段丘面を包括した面的な発掘調査が及ぶ地域でもある。発掘調査によって各段丘面の遺跡相が複雑に絡み合う様相が明らかになるものと期待されよう。また当地域は、川原畑、川原湯、林、横壁、長野原という5箇所の大宇が存在する。各大宇は河川・段丘・道路などで区分されており、それぞれが特徴ある遺跡を包蔵する地区となっている。段丘様相と併せて各大宇が包括する小地域様相が把握される地域である。

林中原Ⅱ遺跡は、大字林に所在し、最上位段丘面に占地する集落遺跡である。周辺段丘面の中では最も広い段丘面であり、緩やかな南への斜面地形が広がる居住地形としては、最適の環境を示す。この緩斜面地形の上位は王城山南斜面に繋がり、斜面端部より扇状地地形に近い広がりを見せる。林地区の遺跡の多くは上位段丘面に立地しているが、東側の山地斜面上には立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡や

西側には楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡などあり、時代・時期よっての占地状況に差が窺われる。なお、林地区は最上位段丘面以下の上位段丘面を持たず、南側の段丘崖以下は中位段丘面と低位段丘面が広がる。

このように、長野原町林地区は吾妻川最上位段丘面にあり、南側への緩斜面地形を展開し多くの包蔵地を有しながらも、東側や西側の山地斜面地形にも遺跡が点在する様相を示す。ハッ場ダム調査対象地域の中でも、濃密な遺跡分布地域といえよう。

本遺跡は、林地区南緩斜面地形にあり、東を埋没谷、北側と西側を町道、南側を段丘崖に画された範囲を遺跡地としている。標高は612～619mである。

### 第2節 周辺の遺跡

本節では、ハッ場ダム建設に伴う調査対象地域の周辺の主な遺跡分布図と一覧表を掲載し、当地域の遺跡を概観したい。

旧石器時代：長野原町内では、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は応桑泥流や浅間一板鼻褐色軽石群（As-BPG）、浅間草津黄色軽石（As-YPK）によって厚く覆われており、各層序を示標とする調査は安全上の問題などから、極めて困難な状況である。また、後述するが本遺跡のように、二次堆積ロームの存在から、旧石器を対象とした確認を行っても、文化層の把握に至らない場合が多い。ただし、柳沢城跡（39）から遺構外出土ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土している。より山間部の遺跡などで、これらの堆積物下位の調査が実施できれば、当該期の遺跡が確認される可能性がある。

縄文時代：長野原町内の遺跡地の約半数に縄文時代の遺構・遺物が確認されているように、濃密な分布を示す。

草創期の遺跡としては、石畑Ⅰ岩陰が挙げられる。奥行4m以上、幅40mの大規模な岩陰遺跡であり、草創期の表裏縄文などの出土が知られる。現在はごく一部の調査に止まっているが、平成30年冬に本格的な調査が着手されたばかりである。

早期の遺跡は吾妻川左岸に多く見られ、特に山間地の急傾斜地形中の狭小な平坦地や緩傾斜地に占地する傾向

が見られる。林地区では楡木Ⅱ遺跡(30)、立馬Ⅰ遺跡(10)、立馬Ⅲ遺跡(12)、中棚Ⅰ遺跡(26)が知られる。また長野原地区では、長野原一本松遺跡(33)、幸神遺跡(32)、尾坂遺跡(34)で出土が報告されている。尾坂遺跡は中位段丘での鶉ヶ島台式の出土であり、中位段丘の離水時期を窺う良好な資料である。川原畑地区では三平Ⅰ遺跡(1)、三平Ⅱ遺跡(2)でも当該期の資料を見る。

前期の遺跡数は少ないが漸増の傾向である。前期初頭の集落跡が調査されている。上原Ⅰ遺跡は花積下層式期の住居跡15軒が調査された該期の集落跡としては屈指の規模である。長野原町教育委員会と事業団が隣接した地点を調査・報告している。

前期前葉～中葉段階では、大規模な集落跡は検出されていない。石畑遺跡で関山Ⅱ式や黒浜式が出土している。また、林中原Ⅰ遺跡(21)では黒浜式期の住居跡1軒が検出されており、周辺への広がりが見込まれる。

前期後葉段階でも、平野部の例に反して、当地域の集落規模は小規模に止まるようだ。諸磯式期の集落跡としては、三平Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、川原湯勝沼遺跡(9)等で数軒単位の住居跡・土坑が調査されている。林中原Ⅱ遺跡でも土坑を報告する。また楡木Ⅲ遺跡(31)では、包含層出土ながら諸磯b式土器がまとまる。

中期初頭段階の遺跡としては、上原Ⅱ遺跡(18)が挙げられる。五領ヶ台Ⅱ式の遺構・遺物の良好な出土が知られる。また同じ林地区の立馬Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡でも該期土器資料が充実するが、急傾斜地形の影響から遺構としての把握が困難であり、遺構一括資料としては確定できない。本遺跡も土坑出土資料を見ることができる。

中期前葉段階のまとまった資料は少ない。前述の立馬Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡で良好な土器の出土が見られるが、遺構に伴っておらず、初頭段階と同様に、一括資料としての確定性に乏しい。楡木Ⅰ遺跡(29)では1個体ながら土坑から出土が報告されている。また本遺跡でも、土器2個体が共伴する土坑が調査されている。

中期中葉段階では、阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式段階の住居跡として、林中原Ⅰ遺跡に住居跡、本遺跡で土坑が検出されている。幸神遺跡では「焼町類型」を炉体土器とする住居跡が報告されている。中葉後半段階の資料としては、上ノ平Ⅰ遺跡(3)に充実する。中葉末とも言うべき段

階であるが、31号住居跡に良好な土器群がまとまる。同様な段階では横壁中村遺跡でも、土坑出土土器が見られる。

中期後葉段階は、当地域で大型集落が点在する様相を見せる。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡(45)が環状集落の好例として知られ、その他に本遺跡及び尾坂遺跡や石川原遺跡(8)も大型集落跡となるだろう。このように、近接した地点で大型集落が群在する様相は中期集落群の在り方として検討を重ねなければならないだろう。また、中期末葉段階の集落は確実に敷石住居跡を伴い、前述の後葉段階の集落から継続する様相を示す。

後期も中期集落から継続する様相が見られるが、各段丘面に広がる傾向も予想される。敷石住居跡は、長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡の他に本遺跡、林中原Ⅰ遺跡、久々戸遺跡や向原遺跡や櫛Ⅱ遺跡などで調査されている。いずれも後期初頭から前葉段階の集落跡であり、称名寺式土器、堀之内式土器が充実し、「茂沢類型」や三十稲場式など長野県や新潟県域を中心とする土器群も見られる。

後期中～後葉段階になると遺跡数は激減する。上原Ⅳ遺跡(20)、横壁中村遺跡で加曾利B式期の住居跡や掘立柱建物跡が、後葉段階では横壁中村遺跡で住居跡が検出されているが、他の遺跡では遺構は見られず、集落分布域は狭まる様相を示す。

晩期前半段階の遺構としては、横壁中村遺跡に土坑を見るのみである。同遺跡では、佐野式などの出土が報告されているが、住居跡など居住痕跡は見出せなかった。晩期末葉の資料はやや増える。立馬Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡で住居跡が、川原湯勝沼遺跡では再葬墓の要素を持つ土坑が検出されている。終末段階の土器の多くが氷Ⅱ式あるいは弥生時代前期に比定される可能性もあり、慎重な研究が必要とされる。

弥生時代：遺跡数は希薄である。前期～中期の住居跡としては横壁中村遺跡と立馬Ⅰ遺跡で住居跡1軒が知られる。立馬Ⅰ遺跡では土器棺墓も併せて検出されており、上原Ⅰ遺跡では土坑より短頸壺が出土している。本遺跡でも、住居跡や土坑が調査されている。

弥生時代後期となると、さらに遺跡数は減る。石畑遺跡で土坑が、二社平遺跡で後期～古墳時代前期とされる樽式系土器片が出土している。

古墳時代：現状では、吾妻溪谷上流において古墳そのものの存在は疑われている。墳丘状の高まりを幾つか見ることが、古墳としての確定性に乏しい。集落遺跡では、上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡からS字状口縁台付甕や埴形土器が出土している。また後期の住居跡としては、上原Ⅳ遺跡で2軒、林宮原遺跡で1軒、下原遺跡で1軒が調査されているように、古墳時代における居住は果たされているようだ。

奈良・平安時代：奈良時代に比定される遺跡は希薄で、現状では調査遺跡は無い。長野原町教育委員会が行った分布調査では、羽根尾Ⅱ遺跡が相当するが詳細には至っていない。

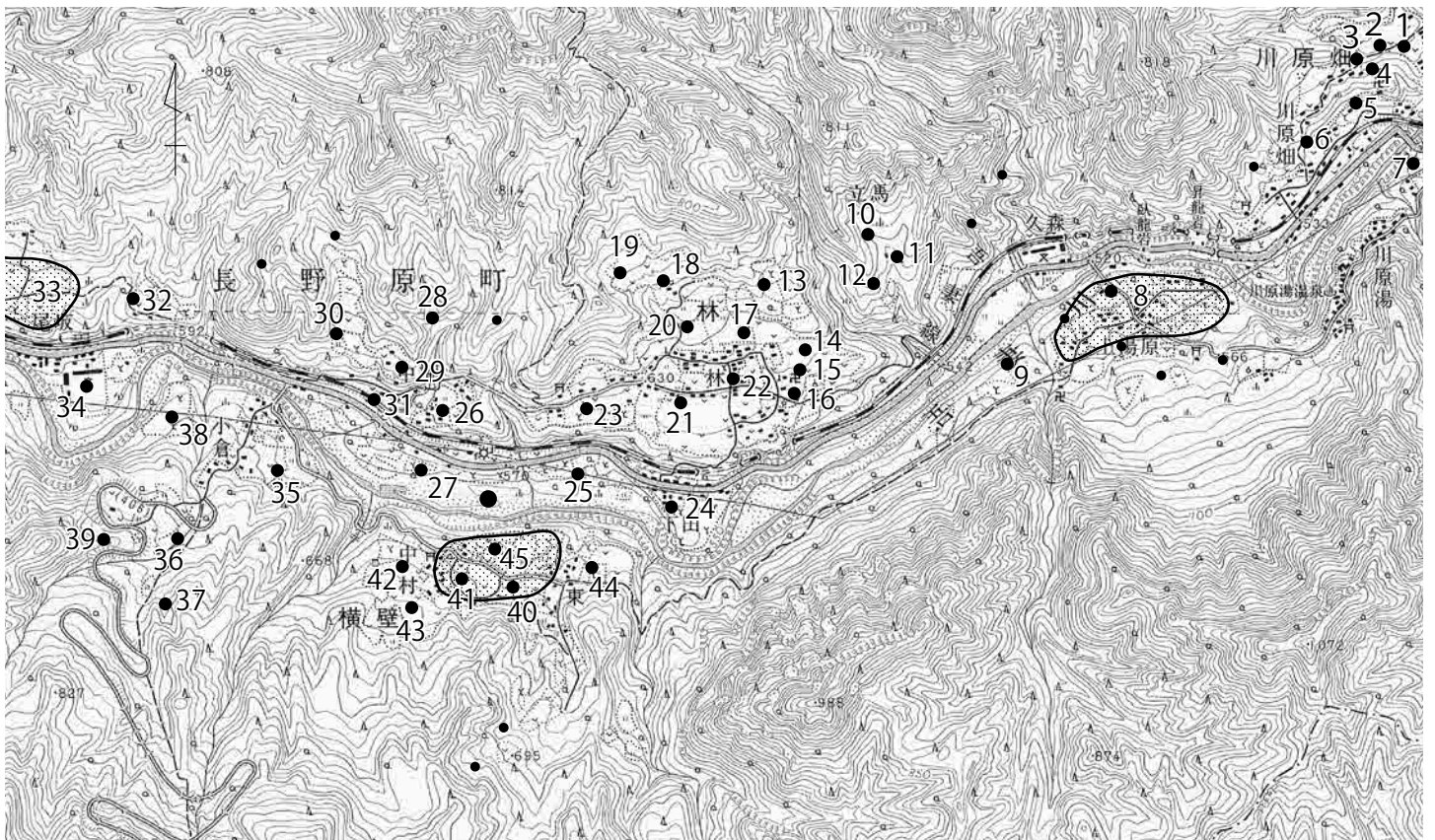
平安時代、特に9世紀後半代に至ると遺跡数は増える。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、尾坂遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡(19)、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、楡木Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、下湯原遺跡など、各地区で集落跡が調査されている。横壁中村遺跡以外は、吾妻川左岸に偏る傾向が見られ、注意を要しよう。これらの集落遺跡の出土遺物としては、羽口、鉄滓、鎌、刀子、砥石などの鍛冶関連遺物や鉄製品の出土が目立つ。生産遺構としての鍛冶関連施設が各地区

に点在していたようだ。併せて、林宮原遺跡や楡木Ⅰ遺跡で出土した小型鎌や芋引き状金具の出土は、麻、芋などの生産・加工に関わる製品として位置付けられよう。

当地域の特徴的な該期遺構として、「陥穴状土坑」が挙げられよう。イノシシ・シカなどを捕獲する罟猟遺構であるが、縄文時代の所産として見られていた例から、一転して平安時代～中世に比定されている。花畑遺跡(13)の調査では、陥穴状土坑掘削に伴う工具痕を検出している。この陥穴状土坑も該期集落遺跡と同様に、吾妻川左岸側に設けられる傾向がある。

中世：吾妻川流域には中世城館跡が点在する。金光山砦跡、柳沢城跡、長野原城跡、丸岩城跡、羽根尾城跡が挙げられよう。林地区では最近発掘調査で明らかになった林城跡がある。これらは、当時の道と関連した交通の要衝に設けられたようである。城館跡以外には、三平Ⅰ遺跡、三平Ⅱ遺跡、東原Ⅰ遺跡(14)、東原Ⅱ遺跡(15)、東原Ⅲ遺跡(16)、林中原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡、楡木Ⅱ遺跡、尾坂遺跡などで掘立柱建物跡や土坑、畑跡が調査されている。

近世：当地域の江戸時代遺跡の多くが、天明三年(1783)における、浅間山噴火に伴う泥石流堆積物下の遺跡群と位



第4図 周辺の遺跡 (国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)

第2章 周辺の環境

表1 周辺の主な遺跡一覧

No.	遺跡名	所在大字	段丘面	概要	文献など
1	三平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代早期～前期集落跡、住居跡2軒。弥生時代前期～中期土坑。平安時代以降の掘立柱建物跡3棟・焼土10基など	9・26
2	三平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代包含層（草創期～前期）。掘立柱建物跡7棟などの中世屋敷跡	26
3	上ノ平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代中期中葉集落跡、住居跡16軒。平安時代集落跡、住居跡20軒など	36・69
4	上ノ平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
5	東宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下屋敷跡7棟、建物の構造と性格が把握できる良好な遺存状態であり、礎石と共に東・土台・大引・床板が出土している。酒蔵、糟場跡も検出されている	15・49・51・71
6	西宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下の屋敷跡・小屋・畑跡。畑跡には復旧溝を含む	
7	西ノ上遺跡	川原湯	中位段丘面	天明泥流下畑跡	17
8	石川原遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文時代中期・後期集落跡、配石遺構など。近世畑・屋敷跡など	
9	川原湯勝沼遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文晩期埋葬2基。平安時代集落跡、住居跡3軒。天明泥流下畑跡など	19
10	立馬Ⅰ遺跡	林	山地斜面	小規模な縄文時代早期集落跡、晩期集落跡、弥生時代中期集落跡・甕棺墓、平安時代集落跡、陥穴状土坑など	24
11	立馬Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期包含層、中期前葉～後葉集落跡、住居跡11軒。陥穴状土坑など	21
12	立馬Ⅲ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期集落跡、住居跡3軒。中期住居跡1軒。良好な早期包含層。陥没穴など	39
13	花畑遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初頭包含層。平安時代集落跡、住居跡3軒、陥穴状土坑など	15
14	東原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代土坑及び包含層。平安時代以降の陥穴状土坑。中・近世の掘立柱建物跡2棟など	48
15	東原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層。陥穴状土坑9基。中・近世での掘立柱建物跡1棟など	48
16	東原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～後期包含層。中・近世の掘立柱建物跡4棟、内耳鍋や古瀬戸など出土。江戸後期礎石建物跡1棟	48
17	上原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代前期初頭集落跡、中期後葉住居跡1軒。平安時代集落跡、陥穴状土坑を調査	61・66
18	上原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。縄文時代中期初頭の集落跡など	61
19	上原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。平安時代集落跡など	61・66・70
20	上原Ⅳ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層、中・近世土坑など	30・52
21	林中原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	町教委調査では、縄文時代後期前葉集落跡。住居跡1軒、配石遺構など。注口土器などの良好な出土遺物を見る 事業団調査では、縄文時代前期～中期集落跡。中・近世掘立柱建群などを調査	3・7・8・9・10・63
22	林中原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	本遺跡。縄文時代中期～後期の大規模集落跡。弥生中期墓壇、住居跡4軒。中・近世掘立柱建物群を調査している	6・11・67
23	林宮原遺跡	林	最上位段丘面	西吾妻地域で初出の古墳時代後期住居跡を見る。平安時代集落跡、住居跡14軒など。芋引金具の出土	3・7・9・12・66
24	下田遺跡	林	中位段丘面	天明泥流下の民家1軒、畑跡。鏡を出土する	15・72
25	下原遺跡	林	下位段丘面	古墳時代中期・平安時代集落跡。住居跡各1軒。中世屋敷跡、中～近世畑跡など	25
26	中棚Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代早期包含層、平安時代住居跡1軒など。2011年度 町教委調査	
27	中棚Ⅱ遺跡	林	下位段丘面	天明泥流下の畑跡及び安永9年埋没と推定される畑跡など	16・17
28	二反沢遺跡	林	山地斜面	石垣を付設する中世土坑。鍛冶関連遺物出土。近世畑跡	22
29	楡木Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代中期土坑、平安時代集落跡、近世屋敷跡など	52
30	楡木Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期～中期前葉集落跡、住居跡36軒。平安時代集落跡、住居跡38軒。中世掘立柱建物群など	31・40
31	楡木Ⅲ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代前期～後期包含層。弥生時代中期包含層	15
32	幸神遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期集落跡。住居跡2軒。早期～後期包含層。近世以前の畑跡など	30
33	長野原一本松遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期～後期の環状集落。その他に平安時代集落、陥穴状土坑など	14・28・32・37・41・53・62
34	尾坂遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期集落跡、早期～後期包含層。中世掘立柱建物跡。天明泥流下の畑跡など	15・68
35	西久保Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期末葉集落跡、住居跡1軒、水場遺構など	15
36	西久保Ⅱ遺跡	横壁	山地斜面	平安時代の散布地とされる	
37	西久保Ⅲ遺跡	横壁	山地斜面	散布地	
38	西久保Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代建物跡、平安時代住居跡・焼土、近世畑など	52
39	柳沢城跡	横壁	山地斜面	中世城郭。堀切・土居・礎石・腰曲輪・石組遺構。陶磁器・鉄製品・銅製品・石臼などを出土	2
40	山根Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	平安時代散布地とされる	
41	山根Ⅱ遺跡	横壁	中位段丘面	散布地	
42	山根Ⅲ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期後葉集落跡。住居跡3軒、土坑39基。中・近世溝1条など	15・30
43	山根Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
44	横壁勝沼遺跡	横壁	中位段丘面	槍先形尖頭器の出土（表採）。縄文時代土坑。平安時代住居跡1軒	15
45	横壁中村遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期～後期の大規模集落跡。平安時代集落跡。中・近世の掘立柱建物群、礎石建物跡・土坑墓など	16・18・20・23・27・33・35・42・43・46・47・50・54・64

置付けられよう。民家跡としては東宮遺跡（5）、西宮遺跡（6）、石川原遺跡、下田遺跡、楡木Ⅰ遺跡、尾坂遺跡、町遺跡などが挙げられよう。また、小林家住宅跡も長野原町教育委員会が調査した良好な民家跡で、東宮遺跡と並び、民家の規模のみならず生業や性格までを窺わせる資料が出土しており、極めて重要な在り方を示している。さらに石川原遺跡でも、民家跡以外に当時の寺跡の調査に至っており、注目を集めよう。

この他に当地域の天明泥流下の遺構としては、畑跡が各遺跡で調査されている。主に中位段丘面と下位段丘面に集中しており、生産遺構として畑跡研究には欠かせない遺跡群となっている。

墓墳も多い。林中原Ⅰ遺跡と本遺跡以外にも、上ノ平Ⅰ遺跡や横壁中村遺跡でまとまった墓墳群が調査されている。当時の埋葬事例を窺う資料群である。

天明三年以前の遺構・遺物も当地域の近世史研究では重要な資料である。例えば中棚Ⅱ遺跡（27）では安永期とされる畑跡、町遺跡では泥流下畑跡下位層から製鉄関連遺構が調査されている。また時期は確定できないが、横壁中村遺跡における一字一石経の出土も近世社会における宗教様相の一端を知る資料である。

### 第3節 林地区の縄文時代遺跡

前節では、周辺の遺跡として八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域を中心に、各時代の分布を紹介した。ここでは、本遺跡が位置する長野原町林地区における調査遺跡、特に縄文時代の遺構・遺物を検出した遺跡を中心に述べる。

先述したように、林地区は吾妻川左岸にあり、河岸段丘面のうち最上位段丘面を主とする。林地区中央部は緩やかな南側への斜面地形が広く展開し、その間を押手沢など南流する小河川が開析する。周辺は山地斜面が迫る吾妻川流域の中であって、平坦地形に近い緩斜面を広く保つ地区ともいえよう。

このように、平坦地形が広がる林地区中央部の景観だが、東側は折の沢を挟み急勾配の山地斜面となる。この山地斜面の中に狭小な緩斜面地形を呈する地点が立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡である。

立馬Ⅰ遺跡からは、長方形住居跡である17区6号住より早期中葉の田戸下層式や含繊維の中部高地系の土器を

主体とした出土土器が見られた。17区7号住からは稲荷台式がまとまる。この他に、黒浜式を出土する土坑などが見られる。包含層からは早期の土器片を主体にするが、草創期の表裏縄文も見られ、前期～晩期までの資料が充実する。調査は、平成13・14・17年度に事業団が調査している。

立馬Ⅱ遺跡は、立馬沢を挟んで立馬Ⅰ遺跡の対岸にある。北側山岳部から延長する瘦尾根状の台地に立地するが、傾斜のやや緩やかな南斜面に中期初頭～前葉の集落跡が占地する。立馬Ⅰ遺跡と同様に早期資料が出土する。特に沈線文系土器に関しては、関東地方より長野県域の該期土器群に近い様相を示す。中期集落は11軒の住居跡を数える。斜面に立地するため住居跡の遺存状態は良くないが、出土土器は豊富であり、五領ヶ台Ⅱ式、阿玉台Ⅰa～Ⅱ式、勝坂Ⅰ式などを見る。また、10号住からは加曾利Ⅱ式段階の土器が出土している。瘦尾根状の台地に中期後葉の住居が占地する状況は希少である。平成14年度に事業団が調査している。

立馬Ⅲ遺跡も早期を中心とする集落跡である。早期住居跡3軒、中期後葉住居跡1軒を見る。包含層出土遺物も早期を中心に良好な様相を示す。その他に竪穴状遺構や、集石、土坑などを検出している。平成19年事業団が調査している。

立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡が占地する山地斜面と折の沢を挟んで、林地区の南緩斜面地形が広がる。長野原町内でも有数の遺跡包蔵地区である。西端には花畑遺跡、東原Ⅰ～Ⅲ遺跡が占地する。

花畑遺跡は平成10年～12年度に事業団が調査している。縄文時代遺構は無いが、包含層で五領ヶ台Ⅱ式を中心にした中期初頭の資料が少量ながら出土している。

東原Ⅰ遺跡、平成17、18、24年度に町教委が調査し、陥穴状土坑の時期を前期～後期と比定されているが、検討を要する。20年度には事業団が調査している。包含層出土遺物で諸磯b式の破片数点が報告されている。また、土坑出土であるが、後期の底部破片を見るが、遺構に伴う例では無いようだ。

東原Ⅱ遺跡、平成20年度に事業団が調査している。土坑出土遺物として前期後半の土器片を見るが、遺構に伴う例では無い。包含層出土遺物として、諸磯b式や加曾利Ⅳ式、堀之内Ⅱ式が報告されているが、量は多くない。



## 第2章 周辺の環境

東原Ⅲ遺跡の縄文遺構は検出されていない。包含層出土遺物として早期条痕文系土器群や、前期初頭～後葉の破片数点が報告されている。

林地区の緩斜面地形東側は、山地地形にある立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡に比して、縄文時代の資料がやや貧弱な傾向を見せる。特に早期資料は山地斜面に偏る分布が特徴的である。

林地区の中心をなす、傾斜も緩やかな中央部分は大型の遺跡が接続する。上原Ⅰ・Ⅳ遺跡、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡、林宮原遺跡である。

上原Ⅰ遺跡は近年調査が集中した。特に平成23・24年度の町教委の調査と平成24年度の事業団調査によって、前期初頭の集落跡が報告されている。花積下層式及び信州地方に見られる塚田式、中道式が出土している。また、少量ながら新潟県域に見られる布目式と目される破片2点も報告されている。前期住居跡15軒、中期後葉住居跡4軒が検出されている。中期後葉の住居跡からは加曾利EⅡ式や曾利Ⅱ式、「柵倉式」、「郷土式」が出土するが、加曾利EⅡ式がやや客体的な様相を示す。包含層出土遺物は、前期前半段階の資料が多い。なお、町教委調査で打製石斧4点を埋納したピットが検出されている。

上原Ⅳ遺跡も町教委調査（平成14・18・20・24年度）、事業団調査（15・21年度）が重なる。このうち事業団調査では、堀之内2式期の住居跡4軒や列石遺構、配石遺構が報告されている。同様に、町教委調査でも堀之内2式を出土する住居跡2軒を検出している。事業団調査で出土した注口土器に「福田類型」が傑出する傾向が見られた。町教委調査包含層で、堀之内2式の他加曾利BⅠ式や晩期末の土器が出土している。

林中原Ⅰ遺跡の調査は、昭和37年度群馬大学調査を嚆矢とする。中期住居跡1軒が確認されたとされる。その後、町教委の調査が平成14年に着手され、15次にわたる調査が重なる。事業団は平成16・19・21年度の調査を行っている。町教委の調査では中期後葉～後期の集落跡を検出している。特に、後期資料では堀之内2式段階の特徴的な深鉢が出土しており、注目されている。また注口土器も釣手付の例や上原Ⅳ遺跡に見られた「福田類型」が出土している。中期後葉の集落資料は現在整理中で詳細を控えるが、大木9式との関連性の深い「屋代類型」の逸品が見られる。事業団調査では、前期初頭、前期前葉、

前期後葉、中期前葉の住居跡各1軒を検出している。花積下層式期の資料は上原Ⅰ遺跡でも調査されており、分布の広がりが予想されよう。堅穴状遺構からは加曾利EⅣ式が、遺構外からは諸磯b式の出土を見る。町教委調査と合わせると、多時期にわたる拠点的な集落様相が窺われよう。

林中原Ⅱ遺跡も平成15～19・21・22年度に町教委が13次にわたる調査を重ねている。事業団は、平成16・20・21年度に調査を行った。事業団20・21年度分は本書で報告する。町教委の調査では、中期後葉～後期前葉の列石、配石3基の他、中期後葉の住居跡1軒を見る。

林宮原遺跡は、平成14～16・18～20・24年度に町教委が調査を行い、24年度と27年度に事業団が調査した。縄文時代の遺構は見られず、中期～後期包含層からの出土遺物が報告されている。

これら大型遺跡群の北側に目を向けると、北に聳える王城南麓部に繋がる。山地斜面際に上原Ⅱ遺跡と上原Ⅲ遺跡が位置する。林地区の平坦地形を概観すると扇状地状の広がりを見せるが、扇端部にあたる地点である。

上原Ⅱ遺跡、平成23年度に町教委が調査を行っている。斜面地形の著しい遺跡ながら、中期初頭堅穴状遺構、焼土遺構、土坑などが調査された。五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ⅰa式土器が良好に出土している。先述した立馬Ⅱ遺跡、後述する楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡に類例があるが、いずれも斜面地形のため遺構一括性の確定性に乏しく、上原Ⅱ遺跡の出土様相が優れる。

上原Ⅲ遺跡は平成23年度に町教委が調査しており、隣接地点を25・27年度に事業団が調査した。包含層出土遺物として、少量ながら前期初頭～後期前葉の土器が見られる。中期後葉の「郷土式」を見る。

林地区中央部より西側は室沢と山地を挟み、中棚Ⅰ遺跡がある。さらに西側には楡木沢が流れ、再度山地斜面が聳えるが、この山地斜面中に楡木Ⅰ～Ⅲ遺跡が点在する。

中棚Ⅰ遺跡は林地区では数少ない上位段丘面に占地する。早期末葉の絡条体圧痕を施す条痕文系土器などが土坑から出土している。その他に早期中葉の野島式や鶴ヶ島台式を見ることができる。平成23年度に町教委が調査した。

楡木Ⅰ遺跡及び楡木Ⅱ遺跡は最上位段丘面に位置する





第5図 林中原II遺跡周辺遺跡及び地形図(番号は長野原町遺跡台帳番号)



とされるが、ほぼ周辺は険しい山地斜面に囲まれ、斜面中腹にある平坦地を選んだ各時代の集落跡などが発見されている。楡木Ⅰ遺跡は平成21年度に事業団が調査している。中期前葉に比定される土器が土坑1基より出土している。包含層からは少量ながら黒浜式、五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ⅰa式の破片が出土している。

楡木Ⅱ遺跡は楡木Ⅰ遺跡上位の平坦地に占地する。比較的広い山地緩斜面である。事業団が平成12・13・16・17年度に調査を行ない、早期前葉住居跡31軒をはじめ、前期住居跡や中期初頭住居跡を見ている。早期住居跡は撚糸文系土器を主体とし、石囲い炉を付帯する例もあった。該期住居跡内に石囲い炉を設けた例は極めて希少例で、今後さらなる検討を重ねなければならないだろう。前期住居跡は黒浜式、中期初頭の住居跡は五領ヶ台Ⅱ式を出土している。包含層遺物も豊富で、撚糸文系土器に加えて押型文や沈線文系土器が加わる。草創期に比定される表裏縄文も1点ながら出土している。前期に比定した土器には数点だが中越式が見られる。中期は初頭～前葉段階の土器資料が充実する。

楡木Ⅲ遺跡は第5図に位置を示せなかったが、楡木Ⅰ遺跡より標高の低い上位段丘面にあたる。平成10年度事業団が調査し、諸磯b式が比較的まとめ、堀之内2式や加曾利B式が出土する包含層を得ている。

林地区中央部をなす上位段丘面南側は、段丘崖が連なる。崖下は中位段丘面となり、下田遺跡と下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡が占地する。下田遺跡は中位段丘面、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡は下位段丘面である。

下田遺跡は平成6・7・9年度及び平成26年度に事業団が調査している。近世畑跡や民家跡の調査が主体だったが、加工痕がある剥片石器の出土を見ることから、今後下面調査を重ねることによって縄文時代遺構の検出も予想されよう。

下原遺跡も事業団が平成12・13・15・16年に調査している。古墳時代住居跡や包含層で弥生前期資料が出土している。縄文土器も僅かながら、前期末葉や後期前葉の破片が出土している。

中棚Ⅱ遺跡は平成11～13・15年度事業団が調査した。近世畑跡を主体とするが、晩期末葉の土器片の出土も見ている。今後の調査に期待したい。

以上のように、林地区の縄文時代遺跡を概観した。長野原町教育委員会と事業団による多くの調査歴が蓄積した地区である。縄文時代遺跡も数多く調査され、各時期の様相も臆げながら、明らかになりつつある。

草創期の資料は極めて少ない。楡木Ⅱ遺跡と立馬Ⅰ遺跡に表裏縄文各1点を見るのみである。まとまった資料を見ないが、今後も注意深く調査を重ねることによって、実像が明らかになるものと思われる。

早期の資料としては、立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡と楡木Ⅱ遺跡にまとまる。その他では、中棚Ⅰ遺跡でも条痕文系土器などを見る。いずれも、林地区の中央部の広い台地からの出土ではなく、立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡、楡木Ⅱ遺跡のように、最上位段丘よりさらに標高の高い、山地斜面中にある痩せ尾根や馬の背状の台地地形を選ぶ傾向がある。また、上位段丘面にある中棚Ⅰ遺跡も注意しなければならない。おそらく、楡木Ⅲ遺跡などへの広がりや、さらに中位段丘面・下位段丘面にある下田遺跡・下原遺跡・中棚Ⅱ遺跡にも出土が見込まれる。中位・下位段丘面における離水時期や人間活動の初現を明らかにできよう。

前期は林地区全域に広がる。下位段丘面の下原遺跡にも前期末葉の破片が見られる。その中で、前期初頭に位置づけられる、花積下層式期の集落遺跡が上原Ⅰ遺跡で検出された例は、大きな評価が与えられよう。該期資料は、各遺跡でも少量が確認されており、林地区に集中する傾向も窺われる。

前葉～後葉の集落遺跡は、平野部に見る大規模な集落遺跡は見られず、数軒単位の小規模な集落遺跡が点在する様相を示す。その中で、黒浜式や諸磯b式土器の出土量が多い。

中期も林地区全域に広がるとはいえ、初頭～前葉段階の集落跡が立馬Ⅱ遺跡と上原Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡に偏る様相は興味深い。林地区中央部の大型遺跡では、少数の遺構検出に止まる。早期遺跡のように広い台地を選ばず、山地斜面上の狭小な台地や急斜面地形に占地する要因は不明だが、五領ヶ台式が林地区に濃密に分布する傾向と併せて今後の課題となろう。中葉の集落遺跡も立馬Ⅱ遺跡と楡木Ⅱ遺跡に限られる。林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡も数軒が検出されているが、前者が圧倒する。前葉段階の集落設営手段が継続する傾向である。

中期後葉は、中央部にある林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡に大型集

落が営まれ、周辺では上原Ⅰ遺跡や立馬Ⅲ遺跡のような小規模な遺跡が点在する様相である。広い台地上に集落を営む時期として、横壁地区や長野原地区など各地区と共通する。今後は、隣り合う林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡の規模や性格を明らかにしなければならないだろう。

中期末葉～後期初頭の遺跡は少ない。林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡と重複する傾向があるが、おそらく、林地区中央部に分散すると思われる。敷石住居跡としての居住痕跡であるので、広がりへの把握はたやすいだろう。

後期前葉の遺構は上原Ⅳ遺跡、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡で調査されている。上原Ⅳ遺跡や林中原Ⅰ遺跡では注口土器「福田類型」への偏在が目立つ。また林中原Ⅰ遺跡では在地系と考えられる深鉢が出土している。この段階の遺構・遺物は横壁中村遺跡や長野原一本松遺跡でも多く見られている。将来的に、林地区の該期資料と併せて、後期地域性が具体的にになるだろう。

主な参考文献

1. 長野原町教育委員会（以下長野原町教委）1990 『長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査ー』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 長野原町教委1995 『柳沢城』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
3. 長野原町教委2004 『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集林宮原遺跡Ⅱ・林中原Ⅰ遺跡Ⅳ・外輪原Ⅰ遺跡・長畝Ⅰ遺跡Ⅱなど
4. 長野原町教委2002 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
5. 長野原町教委2005 『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集嶋木Ⅰ遺跡・立石遺跡・林宮原遺跡など
6. 長野原町教委2006 『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集林中原Ⅱ遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡・林中原Ⅰ遺跡Ⅶなど
7. 長野原町教委2007 『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集林中原Ⅰ遺跡Ⅸ・林宮原遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡・林中原遺跡Ⅺ・林中原Ⅱ遺跡Ⅹ・中棚Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・上原Ⅱ遺跡など
8. 長野原町教委2009 『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集林中原Ⅰ遺跡Ⅶ・久々戸遺跡など
9. 長野原町教委2010 『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集草木原遺跡Ⅱ・三平Ⅰ遺跡・古屋敷遺跡・林宮原遺跡Ⅷ・林中原Ⅰ遺跡ⅩⅤ・上原Ⅳ遺跡Ⅲなど
10. 長野原町教委2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
11. 長野原町教委2010 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集林中原Ⅱ遺跡Ⅻ
12. 長野原町教委2011 『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
13. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下群埋文）1998 『長野原久々戸遺跡』
14. 群埋文2002 『長野原一本松遺跡（1）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告第1集（以下ハッ場○集）
15. 群埋文2002 『ハッ場ダム発掘調査集成（1）』ハッ場2集 東宮遺跡・石畑遺跡・川原湯勝沼遺跡・横壁勝沼遺跡・西久保Ⅰ遺跡・山根Ⅲ遺跡・下田遺跡・花畑遺跡・楡木Ⅲ遺跡・尾坂遺跡など
16. 群埋文2003 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場3集
17. 群埋文2004 『久々戸遺跡（2）・中棚Ⅱ遺跡（2）・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場4集
18. 群埋文2005 『横壁中村遺跡（2）』ハッ場5集
19. 群埋文2005 『川原湯勝沼遺跡』ハッ場6集
20. 群埋文2006 『横壁中村遺跡（3）』ハッ場7集
21. 群埋文2006 『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場8集
22. 群埋文2006 『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』ハッ場9集
23. 群埋文2006 『横壁中村遺跡（4）』ハッ場10集
24. 群埋文2006 『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場11集
25. 群埋文2007 『下原遺跡Ⅱ』ハッ場12集
26. 群埋文2007 『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場13集
27. 群埋文2007 『横壁中村遺跡（5）』ハッ場14集
28. 群埋文2007 『長野原一本松遺跡（2）』ハッ場15集
29. 群埋文2007 『上郷岡原遺跡（1）』ハッ場16集
30. 群埋文2008 『山根Ⅲ遺跡（2）・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』ハッ場17集
31. 群埋文2008 『楡木Ⅱ遺跡（1）』ハッ場18集
32. 群埋文2008 『長野原一本松遺跡（3）』ハッ場19集
33. 群埋文2008 『横壁中村遺跡（6）』ハッ場20集
34. 群埋文2008 『上郷岡原遺跡（2）』ハッ場21集
35. 群埋文2008 『横壁中村遺跡（7）』ハッ場22集
36. 群埋文2008 『上ノ平Ⅰ遺跡（1）』ハッ場23集
37. 群埋文2008 『長野原一本松遺跡（4）』ハッ場24集
38. 群埋文2008 『上郷西遺跡』ハッ場25集
39. 群埋文2009 『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場26集
40. 群埋文2009 『楡木Ⅱ遺跡（2）』ハッ場27集
41. 群埋文2009 『長野原一本松遺跡（5）』ハッ場28集
42. 群埋文2009 『横壁中村遺跡（8）』ハッ場29集
43. 群埋文2009 『横壁中村遺跡（9）』ハッ場30集
44. 群埋文2009 『上郷岡原遺跡（3）』ハッ場31集
45. 群埋文2009 『上郷A遺跡（2）』ハッ場32集
46. 群埋文2010 『横壁中村遺跡（10）』ハッ場33集
47. 群埋文2010 『横壁中村遺跡（11）』ハッ場34集
48. 群埋文2010 『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』ハッ場35集
49. 群埋文2011 『東宮遺跡（1）』ハッ場36集
50. 群埋文2012 『横壁中村遺跡（12）』ハッ場37集
51. 群埋文2012 『東宮遺跡（2）』ハッ場38集
52. 群埋文2012 『楡木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡（2）・西久保Ⅳ遺跡』ハッ場39集
53. 群埋文2013 『長野原一本松遺跡（6）』ハッ場40集
54. 群埋文2013 『横壁中村遺跡（13）』ハッ場41集
55. 群埋文2011 『年報30』尾坂
56. 長野原町教委2012 『町内遺跡Ⅺ』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
57. 長野原町教委2013 『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
58. 長野原町教委2013 『町内遺跡Ⅻ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
59. 長野原町教委2013 『町内遺跡ⅩⅢ』長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
60. 長野原町教委2014 『町内遺跡ⅩⅣ』長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
61. 長野原町教委2015 『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第30集
62. 群埋文2014 『長野原一本松遺跡（7）』ハッ場42集
63. 群埋文2014 『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』ハッ場43集
64. 群埋文2014 『横壁中村遺跡（14）』ハッ場44集
65. 群埋文2015 『町遺跡』ハッ場45集
66. 群埋文2015 『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』ハッ場46集
67. 群埋文2016 『林中原Ⅱ遺跡（1）』ハッ場47集
68. 群埋文2016 『尾坂遺跡（2）』ハッ場48集
69. 群埋文2017 『上ノ平Ⅰ遺跡（2）』ハッ場49集
70. 群埋文2017 『上原Ⅲ遺跡（2）・久々戸遺跡（3）』ハッ場50集
71. 群埋文2017 『東宮遺跡（3）』ハッ場51集
72. 群埋文2017 『下田遺跡（2）』ハッ場52集

## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

林中原Ⅱ遺跡は、吾妻郡長野原町北部の吾妻川左岸上位段丘面にある。周辺は南側への緩斜面地形にあり、南端部は段丘崖が東西に連続する。本遺跡はこのような緩斜面上に占地された集落遺跡の一つである。隣接する遺跡として、林中原Ⅰ遺跡や東原Ⅰ～Ⅲ遺跡、上原Ⅰ遺跡があるが、その中でも傑出した遺構量を誇る内容を示す。主な遺構としては縄文時代中期～後期の住居跡、土坑、列石などであり、その他には中世～近世、建物跡や墓塚などがある。本書はこの遺構群のうち、調査対象区の北側にあたる町道部分(61区・62区)を対象としている。南側の国道部分(51区・52区)は、第1分冊として既に刊行されている。また、弥生時代以降の遺構・遺物は第3分冊で報告する。

ここでは、本書で扱う町道部分で検出された縄文時代の遺構・遺物の概要を述べる。

縄文時代草創期と早期の遺構・遺物は確認されていない。本遺跡のある林地区では、草創期資料は未見であるが、隣接地区の川原畑地区で著名な石畑Ⅰ岩陰があり、当地域の草創期遺跡として知られている。林地区の早期の遺跡としては、楡木Ⅱ遺跡、立馬Ⅰ遺跡、立馬Ⅲ遺跡が挙げられよう。

町道部分の前期資料としては、62区21号土坑が挙げられる。前期初頭段階の深鉢が出土しているが、残存状態が悪い土坑のため、全容は判然としない。また、国道部分では見られた後葉段階である諸磯b式段階の遺構は見られなかった。居住域から外れるのであろうか。同様に中期初頭～前半段階の遺構が見られなかった。国道部分では土坑が確認された段階であり、林地区は比較的分布が知られる地区であるが、今回の調査区からは検出されていない。おそらく分布域の中でも地点的な在り方をしめず時期であろう。

町道部分で中期遺構が見られる段階としては、中葉末～後葉初頭段階となる。加曾利EⅠ式土器を出土する住居跡が主であるが、61区21号住と62区22号住がやや古い段階で、61区17号住、35号住、37号住、41号住、42号住、62区11号住、14号住、19号住、24号住が加曾利EⅠ式土器や大木8b式や「桁倉式」土器が出土する。

本調査区の主体となる時期は中期後葉後半段階にあたり、これは国道部分の傾向を継続する。おそらく、径80m以上の環状集落の一部にあたると思われる。61区1～4号住、7号住、9号住、12号住、27号住、62区2号住、5号住、8号住、9号住、12号住、17号住、15号住などが挙げられ、調査区全域に分布する配置を見せる。その中で、61区27号住や62区17号住は整った平面形状を呈し、典型的な住居構造が示唆される。また61区9号住、33号住、62区9号住のように、多量の出土が見られ、良好な一括組成を示している。また、当地域の中期後葉後半は敷石住居が出現する時期として知られる。今回の調査区でも、61区22号住や39号住が該当し、中期末葉～後期にかけて敷石住居が盛行する当地域の前駆形態として捉えられよう。

敷石住居跡が盛行する中期末葉～後期初頭の住居跡としては、61区8号住、11号住、18号住、24号住、26号住、30号住、36号住、62区13号住が挙げられるが、東側への偏りが見られる。また、大規模な1号列石が東西の走行を示すが、敷石住居跡も関連する配置を示しており、これは国道部分で見られた51区1号列石と同様の形態を示していた。

また、時期が相前後するが、4棟の掘立柱建物跡が検出されている。詳細な時期は確定できないが、中期後葉以降であることから、中期末葉～後期の所産と考えられる。敷石住居跡や1号列石との関係も、今後の重要な分析項目と位置付けられよう。

### 第2節 基本土層

林中原Ⅱ遺跡が位置する吾妻川左岸上位段丘は、段丘面が安定しており、南側への緩斜面が大きく広がる。洪積台地であり、基本層序としては基盤に応桑泥流上に乗るローム層と上位に堆積する黒褐色土が基準となる。しかしながら、当地区は南流する小河川に画された洪積台地が東西に連続する景観であり、各台地の基本層序は若干ながら様相を異にする。これは、斜面地形に伴う地滑りなどの二次堆積土が複雑に重なるため、各遺跡で得られた層序は単純な層位を示していない。

本遺跡においても、調査区内の各地点で観察された層

第3章 発見された遺構と遺物

位は異なる。ここでは、代表的な層位を示す51区南壁の土層を基本土層としたい。

表土は地点によって、層厚が著しく異なるが概ね20～30cmの堆積である。

II層は比較的厚く堆積し、黒褐色～黒色を呈す。比較的軟質で白色粒を含む。中世～近世遺構の多くは、II層下位で確認できる。

III層は地点によって層厚が異なり、2～3層に細分できるが、細分層位が出土土器の細分時期とは対応できない。おそらく、人為的な土壌の移動が頻繁に行われた証左と考えられよう。やや硬質となり、黄色粒(As-YPk)を含む。縄文時代後期以降の遺構確認面である。

IV層は、いわゆるローム漸移層に対応する。暗褐色～黄褐色を呈し、硬質で黄色粒を顕著に含む。縄文時代前期以降の遺構が確認でき、本遺跡の中期に比定される遺構の大半は、この層位で検出している。

V層は二次堆積ロームないしは軟質ローム層である。黄褐色を呈し礫を含む。二次堆積ロームは傾斜や谷地形

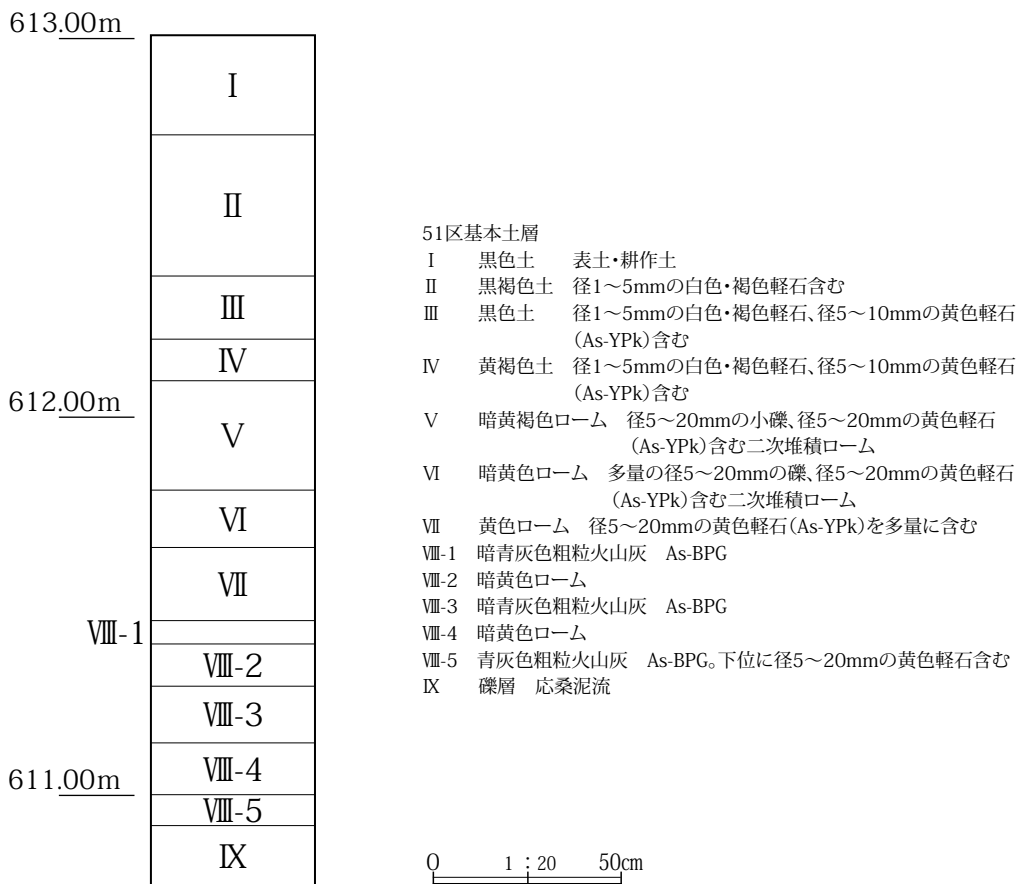
に伴う崩落土とされるが、検討を要する。なお、本文では軟質ロームとして一括した。最終的な遺構確認面である。

VI層も二次堆積ロームである。V層に比して礫の含有量が多い。軟質ロームに相当する。

VII層は黄色ロームや黄色粒を多く含む。硬質ロームに相当する。陥穴状土坑など深度の大きい遺構はこの層位を掘り抜き、VIII層まで達していた。

VIII層は浅間板鼻褐色軽石(As-BP)を主体とした幾つかの層位がまとまる。

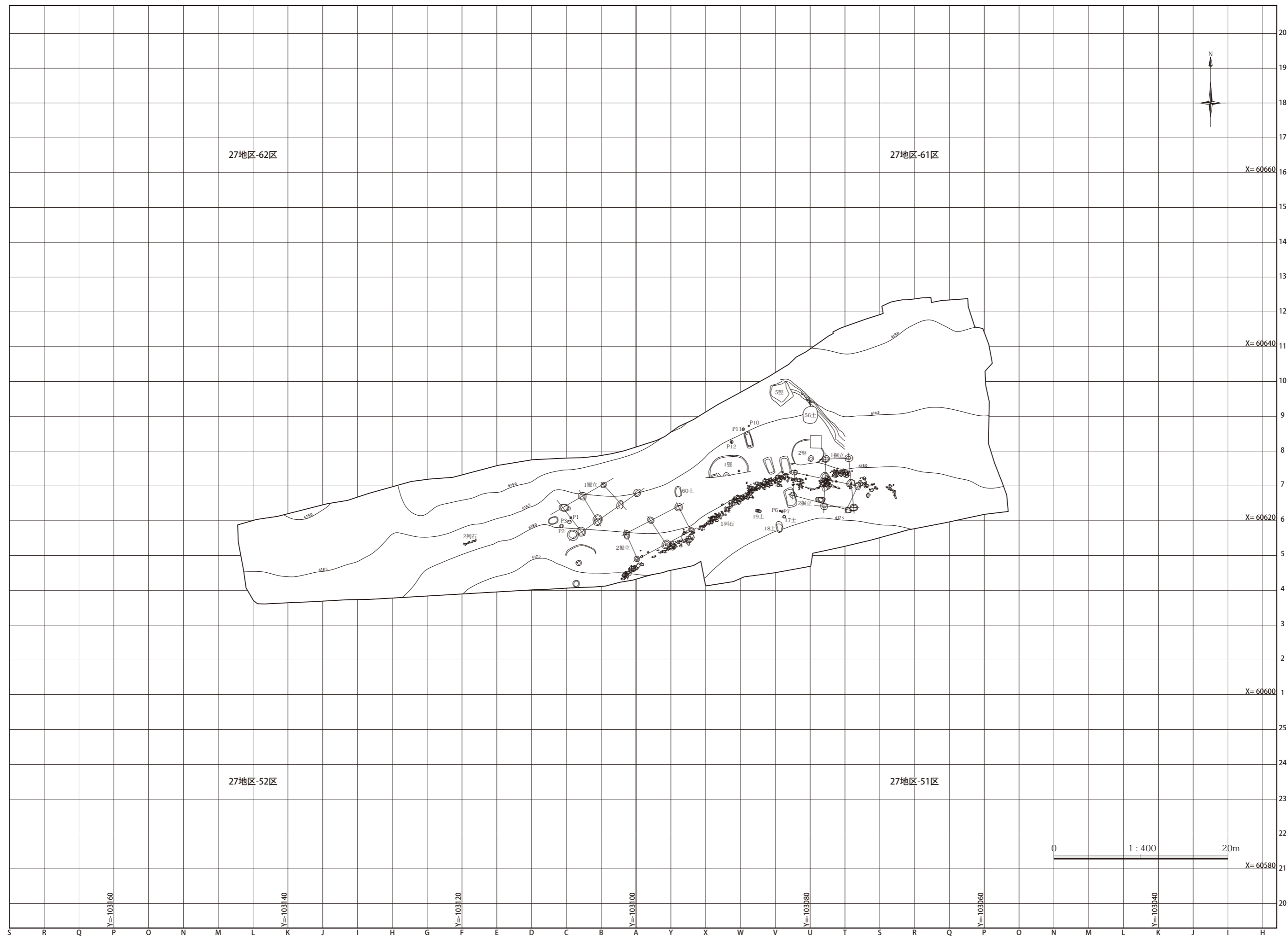
IX層、応桑泥流である。



第6図 基本土層図

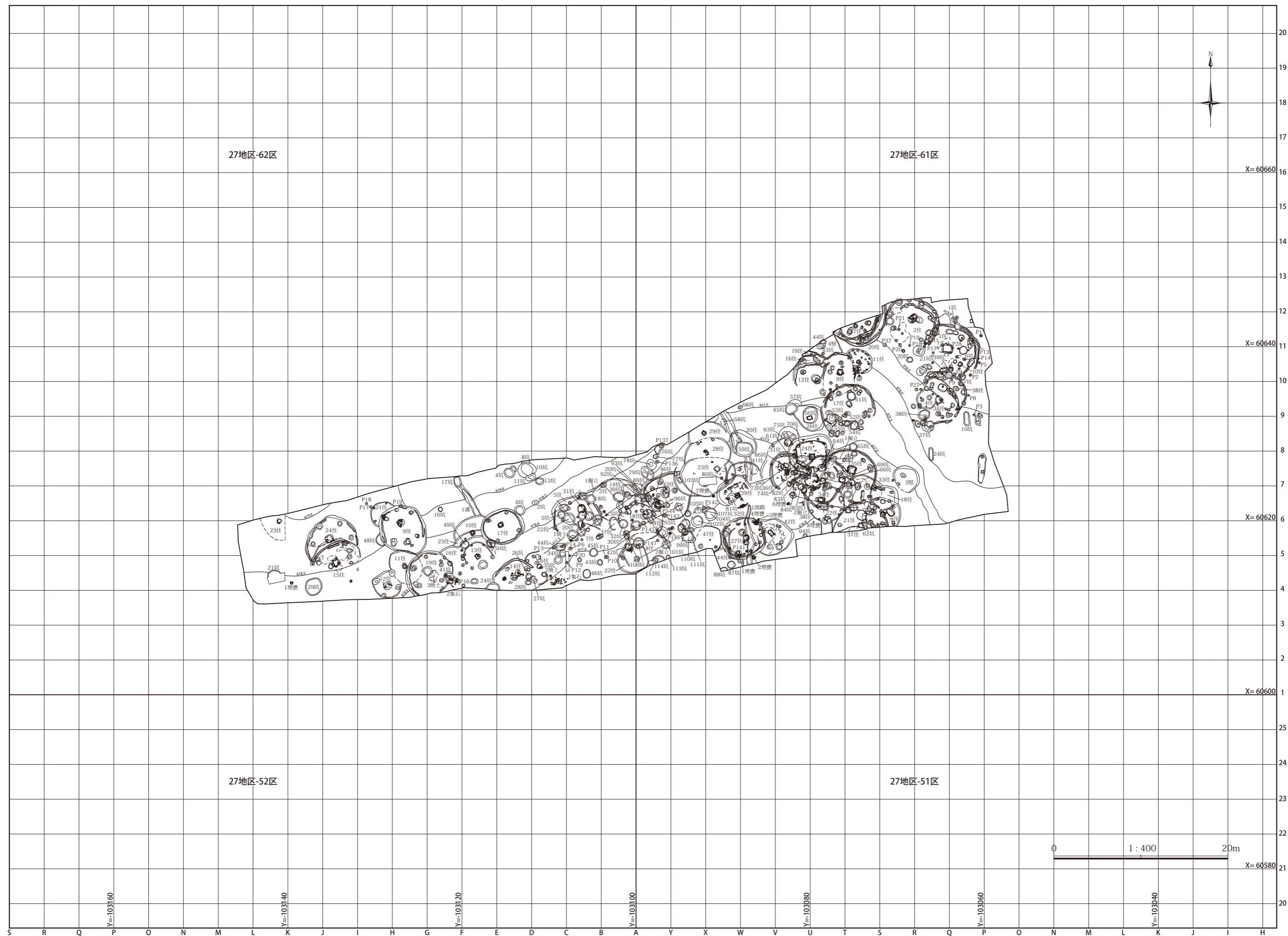


第7图 林中原II遺跡全体图(51·52·61·62区)

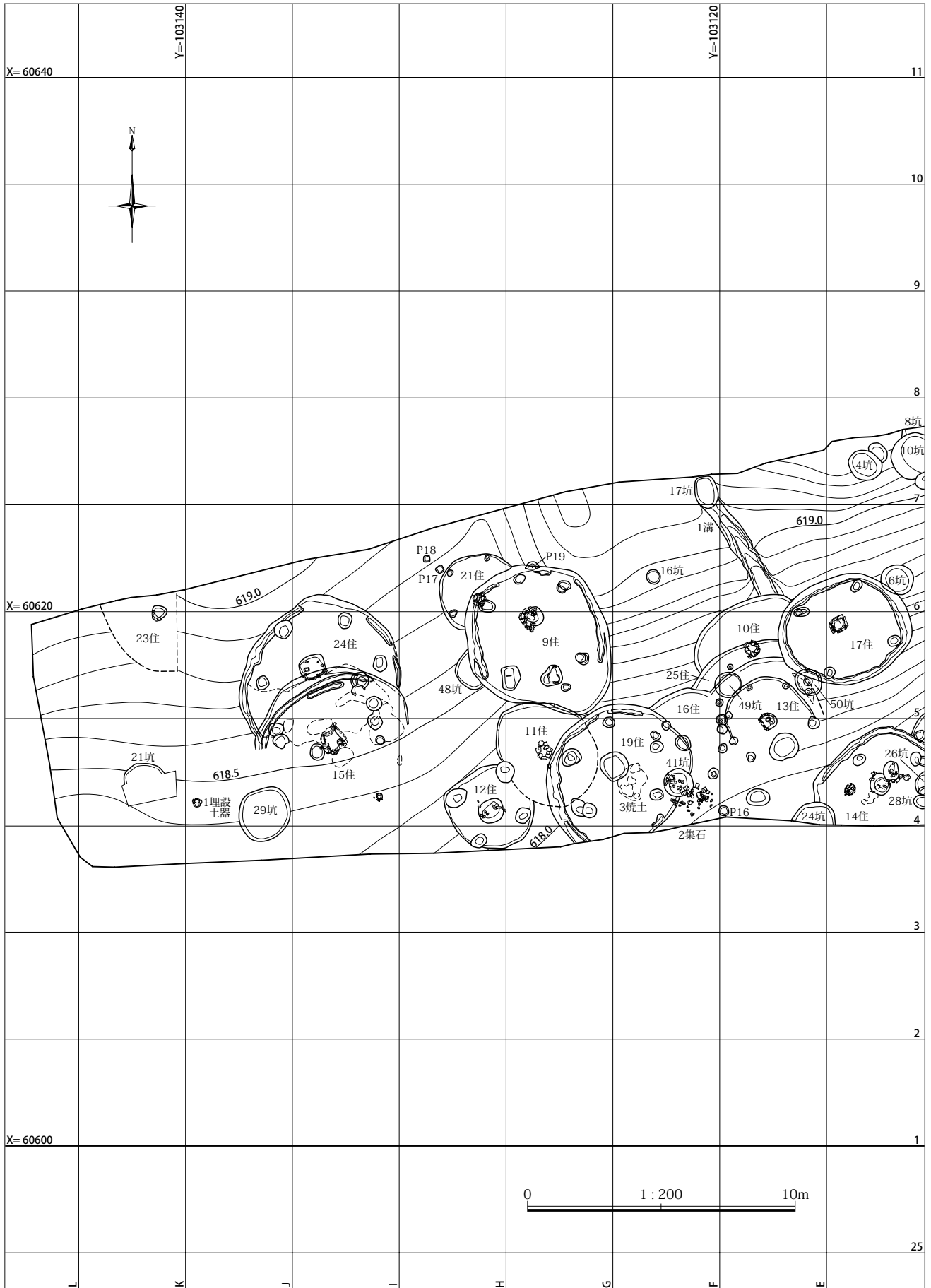


第8図 林中原II遺跡全体図(町道部分)1面目



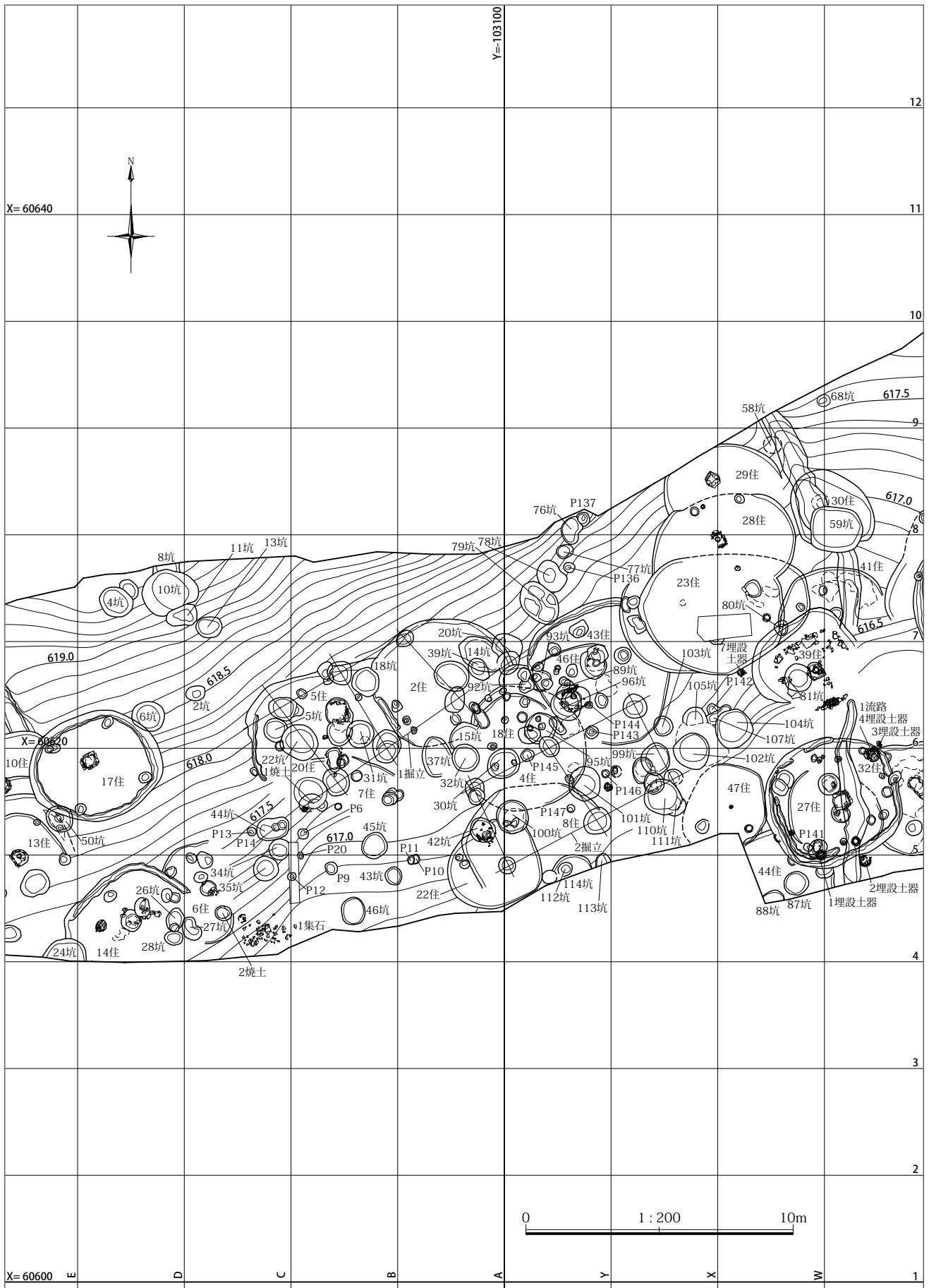


第9图 林中原II遺跡全体図(町道部分) 2面目



第10図 林中原Ⅱ遺跡遺構配置図1





第11図 林中原Ⅱ遺跡遺構配置図2



第12図 林中原Ⅱ遺跡遺構配置図3

第3節 住居跡

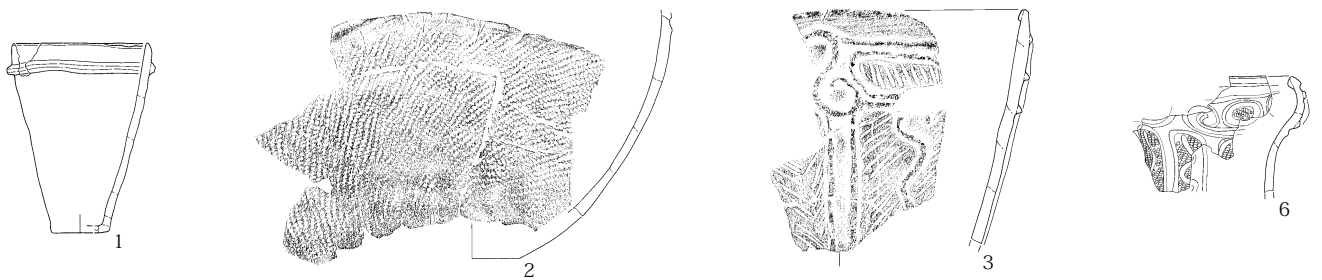
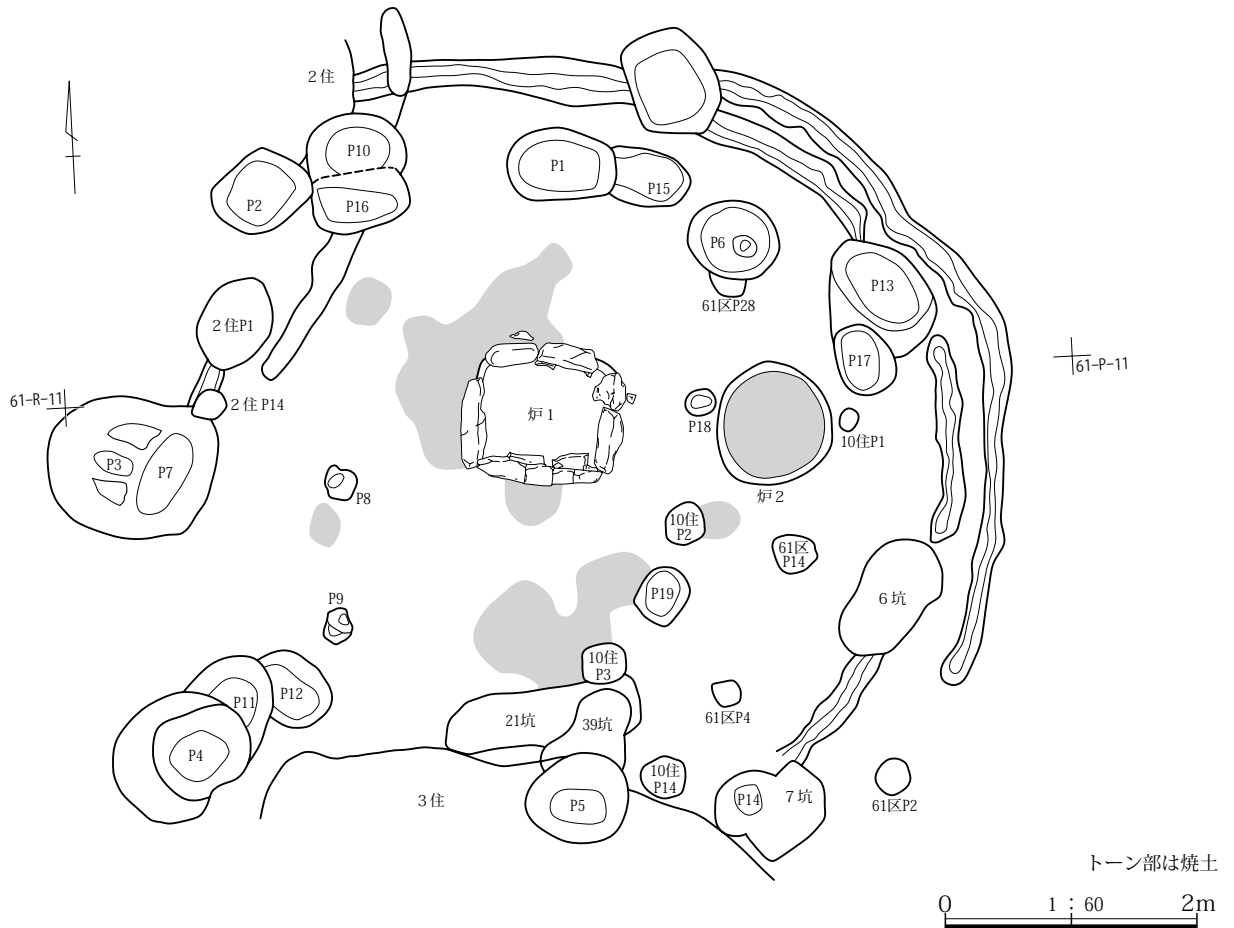
本節では、町道部分(61・62区)で検出された竪穴住居跡について述べる。例言でも触れたが、いわゆる竪穴住居跡を住居跡という用語で統一し、本文・挿図・表・写真図版中などでは、\*号住居跡あるいは、\*号住、\*住として記している。

調査時に住居跡として記録化した遺構は基本的に住居跡とし、61区と62区の通番の順で報告する。連番になるように努めたが、重複住居跡の一部はまとめて記述した。文中の計測値は概算によるものである。詳細は巻末の遺構計測表を参照していただきたい。

61区1号住居跡 (第13～19図 PL. 2・40)

位置:調査区北東端で検出した。61区P・Q-10・11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形を呈し、南西側にかけて強い傾斜が広がる。数軒の住居跡が一群をなし、2号住、3号住、7号・20号住が重複、近接する。

経過:黄褐色ローム層上層で確認した。ローム漸移層中より遺物の出土が認められ、さらに数箇所の炉跡が確認されたため、住居跡の存在が予想されたが、重複する2号住や3号住との分別のため、確認面をやや下げローム層上面となった。そのため、硬化面を伴う床面と石囲い炉を見たため、住居跡としての確定が果たせた。また、明瞭な壁の検出は果たせず、壁周溝による平面形把握と



第13図 61区1号住居跡 (1)

なった。また、西～南西側は傾斜地形のため壁周溝も確認できず、P2～P4の位置より範囲、規模を捉えた。

規模：壁周溝による把握のため、規模の数値はやや小さくなる。平面形は不整形で、平面規模は約(560.0)×(695.0)cmを測り、浅い検出となったため深さは15.0cmに止まる。

重複：重複遺構としては、西側に2号住居跡、南側に3号住居跡が重なる。また、床面南東に10号住居跡も検出されているが、重複部分による層位観察では、明瞭な新旧関係は把握できず、また出土土器の様相も近接した時間幅を示す。そのため、新旧関係は不明と判断したい。

その他に、6号坑、7号坑、21号坑、39号坑が南側に集まる。これらも新旧は不明と言わざるを得ない。

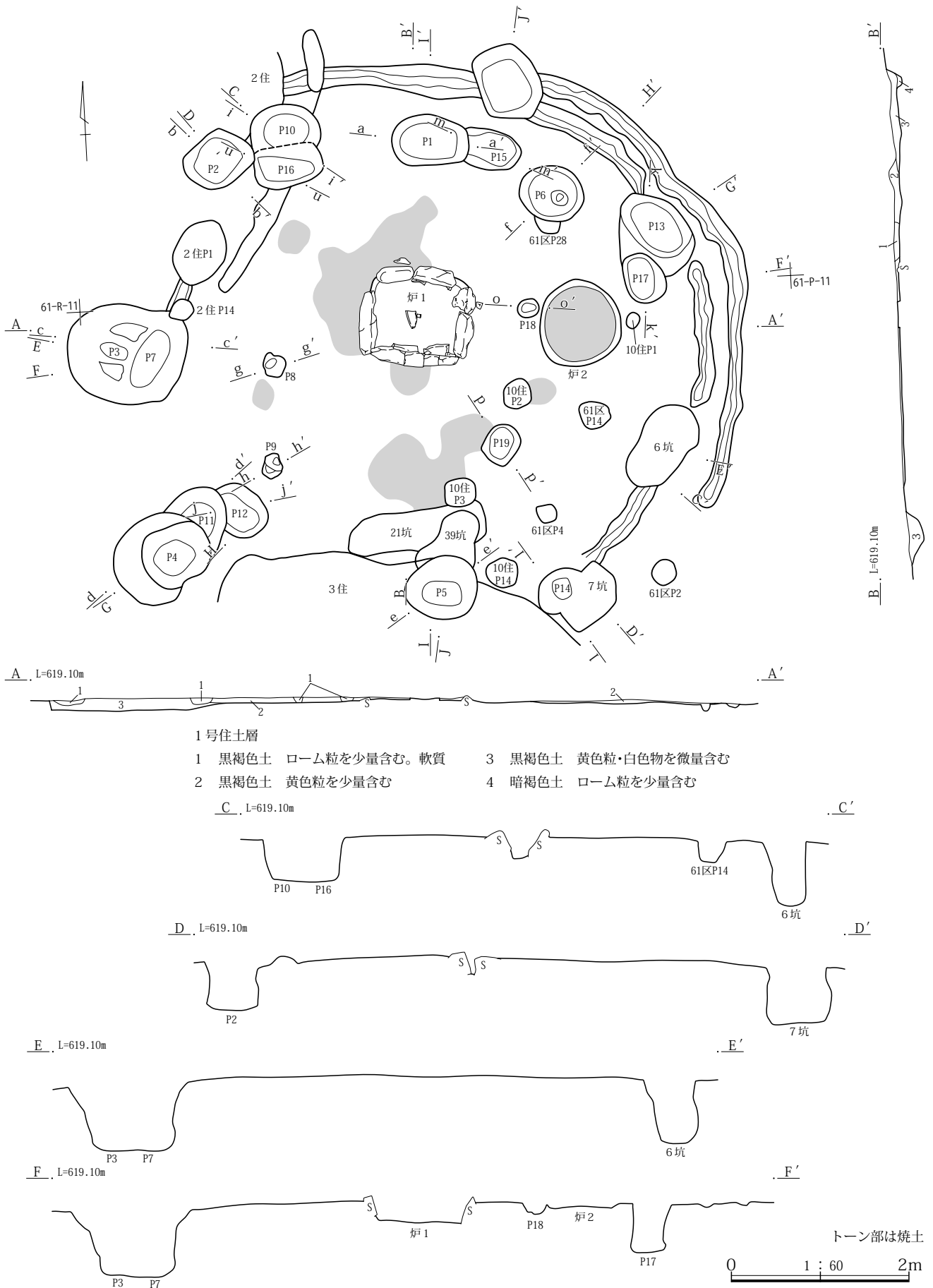
床面：黄褐色硬質ローム層を床面とする。平坦面を築き硬化面も炉跡周辺に見られた。

施設：大型の石囲い炉1基と地床炉1基、柱穴が12箇所、壁周溝を2条検出した。

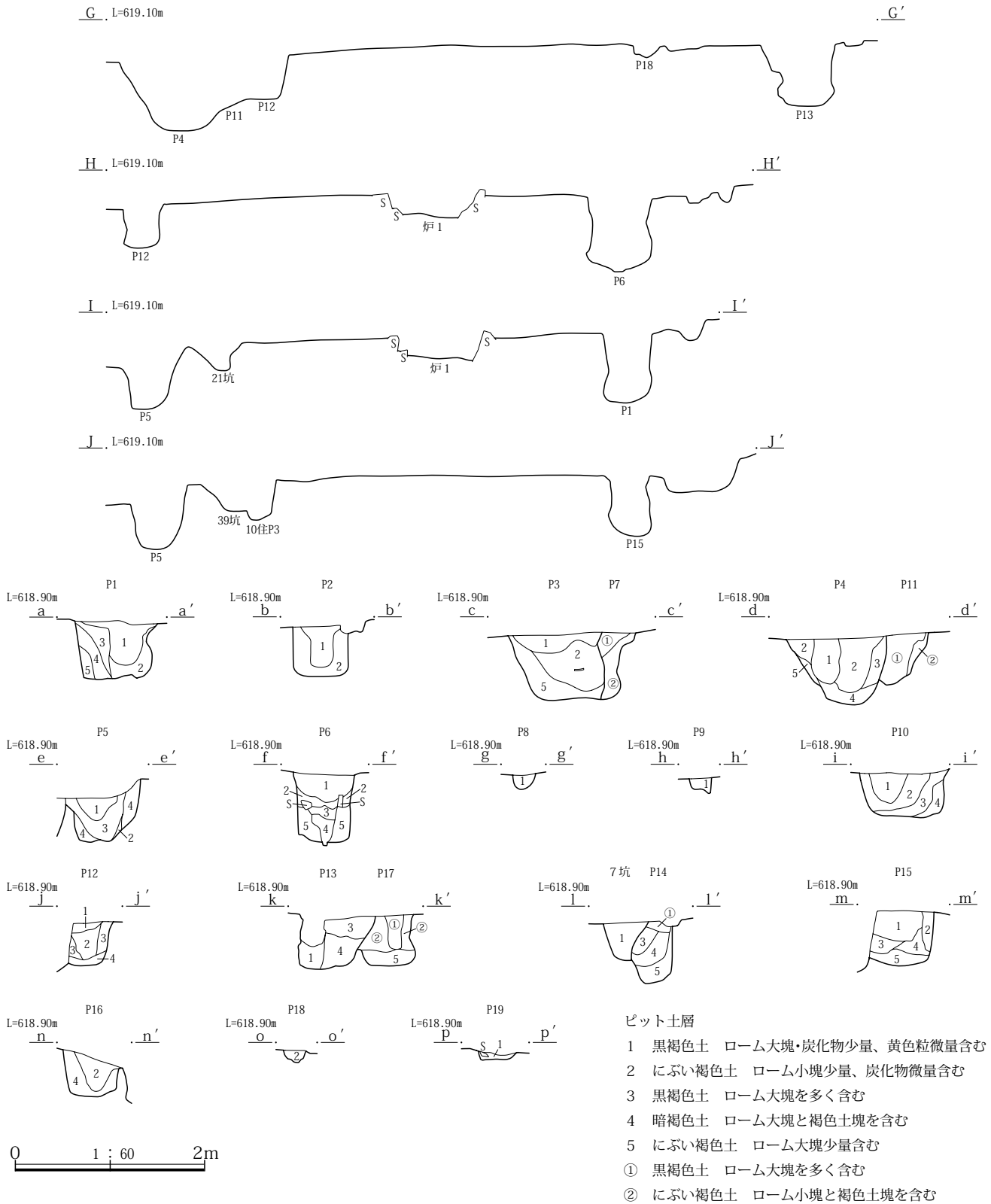
炉跡：2基を調査した。床面ほぼ中央に石囲い炉である炉1、中央よりやや東側に地床炉の炉2を検出した。いずれも、周辺に焼土が広がり、炉跡としての位置付けが容易に果たせた。炉1は正方形を平面形とする石囲い炉で、平面規模は約129.0×120.0cm、深さは28.0cmを測る。大型の整った形態を示し、南辺と西辺は各1石、北辺と東辺は各2石の自然石で囲まれる。また南辺と北辺の下位にも自然石が充てられ、炉石全体の高さを均等に調整している。埋土は褐色土を主体に焼土塊やローム塊を多く含む。住居廃棄時に人為的に埋めた例と考えた。出土遺物としては、炉内埋土中より、4の無文口縁部破片、5の突起破片を見る。おそらく意図的な例ではないだろう。



第14図 61区1号住居跡 (2)



第15図 61区1号住居跡(3)



- P 6 土層**
- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
  - 2 暗褐色土 ややしまりあり。黄色粒を微量含む
  - 3 黄褐色土 黄色粒主体。しまりは弱い
  - 4 褐色土 粘質土。黒色土大塊・黄色粒を微量含む
  - 5 にぶい褐色土 黒色土塊を少量含む

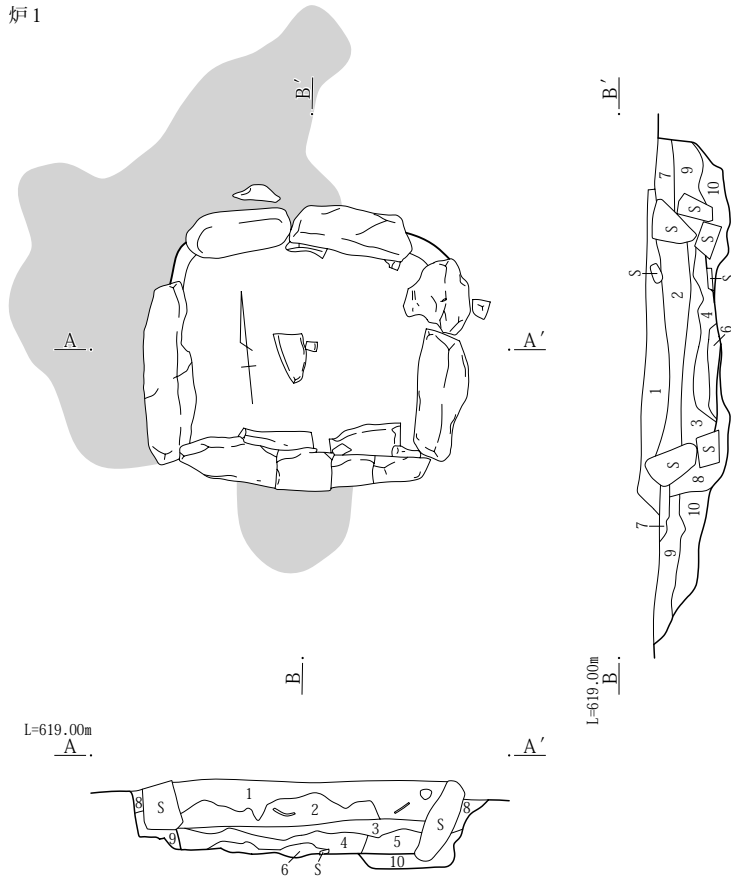
- P 10 土層**
- 1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
  - 2 黄褐色土 ローム大塊を含む
  - 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
  - 4 褐色土 ローム塊を多く含む

- P 15 土層**
- 1 にぶい褐色土 ローム小塊少量、黄色粒微量含む
  - 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする
  - 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
  - 4 にぶい褐色土 ローム塊と褐色土塊を含む
  - 5 褐色土 ローム大塊を多く含む

第16図 61区1号住居跡 (4)

第3章 発見された遺構と遺物

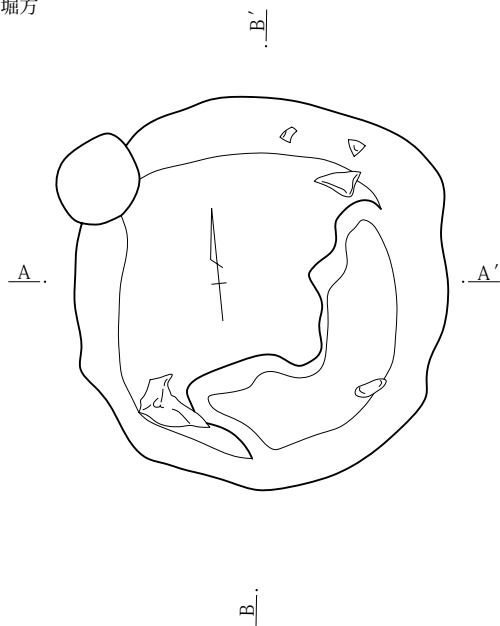
炉1



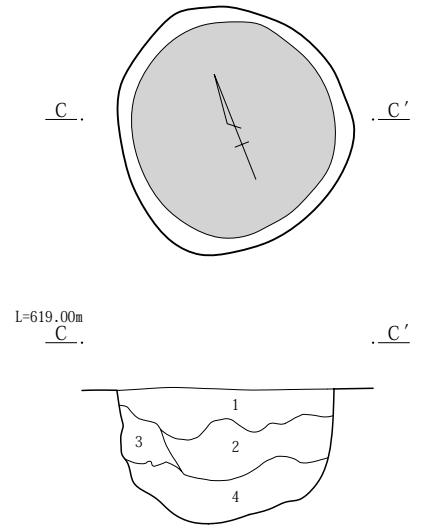
炉跡1土層

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色土 ローム大塊を少量、黄色粒を含む | 6 褐色土 ローム大塊を少量含む   |
| 2 褐色土 ローム小塊を少量含む       | 7 赤褐色土 焼土塊を主体とする   |
| 3 暗褐色土 焼土小塊を少量含む       | 8 黒褐色土 黄色粒を少量含む    |
| 4 褐色土 焼土小塊を少量含む        | 9 褐色土 ローム大塊を微量含む   |
| 5 にぶい褐色土 焼土小塊を多く含む     | 10 にぶい褐色土 黄色粒を少量含む |

炉1堀方



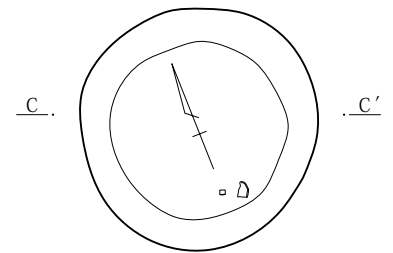
炉2



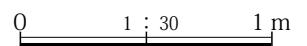
炉跡2土層

- 1 にぶい黄褐色土 焼土小塊を少量含む
- 2 にぶい赤褐色土 焼土小塊を多く含む
- 3 赤褐色土 焼土塊を主体とする
- 4 黒褐色土 焼土大塊を少量含む

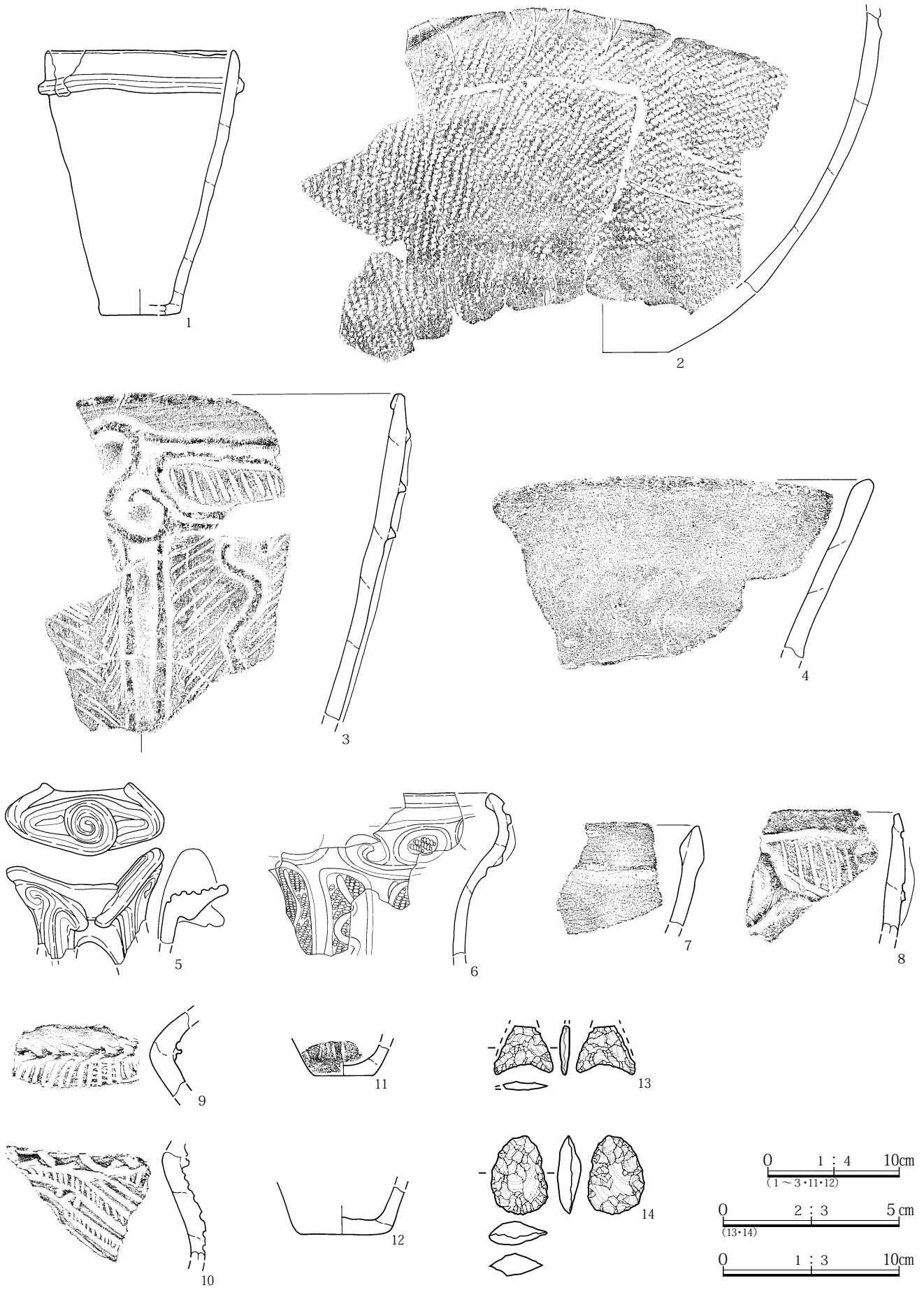
炉2堀方



トーン部は焼土

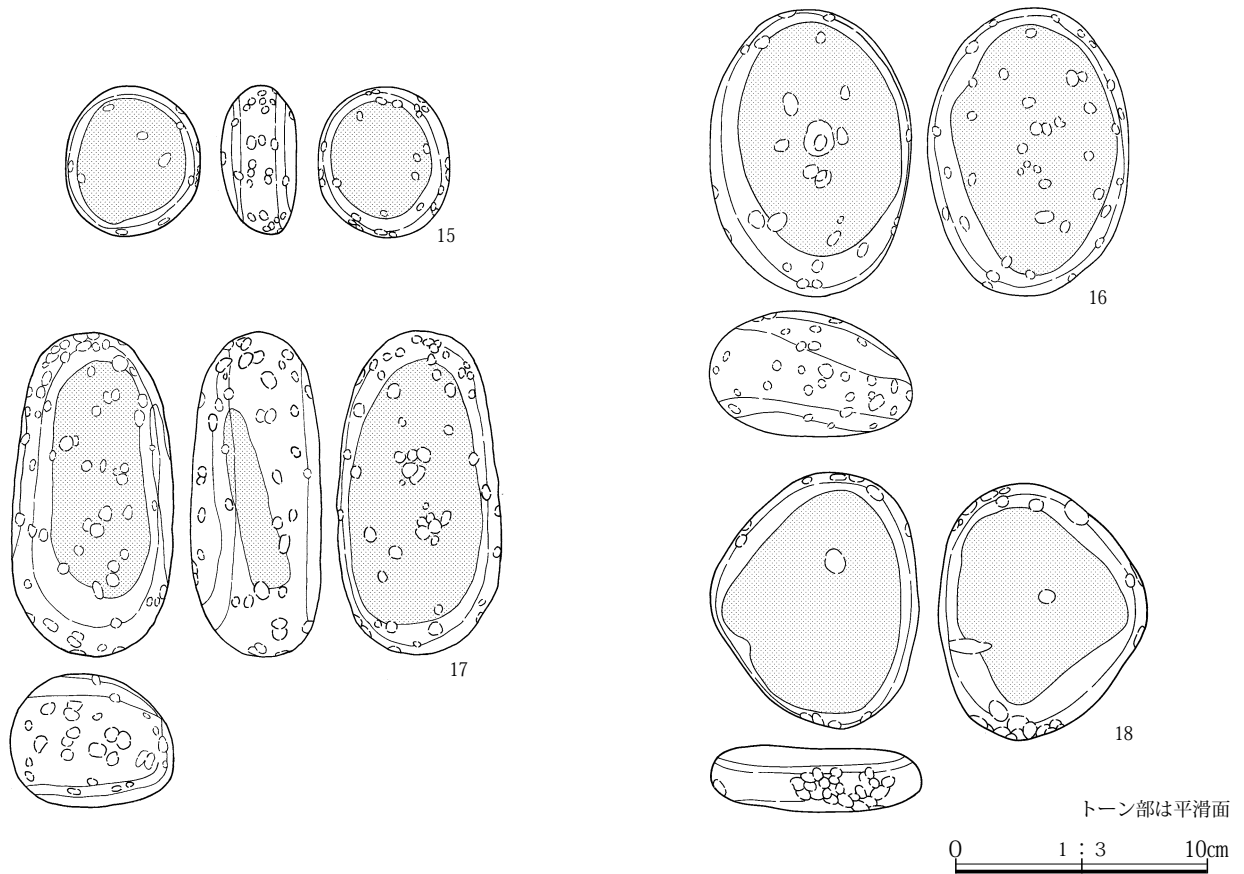


第17図 61区1号住居跡(5)



第18图 61区1号住居跡出土遺物 (1)





第19図 61区1号住居跡出土遺物(2)

炉2は炉1の東側約1mに位置する。径99.0cm程の円形を呈する地床炉で深さは50.0cmを測るようにはっきりした掘り込みを見せる。埋土は焼土塊を含む赤褐色土を主体としており、おそらく人為埋没と捉えられた。出土遺物は土器細片を見るが、炉1出土土器との時間差は判断できなかった。

壁周溝：北壁際から南東側にかけて検出された。住居平面形に沿った走行と捉えられ、2条の小溝が平行した状態で確認された。おそらく、住居内における移動の痕跡と考えられ、先に述べた炉1、炉2の在り方と関わる例と位置付けられよう。

柱 穴：床面上のピットとしては、19基を検出した。そのうち、柱穴として妥当なピットは15基を数える。その中で、P1、P3・P7、P4・P11、P13・P17は重複を示す土層が観察され、これも2箇所炉と2条の壁周溝が示すように住居内の移動痕跡と捉えることができよう。各柱穴は、概ね径80.0cm、深さ45.0~80.0cmの規模を呈し、柱痕を持つ例が多い。配置も6号坑を含めると7箇所に配され良好な配置といえよう。

遺 物：住居跡出土遺物としてはほぼ床直、床直上で出

土した例を挙げている。1・2は北壁際でほぼ床直上で接して出土している。3はP3・P7埋土中より、4・5は炉埋土から、6・9は炉北側から出土しているように、1以外は破片状態ながら、まとまった出土状態を呈すると評価できよう。また石器は北側に偏った出土が見られるが、これは住居跡遺存度も考慮するべきであり、石器用途を示唆する例では無い。

出土土器は概ね加曾利EⅢ式古段階に併行すると考えられよう。

所 見：住居内で移動の痕跡が見出せた住居跡である。2基の炉跡、2条の壁周溝、重複する柱穴をその痕跡と考えた。炉1は石囲い炉で炉2は地床炉であることから、おそらく東側の炉2→西側の炉1という変遷が捉えられる。2条の壁周溝は炉と同様に東側の壁周溝から西側への移動が想起されよう。同時に重複する柱穴も東から西へと思われるが、これは土層観察では具体的には把握できなかった。

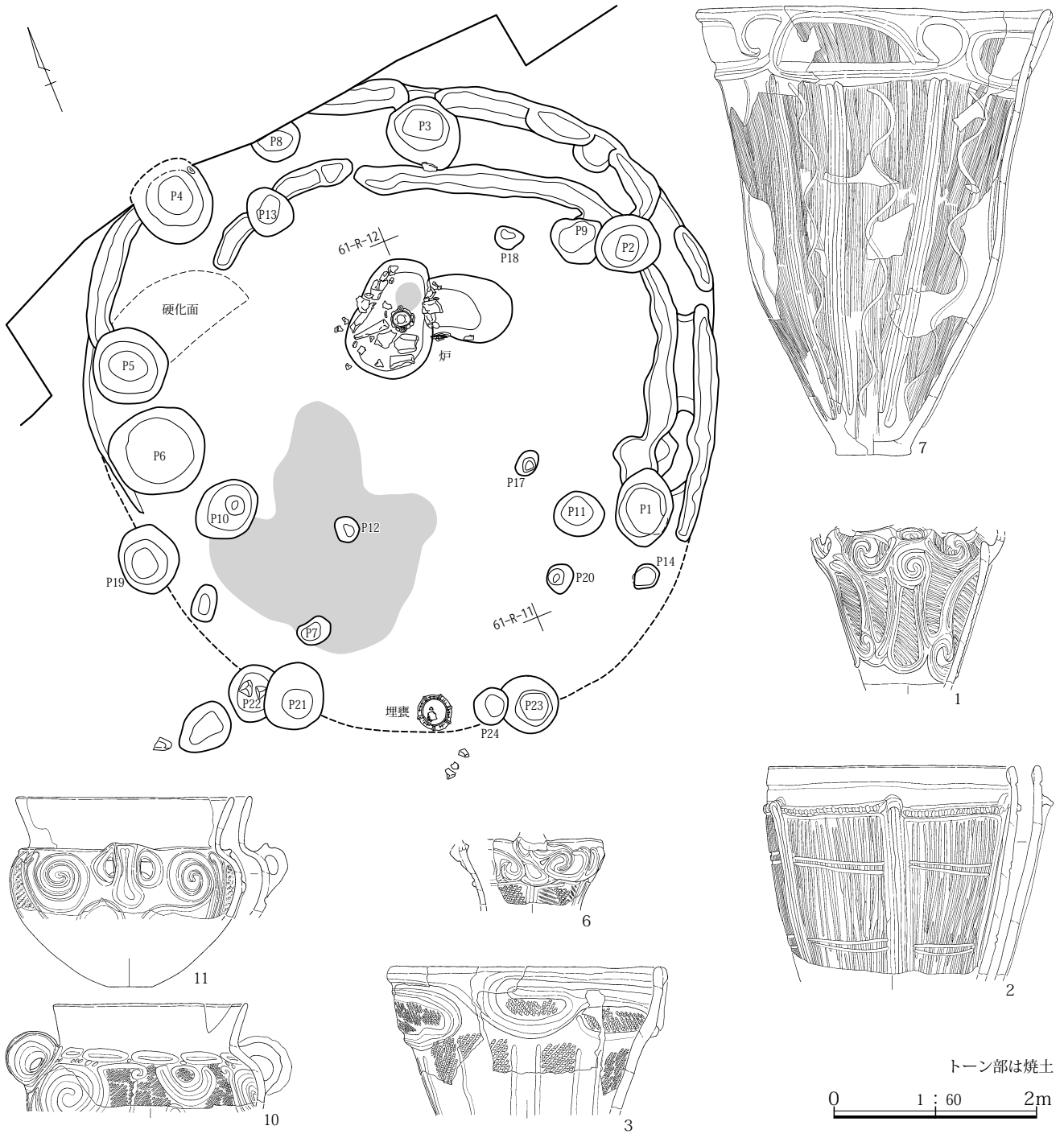
時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式古段階)と判断した。

61区2号住居跡 (第20～31図 PL. 2・41～46)

位置：1号住と同様に、調査区北東端で検出した。61区Q・R-10～12グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形を呈し、南西側にかけて強い傾斜が広がる。数軒の住居跡が一群をなし、南東側に1号住、3号住、西側に7号・20号住が重複、近接する。

経過：ローム漸移層で確認した。黒褐色～暗褐色土中での検出である。平面形確認時より出土遺物の広がりが見られ、住居跡の存在を予測して調査にあたった。床面

中央やや北側に炉跡を検出し、床面、柱穴平面形を検出するに至り、住居跡として調査を重ねた。その結果、北側では20.0cm規模の低い壁が検出され、南側は傾斜地形のため壁周溝も消失していた。しかしながら、壁自体、壁周溝は東西まで延びており、さらに南側部分には埋甕が確認され、これを出入口部埋甕として位置付けることによって、大まかな全体像が把握できた。なお、住居跡北隅は調査区域外に延びる。調査では事業地内で安全上問題の無い範囲で拡張調査を施したが、北隅端部の検出



第20図 61区2号住居跡 (1)

には至らなかった。

規模：北北東に主軸長軸を持つ、楕円状を呈する平面形である。平面規模は約(640.0)×615.0cm、深さは北壁周辺で20.0cmを測る。南側を逸するとはいえ、壁も安定しており、良好な遺存度といえよう。

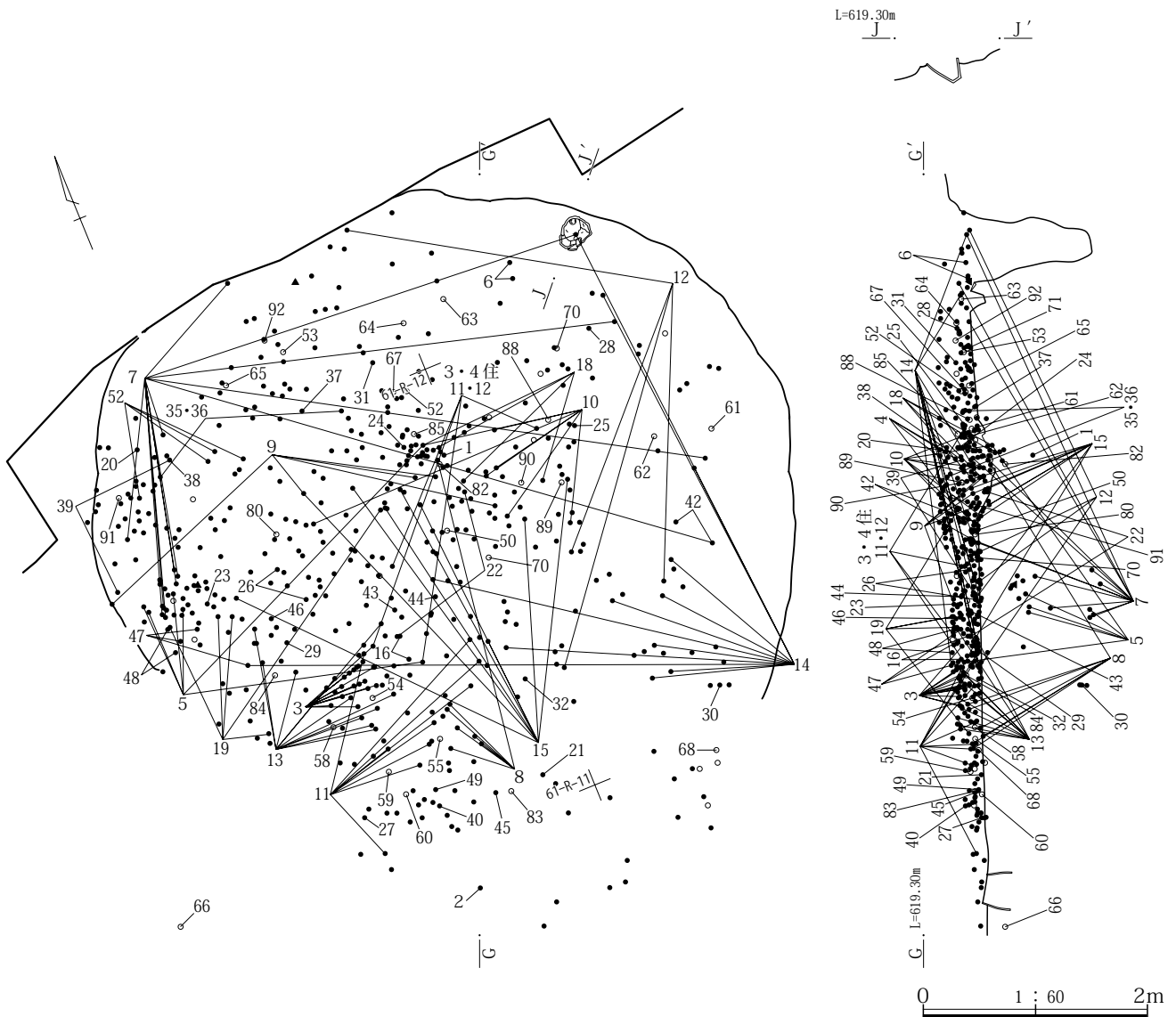
重複：先に述べたように、南東側に1号住、西に7号・20号住が重複する。土層の観察及び出土土器の様相からは、新旧関係の確定は果たせなかった。

床面：確認面はローム漸移層で、床面はローム層上層まで掘り込む。褐色土を基調とした貼り床状の床面が広がり、ほぼ平坦面を築く。硬化面は炉跡周辺及び北側壁際の一部に見るが、範囲は狭い。床下埋土としてにぶい褐色土～黄褐色土が充てられていたが、有機的な床下埋土ではなく、床面構築時の凹凸と捉えられよう。

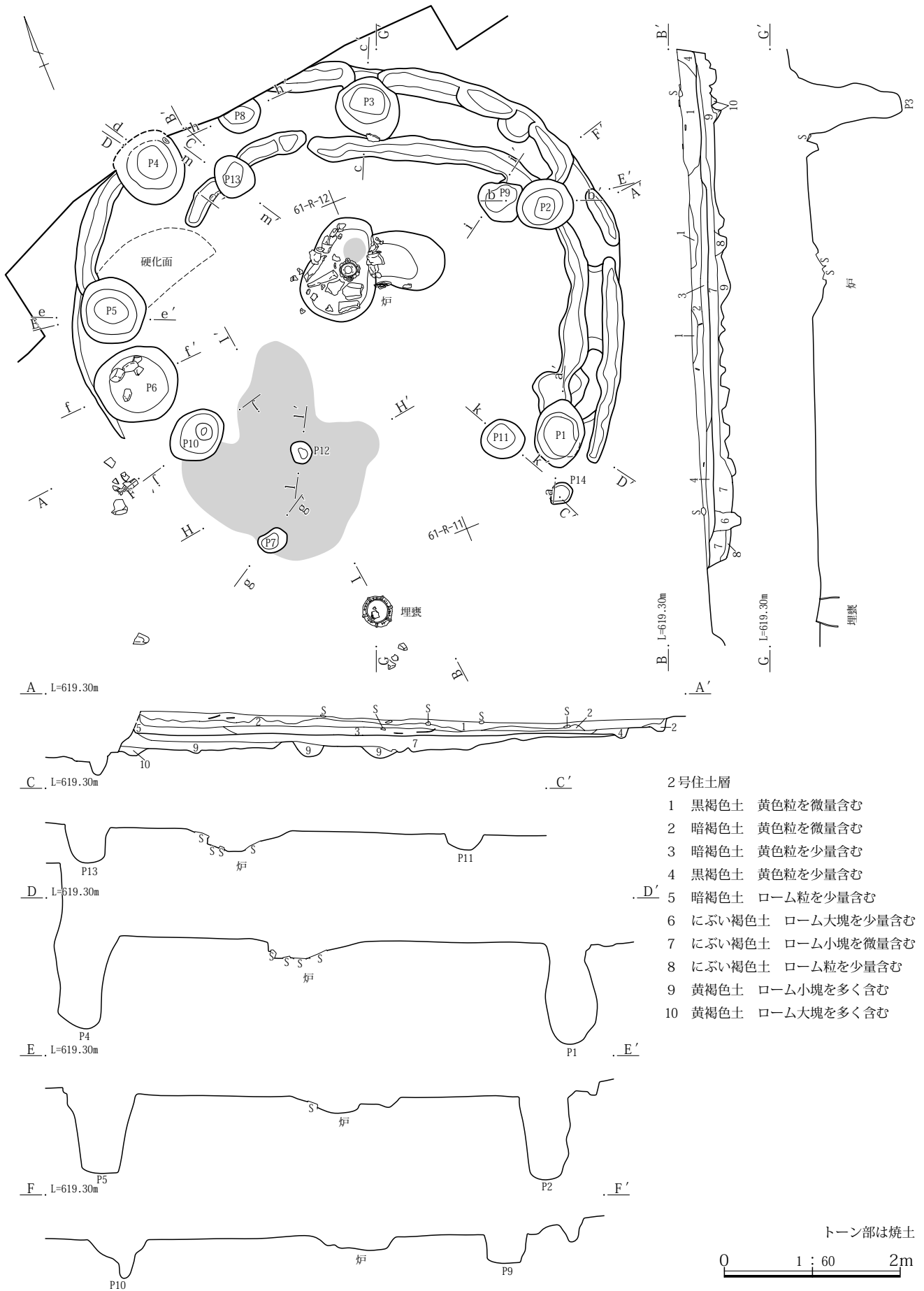
施設：重複した炉2箇所と、2条の壁周溝、24基のピット、埋甕1基を検出した。

炉跡：床面中央北寄りに重複する炉跡を確認した。主となる新しい炉は、不整楕円状を呈する石囲い炉で主軸長軸を北東に向ける。軸長119.0×76.0cm、深さ53.0cmを測る。東西辺及び南辺に角礫により石囲いが設けられ、底面中央に炉体土器(1)が据えられていた。埋土は褐色土～にぶい褐色土を主体としていたが、焼土や炭化物は少量の含有に止まる。

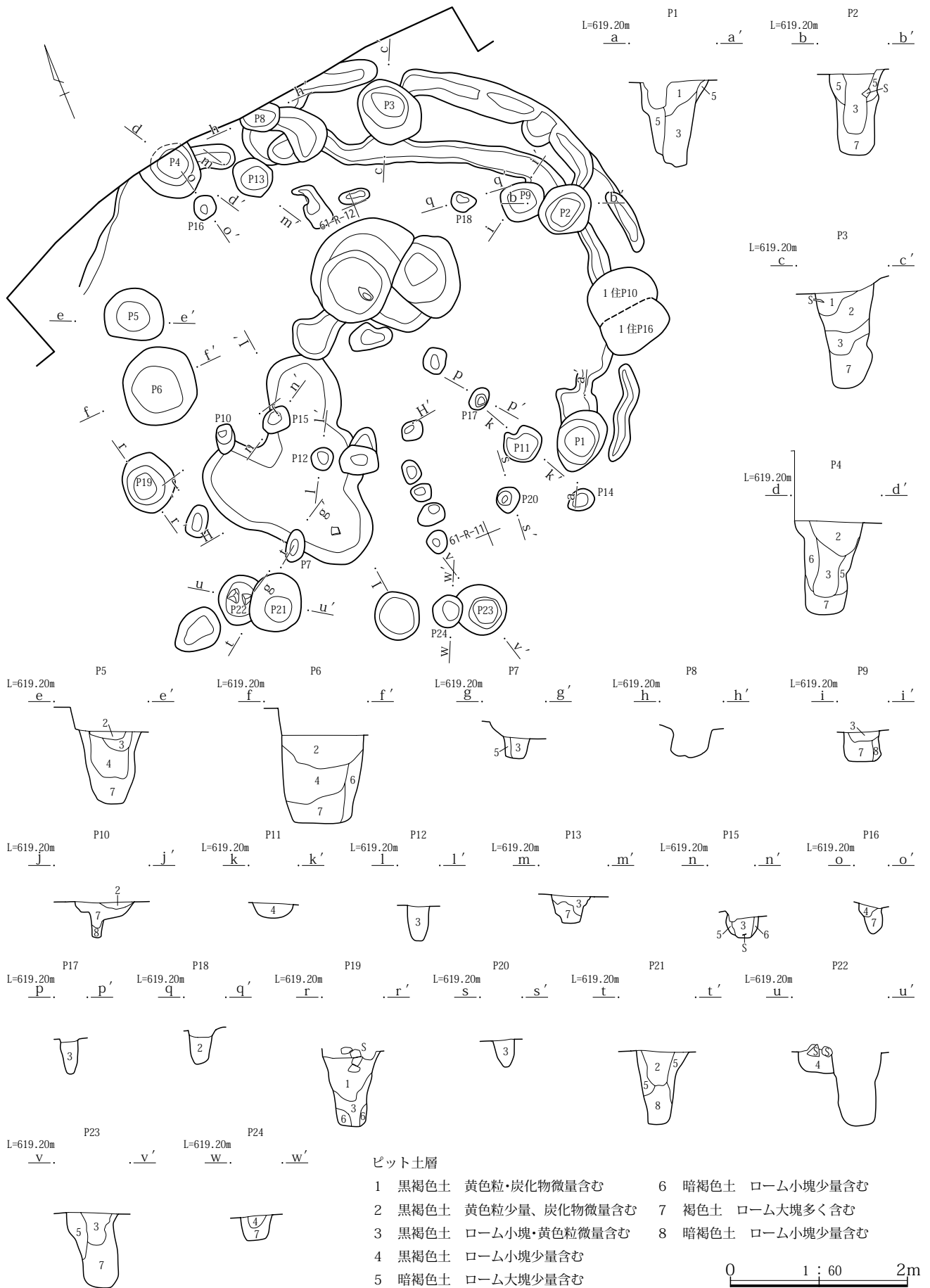
旧炉というべき掘り込みが石囲い炉東に近接して検出されたが、土層による新旧は明瞭ではない。ただ、炉石の並びを尊重すると、新旧関係に妥当性が保たれ、旧炉としての位置付けとなる。少量の焼土粒を含む褐色土を埋土とする。



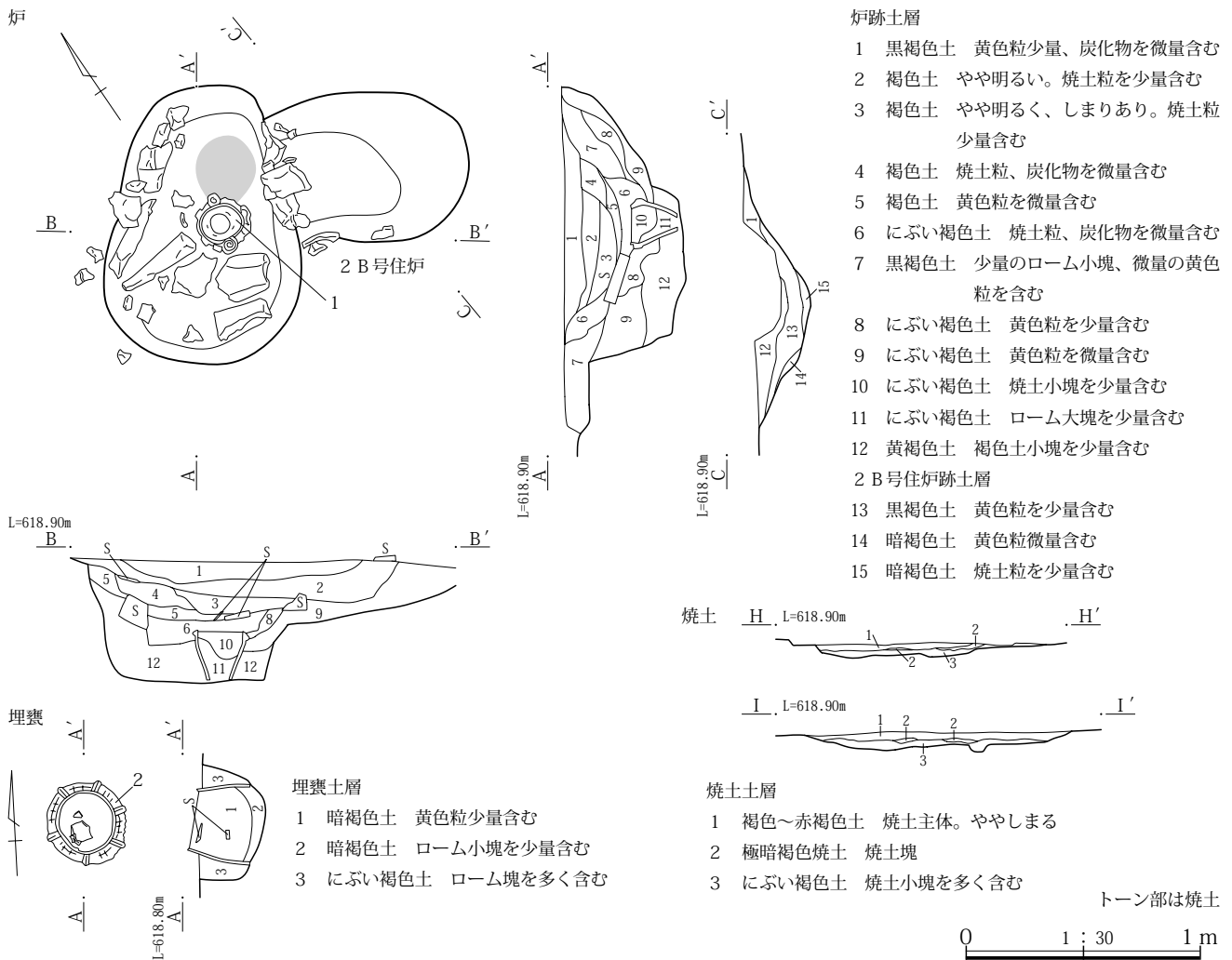
第21図 61区2号住居跡(2)



第22図 61区2号住居跡 (3)



第23図 61区2号住居跡 (4)



第24図 61区2号住居跡 (5)

埋 葬：推定南側壁際に円形の掘り込みを伴った逆位の埋 葬 (2) を検出した。おそらく出入口施設としての位置付けが妥当であろう。体部下半を欠失し、平縁を下位に設けた埋 葬である。

壁周溝：北側壁際から東西壁際にかけて内外2重の壁周溝を見る。南半への走行を見ないが、埋 葬確認面が保たれたレベルを考慮すると、斜面地形による流失、逸失とは捉え難く、住居構築時より南半には壁周溝は設けられていなかったと考えられよう。あるいは床面構築土における黒褐色土の堆積のため、確認できなかった要素も控えておきたい。北側で顕著な内外2重の走行は、同一住居内における拡張と捉えるべきであろう。おそらく、重複する炉跡も拡張痕跡の一部と判断できよう。

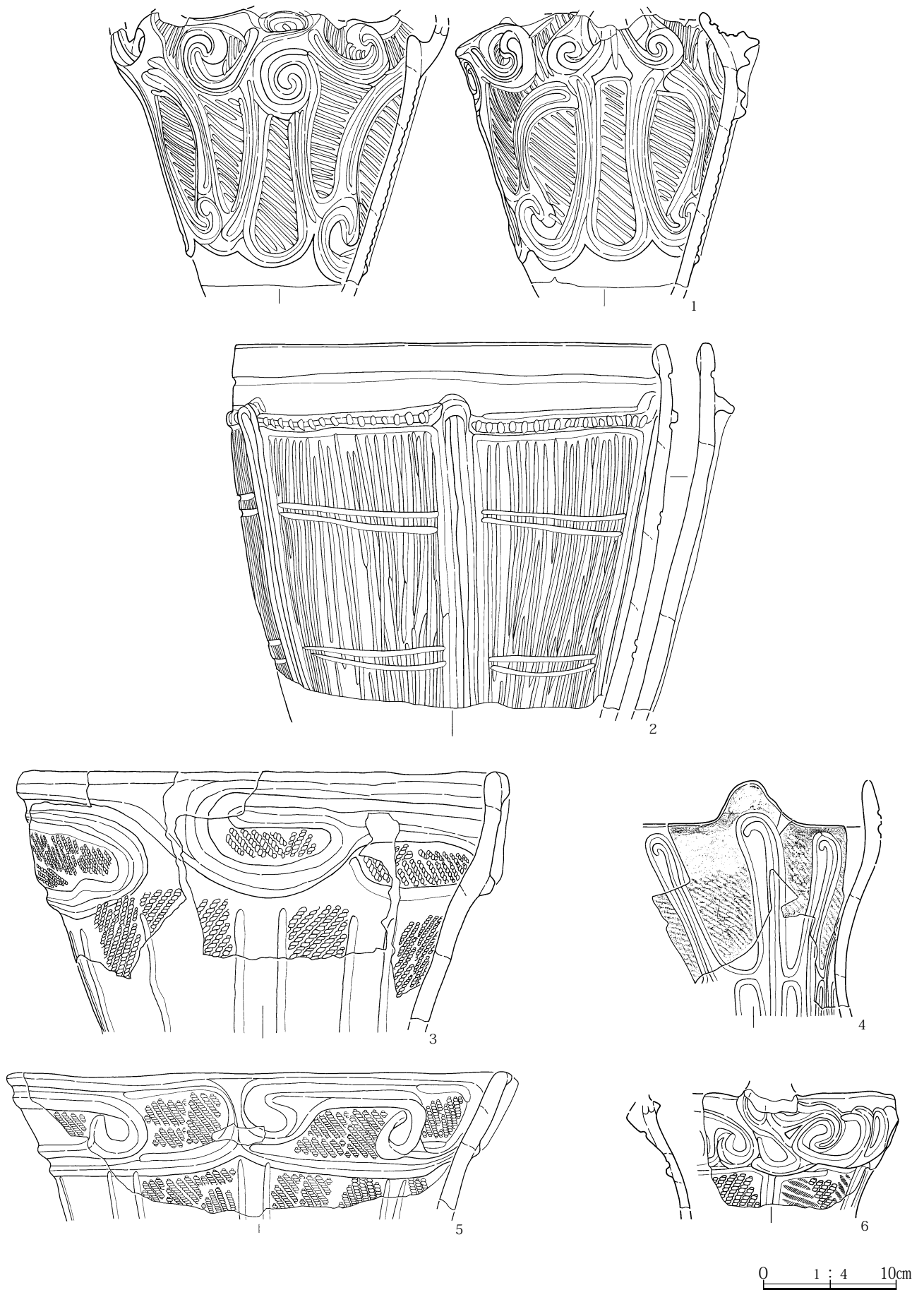
柱 穴：床下調査で得られた小ピットなどを併せて24基のピットを記録したが、柱穴としての位置付けはP1～P6、P19、P21～P23が、規模、配置から妥当性を帯びる。P3が奥壁の柱穴、P21、P23が出入口部を構成する柱穴と

捉えられよう。

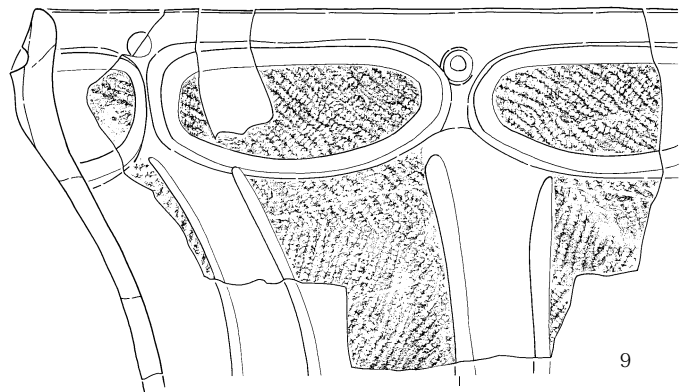
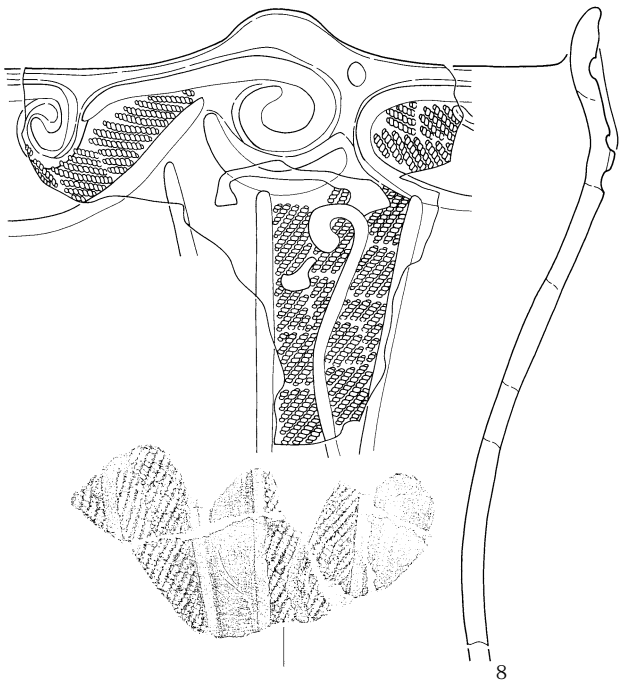
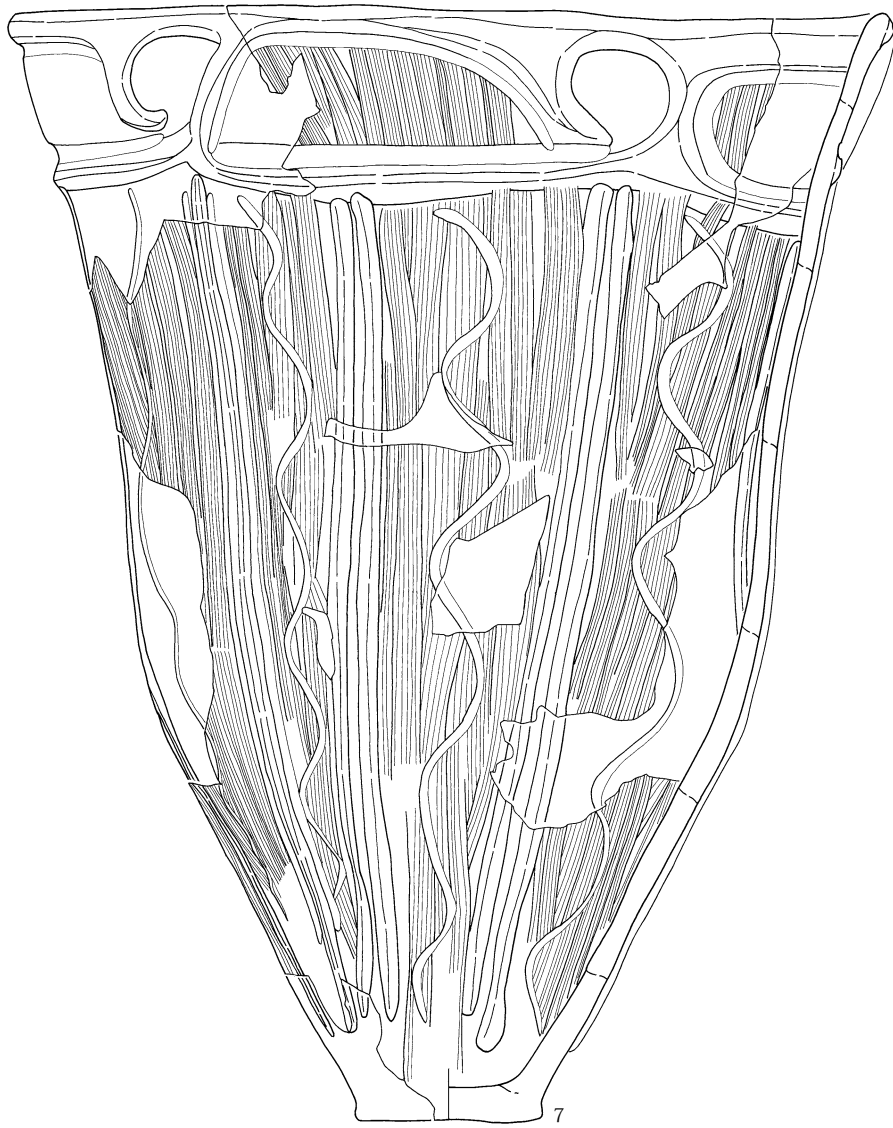
焼 土：床面南西部に薄く焼土の広がりを見た。床下調査において、対応する箇所に掘り込みが検出されたことから、焼土を堆積する施設として位置付けられよう。炉内に焼土が少なかった事例からも注意を要する。

遺 物：前述の炉内土器と埋 葬以外に、加曽利EⅢ式土器深鉢 (3～9)、壺 (10～12)、「郷土式」深鉢 (13～32) を見る。石器も石鏃 (50・51)、石錐 (52・53)、打製石斧 (54～59)、石匙 (60)、礫石器類 (61～66) と多様性に富む。特殊な儀礼具などを見ないが、まとまりのある良好な一括資料と判断できよう。

所 見：拡張住居である。2重の壁周溝と重複する炉跡にその要素を見るが、柱穴配置、出土土器様相を見るに、大きな時期差を見出せない。おそらく柱穴配置を大きく変えずに、一居住時間内での拡張行為と考えることができよう。時期は炉内土器、埋 葬などから中期後葉中～新段階と判断した。



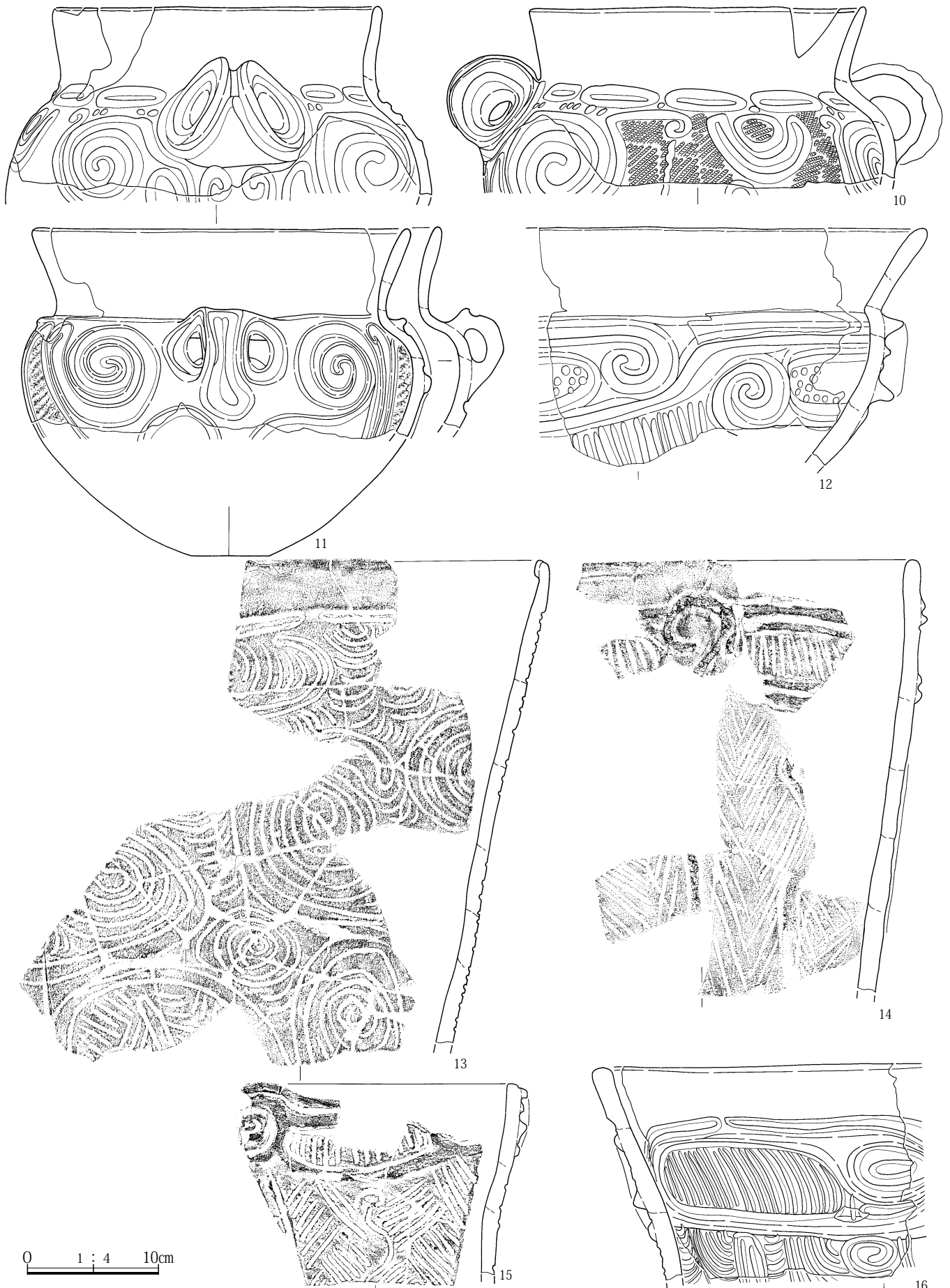
第25図 61区2号住居跡出土遺物(1)



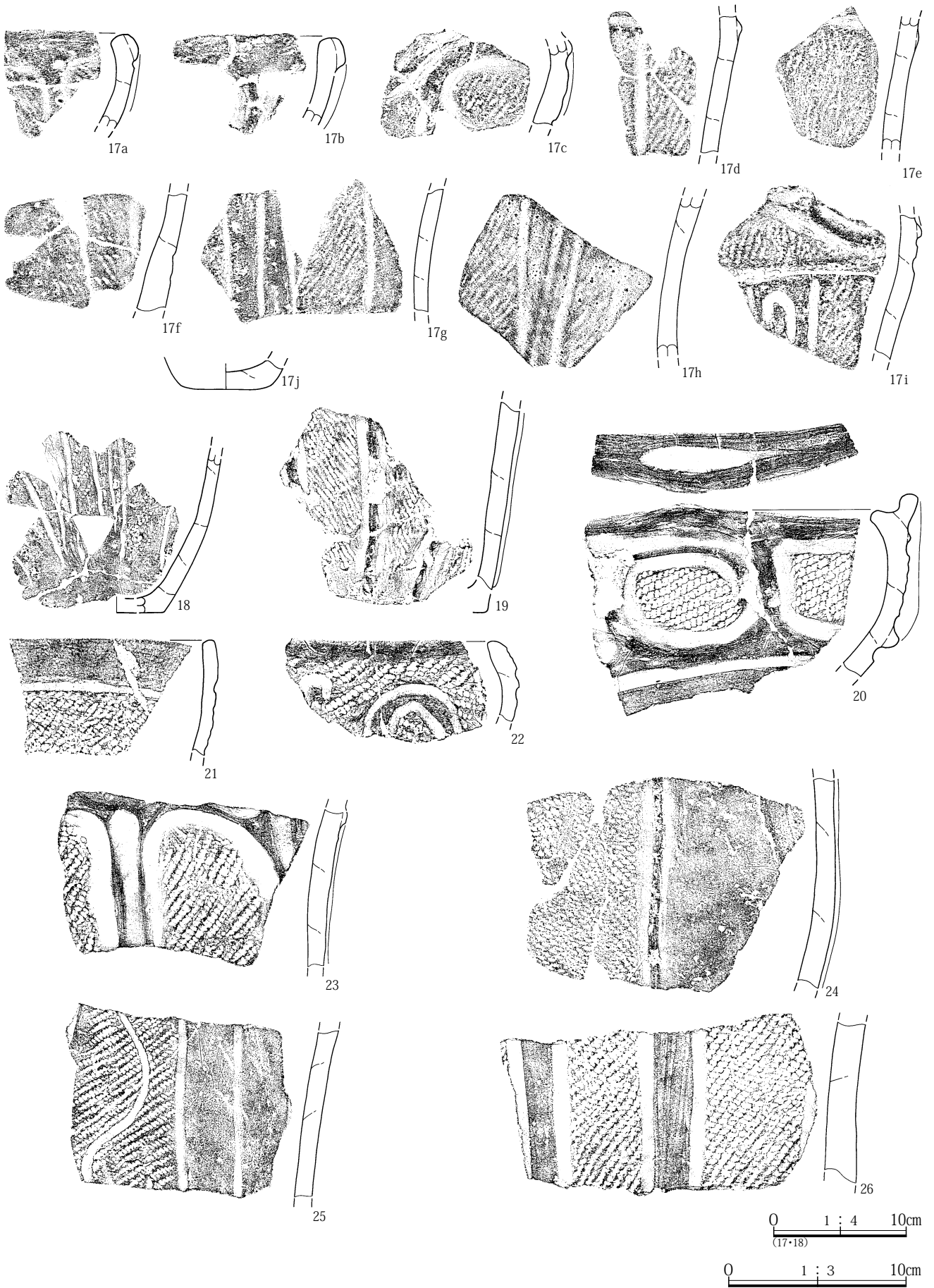
0 1 : 4 10cm

第26图 61区2号住居跡出土遺物(2)





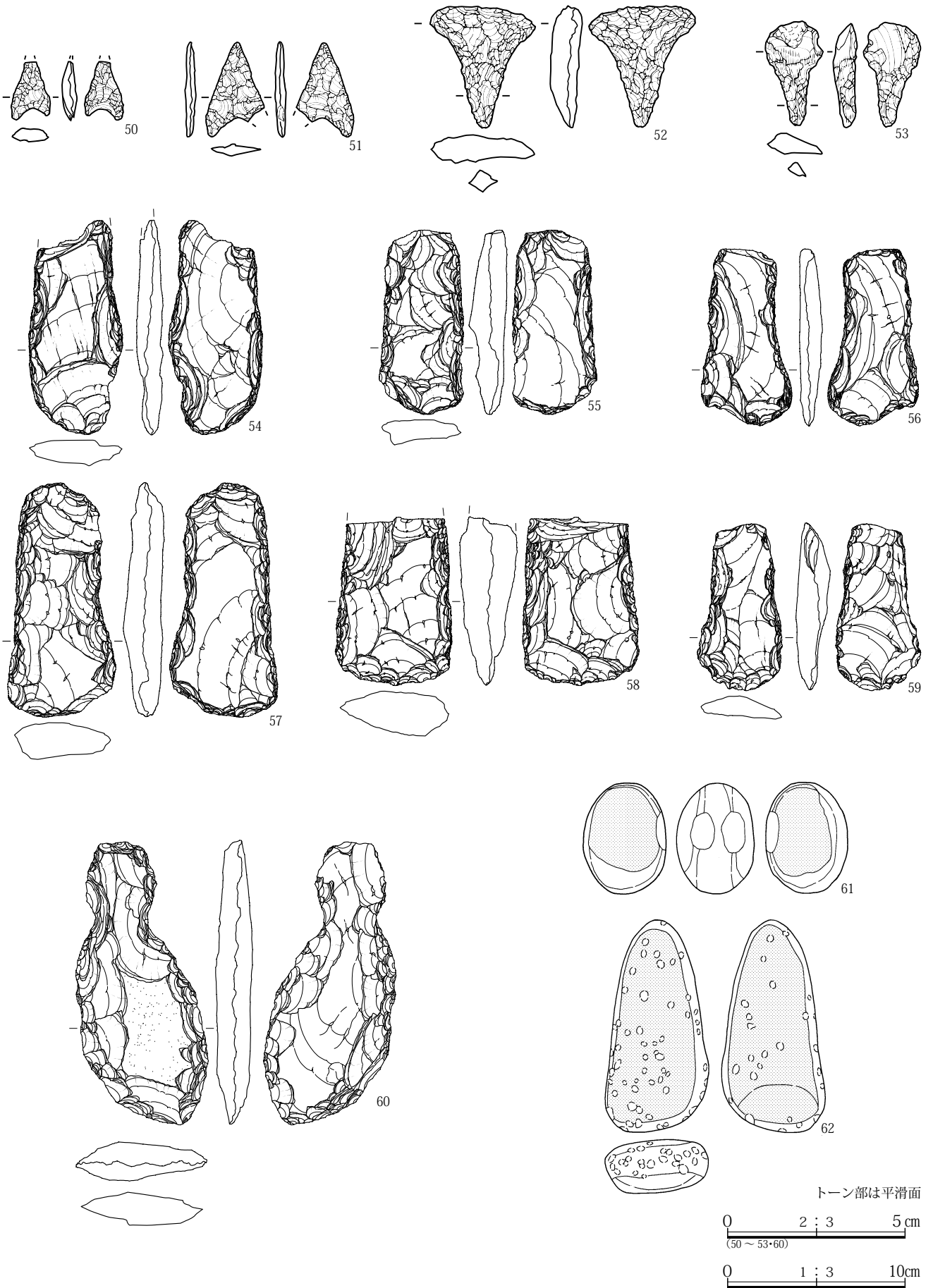
第27図 61区2号住居跡出土遺物(3)



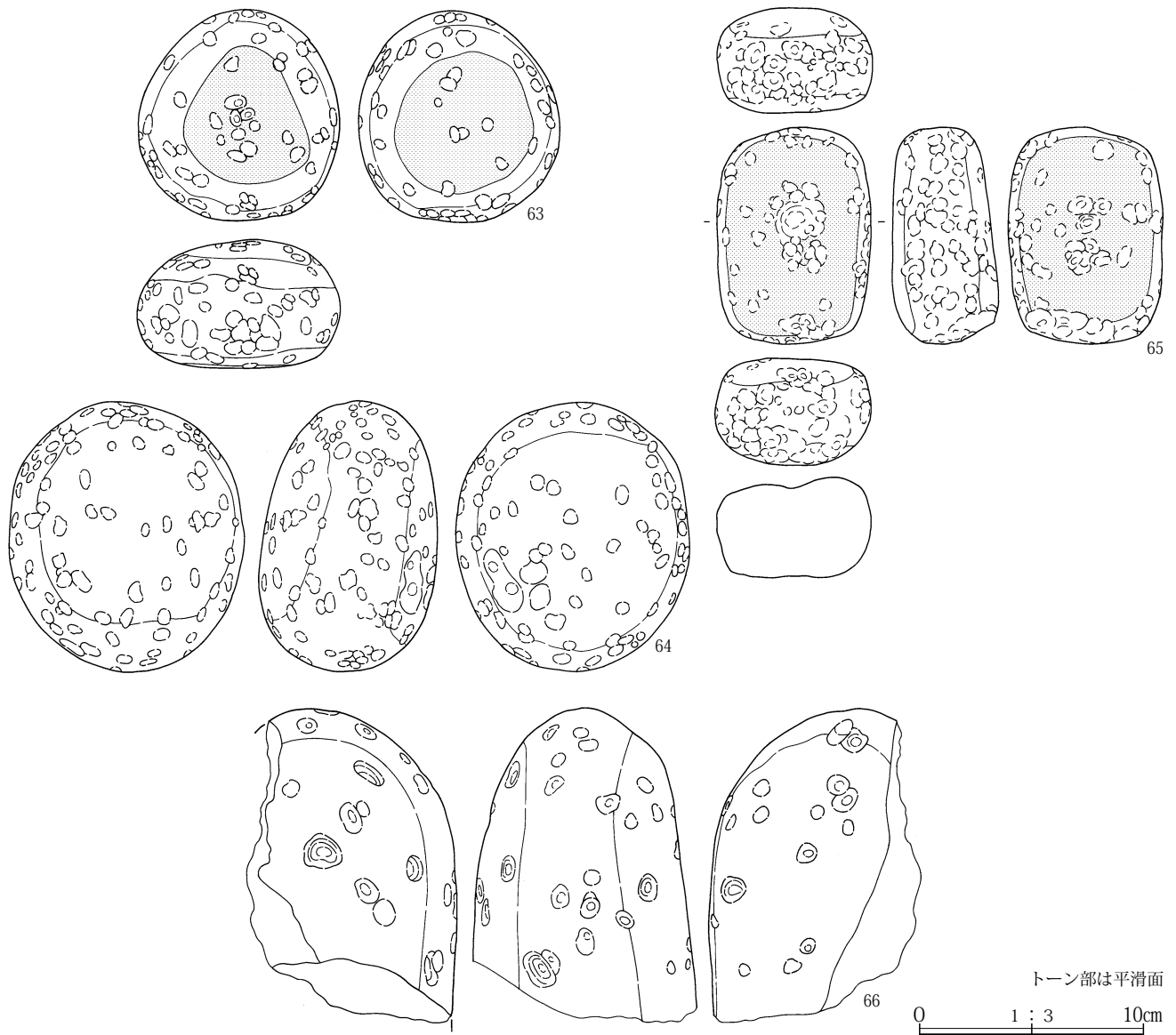
第28図 61区2号住居跡出土遺物 (4)



第29図 61区2号住居跡出土遺物(5)



第30図 61区2号住居跡出土遺物 (6)



第31図 61区2号住居跡出土遺物(7)

61区3号住居跡(第32～37図 PL. 3・46～49)

位置: 1・2号住と同様に、調査区北東端で検出した。

61区P・Q-8～10グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形を呈し、南西側にかけて強い傾斜が広がる。特に本住居跡南西部は傾斜が顕著で、そのため調査着時の平面形の把握に困難が伴った。周辺は7号・20号住、2号住など数軒の住居跡が重複、近接し一群をなす。本住居跡自体も2軒の住居の重複で、北側で1号住や10号住と重複し南西部で4号住が重なる。

経過: 1号住居跡調査中に、新たにローム漸移層下位で確認した。遺物の出土が著しく、特に中央部分から南西側にかけて、土器等の出土が集中した。さらに精査を重ね、炉跡を2基検出することになり、3A号住、3B号住とした重複住居として位置付けた。さらに、南西部

の遺物集中部分に新たに小型の竪穴状遺構が検出され、これを4号住居跡として調査に加えた。このように重複遺構に対し分別調査を施したが、遺物に関しては出土地点を詳細に記録化しても混在することになり、整理段階では一括した報告になった。ご容赦願いたい。

規模: 3A号住は北西側が強い斜面地形のため逸失し、詳細な平面形は確認できないが、主軸長軸を北西に向けた不整楕円状の平面形を呈す。平面規模は約(560.0)×(590.0)cm、深さは約32.0cmでやや浅い遺存度といえよう。3B号住は3A号住の北東側に重複しており、長軸長約5.4mの不整楕円状を呈する平面形と思われる。深さは約25.0cmでこちらもやや浅く、床面は3A号住との差は見られなかった。

重複: 住居跡内で3軒の住居跡が重複する。さらに、

北側で1号住と10号住居跡が重なるが、いずれも、新旧関係は判然としない。さらに、土坑として37坑、38坑が南側で重複し平面形の乱れを生じさせている。

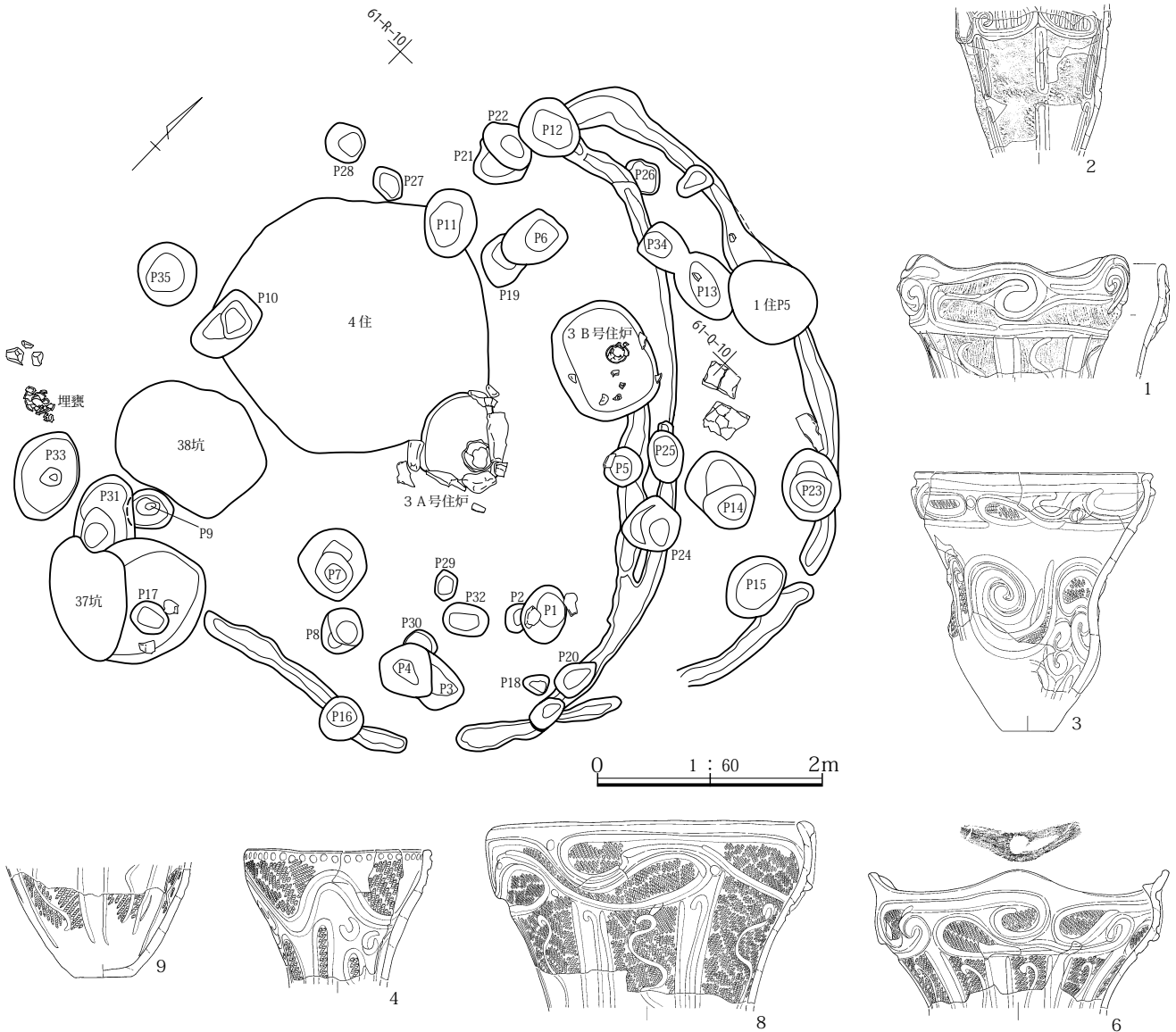
床 面：ローム漸移層下位である褐色土を地床とする。平坦面を築くが僅かながら南西への傾斜が認められる。地形に影響されたものであろう。硬化面は3A号住炉周辺に顕著に見られた。

施 設：3A号住炉、3B号住炉を見る。また、3A住南端に埋喪1基が検出されている。壁周溝は西側には見られないが、その他の壁下で確認され北壁から東壁にかけて2重の走行が見られた。外側を3B号住、内側を3A号住の壁周溝と捉えられた。柱穴は多量のピットを確認している。35基を記録した。

炉 跡：3A号住炉は、床面ほぼ中央で4号住との重複

部分で検出された。おそらく4号住が新しく、東側が逸失する形態である。主軸方位は北西を向き、規模は約90.0×86.0cmを測る長方形を基調とする平面形で4号住重複部分以外は石囲いが残る。大型の角礫を主体に、垂円礫を混在させる。深く、約40.0cmを測るしっかりした掘り込みを呈する。炉内は焼土塊を含む黒褐色土を埋土とし、東隅底面に深鉢口縁部～体部上半(1)が正位で据えられていた。被熱痕跡は顕著では無く、埋設された使用状態が想起されよう。

3B号住炉は3A号住炉北側約1.2mに位置する。102.0×82.0cmの方形を平面形とする地床炉で、主軸は西北西を向く。深さは約31.0cmで皿状の断面形を呈すが、掘り込みはしっかりしている。埋土は黒褐色土が主体だが、焼土の堆積は少量で、3A号住炉と対照的である。



第32図 61区3号住居跡(1)



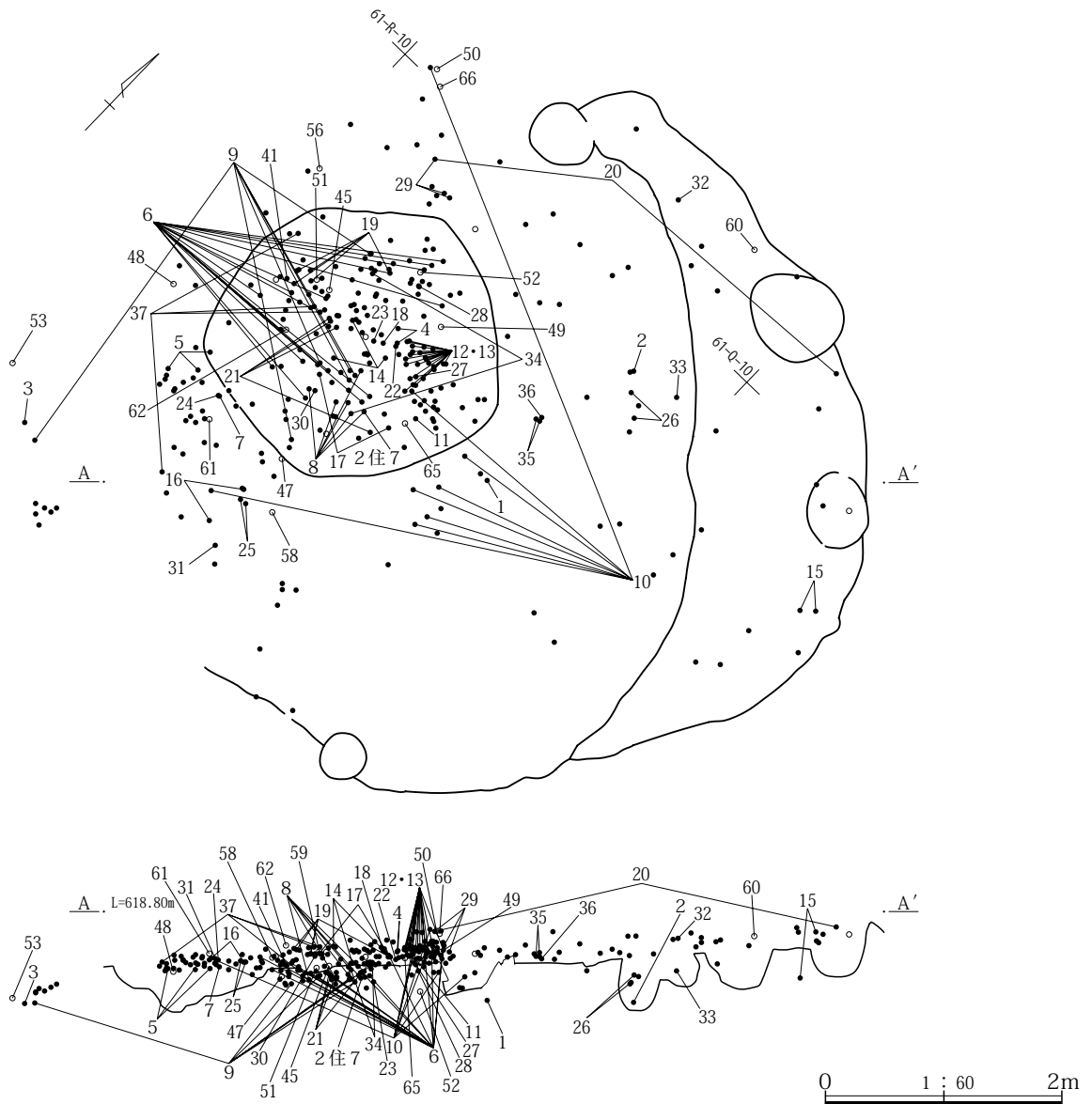
底面ほぼ中央に深鉢体部(2)が正位に据えられていた。こちらは上半に被熱痕跡が顕著に見られ、露出した状態での炉内燃焼が行われていたようだ。炉石の抜き取り痕等が認められないため、確定的ではないが、3A号住炉が石囲い炉という要素から、3B号住炉を古く位置付けておきたい。2軒の住居跡重複による炉の在り方と捉えられる。

埋 葬：3A号住南端で調査した。深鉢口縁部～体部下半が破片状態で、不整楕円状の土坑上層にまとまって出土した(3)。口縁部を上にした正位で埋設されていたが、周辺に散乱した状態での出土であり、出入口部の埋葬とは様相を異にする。加えて検出された箇所も出入口部ではなく、いわゆる出入口部埋葬としての位置付けはできない。加えて、推定住居跡範囲を設定しても、その範囲

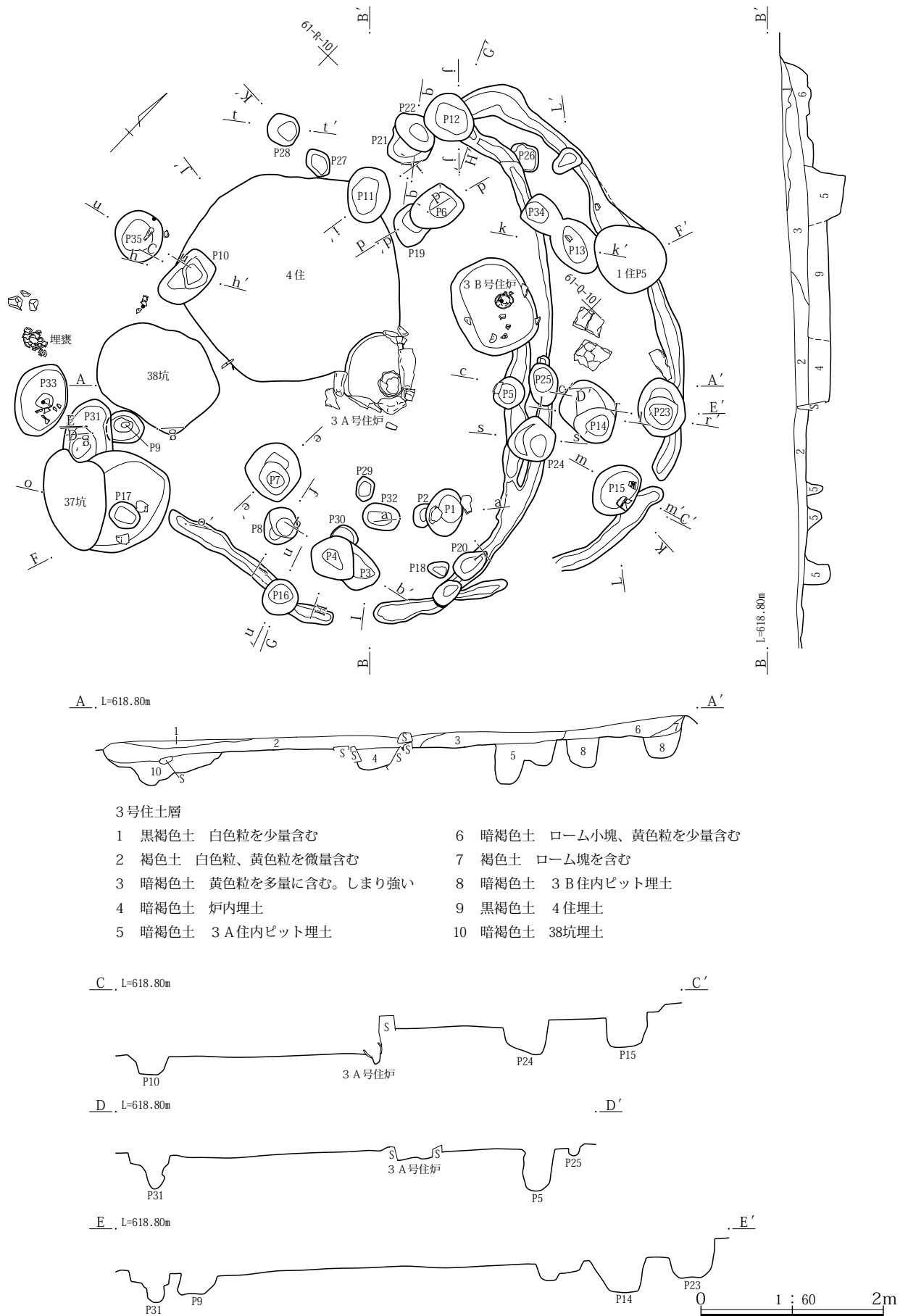
に含まれる位置では無い。調査では、3号住埋葬として扱われているため、ここでは、住居内の埋葬として報告するが、埋設土器としての位置付けが妥当であろう。出土土器の様相も、先に挙げた炉内土器よりやや新しい様相を示す。用途、性格は不明である。

壁周溝：3A号住の壁周溝は、北側から東側にかけて良好な走行が見られるが、西側では確認できなかった。おそらく、傾斜地形に要因が求められる。また、東壁際も一部壁周溝が途切れる箇所が認められた。さらに、南東壁周辺はやや突出する形状で走行しているが、こちらも僅かな範囲で途切れが認められる。東壁の途切れは性格が不明だが、南東壁下の途切れは、出入口部の存在を示唆する。

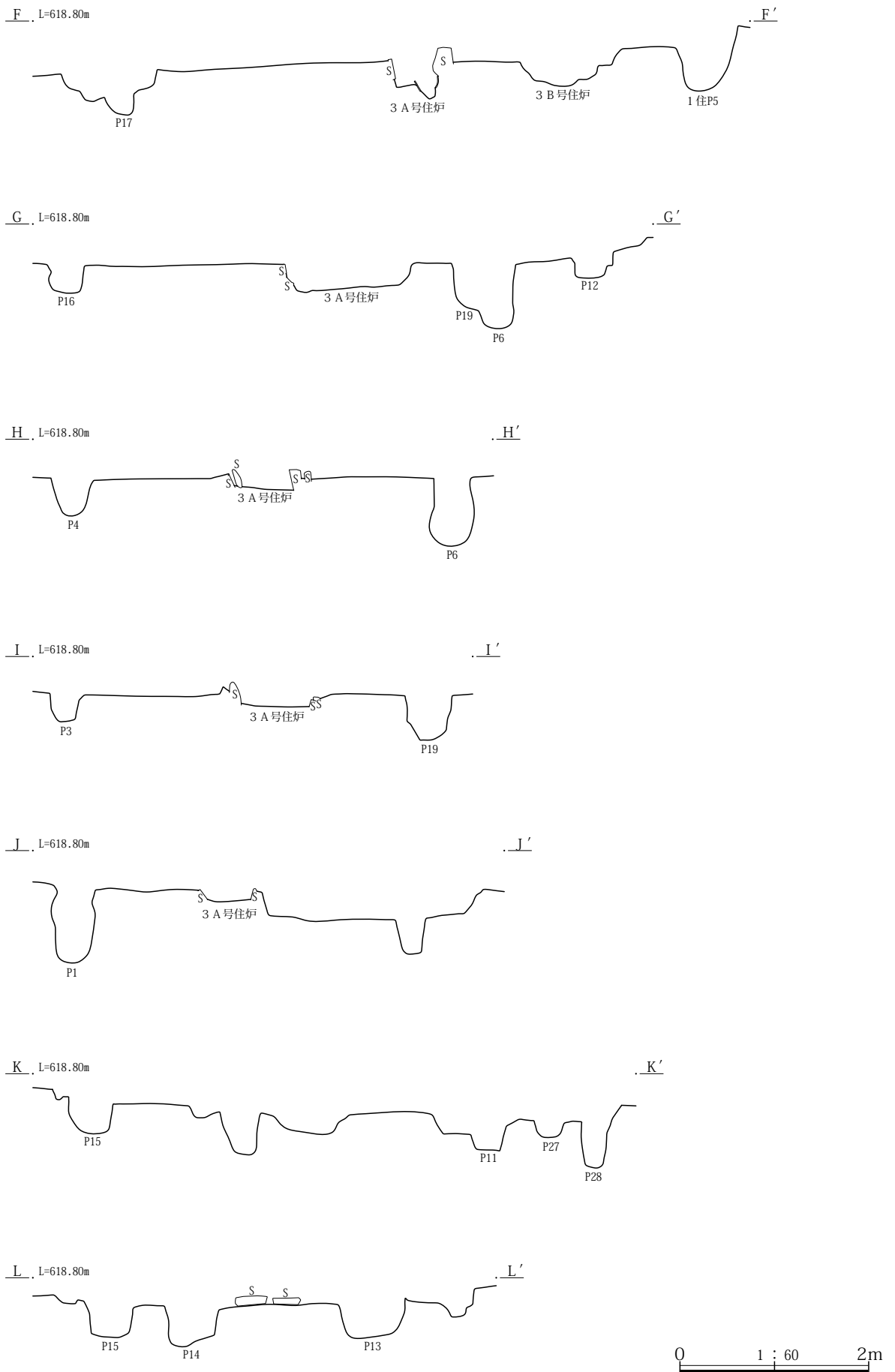
3B号住壁周溝は、3A号住北側から東側で確認され



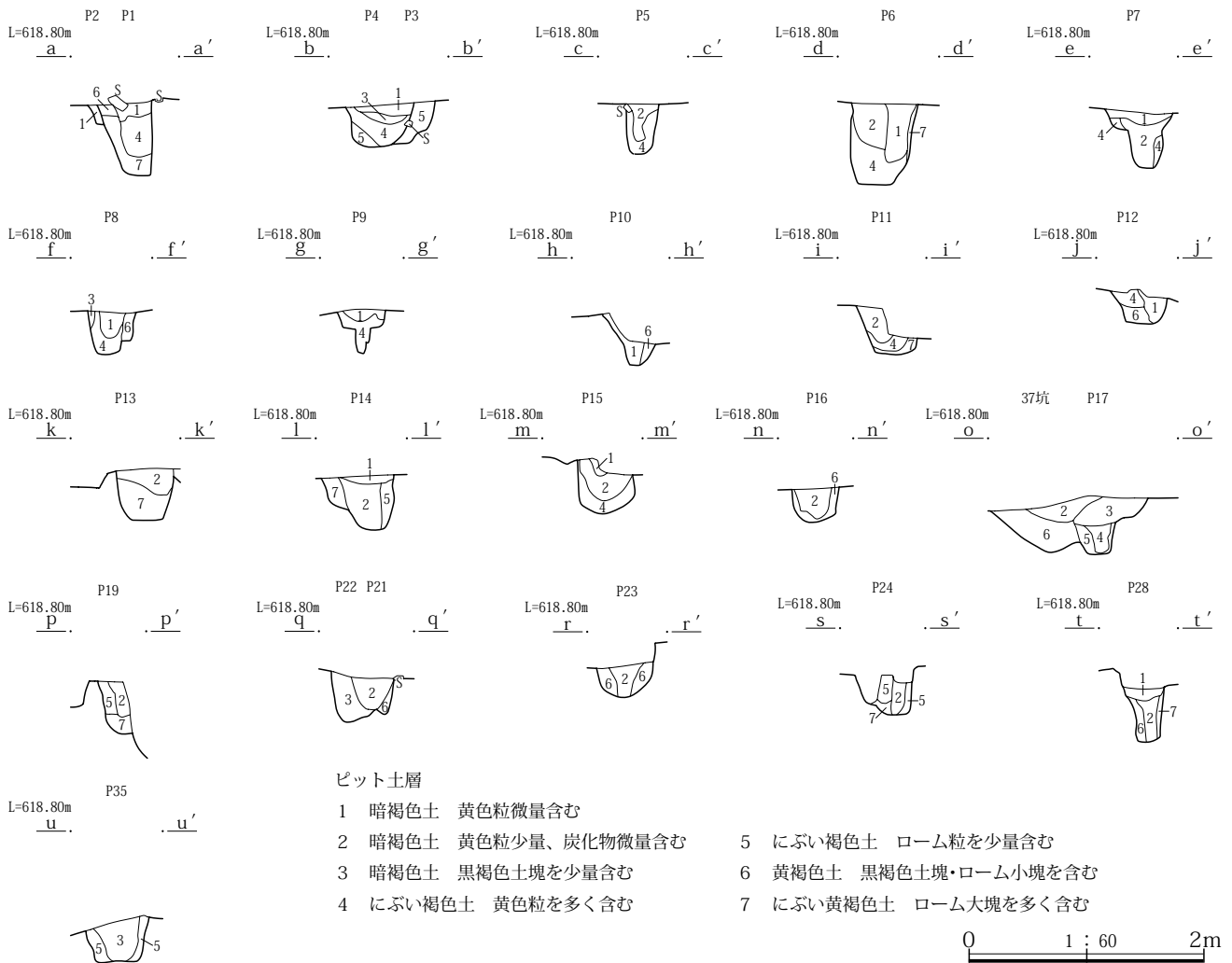
第33図 61区3号住居跡(2)



第3章 発見された遺構と遺物



第35図 61区3号住居跡(4)



第36図 61区3号住居跡 (5)

ている。3 A号住との重複のため、西半は不明だが、3 A号住に比して、やや西に傾けた走行を示していた。これは、3 B号住炉も同様の傾向を示しており、3 B号住→3 A号住の変遷で主軸の変化が行われた例として捉えておきたい。なお、3 B号住壁周溝も南東壁周辺で途切れが見られる。出入口部を想定する例と考えたが、主軸状に乗らず、問題もある。検討を要する。

柱 穴：床面上から壁際にかけて多量のピットが検出されている。重複する3 A号住と3 B号住の柱穴が混在化した様相と判断できよう。調査では特に2基の住居跡柱穴を分別していなかったが、整理段階で住居跡毎の柱穴を配置から推定した。その結果、3 A号住に帰属し得る柱穴として、P21・P22、P28、P35、P9、P16、P20、P25、P34、P11、P8、P1・P2、P5に可能性を求めた。奥壁柱穴に相当する好例は見られないが、P11が主軸線上に乗る配置を示す。また、出入口部の柱穴としては、P1・P2、P20—P8、P16が相当すると思った。一方3 B号住柱穴としては、P12、

P10、P7、P3・P4、P15、P23、P13、P6、P14を充てた。奥壁柱穴としては、位置的にはP12だが、規模としてはP6が深さ70.0cmを測り、良好な例といえよう。

61区4号住居跡 (第38～43図 PL. 3・46～49)

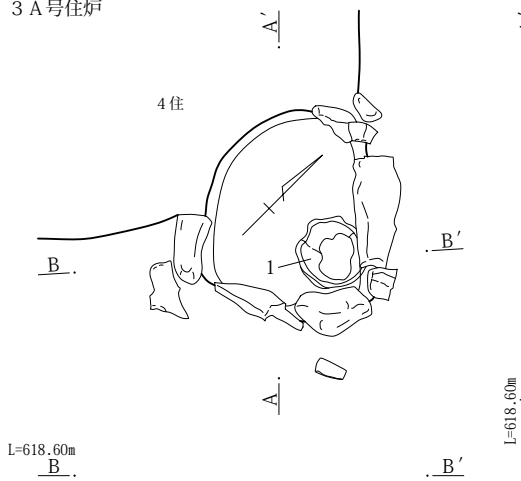
位置～経過：3 A号住炉西側と重複して調査された。61区Q-9グリッドに位置する。

炉跡西側の炉石が無いことから、本住居跡が3 A号住を切る新旧関係と考えられる。3号住調査中に新たな掘り込みが検出され、4号住居跡として調査された。小規模な住居跡であり、住居跡としての位置付けも問題となったが、床面中央やや北東寄りに炉跡が確認されたため、住居跡として位置付けた。

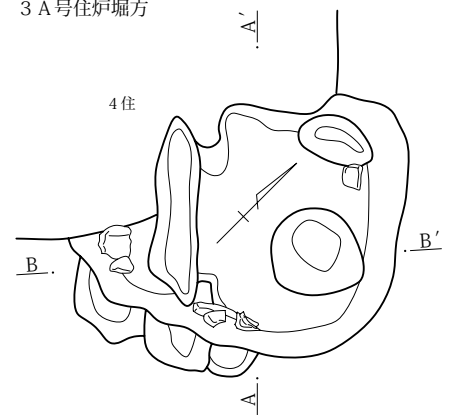
規 模：小型の住居跡で、平面形は不整円形で、約243.0×226.0cmを規模とする。深さは46.0cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかながら、掘り込みはしっかりしていた。遺存度は良好といえよう。

第3章 発見された遺構と遺物

3 A号住炉



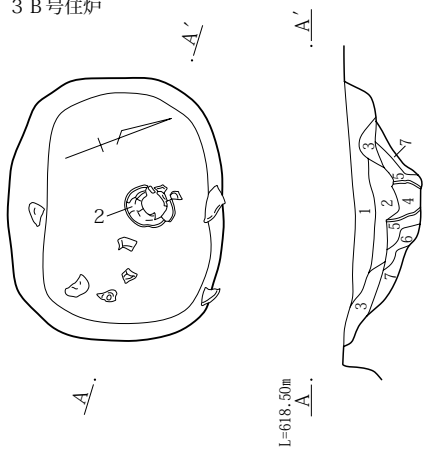
3 A号住炉堀方



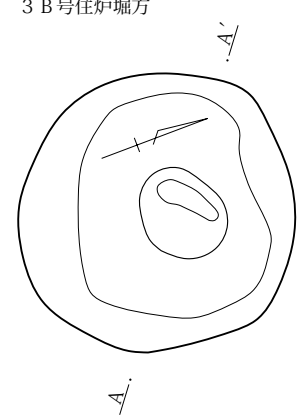
3 A号住炉跡土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を多く含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 焼土小塊を微量含む
- 4 暗褐色土 焼土小塊を少量含む
- 5 黒褐色土 白色粒を少量含む
- 6 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 7 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 8 灰褐色土 ローム小塊を少量含む
- 9 灰褐色土 ローム小塊・黒褐色土塊を含む

3 B号住炉

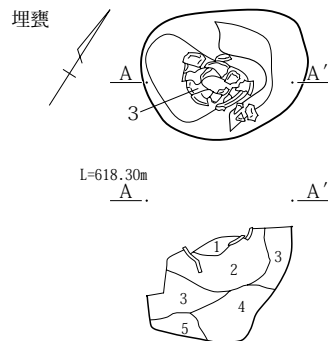


3 B号住炉堀方



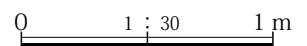
3 B号住炉跡土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒、黄色粒微量含む
- 4 暗褐色土 炉内土器埋土。焼土粒微量含む
- 5 黒褐色土 黄色粒少量含む。しまり強い
- 6 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を微量含む
- 7 赤褐色土 焼土化した粘質土。黄色粒含む

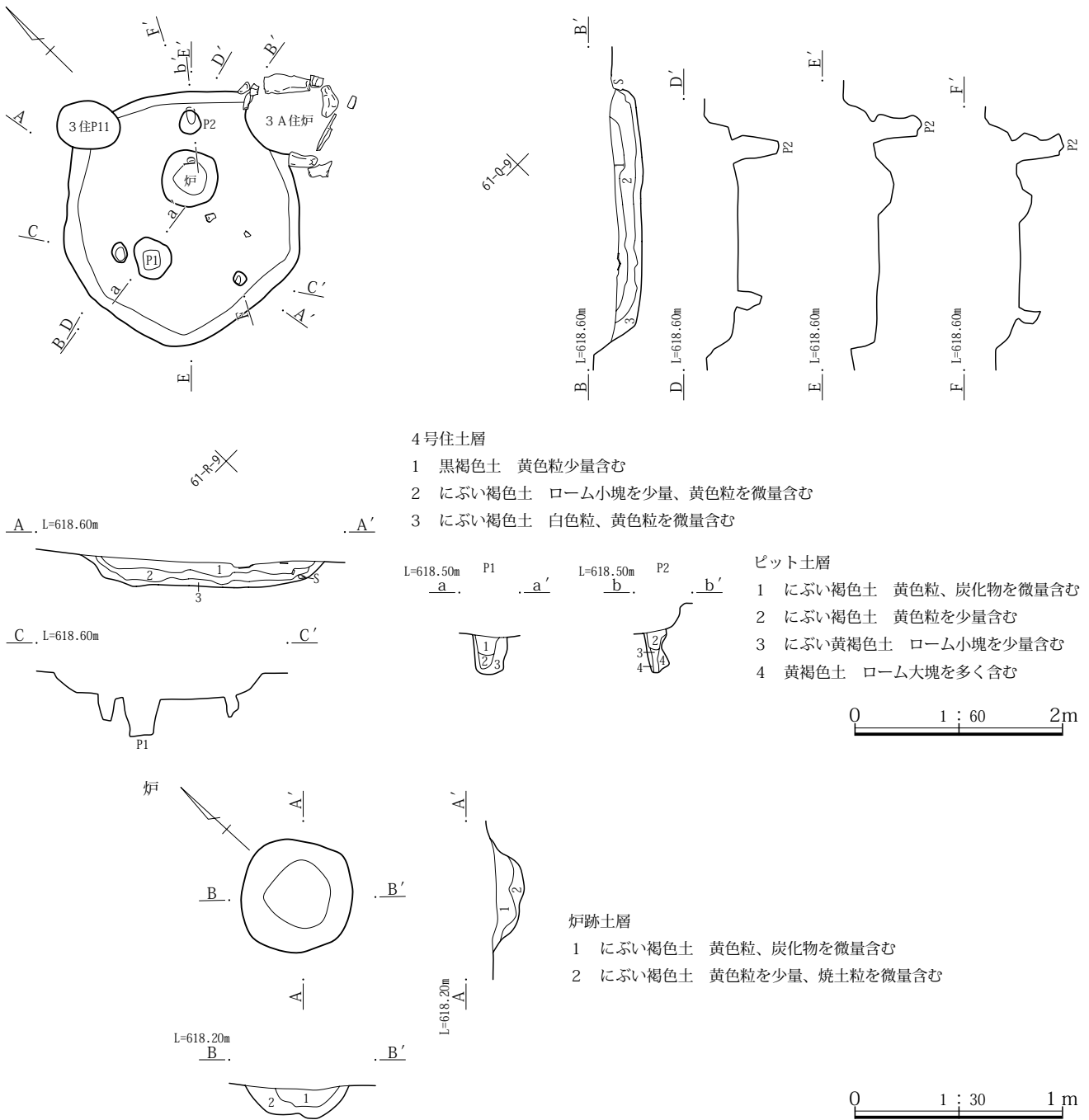


埋葬土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土 ローム大塊を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム大塊を少量含む



第37図 61区3号住居跡(6)



第38図 61区4号住居跡

重複：3 A号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。  
 床面：黄褐色ロームを地床とする。ほぼ平坦面を築き、硬化面も全面に広がる。良好な床面といえよう。  
 施設：床面中央やや東寄りに地床炉を見る。規模は52.0×51.5×17.0cmを測る小型の例である。焼土粒や炭化物を含むにぶい褐色土を埋土とする。柱穴としては、良好な配置を呈する例は無いが、床面上からはP1、P2が検出されている。なお、埋甕、壁周溝は無い。  
 遺物：ここでは、3 A号住、3 B号住、4号住の出土遺物を述べる。

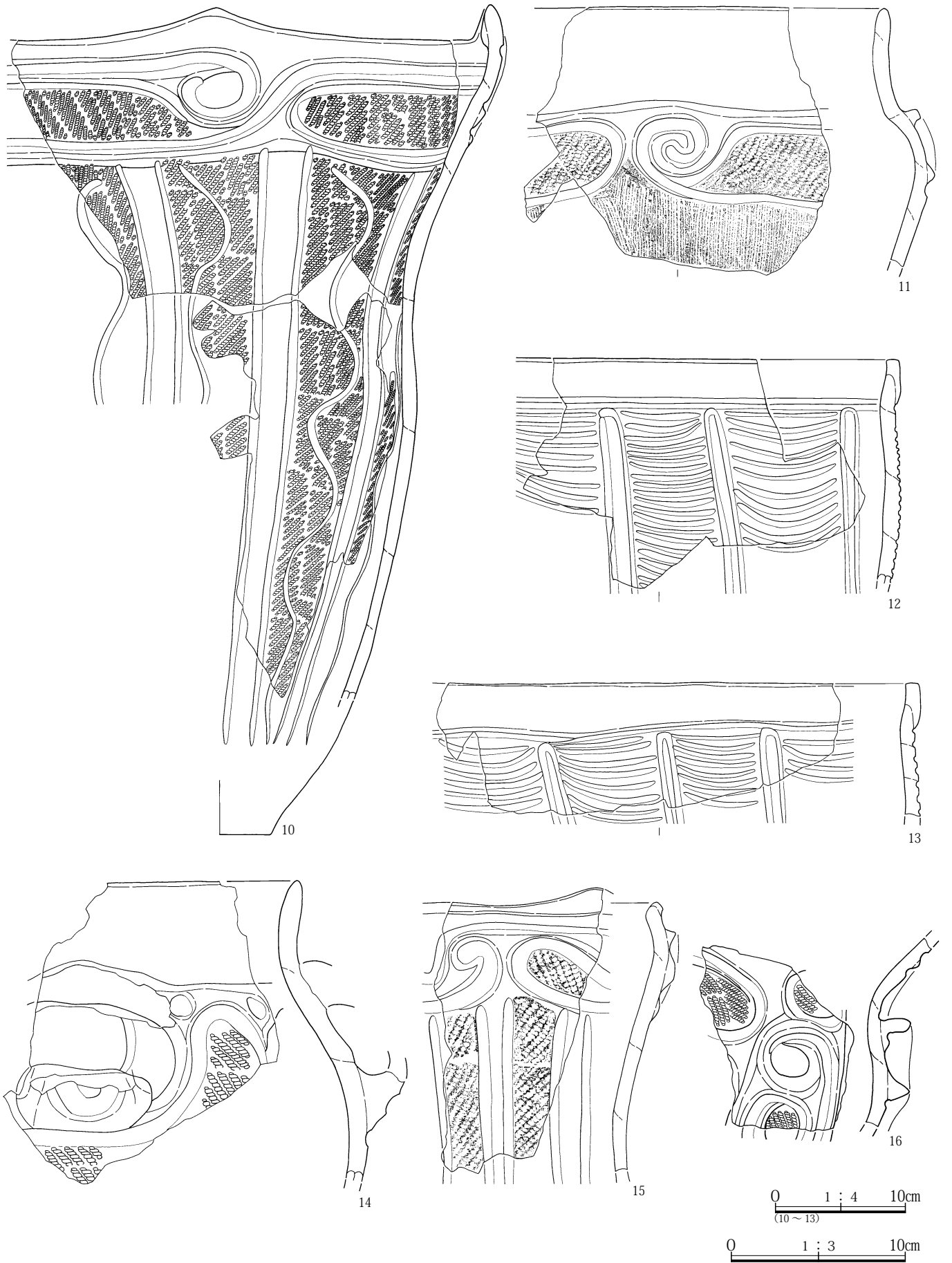
前述のように3 A号住と3 B号住との重複。さらに、4号住居跡の重複があり、調査時に出土地点の詳細な記録化を果たしたが、埋土中遺物は混在することになり、3軒の出土遺物を明瞭には分別できなかった。

その中で、3 A号住炉内土器(1)、3 B号住炉内土器(2)が確定的な出土状態といえよう。1は加曾利EⅢ式、2は加曾利EⅡ式と捉えられ、大きな時期差を見ることができる。また平面的な出土地点から推定すると、4号住出土遺物は、4・6・8・9・11～14・17～19・21～23・28・30・37・41・45・49・51・52・65などが挙げられる。

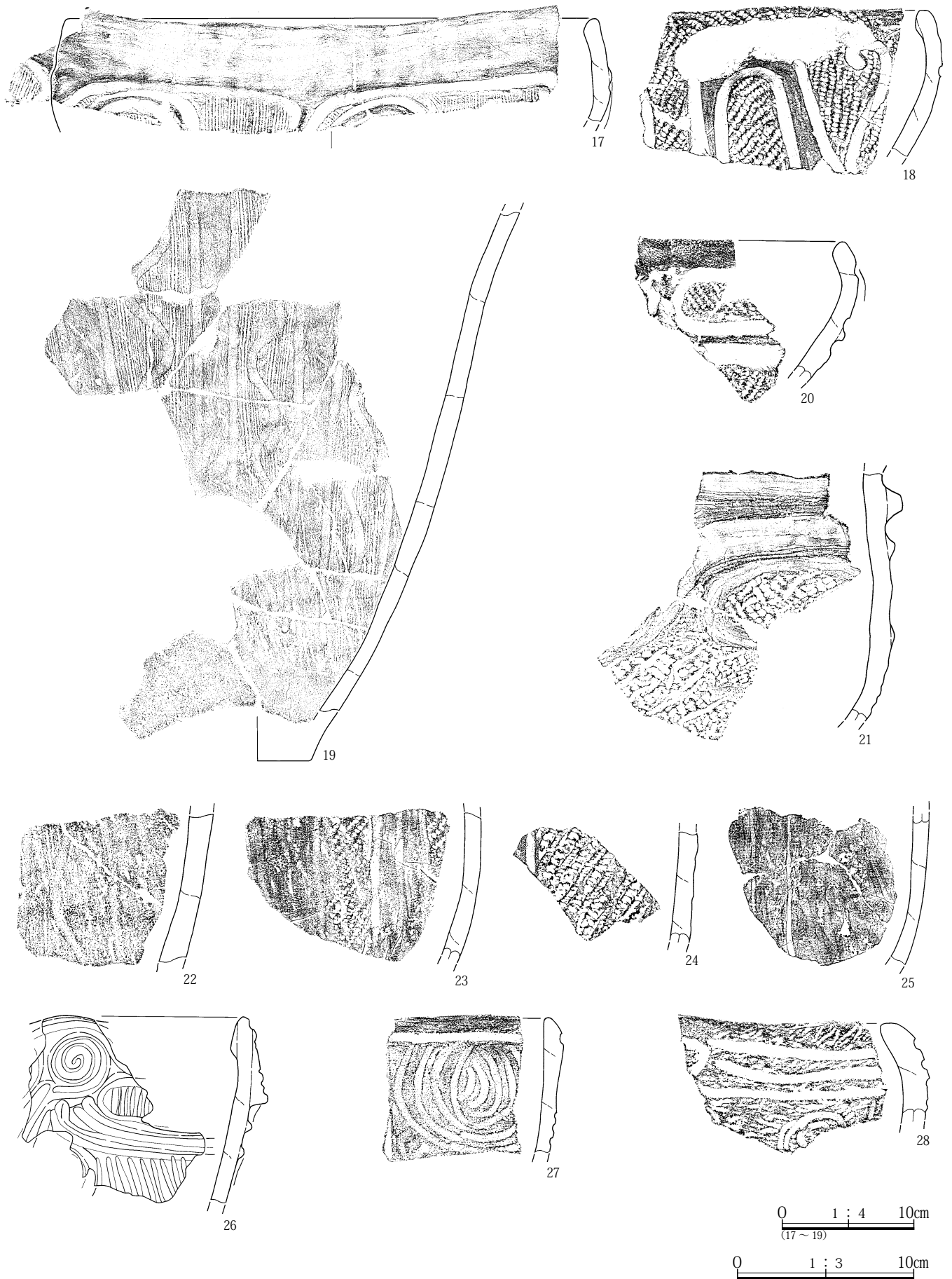




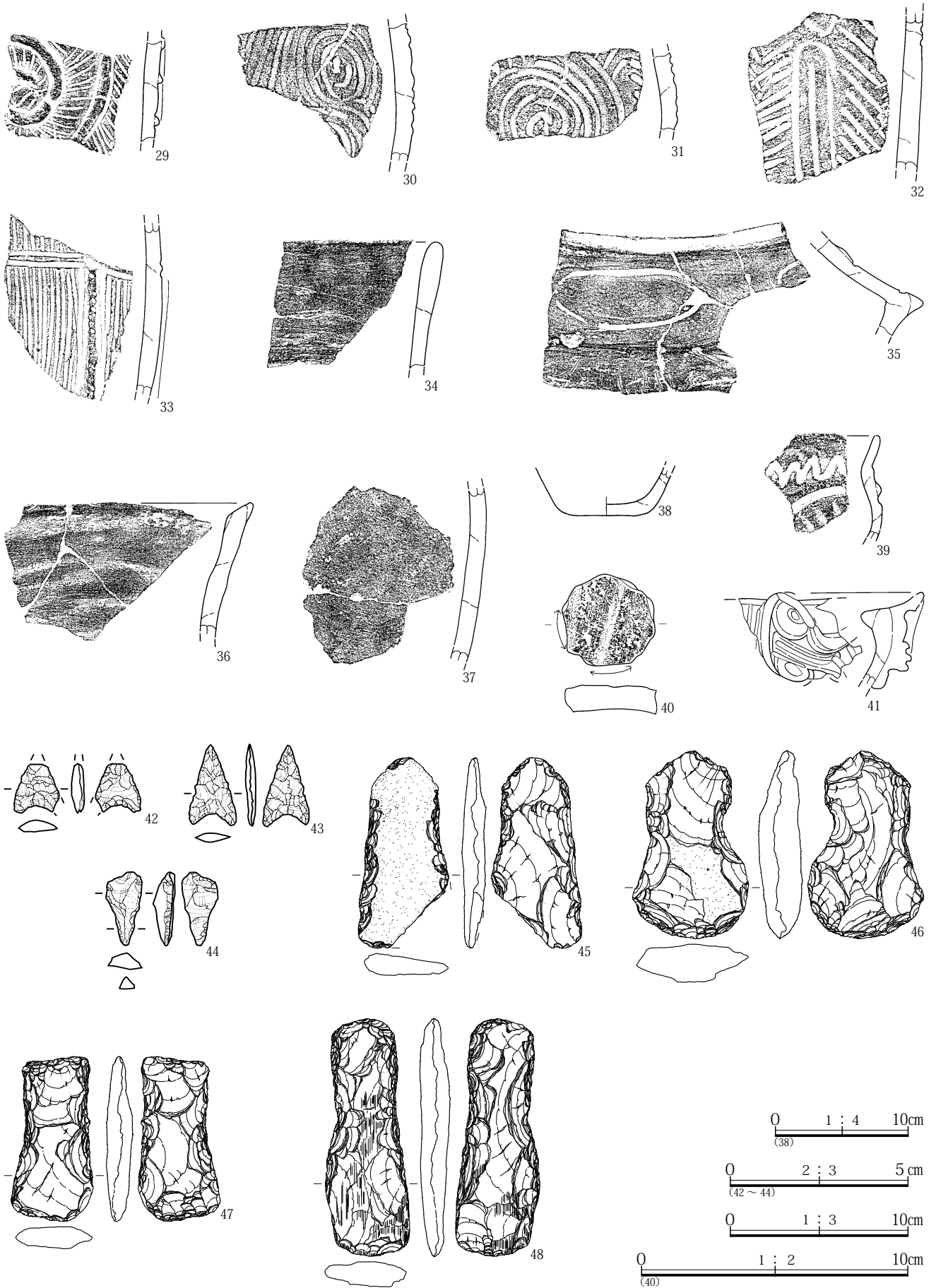
第39図 61区3・4号住居跡出土遺物(1)



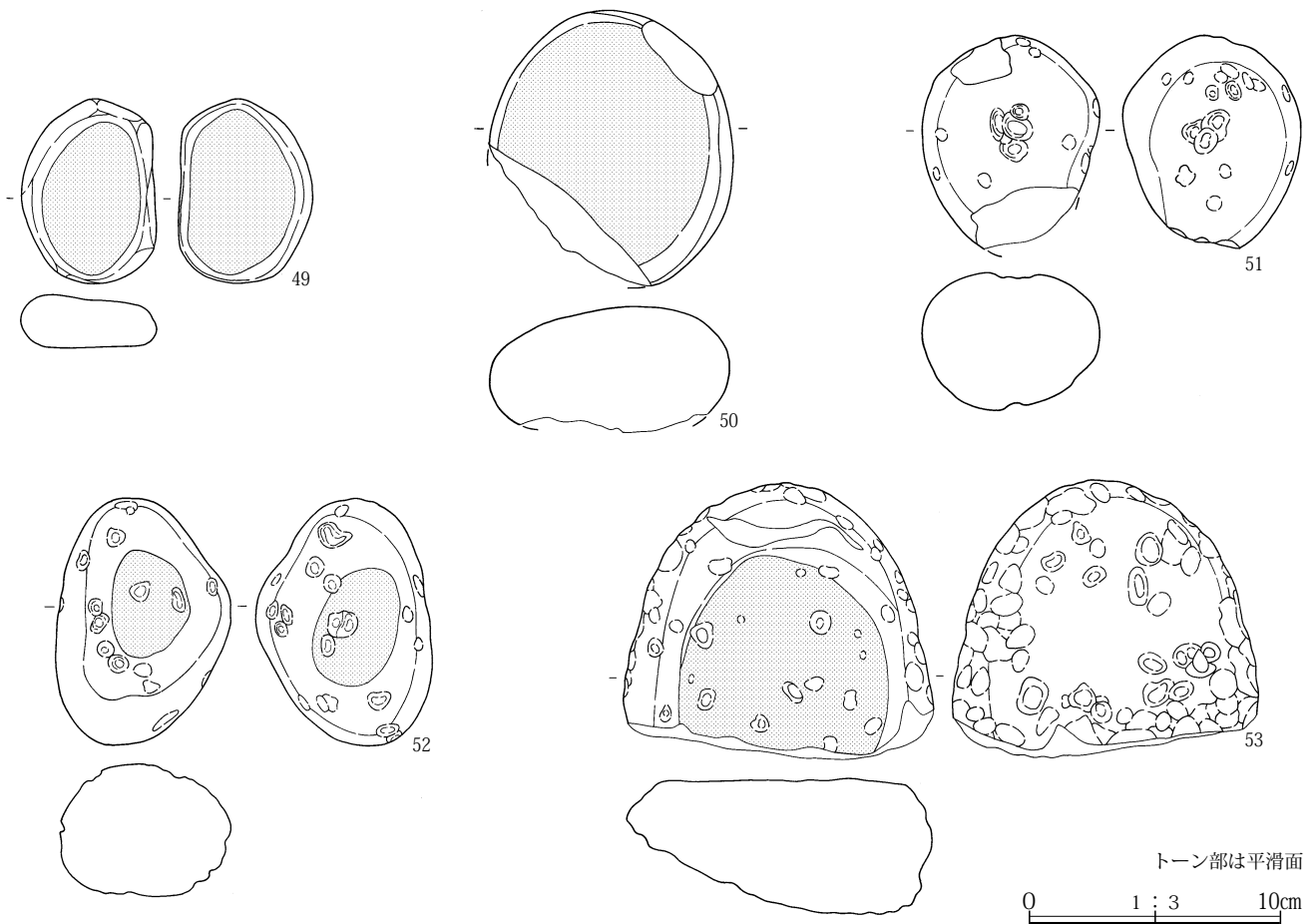
第40图 61区3·4号住居跡出土遺物 (2)



第41図 61区3・4号住居跡出土遺物(3)



第42図 61区3・4号住居跡出土遺物 (4)



第43図 61区3・4号住居跡出土遺物（5）

3 A号住の出土遺物としては、炉内土器（1）以外に5・7・10・16・20・24・25・29・31・35・36・47・48・53・58・59・61を挙げた。また、埋甕とした3も本住居跡出土遺物としての可能性を残す。3 B号住出土遺物は炉内土器（2）以外に26・33が炉埋土出土である。また15・32・50・60・66がその範囲から出土している。

所見：調査区北東端で調査された重複住居跡群の一つであるが、3 A号住と3 B号住2軒の重複住居である。2軒とも炉跡が検出されているが、残存度から3 A号住を新しく把握した。また、3 A号住床面東に小型住居跡である4号住が確認されており、出土遺物はかなり混在した様相で出土していた。本書では遺物の明瞭な分別は果たし得なかったが、重複住居跡の新旧関係を述べると、（古）3 B号住→3 A号住→4号住（新）と位置付けられる。また、3 B号住部分と重複する1号住との新旧関係は不明である。

いずれも、中期後葉段階と判断できよう。

61区7号住居跡（第44～47図 PL. 3・50・51）

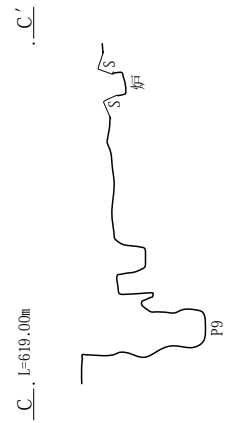
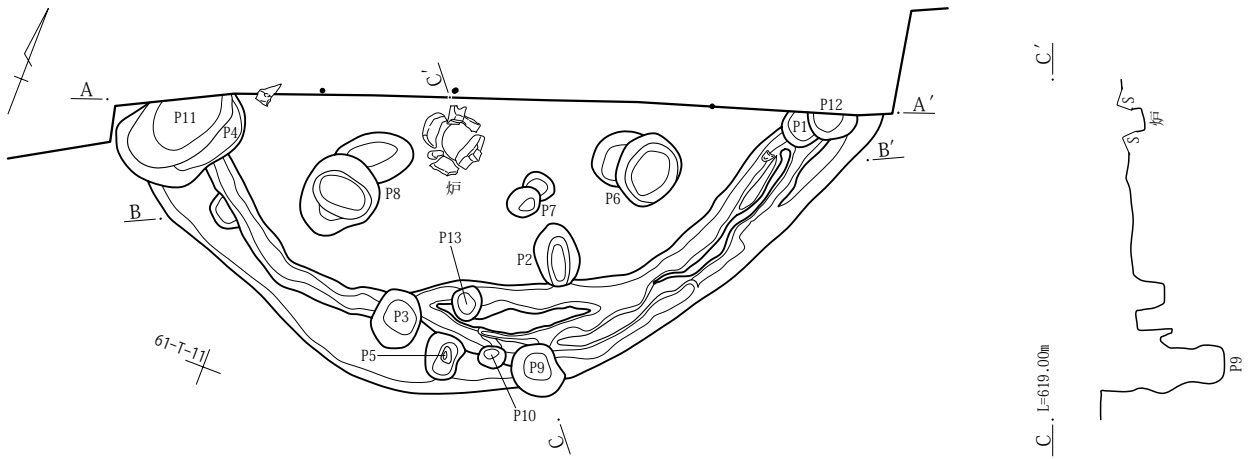
位置：1～3号住と同様に、調査区北東端で調査された。61区S・T-11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形を呈し、南西側にかけて強い傾斜が広がる。特に本住居跡南西部は傾斜が顕著だった。

周辺は1～4号住が近接し、本住居跡外縁には20号住居跡が重複する。また、南側の傾斜地形には11号住居跡が近接する。

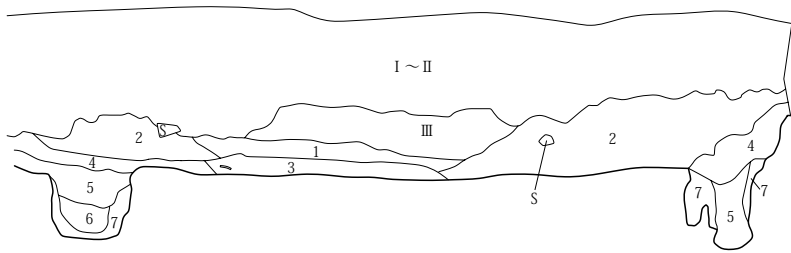
経過：ローム漸移層の暗褐色土で確認した。北側は調査区域外であり、南半の調査に止まった。また、調査が進むに従い、南側にさらに住居跡壁が延び、壁周溝が1条追加することになった。これを20号住居跡とし、当初より検出されていた内側の平面形を7号住居跡として位置付けた。

規模：南半のみの調査に止まったため、平面規模は測れなかった。おそらく長軸長5m前後の隅丸方形状を呈する平面形と判断されよう。壁は深く、確認面からも45.0cmを測り、壁の立ち上がりも直立し良好な遺存度を示していた。

重複：前述のように、南側壁に同心円状に20号住が重



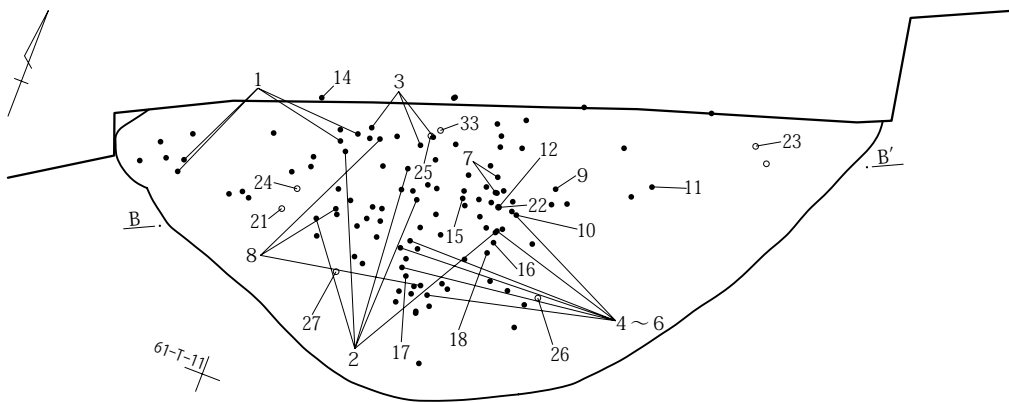
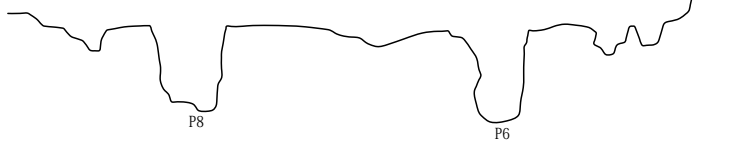
A, L=620.00m A'



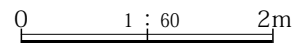
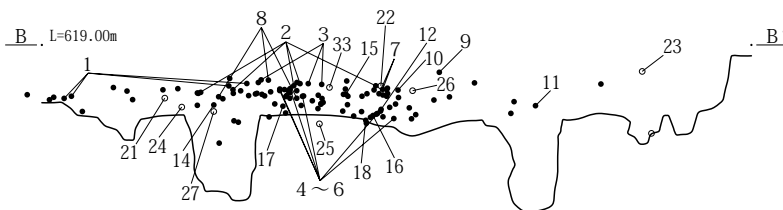
7号住土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量、炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む。しまり強い
- 3 黒褐色土 黄色粒・炭化物を微量含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 5 にぶい褐色土 ローム小塊を微量含む
- 6 にぶい褐色土 ローム大塊を多く含む
- 7 黄褐色土 ローム大塊を多く含む

B, L=619.00m B'

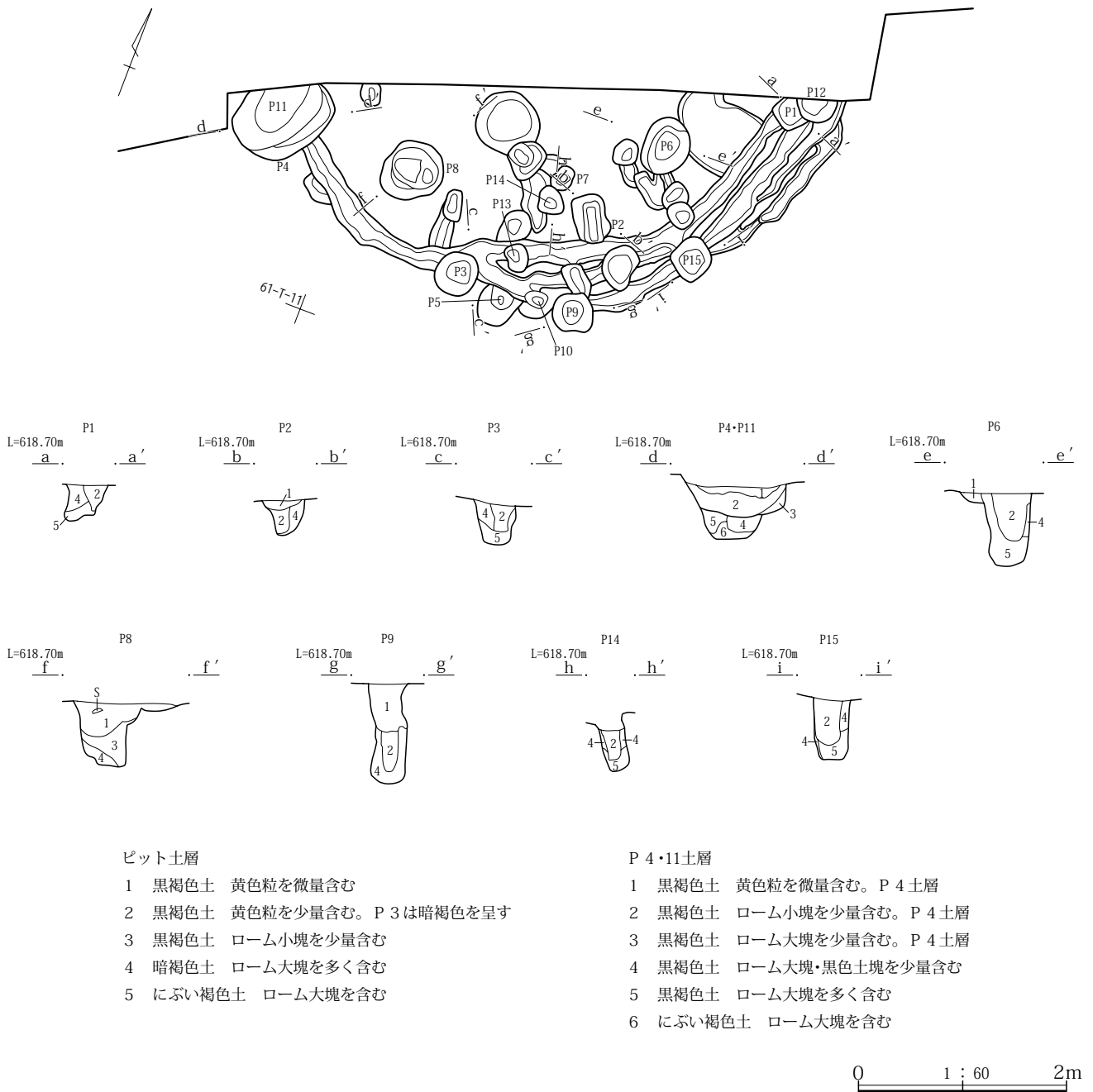


B, L=619.00m B'



第44図 61区7号住居跡 (1)





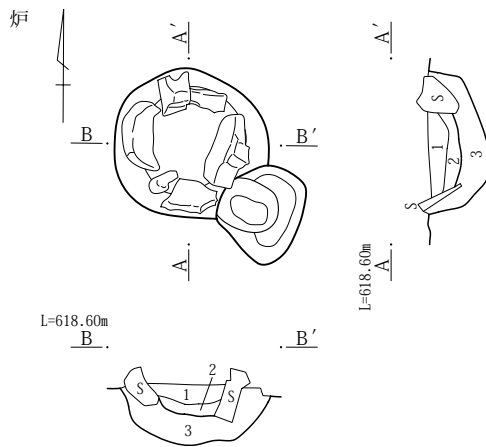
ピット土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む。P 3は暗褐色を呈す
- 3 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 4 暗褐色土 ローム大塊を多く含む
- 5 にぶい褐色土 ローム大塊を含む

P 4・11土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む。P 4土層
- 2 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。P 4土層
- 3 黒褐色土 ローム大塊を少量含む。P 4土層
- 4 黒褐色土 ローム大塊・黒色土塊を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム大塊を多く含む
- 6 にぶい褐色土 ローム大塊を含む

0 1 : 60 2m

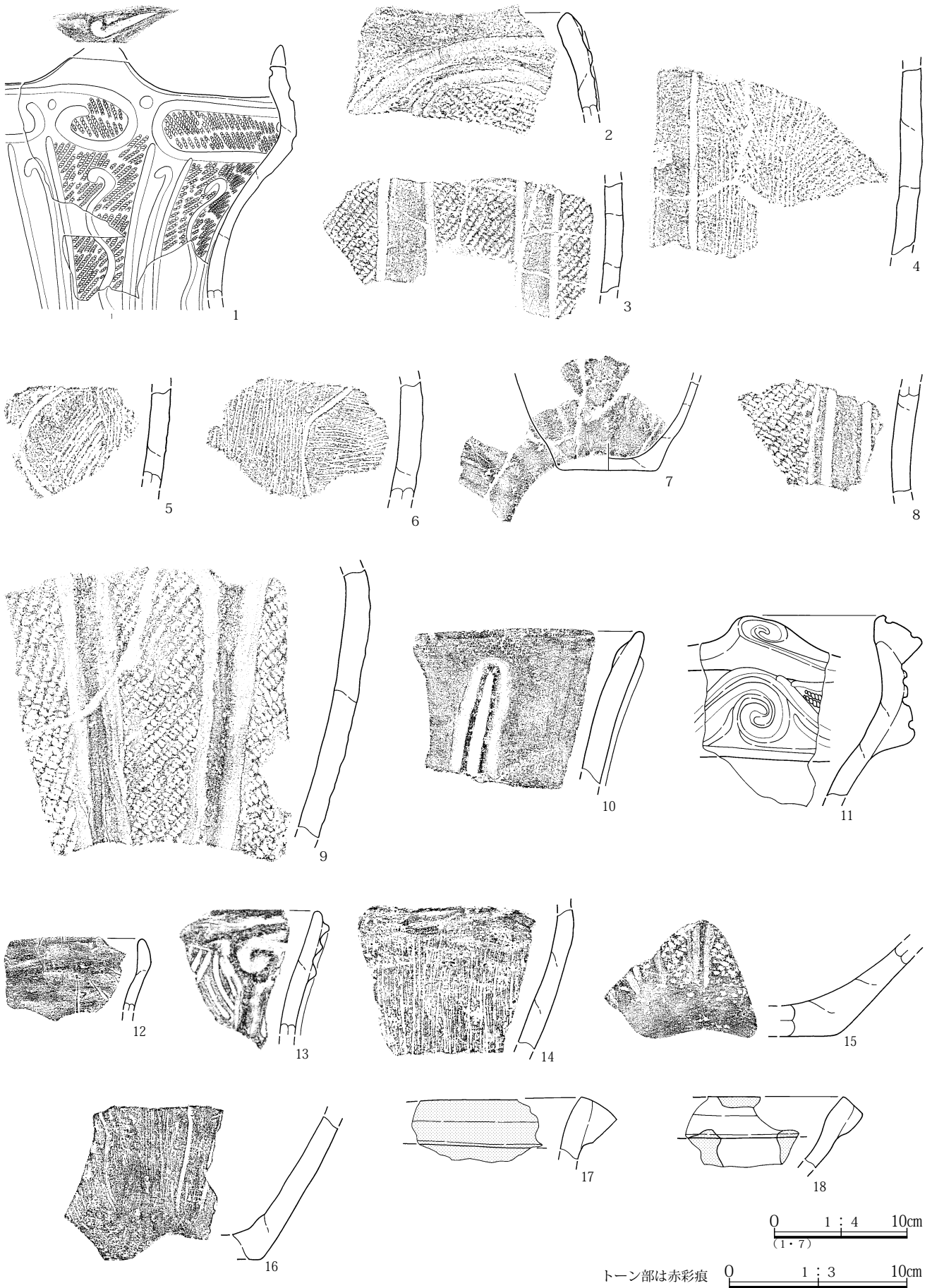


炉跡土層

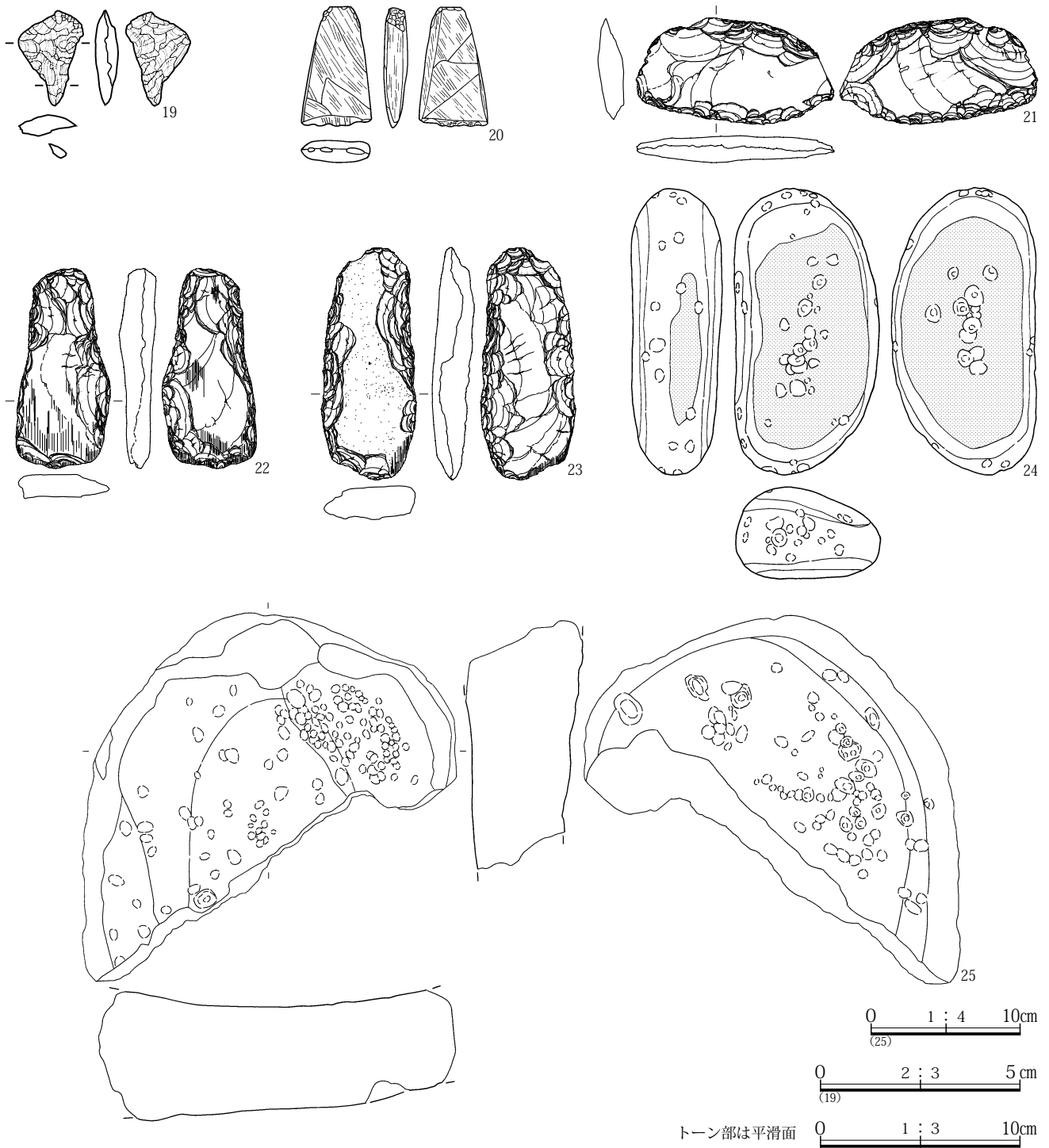
- 1 黒褐色土 焼土粒、黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む

0 1 : 30 1m

第45図 61区7号住居跡(2)



第46図 61区7号住居跡出土遺物 (1)



第47図 61区7号住居跡出土遺物(2)

複する。新旧は不明だが、出土遺物の様相からは、20号住出土遺物が古い。ただし、破片資料のため住居跡帰属資料ではなく、あくまでも参考資料である。尚、土層によると7号住が20号住を切る新旧関係を呈するが、観察箇所の範囲が狭く、確定性に乏しい。

床面：黄褐色硬質ローム層を地床とする。ほぼ平坦面を築き、炉周辺に狭い硬化面を見る。

施設：床面中央付近に小型の石囲い炉を設ける。また

壁際に極めて深い壁周溝が走行し、住居跡輪郭を際立たせる。柱穴として、15基のピットを調査した。なお、埋甕は検出されていない。

炉跡：石囲い炉は小型で、円形の掘り込みを伴っている。平面規模は約60.0×59.0cm、四辺を石皿片(25)、角礫、円礫で囲んでおり6石からなる。埋土は少量の焼土粒を含む黒褐色土で、炉石内側が弱く被熱していた。

壁周溝：全周するのであろうか、南半の全ての壁際に確

認できた。20～30cmの深さで東壁際では2重の走行を検出した。後に加わる20号住と併せて拡張あるいは縮小住居による所産と考えられよう。

柱 穴：床面上で確認できたP2、P6、P8が主柱穴と捉えられる。その他に壁周溝と重なり検出されたP9やP15、P1・P12、P3とも柱穴としての規模を保つ。いずれも柱痕状の土層堆積を示す。

遺 物：比較的埋土中の出土が多い。さらに住居跡西側から中央にかけて平面的な分布の偏りが見られる。東側の出土は極めて希薄である。これは土層観察で得られた2層の存在が要因すると思われ、遺物を包含しない2層の堆積の厚さによって、遺物分布の偏りが見られたと考えられた。出土土器は破片状態で、個体図示し得た例は少ない。石器としては炉石として供されていた石皿片(25)が特徴的である。

所 見：おそらく20号住と併せて、同心円状に重複する住居跡と思われる。その要因は拡張と縮小があるが、土層観察では縮小要因が得られている。ただ、観察範囲も狭く、出土土器も少量のため確定的な判断は控えたい。

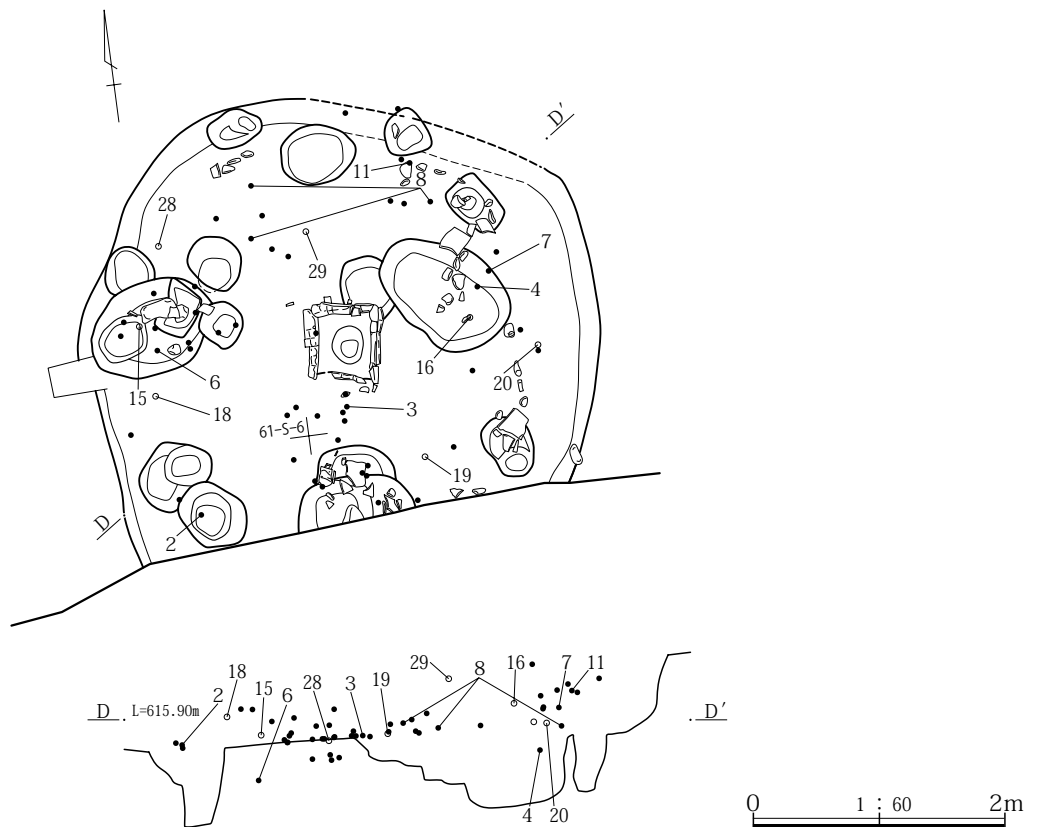
住居跡時期としては、埋土中の出土土器片からだが、加曾利EⅢ式中段階の可能性を求めておきたい。

61区8号住居跡 (第48～52図 PL. 4・51)

位 置：調査区東側の南壁際にかかり調査された。前述した1～4号住や7・20号住より低い標高値にある。61区R・S-5・6グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がる箇所ながら、東側がやや高く傾斜している。周辺は遺構密集地点であり、上層では1号列石が調査され、北に18号住、西に21号住・37号住、北西に33号住が重複する他90坑・91坑なども床面、壁に重なる。さらに北西～西側には24号住や31号住などが近接し、遺構の分別も困難な地点である。

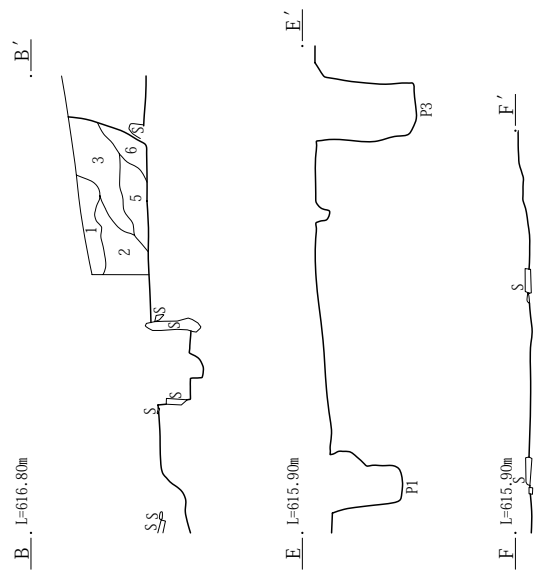
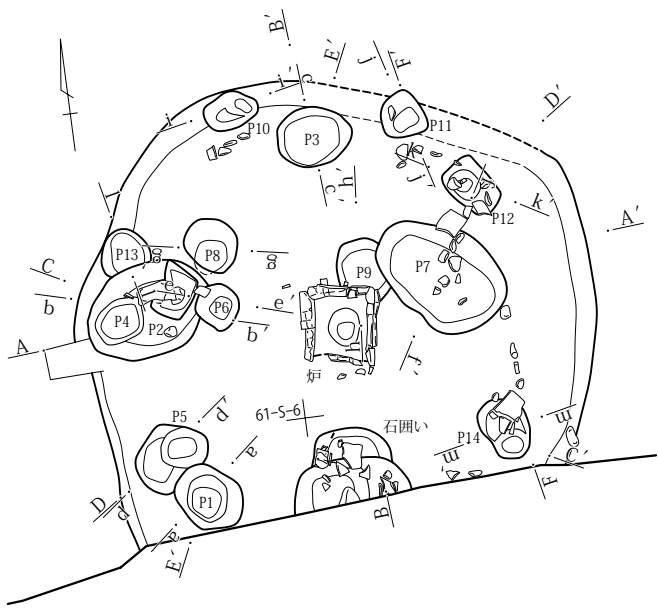
経 過：縄文時代後期の所産である1号列石調査後、ローム漸移層上位である暗褐色土で確認できた。確認面における出土遺物の集中は顕著ではなく、住居跡平面形は基盤層と埋土との色調差を元に把握した。埋土は黒褐色土を主体にするため、基盤の暗褐色土との分別は容易で、かつ床面までが深くしっかりした掘り込みから、壁、床面の検出は速やかに進んだ。また、南辺壁は調査区域外に延びるため、未調査となっている。そのため本住居跡が敷石住居跡かは不明とせざるを得ない。

規 模：不整楕円状の平面形が推定できよう。主軸長は約3.5m以上で、短軸は約3.9mを測る。小型の住居跡で



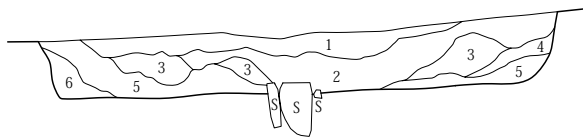
第48図 61区8号住居跡 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



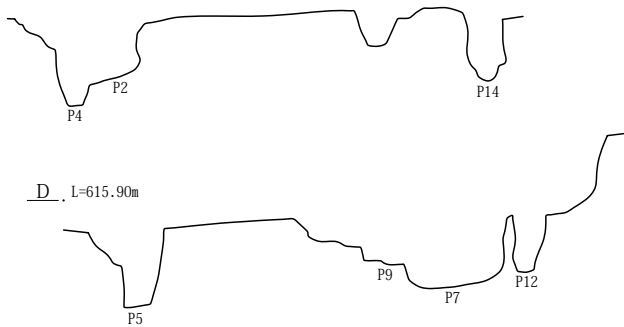
A, L=616.80m

A'



C, L=615.90m

C'



D, L=615.90m

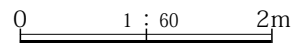
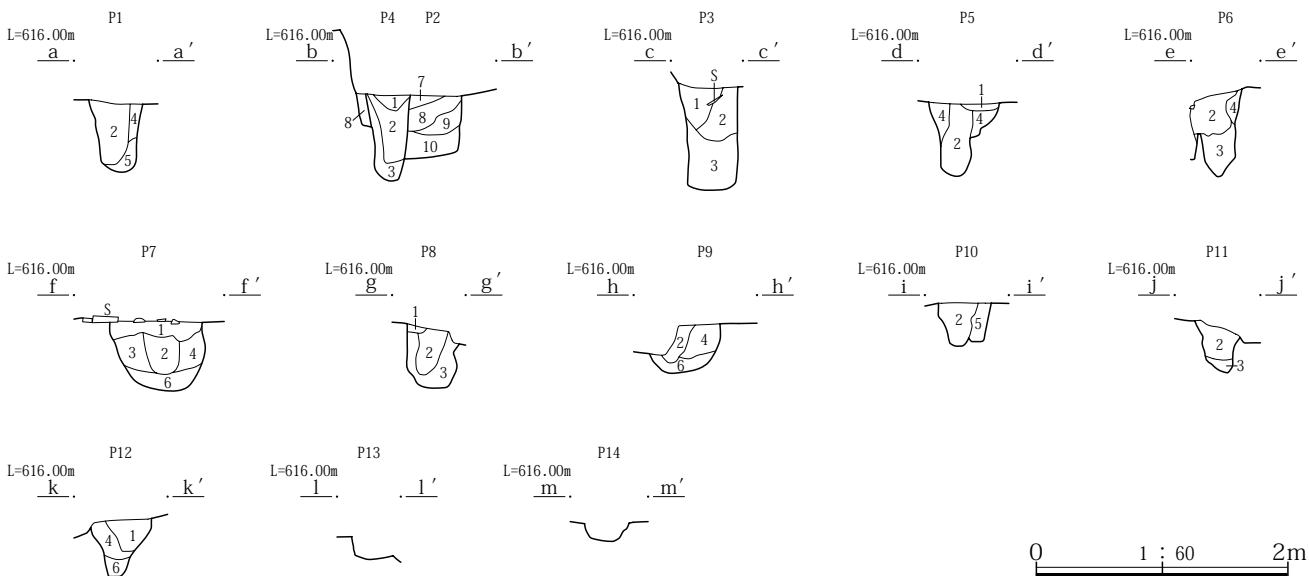
D'

8号住土層

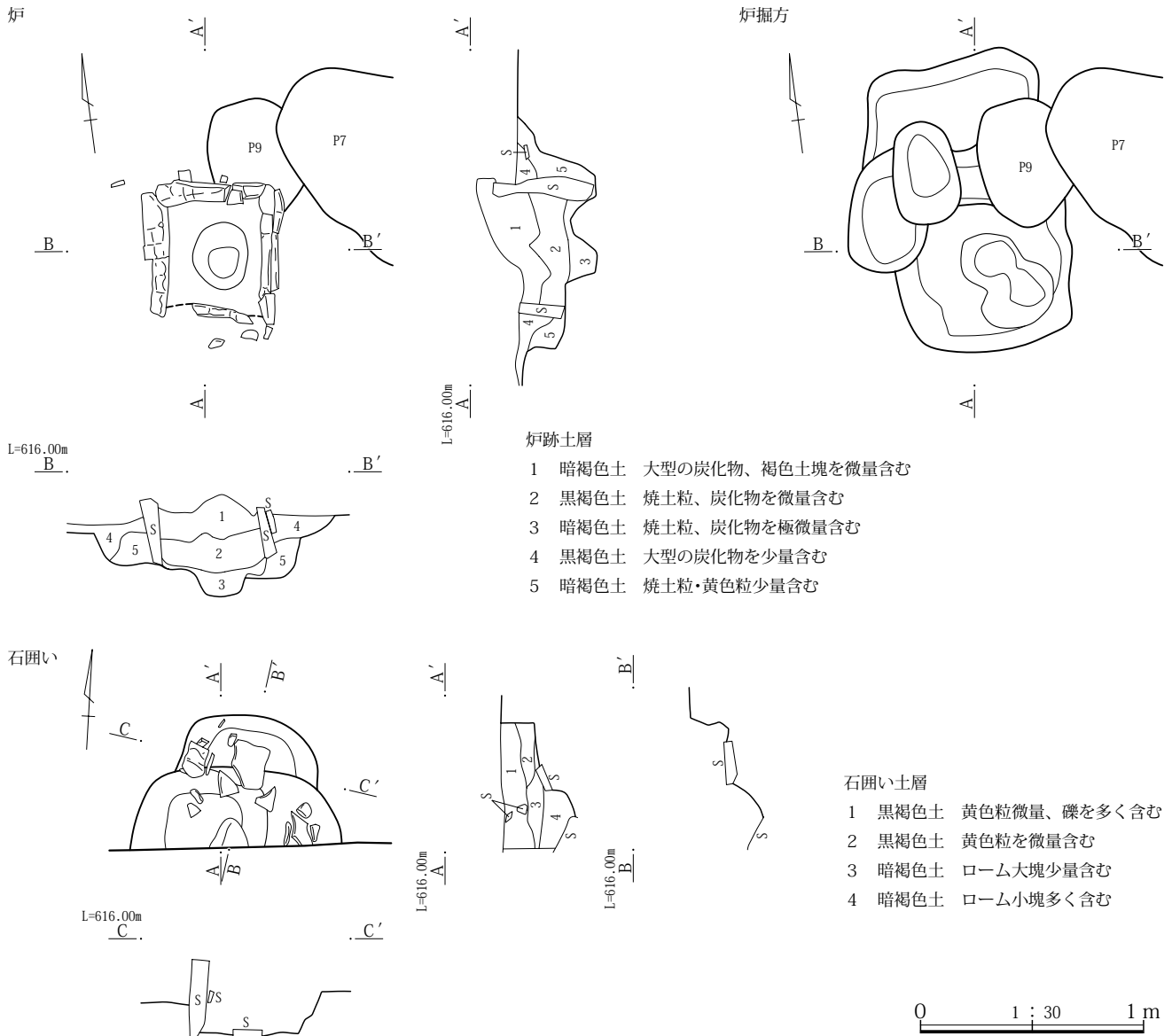
- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む
- 3 にぶい黄褐色土 黄色粒、ローム大塊、炭化物を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土小塊を少量含む
- 5 暗褐色土 少量の黄色粒、微量の炭化物を含む
- 6 黒褐色土 黄色粒を少量含む

ピット土層

- 1 黒褐色土 黄色粒、ローム粒、炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む。軟質
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム小塊を微量含む
- 5 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 6 黄褐色土 ローム大塊を多く含む
- 7 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 8 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 9 にぶい褐色土 ローム小塊を少量含む
- 10 にぶい褐色土 ローム小塊を多く含む



第49図 61区8号住居跡(2)



第50図 61区8号住居跡 (3)

張出状の出入口部を附帯するのかわ不明である。深さは約52.0cm、極めて良好な遺存度を誇る。壁の立ち上がりも良好でしっかりした掘り込みを示していた。

重複：前にも述べたように、多くの住居跡と重複、近接している。そのうち北に重複する18号住とは、本住居跡が18号住炉の多くを壊しているため、本住居跡が新しいものと判断できる。さらに、西に重なる21号住壁周溝上に本住居跡炉跡が乗ることから、本住居跡が新旧関係では最も新しい重複状況を示していた。

床面：黄褐色硬質ロームを地床とする。僅かな凹凸を見るものの、全体的にほぼ平坦面を築く。硬化面は炉周辺に認められ、比較的広く確認できた。

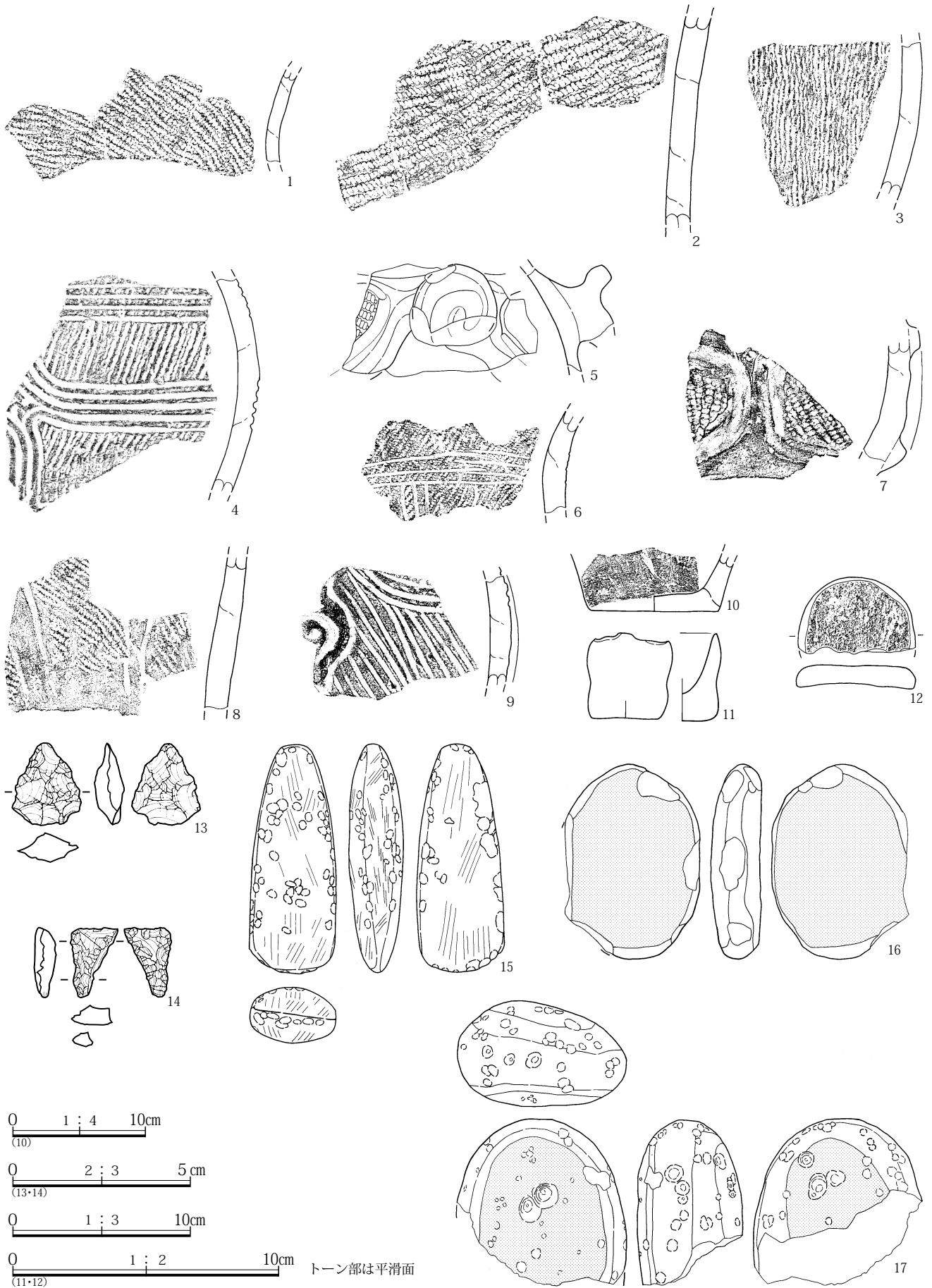
施設：床面上では石囲い炉を1基、ピットを14基検出した。また南側で石囲い施設を見ることができた。壁周

溝、埋嚢は見られなかった。

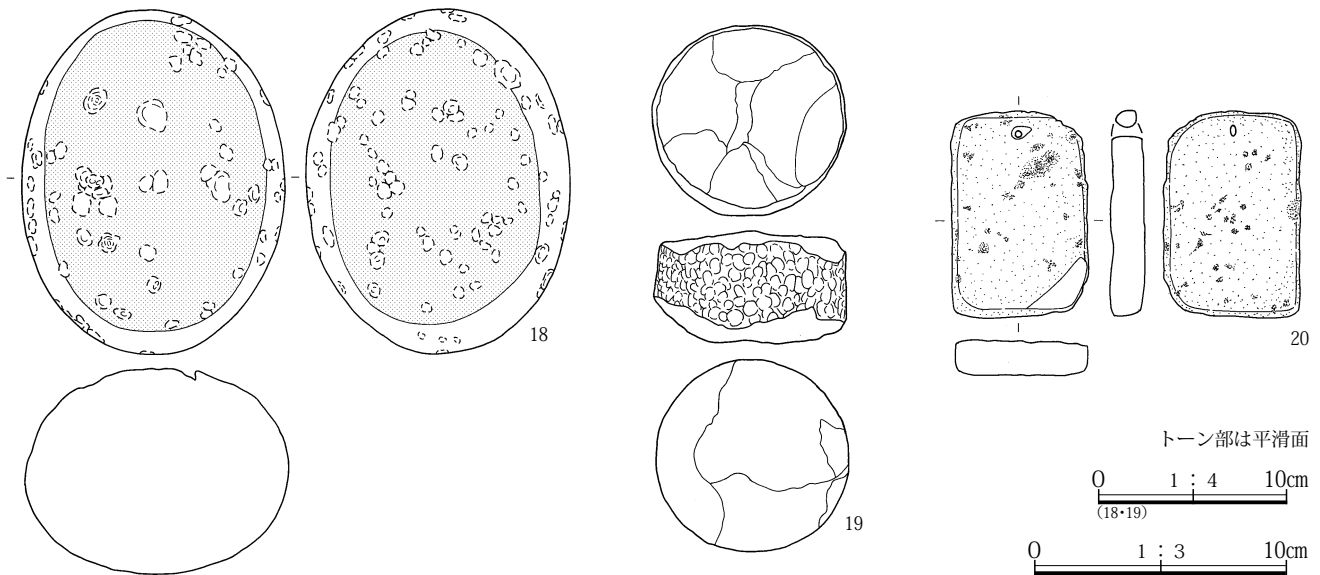
炉跡：床面ほぼ中央に大型の石囲い炉が設けられる。方形を呈し、南辺の一部に炉石の欠落が見られるが、多辺は板状の角礫で囲まれていた。規模は約60.0×60.0cmを測り、主軸が北を向く大型の長方形を平面形とし、深さは約36.0cm以上で深く炉石も底面まで埋置され、しっかりと圍繞されていた。埋土は黒褐色土～暗褐色土で少量の焼土粒や炭化物が含有され、炉石内縁は被熱痕跡を見ることができた。底面には径約40cmの浅い小ピットが穿たれていた。あるいは炉内土器の抜き取り孔の可能性もある。

柱穴：床面上では14基のピットを確認したが、柱穴として規模、配置から妥当性を帯びる例は、(P1・P5)、(P2・P4・P6・P8)、P3、P12が挙げられる。また浅く、規模





第51図 61区8号住居跡出土遺物(1)



第52図 61区8号住居跡出土遺物(2)

としては不適當とも思われるが配置上は極めて良好なP14も柱穴として位置付けておきたい。また、後述する石囲い施設南にある大型の土坑は、あるいは出入口部の対ピットの可能性が高く、これも柱穴として捉えられよう。

石囲い施設：床面南で検出された。南半が調査区域外に延びるため全容は把握できないが、土坑状の掘り込み西に板石状の角礫が立位に埋置され、底面にも板石が敷かれていた。圍繞する形態ではないが、出入口部の石囲い施設として位置付けておきたい。

遺物：住居跡遺存度に比して、出土量は極めて少ない。原位置を示す例も少なく、出土土器の時間幅は広くかつ破片状態であり、埋甕など住居に伴う例が見られない。平面分布からも特定箇所の偏りもなく、断面分布からは北東から南西への流入が示唆されることから居住に伴う遺物の出土は見られないと判断できよう。その中で、磨製石斧(15)、軽石製品(20)、石棒片(19)が床直～床直上の出土で注意を要する

所見：おそらく敷石住居跡である。東壁際に僅かに出土した敷石と、出入口部の石囲い施設、石囲い炉の形態からも、中期末葉～後期初頭の敷石住居跡として位置付けておきたい。出土遺物からの判断ができないため、詳細な時期には言及できないが、1～3の加曾利EIV式に妥当性が求められよう。

61区9号住居跡(第53～64図 PL. 4・52～58)

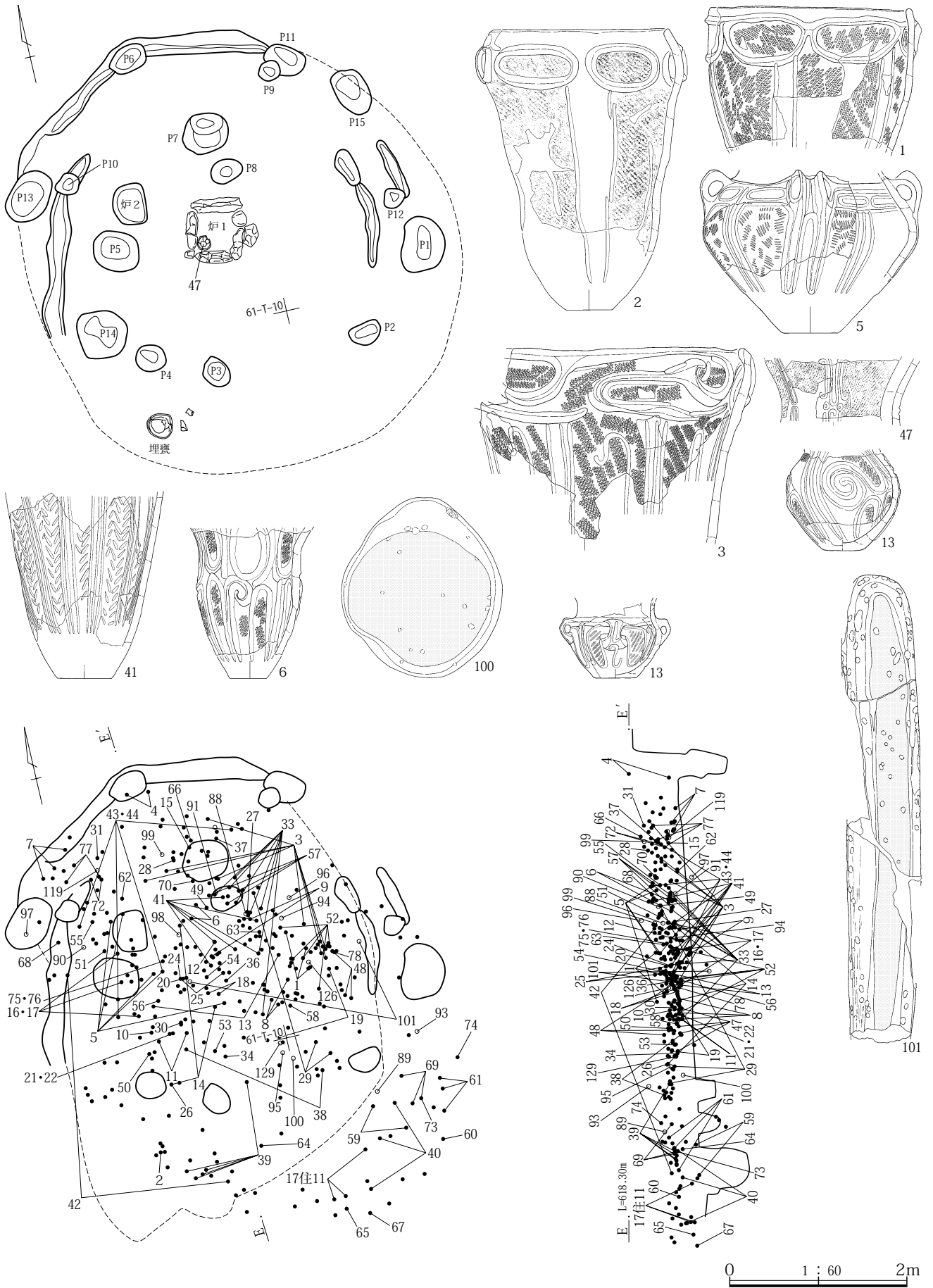
位置：調査区北東部で調査された。前述した1～4号住や7・20号住より低い標高値にあり、11号住や12号住などの住居跡群の中にある。61区S・T-9・10グリッドに位置する。周辺は南西への緩斜面地形にあり、北東にやや強い斜面地形が迫るが、重複住居跡が群在する景観はほぼ平坦地形にあるといえよう。

経過：遺構確認面はローム漸移層上位の黒褐色土である。既に11号住が東側で検出されており、同時に調査されている。夥しい遺物出土量が遺構確認時より見られており、住居跡の存在は容易に把握できた。しかしながら、周辺の重複住居跡の存在と黒褐色土中での平面形の確認作業は難度が高く、そのため、周辺住居との新旧や本住居跡の平面形の把握は確定的ではない。

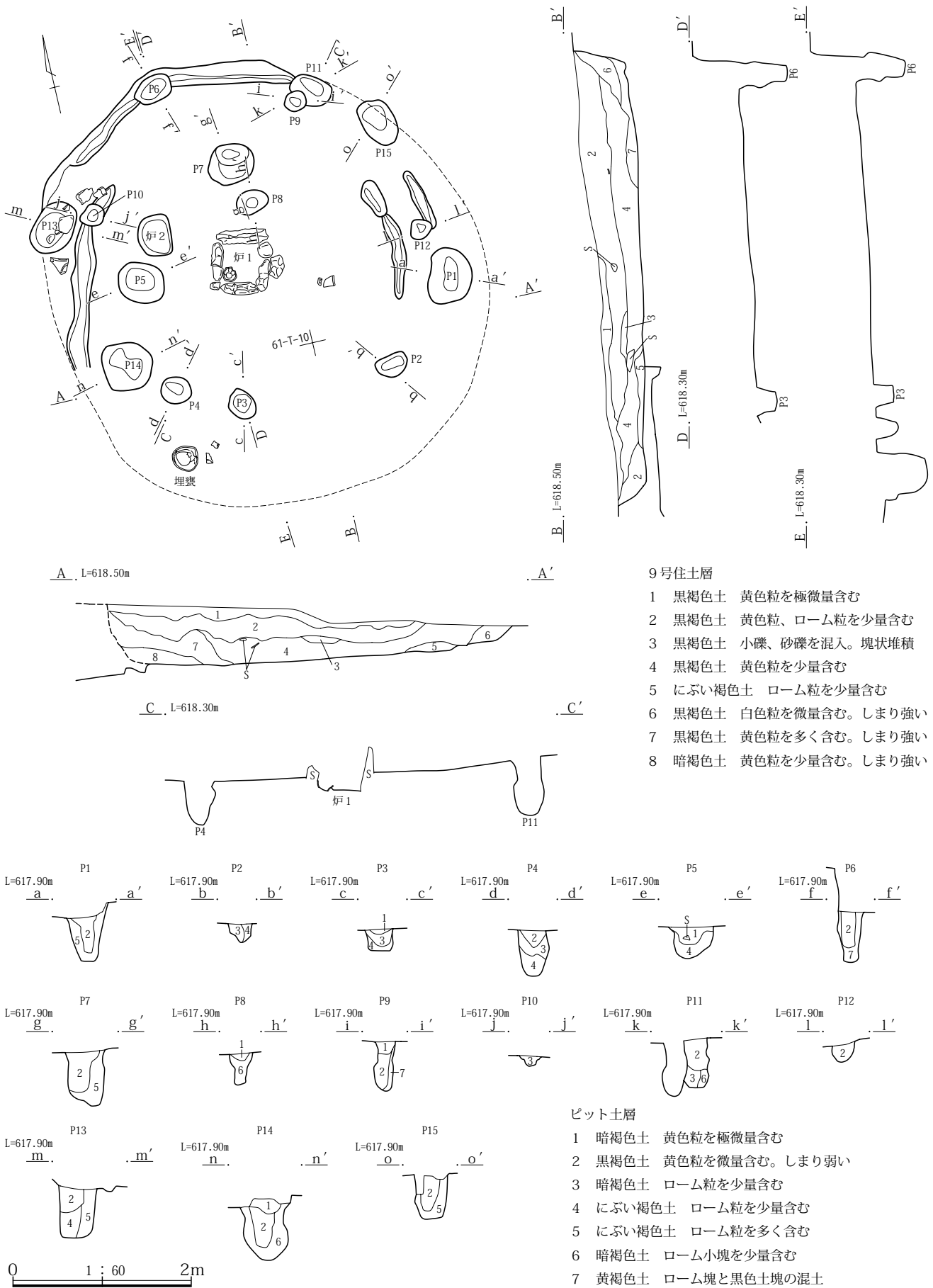
規模：径500.0×495.0cm前後の不整円形を示す平面形と思われる。土層観察と北側壁と壁周溝の走行、南壁付近の埋甕の存在から、平面形を推定した。深さは約80.0cmと深く良好な遺存度を示すが、11号住、12号住、17号住との重複があり北側壁以外は壁が残っておらず、そのため全容が明確に示せなかった。

重複：東壁に11号住、北側から西側に12・16・19号住が重なる。さらに、南側に17号住が重複する。新旧関係は、11号住は敷石住居跡であり、本住居跡を切る時間的位置を示す。12号住、17号住は土層観察においても本住居跡が両住居跡に乗る土層を示していた。

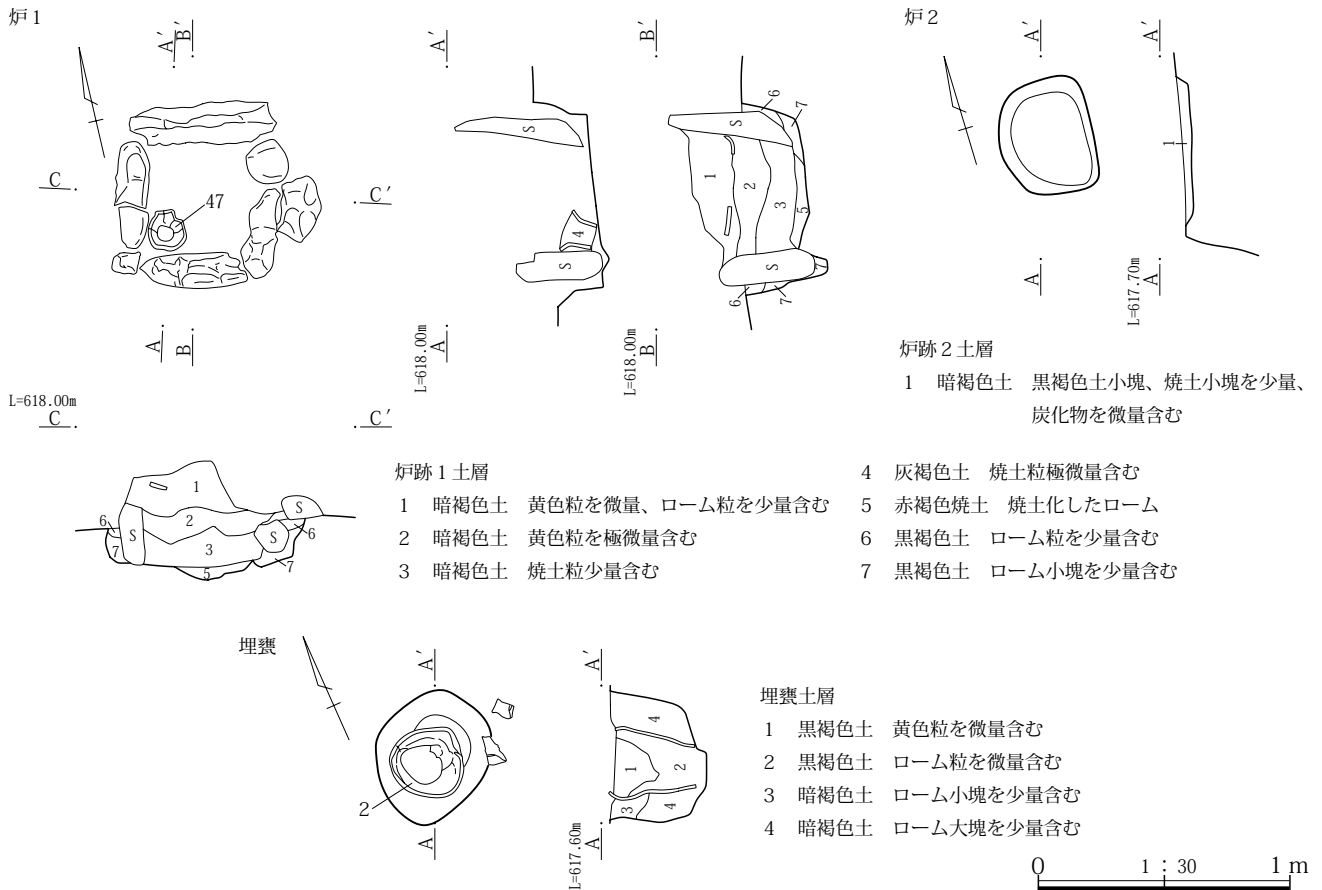
床面：ローム層上層である黄褐色ロームを地床とする。顕著な傾斜や凹凸も少なく、ほぼ平坦地形を築く。硬化



第53図 61区9号住居跡(1)



第54図 61区9号住居跡 (2)



第55図 61区9号住居跡(3)

面は比較的広く床面全体に確認できた。良好な床面といえよう。

施設：床面上に石囲い炉と地床炉を確認している。柱穴としてピットを15基、壁周溝を調査している。南壁付近に埋甕を1基検出した。

炉跡：石囲い炉(炉1)と地床炉(炉2)を検出した。炉1は、床面ほぼ中央に設けられた石囲い炉で四辺を円礫、角礫が囲む。規模は約72.0×80.0×61.0cmを測る。特に北辺は大型角礫が設けられ、南西隅には大型石棒片(101)が再利用されていた。また、炉内南西隅では炉内土器(47)が正位で埋置されていた。埋土は暗褐色土を主体にしており、下層に焼土の堆積が顕著に認められた。炉2は炉1の西約1mの床面上で確認された。地床炉である。46.0×37.0cmを測る小型不整形の平面形を呈し、深さも7.0cmと浅い。焼土は塊状に散布する状況で検出された。

壁周溝：北側壁にかけて良好に確認された。西側壁際のP13の内側に位置した走行が見られるが、検討を要しよう。さらに東壁に断続的に2条の溝が検出されたが、内縁の例と外縁の例が見られ、住居内の拡張あるいは移動

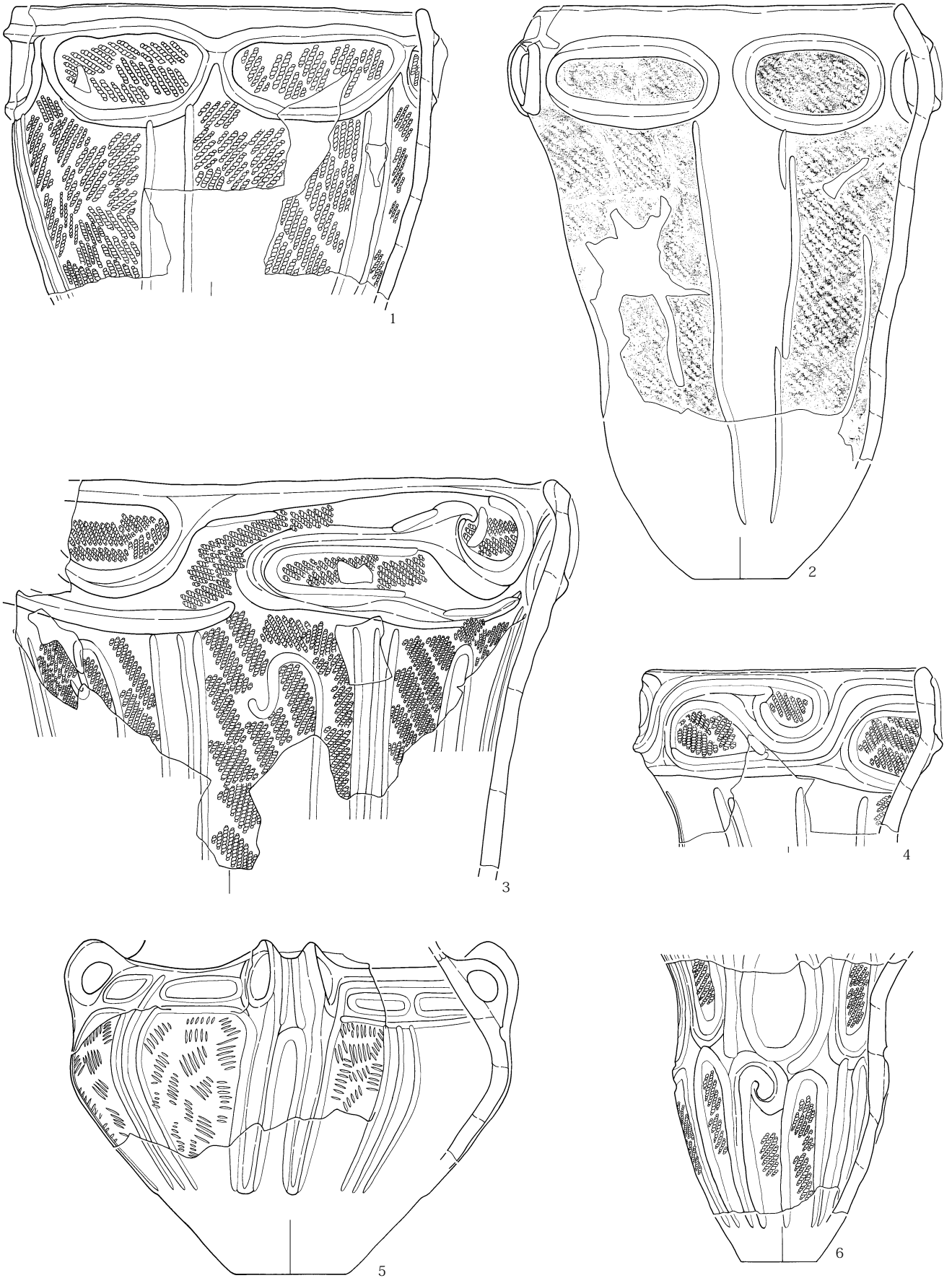
が想起される。

埋甕：南側壁際に相当する箇所に1基の埋甕(2)が出土している。出土位置からも出入口埋甕と位置付けておきたい。土器は径50cm程の不整形の掘り込みに正位に埋置され、体部下半から底部を逸していた。意図的な欠損と捉えられよう。

柱穴：15基のピットを調査し、柱穴として規模、配置からP1、P11、P6、P13が壁際の柱穴として深さも良好な例を示す。また、P7、P8は主軸線に乗るピットであり、柱穴としての可能性は高い。これらは床面北半に偏り、南半ではP4が規模、配置から柱穴と考えられよう。

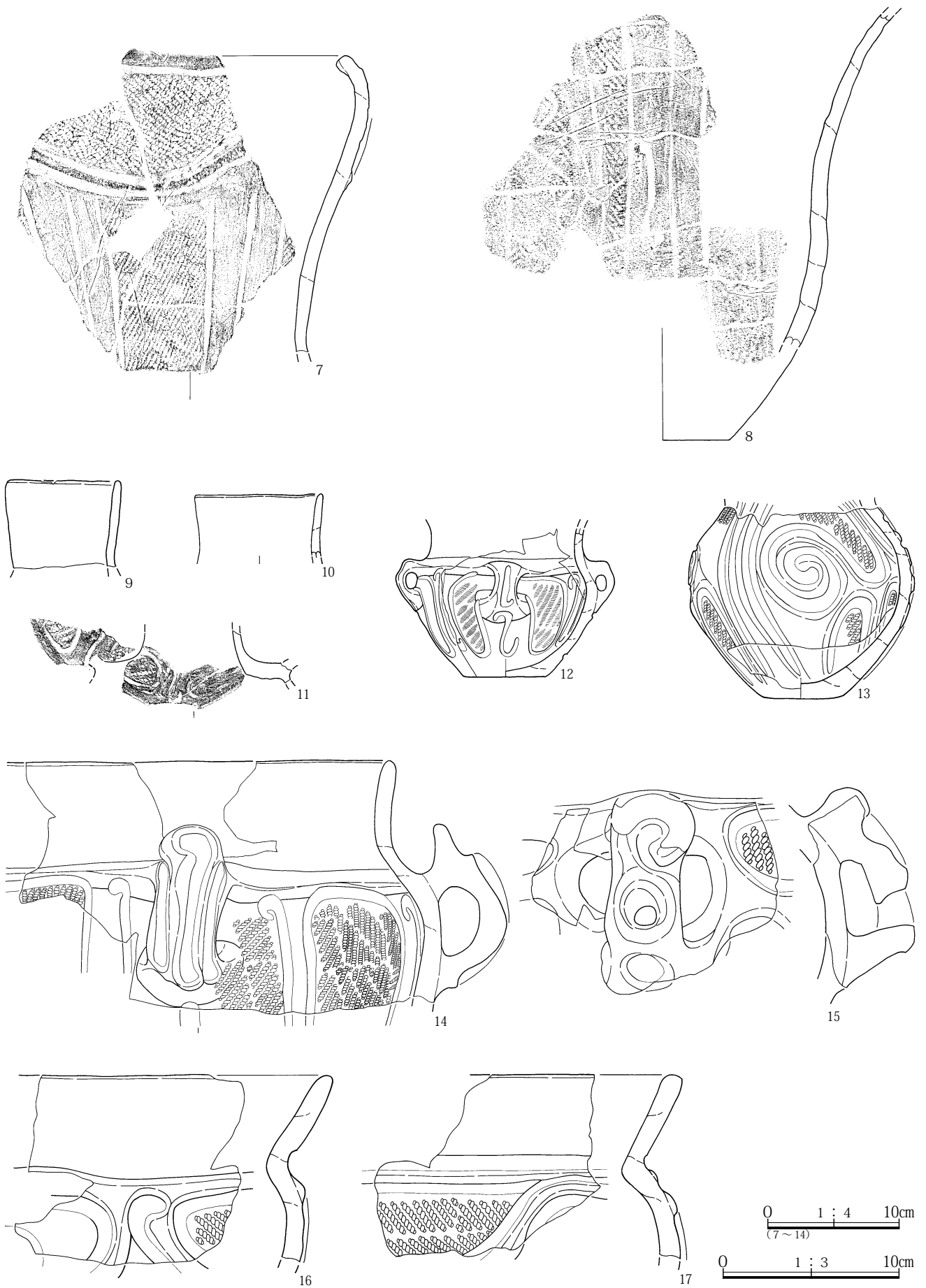
遺物：多量の遺物が出土している。殆どが加曾利EⅢ式に比定される例であるが、大木9式(6)や「郷土式」(41)も見られる。またEⅠ・Ⅱ式、EⅣ式が混在する例は周辺の重複住居の影響であろう。

所見：重複住居群の中であって、良好な遺存度を誇る中期後葉の住居跡である。平面規模など詳細が重複のため判然としない部分があるが、2箇所の炉や壁周溝の在り方から、移動あるいは拡張痕跡のある住居跡として位置付けたい。

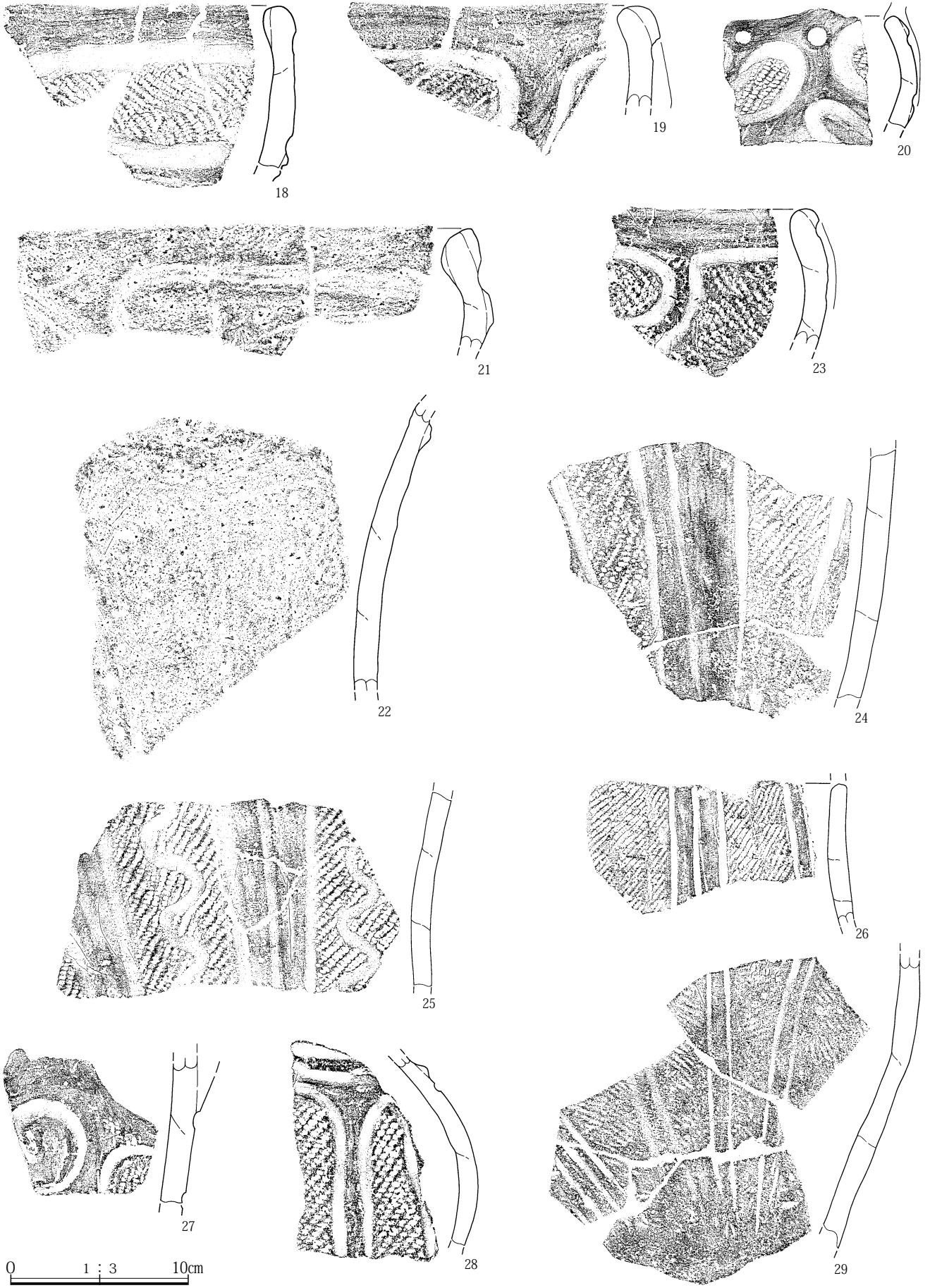


第56图 61区9号住居跡出土遺物 (1)

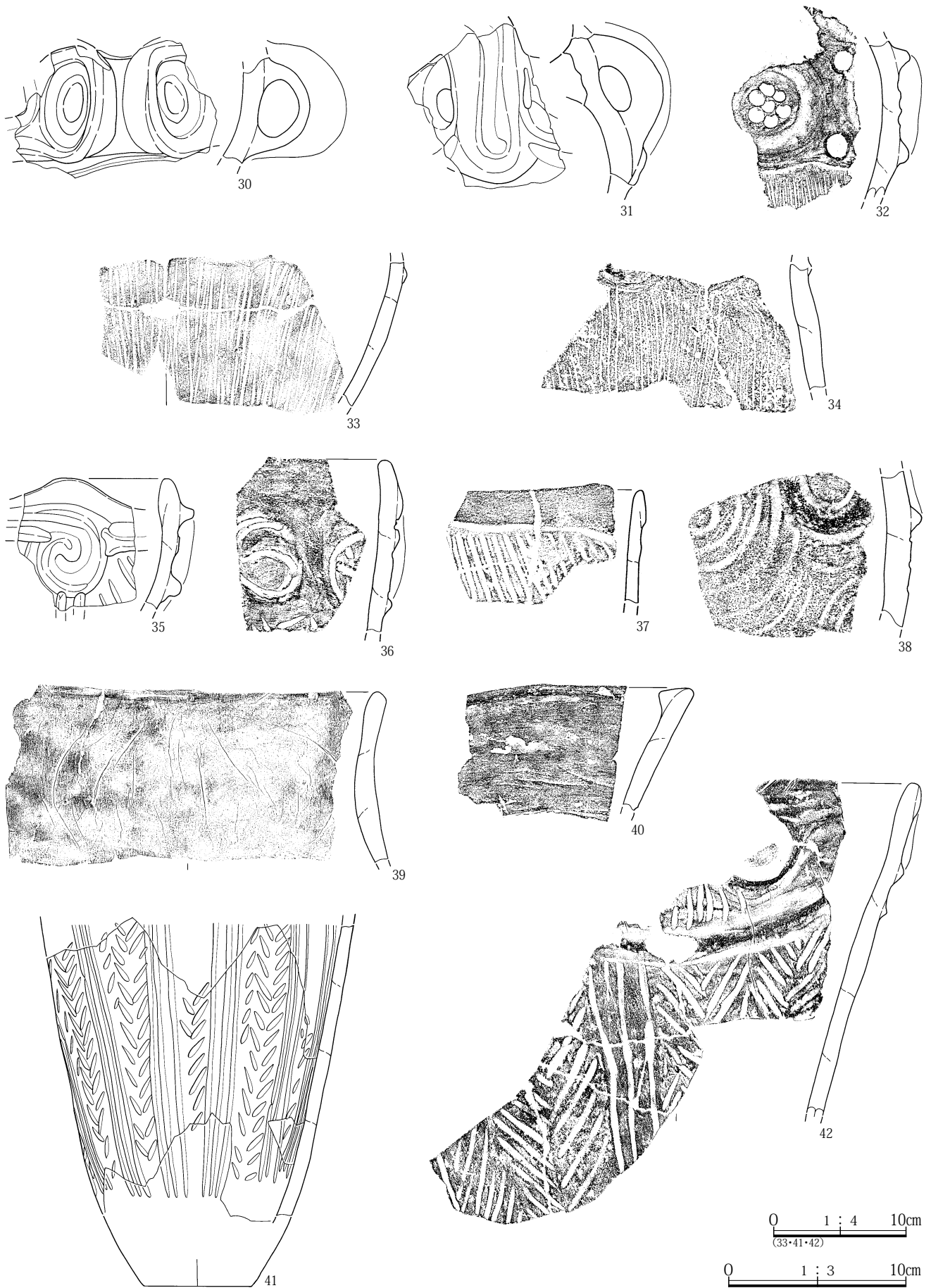




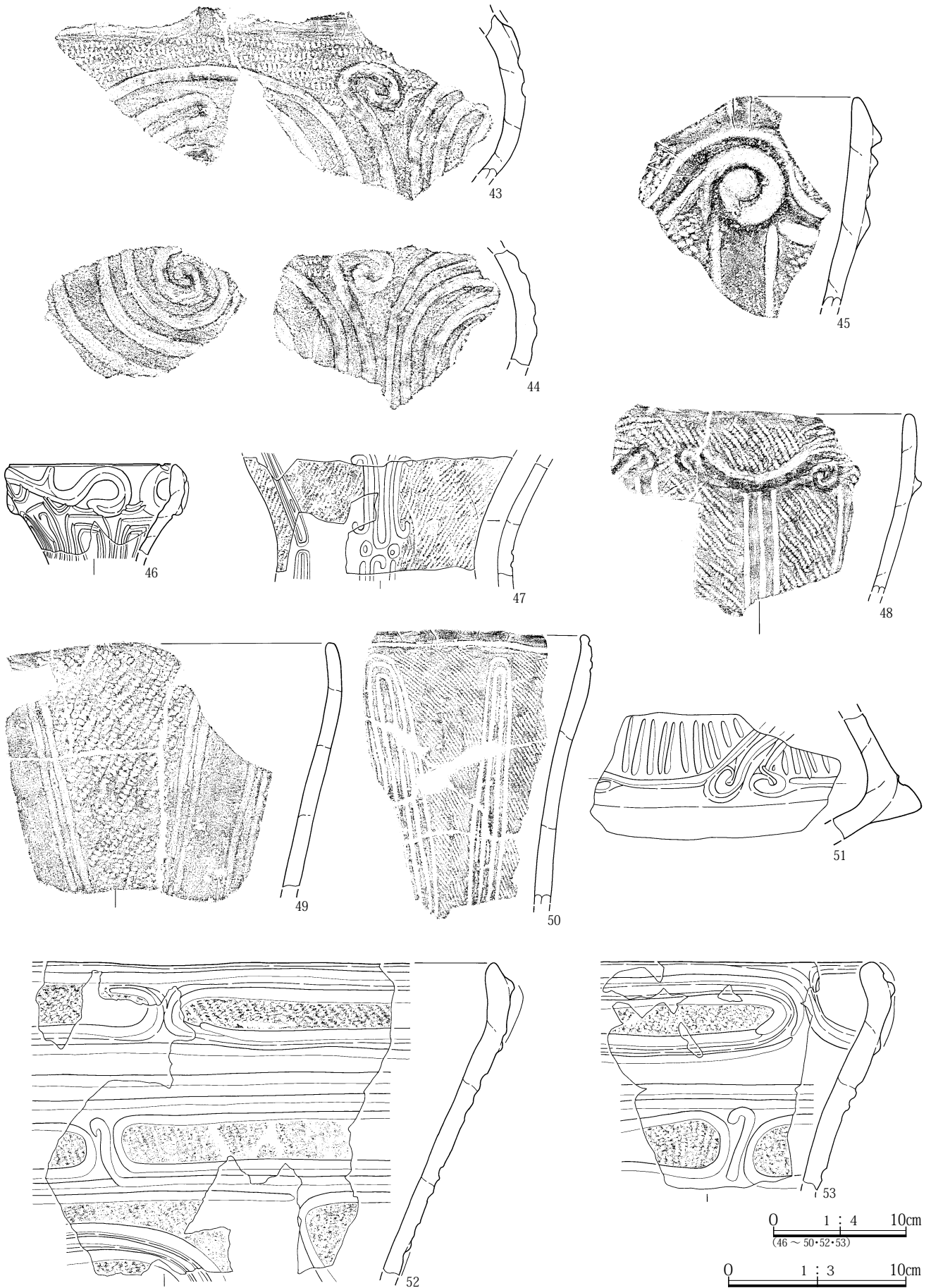
第57図 61区9号住居跡出土遺物(2)



第58图 61区9号住居跡出土遺物 (3)



第59図 61区9号住居跡出土遺物(4)

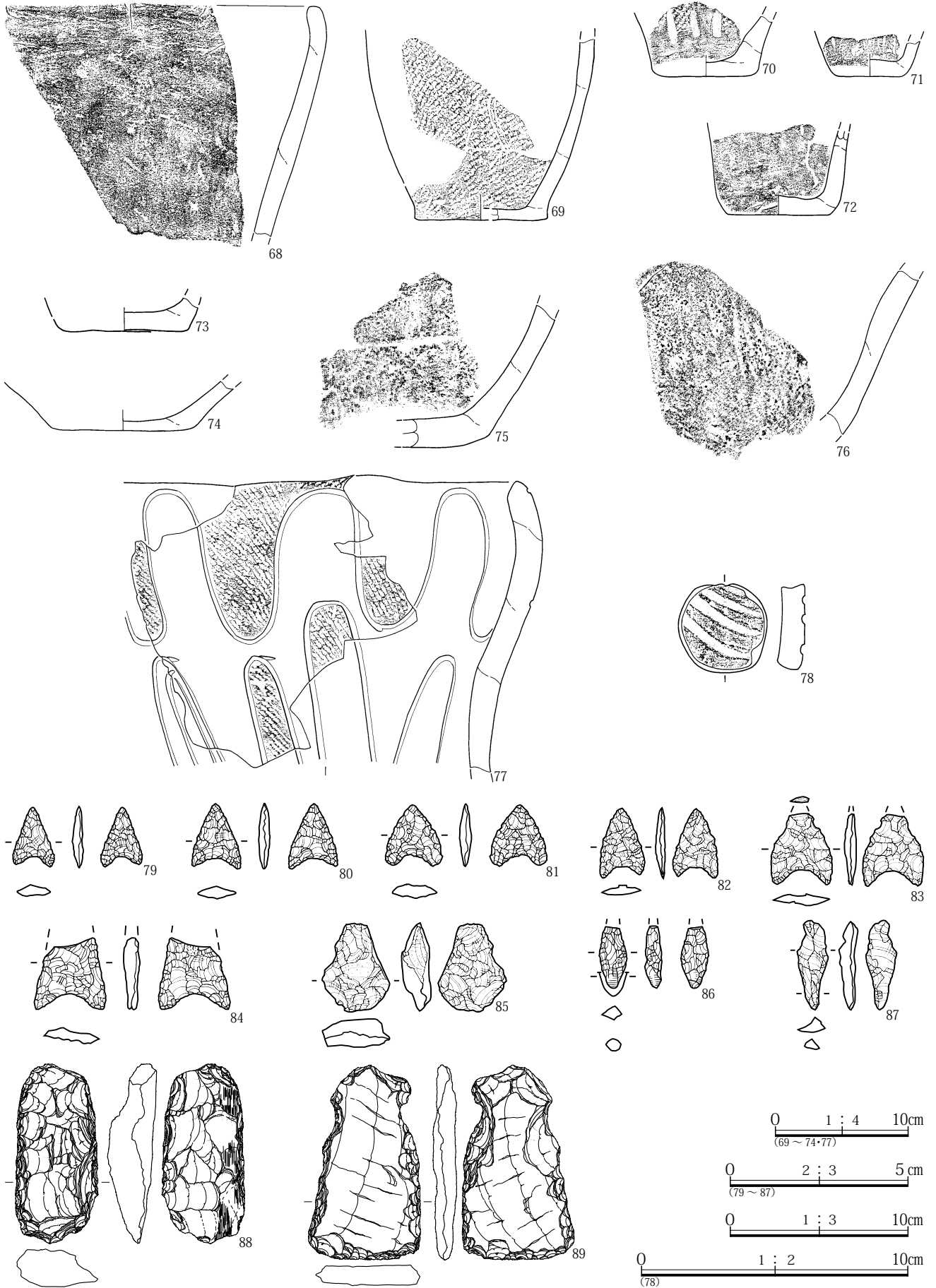


第60图 61区9号住居跡出土遺物 (5)

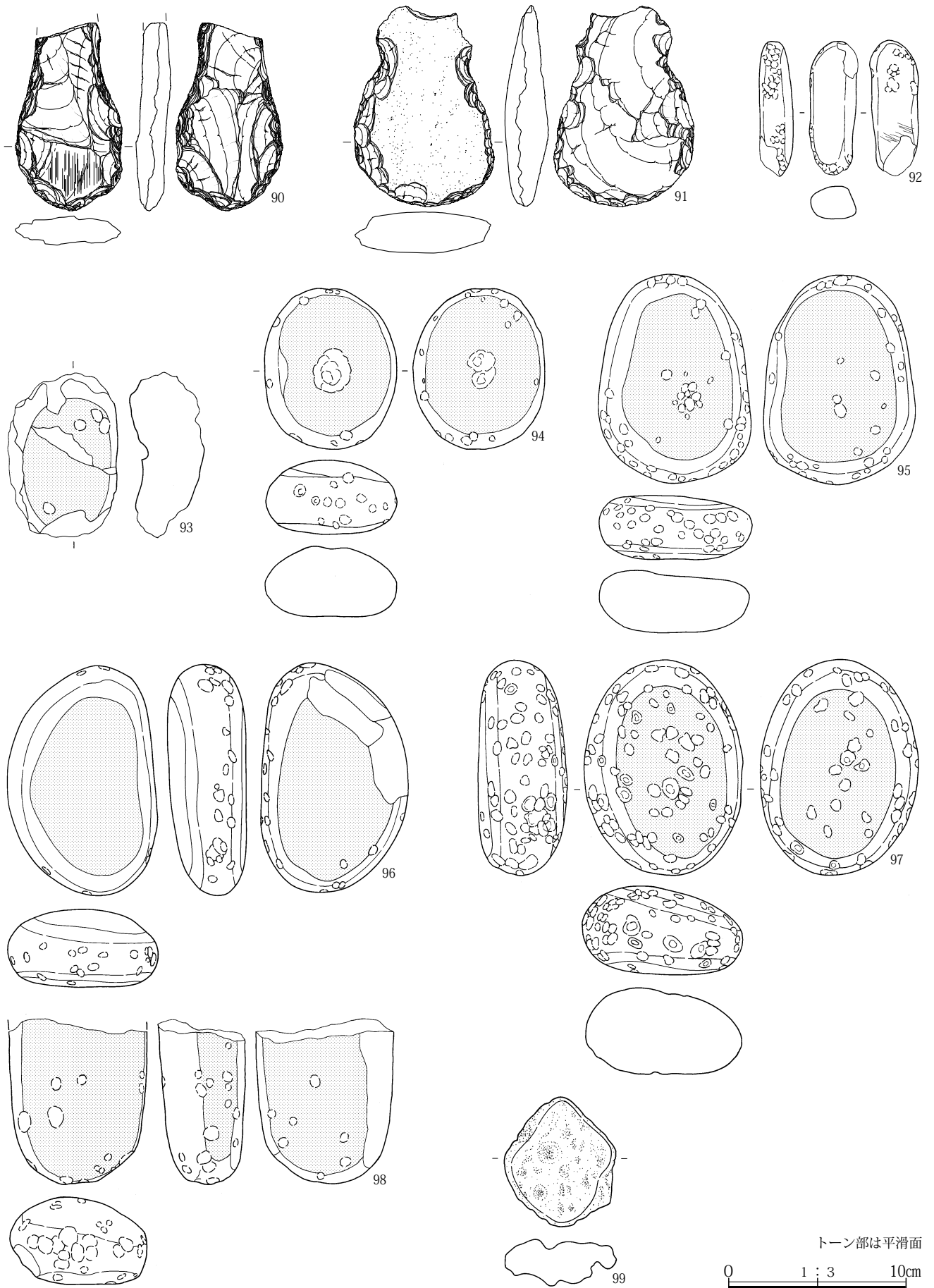


第61図 61区9号住居跡出土遺物(6)

第3節 住居跡 (61区)

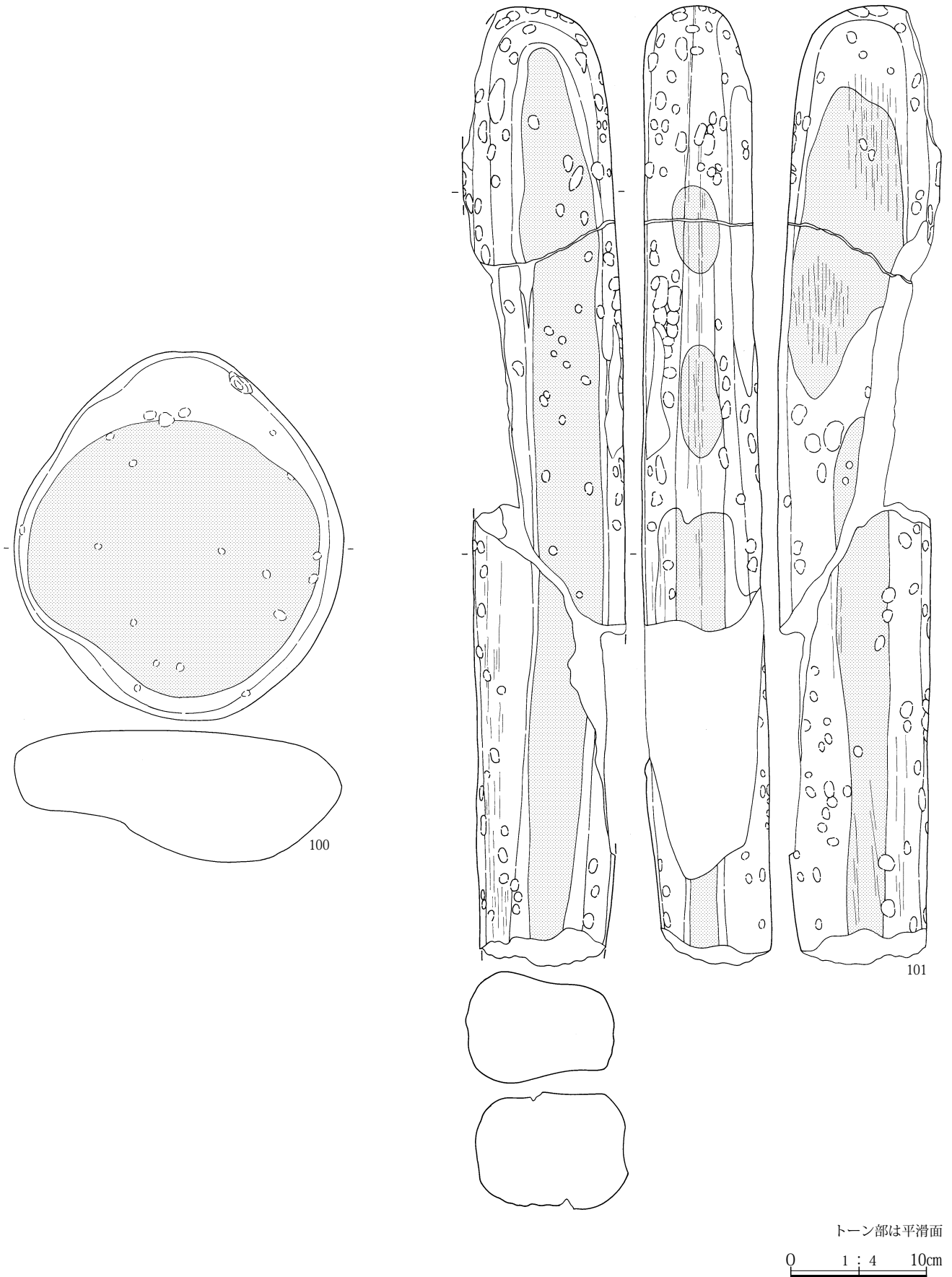


第62図 61区9号住居跡出土遺物 (7)



第63図 61区9号住居跡出土遺物(8)





第64図 61区9号住居跡出土遺物(9)

出土土器は豊富で、加曾利EⅢ式中段階の良好な組成を示す。また、炉に供された石棒片は11号住や22号住出土の破片と接合している。時期差のある住居跡であり、検討を要しよう。

61区10号住居跡 (第65図 PL. 5・58)

位置：調査区北東端で検出した。前述した1号住床面に重なる重複関係である。61区P-10グリッドに位置する。南西への緩傾斜地形にある住居跡群の中にあり1～3号住、7号・20号住が重複、近接する。

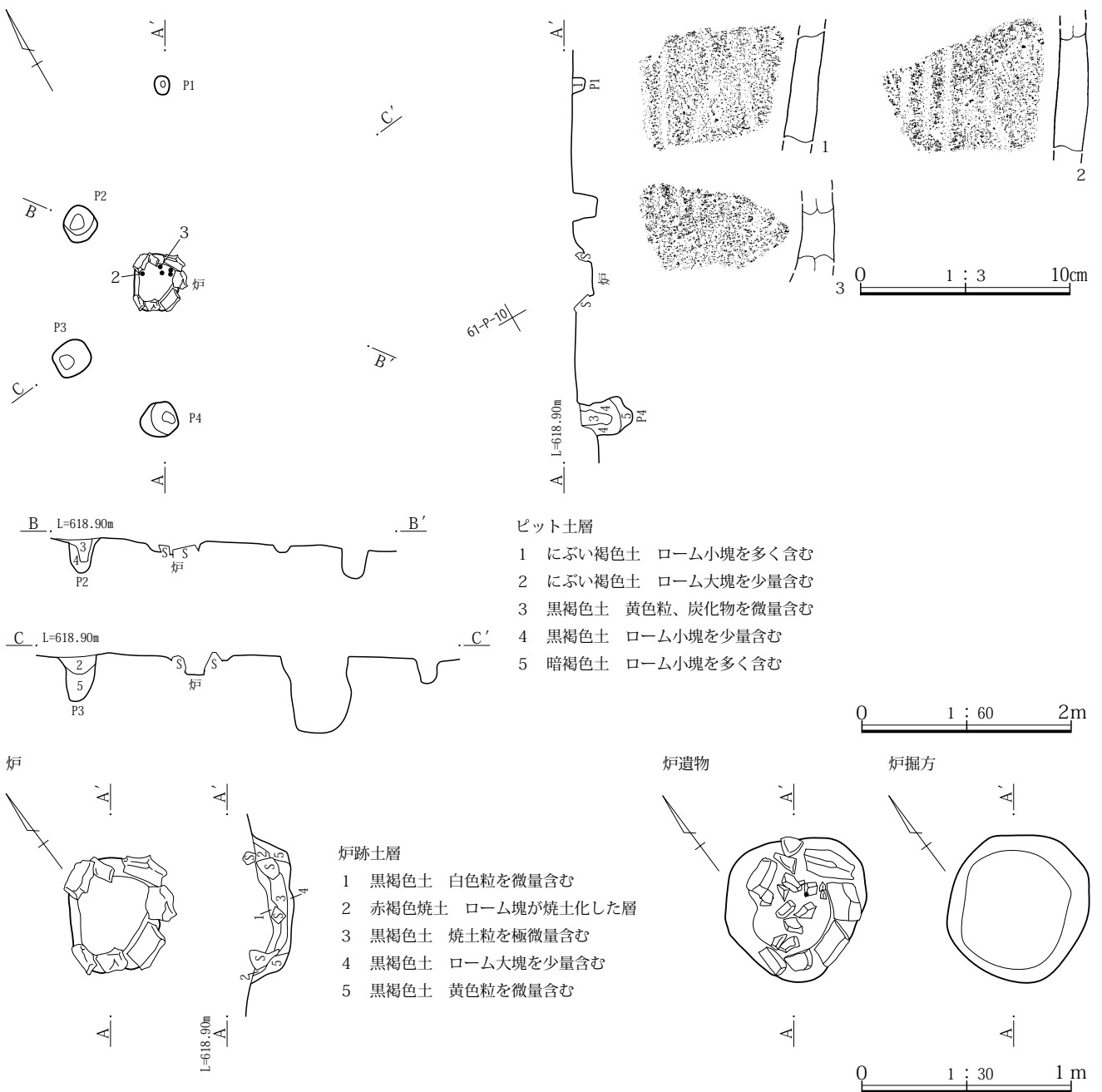
経過：1号住調査中に床面である黄褐色ローム中で小

型の石囲い炉が確認された。既に1号住炉は確定されており、1号住の炉とは別の住居跡炉と捉え、周辺に相当するピットを柱穴と位置付け、10号住居跡として調査した。

規模：平面形、規模とも不明である。深さも、壁の検出は果たせず、ほぼ平坦面での確認のため計測できなかった。遺存度は不良である。

重複：1号住床面で検出された。新旧関係は不明である。

床面：黄褐色ローム層を地床とする。硬化面などは見られなかった。



第65図 61区10号住居跡及び出土遺物

炉 跡:約56.0×50.0cmを測る不整形を平面形とする。深さは約22.0cmを測り、比較的良好な遺存度を示す。炉内は黒褐色土を主体とした埋土で、焼土塊などが堆積する。

柱 穴: 4基のピットを10号住に帰属させた。そのうちP2~P4が柱穴規模として妥当であるが、配置としては炉からの距離が1m以内であり、やや近接しすぎているきらいがある。問題点であり、検討を要する。

遺 物: 炉内遺物として土器片3点を図示し得た。いずれも器面磨滅した深鉢体部破片である。加曾利EⅢ式である。

所 見: 炉と柱穴のみの検出に止まった住居跡である。壁周溝などを見ないため、住居範囲も不確定であるため、平面規模など不明要素が多い。おそらく、1号住より新しい所産と考えられるが、詳細は不明のため詳細な判断は控えたい。

61区11号住居跡 (第66～69図 PL. 5・58・59)

位 置: 調査区北東部で前述の9号住と重複して調査された。北側に7・20号住が近接する。61区S-10グリッドに位置する。

周辺は南西側への緩斜面地形で、北側の7・20号住、

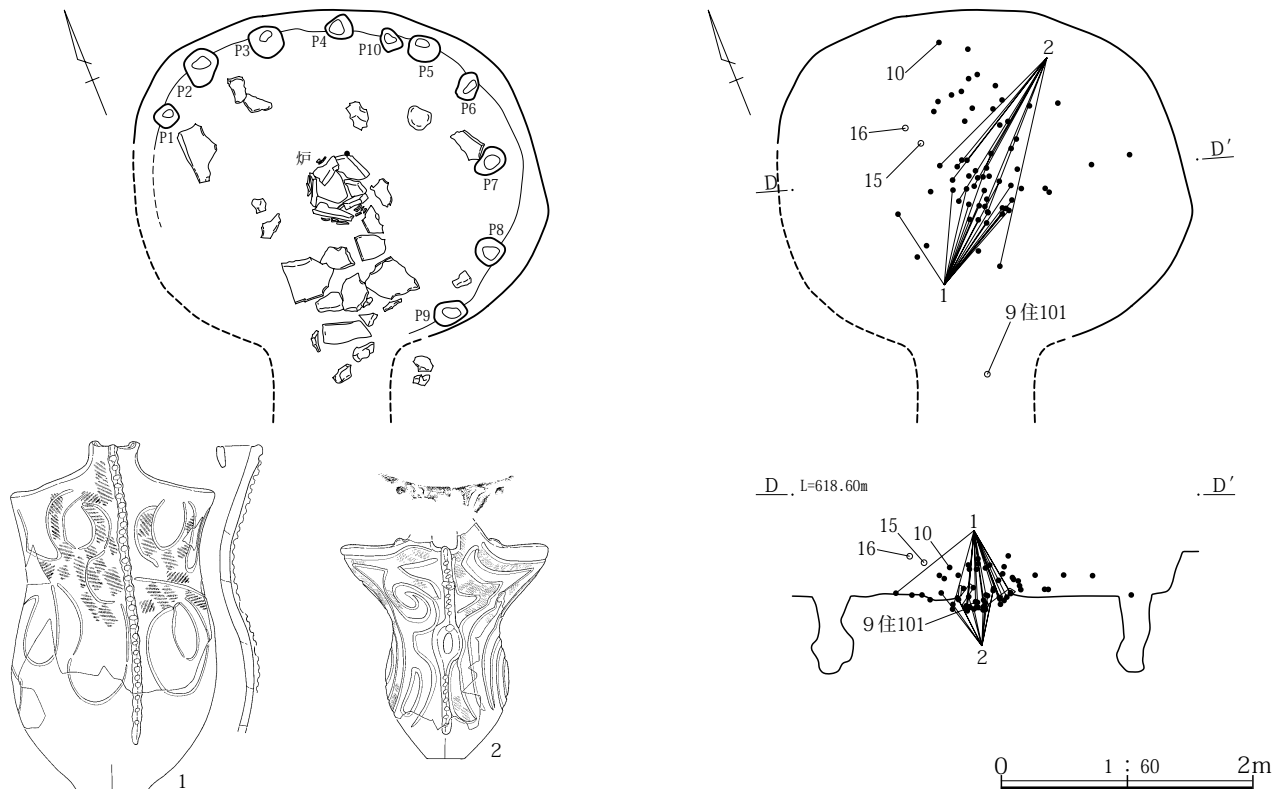
西側の9号住との重複もあり、ほぼ平坦地形での検出となった。

経 過: ローム漸移層上位の黒褐色土を遺構確認面とした。9号住が西側で検出されており、同時に調査されている。9号住に比して遺物の出土は少ないものの、床面検出に至り、炉跡、敷石が検出され敷石住居跡としての位置付けが果たせた。しかし、9号住と重複部分に予想された出入口部分は確認できなかった。

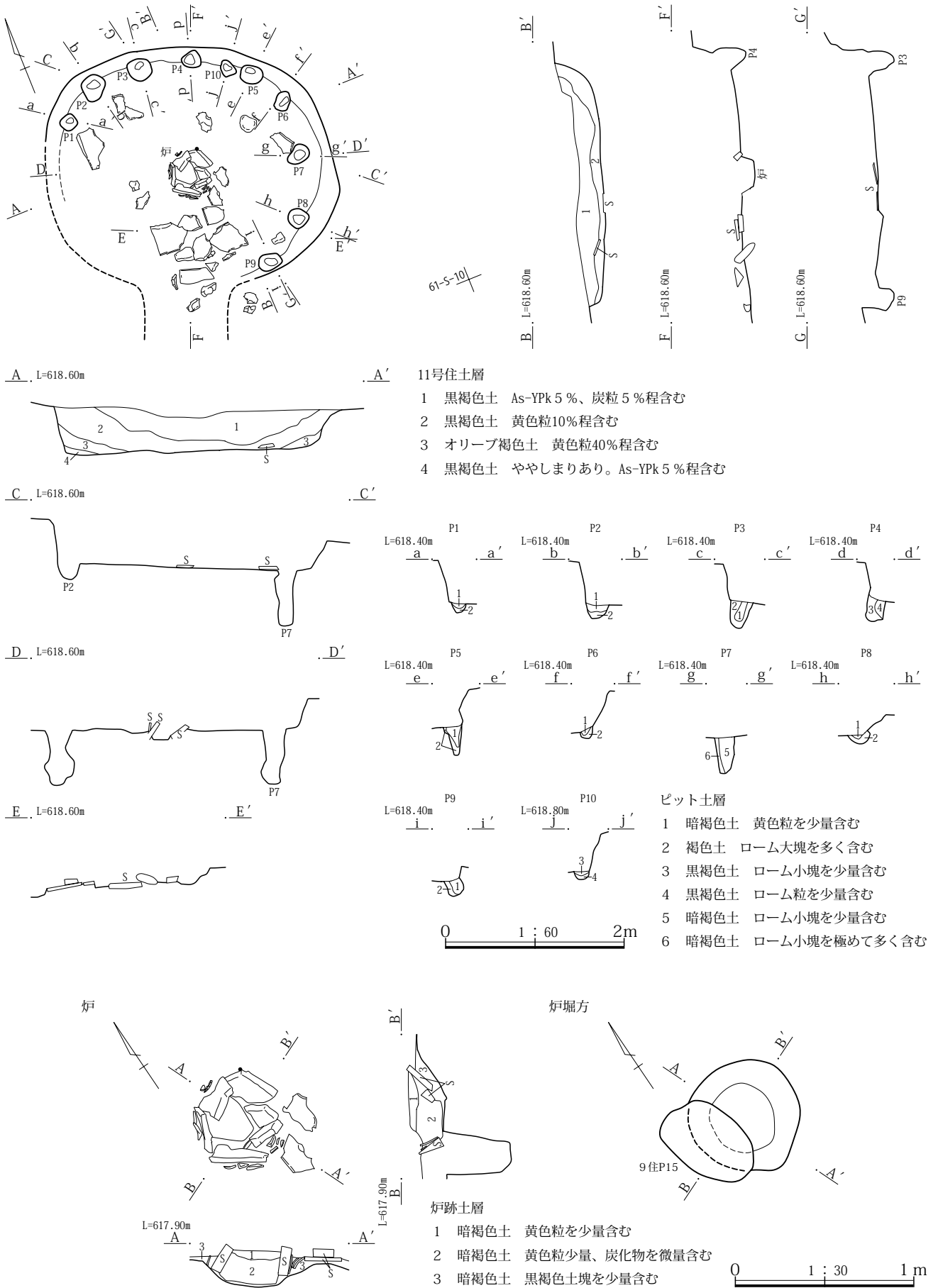
規 模: 住居部は径約(295.0)×325.0cmの小型円形を平面形とする。主軸は北北東を向く。深さは40.0cmを測り、壁の立ち上がりもしっかりしており、良好な遺存度といえよう。出入口部は、おそらく南側に突出すると思われるが、前述のように判然としていない。

重 複: 前述のように西側に大きく9号住が重なる。ほぼ同時に調査され、土層も両住居跡を跨ぐ軸に設定されなかったため、新旧関係は確定できなかった。整理段階で、9号住を中期後葉の所産と判断したため、本住居跡を後期初頭に時期が求められ、新旧の確定に至った。

床 面: 黄褐色ローム層を地床とし、ほぼ平坦面を築き、大きな傾斜や凹凸は見られなかった。炉南側にかけて敷石が集中的になされていた。敷石は東側から北側壁際に地点的に置かれており、意図的な配置と捉えられた。多



第66図 61区11号住居跡 (1)



第67図 61区11号住居跡 (2)

くが板石状の角礫を使用していたが、一部扁平な円礫も充てられていた。硬化面の顕著な箇所は見られなかった。  
 施設：床面ほぼ中央に石囲い炉を見る。柱穴は壁際に並ぶように検出され10基を数えた。その他で炉南の敷石の一部が出入口部の石囲い施設の可能性が想定された。埋糞などは見られなかった。

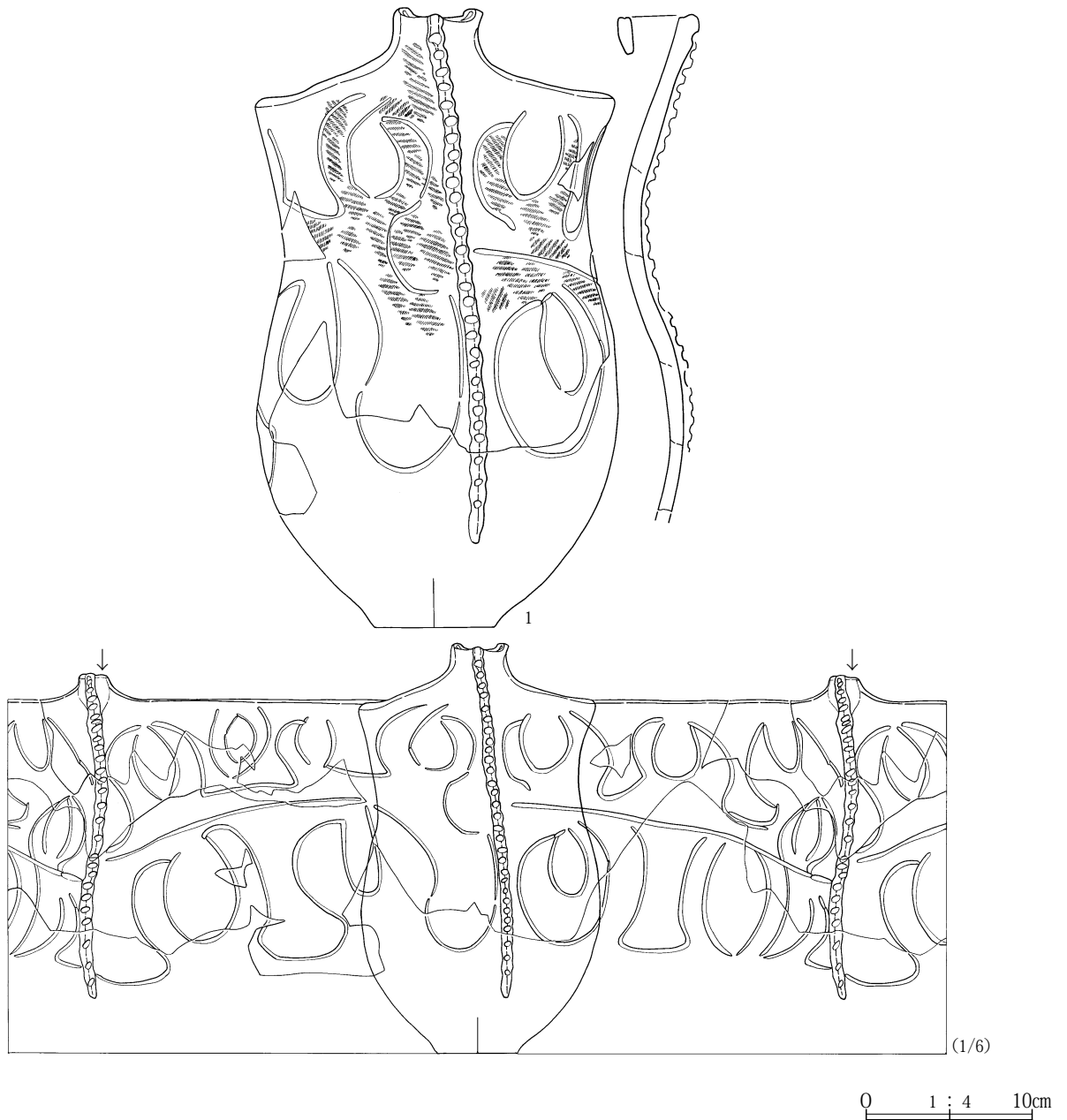
炉 跡：床面ほぼ中央にやや小型の石囲い炉を設ける。規模は78.0×54.0cmの不整形を平面形とし、深さは18.0cmを測る。周囲を板石状の角礫で囲繞しているが、廃棄時の破壊か、原位置がずれた状態で検出されている。おそらく整った方形を呈していたと想起されよう。また、炉内及び炉石間に深鉢片が集中しており、これも廃棄時

の所産と捉えることができよう。炉内埋土は暗褐色土を主体に少量の炭化物を見る程度で、大きな特徴はない。

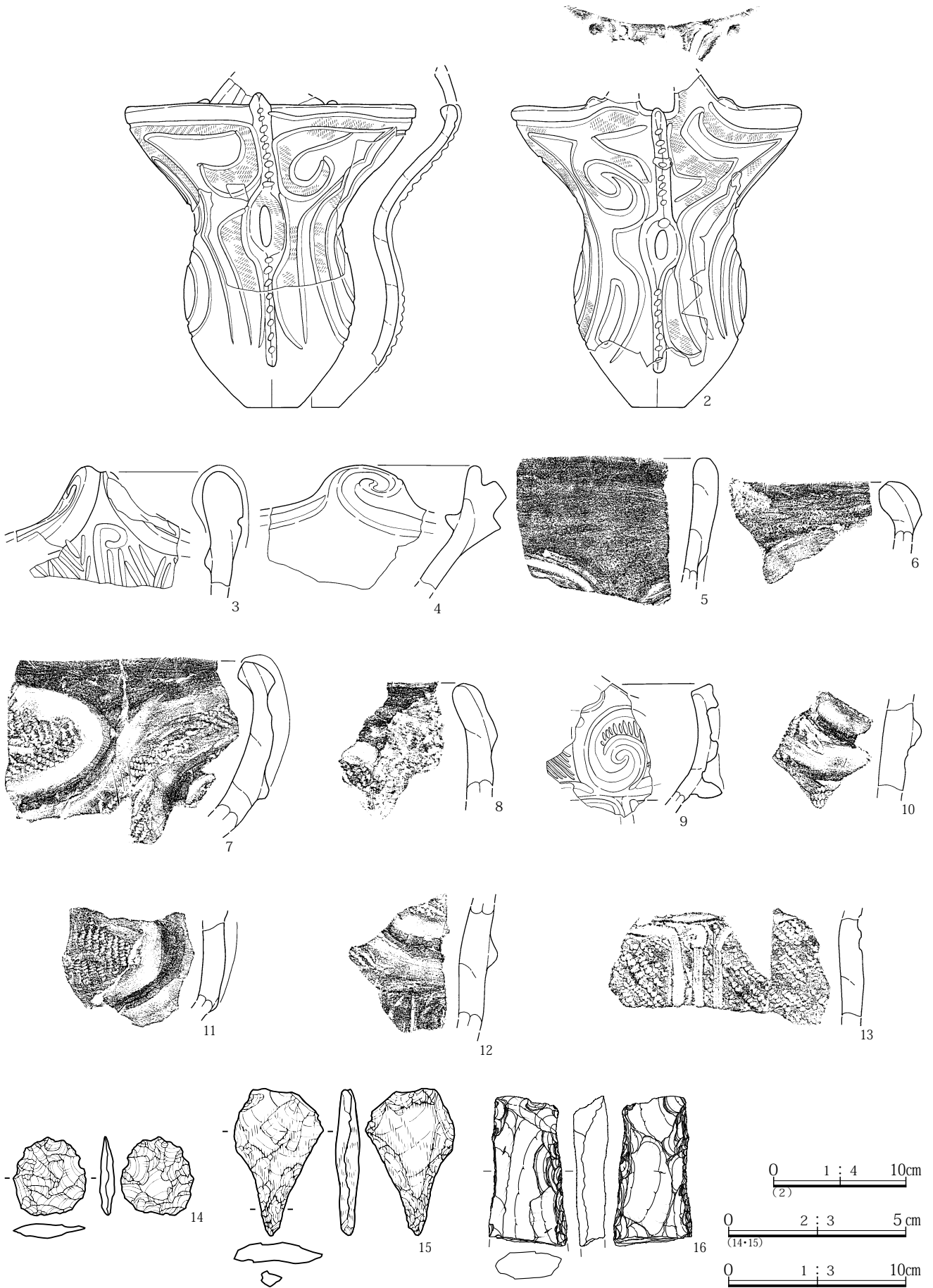
柱 穴：壁際に10基のピットを検出した。いずれも小規模な例で、壁柱穴として位置付けられよう。また、9号住に帰属する柱穴、ピットとした9住P9、P12も配置的に本住居跡壁際にあたり、壁柱穴としての位置付けも可能性が高い。

出入口部石囲い施設：石囲い炉南に敷石が集つまるが、一部が囲繞形態を示す。調査時に施設として位置付けて居ないため、敷石の一部として報告されているが、あるいは石囲い施設の可能性もある。

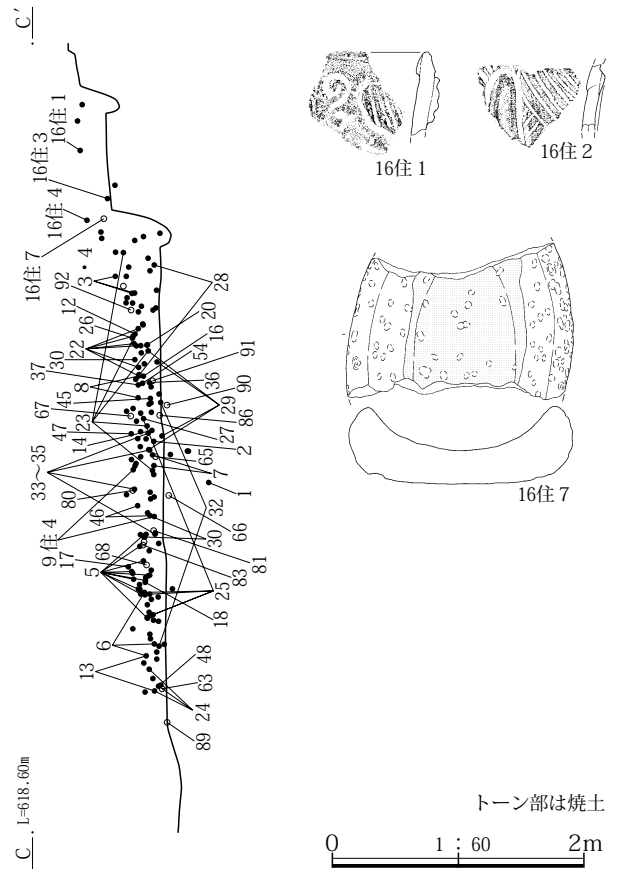
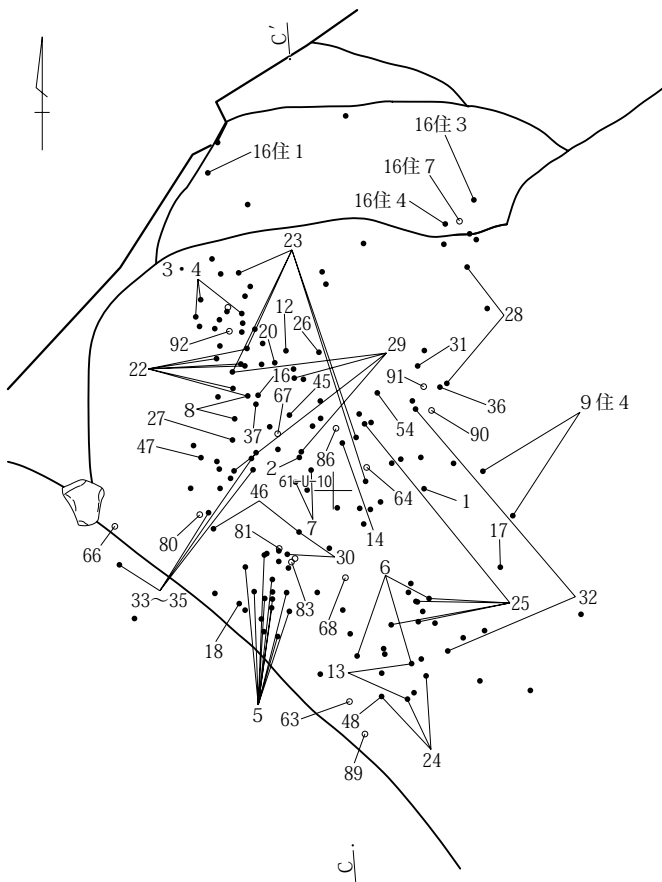
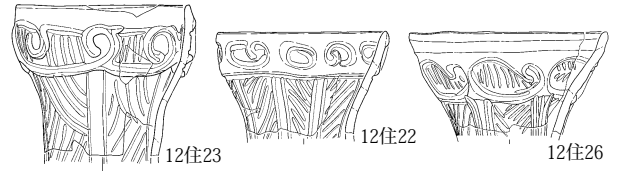
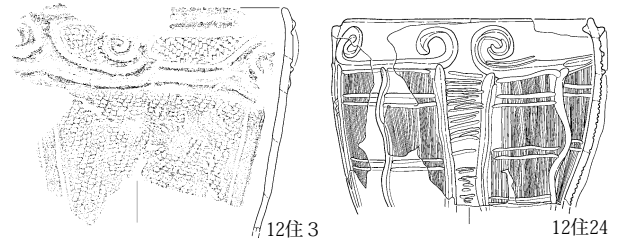
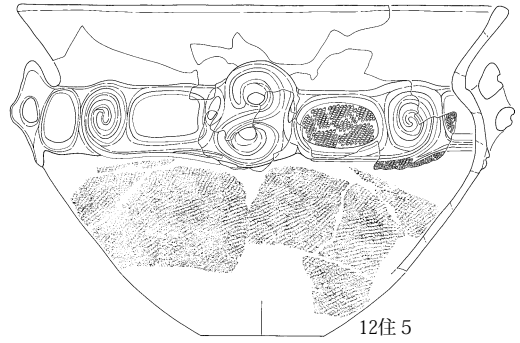
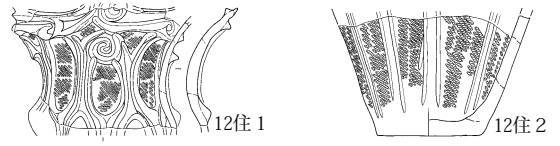
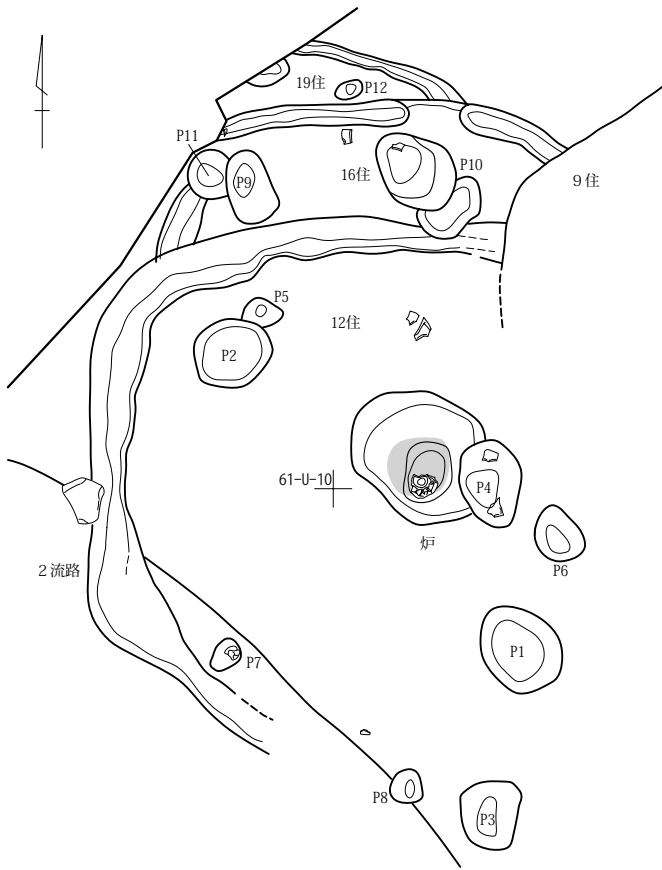
遺 物：出土量は少ない。石囲い炉周辺に深鉢2個体(1、



第68図 61区11号住居跡出土遺物 (1)

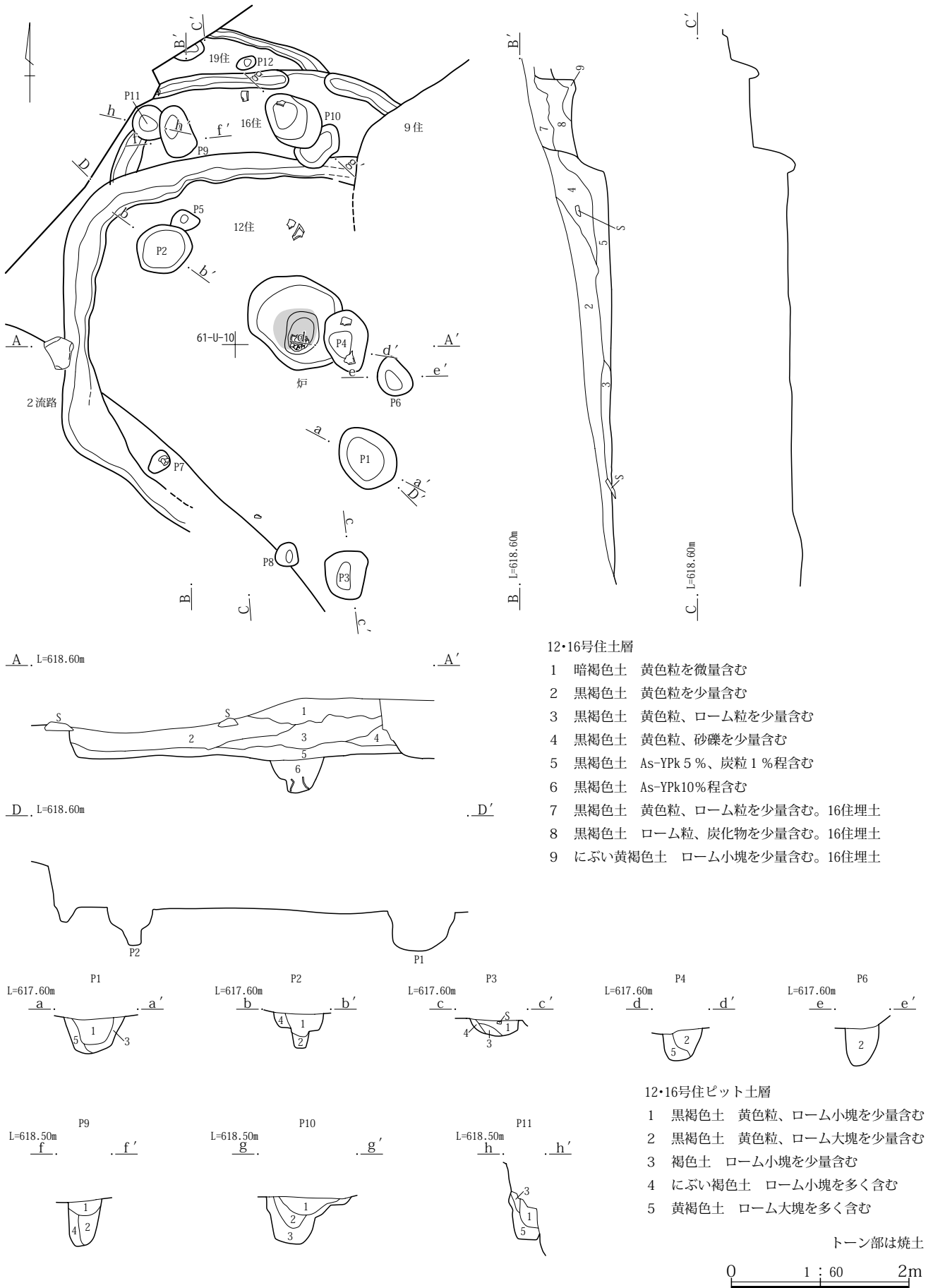


第69図 61区11号住居跡出土遺物(2)

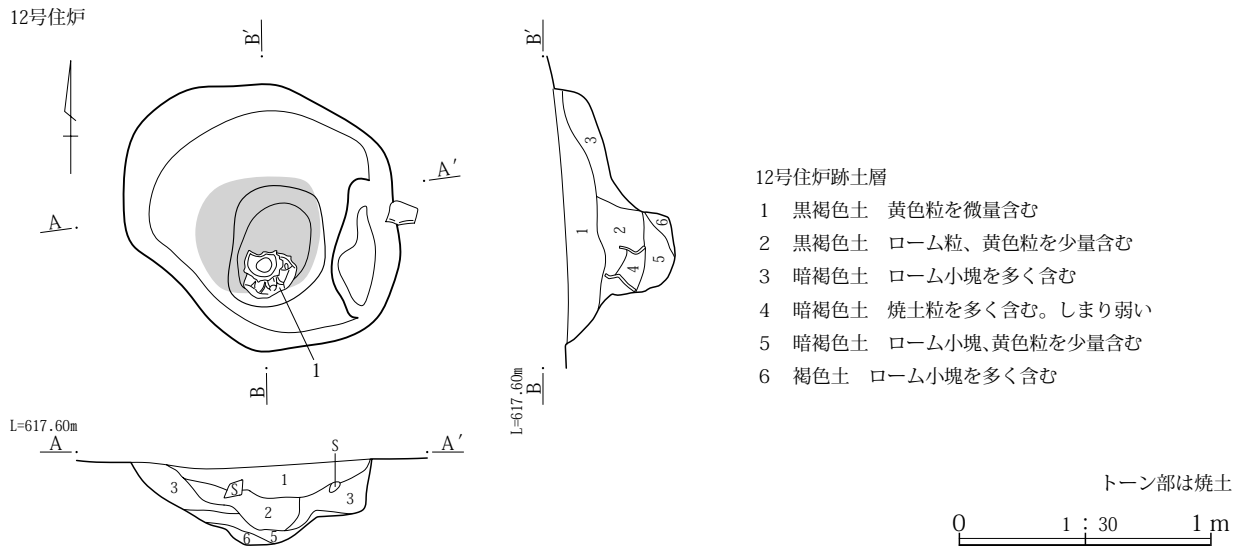


第70図 61区12・16・19号住居跡 (1)





第71図 61区12・16・19号住居跡(2)



第72図 61区12・16・19号住居跡 (3)

2) が集中する。2 個体とも称名寺式に比定され、住居廃棄時の所産と捉えられよう。その他の土器片、石器は埋土中の出土で本住居跡には伴う例では無いと考える。中期後葉に比定される。

所見：敷石住居跡である。出入口部の様相は 9 号住との重複のため不明である。住居部は石囲い炉を設け、炉南に敷石を集める。壁柱穴が連なり、地点的に敷石が置かれる。出入口部石囲い施設の存在が示唆されるがこれも不明である。時期は後期初頭と判断した

61区12・16・19号住居跡 (第70～78図 PL.5・6・59～63)  
位置：調査区北東部に位置し、前述の 9 号住と重複して調査された。周辺は南への緩傾斜地形を呈し、重複住居群の影響もありほぼ平坦地形での検出となった。ただし、南端は傾斜地形がやや強く、また後世の自然流路の存在があり、そのため12号住南端の残存はやや悪い。位置するグリッドは61区T・U- 9・10グリッドである。9号住との重複以外の周辺遺構としては、南東に17号住居跡、南に26号住居跡、56坑や57坑が近接する。

経過：ローム漸移層上位である黒褐色土で確認した。周辺の 9 号住などの出土遺物が多いため、確認面を下げられず、かつ石囲い炉などが露出していたため、上層で確認することになった。9 号住とともに数軒が同時に調査された。これは各住居跡を個別に分別できずに調査したためであり、調査最終段階になり 3 軒の住居跡の重複であると判断できた。

規模：12号住は南側を流路、東側を 9 号住の存在のた

め判然としないが、軸長約5m前後の不整形を呈する平面形であろう。北側で深さ88.0cmを測るが、南側は斜面地形も影響して壁は流失している。

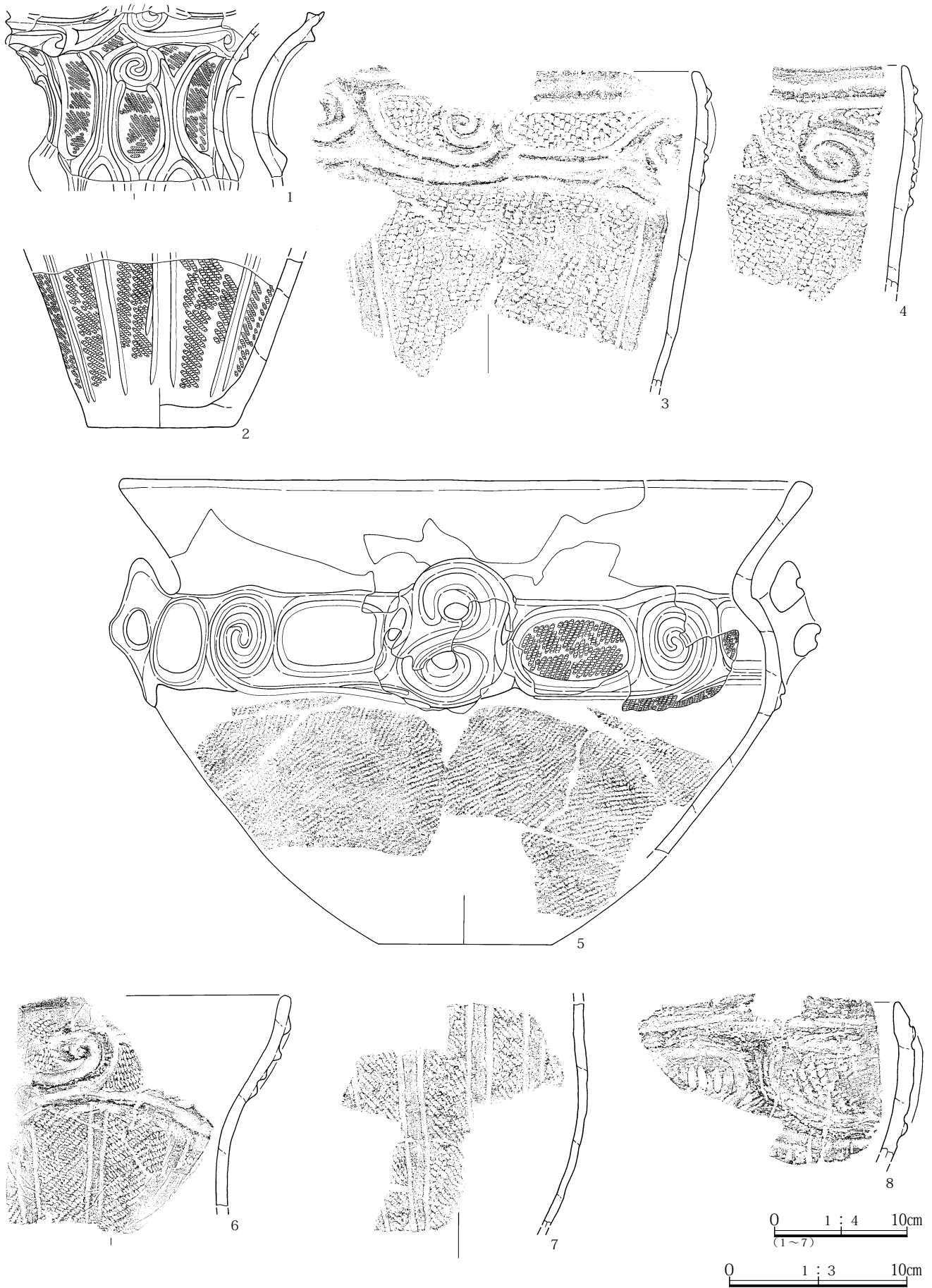
16号住、19号住とも残存部分、調査範囲が少なく、平面形など確定できなかった。深さは16号住が約46.0cm、19号住が約20.0cmの計測値を見るのみである。

重複：12号住・16号住・19号住の新旧は、土層観察により、12号住が16号住を切る重複関係を見た。19号住に関しては16住や12住範囲内に炉などの付帯設備が見られなため、最も古い住居跡として考えた。次に、9号住との新旧であるが、これも土層観察により9号住が12号住を切る様相が把握されている。

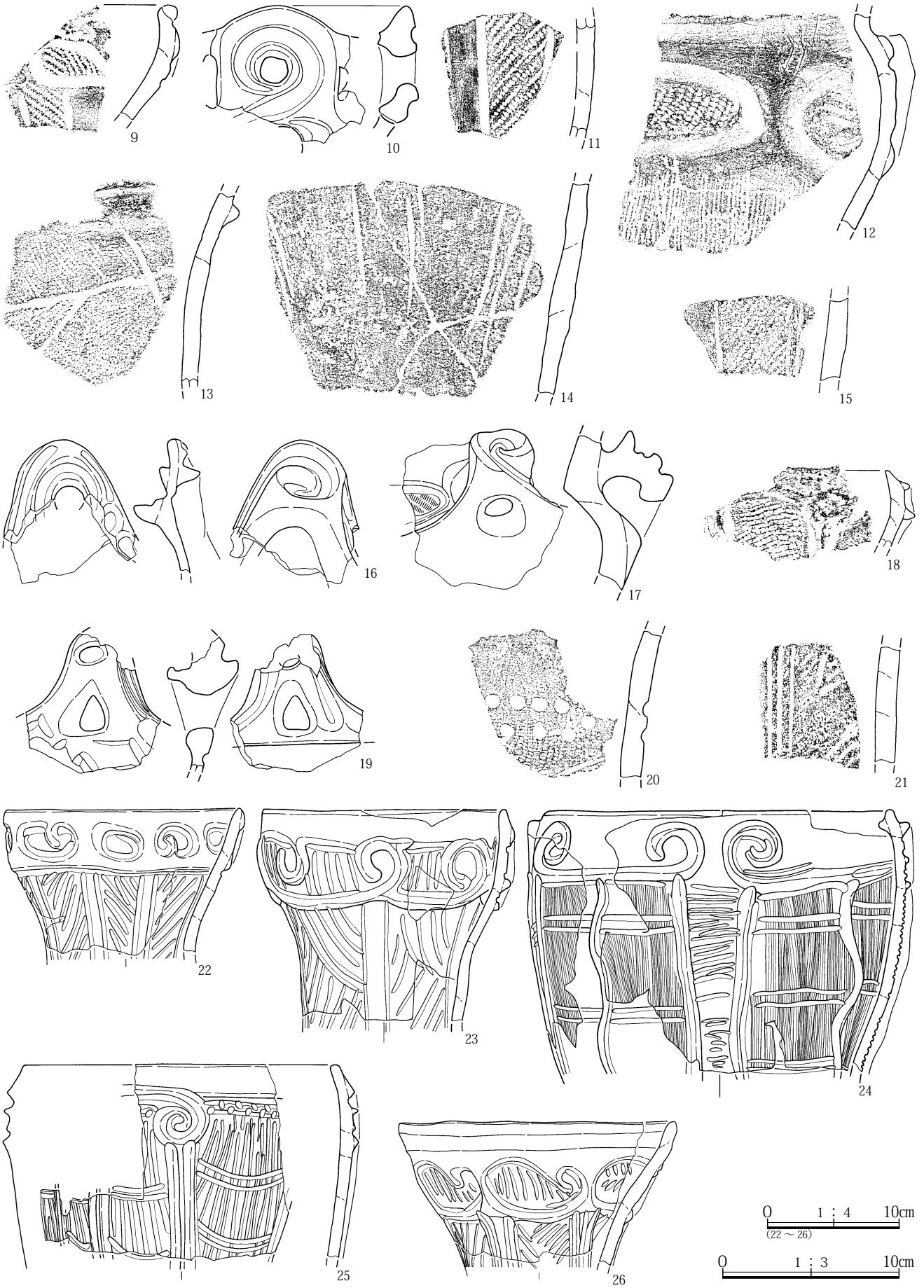
床面：3軒とも黄褐色ローム層を地床としている。12号住は僅かな凹凸を見るもののほぼ水平な平坦面を築く。16号住、19号住ともに、床面の残存度は悪いが、平坦面を築くのであろう。硬化面は12号住炉跡周辺から北側にかけて広い範囲で確認できた。

施設：12号住床面に地床炉を見る。径約106.0×106.0cmを測る不整形を呈し、深さは最深部で49.0cmで、中央部分が一部深くなる。中央部分に炉内土器(1)が逆位に埋置されていた。体部上半のみの残存で上下は意図的な欠損と捉えられよう。被熱痕跡も体部中位に顕著に残る。埋土は黒褐色土～暗褐色土でローム粒を混在する。焼土粒は炉内土器埋土に残存していた。

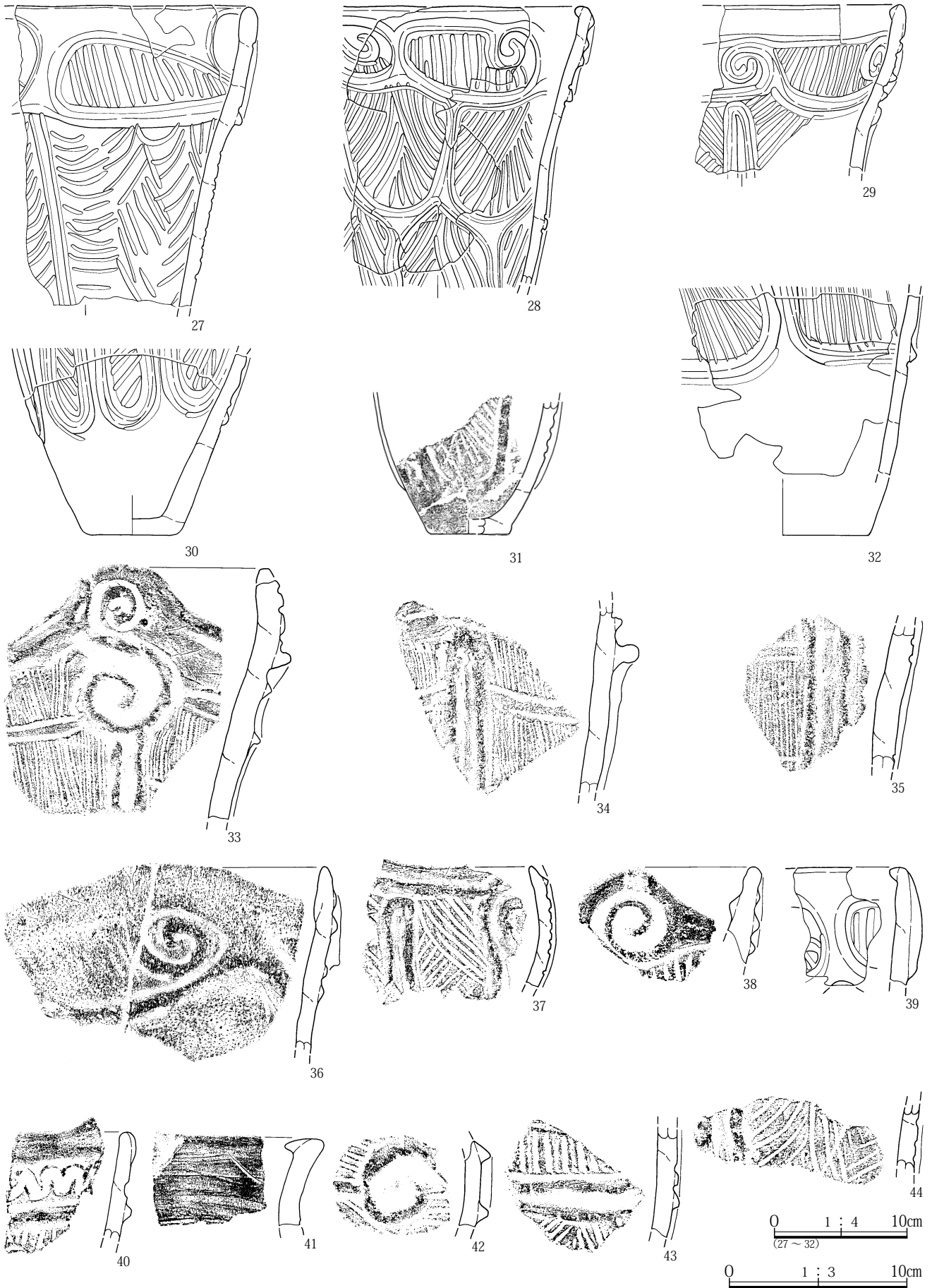
壁周溝：12号住は北壁から西壁と南壁の一部が残る。南辺は流路と斜面地形で、東辺は9号住との重複で判然としない。16号住、19号住とも北壁際の壁周溝を確認して



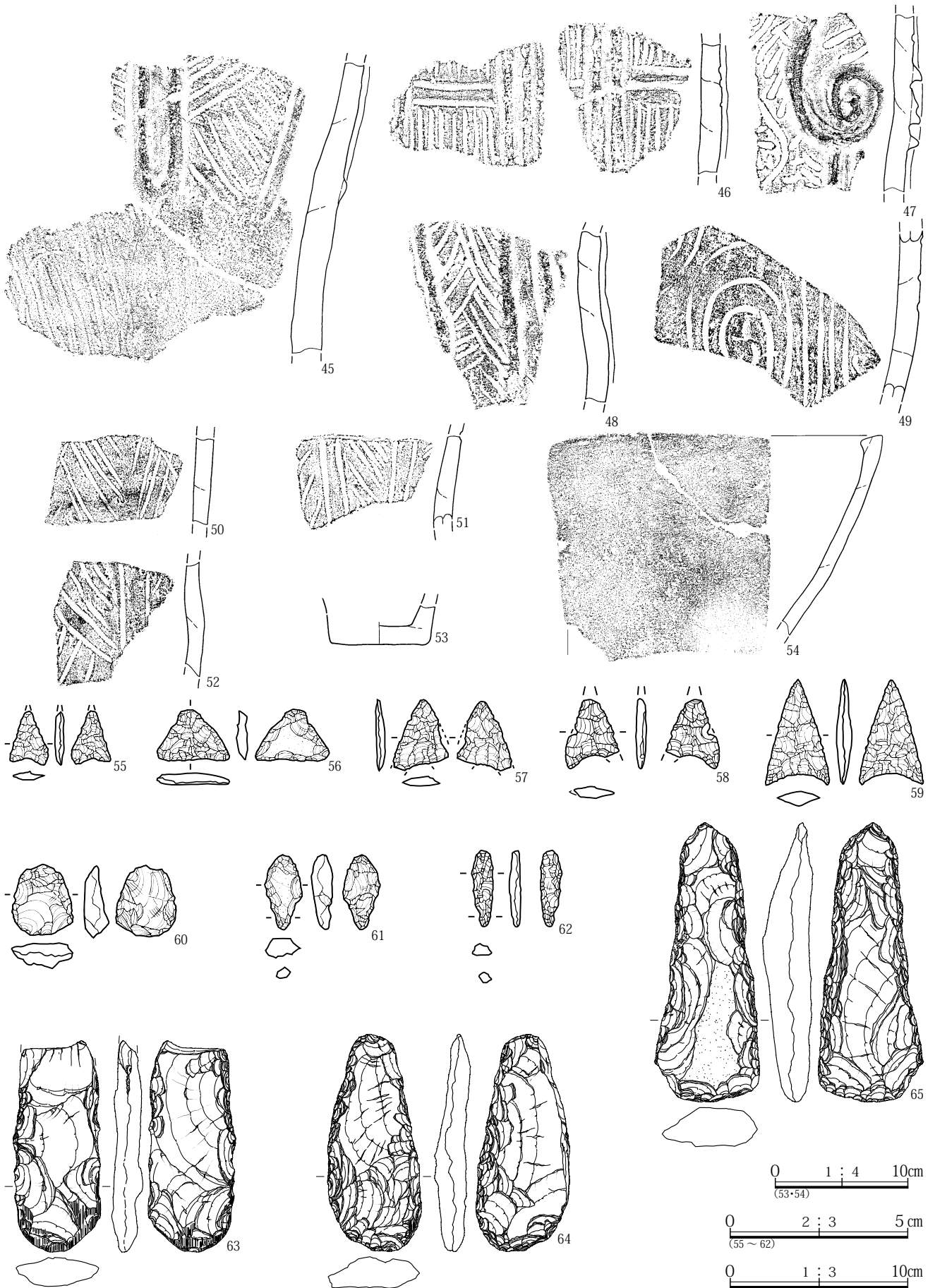
第73図 61区12号住居跡出土遺物(1)



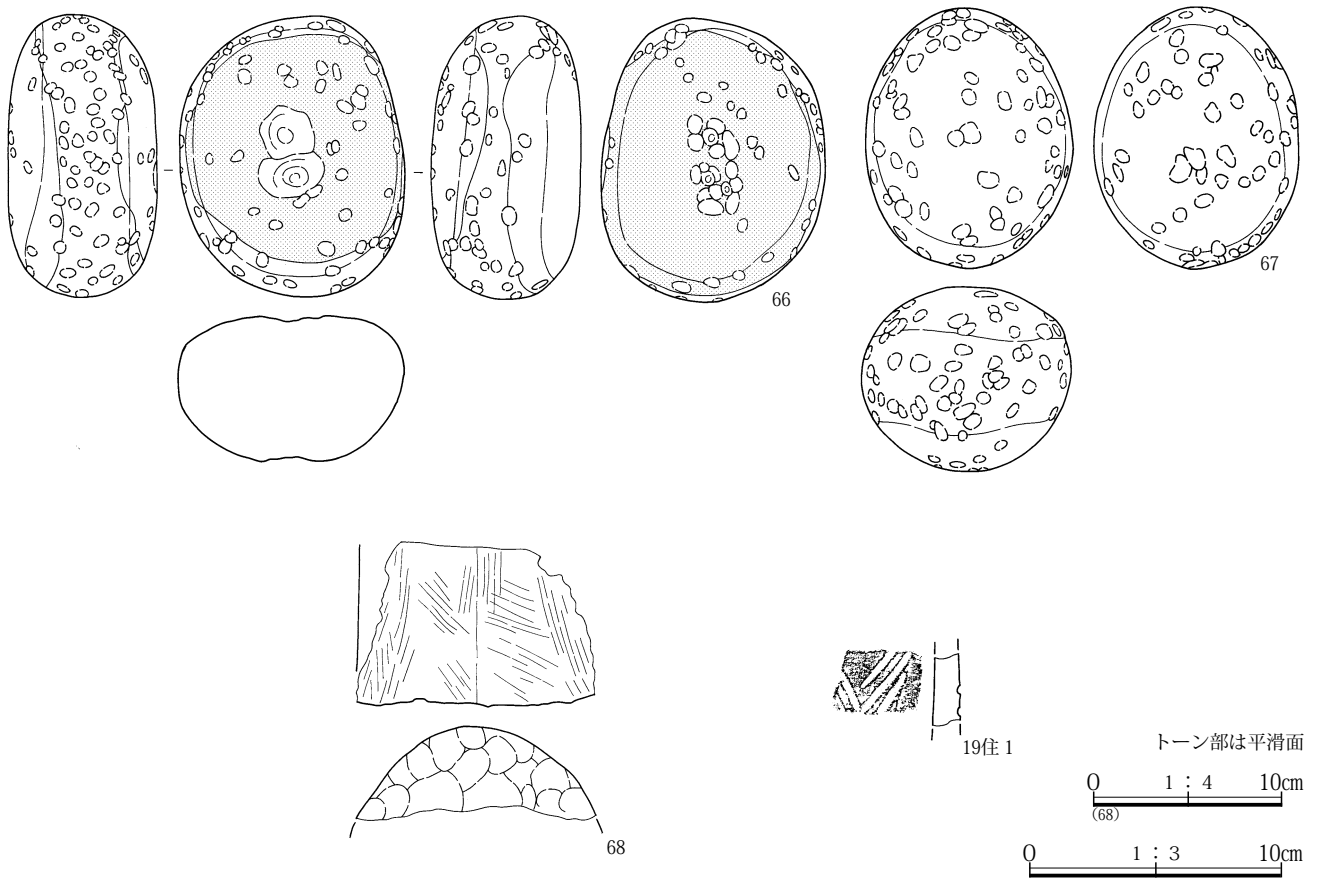
第74图 61区12号住居跡出土遺物 (2)



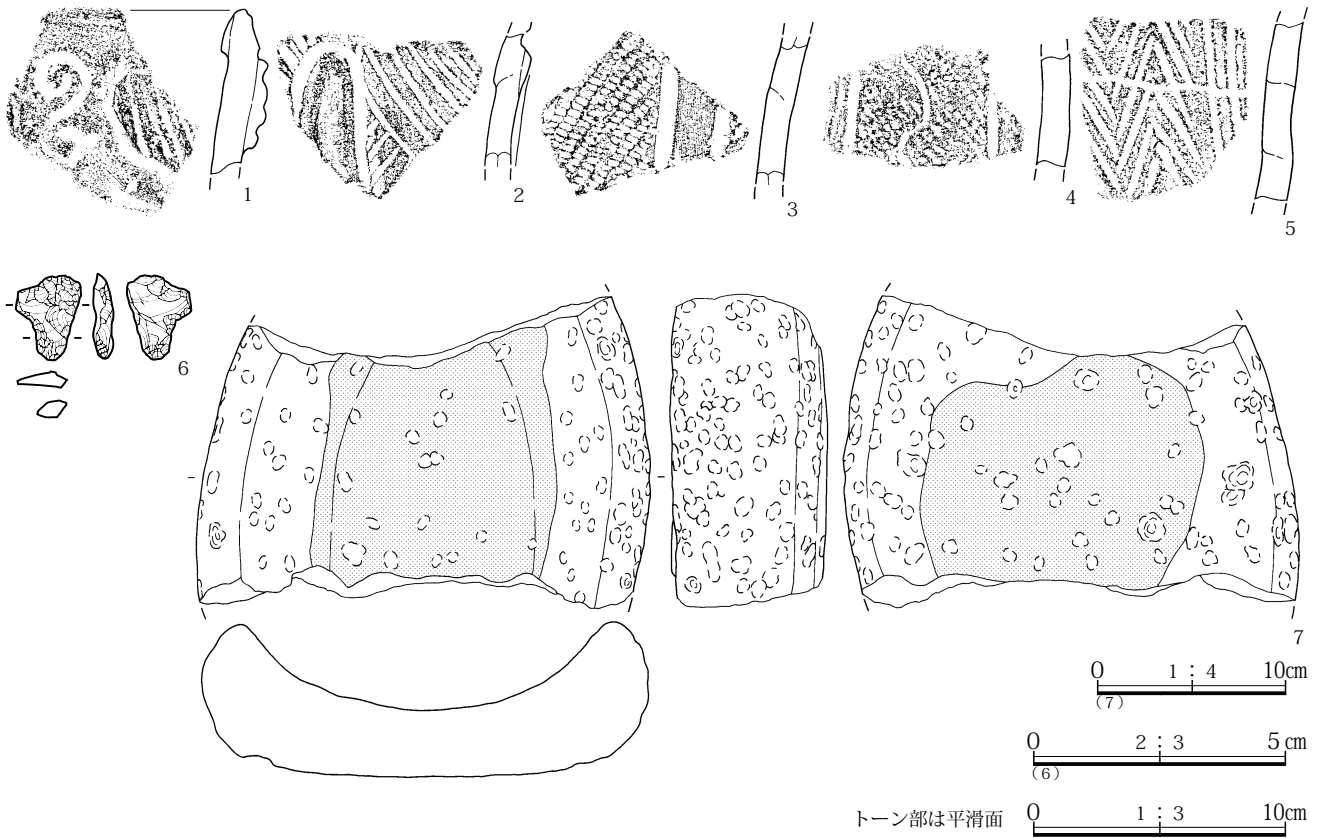
第75図 61区12号住居跡出土遺物 (3)



第76图 61区12号住居跡出土遺物 (4)



第77図 61区12号住居跡出土遺物(5)・19号住居跡出土遺物



第78図 61区16号住居跡出土遺物



いる。16号住は北壁中間に途切れを見る。あるいは奥壁柱穴(P10)に関わる奥壁施設の痕跡だろうか。

柱 穴：12号住床面上にP1～P8、16号住床面にP9～P11、19号住床面にP12を検出した。規模、配置からは12号住の例ではP1、P2、P6に妥当性が求められるが、全体の配置は不安定であり、柱穴としての積極性に欠ける。同様に16号住P10も奥壁柱穴の位置に該当するが、その他の柱穴に不明要素が多く、確定的ではないだろう。柱穴に関しては、各住居跡とも良好な配置、規模を示す例が少ないと判断した。

遺 物：12号住にまとまった出土量が見られる。炉内土器(1)は「屋代類型(大木9式)」と見られ、異系統土器と位置付ける。さらに加曾利EⅢ式古段階の土器群(2～21)と「郷土式」(22～52)を主体とする信州系の土器群が共存する組成を示す。若干ながら「郷土式」に比重が偏った組成だが、これらは時期的な組成比率が反映するものと考えている。16号住では12号住境の壁際で石皿(16住7)が出土している。尚、3軒から出土した土器の比較を試みたが、明瞭な時期差は具現化していない。

所 見：3軒の重複住居跡を一括して取り扱ったが、斜面地形と相互の重複により、不明な要素が多い。新旧に関してだが、東側に重複する9号住が一番新しく、加曾利EⅢ式中段階と前に述べている。ここに述べた12号住が加曾利EⅢ式古段階、16号住、19号住は土層の観察により12号住に切られる新旧関係が把握された。

#### 61区17号住居跡(第79～85図 PL. 6・63～65)

位 置：調査区北東部の9号住南側で重複して検出された。西側にも26号住が重なる。61区S・T-8・9グリッドに位置する。南側への緩やかな斜面地形にあり、ほぼ平坦地形にあるといえよう。北側から東側は斜面地形がやや強いため、本住居跡の北側壁などの遺存は良好に残っていた。北に重複する9号住は11号住や12号住と一群をなす。さらに西にある26号住は小型ながら45坑や56坑、57坑と重複し、本住居跡には51～55坑が重複・群在する。このように遺構密集地点の中核ともなる箇所立地する。

経 過：遺構確認はローム漸移層下位である暗褐色土で行った。ただし、周辺遺構との重複関係を把握するため

に設けた土層ベルトでは黒褐色土中の確認が果たせた。遺構確認中に広く遺物が出土し、集中する傾向が把握されたため住居跡としての調査を進めた。その結果、床面中央付近で小型の地床炉を確認し、壁周溝が北壁を中心に円形の走行を示したため、17号住として位置付けた。ただし、既に壁の殆どは逸してしまい、壁周溝と僅かな壁の立ち上がりによる平面形把握となった。

規 模：平面形は径約655.0cmの大型不整形円形を呈する。これは、壁周溝確認面の数値のため、実際はもう一回り大きな数値が予想されよう。深さは前述のように、計測値は果たせないが、土層ベルト中の観察では45cm以上の壁高を測った。

重 複：9号住と26号住との重複関係は、両住居跡とも本住居跡を切る新旧関係と判断した。9号住は土層観察でも明瞭な新旧関係が観察され、26号住とは出土土器からの判断に委ねた。26号住は中期末葉～後期初頭の所産であろう。その他の土坑との新旧関係は不明である。おそらく土坑の方が新しいと考えている。

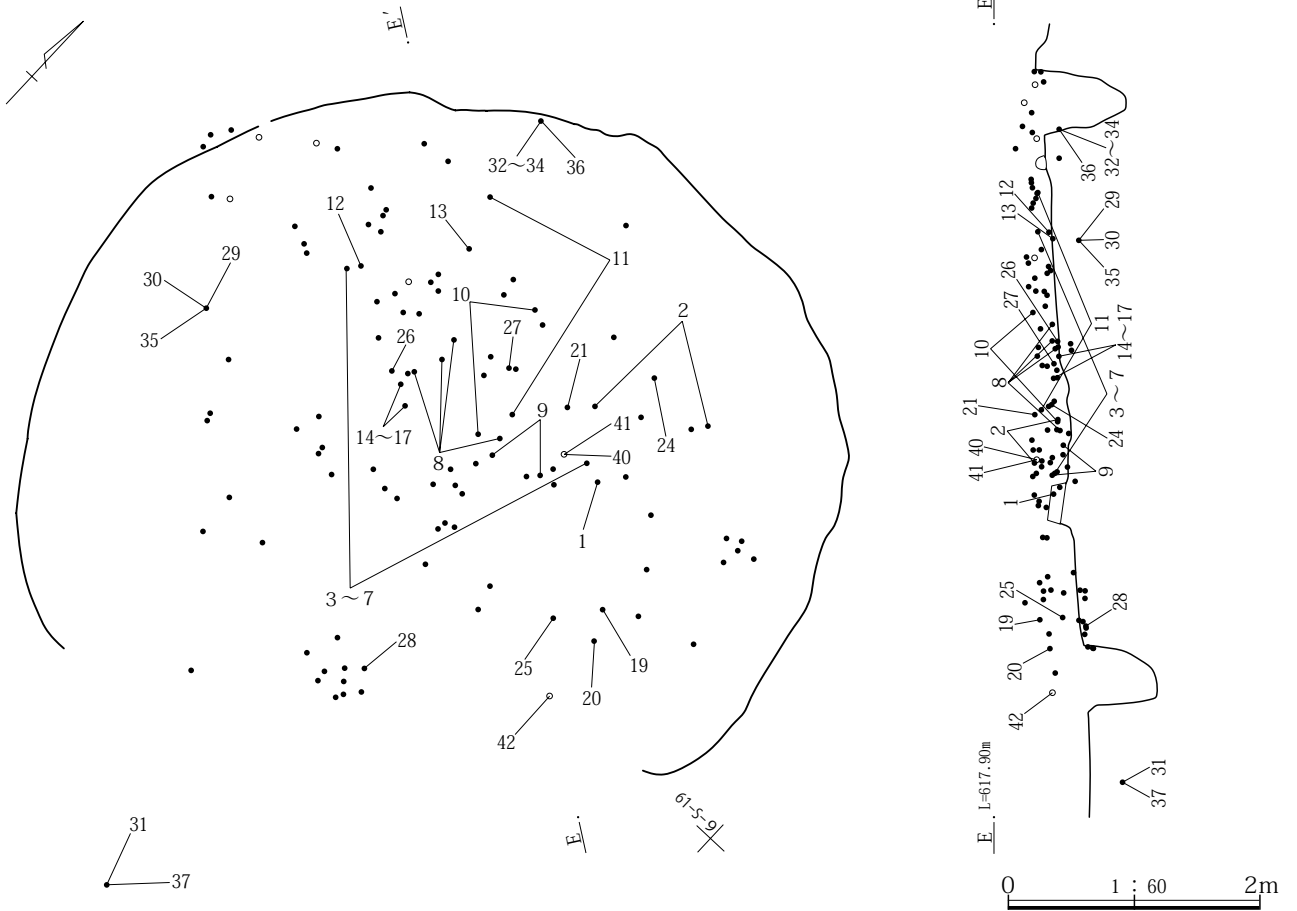
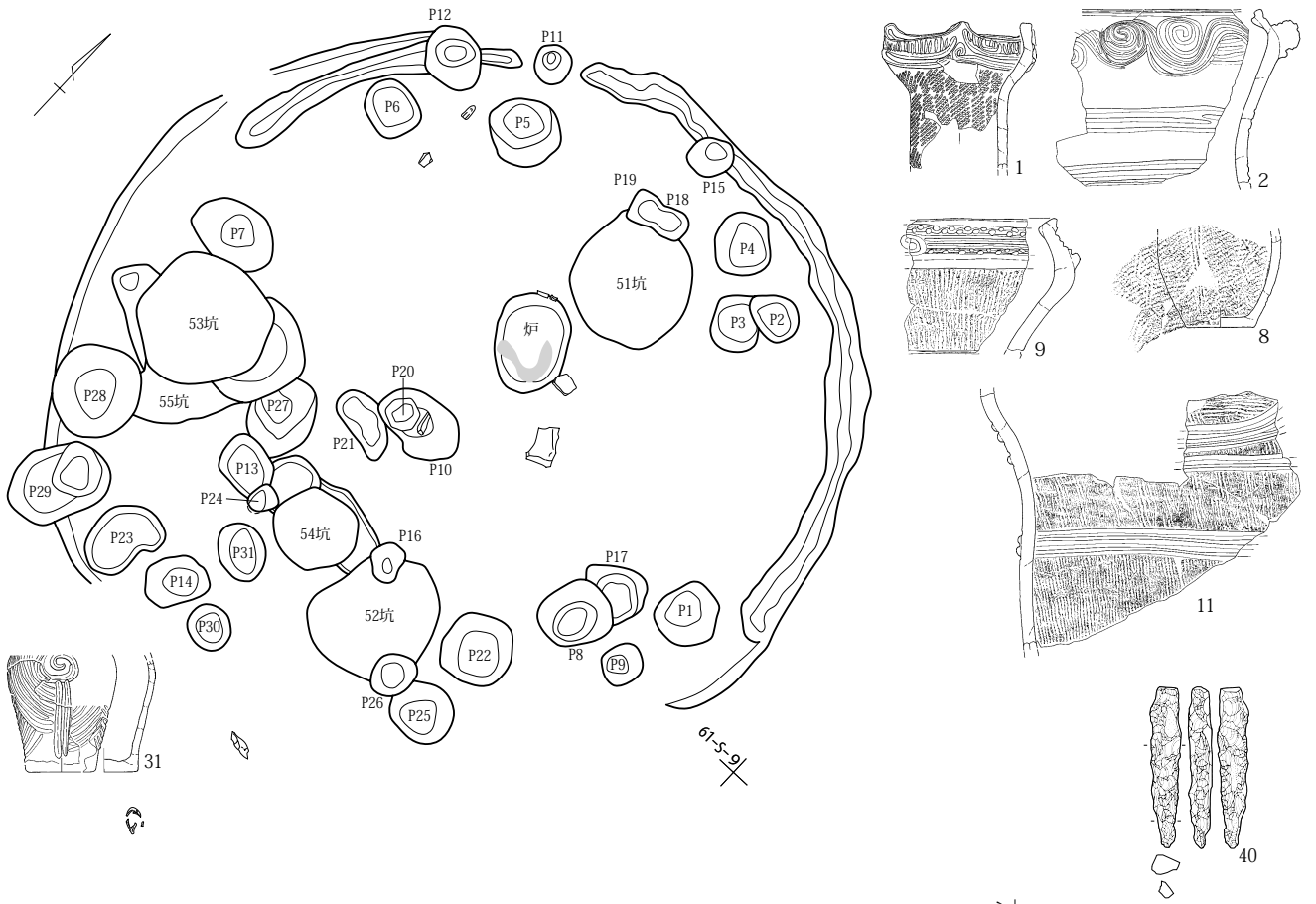
床 面：黄褐色ロームを地床とする。南側は褐色土で構成されるが、南西側へ緩やかに傾斜する様相が把握されよう。凹凸は少ない。硬化面は炉北西側に顕著に見られるが、これは黄褐色ロームの露出度に伴う傾向を示している。

施 設：床面中央付近に地床炉を設け、北側壁際に壁周溝が走行する。また柱穴として31基のピットを調査したが、柱穴としては17基を数えた。

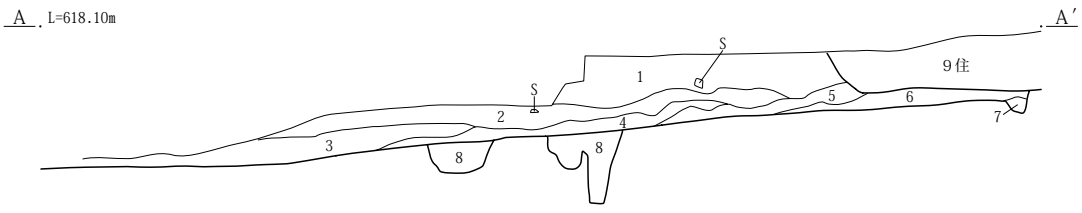
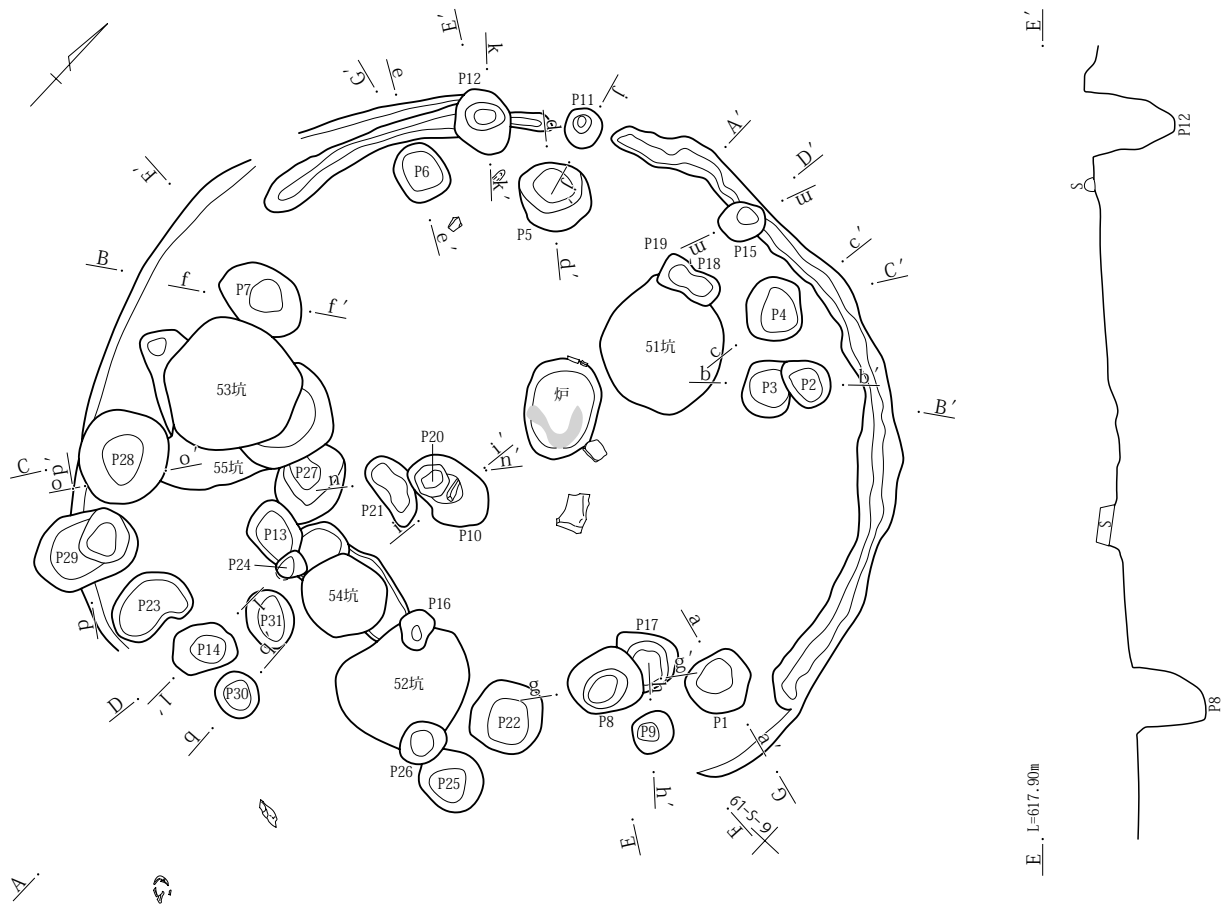
炉 跡：床面中央やや北寄りに小型の地床炉を設ける。平面形は約80×57cmを測る不整形円状を呈し、深さは浅く10cmに満たず8.5cm程である。主軸を北西に向ける。埋土は焼土粒を少量含む暗褐色土で、焼土自体の広がりも東側に偏り、狭かった。また、長軸線上南東側に大型の自然石が置かれていた。炉石ではないが、炉周辺の生活空間を示唆する施設であろうか。さらに、北側に板状の角礫が炉石状に立てられていたが、深い埋置ではなく意図的な所産としては捉えなかった。

壁周溝：北壁を中心に北半を半周する。南半は斜面地形で逸した可能性もあるが、土層にも観察されておらず、北半に止まる可能性が強い。走行は1重で拡張や移動の痕跡は見られなかった。

柱 穴：床面で確認した31基のピット中、17基に可能性

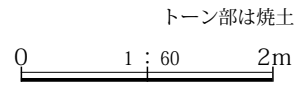
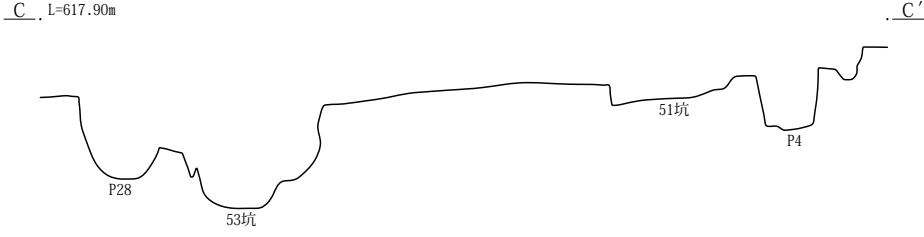
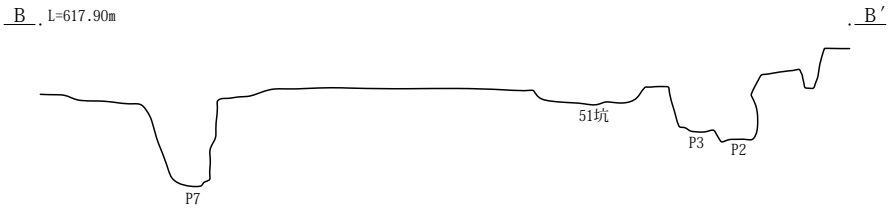


第79図 61区17号住居跡 (1)



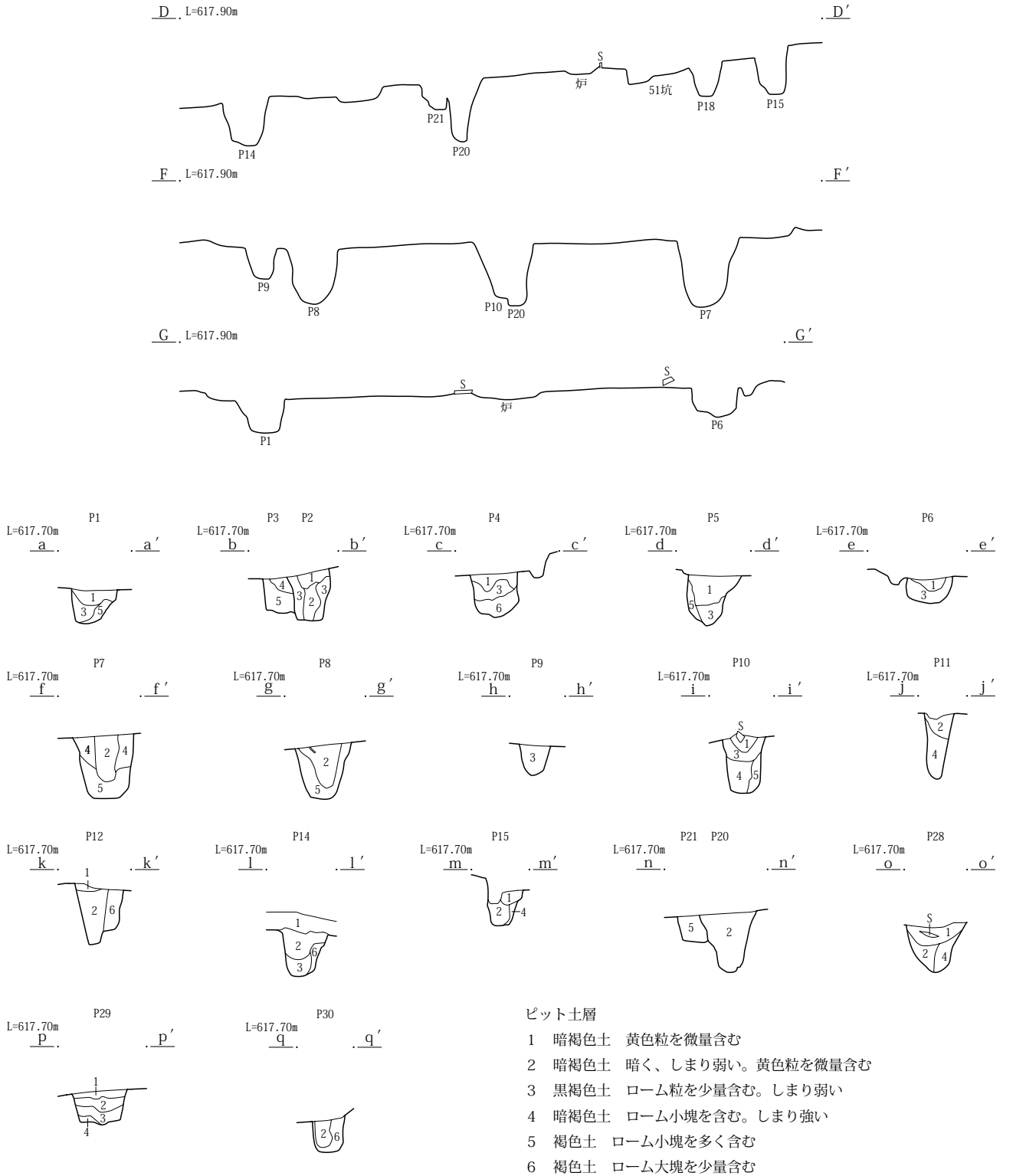
17号住土層

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 大粒の黄色粒を少量含む    | 5 暗褐色土 黄色粒を微量含む。しまり強い    |
| 2 黒褐色土 ローム大塊を少量含む     | 6 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。しまり強い  |
| 3 黒褐色土 ローム小塊、黄色粒を少量含む | 7 にぶい褐色土 ローム粒を少量含む。しまり弱い |
| 4 黒褐色土 ローム小塊を多く含む     | 8 黒褐色土 ローム粒を含む。ピット土層     |



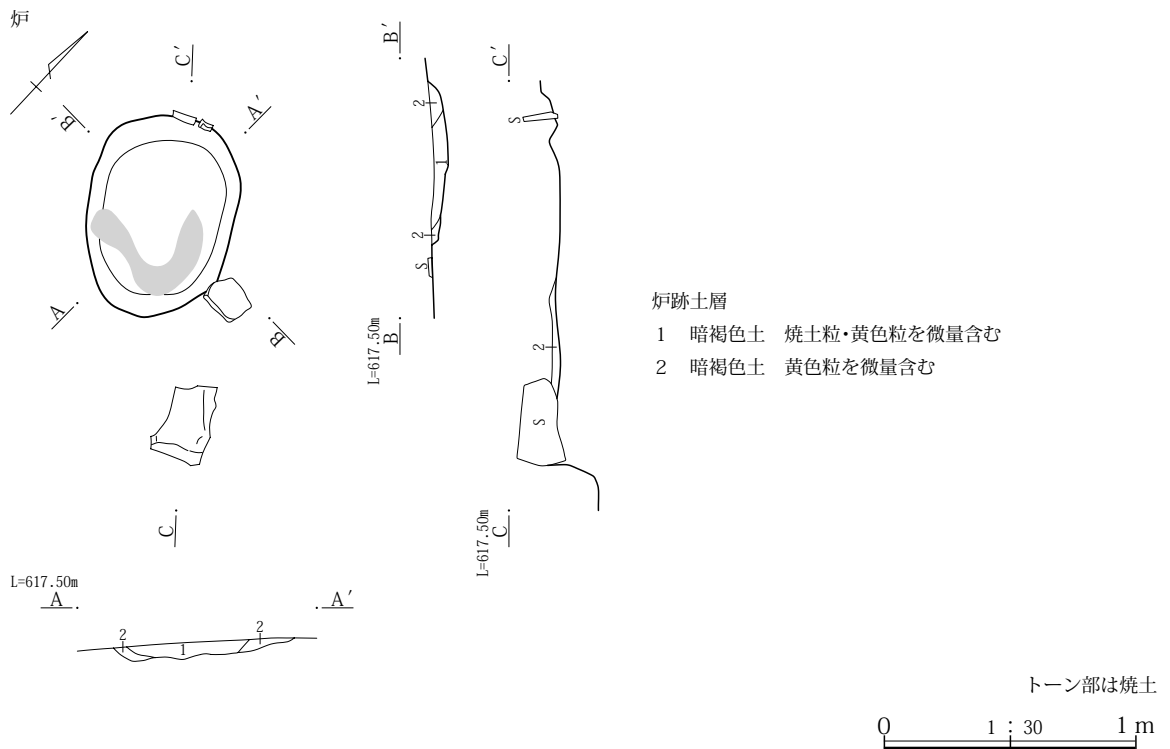
第80図 61区17号住居跡 (2)

第3章 発見された遺構と遺物



0 1 : 60 2m

第81図 61区17号住居跡 (3)



第82図 61区17号住居跡 (4)

を求めた。他は柱穴としては浅い例として断面図から除外している。配置上、奥壁の柱穴として(P5・P6・P11・P12)が相当しよう、さらに西壁付近にP7、南西隅に(P14・P30)、東隅は(P8・P9)、北東壁付近に(P2・P3・P4)が挙げられる。その他のP15、P28、P29も規模、配置上妥当な位置にあり、柱穴の可能性は高い。P10、P21は炉跡に近接した位置にあり、柱穴としての性格は考えにくい。

遺物：埋甕、炉内土器などの特徴的な土器の使用は為されていない。多くが埋土下位～床直上出土で、居住に伴う例では無く、おそらく廃棄後の一括廃棄と捉えられよう。出土土器を見るに、加曾利EⅠ式相当の例と加曾利EⅢ式に比定される資料に分かれる。このうちEⅢ式土器は重複する土坑から出土した例であり、本住居跡に伴っていないと考えられよう。石器では長脚の黒曜石製の石錐(40)が出土している。

所見：大型の不整形円形を呈する住居跡である。小規模な地床炉を持ち、北半に壁周溝を設ける。柱穴は五角形の配置を基本としているようだ。時期は主体的に出土した加曾利EⅠ式期に比定したい。

61区18号住居跡 (第86図 PL. 6・65)

位置：調査区東側で調査された。前述の8号住北側で重複しており、さらに西側に33号住が重なる。また、3

号竪穴状遺構が北側に近接する位置にある。周辺はほぼ平坦地形が広がる箇所ながら、東側がやや高く傾斜しており、上層では1号列石が調査された箇所でもある。61区R・S-6グリッドに位置する。

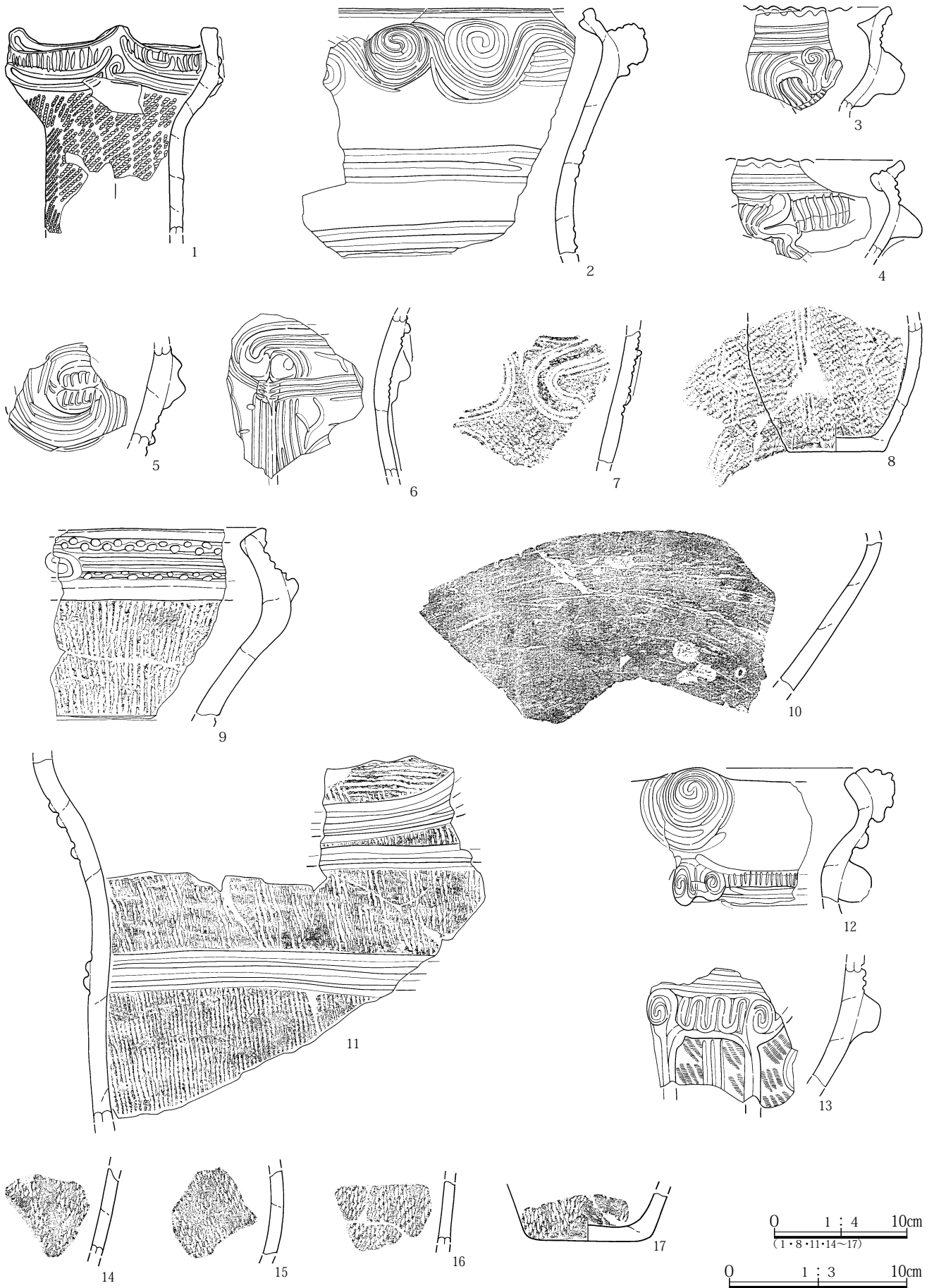
経過：1号列石調査後ローム漸移層上位である暗褐色土で確認した。南側は傾斜のため黒褐色土の堆積が厚く、そのため8号住との重複を平面的に把握できなかった。故に8号住調査後に本住居跡の調査が着手され、厳密な新旧は把握されていない。しかしながら、8号住床面上に本住居跡に相当する炉跡などの施設が確認されておらず、本住居跡が8号住に切られる新旧と判断して調査を進めた。

規模：短軸長約320.0cmの不整形方形を呈する小型住居跡である。深さは深く約85.0cmを測る。壁の立ち上がりは極めて良好でしっかりとした掘り込みを示していた。

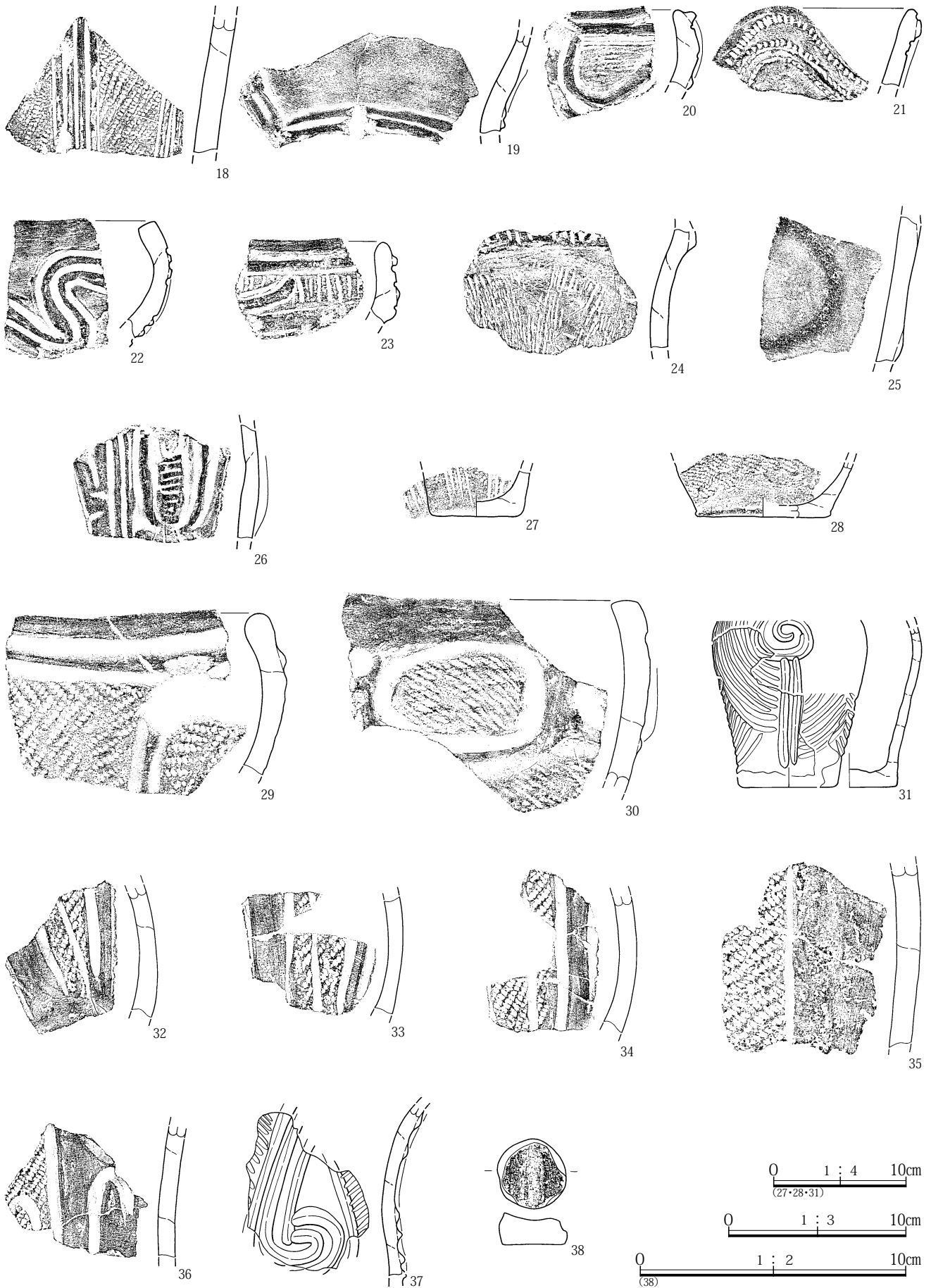
重複：8号住との重複は前述のように、8号住を新しく位置付けている。

床面：黄褐色ロームと暗褐色土を地床としている。ほぼ平坦面を築くが凹凸が顕著に見られる。硬化面は確認できなかった。軟弱な床面である。

施設：8号住との境界に石囲い炉の一部を見る。南半は8号住によって壊れたものと判断できた。また壁周溝が北壁と西壁際に見られたが堆積土が安定しておらず、

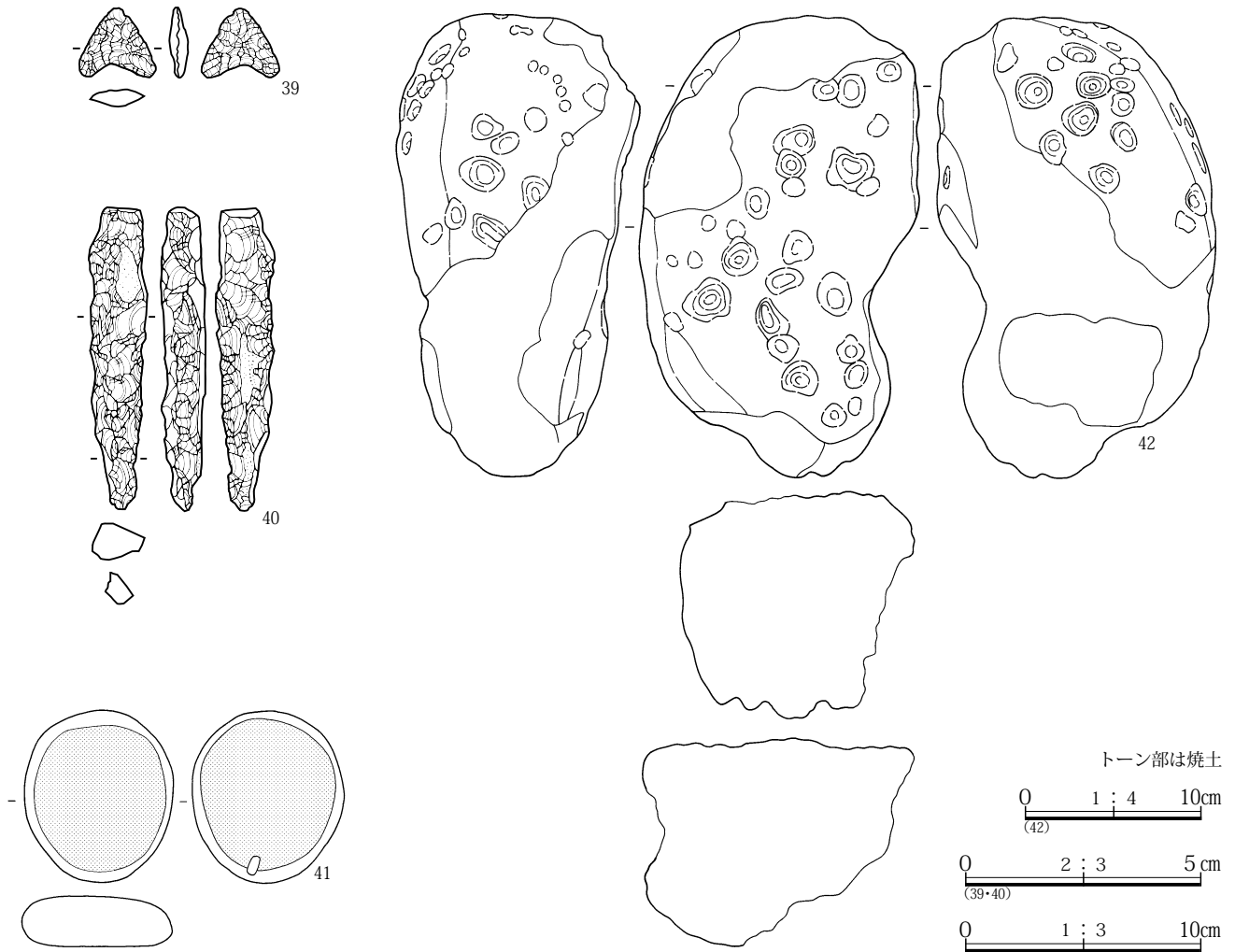


第83図 61区17号住居跡出土遺物(1)



第84図 61区17号住居跡出土遺物 (2)





第85図 61区17号住居跡出土遺物(3)

一部の確認に止まった。柱穴として、10基のピットを調査した。P8・P9は出入口部の対ピットである。

炉 跡：床面中央にあたるのか、8号住との境に北側の炉石のみを見た。他は8号住によって逸しているため、規模などの詳細は不明である。僅かに焼土塊の堆積が確認された。

壁周溝：床面を構築する黄褐色ローム層下位にAs-YPkの堆積が認められ、そのため浅い遺構の確認が困難であった。壁周溝も北壁と西壁を求めたが、P1は西壁外であり、P2はやや浅い。P3とP4に可能性があるが、配置などに規則性が見られず、確定的ではない。

遺 物：埋土中より、少量の土器片が出土しており、石器と併せて7点を図示、石器2点を写真追加している。土器片は、時間幅が広く中期後半全体に及ぶ。出土位置などの傾向も見られず、埋土中より散漫に出土している。  
所 見：8号住に南半を大きく切られた重複関係を示す。辛うじて、8号住との重複箇所に残された炉石から住居

跡として位置付けられるが、出土遺物などにまとまりを見ないため、時間的な位置付けなどに苦慮する。ここではとりあえず、中期後葉～末葉の所産と時間幅を持たせて考えておきたい。

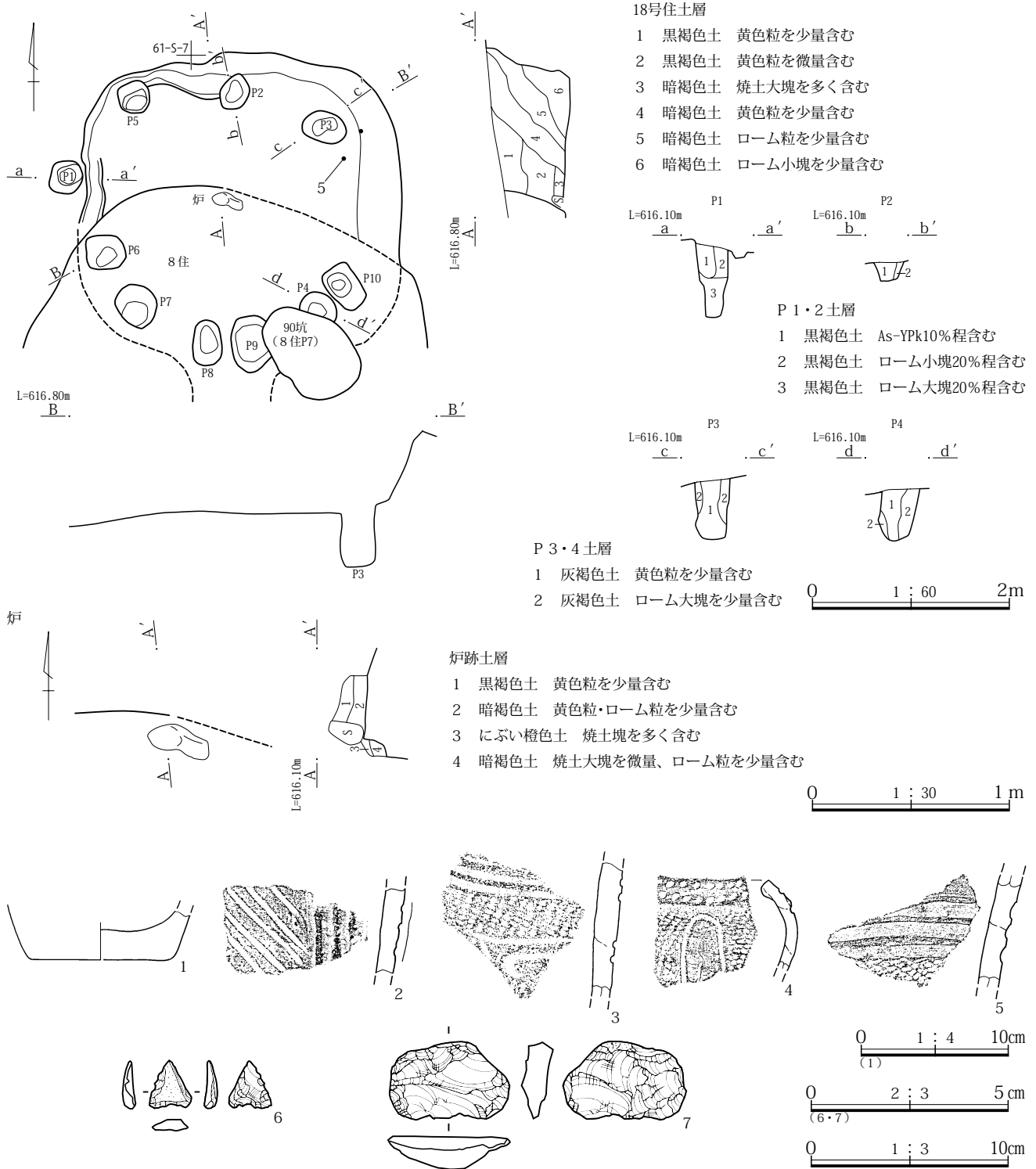
61区20号住居跡(第87図 PL. 6・65)

位 置：調査区北東端で調査された7号住外縁の住居跡である。61区R-11・12、S・T-11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形を呈し、南西側にかけて強い傾斜が広がる。特に本住居跡南西部は傾斜が顕著だった。

周辺は東に2号住が、南には9号住、11号住が近接している。

経 過：ローム漸移層の暗褐色土で確認した。7号住と同様に北側は調査区域外であり、南側の壁周溝の検出に止まった。7号住調査中に、外縁に壁と壁周溝が確認され、本住居跡として新たに住居跡を加えた。

規 模：北半を調査区域外に延ばすため、詳細な規模は



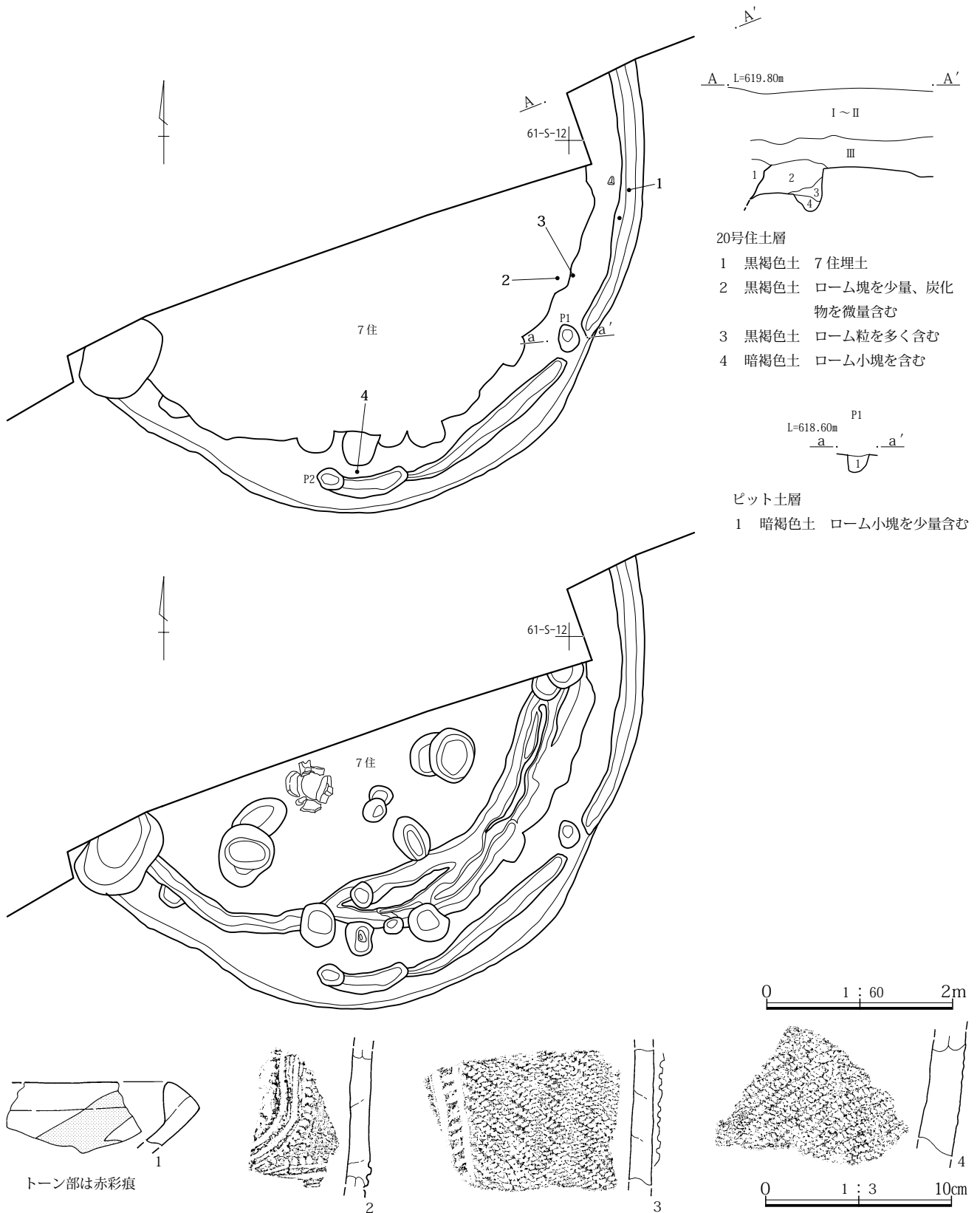
第86図 61区18号住居跡及び出土遺物

不明だが、軸長約6m以上の不整形を呈する平面形と思われる。深さは断面観察では34.0cmを測り、7号住と同様遺存度は良好である。

重複：7号住外縁を重複する形態である。いわゆる同一住居の多重重複痕跡とも考えられる。本来ならば、7号住と同時に報告するべきであるが、整理調査の不手際で別になってしまった。ご容赦願いたい。また7号住と

の新旧は不明である。7号住と同一の住居ならば拡張痕跡に伴う例と考えられるが、土層の観察、出土土器片の様相は本20号住が7号住に切られる様相を示している。検討の余地が多く、ここでは両住居跡の新旧関係は不明としておきたい。

床面：7号住との床面段差は約20.0cmを測る。本住居跡がやや高く、床面要素からは、別住居跡としての位置



第87図 61区20号住居跡及び出土遺物

付けも妥当性を帯びる。

施設：炉跡、埋甕などは確認されていない。壁周溝とピットを壁際に検出している。

壁周溝：東側壁際に調査した。比較的深くしっかりした

掘り込みで東壁を強調する。南壁際には設けられておらず、確認できなかった。また、東壁中間地点で途切れが見られ、P1が確認された。

柱穴：南東壁際のP1及び南隅壁際にP2を検出した。い

ずれも小ピットであり浅い。壁柱穴の可能性もあるが間隔が広く、問題が残る。

遺物：埋土中より土器片が出土しているが、細片であり、図示は4点に止まった。いずれも中期中葉の所産である。

所見：7号住外縁を取り巻く形態で調査された住居跡である。本来ならば、7号住との関連性を深く捉え同時に報告すべきであるが、別項目になったのは整理作業の不手際である。しかしながら、土層の観察では拡張住居ではなく、また床面の段差も顕著であり、さらに出土土器も古い中期中葉段階の土器が見られることから、7号住に先行する住居の可能性もある。ここでは詳細は提示できないが、7号住との関連も踏まえて、両住居跡を重ねた平面図を掲載しておく。

61区21号住居跡 (第88～91図 PL. 6・65)

位置：調査区東側の南壁際にかかり調査された。61区R～T-5・6グリッドに位置し、前述の8号住が東に、33号住居跡が北に、22号住居跡が西に重なり、更に37号住が床面中央で重複するように、住居跡密集地点の中にある。周辺は、平坦地形が広がるがこれは遺構密集によるため東に迫る傾斜地形の延長を考えると、南東方向への緩やかな傾斜地に占地するといえよう。

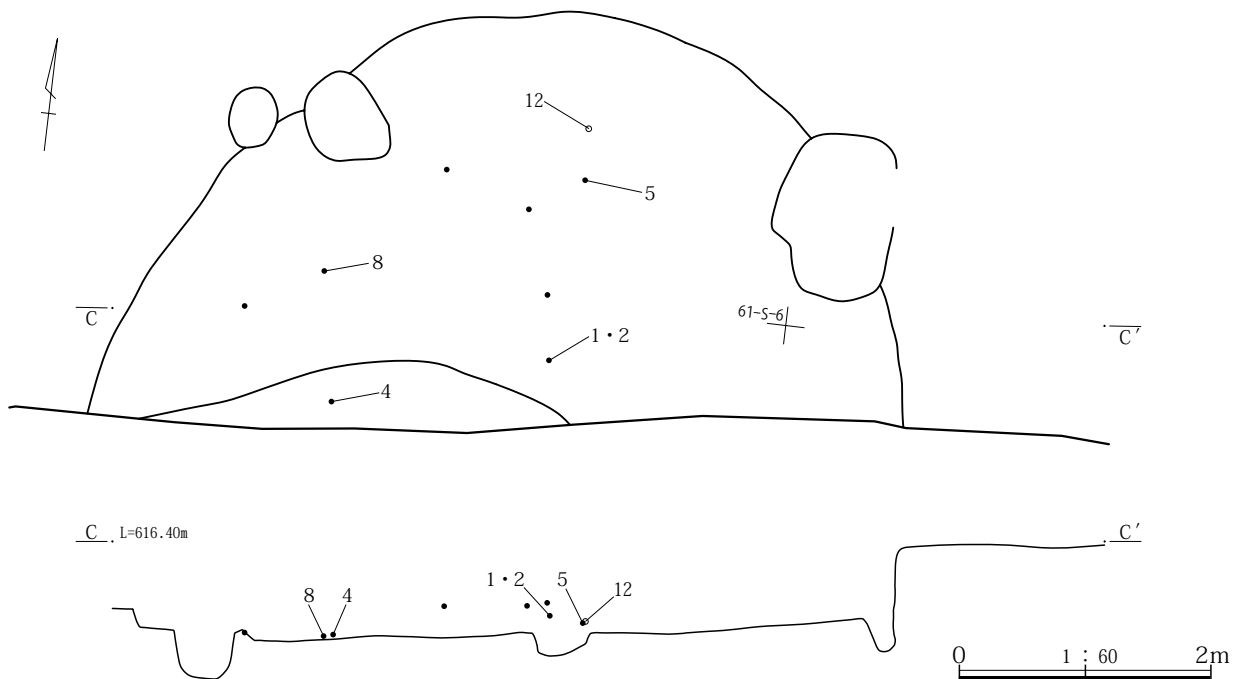
経過：縄文時代後期の所産である1号列石調査後に調

査着手された。1号列石は黒褐色土中での確認、調査で、調査後は人力を主とした掘り下げでローム漸移層である暗褐色土で、住居跡群の確認を果たした。確認面における出土遺物の集中は顕著ではなく、住居跡平面形は基盤層と埋土との色調差を元に把握した。その結果、南半の多くは調査区域外に伸びる平面形が把握され、さらに炉跡を壊すように37号住居跡が床面上に確認された。

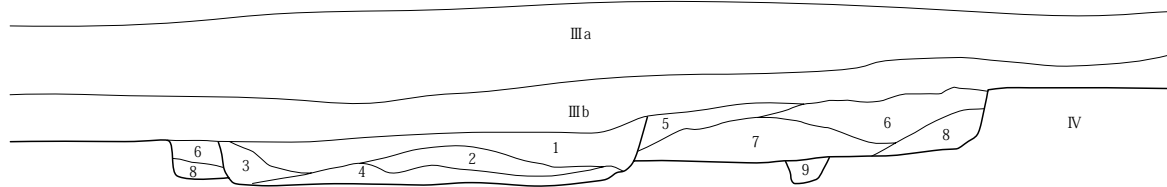
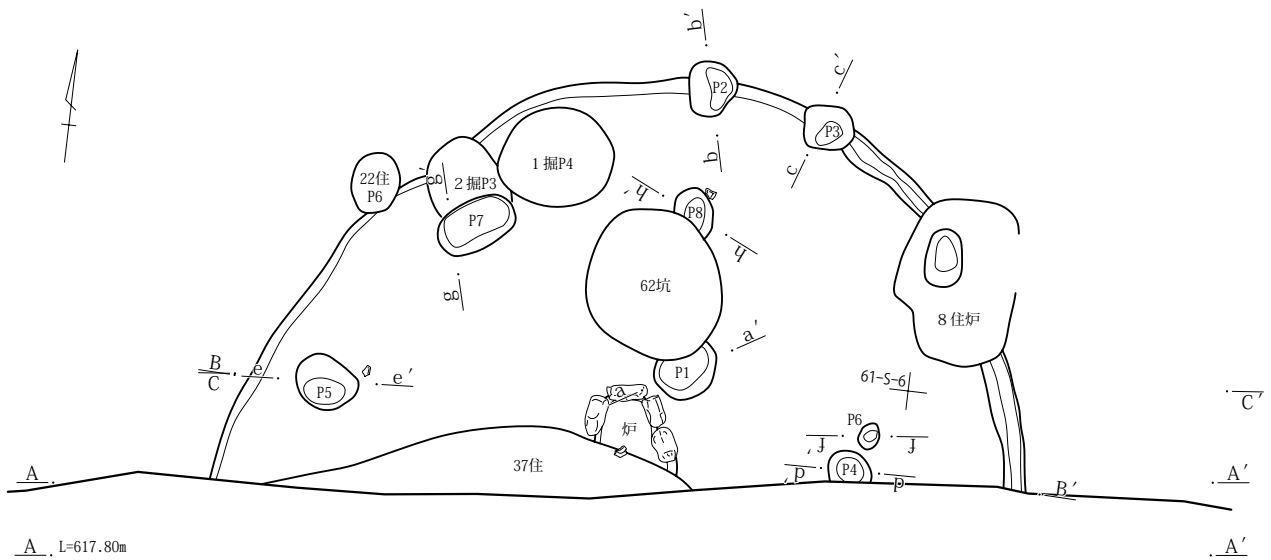
規模：平面形は径約640.0cmのやや大型の不整円形が想定される。深さは約60.0cmを測り、深く良好な遺存度を誇る。壁の立ち上がりも直立気味でしっかりしていた。重複：東に重複する8号住は浅い敷石住居跡で本住居跡を切る。さらに、西にある22号住も敷石住居跡である。北に重なる33号住との新旧は土層、出土土器からの判断からは断定できない。33号住が新しい印象を得るが、確定的ではない。37号住との重複は本住居跡炉跡が壊される様相から37号住が新しい住居跡として把握できる。土坑では62坑、また1号掘立柱建物跡ピットが重なるがおそらく本住居を切る新旧関係であろう。

床面：黄褐色ロームを薄い貼り床土とする。凹凸は見られるものの全体的にほぼ平坦面を築く。貼り床であるローム層自体が硬質感の強い層位で、床面としての硬化面としての特定が難しかった。狭い範囲ながら炉北西周辺で硬化面を確認した。

施設：床面中央の石囲い炉、東壁際を中心とした壁周



第88図 61区21号住居跡 (1)



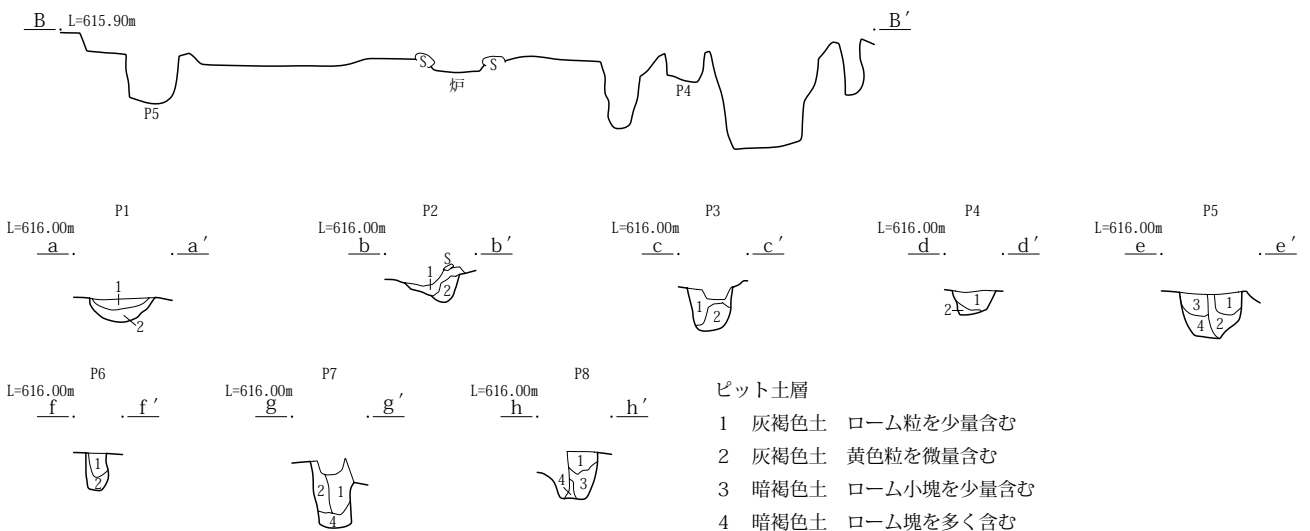
21号住土層

IIIa 黒褐色土 黄色粒 (As-YPk)、白色粒を含む。  
砂礫層を塊状に混在する

IIIb 黒色土 黄色粒 (As-YPk)、白色粒を含む。  
縄文中～後期遺物包含層

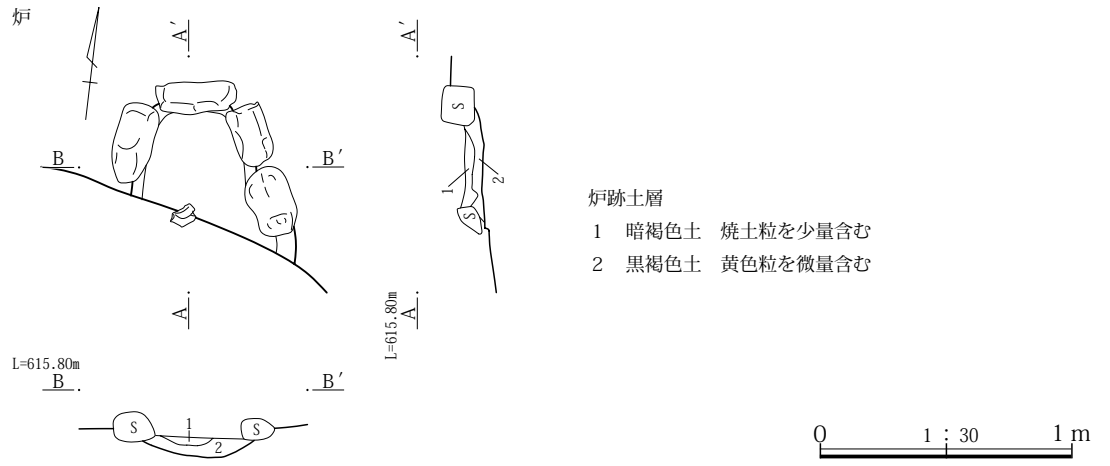
IV 黄褐色土 黄色粒 (As-YPk)、白色粒を含む。ローム漸移層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む。37住埋土
- 2 灰褐色土 黄色粒、ローム小塊を微量含む。37住埋土
- 3 にぶい褐色土 ローム小塊を少量含む。37住埋土
- 4 暗褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む。37住埋土
- 5 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を微量含む。21住埋土
- 6 黒褐色土 黄色粒、ローム小塊を少量含む。しまり弱い。21住埋土
- 7 黒褐色土 黄色粒少量、黒褐色土塊、炭化物を微量含む。21住埋土
- 8 暗褐色土 黄色粒、ローム小塊を少量含む。しまり強い。21住埋土
- 9 暗褐色土 ローム粒を少量含む。ピット埋土

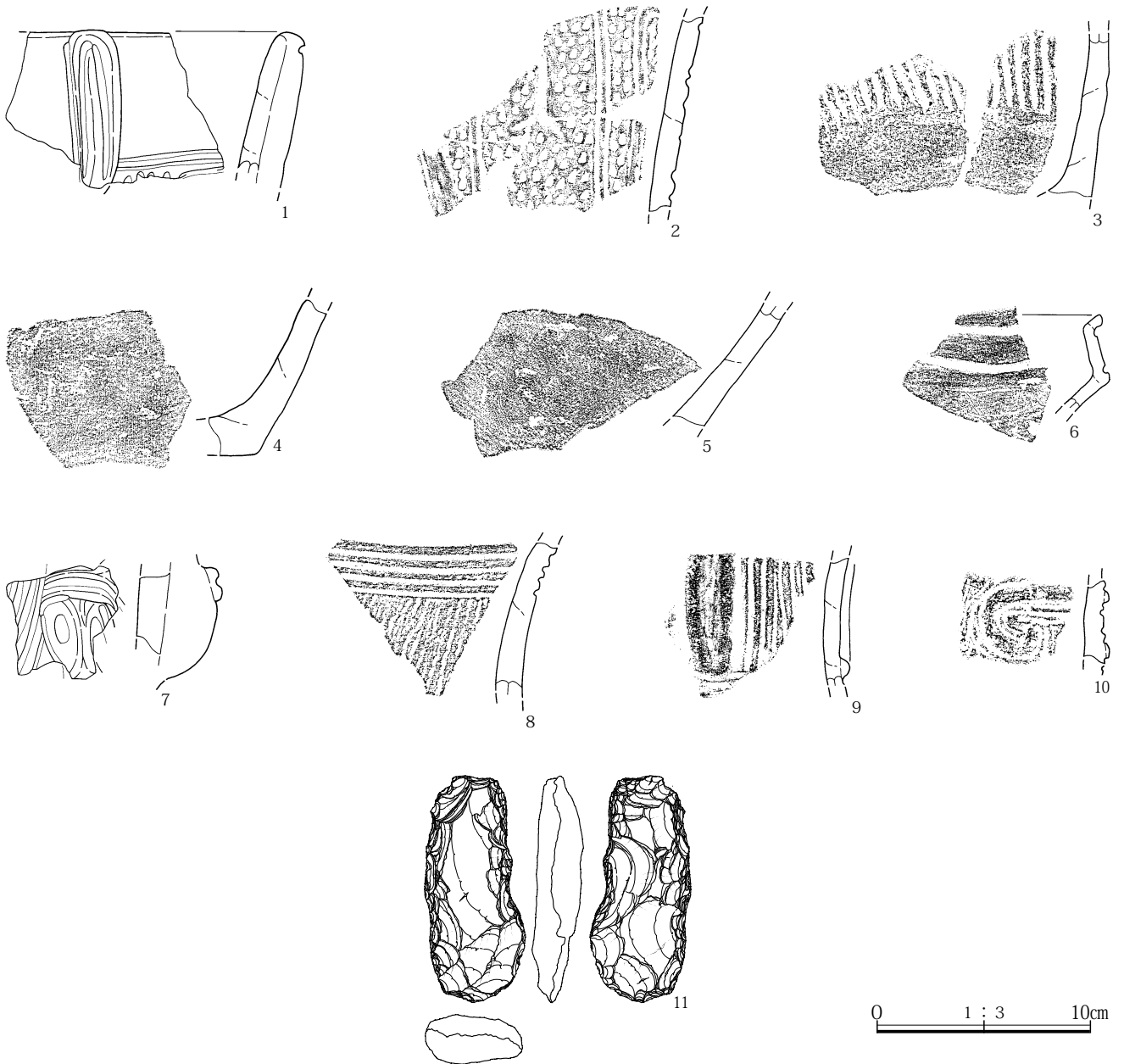


- ピット土層
- 1 灰褐色土 ローム粒を少量含む
  - 2 灰褐色土 黄色粒を微量含む
  - 3 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
  - 4 暗褐色土 ローム塊を多く含む

第89図 61区21号住居跡 (2)



第90図 61区21号住居跡 (3)



第91図 61区21号住居跡出土遺物

溝、柱穴としてピット8基を調査した。

炉 跡：床面中央付近に主軸を北西に向けた石囲い炉を設ける。南半を重複する37号住に切られ逸失するが、大型の円礫で囲われた、短軸長約57.0cmの方形を平面形とする石囲い炉である。掘り込みはやや浅く約14.0cmを測る。埋土は黒褐色土を主体に少量の焼土粒を含む。

壁周溝：東側壁際に確認され、北壁際のP3で途切れる。幅狭ながら、深くしっかりした掘り込みを示す。北壁から西壁にかけて、壁が浅くなるに従い、壁周溝の走行も見られなかった。

柱 穴：8基のピットを柱穴として調査した。規模、配置上、妥当性を持つ例として、P3～P5、P7、P8が挙げられるが、やや小規模で配置上も規則性に欠ける。検討を要しよう。

遺 物：出土遺物は住居跡遺存度に比して、極めて少ない。個体図示し得た土器も無く、11点の図示に止まった。帰属時期は1・2の勝坂3式末や6の「焼町類型」から中期中葉末と比定したい。5の称名寺式の浅鉢は8号住からの流れ込みか。

所 見：北東の住居跡密集地点南端に位置する。周辺の重複、近接する住居跡内では最も古い時期に比定されよう。

61区22号住居跡（第92～97図 PL. 7・65～67）

位 置：調査区東側の南壁際にかかり調査された。61区T-5～7、U-6グリッドに位置する。21号住と同様に周辺は住居跡が密集する地点であり、そのため平坦地形が広がる。北東側は緩斜面地形が迫るため、その延長で南への緩やかな斜面上の立地と捉えられよう。周辺の重複、近接する住居跡群では8号住や18号住、24号住居跡が本住居跡と同様敷石住居跡である。また、上層には後期に比定される1号列石が乗る。

経 過：1号列石調査中に黒褐色土中より炉石や列石と連繋する外縁礫が確認されたため、精査を重ねて平面形を検出した。また床面も黒褐色土で構成されるため、柱穴などの施設を丁寧に検出した。また南側に突出する出入口部端部は調査区域外に延びるが拡張調査は果たせなかった。

規 模：住居部は径約(580.0)×420.0cmを測る円形を基調にし、南側に出入口部が突出する平面形を呈する。

床面までは浅く約25.0cmである。壁の立ち上がりは弱く、判断に迷う箇所も多かったが、北側は列石との連繋した外縁礫、西壁上には砂壤土の堆積が顕著に平面形に沿っており、これを目安に平面形を確定した。

重 複：東側に33号住、北側に34号住が重なる。また38号住が西側に接する。いずれも新旧関係としては本住居跡が新しいと考えている。また、床面中央やや北西に2号掘立柱建物跡のピットが重なる。

床 面：ローム漸移層上位に堆積する黒褐色土を床土とする。僅かな凹凸があり南側へ緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦面が築かれ、炉跡周辺にはローム塊を主体とした貼り床が認められた。全体に軟弱な床面ながら、貼り床部分のみに硬化面が認められた。なお、敷石住居跡としたが、床面には顕著な敷石は設けられていなかった。施設：床面中央やや南に石囲い炉、さらに南に出入口石囲い施設、柱穴として5基のピットや出入口ピットが調査されている。

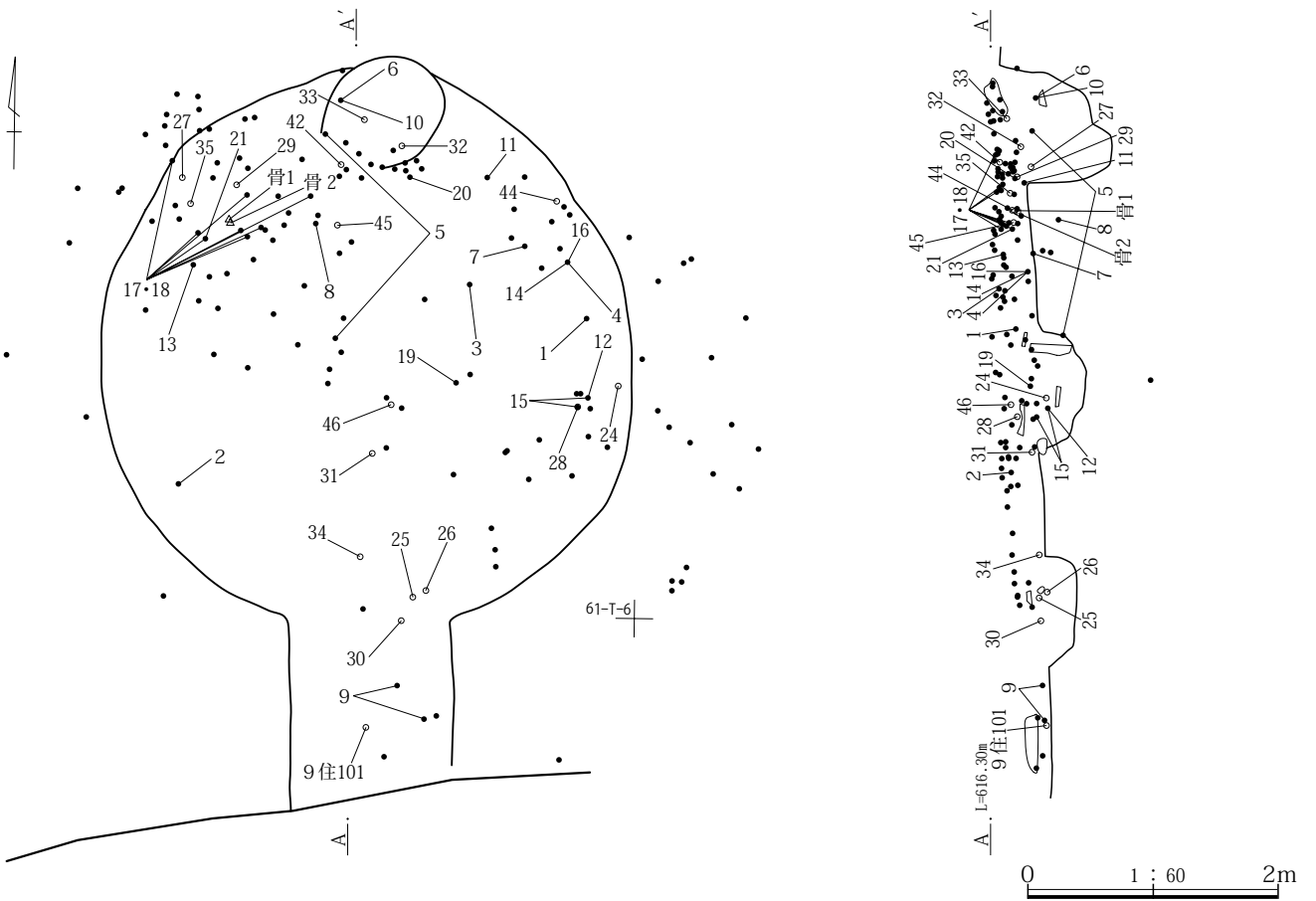
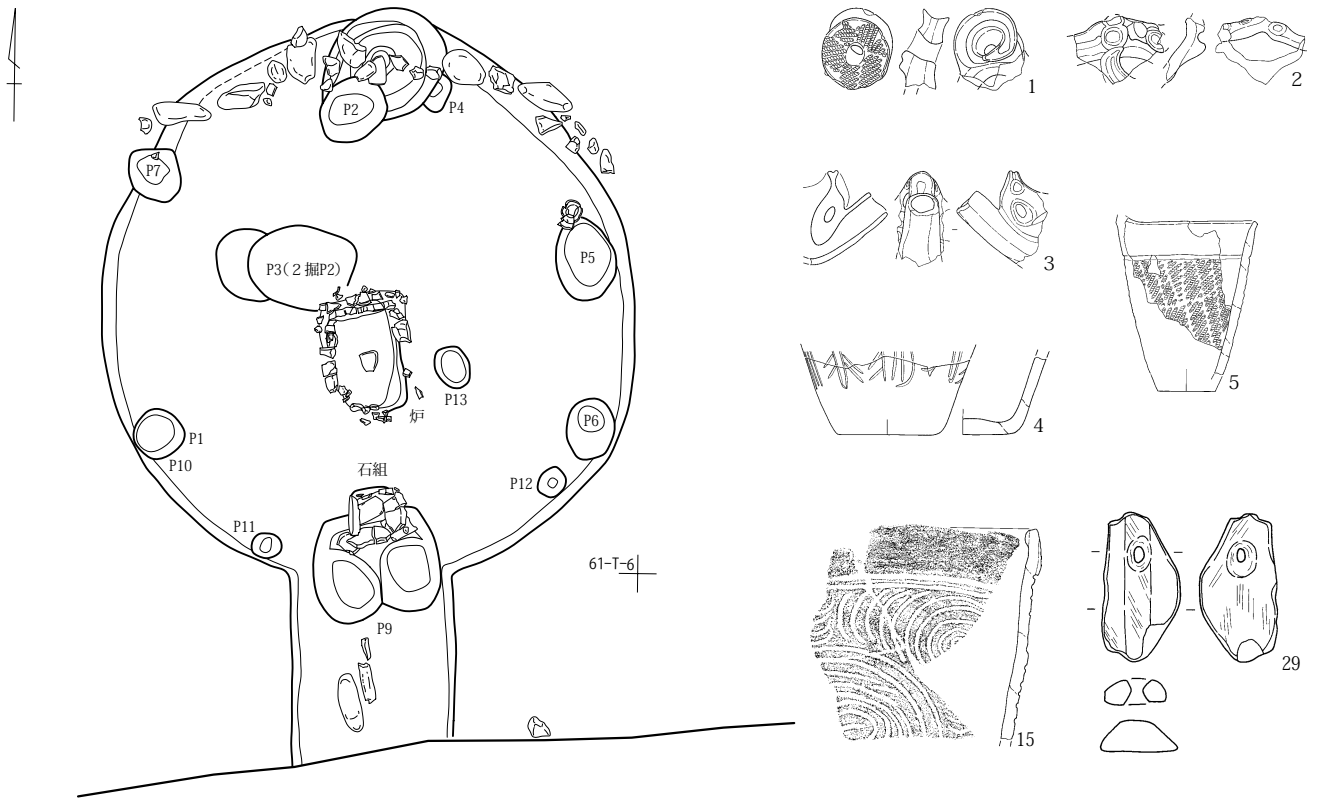
炉 跡：床面中央やや南寄りに主軸をほぼ北に向けた方形の石囲い炉が設けられる。規模は約110.0×70.0cm、深さは40.0cmを測る。大型の板石状の角礫が北辺と西辺を囲むが、被熱のため幾つかに分割される。また、北辺の炉石北側には小型の扁平な板石が並び、装飾的な意識も見られた。埋土は焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。底面中央に小型の板石が敷かれていた。

石囲い施設：石囲い炉南約60cm、出入口対ピット北側に接して、小型の石囲い施設が設けられる。平面規模は約50.0×50.0cmで方形を呈し、深さ30.0cmを測る。扁平で大型の板石状角礫で圍繞されるが、北辺のみ炉石が欠落する形態となっている。埋土は黒褐色土と暗褐色土を主体にし、焼土は混入していない。

柱 穴：12基のピットを床面上で調査したが、このうちP3は2号掘立柱建物跡柱穴として別遺構になっている。その他のピットで、柱穴として妥当性のある例としてはP1、P2、P5～P7が該当しよう。さらに出入口対ピットとしてP9も柱穴として位置付けておきたい。このうちP2は奥壁部の支柱穴として規模、配置とも良好な例で、その他のP1、P5～P7も規則的な配置を示しており、良好な柱穴配置と位置付けられよう。

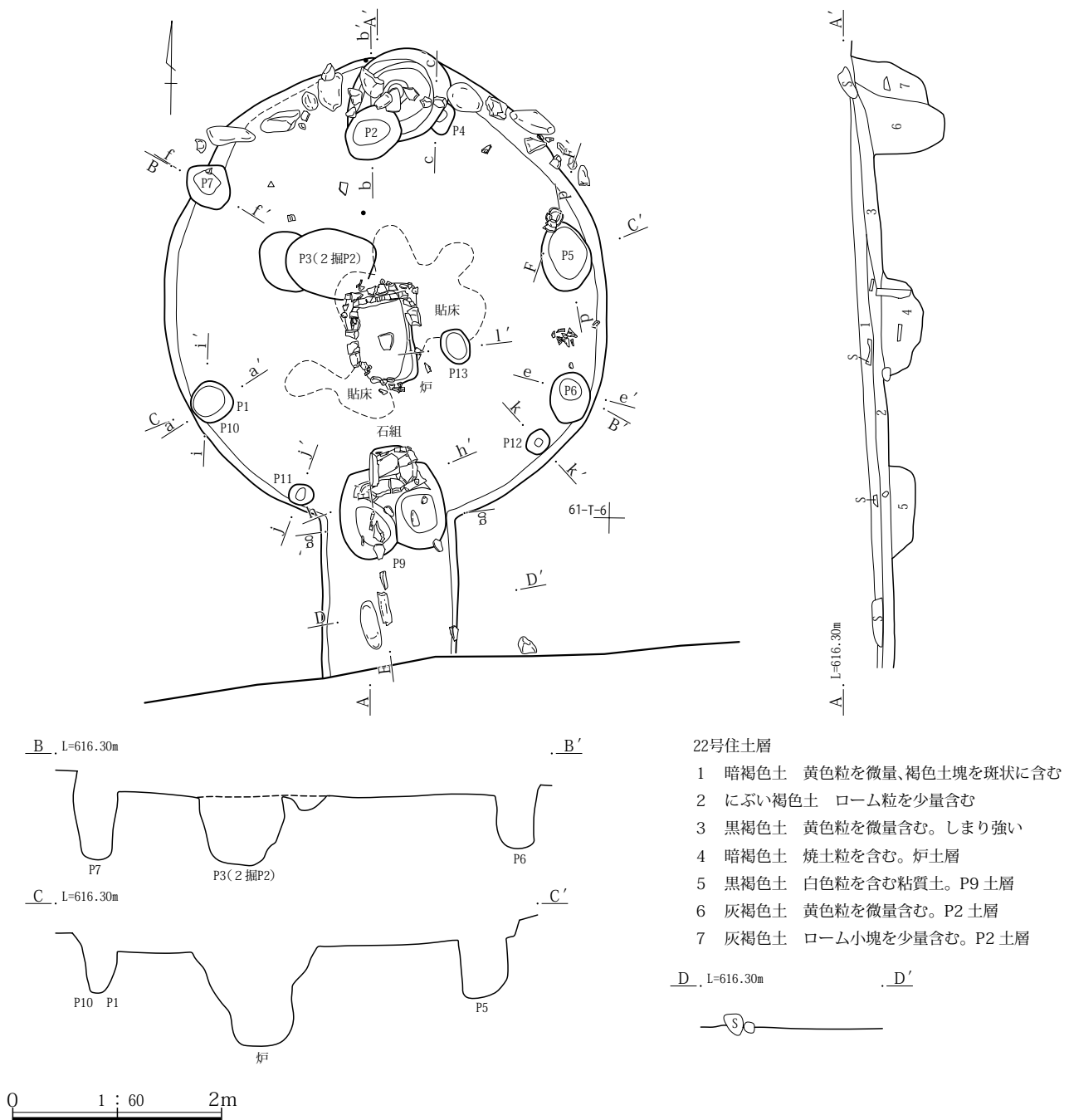
北側の外縁礫：住居部北壁にやや大型の円礫を主体にした外縁礫が列状に設けられるこれは、1号列石とも関連

第3節 住居跡 (61区)



第92図 61区22号住居跡 (1)





第93図 61区22号住居跡（2）

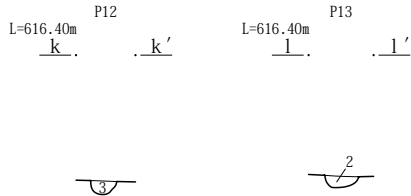
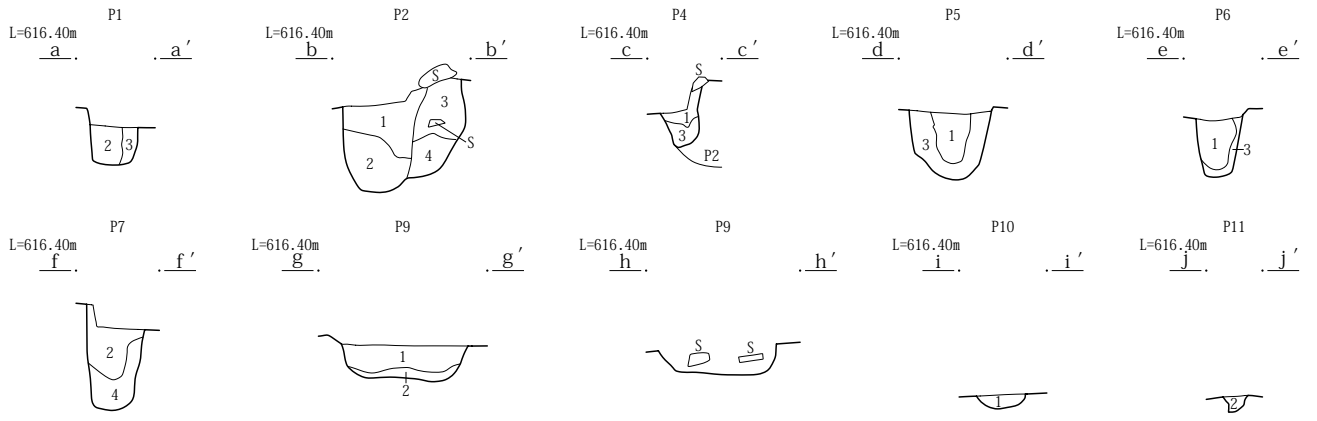
しておりさらに24号住出入口部南端部の配石とも関係性が見出せる。1号列石、本住居跡、24号住と3者が同時期併存とは考えにくい、石を使用した構築物の併用が意識されていた可能性がある。また、本住居跡北側の外縁礫の内側に小型礫が平行して集まっていた。詳細な記録が無く、判然としないが、西側で確認された砂壤土との関連も重要であろう。

遺物：居住に伴う出土遺物は見られない。出土土器も中期後葉～後期前葉と時間幅が広く、主体となる時期も見出せない。後期初頭～前葉に比定される土器片（1～

3）は埋土中からの出土である。中期後葉～末葉の土器片は比較的埋土下位～床直上、ピット内出土があり住居跡時期を示唆する。加曾利EⅢ式新段階の土器としては5～13、17「郷土式」は4、14～16が挙げられ、中期後葉を主体とする出土土器と判断したい。石器に関しては磨製石斧再利用品（25～28）が注意されよう。25、26はP9から出土している。また垂飾（29）、石棒破片（34・35）の出土も特筆されよう。大型磨石（32）、台石（33）は北側の外縁礫列石から出土している。

所見：敷石住居跡であるが、帰属時期がやや不確定で

第3節 住居跡 (61区)

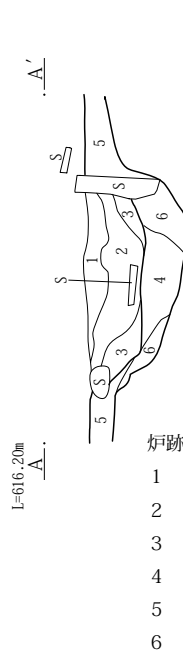
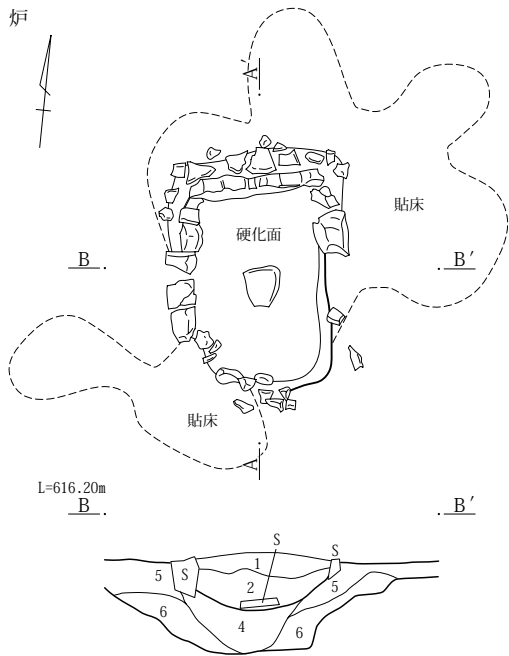
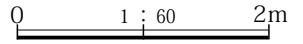


ピット土層

- 1 灰褐色土 黄色粒微量、ローム粒少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を多く含む

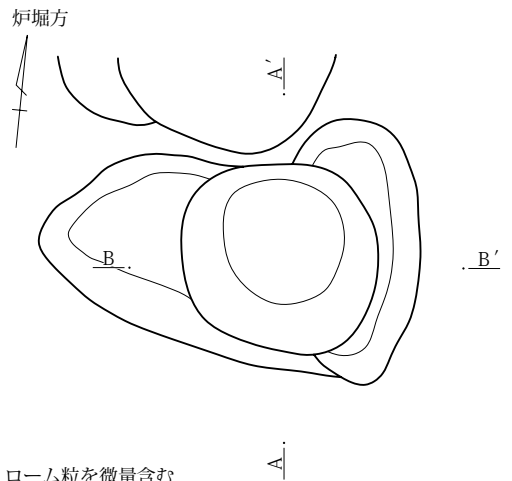
P 2 土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を微量含む
- 3 灰褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 4 灰褐色土 ローム塊を多く含む

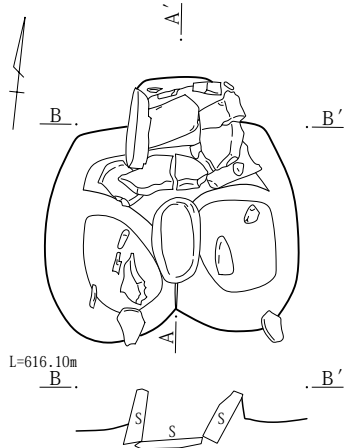


炉跡土層

- 1 暗褐色土 ローム粒を微量含む
- 2 暗褐色土 焼土大塊を少量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 5 黒褐色土 白色粒、黄色粒を微量含む
- 6 にぶい褐色土 ローム粒を少量含む

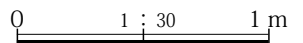


石組

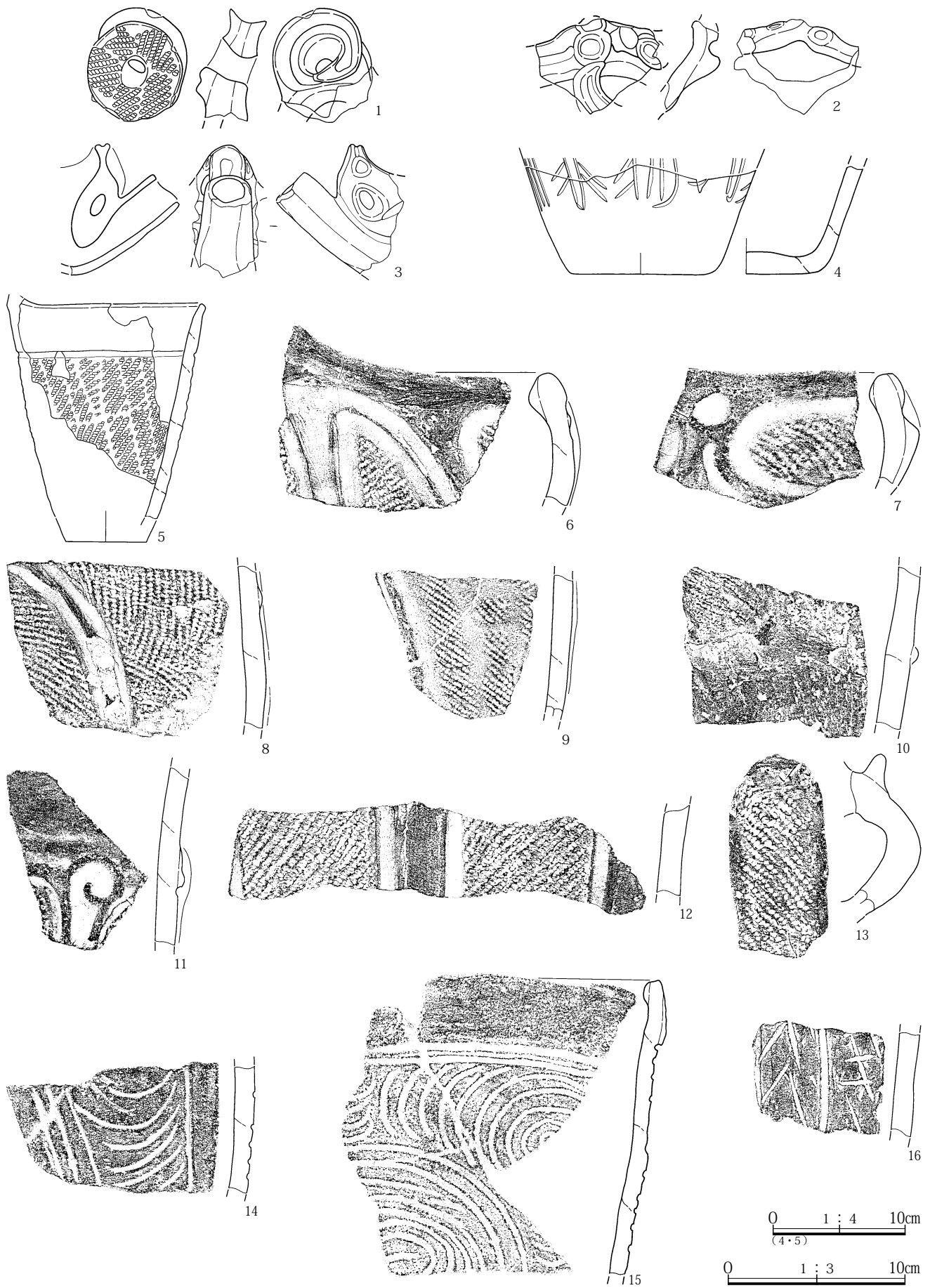


石組土層

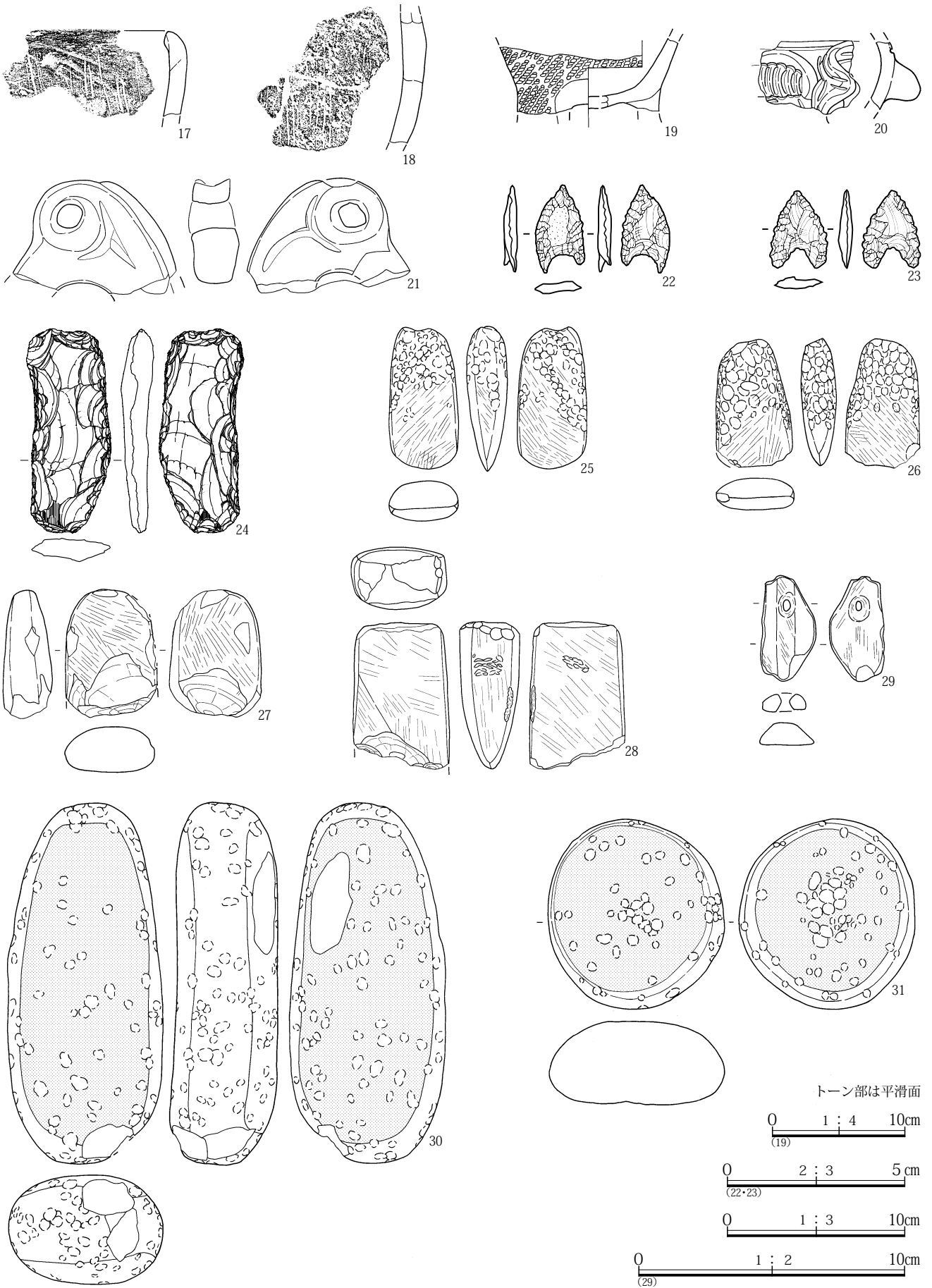
- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 5 灰褐色土 黄色粒を含む。P 9 土層



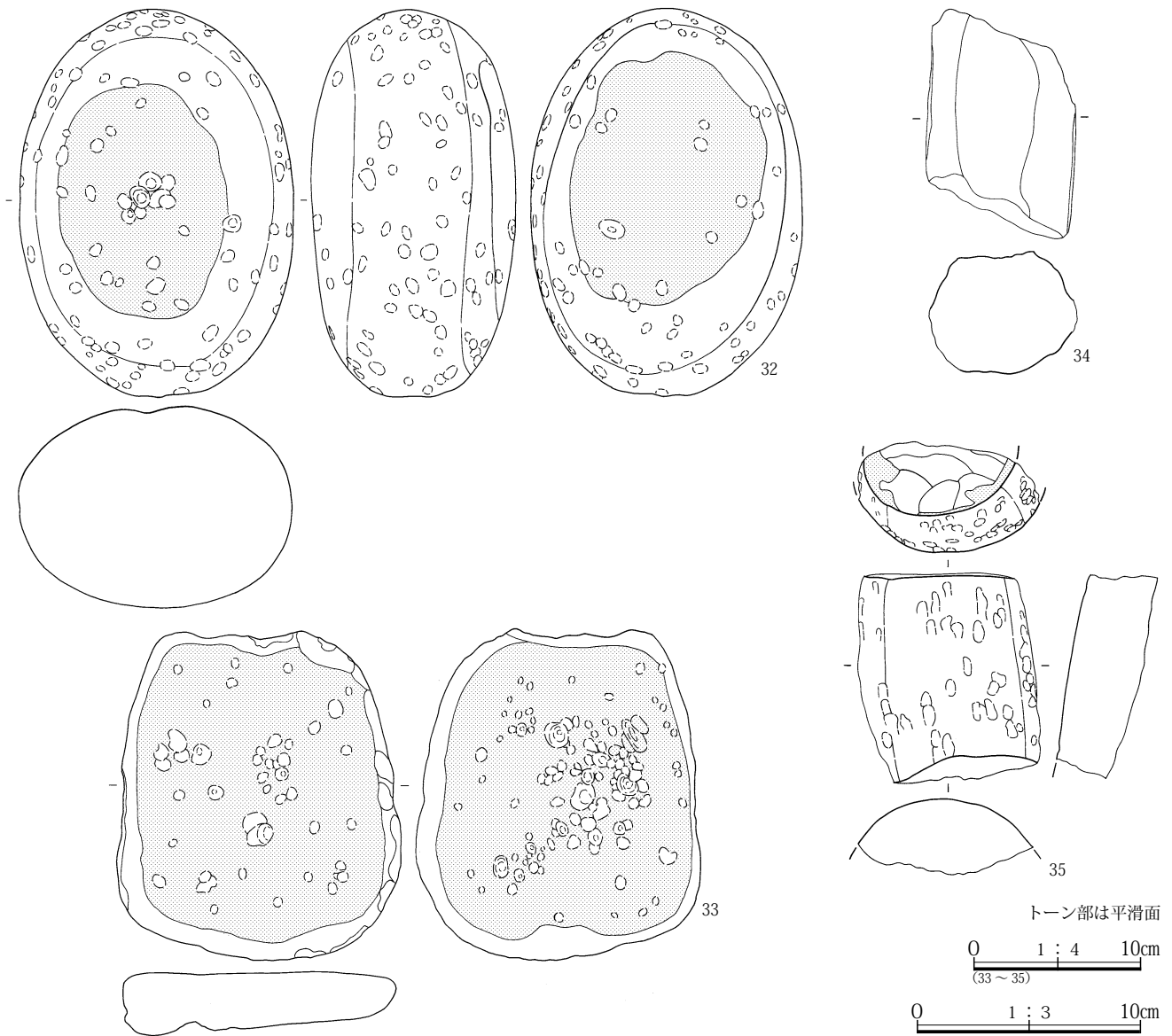
第94図 61区22号住居跡 (3)



第95図 61区22号住居跡出土遺物 (1)



第96図 61区22号住居跡出土遺物 (2)



第97図 61区22号住居跡出土遺物(3)

ある。敢えて、中期後葉の加曾利EⅢ式新段階に時期を求めておきたい。住居跡は石囲い炉、良好な柱穴配置、出入口部の石囲い施設、出入口部対ピットなど、良好な内容を示す。さらに上層の列石遺構や北接する24号住との関係、附帯する北壁の外縁礫、西壁外の砂壤土の堆積など検討課題の多い住居跡である。

61区23号住居跡(第98～102図 PL. 7・67・68)

位置：61区W・X-6・7グリッドに位置する。調査区中央東寄り調査された。周辺は南側への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面での検出となった。周辺は多くの住居跡や土坑などの遺構密集地点であるが、本住居跡の調査はその端緒となった最初の調査である。

経過：確認面はⅢ層下位である黒褐色土で行われた。

周辺は黒褐色土の堆積が厚く、確認面をローム漸移層やローム層上層で行うと遺構の多くの情報が失われるからである。調査の端緒ということもあり、慎重な調査を進めた。しかしながら、黒褐色土中の調査も原因して、平面形の把握など極めて不整形な結果となった。おそらく数軒の住居跡の重複が影響し、明瞭な形態を把握できないまま1軒の住居跡として記録化したものとする。

規模：平面形は横長不整楕円状を呈する。規模は635.0×—cmを測るが、東壁に重複なのか段差があり、数値は不確定である。深さは40.0cm程で浅く残りが悪い。壁の立ち上がりも浅く皿状を示す。

重複：北に28号住居跡、東に41号住居跡、39号住居跡、西に43号住居跡が重複する。土層の観察も的確ではなく、出土土器も大きな時期差は見られないため新旧は不明で

ある。

床 面：黒褐色土を地床とし、軟弱な床面を呈す。凹凸もあり、中央部に欠けて凹む傾向が見られる。硬化面も見られない。

施 設：床面東側に地床炉と埋甕を見る。また、北側にも埋甕が出土し、本住居跡出土土器として取り上げられたが、整理段階で重複する28号住に帰属させた。床面が黒褐色のため、柱穴などの落ち込みが解らず、4基を調査した。

炉 跡：床面東側で検出した地床炉である。不整楕円状の平面形を呈し、規模は約66.0×63.0cmを示す。断面形は浅い皿状で、深さ17.0cmを測る。焼土は炉内暗褐色土を中核に堆積するが、炉外南側にも散布する。炉内土器ではないが、深鉢(2)の出土が見られる。

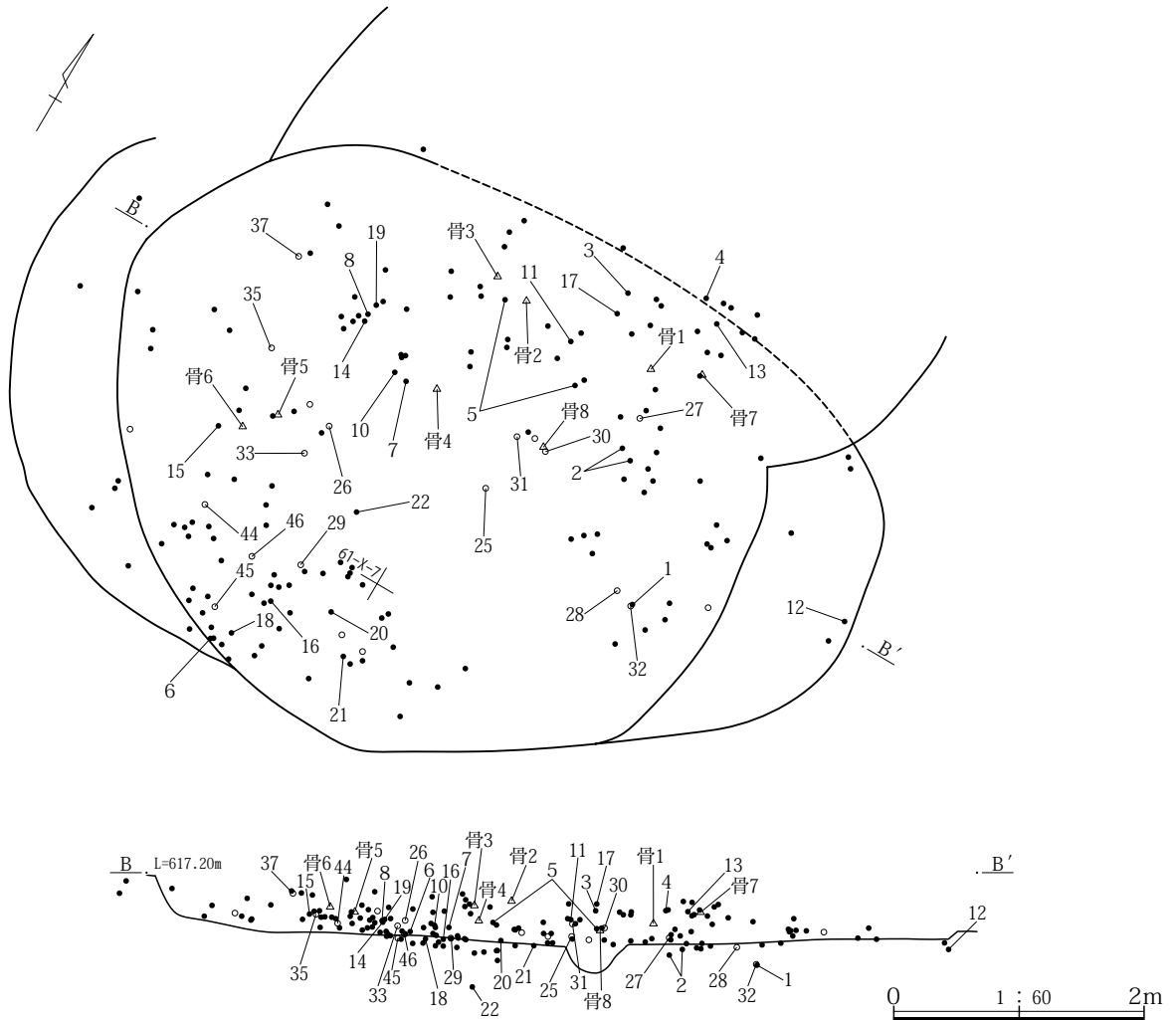
埋 甕：炉跡南西約70cmに埋甕(1)として位置付けた。径50cm程の円形の掘り込みに逆位の深鉢を埋置する。体部下半に意図的な欠損を加えたキャリパー状の深鉢であ

る。また深鉢内部からは多孔石(32)が出土している。埋甕外だが、東側に大型の亜角礫が置かれる。性格は不明だが、埋甕蓋石状の用途も想起されよう。

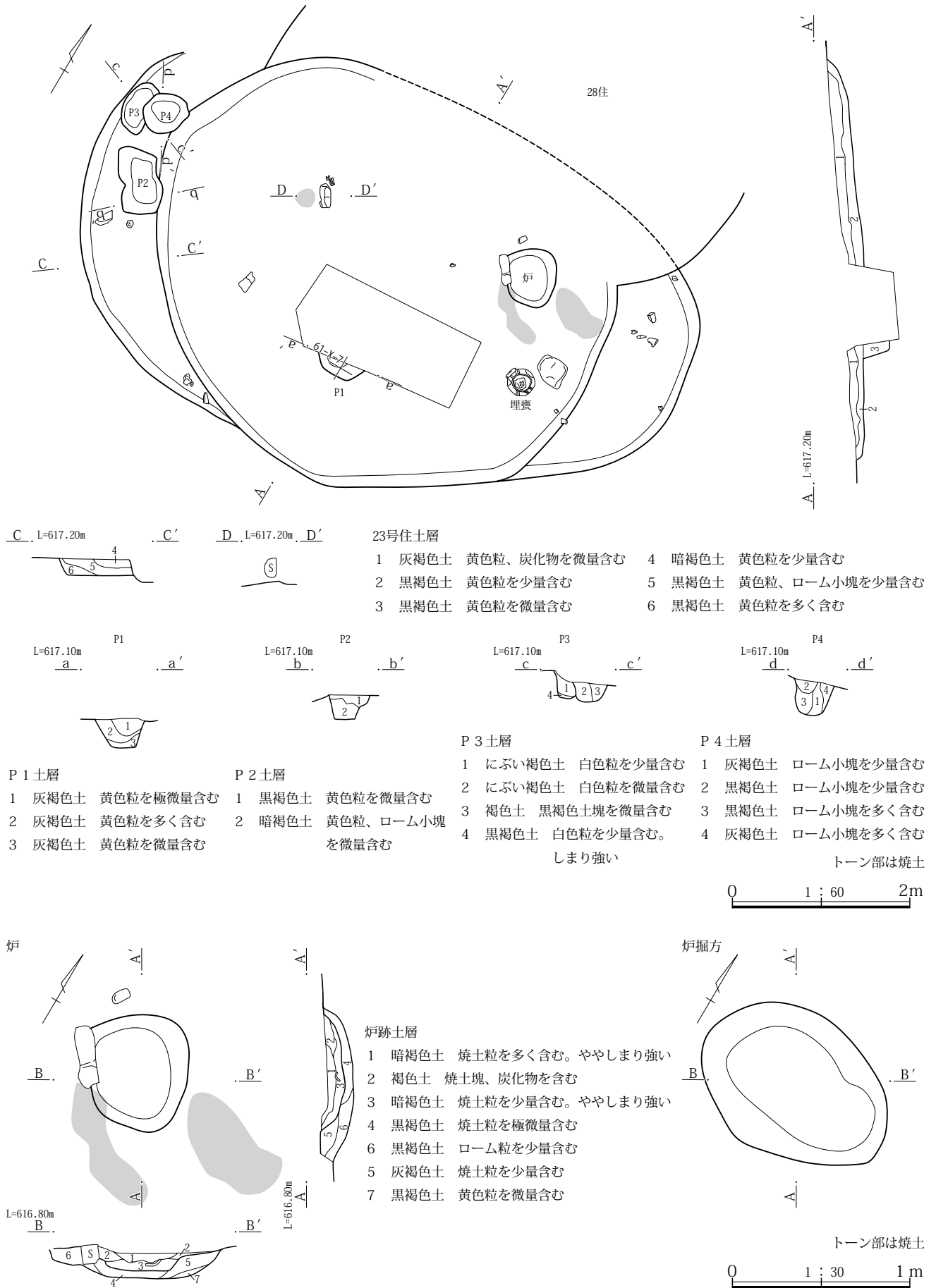
柱 穴：黒褐色を呈する床面のため、ピットを的確に確認できなかった。P1は試掘坑にかかって確認された。P2～P4は東側で暗褐色土が露出した箇所ので点的に確認できたピットである。いずれも、柱穴としての確証は極めて弱く、本住居跡に帰属し得る例ではないと考えられる。

遺 物：黒褐色土中からの出土が極めて多く、本住居跡とその周辺に集中していた。その中で、床面東側で確認された加曾利EⅢ式の埋甕(1)埋甕内多孔石(32)と「郷土式」である炉内出土土器(2)は、近縁性のある資料として位置付けておきたい。

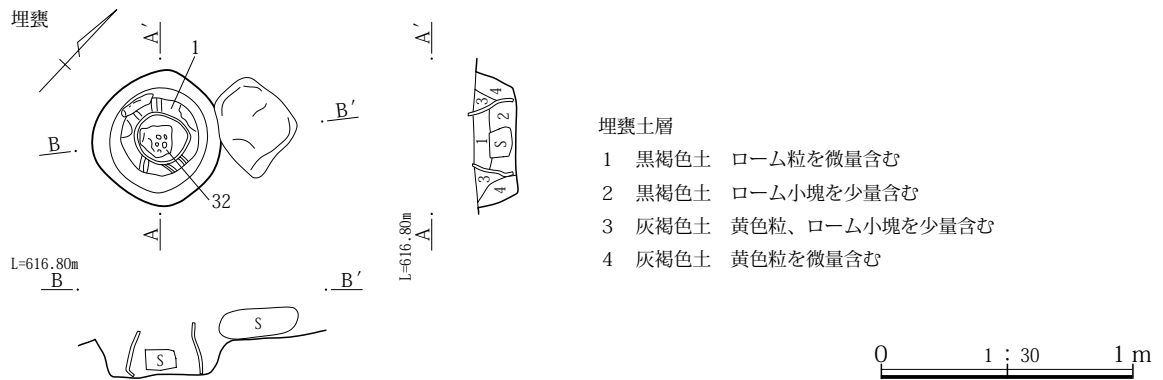
所 見：極めて不安定な住居跡である。黒褐色土中の調査で、遺物の広がりや優先したため、炉と埋甕の位置とは大きく離れた平面形となってしまった。おそらく住居本体は東側の炉跡と埋甕を中心とした径4～5m程の小



第98図 61区23号住居跡(1)



第99図 61区23号住居跡(2)



第100図 61区23号住居跡 (3)

型住居の可能性がある。時期は埋葬などの出土土器から中期後葉としたい

61区24号住居跡 (第103～109図 PL. 8・69・70)

位置：調査区東側の住居跡群内にある。61区T・U-7・8グリッドに位置し、前述の22号住北側に接している。周辺は住居跡が密集するため平坦地形が広がる。東側から北側は緩斜面地形が迫るため、その延長で南への緩やかな斜面上の立地と捉えられる。

周辺の重複遺構としては、上層に1号列石が東西に走る。北西に31号住居跡と75坑、西側に36号住居跡と38号住居跡、南に22号住と34号住居跡、東に35号住居跡が重なる。極めて密集した住居占地状況といえよう。

経過：ローム漸移層下位の暗褐色土で確認した。1号列石の調査後に列石の除去とともに確認面を下げながら平面形の確認を行った。同時に、列石の走行が本住居跡出入口部と連携する可能性が高かったため、巨視的な始点の写真と平面図の作成を行った。

規模：住居部は短軸長515.0cm前後の不整形を呈する。出入口部を含めた長軸長は600.0cmを測る。また、住居跡内縁に段差を有し、六角形の平面形を示している。こちらの長軸長は545.0cm、短軸長は336.0cmを測る。深さは70.0cmで良好な遺存度を誇る一方、南側は数cmの壁高にとどまり、北壁の在り方と対照的な様相を示していた。

重複：先に述べた、31号、34～36号、38号住との重複関係は、おそらく本住居跡が新しい例として位置付けたい。明瞭な土層の観察は経ていないが、出土土器の様相から他の住居跡は中期後葉から末葉と捉えられ、本住居跡を後期初頭と考えたためである。22号住居跡も敷石住居跡であるが、中期後葉～末葉の所産と捉えられ、本住

居跡が最も新しい住居として位置付けられる。

床面：ローム漸移層である暗褐色土を地床とする。敷石住居跡ながら、まとまった敷石はなされず、平坦な地床が構築される。硬化面も顕著な場所はなく、広がりを持たなかった。

施設：床面中央に石囲い炉、床面内縁に段差と24基のピット、及び特徴的な出入口部が主な施設であろう。

炉跡：住居部床面中央に整った方形の石囲い炉を設ける。平面規模は70.0×70.0cm、深さは42.0cmを測る。四辺を板石状の角礫で囲むが被熱のため、各々の大型礫が破碎していた。炉内埋土は灰褐色土を主体に焼土塊を含む。炉堀方として不整形の土坑が掘り込まれ、炉石が直立気味に埋められていた。

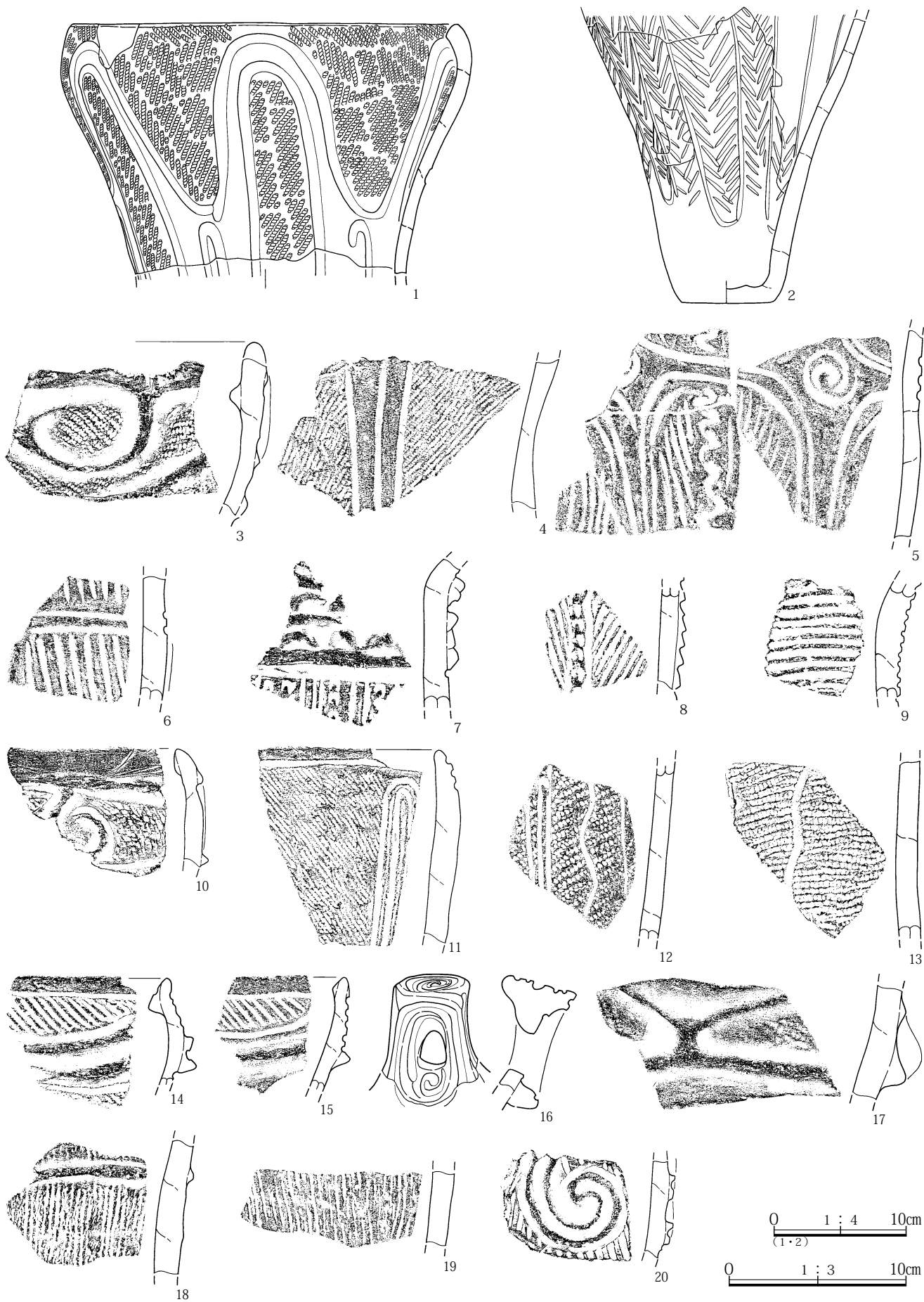
床面内縁の段差：本住居跡は床面に段差が設けられている。出入口部分以外の住居部分に10～15cm程の段差が床面内縁を巡る。外縁下端と内縁上端による幅は30～80cm程でほぼ平坦面が保たれている。段差は整った六角形を描き、各隅にP1～P3などの柱穴を配し、小型の自然石による石列が各隅を繋いでいた。

いわゆる縄文時代中期に見られる住居内ベッド状施設に近似するが、敷石住居跡における類例は多くはない。住居内の間取りや空間利用にも関わる施設であるため、出入口部との関係も含めて、今後の検討課題となろう。

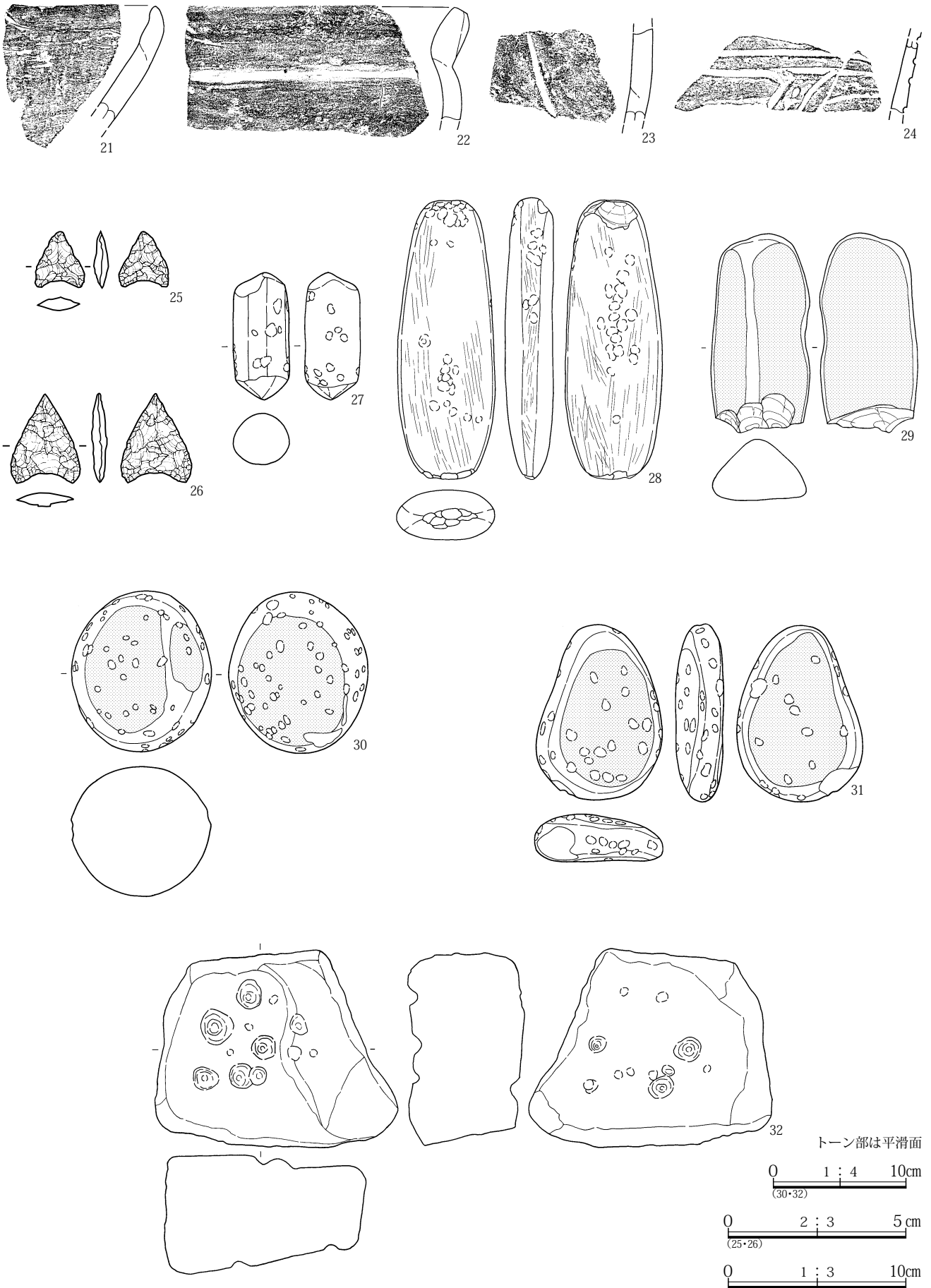
柱穴：23基のピットを調査している。そのうち主柱穴は内縁六角形の各隅に設けられる (P1～P3、P4、P11、P14、P21) と捉えられ、出入口対ピット (P15) が加わる。さらに外縁平坦部で検出されたP8、P5、P10、P13、P12、P9、P20～P24、P17も補助柱穴のような役割と考えられよう。

出入口部：南側に突出する形態で確認されている。大型自然石を並べて南端部が画され、東側も壁補強のように

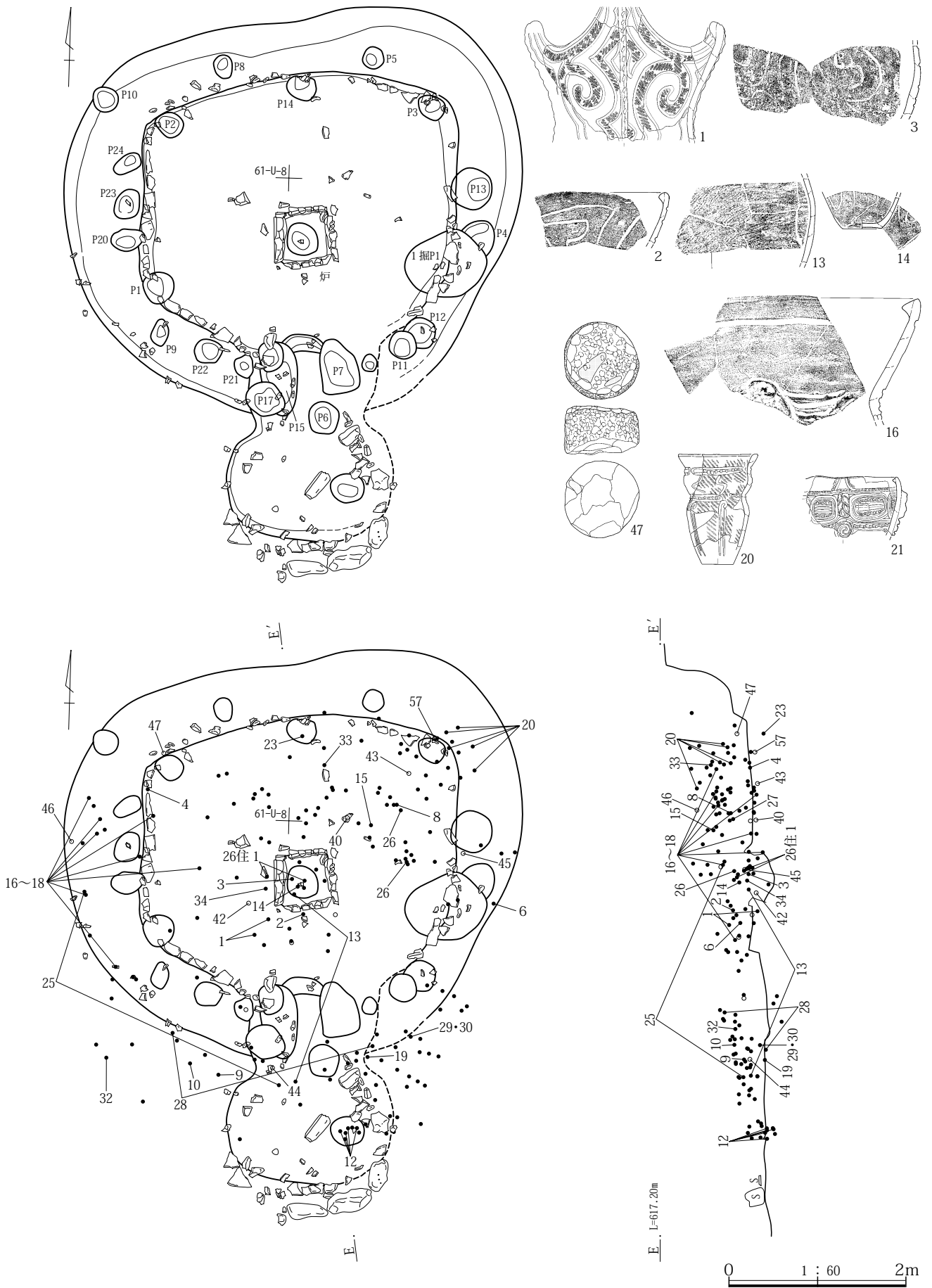




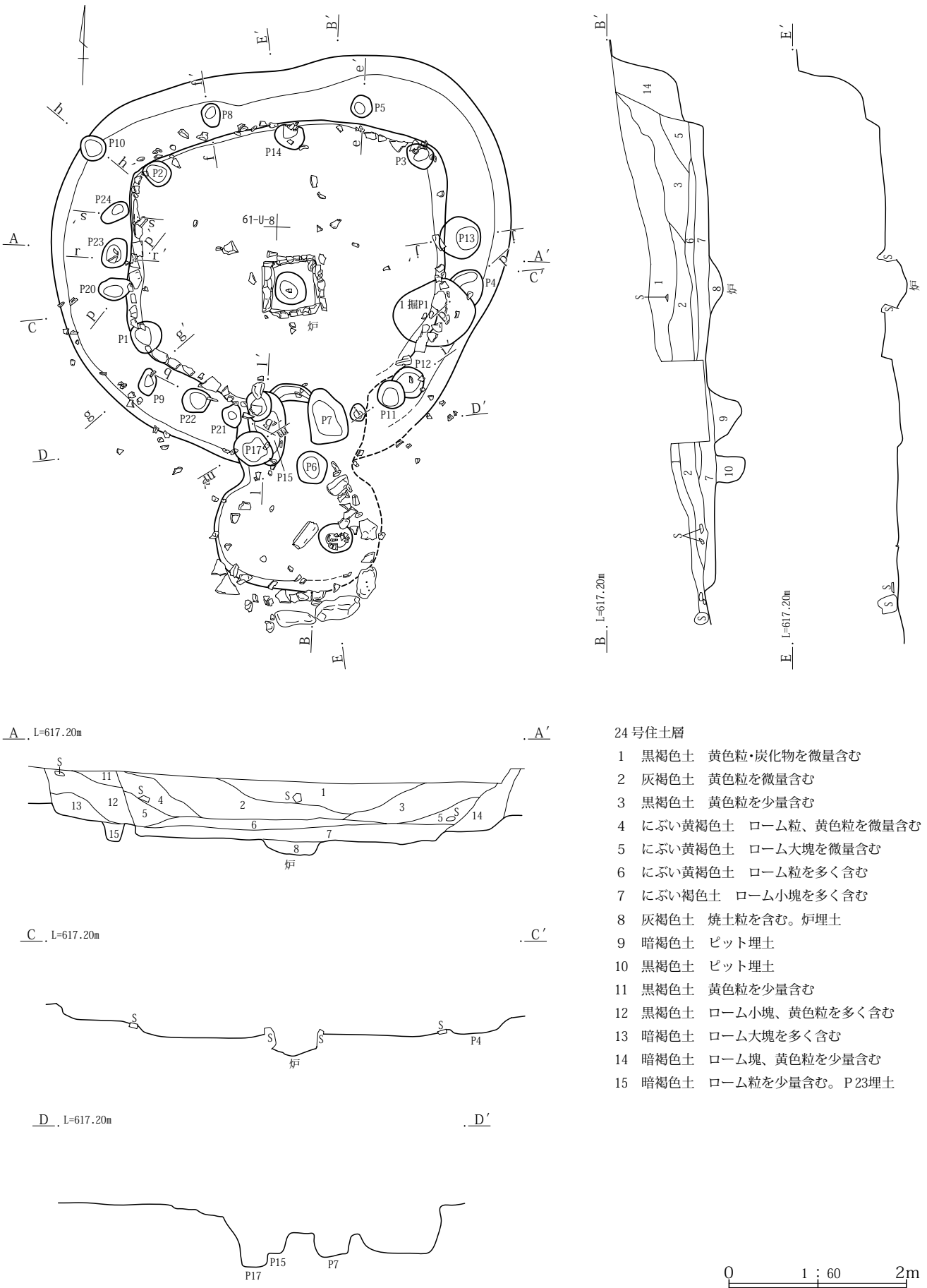
第101図 61区23号住居跡出土遺物 (1)



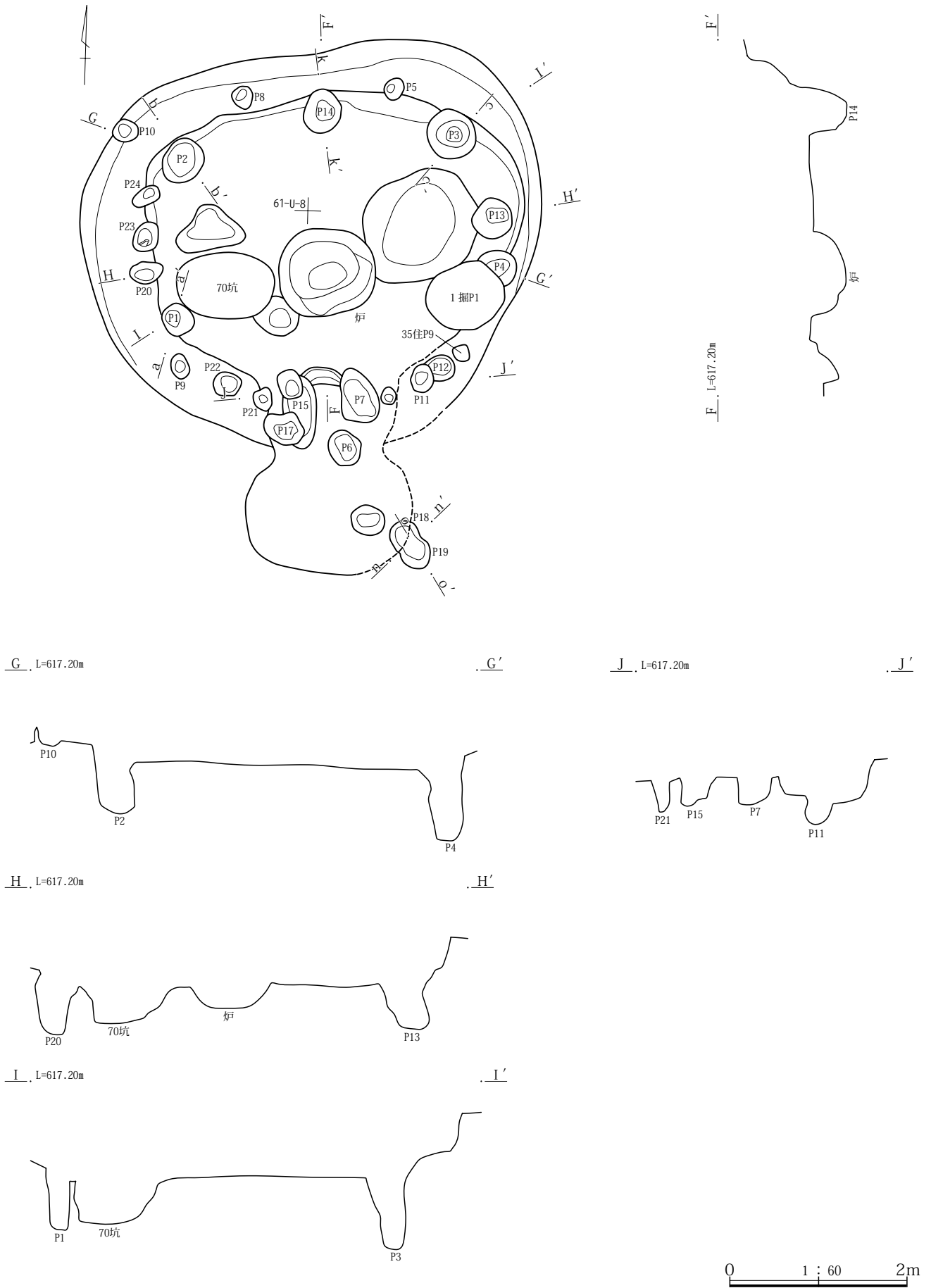
第102図 61区23号住居跡出土遺物 (2)



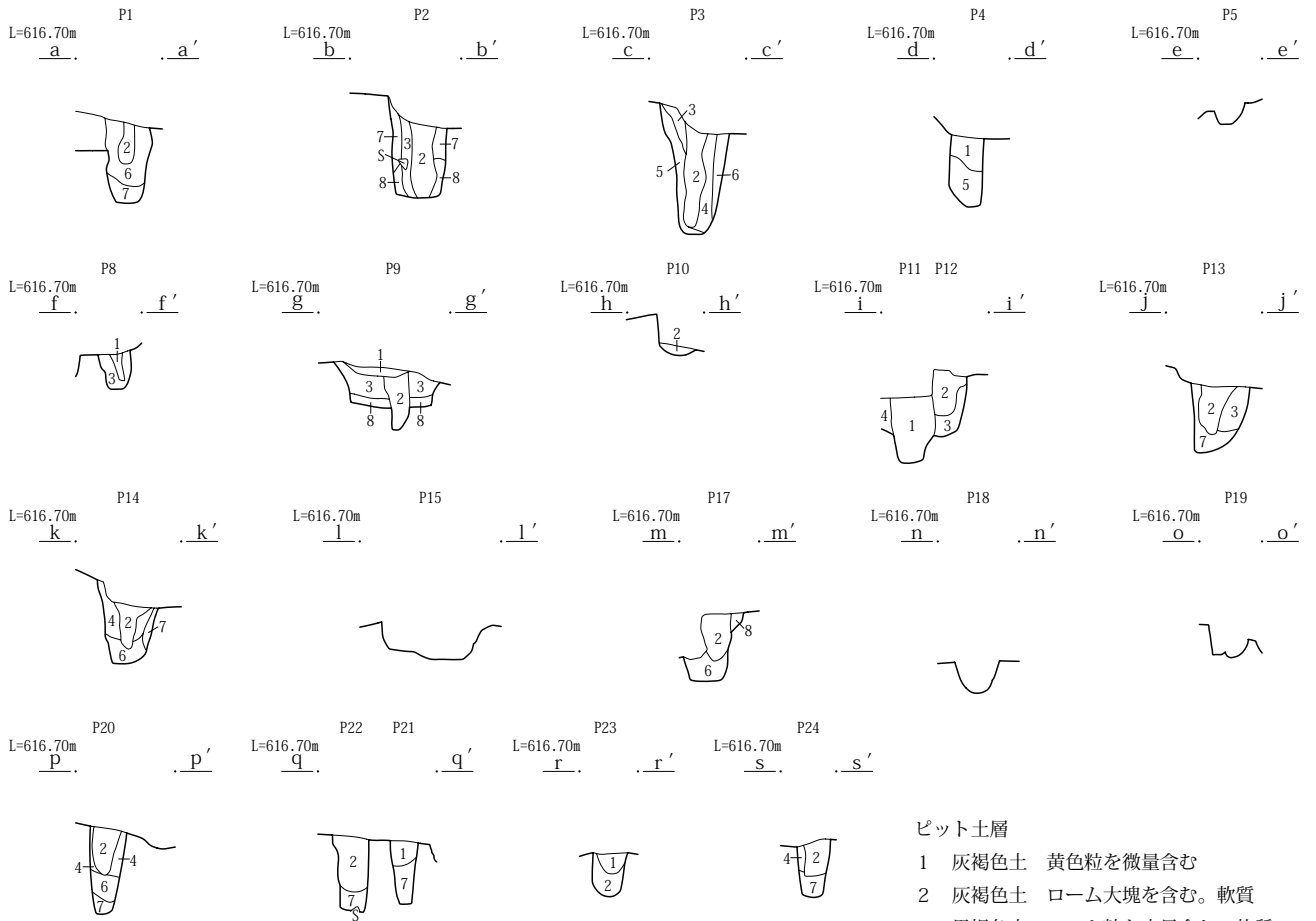
第103図 61区24号住居跡 (1)



第104図 61区24号住居跡 (2)



第105図 61区24号住居跡 (3)

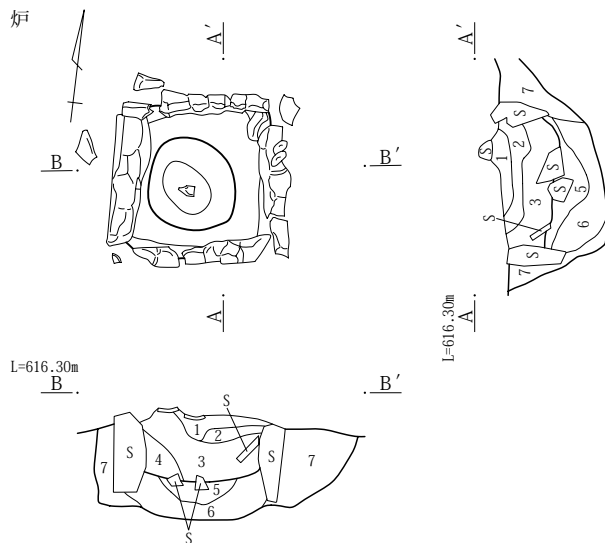
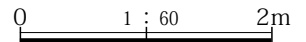


P11・12 土層

- 1 灰褐色土 ローム塊を少量含む。軟質
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を微量含む

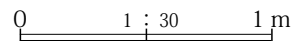
ピット土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 ローム大塊を含む。軟質
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。軟質
- 4 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 5 灰褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 6 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 7 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 8 黄褐色土 ローム塊、褐色土塊を含む

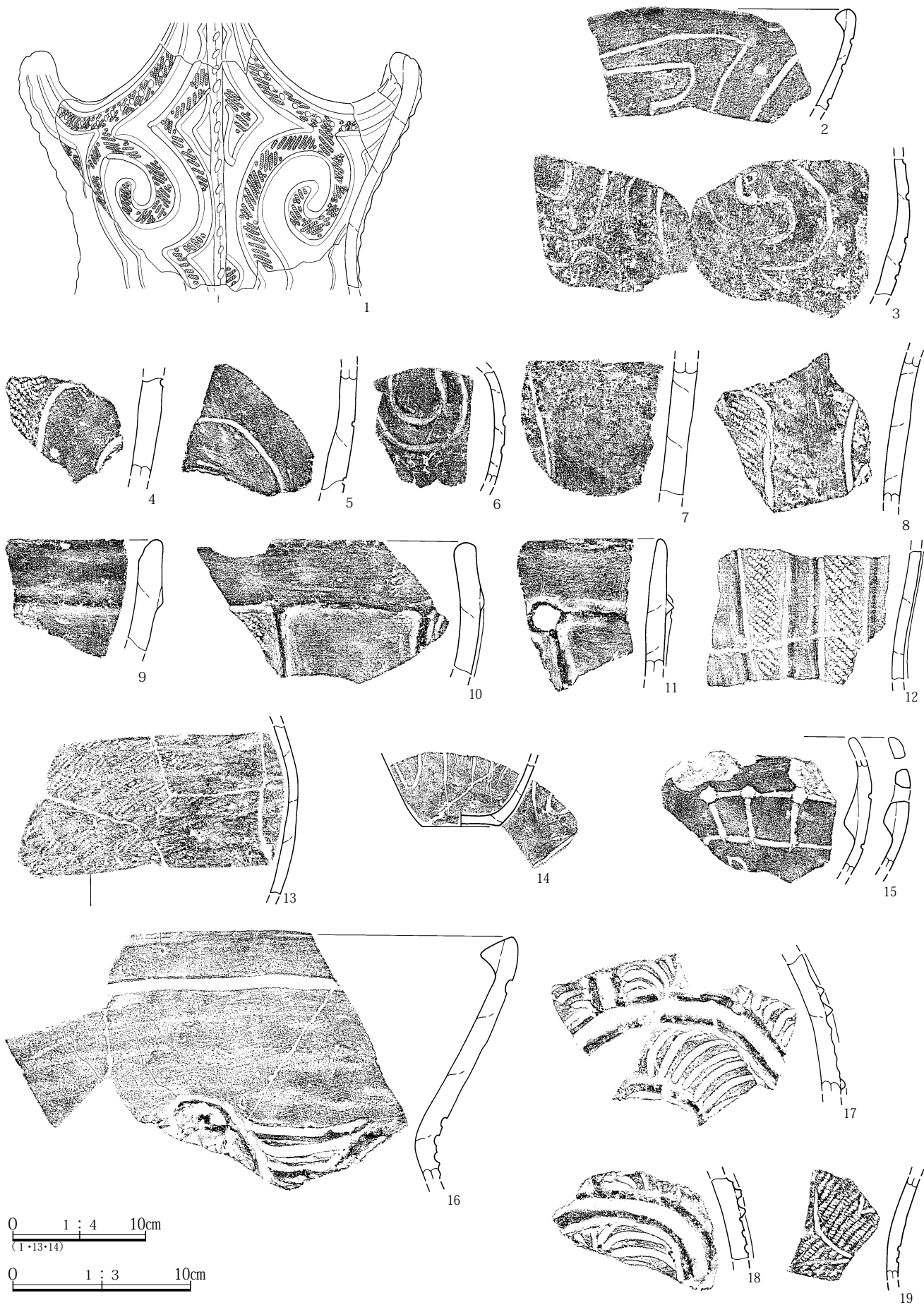


炉跡土層

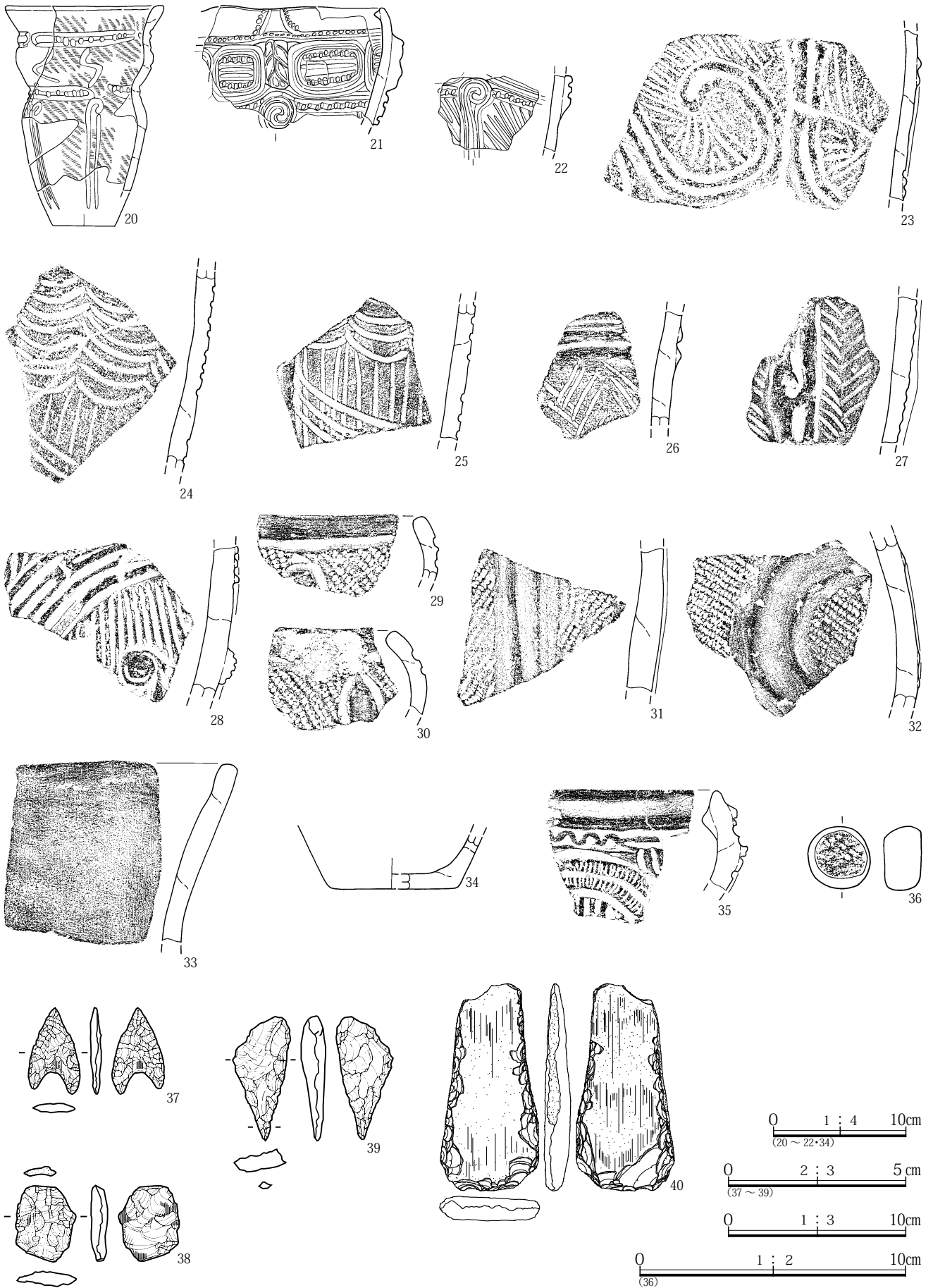
- 1 灰褐色土 焼土粒、炭化物を微量含む
- 2 にふい褐色土 焼土小塊を少量含む
- 3 灰褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム粒を微量含む
- 5 灰褐色土 黄色粒、炭化物を微量含む
- 6 赤褐色土 シルト質焼土塊を主体とする
- 7 黒褐色土 ローム塊、黄色粒を少量含む



第106図 61区24号住居跡 (4)

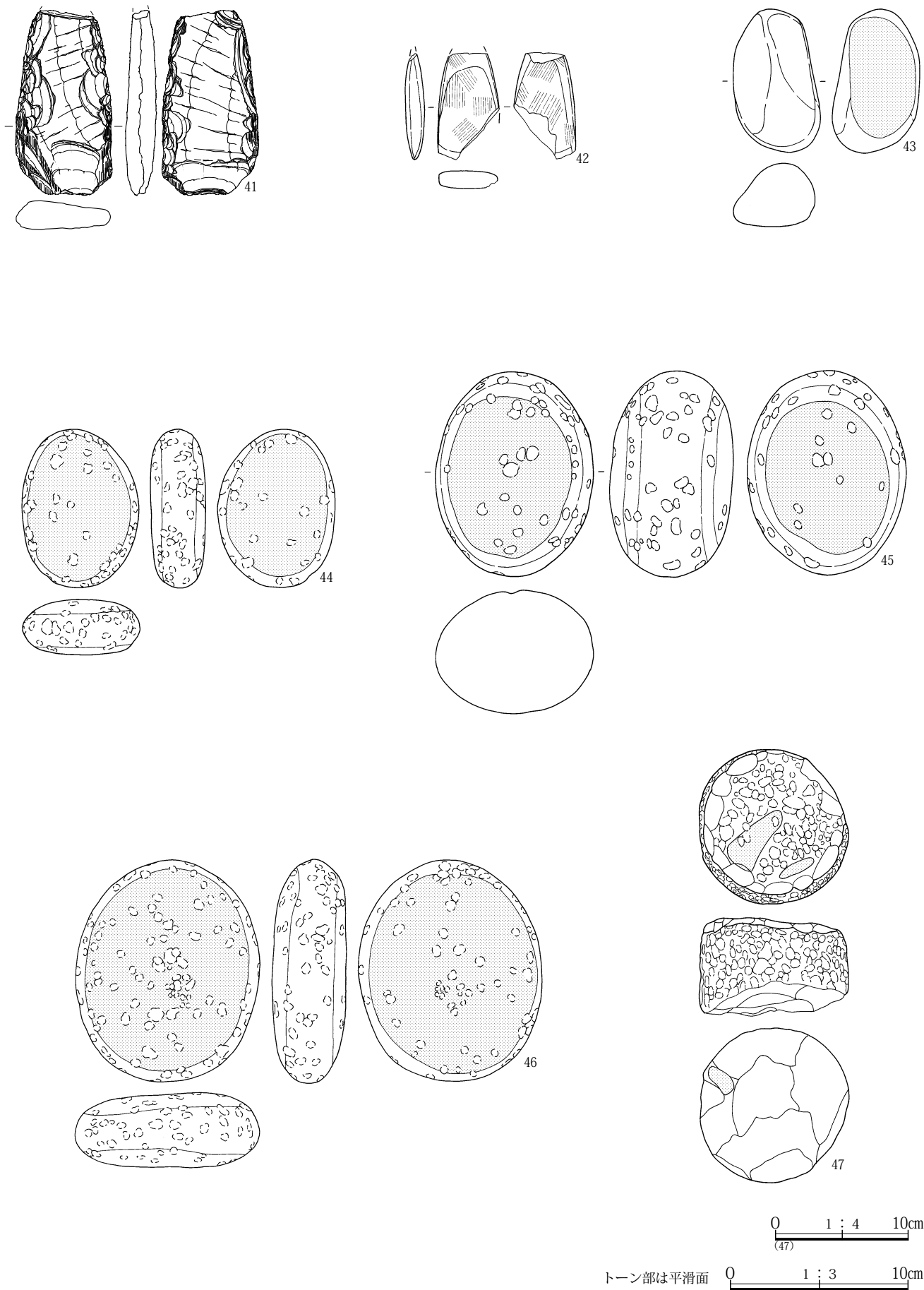


第107図 61区24号住居跡出土遺物 (1)



第108図 61区24号住居跡出土遺物 (2)





第109図 61区24号住居跡出土遺物 (3)

角礫を中心にして並ぶ。西側は礫による補強は見られないが、壁が強く内湾する平面形態を示していた。

1号列石との関係：本住居跡上層には1号列石が東西の走行を見せていた。本住居跡南には、先に述べた22号住があり、北側に弧状列石を附帯していた。本住居跡の出入口南端部はこの弧状列石と接しており、さらに出入口部中間部から連結部にかけて1号列石が重なる形態を呈していた。無論、本住居跡と22号住、1号列石との時期差はあり、同時共存の遺構ではないが、構築物としての列石、配石はある程度の時間幅を持って併存するのではないかと考える。その意味で、本住居跡と22号住が接する箇所は、1号列石という儀礼に伴う構築物の中核点であった可能性がある。

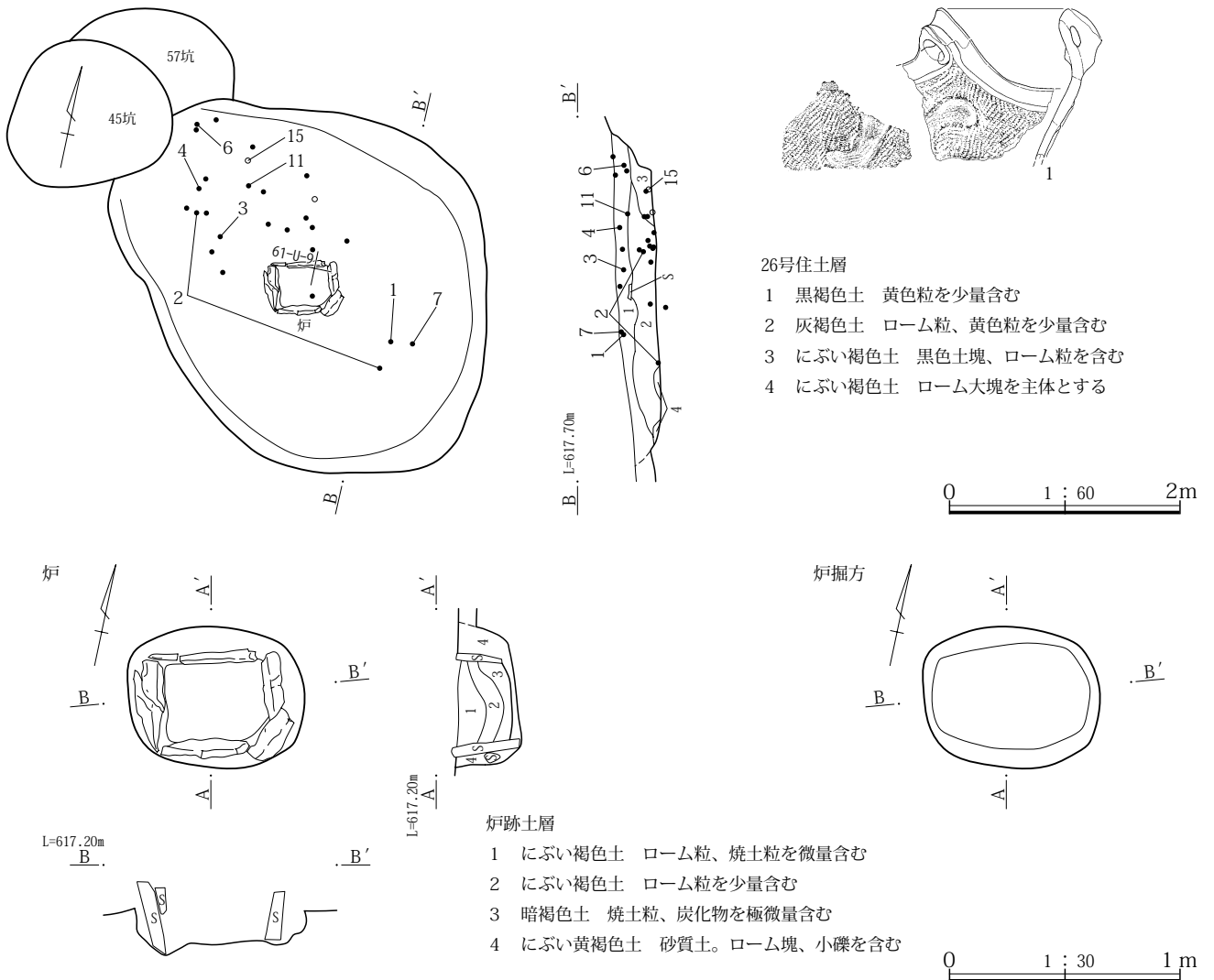
遺物：住居内全域から出土が見られる。比較的埋土中からの出土が多く、特に北側から南側への傾斜に沿った分布を示す。おそらく流入による例と捉えられる。その

中で、炉跡周辺の出土として、1・3・13・14・34があげられる。さらに、26号住居跡1の一部破片も出土している。いずれも称名寺式に比定され、本住居跡の帰属時期を具体化すると考える。また石器では、礫石器(44、57)、石棒片(47)が内縁石列からの出土である。その他では中期後葉の土器もまとまりを見る(16~18・20~22など)。おそらく重複する周辺の中期住居跡からの流入であろう。

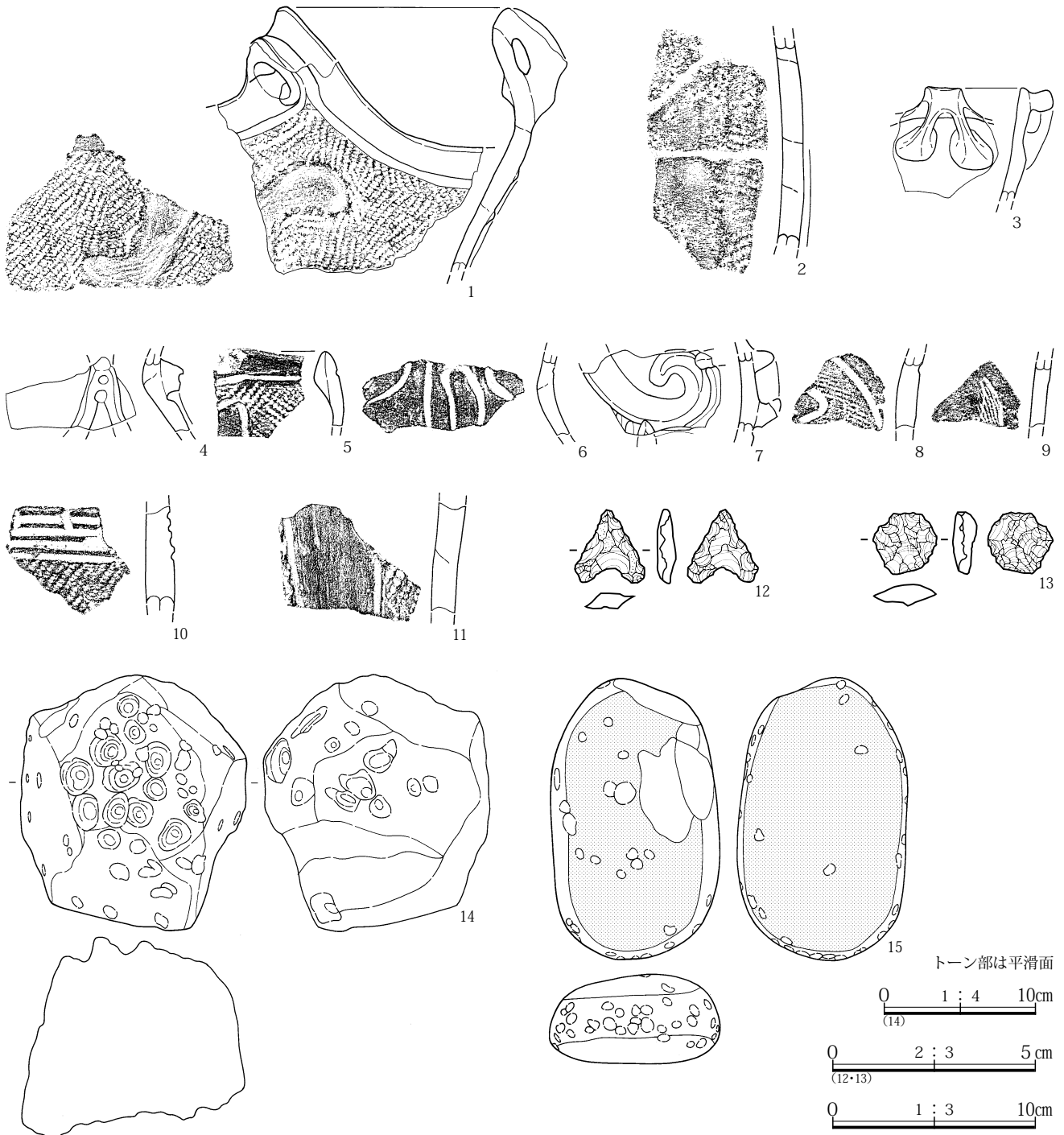
所見：後期初頭の敷石住居跡である。平面形が把握された良好な遺存度を示す。特に内縁段差による六角形の平面形は柱穴配置や空間間取りなど良好な要素を提供している。また、周辺遺構としての1号列石、南に接する22号住などとの関連も、今後の課題となろう。

61区26号住居跡 (第110・111図 PL. 8・71)

位置：61区T・U-8・9グリッドに位置する。調査区北



第110図 61区26号住居跡



第111図 61区26号住居跡出土遺物

東部の17号住西側に接して調査された。北側に9号住、12号住、南に24号住が近接するように住居跡群内にある。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあり、ほぼ平坦地形にあるといえよう。

経過：ローム漸移層下位の暗褐色土で確認した。周辺は住居跡が群在するが本住居跡はほぼ単独に近い状態で確認されている。

規模：平面形は310.0×293.0cmを測る小型の不整楕円状を呈し、深さは40.0cmと浅い。北側の壁の立ち上がり

は明瞭であるが西側から南側はやや浅く壁も低い。

重複：住居跡の重複としては、東側に17号住が接するが大きな重複ではなく、そのため新旧は不明だが、出土土器からは、本住居跡が新しい。重複遺構としては45坑、56坑、57坑が挙げられるが、おそらく本住居跡を切る重複関係である。いずれも1面目の調査で得られた土坑で、56坑は炉上位にあるが、炉を破壊するには至っていない。床面：黄褐色ロームを地床とする。ほぼ平坦面を築くが凹凸は顕著に見られ、基盤礫の露出もある。軟弱な床

面で硬化面は見られなかった。

施設：床面中央に石囲い炉を見る。その他の柱穴、壁周溝、埋甕などは見られなかった。

石囲い炉は、長軸は東西を向く横長方形を平面形とし、規模は約76.0×62.0cmを測る。四辺を扁平な板石状角礫で囲むが、南東隅のみ大型の円礫を充てていた。掘り込みは約30.0cmと比較的深い。埋土はにぶい褐色土を主体に微量の焼土粒を含む。

遺物：出土遺物は、平面的には北西に偏りが見られ、埋土中の出土が多く見られ、居住に伴う例ではない。1は24号住居跡出土遺物との接合関係がある。

所見：石囲い炉以外は、柱穴、壁周溝などの施設を見ない住居跡である。炉跡の存在から、居住痕跡と判断できるが、その他の住居のような継続性を持たない可能性もある。小竪穴状遺構のような性格が想起されよう。

#### 61区27号住居跡(第112・113図 PL. 8・71・72)

位置：調査区中央やや南東側寄りの61区V・W-4・5グリッドに位置する。南側壁際の調査で、32号住居跡や42号住居跡の上層で調査された住居跡である。周辺は緩やかな南側への緩斜面地形で、ほぼ平坦面での調査だった。32号住や42号住以外には44号住や47号住が近接し、調査区中央の住居跡密集地点の中での検出である。

経過：ローム漸移層上位の黒褐色土で確認した。遺物の集中が見られ、住居跡の存在を予想し精査を重ね、南側への調査区拡張も加えて全体像の把握に努めた。その結果、黒褐色土中に焼土と共に炉石が検出されたため、住居跡の存在を確定した。

規模：平面形はやや小型の楕円状を呈し、規模は約(375.0)×328.0cmを測る。深さは30.0cmであるが、壁は全体に弱い立ち上がりを呈し、遺存状態は良くない。

重複：前述の住居跡群調査の最初に着手した住居跡である。故に上層の調査であり、本質的には本住居跡が一番新しい。また、本住居跡北側には後世の1号流路が南北に走っており、これが本住居跡北壁を壊している。

床面：黒褐色土を地床とする。一部ローム塊や焼土塊が床面上に広がり、貼り床状を示すが薄い堆積のため、基盤層である黒褐色土の地床と判断した。ほぼ平坦面を築くが、硬化面などは顕著では無く、軟弱な床面だった。

施設：床面中央から北寄りに重複状態の石囲い炉と地

床炉を調査した。また、東壁際にピット1基を確認した。炉跡：床面中央に地床炉(炉1)、北側に石囲い炉(炉2)が重複する。新旧は土層の観察から炉2が炉1を切る重複関係を示す。炉1は長軸を北西に向けた不整楕円状を平面形とし、約73.0×67.0cmを平面規模とする。深さは約22.0cmを測る。黒褐色土を埋土とする。炉2は、主軸を北北西に向けた正方形を呈する石囲い炉で、規模は68.0×68.0×28.0cmを測る。炉石は北辺と東辺のみに設けられ、被熱痕跡が著しかった。殆どが板石状の角礫で占められるが、北西隅にやや扁平な円礫が充てられていた。また、炉内南東隅には深鉢体部上半を正位に置いた炉内土器(1)が出土している。

柱穴：東壁際に1基のみピット(P1)が調査された。その他にピットが検出されておらず、対応関係も不明のため柱穴としての確定性に乏しいが、規模、配置は良好な例である。

遺物：平面的には、炉跡を中心に東側にかけてやや偏りを見せる。炉跡出土例が顕著で、炉内土器(1)以外に2~4、6、7が出土している。いずれも加普利EⅢ式新段階の所産と捉えられよう。

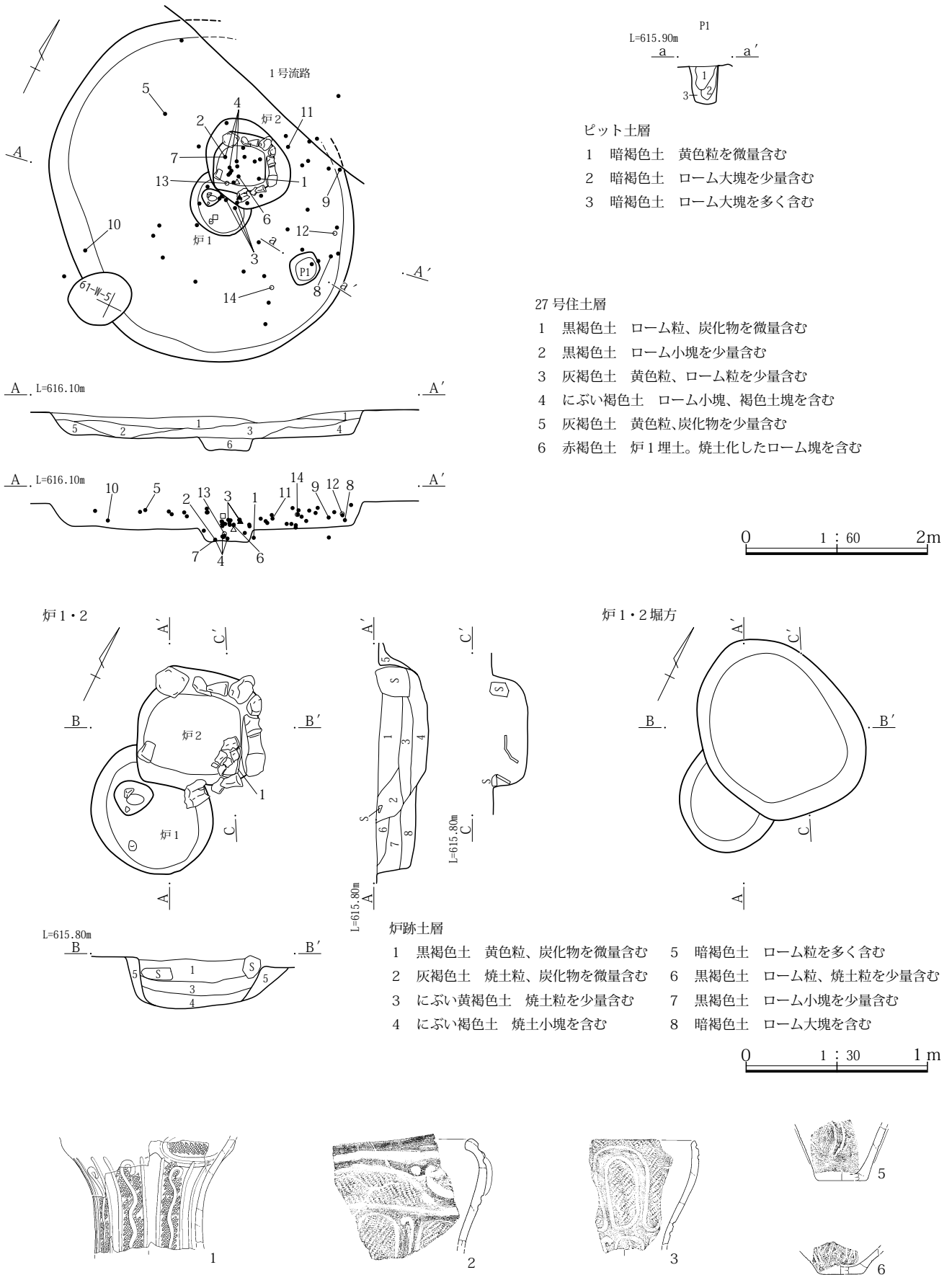
所見：黒褐色土中の調査で、住居跡平面形、柱穴配置など不明点の多い調査となった。しかしながら石囲い炉を見るため、住居跡としての位置付けは確定したい。炉跡が重複するが、おそらく炉1→炉2の変遷が捉えられよう。ただし他の施設による住居内の移動痕跡が見られないため、詳細は控えたい。

#### 61区28号住居跡(第114・115図 PL. 9・72)

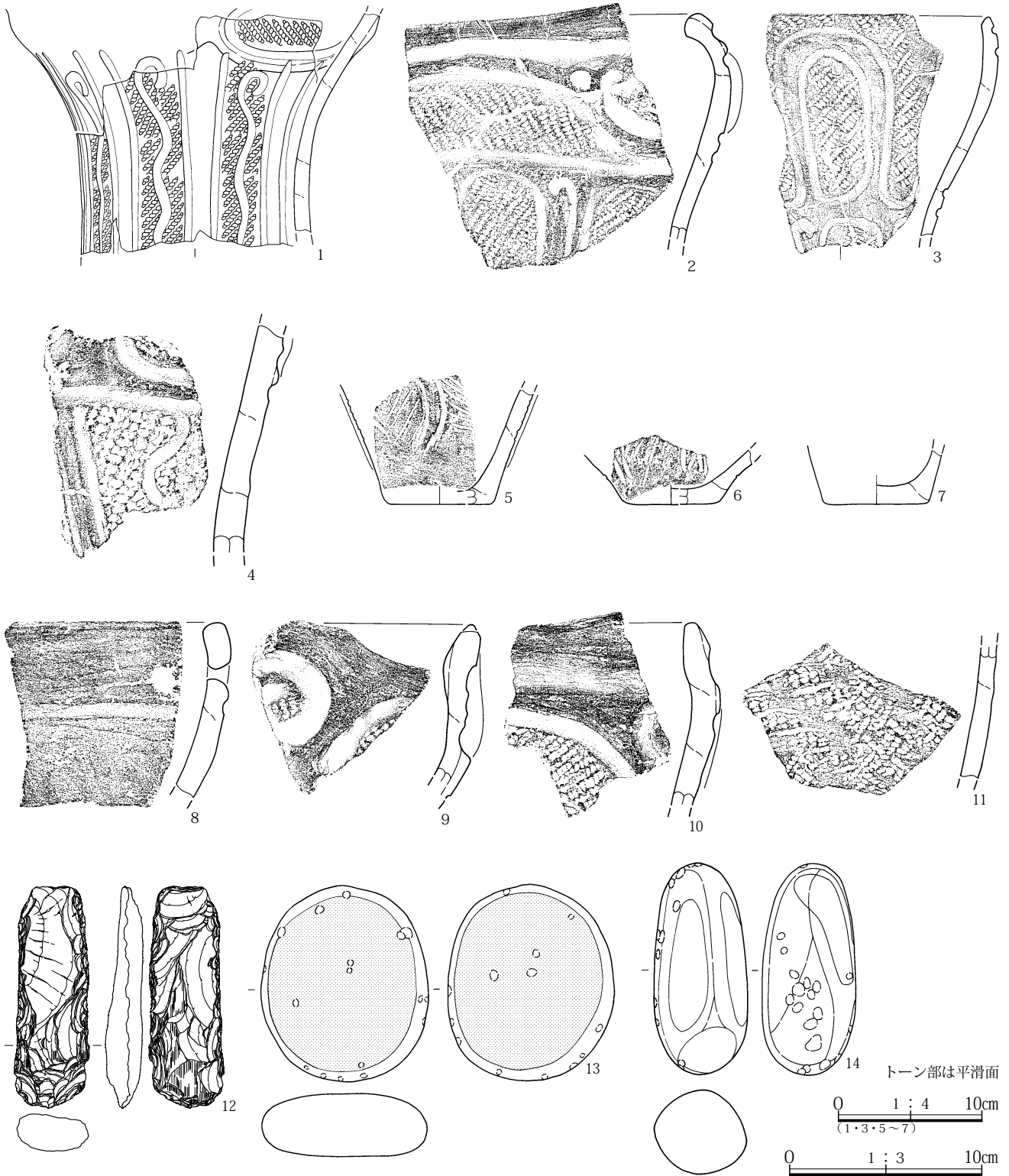
位置：調査区中央東寄りの61区W・X-7・8グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面での検出となった。多くの住居跡や土坑などが群在し、本住居跡南には23号住が、北には29住居跡が重複する。

経過：確認面はⅢ層下位である黒褐色土である。周辺は黒褐色土の堆積が厚く、ローム漸移層にまで確認面を下げると、壁など多くの遺構要素が失われるからである。黒褐色土の調査中も出土遺物の広がりとともに、石囲い炉が検出され、住居跡として調査を進めることになった。しかしながら、遺構埋土も黒褐色土のため、その分別は困難であり、床面中の全ての施設を網羅できた調査ではない。

第3章 発見された遺構と遺物



第112図 61区27号住居跡



第113図 61区27号住居跡出土遺物

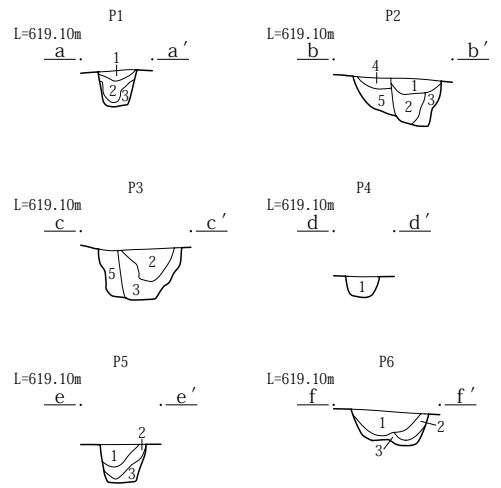
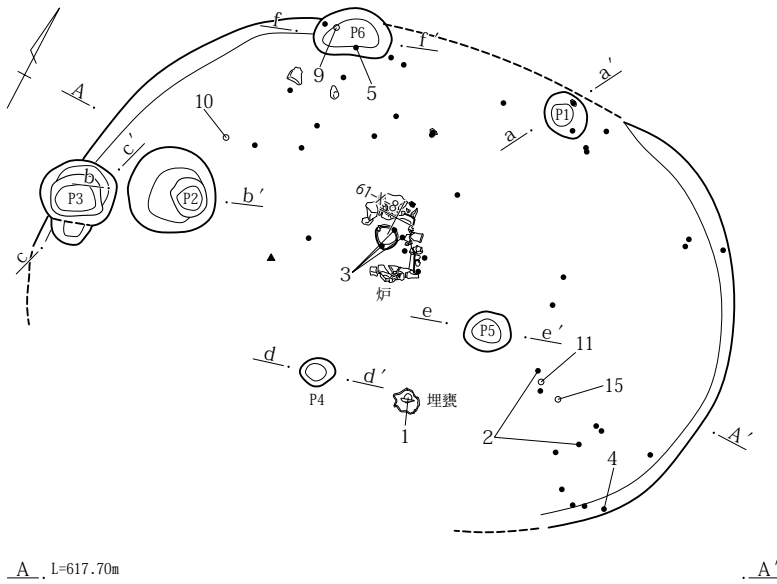
規 模：長軸を西北西に向けたやや横長の不整楕円状を呈する平面形である。規模は約530.0×-×29.0cmで浅く、壁の立ち上がりも弱い。尚、南側は23号住との重複のため判然としなかった。

重 複：南に23号住が、北に29住が重なるが新旧関係は層位的には観察されていない。出土土器の観察からも、

大きな時期差を見出せず、詳細な新旧関係の把握は控えない。

床 面：黒褐色土を地床とする。凹凸が顕著で、緩やかに南東へ傾斜する傾向は見られる。硬化面は確認されず、全体に軟弱な床面といえよう。

第3章 発見された遺構と遺物



P 1 土層

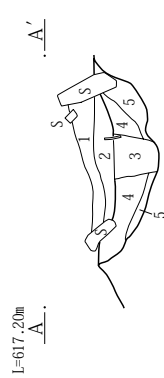
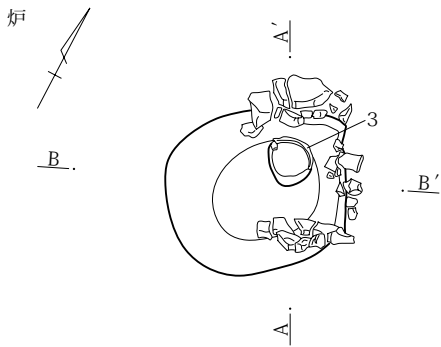
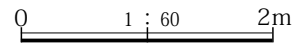
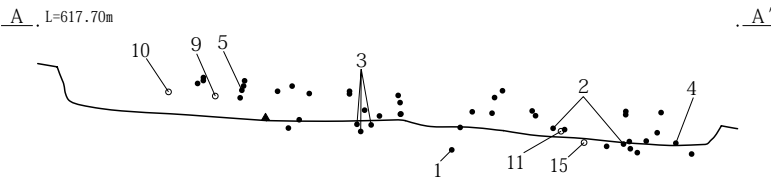
- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊、黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を極微量含む

P 2 ~ 6 土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 黄色粒極微量
- 3 灰褐色土 ローム小塊を微量、黄色粒を少量含む
- 4 灰褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 5 灰褐色土 褐色土塊を含む

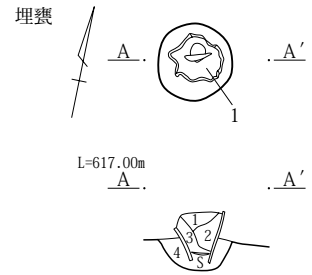
28号住土層

- 1 暗褐色土 黄色粒・炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 白色粒、黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 にぶい褐色土 黄色粒を微量含む
- 5 黒褐色土 均質。黄色粒を極微量含む



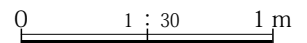
炉跡土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、焼土粒を極微量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。炉内土器埋土
- 4 にぶい褐色土 焼土小塊を多く含む
- 5 黒褐色土 ローム塊を多く含む

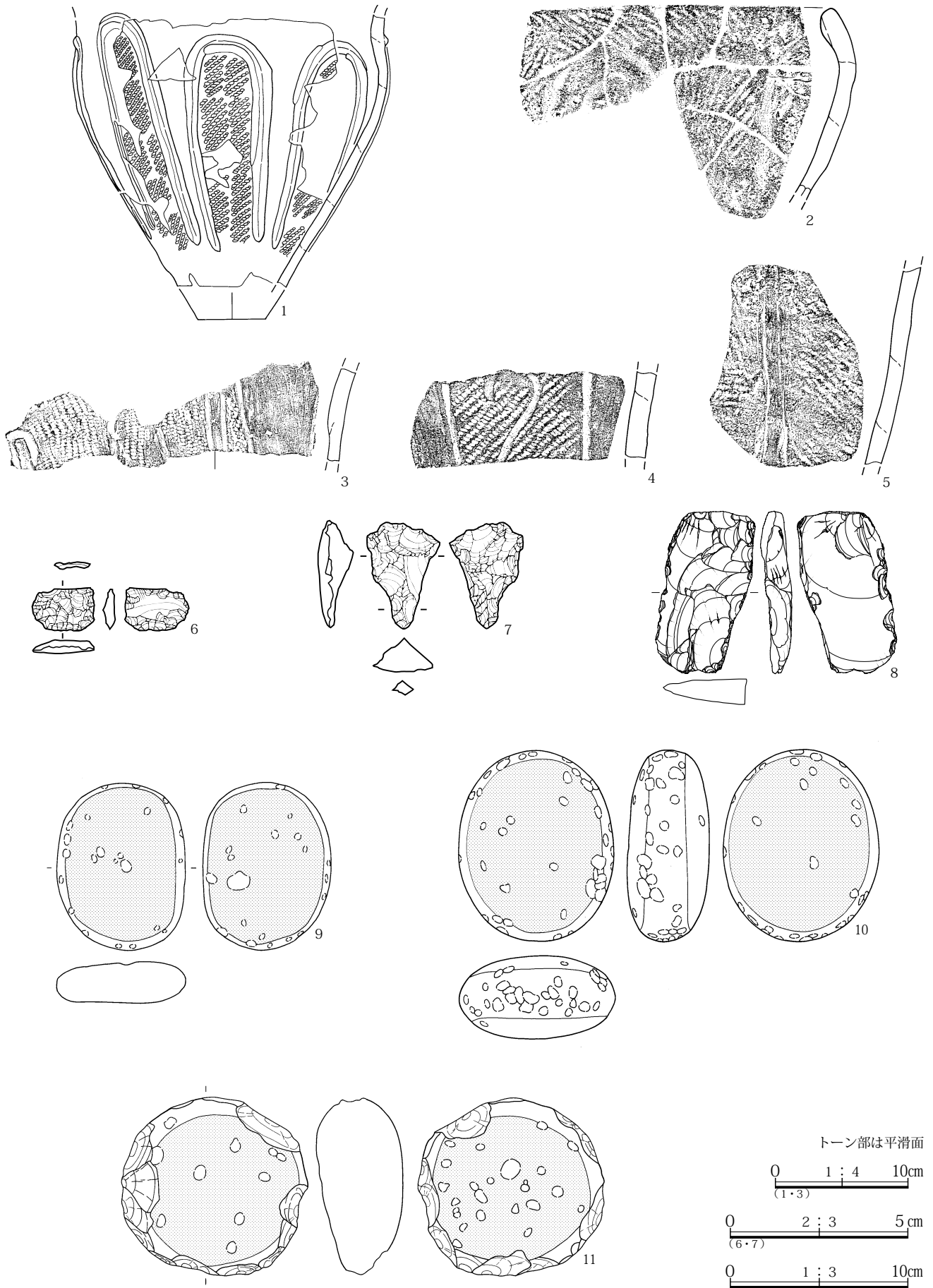


埋葬土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム大塊を少量含む



第114図 61区28号住居跡



第115 図 61区28号住居跡出土遺物



施設:床面中央に石囲い炉を見る。その他に6基のピットを柱穴として調査した。

炉跡:主軸を北西に向けた長方形を平面形とする石囲い炉である。平面規模は約76.0×70.0cmで、深さは26.0cmを測る。炉石は、西辺には設けられず、北辺と南辺に大型の角礫を充て、東辺は小型の角礫が並んでいた。いずれも被熱を受け破碎された状態と判断できた。また北辺は2列の角礫が並んだ状態である。炉内中央やや北寄りに、深鉢体部中位(3)が正位の状態に埋置されていた。土器も被熱痕跡が著しく、個体としての復元が困難だった。

埋 葬:石囲い炉南約90cmに埋葬を1基確認した。当初、重複する23号住埋葬として取り上げられていたが、整理段階で、本住居跡主軸線上に乗ることから、帰属を本住居跡に移した。径約30cmの円形土坑を掘り込みとして、深鉢体部中位が正位で埋められていた。

柱 穴:6基のピットを確認したが、P1、P2、P6は柱穴として確定したい。特にP6は埋葬、炉を結ぶ主軸に乗り奥壁の柱穴として位置付けたい。P4、P5は浅く規模としては不適当だが、床面の遺存度を考慮すると、配置上は柱穴としての妥当性を持つ。P3の規模は最も妥当だが、配置上問題が残る。

遺 物:埋葬(1)、炉内土器(3)は居住に伴う遺物として位置付けられよう。加曾利EⅢ式新段階に比定される。その他は多くが埋土中の出土であるが、2は南東床面で出土しており、住居跡時期に帰属する可能性がある。

所 見:やや遺存度の悪い住居跡である。床面中央に石囲い炉を設け、小規模ながら奥壁柱穴と出入口埋葬を配す。その他の施設など詳細は不明だが、黒褐色土中の検出であり、多くは望めなかった。時期は埋葬、炉内土器から中期後葉としたい。

61区29号住居跡(第116・117図 PL. 9・72・73)

位 置:調査区東側の北壁際で調査した。61区W・X-8グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形で、南には28号住が重複する。

経 過:遺構確認はⅢ層下位である黒褐色土中で行った。遺物の集中が見られたため、確認作業を進め、石囲い炉の検出に至った。平面形の確認は黒褐色土中に止まり、

さらに傾斜地形の影響もあり、南半の壁は28住との新旧関係も併せて確認が果たせなかった。また、北壁は調査区域外に伸びるため、未調査となっている。

規 模:南半の平面形が判然としないが、径440.0cm前後の不整円形を呈すると思われる。深さは良好な北東壁周辺で約20.0cmを測るように、やや浅く、遺存度は良くない。主軸は不明だが埋葬と炉跡を軸線とすると北北東を向く。しかし、炉跡長軸との差が見出され検討を要する。

重 複:南側で28号住と重複するが、的確な土層軸による観察が果たせず。新旧関係は不明である。出土土器からは、本住居跡が若干新しい様相を示すが、確定的ではない。

床 面:貼り床を見ず、黒褐色土を地床とする。硬化面も確認されなかったため、床面レベルは、炉跡周辺の周辺を基準に検出に努めたが、凹凸のある南西に僅かに傾く床面を確認した。

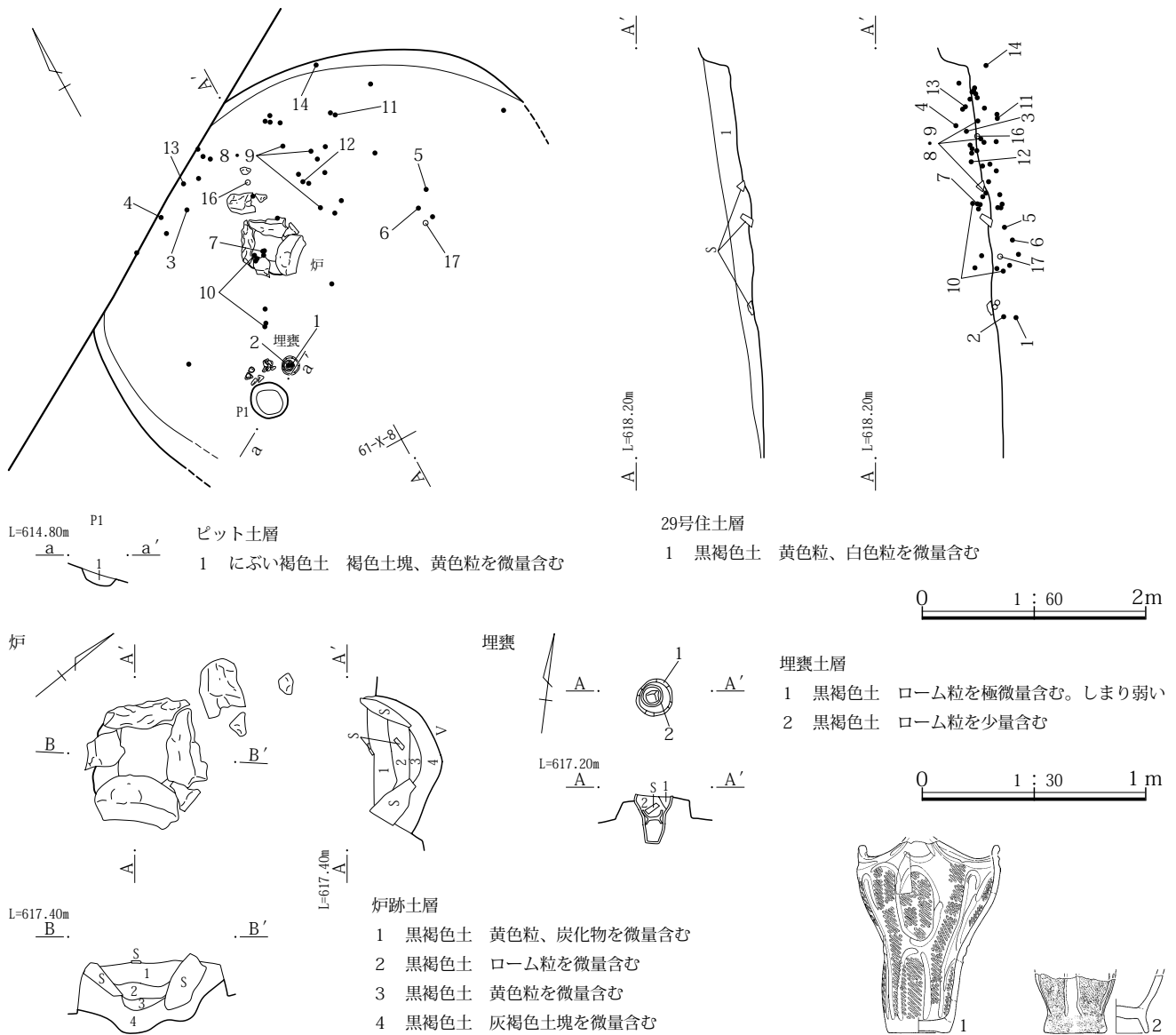
施設:床面中央やや北東寄りに石囲い炉、南約70cmに埋葬、ピット1基を確認した。

炉跡:四辺を大型の角礫で圍繞した方形を平面形とする石囲い炉である。規模は約59.0×50.0×30.0cmを測り、掘り込みも深く皿状の立ち上がりを示す。長軸は北西を向くが、住居跡主軸との差がみられるため問題はある。埋土は黒褐色土を中心とするが焼土粒の含有は見られなかった。出土遺物としては、上層に深鉢体部破片(7・10)が出土している。

埋 葬:石囲い炉南に小規模な埋葬を見る。黒褐色土中の確認のため、掘り込みの詳細は記録できなかったが、小型の波状縁深鉢(1)が正位の状態に埋置され、さらに内部に台付き深鉢底部(2)と小型の角礫が入り子になっていた。深鉢1は底部まで残存しており、さらに内部に別の土器を入り子状に置く例は通常の出入口埋葬とは様相を異にする。ただし、本住居跡では炉跡軸線上に乗ることから、出入口埋葬としての位置付けを優先したい。

柱 穴:埋葬南西に径30cm程のピット(P1)を検出したが、10.0cmと浅く柱穴としては妥当ではない。黒褐色土の床面上での確認のため、ピットの検出そのものも困難であり、P1以外のピットは確認できなかった。

遺 物:全体的に北側に偏る平面分布が見られるが、こ



第116図 61区29号住居跡

れは残存度も影響する。また、床面あるいは床直上の出土を主体としており、居住に伴う例や住居跡廃棄直後の所産と捉えられよう。その中で埋葬（1）と入れ子の土器（2）は加曾利Ⅲ式古段階の例と捉えた。またその他の土器片は「郷土式」や曾利式を主に伴出する。諸磯b式（13・14）、加曾利Ⅰ式（12）は流入による混在であろう。

所見：平面形把握も北半に止まり、壁周溝や柱穴の検出も果たせなかったため、住居跡規模など詳細は不明である。石囲い炉と埋葬の様相から住居跡として位置付けて報告した。時期は出土土器から中期後葉としたい。

61区30号住居跡（第118～120図 PL. 9・73・74）

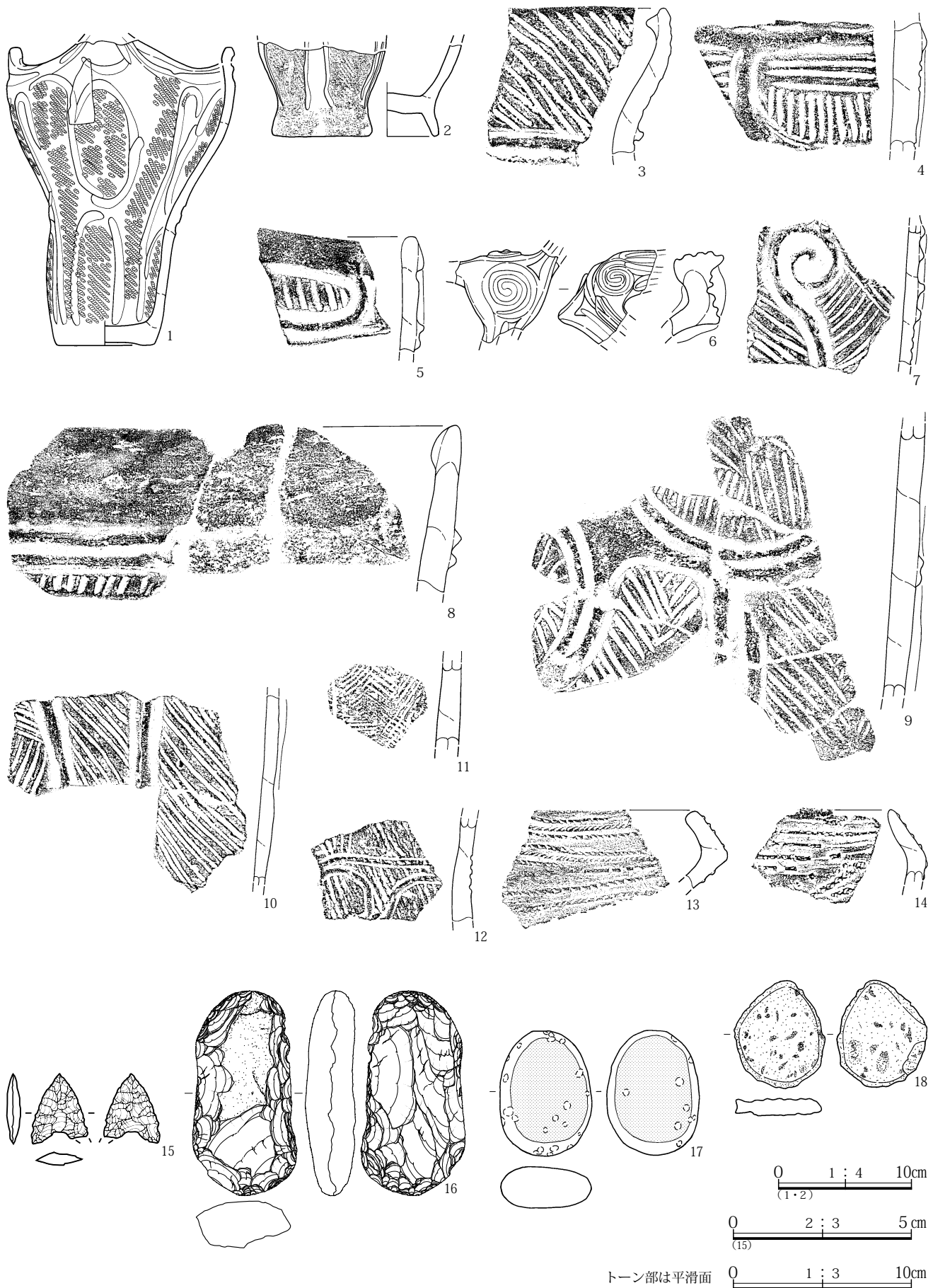
位置：調査区中央東寄りの61区V-W-7・8グリッドに

位置する。周辺は南側への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面での検出となった。多くの住居跡や土坑などが群在し、本住居跡西には28号住や29号住が近接し、床面南には59号坑が重複する。

経過：確認面はⅢ層下位である黒褐色土である。周辺からも遺物の出土が広がり、平面形の確認を進めたが、焼土の集中をみたため、住居跡として調査した。

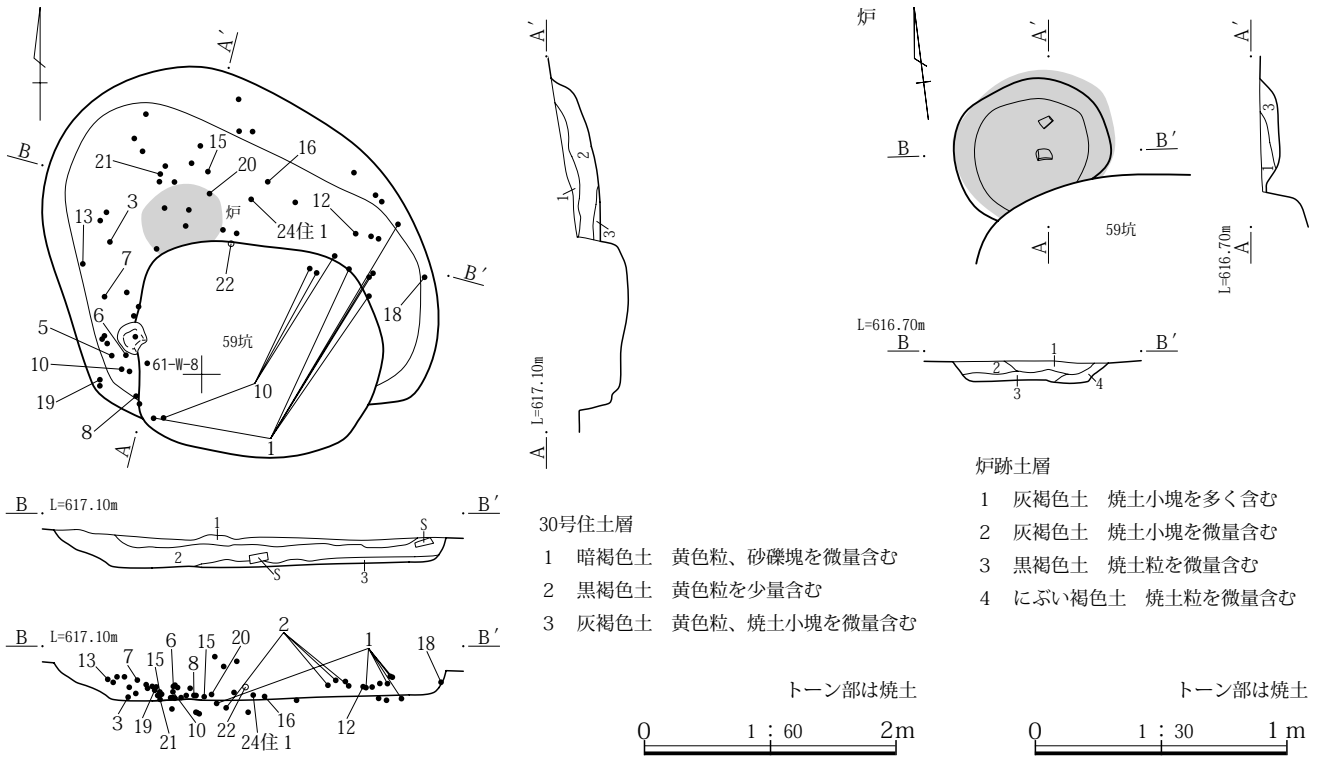
規模：平面形は小型の不整楕円状を呈し、規模は約345.0×280.0cmを測る。深さは29.0cmでやや浅く壁の立ち上がりも弱い。長軸として北西を充てたが、柱穴や埋葬も見られず確定的ではない。

重複：南側の床面で59坑と大きく重複する。新旧としては土坑が本住居跡の炉を壊すため、59坑を新しく捉えた。また、1号流路を切る重複状況であり、他の中期住

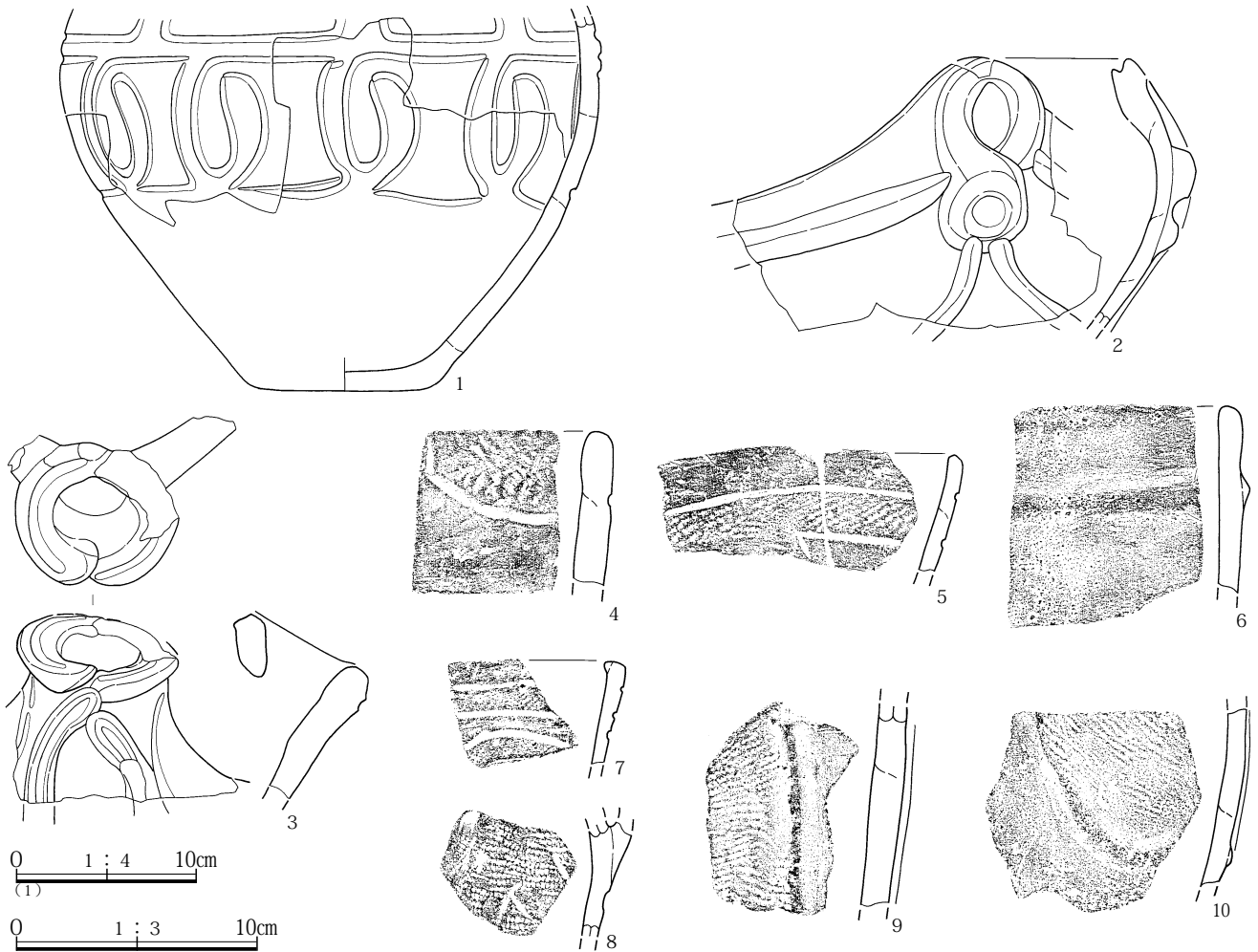


第117図 61区29号住居跡出土遺物

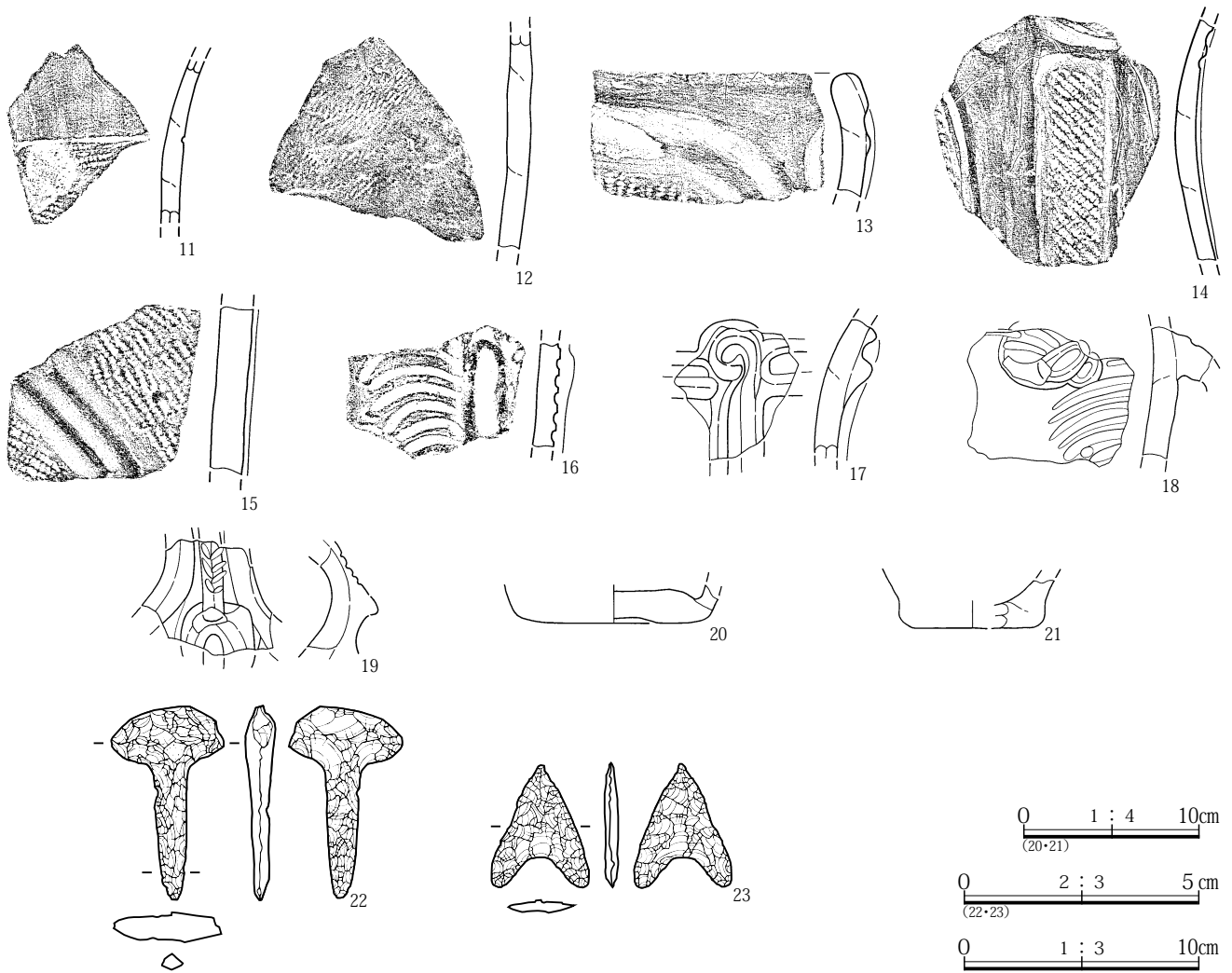
第3節 住居跡 (61区)



第118図 61区30号住居跡



第119図 61区30号住居跡出土遺物 (1)



第120図 61区30号住居跡出土遺物（2）

居跡とは新旧が逆になる。

床 面：焼土が検出された面を床面と捉えた。ローム漸移層上位である暗褐色土を地床とし、僅かな凹凸はあるもののほぼ平坦面を築く。硬化面も広がりを見なかった。

施 設：床面中央やや北寄りに地床炉を1基確認したのみで、その他の柱穴や壁周溝は検出できなかった。

炉 跡：径約62.0cmの不整円形を平面形とし、浅い掘り込みで、焼土塊を含む灰褐色土を主に堆積していた。

遺 物：住居跡全面から出土の分布を見る。床直～床直上からの出土だが、居住に伴う出土例は見ない。称名寺式に比定される1、2が広がりを持った出土状態を示す。加曾利Ⅲ式（6・15・19）、「郷土式」（12・14）、中葉に比定される土器群（7・20）などは流入と考えた。

所 見：不整円形を呈する、掘り込みの弱い住居跡である。炉跡も小規模な地床炉で、柱穴、壁周溝を見ないことから、積極的な居住痕跡を見出せない。同様な例は、

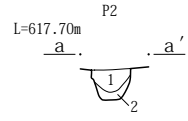
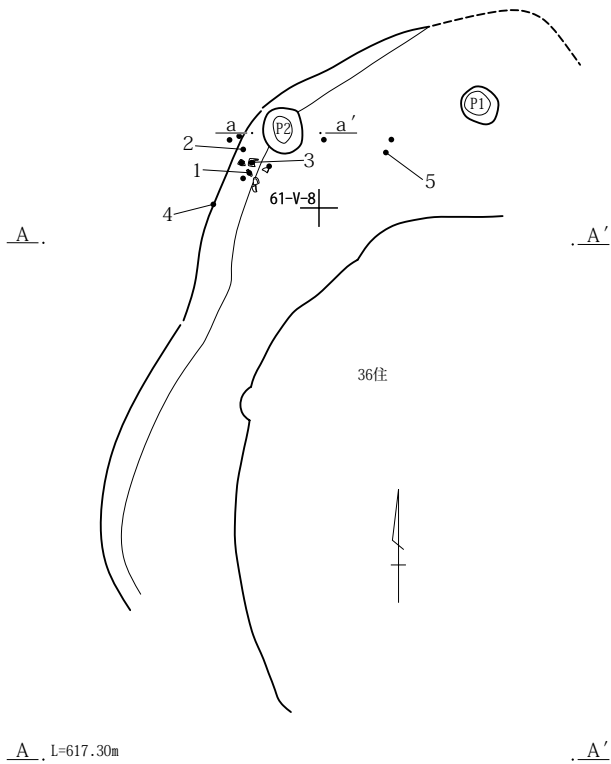
東4mに位置する26号住にも見られ、両者とも後期初頭の所産と捉えられる共通性がある。竪穴状遺構としての位置付けで炉跡を伴う施設として考えられよう。

61区31号住居跡（第121図 PL. 9・74）

位 置：61区U-8、V-7・8グリッドに位置し、調査区東側の住居跡群内にある。南側への緩やかな斜面上の立地だが、前述の24号住北西側で重複し南に36号住居跡が大きく重なるように、周辺は住居跡が密集するため平坦地形が広がる。

経 過：ローム漸移層である暗褐色土を遺構確認面とした。24号住調査中に、北西側への広がりが確認されたため、別住居跡として調査を進めた。

規 模：24号住、36号住との重複が著しく、平面形・規模などは不明である。深さは約40.0cmを測り、壁の立ち上がりは良好だった。

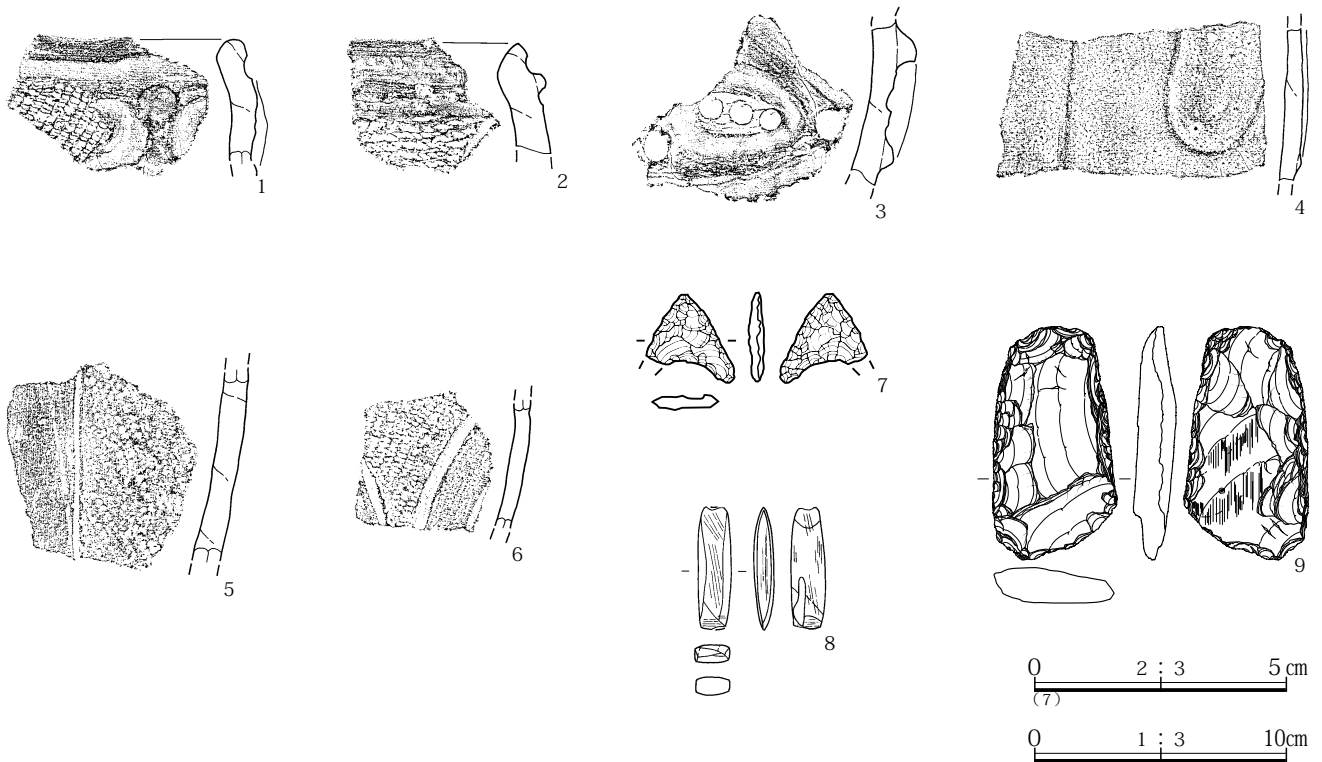
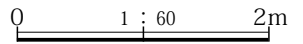
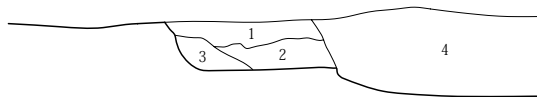


ピット土層

- 1 にぶい褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 にぶい褐色土 黒褐色土塊を層状に含む

31号住土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 暗褐色土 褐色土塊を含む。36住埋土



第121図 61区31号住居跡及び出土遺物

重複：24号住、36号住、さらに北に75坑と重複する。土層の観察では36号住に切られる様相が把握され、24号住とも土層、出土土器から新旧を判断し、本住居跡を切る新旧関係を把握した。

床面：黄褐色ローム層を地床とし、平坦面を築くが、南側へ僅かながら傾く様相が見られた。硬化面は見ない。施設：炉跡、壁周溝を見ない。僅かに2基の小ピットを検出したが配置、規模から柱穴としての位置付けはできない。

遺物：平面分布では、西壁際のP2周辺にまとまるが、すべて埋土中の出土で、流入の可能性は高い。出土土器の時間幅も加曾利EⅠ式～Ⅳ式と広く、本住居跡の時期を具体化していない。細身の磨製石斧（8）の出土が見られる。極めて希有な存在である。

所見：平面形、施設など住居跡としての確定要素に乏しい遺構である。広い範囲で緩やかな平坦面が広がるために住居跡と位置付けた状態である。あるいは竪穴状遺構の可能性もあろう。

61区32号住居跡（第122～132図 PL.10・74～80）

位置：61区V・W-4～6グリッドに位置する。調査区中央やや南東側寄りの南側壁際に27号住調査後に検出された住居跡である。周辺は緩やかな南側への緩斜面地形でほぼ平坦面での調査だった。その他に42号住や44号住、47号住が重複・近接し、調査区中央の住居跡密集地点の中での検出である。

経過：27号住調査後の暗褐色土で平面形を確認した。出土遺物量が多く、深く良好な遺存度のため、床面に達するまで手間取った。周辺住居跡との重複も著しいが、本住居跡が最も深く、重複住居跡の影響が少ないため、単独の検出の感が強かった。

規模：主軸方位を北北西に向け、丸みを帯びた整った五角形を平面形とする。平面規模は約500.0×465.0cmで、深さは約36.0cmを測る。壁の立ち上がりもしっかりしており、遺存状態も良好である。床面までの深さがあるため、検出状況も極めて良好といえよう。

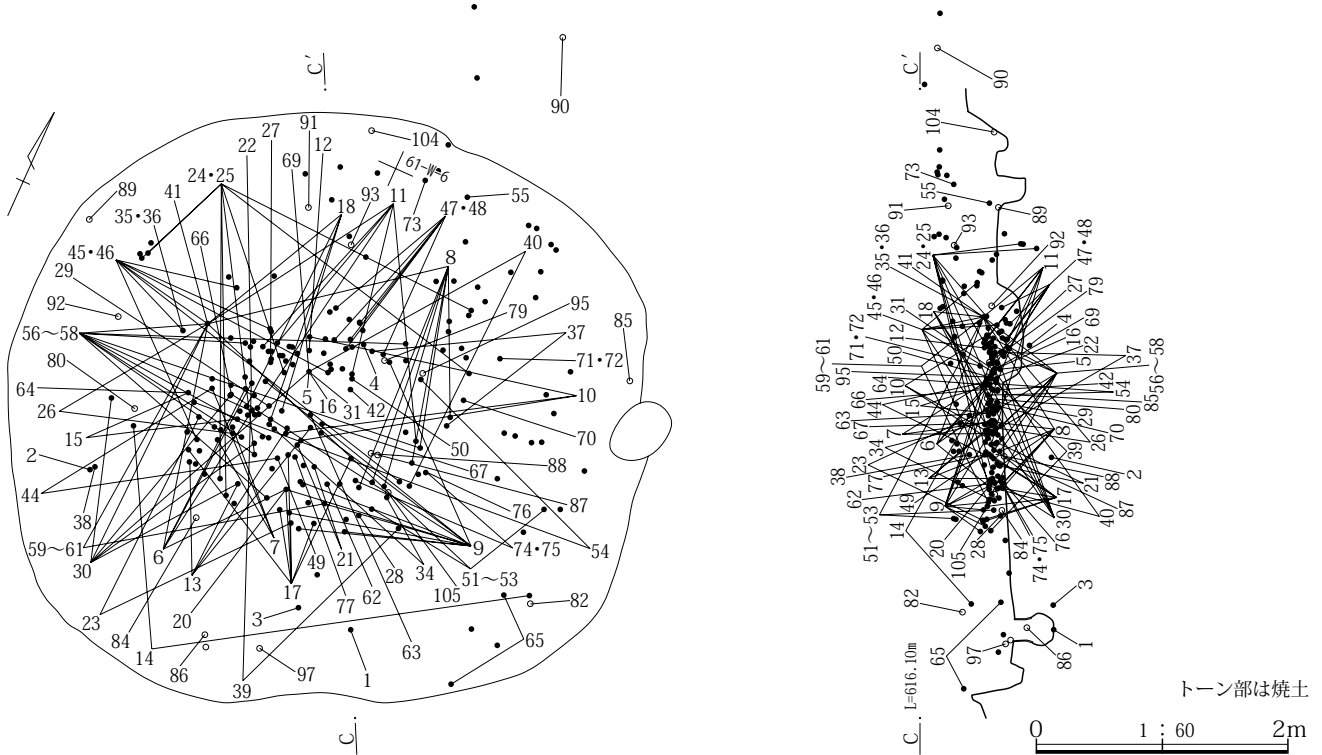
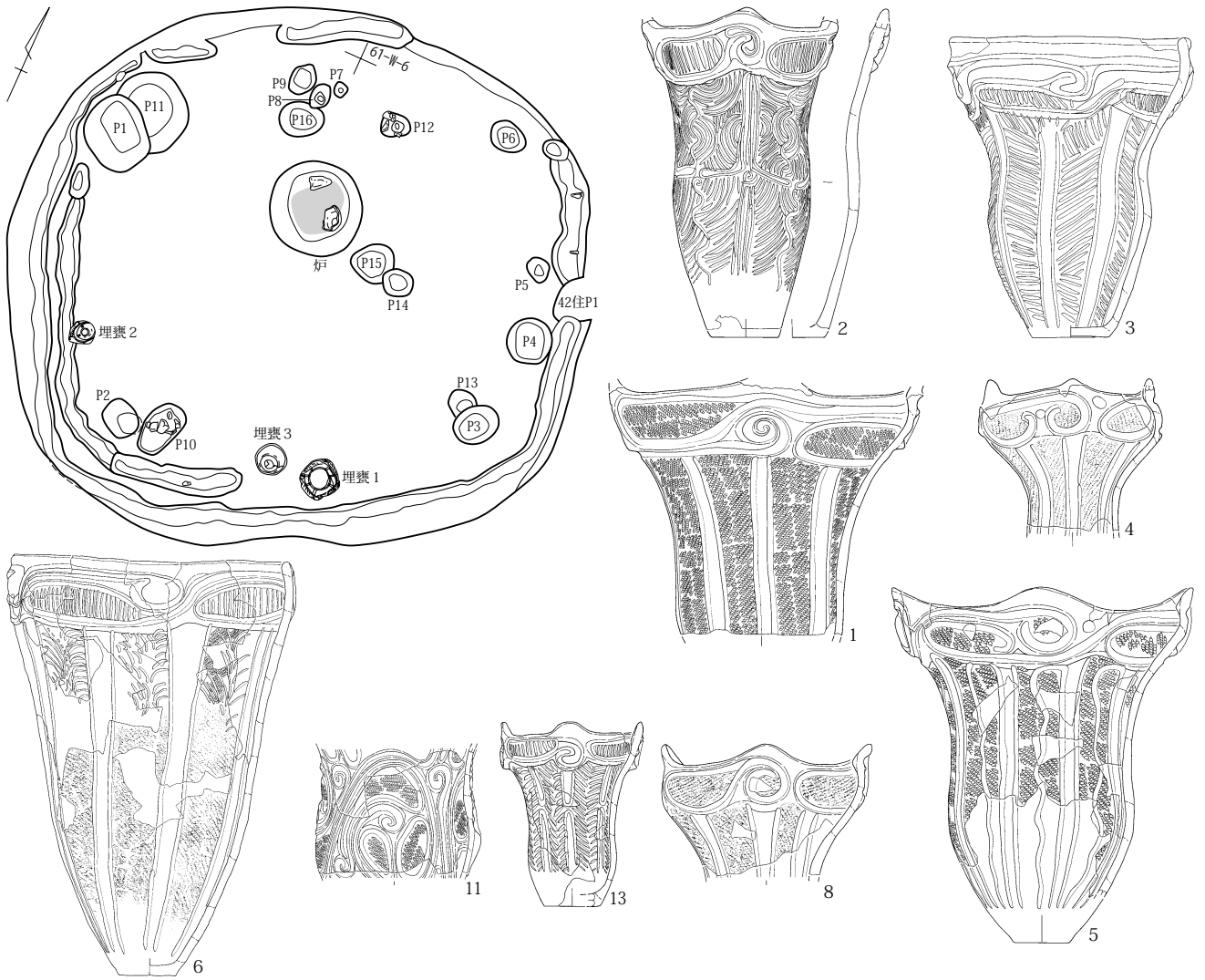
重複：27号住、42号住、44号住と重複する。27号住は前述のように本住居跡に先行して調査された住居跡である。出土土器も加曾利EⅢ式新段階に位置付けられ、本住居跡より新しく捉えられる。42号住は本住居跡東側に

重複した検出で、本住居跡が切る新旧関係を示す。出土土器も大木8b式段階で住居跡より古い。44号住は、南西に重複する。本住居跡に切られた状態で調査された。おそらく古い住居と思われるが出土遺物も貧弱で確定的ではない。

床面：硬質の黄褐色ロームを地床とする。硬質ローム下位には基盤礫が含まれるが、床面はその深さまでは達していない。凹凸も少なく、平坦面を築き安定した床面だった。硬化面は、床面中央部分の広い範囲で確認できた。光沢を帯びる箇所もあり、極めて良好な床面だった。施設：床面中央北東寄りに地床炉を1基、南壁際に埋甕を2基、西壁際に埋甕を1基、柱穴として16基のピットを調査した。さらに壁周溝は北東側の壁を除く、他辺に走行が認められた。

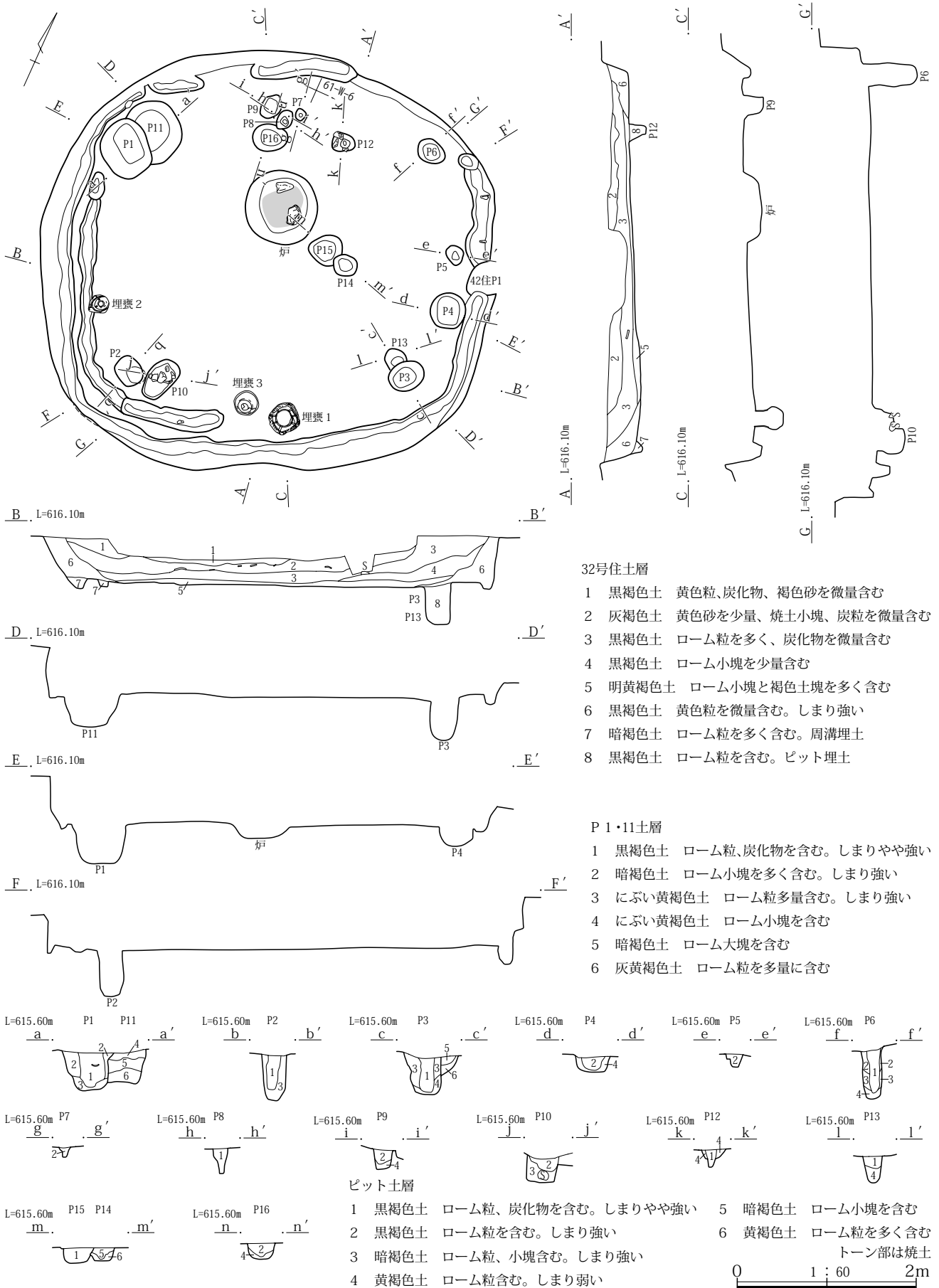
炉跡：平面形は約82.0×80.0cmを測る円形を呈す。主軸は住居と一致する。深さは30.0cmで良好な深さを保ち、皿状の断面形を示していた。埋土は、黒褐色土を中心に下層に焼土の堆積が確認された。また、底面に体部下半を意図的に欠損した深鉢（4）が正位に置かれ、内部に焼土を堆積していた。口縁部付近は被熱のため剥落箇所を見る。また北側には大型の円礫が出土したが、これも被熱痕跡が著しく、使用時の原位置として把握できた。埋甕：本住居跡の周辺は単独埋甕（埋設土器）数基が群在する。本住居内の埋甕も何らかの関連性が窺われるが、本住居跡の埋甕は床面上での検出で、前述のように、床面まではかなり深く、周辺の単独埋甕とは性格を異にすると考える。ここでは、住居内埋甕として扱い、周辺の埋甕（埋設土器）との関連性は項を改めたい。

床面から3基の埋甕が検出されている。埋甕1（1）は、南壁際中間に位置する。住居跡主軸線上に乗る埋甕であるため、出入口部埋甕として位置付けられよう。波頂部と体部下半を意図的に欠した深鉢を逆位に埋置していた。径約44.0cmの円形の掘り込みで、28.0cmの深さを測る。埋甕2（2）は、西壁際に設けられていた。径30.0cm程の円形の掘り込みに、底部と波頂部が欠損する長胴の深鉢が逆位に埋置されていた。深さは約36.0cmを測る。主軸線上に乗らず、出入口部の埋甕ではないが、明らかに床面に設けられた施設の一つである。何等かの壁際儀礼の痕跡であろうか。埋甕3（3）は南壁際の埋甕1の西に近接して検出した。口唇部の一部を欠くがほ

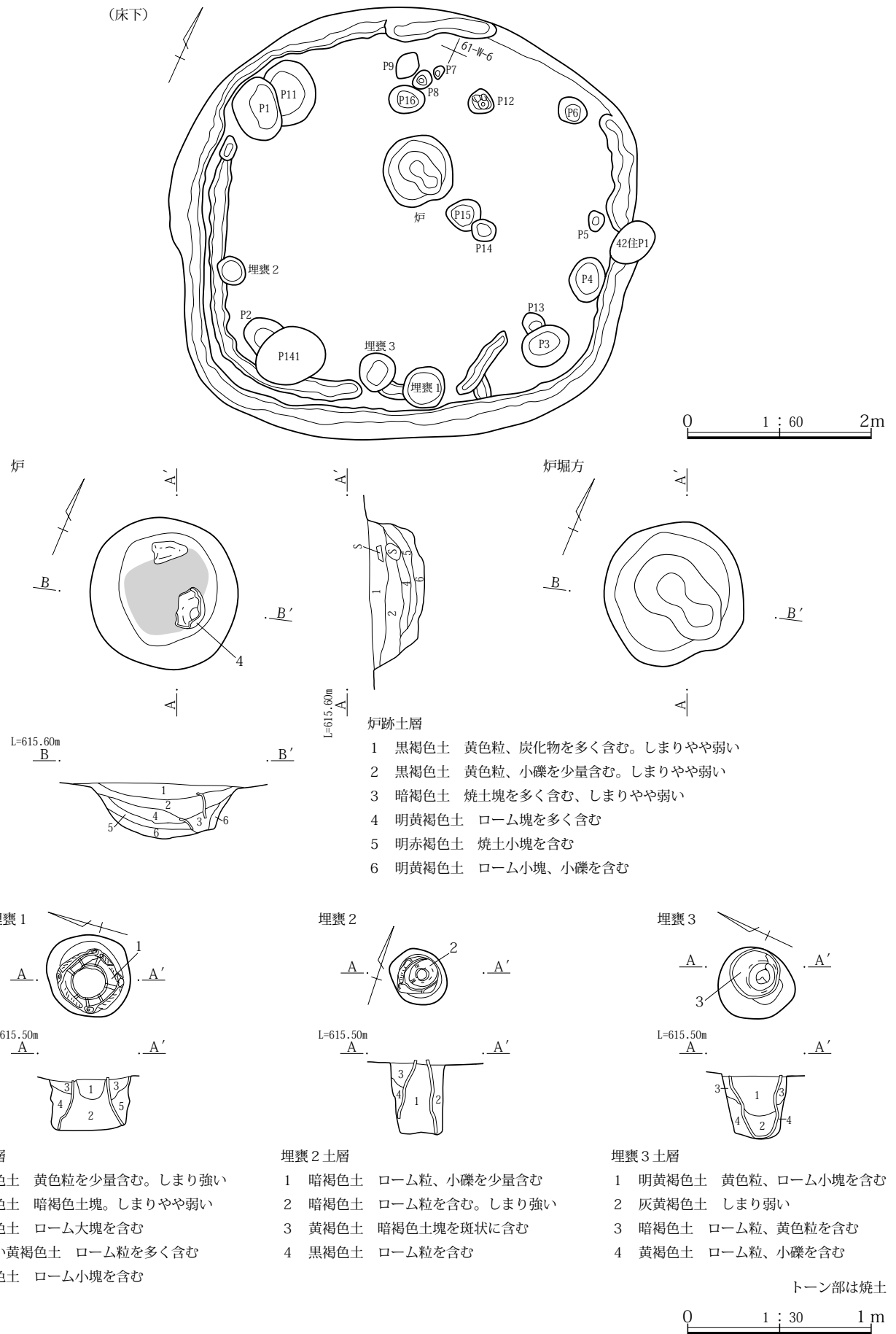


第122図 61区32号住居跡 (1)

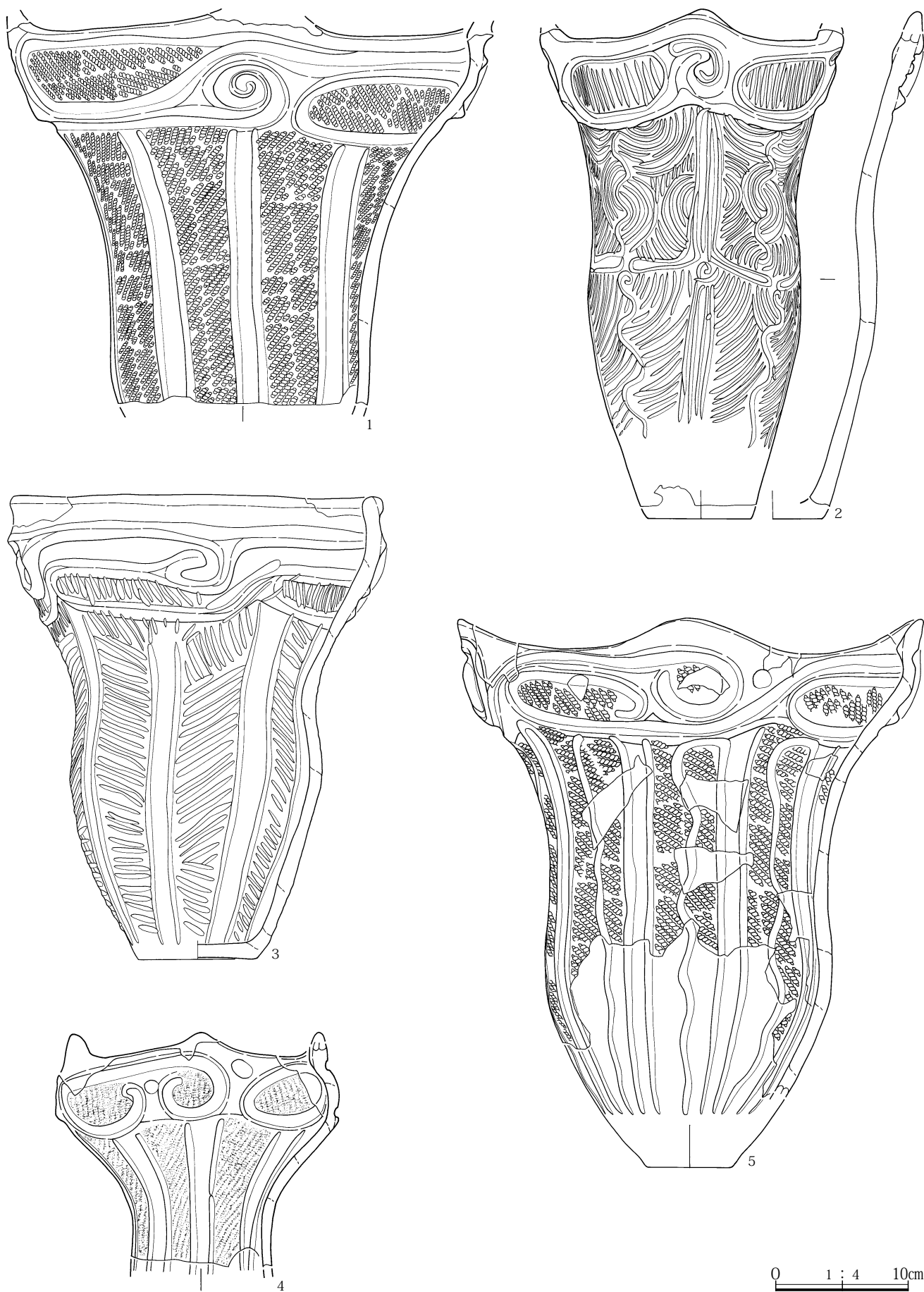




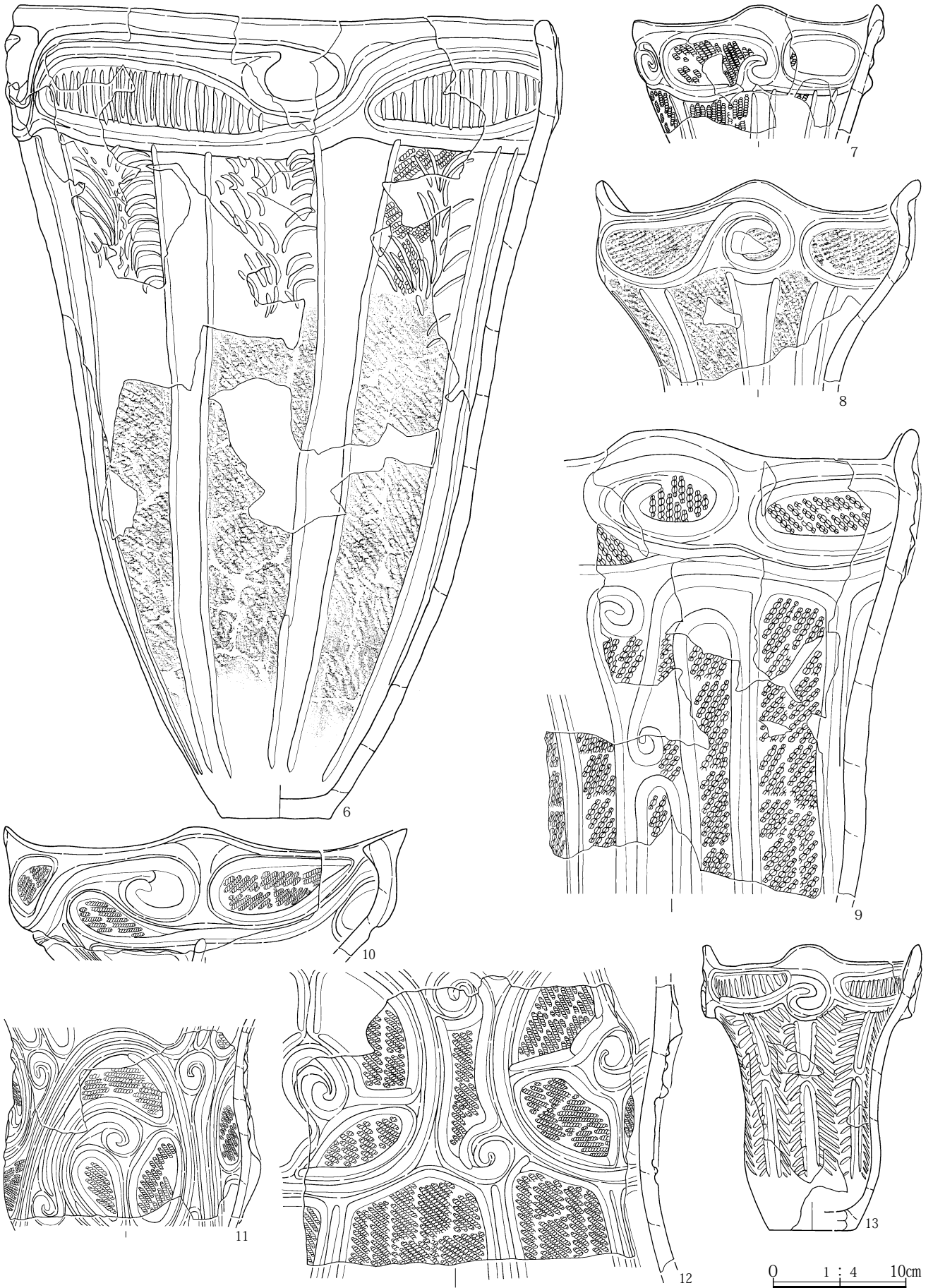
第123図 61区32号住居跡(2)



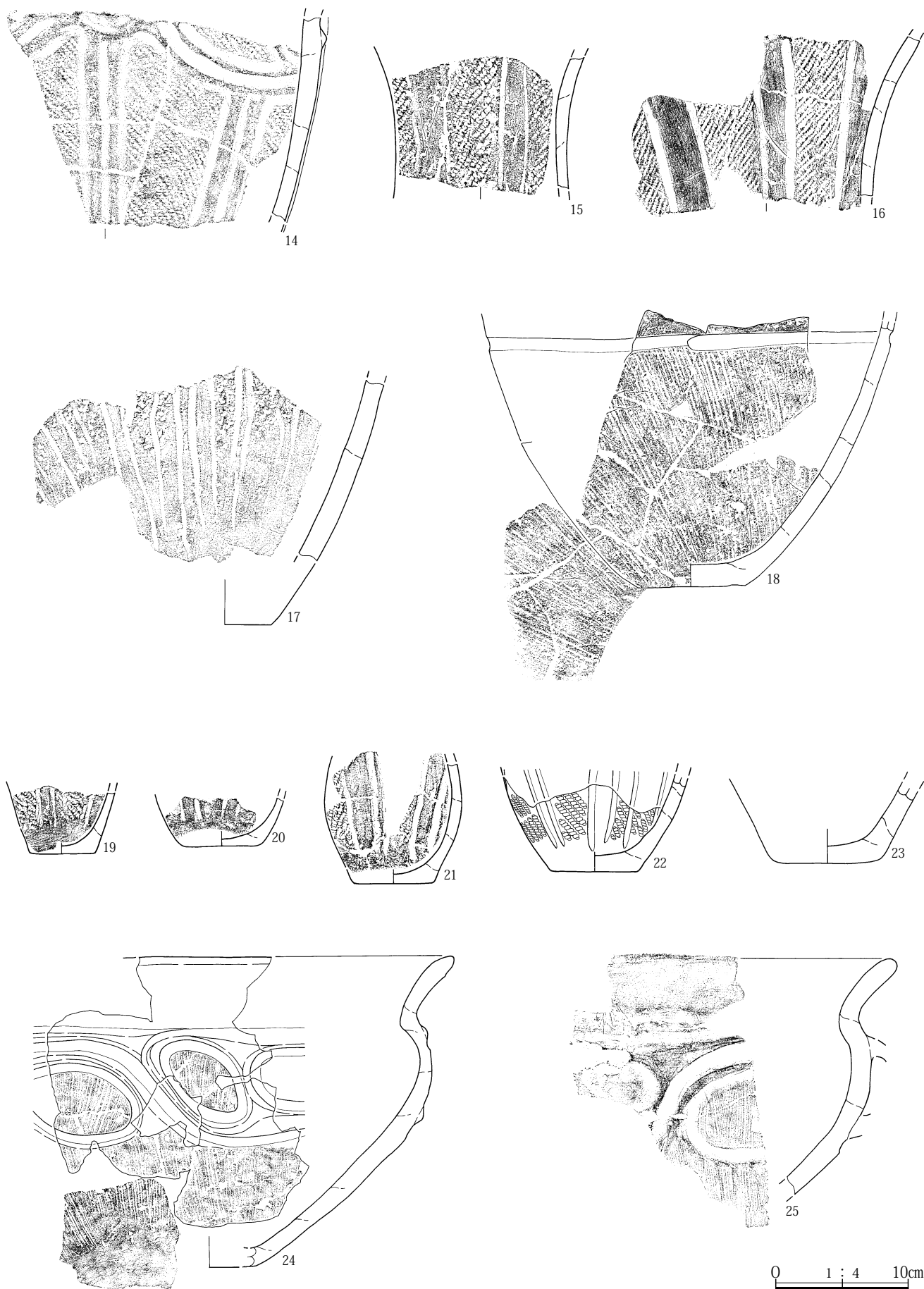
第124図 61区32号住居跡 (3)



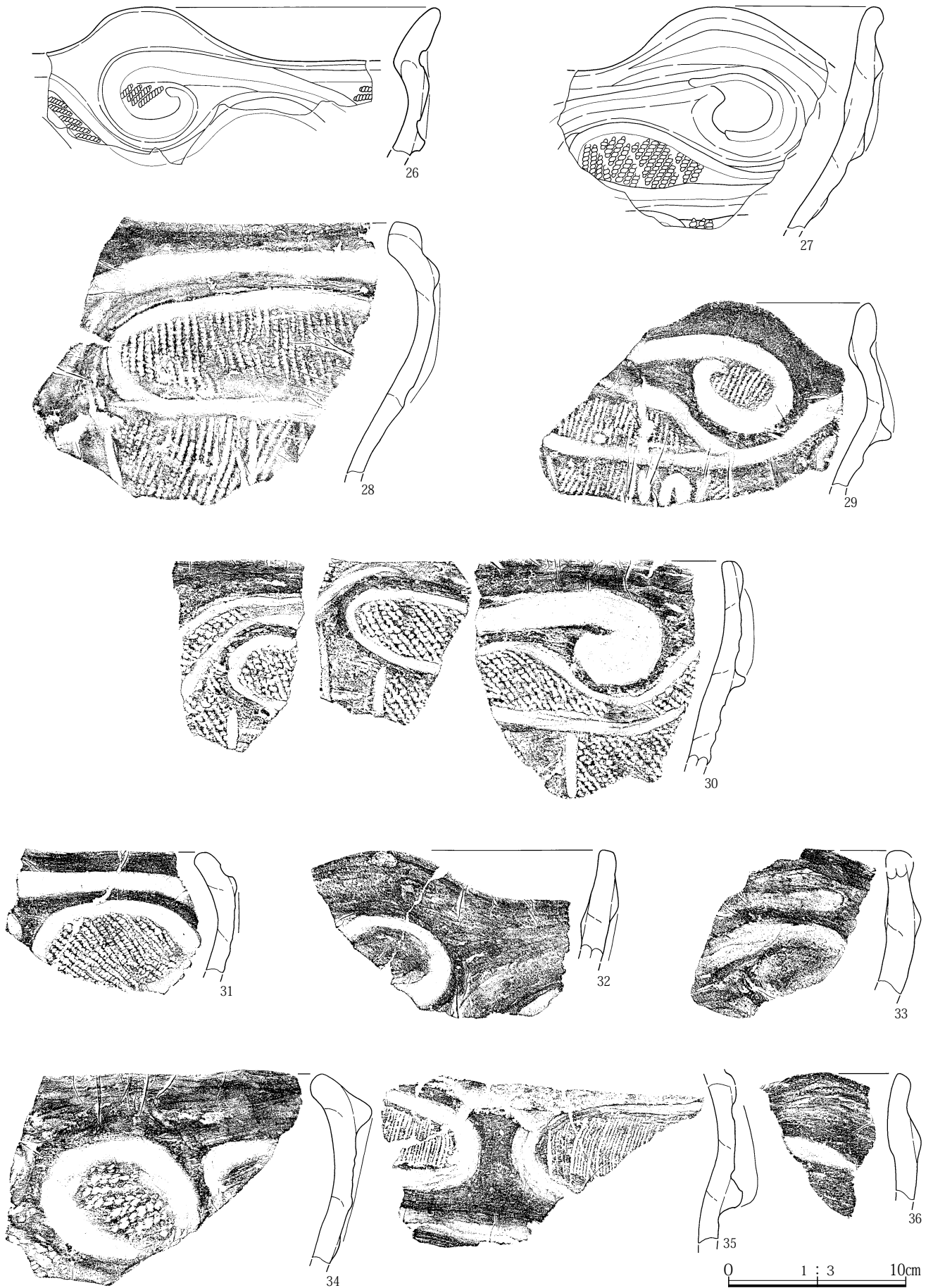
第125図 61区32号住居跡出土遺物（1）



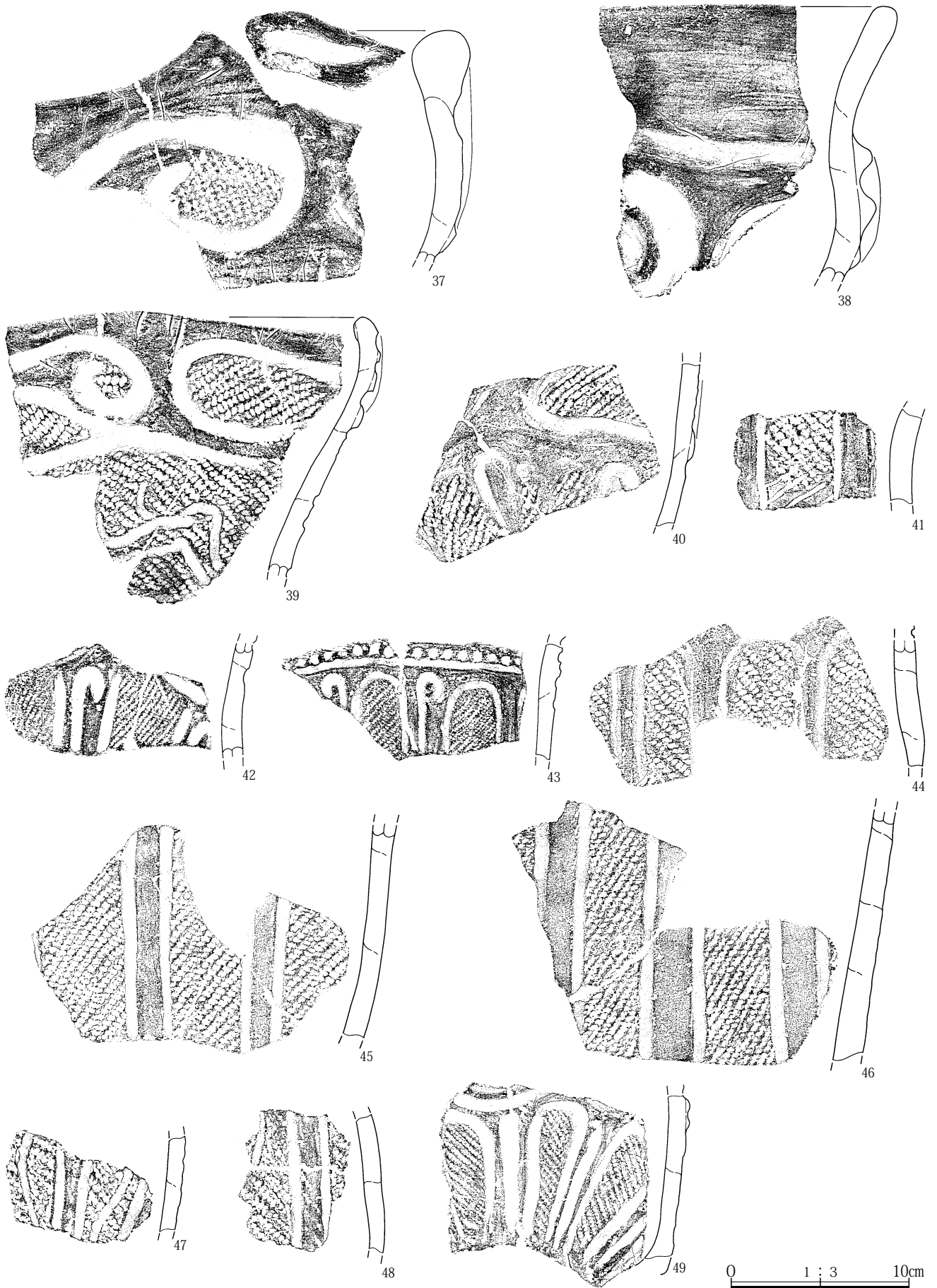
第126图 61区32号住居跡出土遺物 (2)



第127図 61区32号住居跡出土遺物 (3)

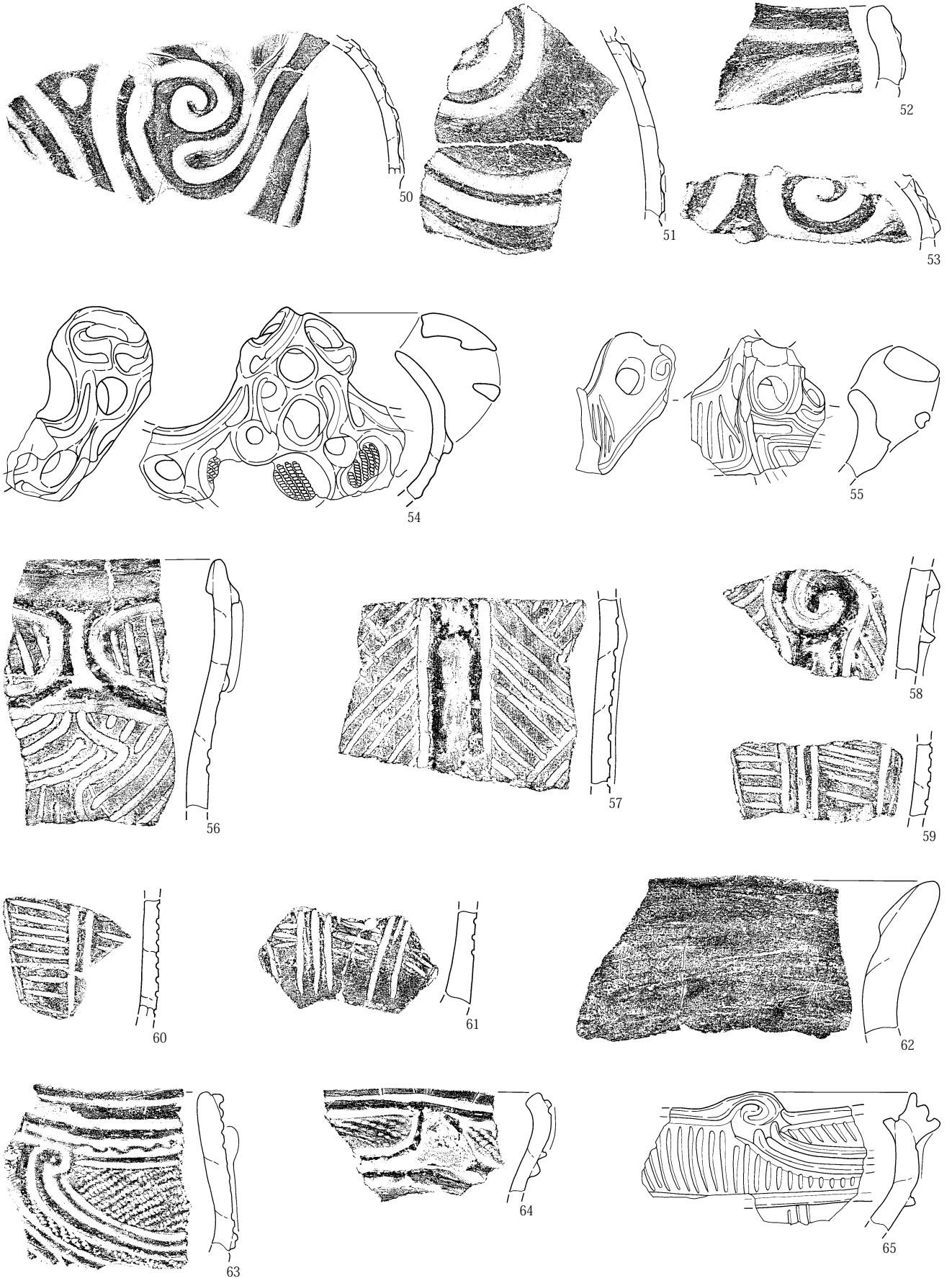


第128图 61区32号住居跡出土遺物 (4)



第129図 61区32号住居跡出土遺物 (5)

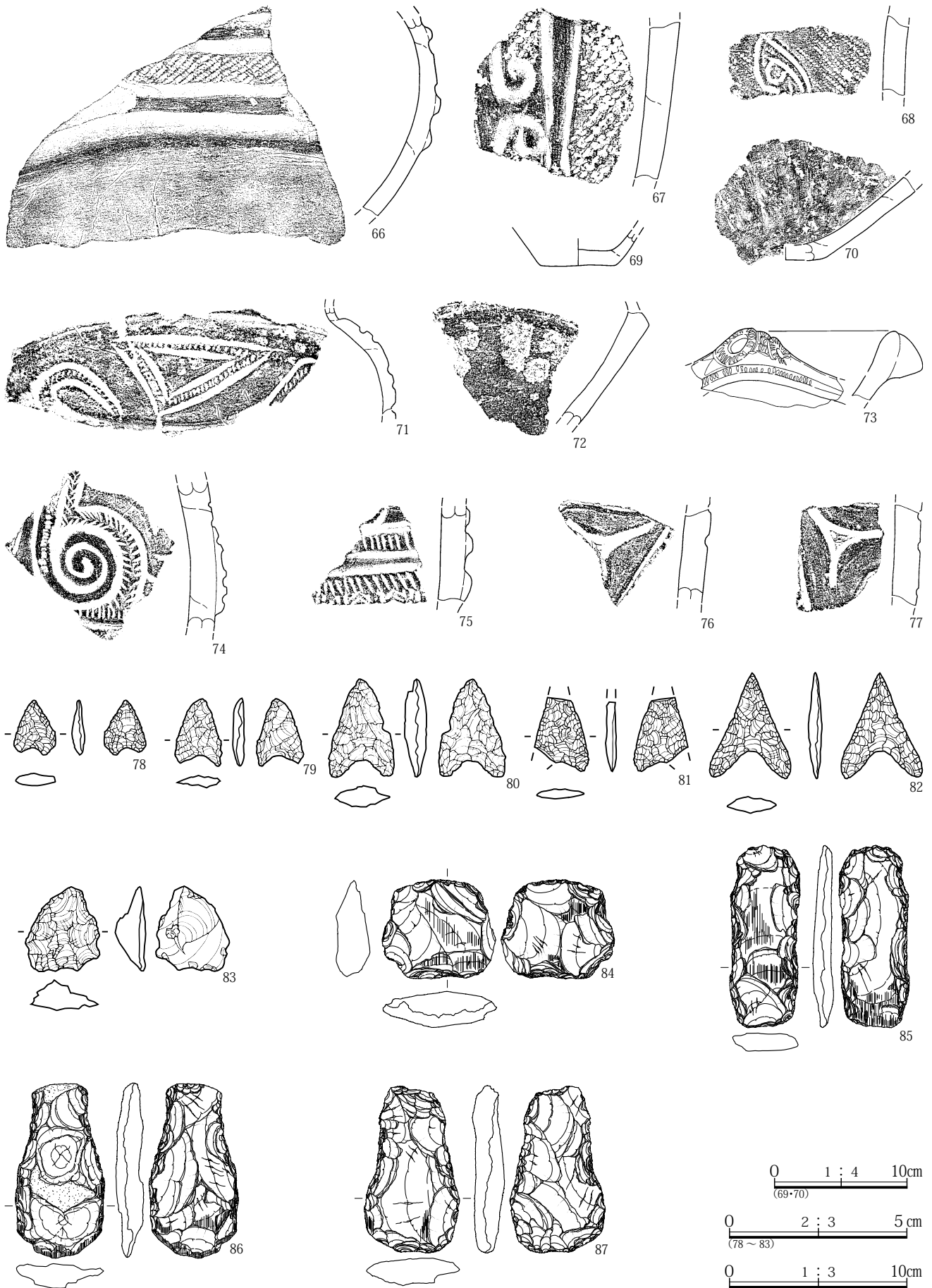




0 1 : 3 10cm

第130图 61区32号住居跡出土遺物 (6)





第131図 61区32号住居跡出土遺物 (7)

第3節 住居跡 (61区)



第132図 61区32号住居跡出土遺物 (8)

ほぼ完形の深鉢が正位で埋められていた。径約42.0cm、深さ約34.0cmの掘り込みである。3基の埋甕とも埋置されていた深鉢は中期後葉の所産で、系統差はあるもののほぼ同時期と捉えられる。同一住居の同一床面での施設として考えておきたい。

壁周溝：北側の一部の壁際と、北西部の一部に途切れを見るが、他は良好に壁際を走りし平面形を際立たせる。深さも20cmを超える箇所もありしっかりした設営である。南壁の西半から東壁にかけて、2重の壁周溝が走行する。おそらく、同一住居内の拡張あるいは移動といった居住変化の痕跡と考えられる。

柱 穴：16基のピットを調査して、柱穴としての妥当性を探った。配置、規模から柱穴として妥当な例としては、(P1・P11)、(P2・P10)、(P3・P13)、P6、(P7～P9・P16)、5箇所に配されたピットが規模、配置が良好な例である。本来ならば奥壁柱穴に相当する箇所のピットである(P7～P9・P16)が小規模でやや確定性に欠けるが、その他のピットは柱痕を持つ例もあり、柱穴として妥当なピットと位置付ける。各柱穴の配置を概観すると、P6以外は複数柱穴がセットとなっている。おそらく、壁周溝と同様に住居内の移動・拡張の痕跡と考えておきたい。またさらに、やや浅いがP4も柱穴としては良好な位置を示す。対応する西壁のピットが無いが、本住居内で複数回の移動があったとすれば、P4が奥壁柱穴で埋甕2が出入口埋甕と位置付けられる。可能性の一つとしてあげておく。

遺 物：先に述べた炉内土器(4)、埋甕(1・2・3)は居住に伴う痕跡として位置付けられる。その他の出土状態を見ると、住居跡全体から満遍なく分布しているが、若干中心部に偏りが見られる。また、上層の出土と床直・床直上の出土が大別できる傾向にあるが、出土土器に大きな時間差は読み取れなかった。おそらく、一括廃棄による出土状態と捉えることができよう。また、出土土器の組成を見ると、加曾利EⅢ式の比率が高く、「郷土式」(2・3・56～61)がやや客体的な様相を示す。さらに「屋代類型」(11・19・54)も見られるが、若干ながら、関東地方の影響が強くなった土器組成といえよう。

特殊な石器としては、軽石製品(95・96)が出土している。

所 見：整った五角形を平面形とした残りの良い住居跡である。地床炉であり各隅に相応の柱穴を配する。柱穴

の様相は壁周溝や埋甕の配置にも具体化されるように、住居内の拡張・移動痕跡が見出せる。出土土器は関東系の加曾利EⅢ式の様相が強く、「郷土式」はやや客体的である。本住居跡の時期としては中期後葉に比定したい。出土土器は加曾利EⅢ式中段階～新段階の土器が多い。

61区33号住居跡(第133～135図 PL.11・80・81)

位 置：調査区東側の住居跡密集地点で調査された。61区S・T-6・7グリッドに位置し、前述の8号住・18号住が東に、35号住居跡が北に、22号住居跡が西に、21号住が南に重複、近接する。周辺は、平坦地形が広がるがこれは遺構密集によるため、東に迫る傾斜地形の延長を考えると、南東方向への緩やかな傾斜地に占地するといえよう。

経 過：1号列石調査後ローム漸移層上位である暗褐色土で確認した。南側は傾斜のため黒褐色土の堆積が厚く、そのため18号住や21号住等周辺住居跡との重複を平面的に把握できなかった。遺物が広範囲に出土し、住居跡として調査を進め、炉跡や床面の確認に至った。

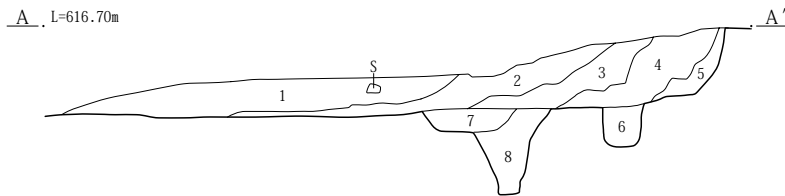
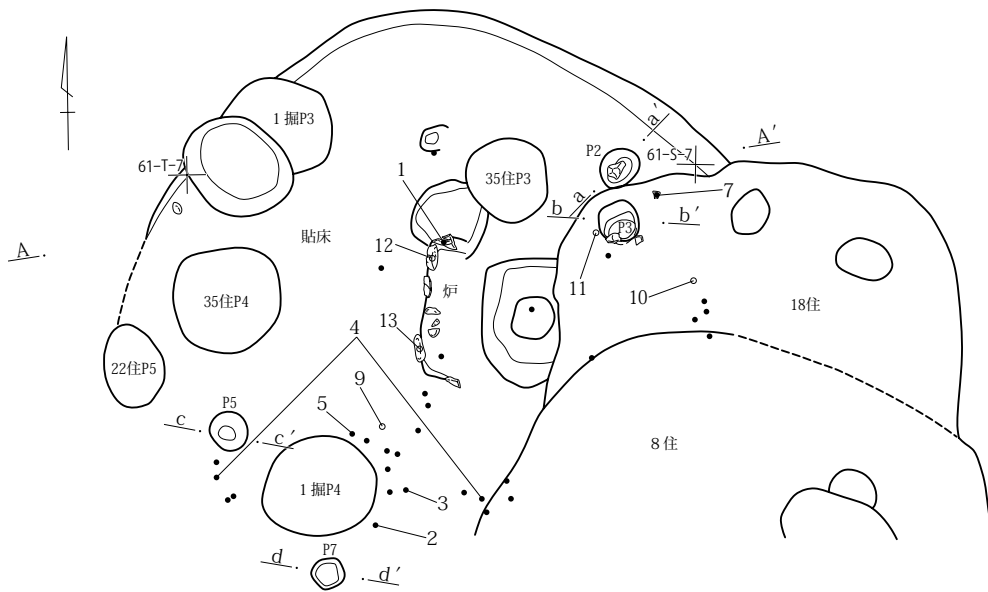
規 模：炉跡と北壁周辺のみを検出となったため、住居跡平面形や規模等は不明である。深さは遺存度の良好な北東側壁で63.0cmを測るが、周辺の斜面地形もあり、その他の壁の残りは悪く、数cmの深さに止まる。

重 複：8号住、18号住、21号住、22号住、35号住との重複が観察されたが、土層観察軸が適当ではなかったため、新旧関係の把握には至らなかった。本住居跡が他の住居跡に切られる様相を示すが、出土土器も良好ではないため、確定性に乏しい。

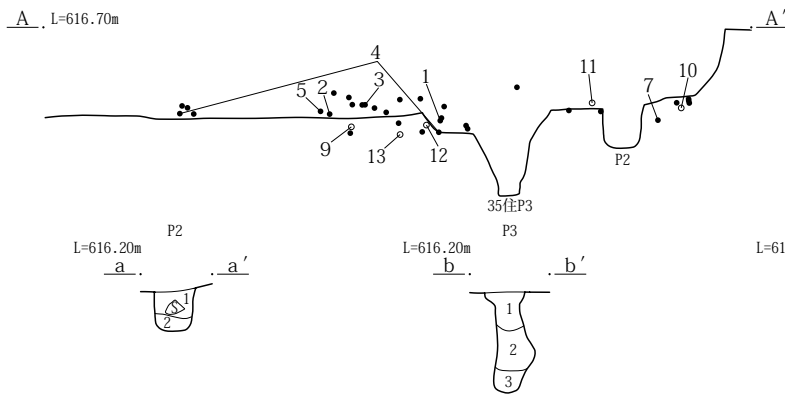
床 面：ローム層上位に対応する、にぶい褐色土を地床とする。ほぼ平坦面を築くが、他の住居跡との重複が強く、詳細は不明である。硬化面も見られなかった。

施 設：床面中央に相当する箇所に石囲い炉、柱穴としてピットを4基確認したが、埋甕や壁周溝は検出していない。

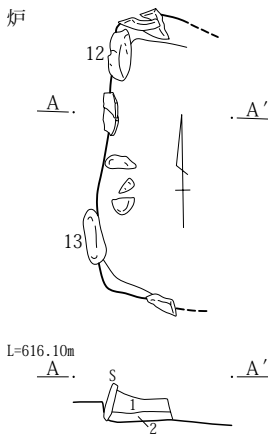
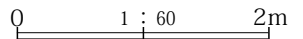
炉 跡：主軸をほぼ北に向けた、軸長114.0cmの長方形が推定される石囲い炉を検出した。西辺と南北辺約1/2の検出に止まり、炉石が確認されたのは西半のみである。東辺は傾斜地形のためか、見ることができなかった。炉石は板石状の扁平な角礫と石皿片(12)や多孔石(13)が使用されていた。



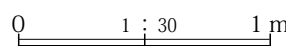
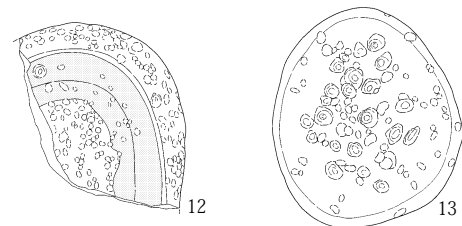
- 33号住土層
- 1 黒褐色土 ローム大塊、黄色粒を含む。しまり弱い
  - 2 灰褐色土 黄色粒を微量含む。しまりやや強い
  - 3 灰褐色土 ローム粒、黄色粒を微量含む
  - 4 灰褐色土 少量のローム小塊、微量の黄色粒を含む
  - 5 灰褐色土 ローム大塊を少量含む
  - 6 黒褐色土 ローム塊を含む。P 2埋土
  - 7 黒褐色土 ローム粒を多く含む
  - 8 暗褐色土 ローム粒を多く含む。35住 P 3埋土



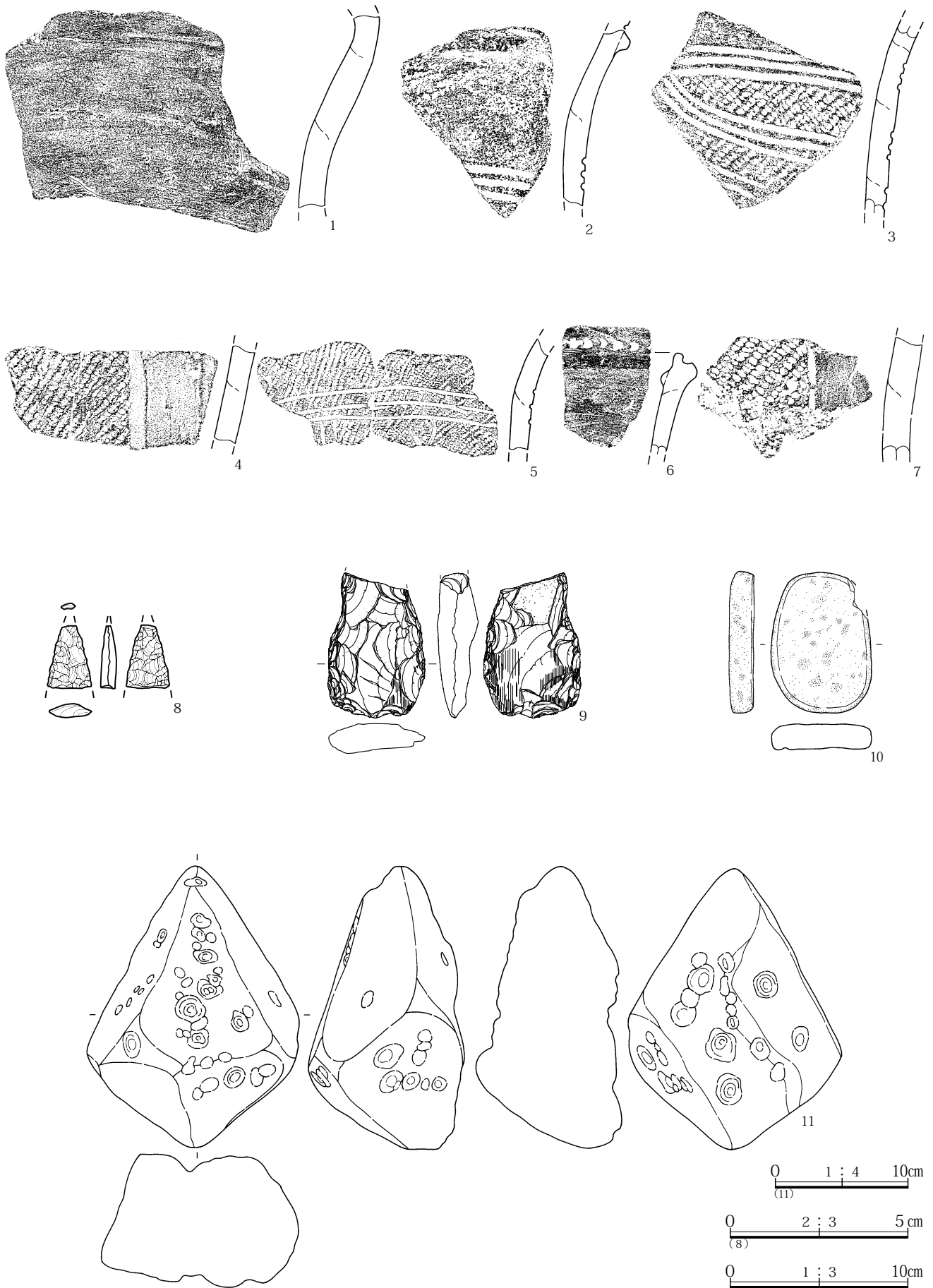
- |  |   |  |   |
|--|---|--|---|
| <p>P 2 土層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色土 ローム大塊を微量含む</li> <li>2 灰褐色土 ローム小塊を少量含む</li> </ul> | <p>P 3 土層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 灰褐色土 ローム塊を多く含む</li> <li>2 黒褐色土 ローム大塊を少量含む</li> <li>3 灰褐色土 ローム粒を多く含む</li> </ul> | <p>P 5 土層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 暗褐色土 ローム小塊を極微量含む</li> <li>2 黒褐色土 ローム小塊を極微量含む</li> </ul> | <p>P 7 土層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色土 白色粒を微量含む</li> </ul> |
|--|---|--|---|



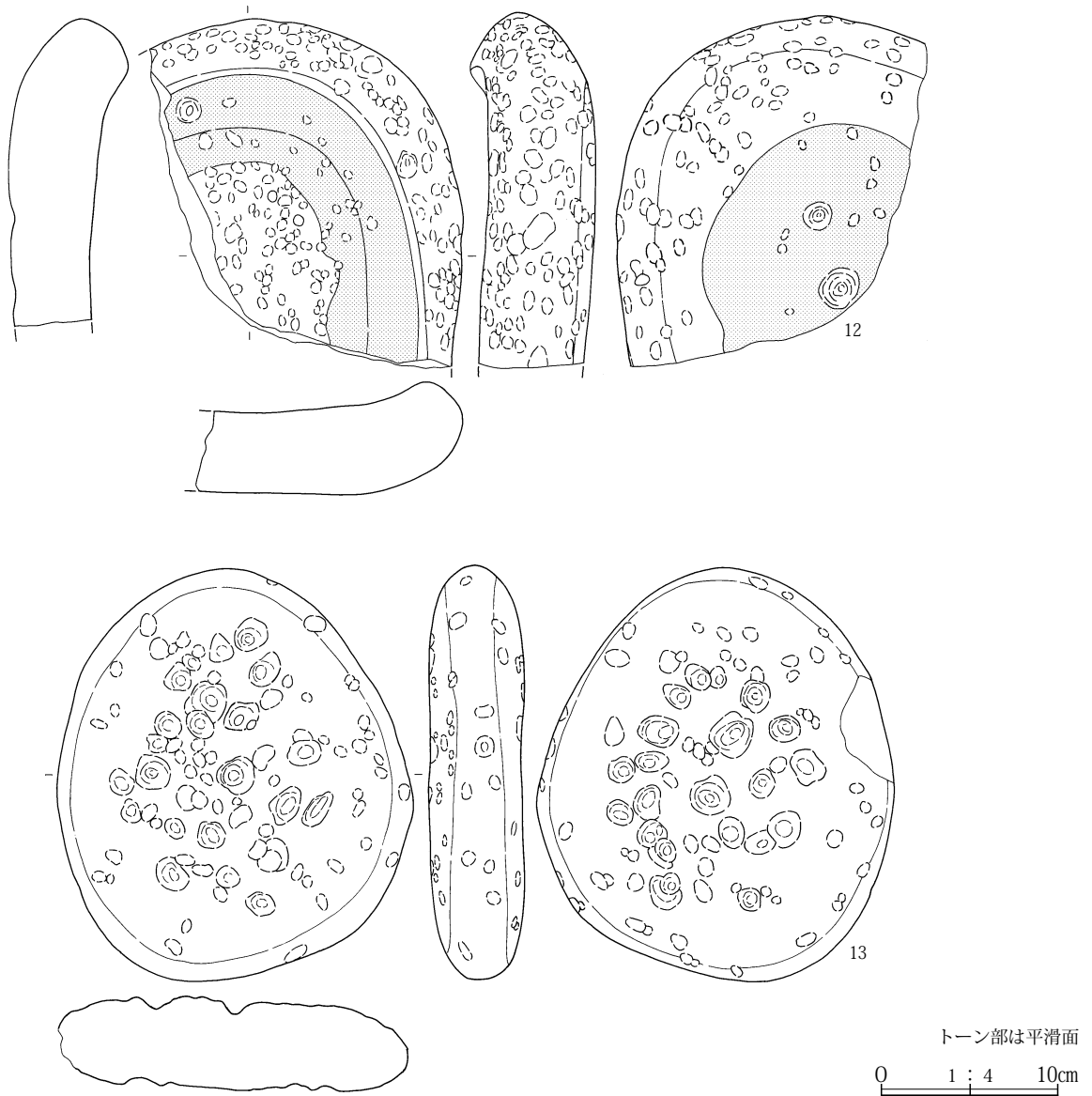
- 炉跡土層
- 1 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
  - 2 にぶい黄褐色土 ローム大塊を多く含む



第133図 61区33号住居跡



第134図 61区33号住居跡出土遺物(1)



第135図 61区33号住居跡出土遺物 (2)

柱 穴：他の住居跡との重複が著しく、検出されたピットから柱穴の特定は難しかった。規模、配置からP2、P3、P5、P7が挙げられるが、確定性に乏しい。

遺 物：散漫な出土分布の上、遺存度の良好な北側での出土が見られない。前述した炉石として供された石皿片(12)と多孔石(13)が居住に伴う遺物といえよう。土器片では炉石北側から出土した深鉢頸部破片(1)が住居跡に伴う例であろうか。無文であるがおそらく加曾利EⅡ式～EⅢ式に比定されよう。

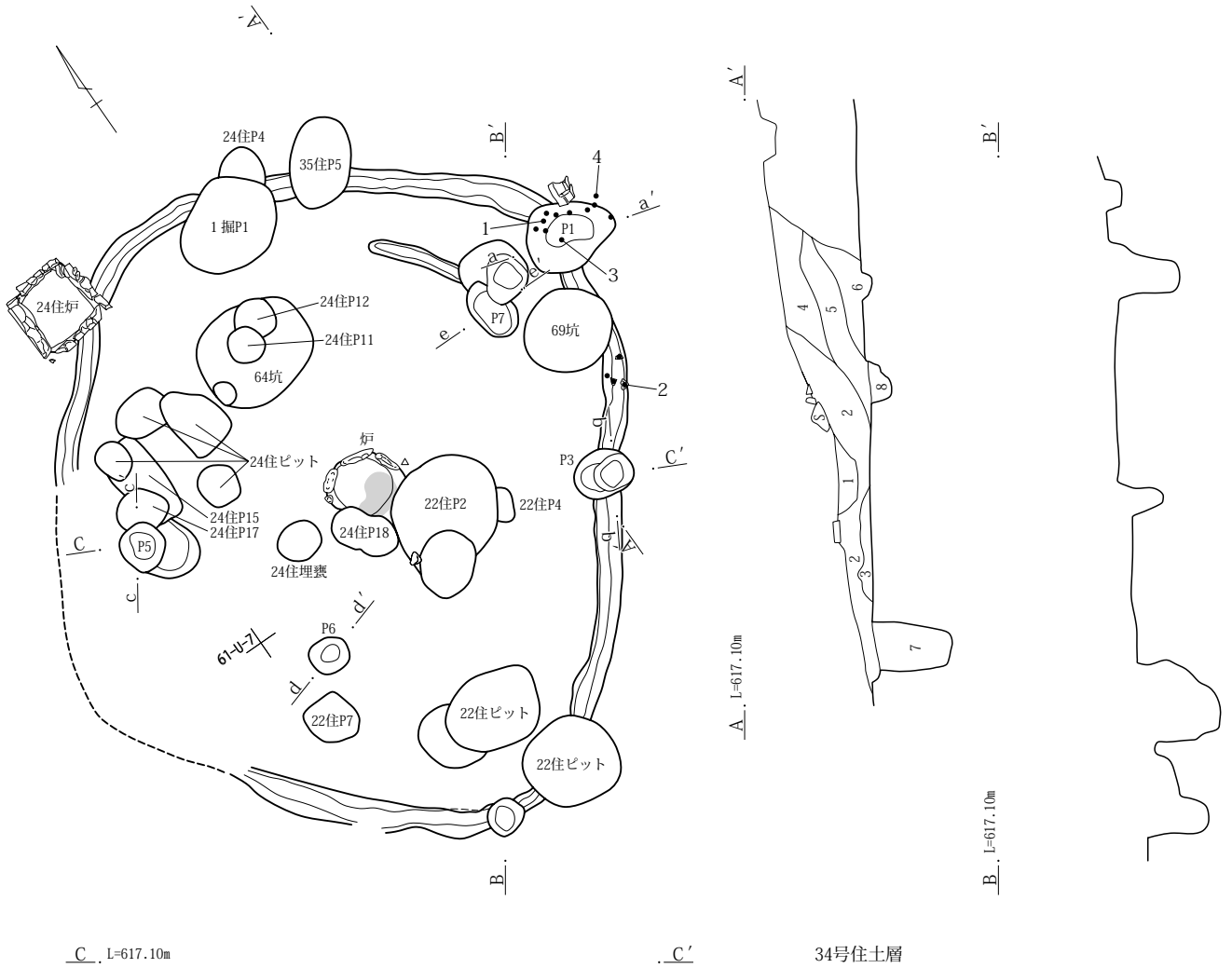
所 見：周辺住居跡の重複が大きく、全容、詳細など不明な要素が多い。特に石囲い炉の東半が逸失した要因が不明であり判断できない。住居跡時期は、出土土器(1)から中期後葉と考えたい。

61区34号住居跡 (第136～138図 PL.11・81)

位 置：33号住同様、調査区東側の住居跡密集地点で調査された。61区T・U-6・7グリッドに位置し、前述の22号住が南に24号住が北に、35号住居跡が東に大きく重複する。周辺は遺構密集による平坦地形が広がるが、原地形は南東への緩斜面地形と考えられる。

経 過：周辺の重複住居跡調査中に、各住居跡の床面である暗褐色土～黄褐色土で石囲い炉と壁周溝が検出され、さらに土層観察で北壁～東壁に相当する壁の立ち上がり確認されたため、別個の住居跡として調査を進めた。その際、出土遺物の多くは、床面より上層に浮いた状態で出土したため、本住居跡に帰属する遺物を特定できず、ピットや壁周溝出土遺物に帰属を求めた。

規 模：主軸を北東に向けた不整長方形の平面形を呈し、



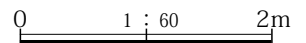
34号住土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を微量含む。攪乱坑か
- 2 灰褐色土 黄色粒を少量、炭化物を微量含む
- 3 黒褐色土 やや粘質。黄色粒を極微量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量、黄色粒を微量含む
- 5 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 6 黒褐色土 黄色粒、褐色土大塊を微量含む
- 7 灰褐色土 黄色粒、ローム小塊を微量含む
- 8 灰褐色土 黄色粒を少量含む

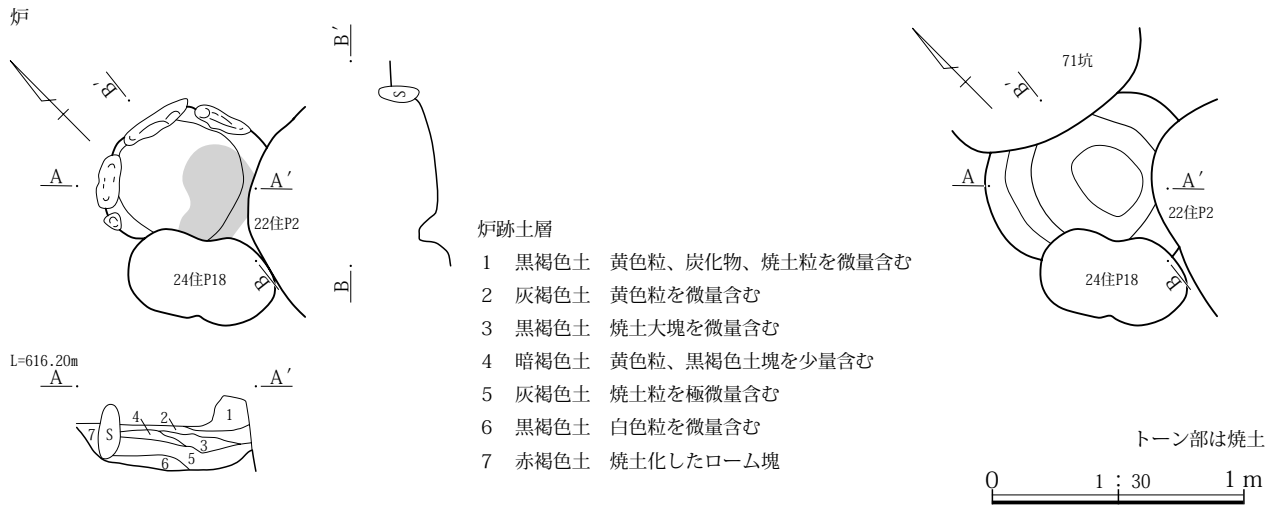
ピット土層

- 1 灰褐色土 ローム小塊を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム大塊を微量含む
- 4 暗褐色土 ローム小塊を微量含む
- 5 灰褐色土 ローム粒、炭化物を微量含む
- 6 灰褐色土 ローム大塊を少量

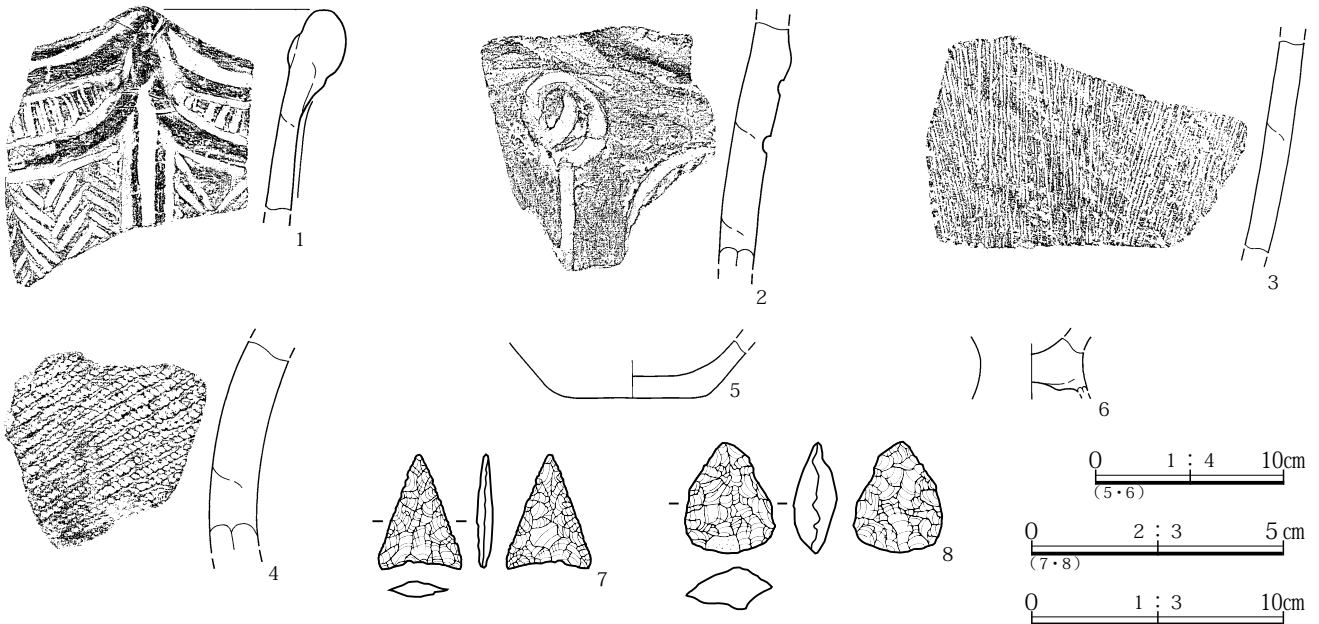
トーン部は焼土



第136図 61区34号住居跡（1）



第137図 61区34号住居跡 (2)



第138図 61区34号住居跡出土遺物

規模は約563.0×480.0cmを測る。深さは、土層観察により壁の立ち上がりが観察された北東壁周辺で約80.0cmと深い。床面の殆どが比高差無く平坦に近い状態で調査された。

重複: 前述のように22号住、24号住、35号住が重なる。また、縄文時代後期に比定され、上層で調査された1号列石や1号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡が本住居跡の上に乗る調査状況である。22号住や24号住の柱穴や炉が本住居跡を切る状況のため、両住居跡を新しく捉えられよう。また、本住居跡の帰属としたP1が35号住炉跡を壊すことから、35号住を古く捉えられよう。

床面: 黄褐色軟質ロームを地床とする。ほぼ平坦面を築くが、顕著な硬化面は見られなかった。

施設: 床面中央に石囲い炉を見る。また、壁周溝が南西側を除き、ほぼ全周する様相で確認された。柱穴として5基のピットを調査した。

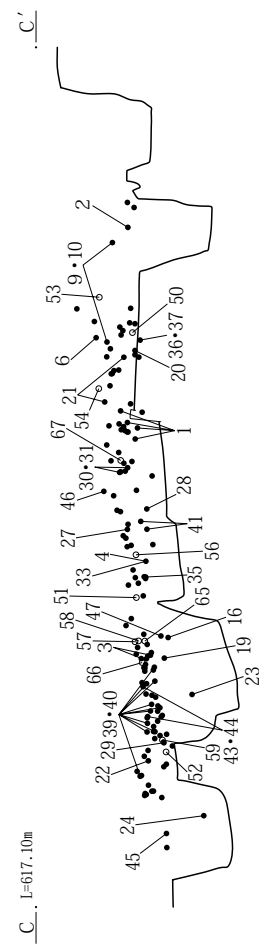
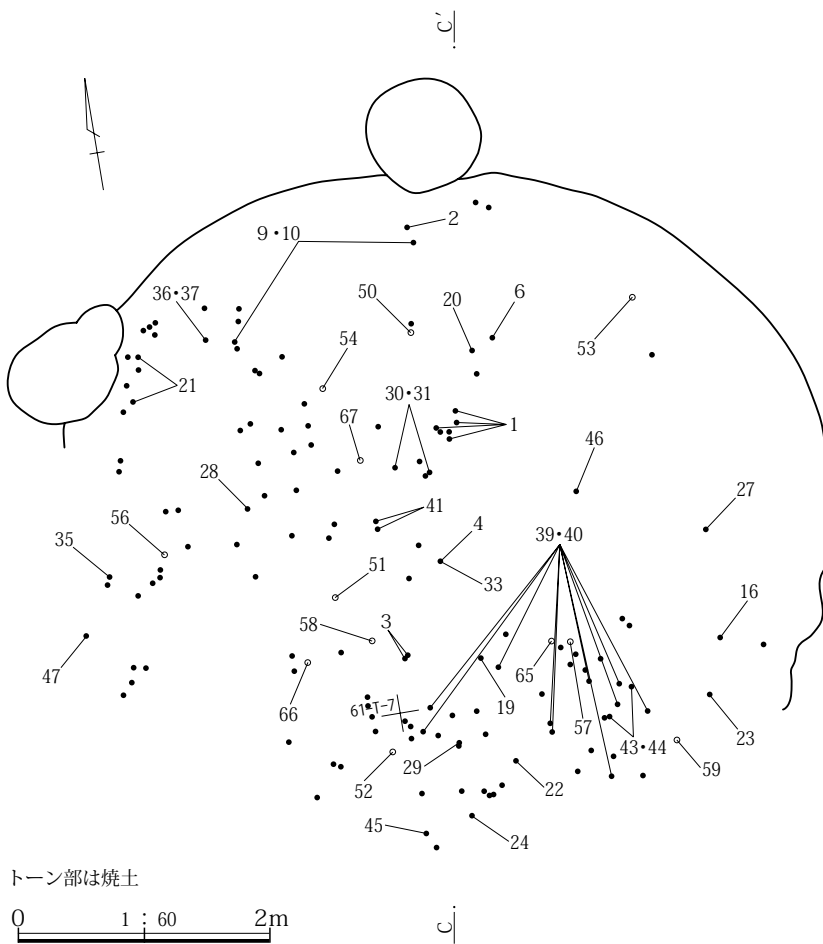
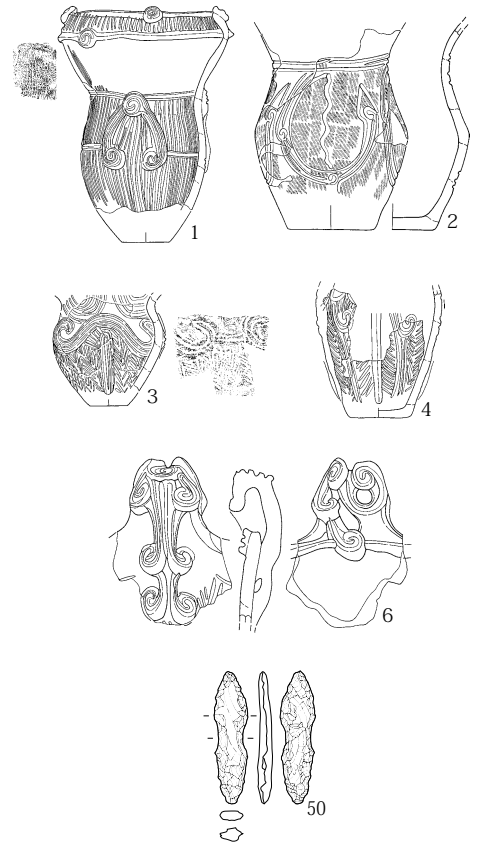
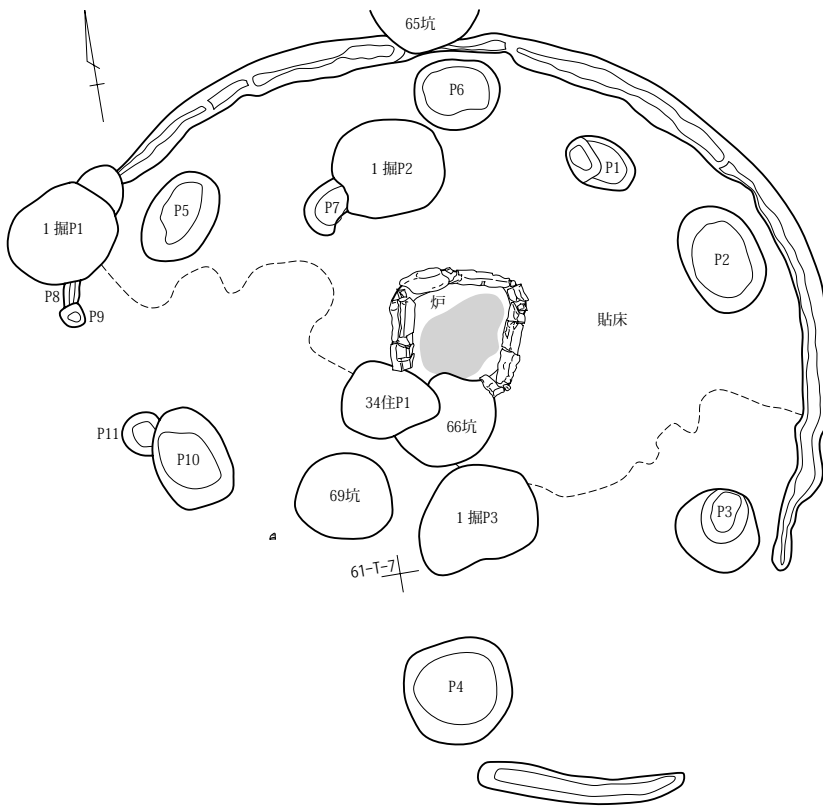
炉跡: 南半を22号住と24号住ピットに切られ、全容は把握できないが径64.0cm程の円形を基調とした小型の石囲い炉を確認した。円礫を主体とした炉石で、全体に弱く被熱していた。埋土は上層に焼土の堆積を見た。

壁周溝: 傾斜のため南西隅が確認できなかったが、ほぼ全周する様相で走行を検出した。また北東隅内縁で浅く小規模な溝を検出している。あるいは内縁の壁周溝の痕跡で拡張等の痕跡としての可能性を持つ。

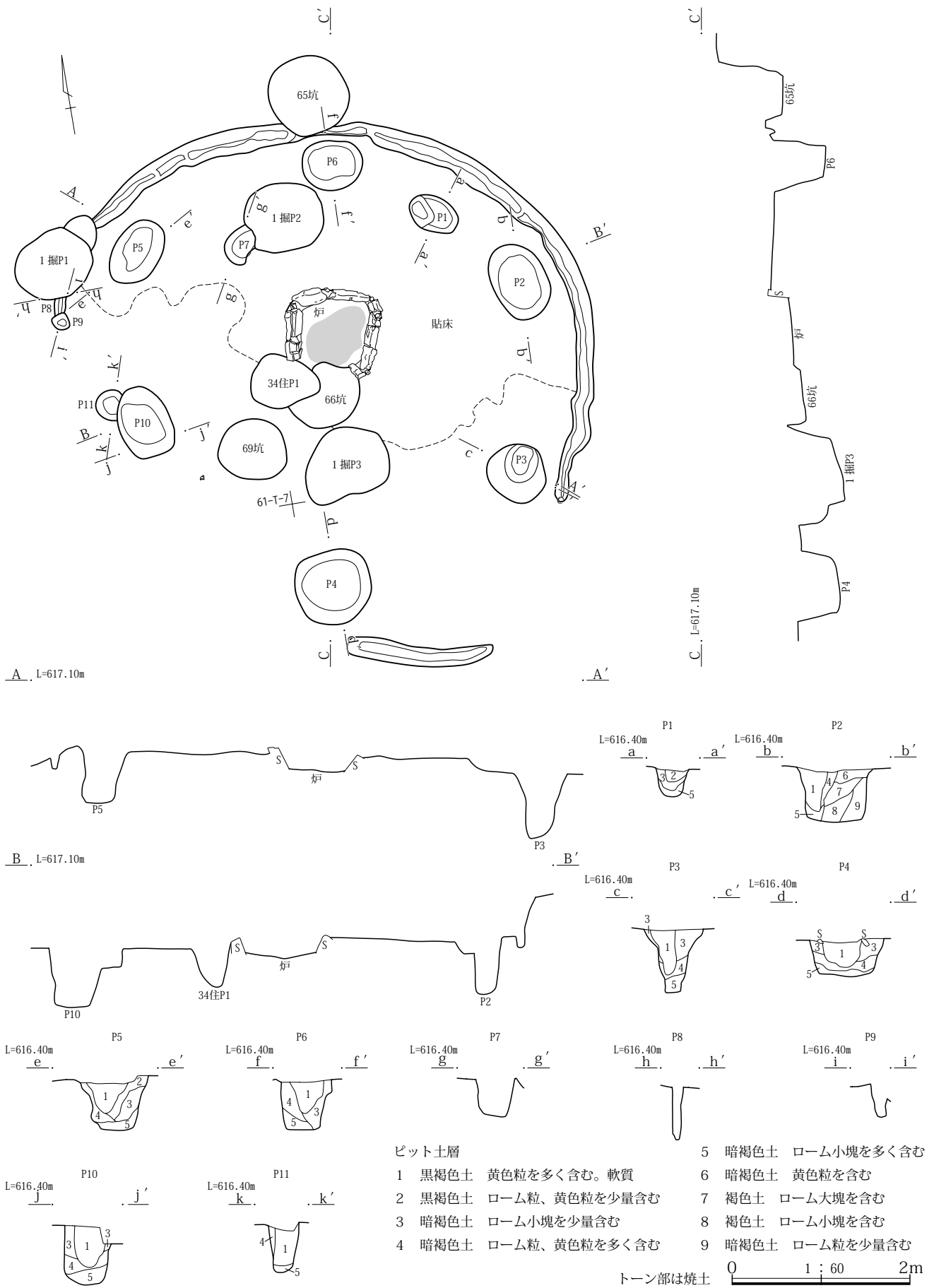
柱穴: 床面上に多くのピットを確認したが、殆どが周辺住居跡に該当する柱穴になった。そのため、本住居跡



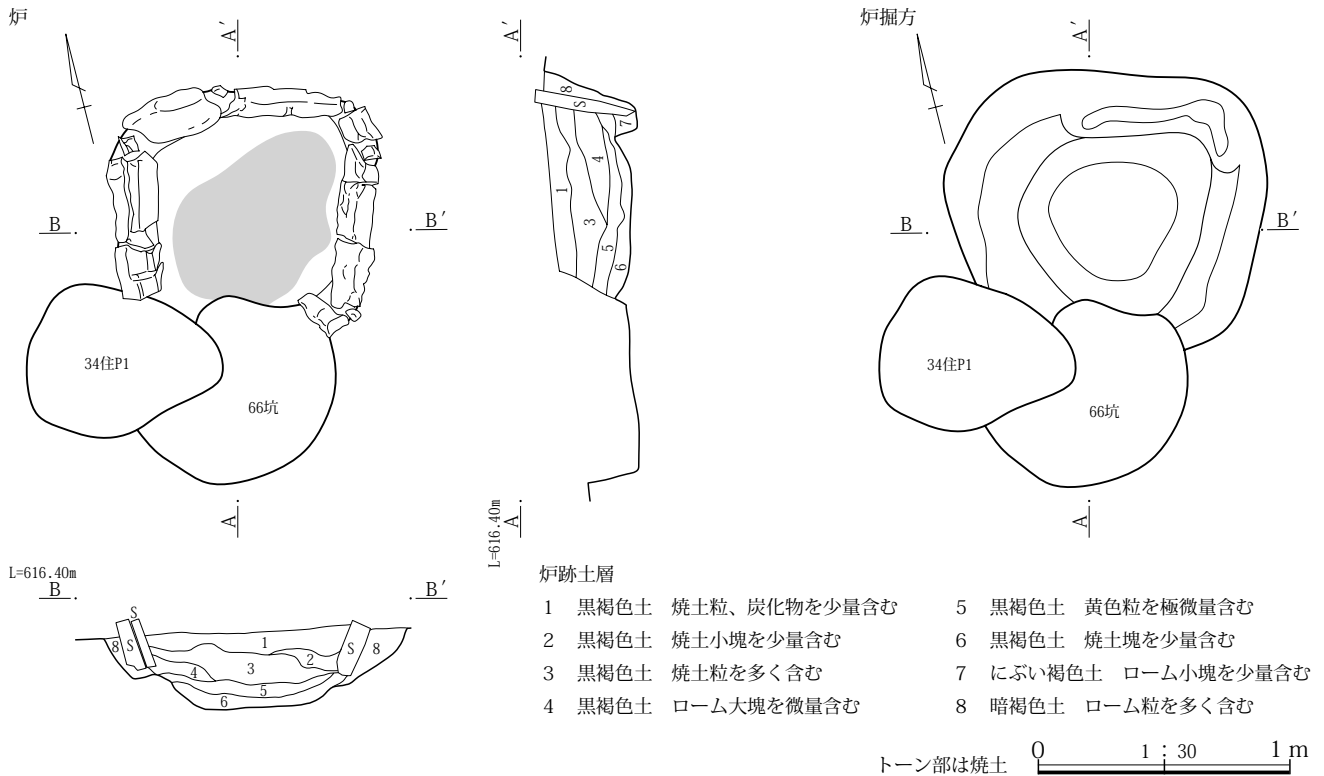
第3章 発見された遺構と遺物



第139図 61区35号住居跡 (1)



第140図 61区35号住居跡 (2)



第141図 61区35号住居跡（3）

の帰属するピットは5基に止まり、柱穴として規模が良好な例はP1、P3、P5に止まる。配置的には対応するピットもなく問題が残るが、可能性のある3基としたい。

遺物：住居跡範囲に相当する出土状況は、床面より浮いた状態で、かつ散漫な出土状態を示していた。周辺住居跡との重複を鑑み、本住居跡に帰属する遺物はP1埋土に含まれる例と、壁周溝から出土した例に限られた。8点の図示に止まり、居住を示唆する出土も見られなかったが、概ね「郷土式」（1）、加曾利EⅢ式（2～4）に比定されると考えた。

所見：重複する周辺住居跡の調査中に壁周溝と石囲い炉により平面形を確定した住居跡である。おそらく重複状況からも、敷石住居跡や掘立柱建物跡より古い住居跡と考えられ、出土遺物も中期後葉を主に示す。また石囲い炉も周辺が板石状の角礫を圍繞した石囲い炉を主とするが、本住居跡は円礫による円形を平面形とする炉形態を示していた。時期的な差と捉えるべきであろうか。

61区35号住居跡（第139～145図 PL.11・81～84）

位置：33号住や34号住と重複し、調査区東側の住居跡密集地点で調査された。61区S・T-6・7グリッドに位置する。やや北に距離を置いて17号住が近接する。周辺は

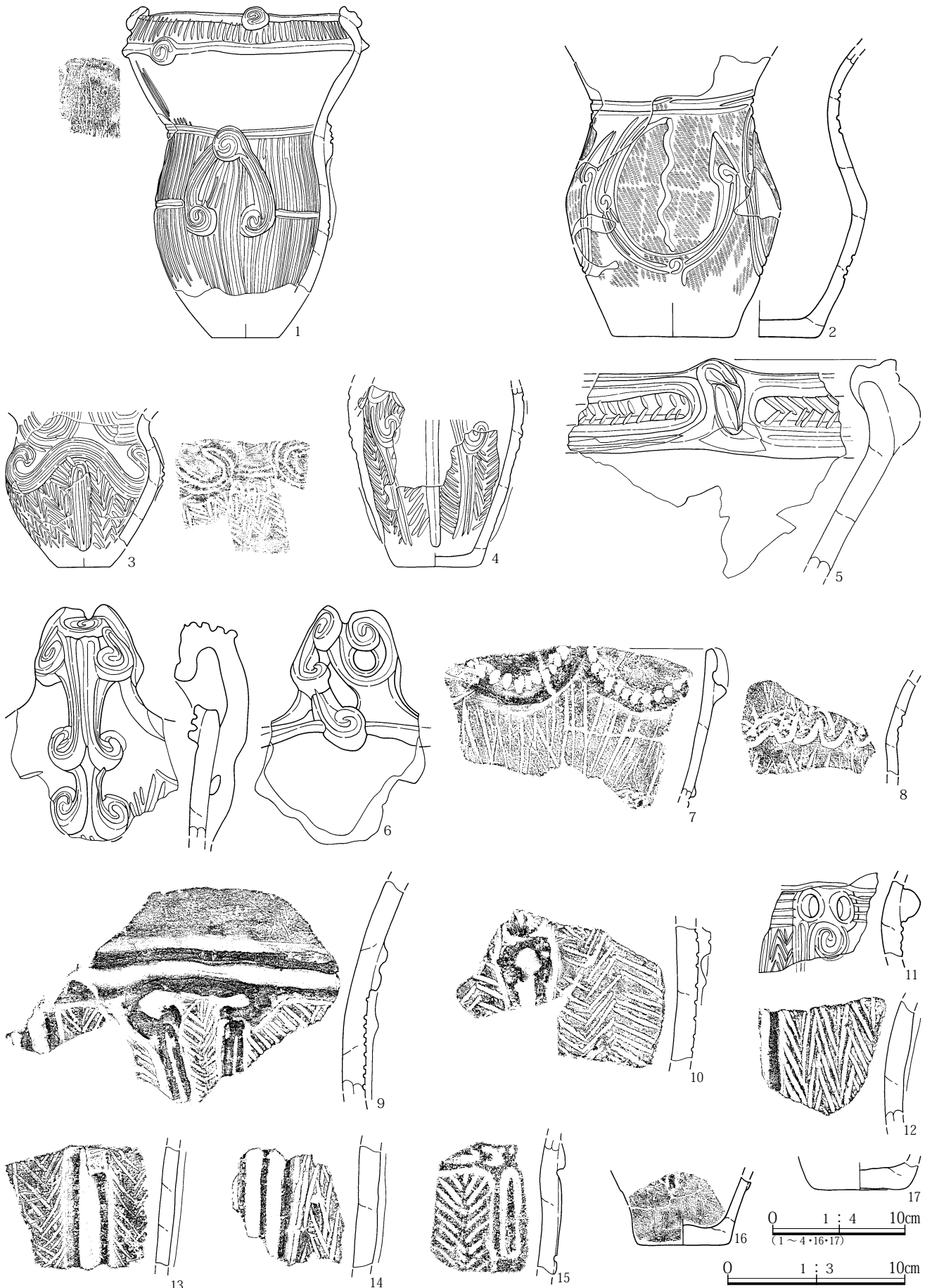
ほぼ平坦地形が広がるが、遺構密集による地形で、おそらく原地形は南東への緩やかな斜面地形を呈すると考えられる。

経過：北側から東側は上層で調査された1号列石調査後に、ローム漸移層下位の暗褐色土で確認した。また南側は各住居跡との重複により、平面形の明瞭な把握はできなかった。本住居跡の検出は主に北側を中心に行われ、壁周溝や炉跡を中心に住居跡としての調査を進めた。

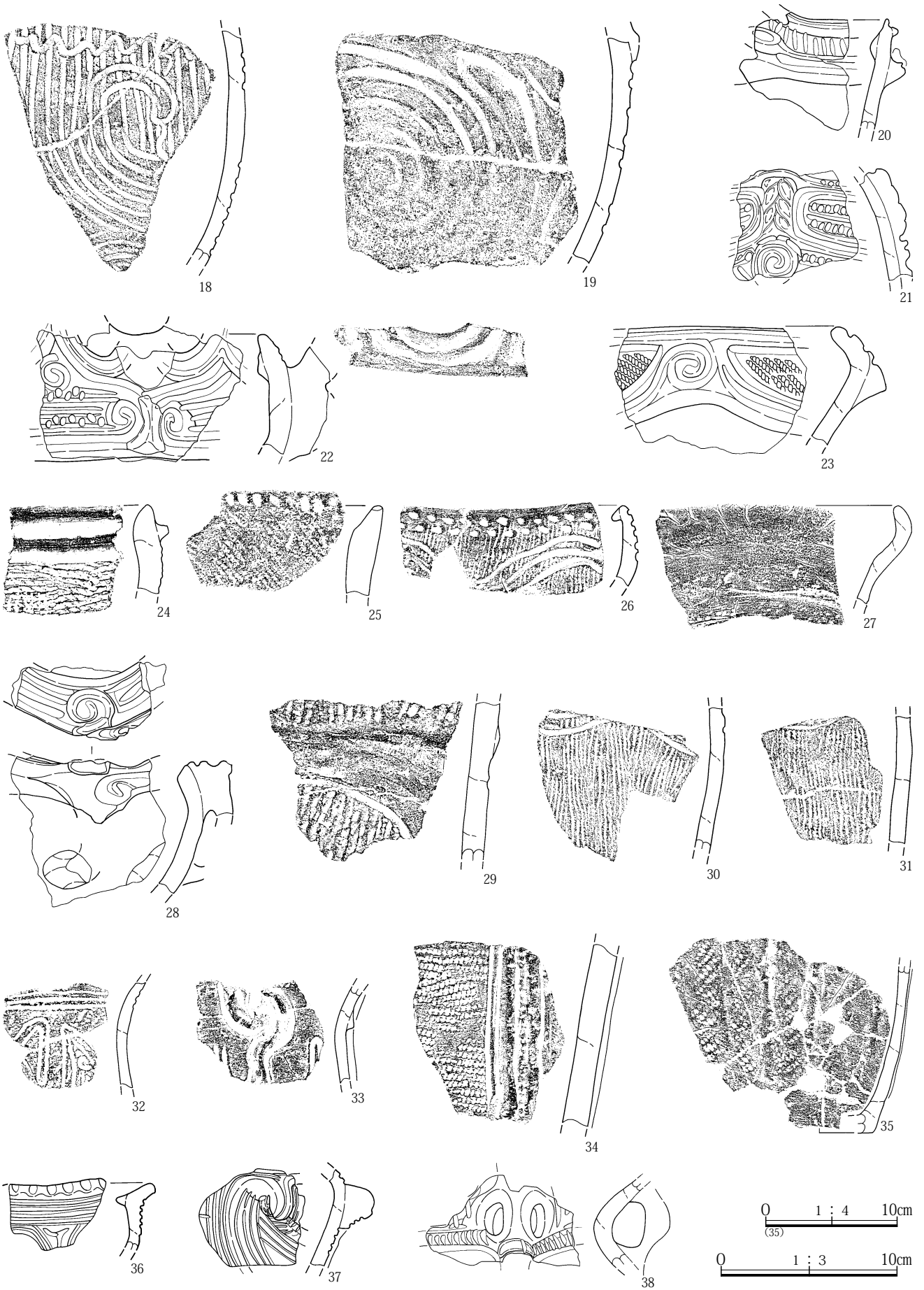
規模：南半の様相が判然としないが、概ね径615.0cmの不整形円形を呈するやや大型の平面形である。深さは遺存度の良好な北側から北東側で50.0cmを測る。南側は、34号住との重複のため、比高差の無い平面形把握となった。

重複：33号住、34号住、24号住と重複する。炉跡などの新旧関係や層位、出土土器からおそらく、本住居跡が一番古いと思われる。その他に65坑や66坑、69坑、1号掘立柱建物跡P1～P3が炉跡や床面、壁周溝を切る。

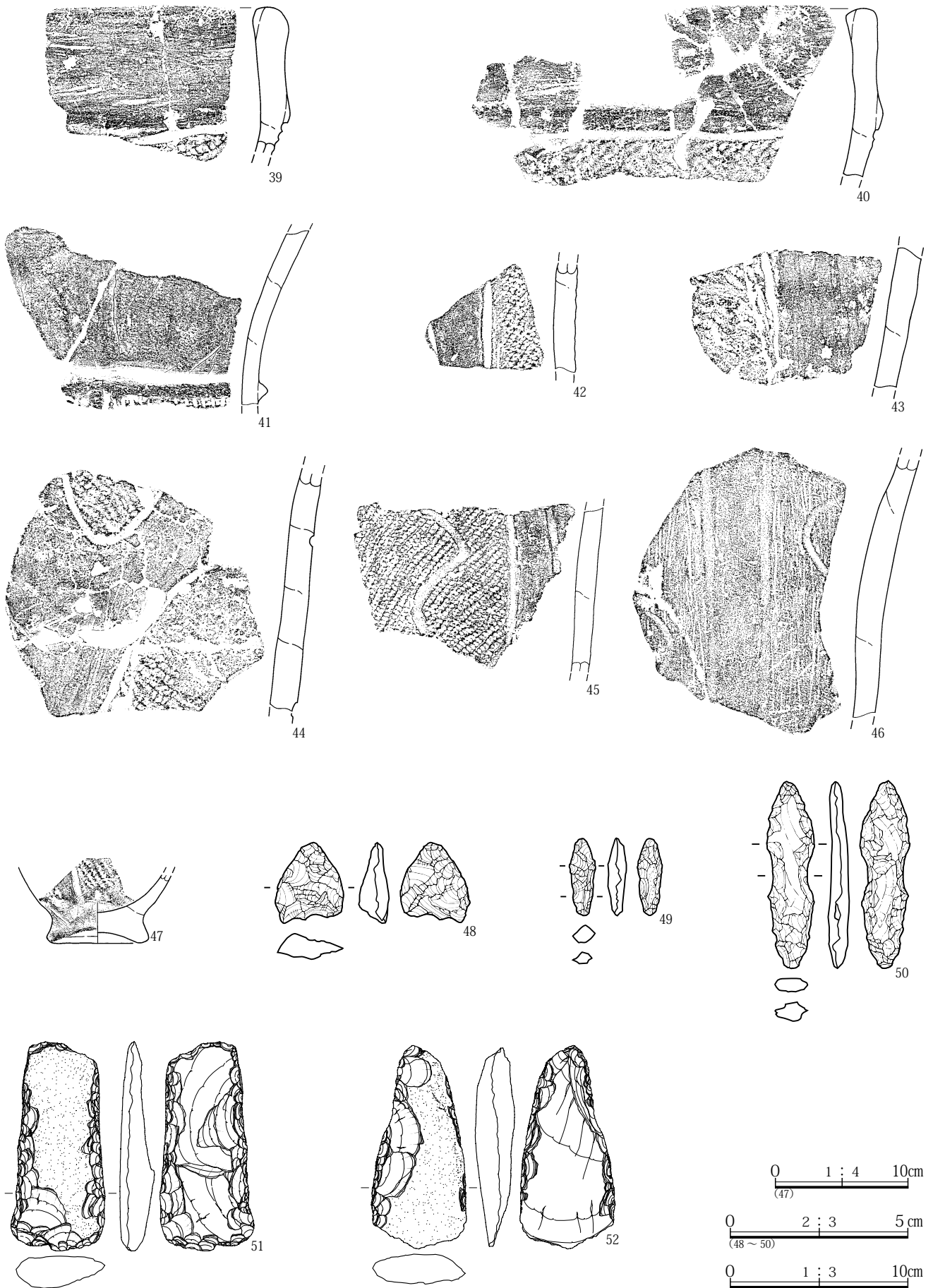
床面：北半に黄褐色ロームによる貼り床が広がり、南半は暗褐色～黒褐色土による地床という記録が残るが、基盤土の残存状況とも一致するため、北半の黄褐色土も地床構成土と捉えて良い。ほぼ平坦面を築くが、南半は床面自体の残存も良くなく判然としていない。硬化面は



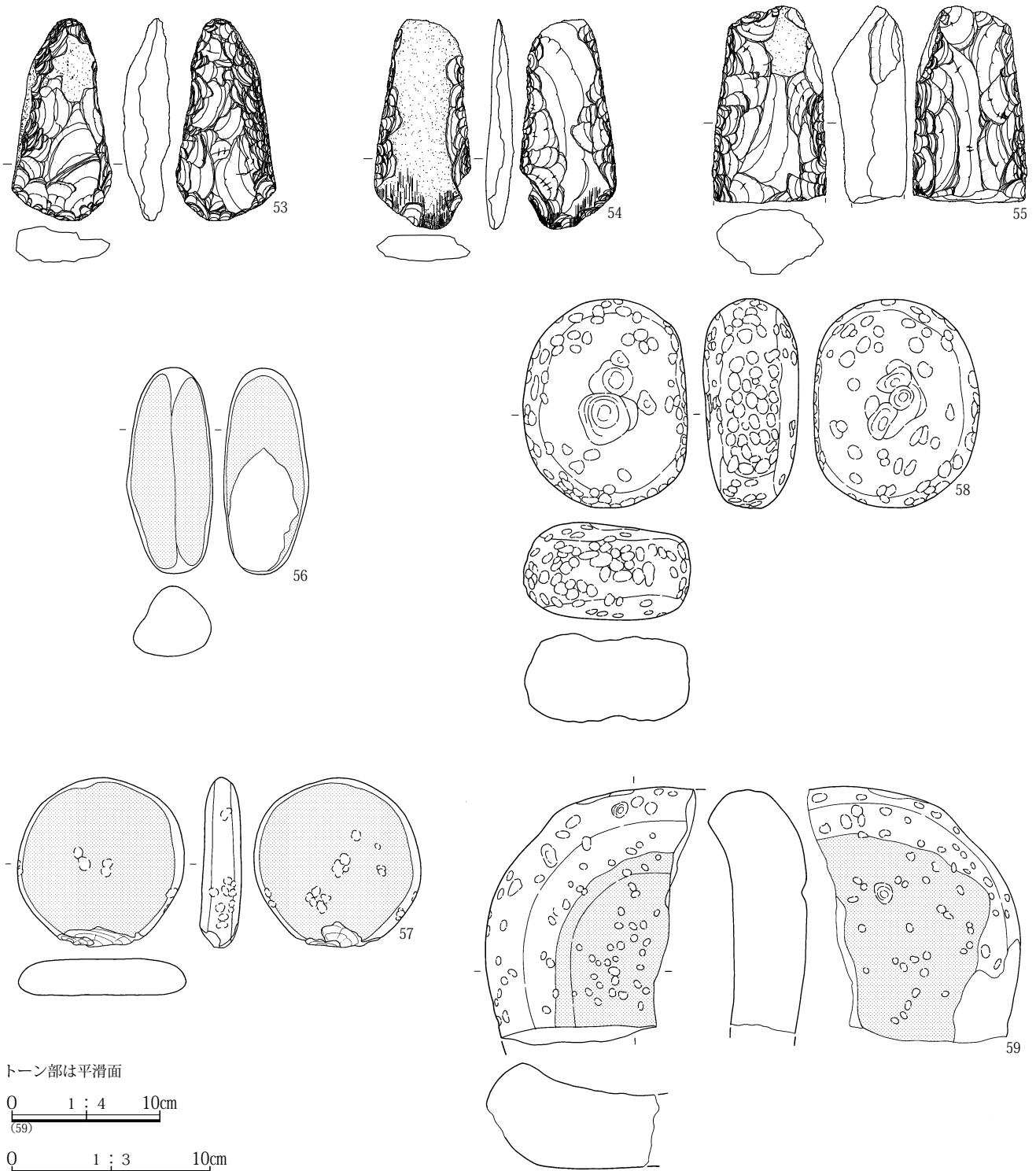
第142图 61区35号住居跡出土遺物 (1)



第143図 61区35号住居跡出土遺物（2）



第144图 61区35号住居跡出土遺物 (3)



第145図 61区35号住居跡出土遺物（4）

炉跡周辺の狭い範囲に認められた。

施設：床面ほぼ中央に石囲い炉、北半に壁周溝、柱穴として11基のピットを得ている。

炉跡：短軸長約108.0cm、主軸を北北東に向けた方形の石囲い炉である。四辺を大型の板石状角礫と円礫によって圍繞されると思われるが、南辺は34号住P1と66坑によって切られるため判然としない。円礫は北西隅に充

てており、何等かの意図が想起されよう。その他の炉石は被熱のためか数分割する様相を示していた。

壁周溝：北半の壁に沿った走行を示す。また、南側P4南に短く1条の溝を見た。これも壁周溝と見る事ができよう。検出された壁周溝は1条単位であり、拡張・移動痕跡は見られなかった。

柱穴：11基のピットを調査したが、柱穴として規模、

配置から良好な例として、P2～P6、P10・P11が挙げられよう。P6は奥壁柱穴として位置付け、主軸線上にのるP4も良好な配置・規模を示す。東壁際にP2とP3、西壁際にP5とP10・P11が配されている。いずれも柱痕が観察され、良好な柱穴と位置付けられる。

遺物：住居跡全体から広く満遍なく出土しており、層位的にも床直～床直上に集まる。一括性の高い出土遺物と評価できよう。その中で1は炉跡上端から2は奥壁柱穴P6西、3は炉南の床直から出土しており、居住に伴うあるいは住居廃絶直後の廃棄と判断でき、関連性が高い。反面、66坑上層出土の4はあるいは流入の可能性もある。1は「柵倉式」、2は加曾利EⅠ式、5は「郷土式」古相を示す。その他の破片も多くは加曾利EⅠ式併行の様相を示しているが、3～22は加曾利EⅢ式であり周辺住居跡の影響と思われる。石器では異形石器(50)が炉北床直上から出土している。

所見：周辺住居跡の重複により大きく切られる新旧関係ながら、床面近くの出土遺物はまとまりがあり、良好な一括資料といえよう。また、住居跡自体も、炉跡を中心にして6箇所の良い柱穴が配され、住居跡全体像も把握できよう。住居跡時期は、炉上端で出土した1や床直2から加曾利EⅠ式段階に求めておきたい。

#### 61区36号住居跡(第146～149図 PL.12・84・85)

位置：調査区東側の住居跡群内にある。61区U-6・7、V-7グリッドに位置し、前述の24号住や31号住と重複する。南側への緩やかな斜面上の立地だが、多くの遺構が重複するため、ほぼ平坦地形が広がる。

経過：ローム漸移層上位である黒褐色土を遺構確認面とし、周辺遺構の精査の結果、最終的には暗褐色土で検出作業を続けた。遺物の広がりが高く見られたため、精査を重ねたが、炉跡と壁周溝、埋嚢を確認するに至り、住居跡として調査を進めた。

規模：東壁から南壁の検出が果たせなかったため、詳細な規模や平面形は把握できなかったが、概ね径45cm前後の不整形円形を呈するものと思われる。深さは60.0cmを測るが、北側から西側の壁のみの残存である。壁の立ち上がりは壁周溝と一体化し直立気味にしっかりしており、良好な壁といえよう。

重複：24号住と31号住が重複する。このうち31号住は

本住居跡に切られるが、24号住との新旧は層位や施設の在り方からは確定できなかった。出土遺物からは、本住居跡が24号住より古い様相を示していた。

床面：暗褐色土を地床とし、一部に敷石を見る。床面はほぼ平坦面を築くが南東側が逸失するため判然としない。敷石は床面西側に設けられる。大型の板石状の角礫2枚を敷き、隙間を小型の角礫で埋めていた。敷石は他には見られず、敷石住居としても、積極的な例ではないようだ。

施設：敷石の他、床面中央に石囲い炉を見る。主軸線上南に埋嚢を確認しているが、調査では埋嚢とは認識しておらず、詳細な記録を取っていない。北壁から西壁際に深い壁周溝を確認し、15基のピットを柱穴として調査した。

炉跡：石囲い炉は西辺を除く三辺を大型角礫で囲い、約72.0×48.0cmの方形を呈していた。深さは34.0cmでしっかりした掘り込みである。炉埋土上層より拳大から人頭大の角礫が多く含まれ、底面中央に深鉢体部中位(3)を正位で埋置していた。焼土の堆積は少なかった。埋嚢：石囲い炉南約60cmに径約45cmの掘り込みを持って内部より深鉢2個体(1・4)が出土している。通常の入出口埋嚢と様相を異にしており、半完形の1と距離を置いて4が出土しており、このことから調査中は、出入口部の埋嚢として位置付けなかった。しかしながら、整理段階では主軸線上にあることから、本例も出入口部埋嚢として位置付け、本住居跡の居住痕跡の一つとして評価したい。

壁周溝：北側壁から西壁際に沿って深くしっかりとした走行をしめしていた。深い箇所30cmを超え、幅も40cm前後で丁寧な掘り込みだった。なお、1条のみの検出で拡張、移動の痕跡は見られなかった。

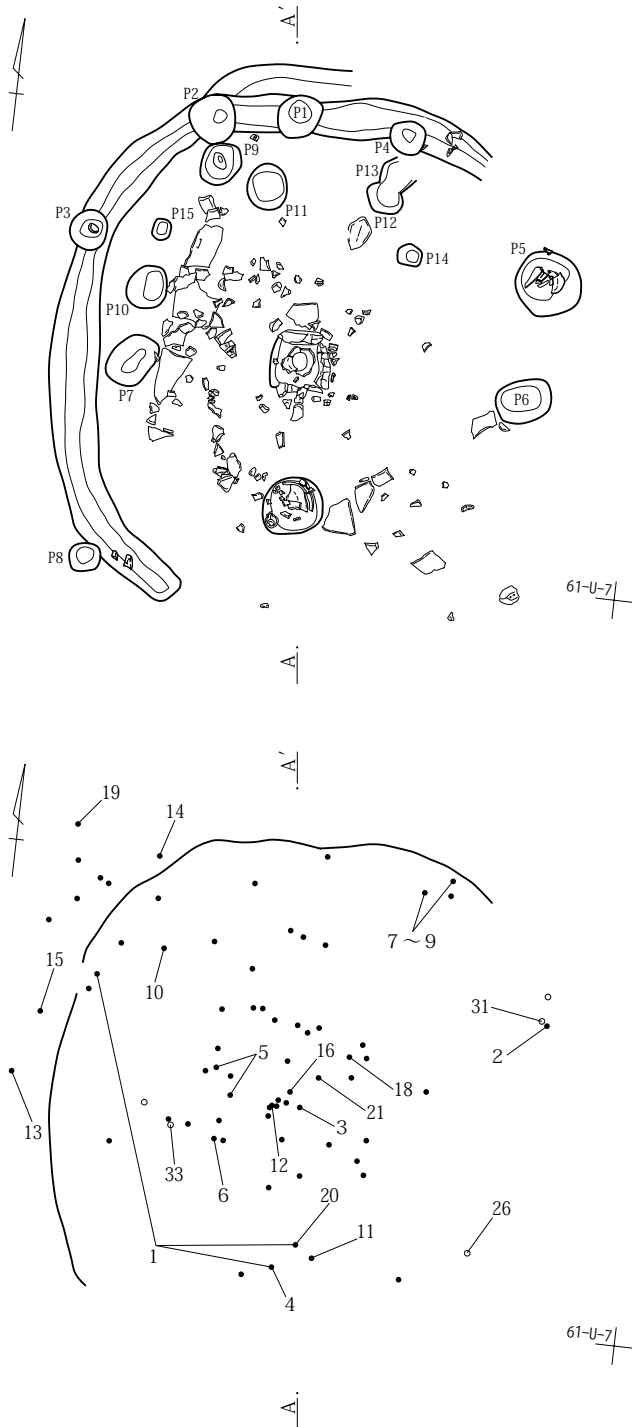
柱穴：15基のピットのうち柱穴として妥当な例は、P1～P4、P8は壁柱穴及びP1は主軸線上に乗る柱穴である。また、P5～P7も配置、規模とも良好な例と位置付けられる。

遺物：炉内土器として3、埋嚢の掘り込み内に1と4、P5内部に2が出土している。居住に伴う出土状況として判断している。また中期中葉とした9、10、14以外は加曾利EⅢ式からEⅣ式に比定される資料でほぼ同時期の所産と考えている。



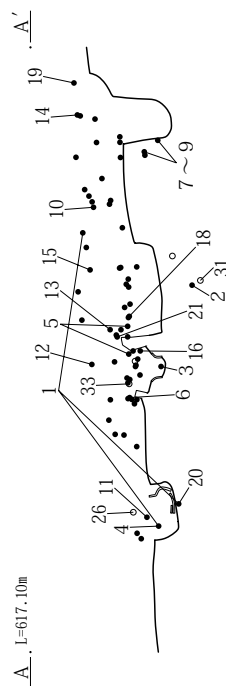
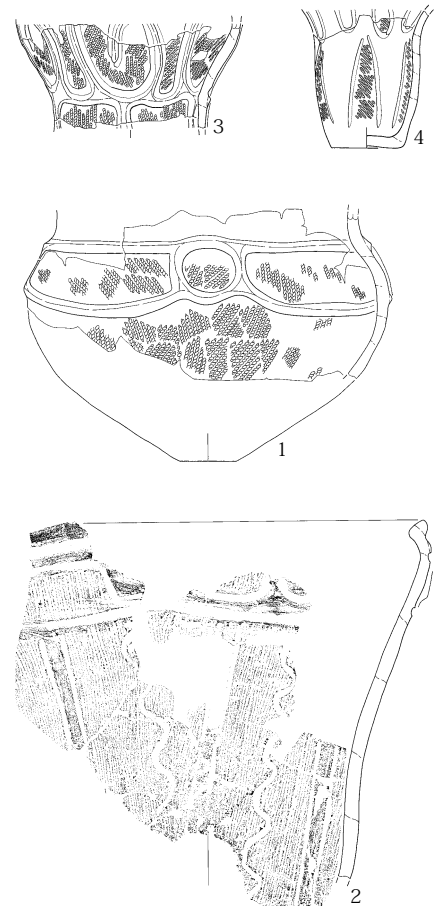
所見：敷石住居跡と考えると良いだろう。ただし、出入口施設が埋甕のみで、張出部を附帯するかは判然としない。敷石も西壁周辺に偏り積極的な敷石とは捉え難い。初現期の敷石住居形態と位置付けられよう。時期は加曾利EⅢ式新段階から加曾利EⅣ式段階と時間幅を持たせておきたい。

61区37号住居跡（第150図 PL.12・85）

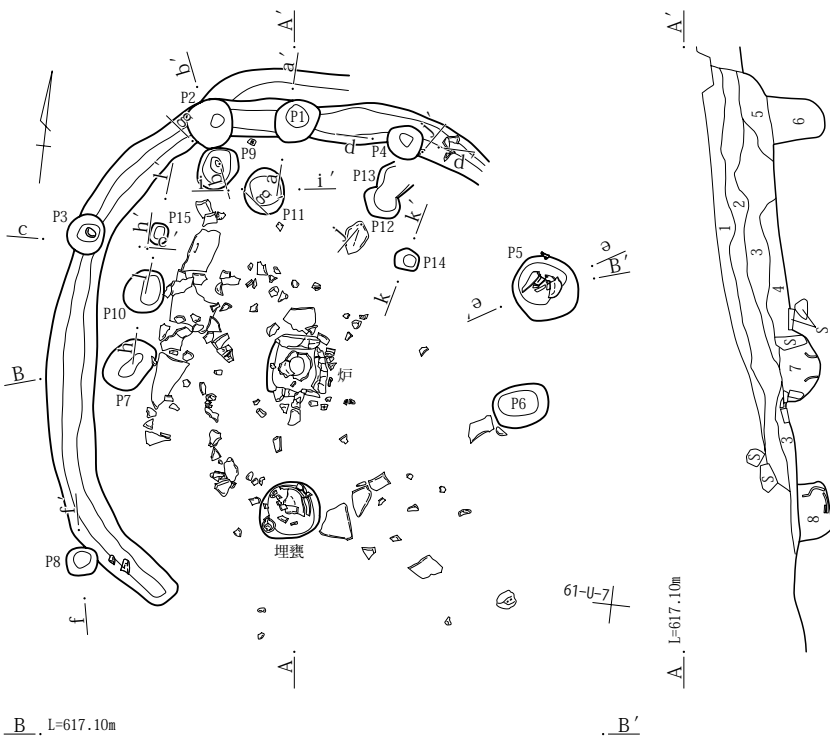


位置：61区S・T-5グリッドに位置し、調査区東側の南壁際にある21号住床面で調査された。その他では8号住が東に、33号住居跡が北に、また22号住居跡が西に重なるように住居跡密集地点の中にある。周辺は、遺構密集のため平坦地形が広がるが、東側に迫る傾斜地形の延長を考えると、南東方向への緩斜面地形に占地するといえよう。

経過：21号住調査中に、21号住炉跡南を切る重複で本



第146図 61区36号住居跡（1）

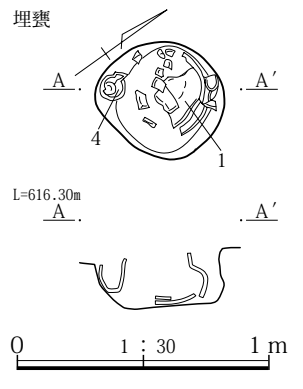
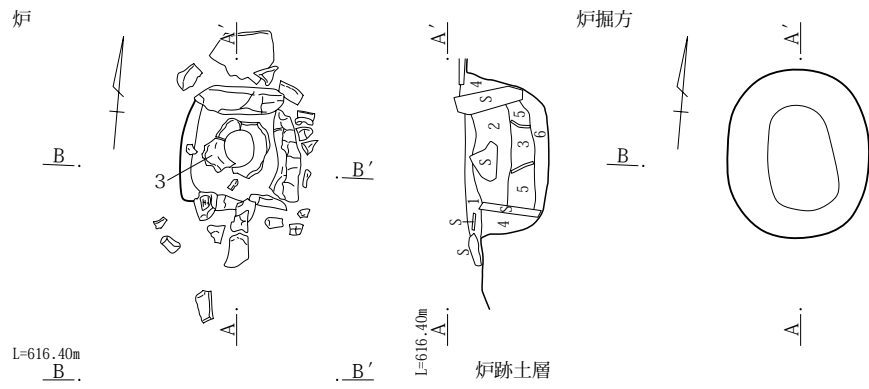
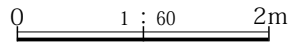
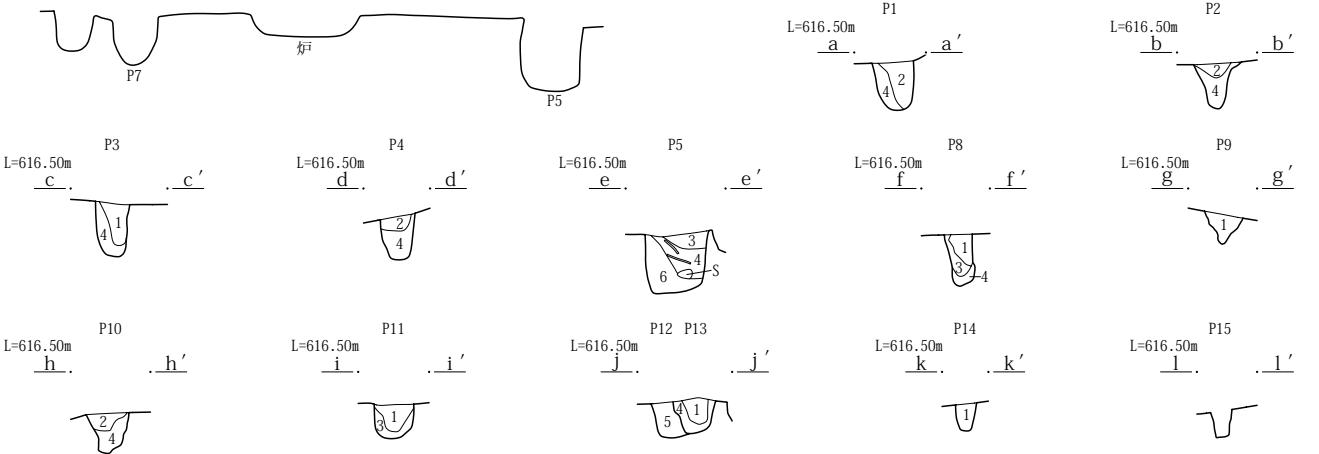


36号住土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム粒、黄色粒を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒、褐色土塊を少量含む
- 4 暗褐色土 灰褐色砂質土塊を含む
- 5 暗褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 6 黒褐色土 黄色粒を微量含む。ピット埋土
- 7 暗褐色土 炭化物を微量含む。炉跡埋土
- 8 灰褐色土 ローム粒を少量含む。埋葬埋土

ピット土層

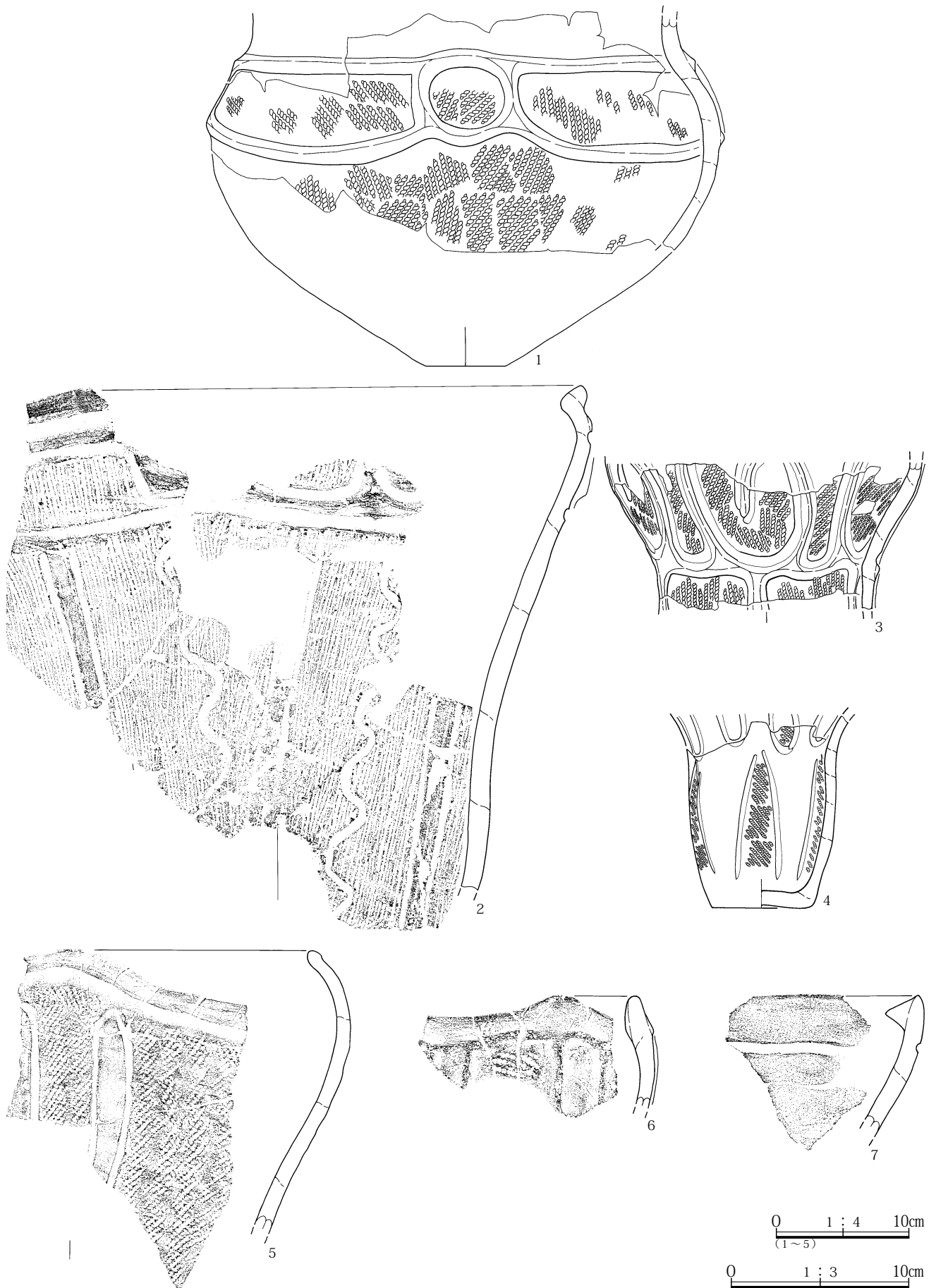
- 1 灰褐色土 白色粒を少量、黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む。軟質
- 3 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を微量含む
- 4 灰褐色土 ローム粒を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 6 黒褐色土 ローム小塊、黄色粒を多く含む



炉跡土層

- 1 灰褐色土 黄色粒、白色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 白色粒、炭化物を微量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 灰褐色土 黒褐色土塊を少量含む
- 5 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 6 にぶい褐色土 ローム大塊を微量含む

第147図 61区36号住居跡 (2)



第148図 61区36号住居跡出土遺物 (1)



第149图 61区36号住居跡出土遺物 (2)

住居跡北壁を確認した。さらに調査区壁の土層観察により、21号住との新旧が追証された。本住居跡は北壁のみの調査に止まり、南側の大半を調査区域外に延長する。

規模：北壁のみの調査のため、平面形や規模は不明である。深さは土層の観察では40cmを超えるが、21号住床面からは10cm程度である。断面形態等は21号住の項（第89図）を参照されたい

重複：前述のとおり21号住を切る新旧関係である。21号住は中期中葉末の所産と捉えられている。

床面：黒褐色土を地床とする。床面の検出も範囲が狭く、詳細は不明だが僅かながら硬化面の広がりも見られた。ほぼ平坦面を築く。

施設：床面のみを検出で、炉跡や柱穴を確認できなかった。

遺物：埋土中より細片が出土し、4点が図示し得た。中期中葉末の資料（1・3・4）があるが、後葉に比定される「郷土式」口縁部破片（2）を見る。

所見：北壁一部の検出であり、全体像は不明である。時期も中期中葉末に比定した21号住を切る新旧関係と僅かに出土した「郷土式」の破片から、中期後葉の可能性を示唆できよう。

#### 61区38号住居跡（第151・152図 PL.12・85）

位置：調査区東側の住居跡密集地点で調査された。61区T・U-6・7グリッドに位置し、周辺には22号住や24号住、34号住、36号住が広く重複するため、平坦地形が広がる。おそらく南東への緩斜面地形の占地と考えられる。

経過：ローム漸移層上位である黒褐色土を遺構確認面としたが、周辺遺構の精査の結果、最終的には暗褐色土

で平面形や炉跡を検出した。当初、炉跡のみを確認し、対応する柱穴や壁の検出に努め、辛うじて西壁～南壁とピットを本住居跡の施設として位置付けた。

規模：東側が22号住、24号住の重複により、不明部分が多く、全体像は把握できなかった。おそらく径450cm前後の不整円形を平面形が予想される。深さも浅く20cm程度で壁の立ち上がりも弱い印象を受ける。

重複：前述の22号住、24号住、34号住、36号住以外に82～86坑など土坑も密集する。そのため各遺構との新旧も確定できず、不明と言わざるを得ない。出土土器も乏しいため判断材料も少ない。

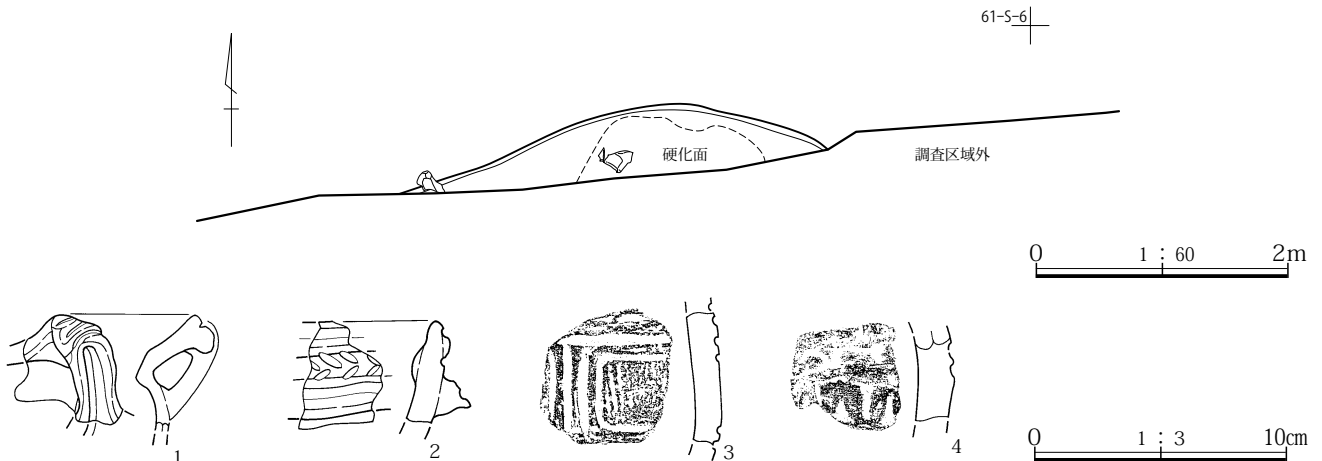
床面：暗褐色土を地床とし、平坦面の広がりを見るが、重複遺構の多さから硬化面などの特定は果たせなかった。

施設：石囲い炉を床面中央で検出した。その他に壁周溝や埋甕は見ず、柱穴として9基のピットを調査している。

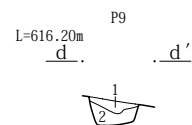
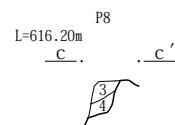
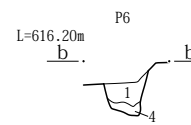
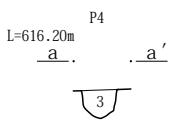
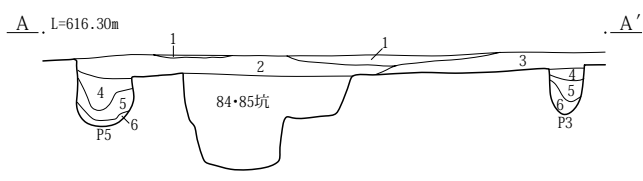
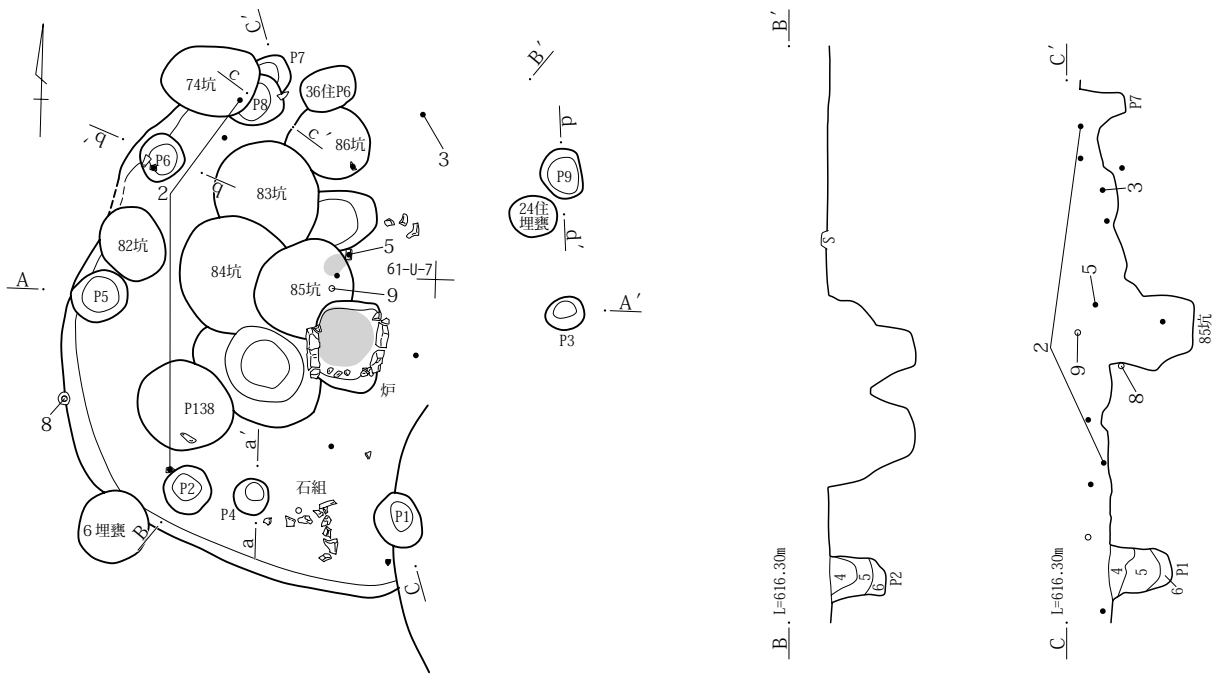
炉跡：約72.0×64.0cmの方形を平面形とし、深さは21.0cmを測る。掘り込みは比較的良好である。西辺と東辺に炉石を設けており、南北辺は炉石の痕跡も見られなかった。炉石は大型の角礫を主体にしており被熱のためか数分割に破碎されていた。埋土は焼土を含む灰褐色土を主体にしていた。

柱穴：9基のピットを得たが、柱穴としてはP1～P3、P5～P7、P9が配置・規模から可能性が高い。7基のピットを柱穴として位置付けるが、奥壁柱穴などの特定ができず、検討課題は多い。

遺物：住居跡全体から出土が見られ、埋土～床直に分布が広がるが、重複する住居跡出土遺物との分別が難し



第150図 61区37号住居跡及び出土遺物



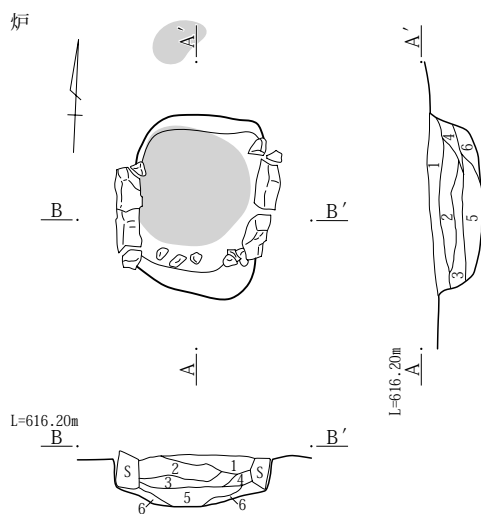
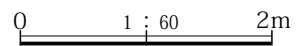
38号住土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊、黄色粒を少量含む。しまりやや強い
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む。しまり強い
- 4 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 6 黒褐色土 褐色土塊を微量含む

ピット土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム塊を少量含む

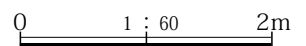
トーン部は焼土



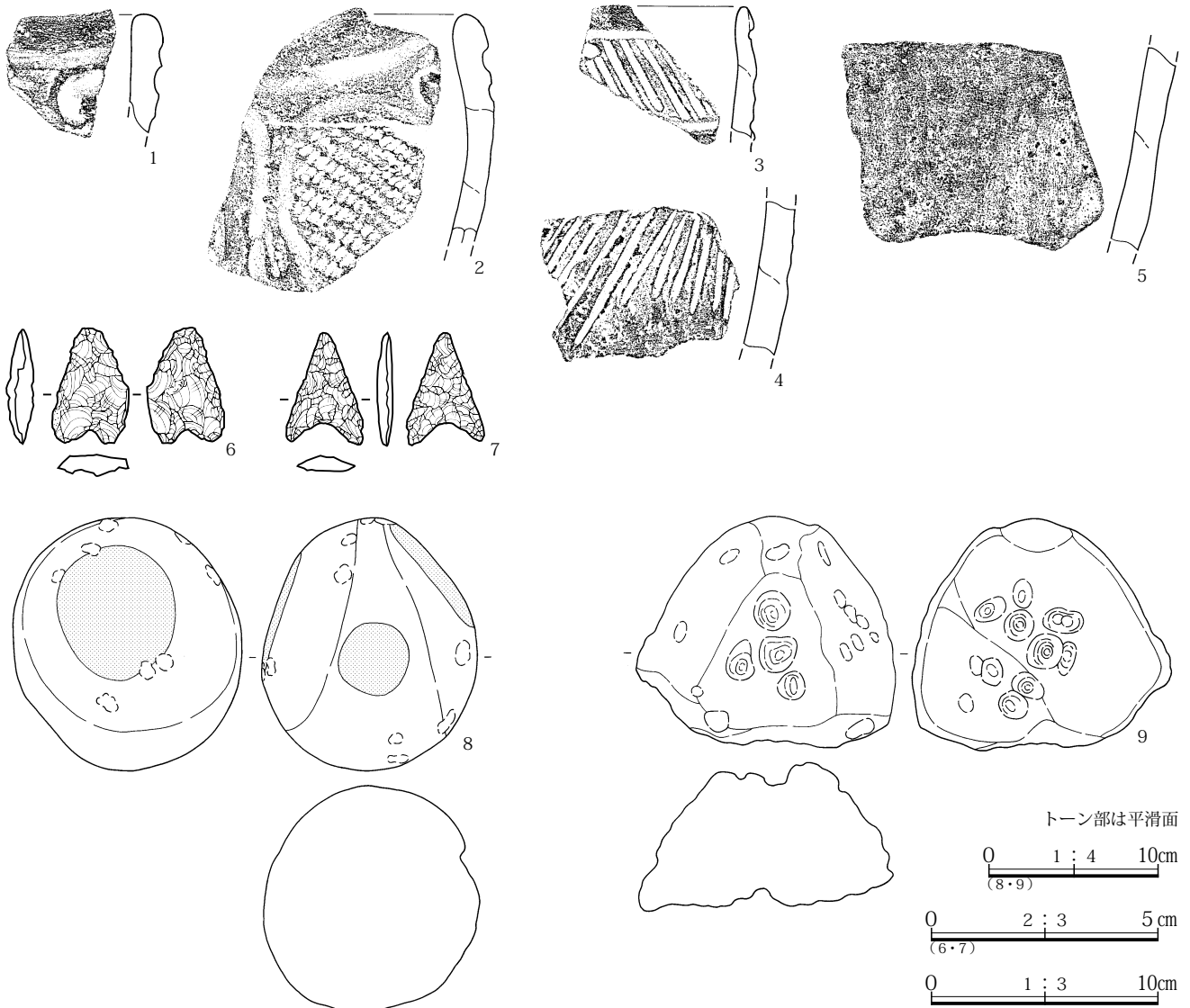
炉跡土層

- 1 灰褐色土 黄色粒、炭化物を微量含む
- 2 灰褐色土 焼土粒を微量含む
- 3 灰褐色土 焼土粒を少量含む
- 4 黒褐色土 焼土塊を少量含む
- 5 にぶい黄褐色土 焼土小塊を多く含む
- 6 黒褐色土 焼土小塊を微量含む

トーン部は焼土



第151図 61区38号住居跡



第152図 61区38号住居跡出土遺物

い地点でもある。出土土器も中期後葉を主としているが、居住に伴う例では無い。

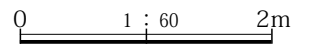
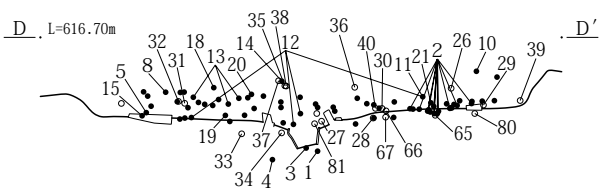
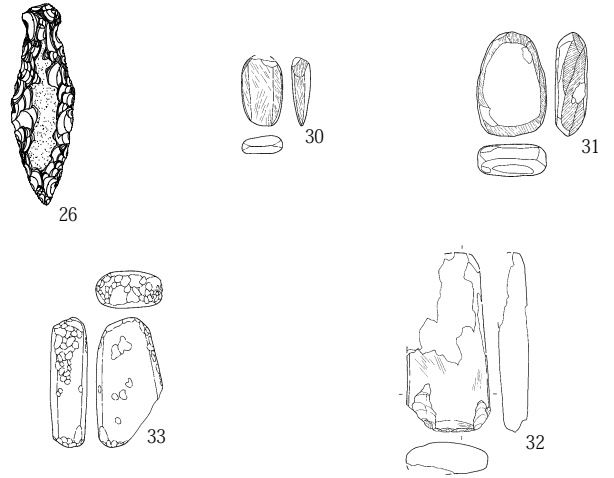
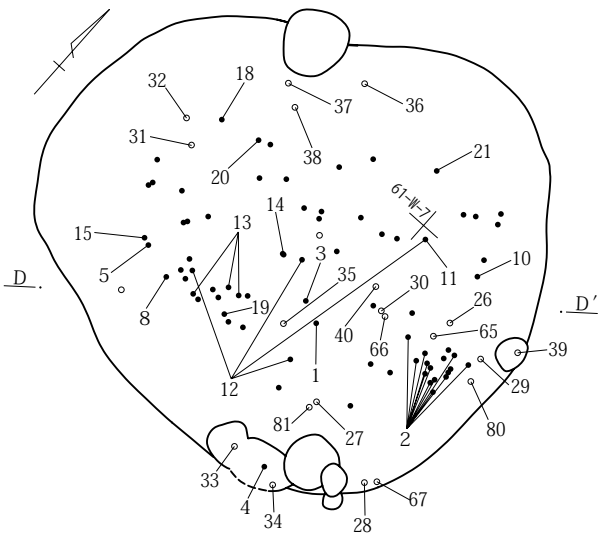
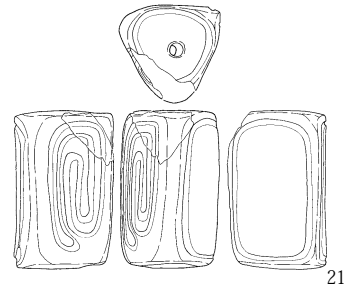
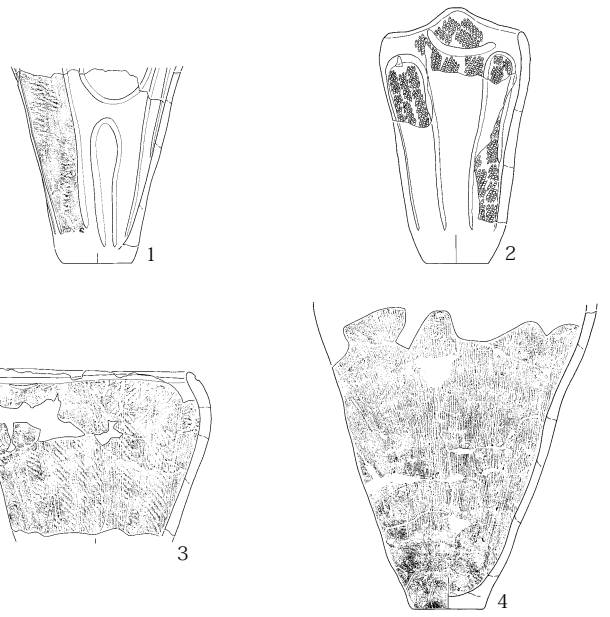
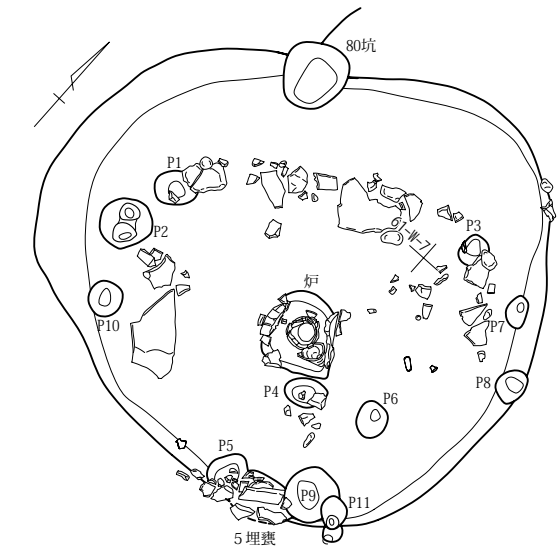
所見：住居跡密集地点で、炉跡の検出から、低いながらも壁を確認し、幾つかの柱穴を抽出した住居跡である。良好な例では無いが、炉跡を中心に据えた範囲で捉えられる限りの住居跡把握と考えている。時期は中期後葉と判断したが、確定的ではない。

61区39号住居跡（第153～158図 PL.12・86～88）

位置：調査区中央東寄りの61区V・W-6・7グリッドに位置する。23号住の南東で重なり、北に41号住居跡も重複する。周辺は南側への緩斜面地形にあるが、ほぼ平坦面での検出となった。遺構密集地点の中央に位置するといえよう。

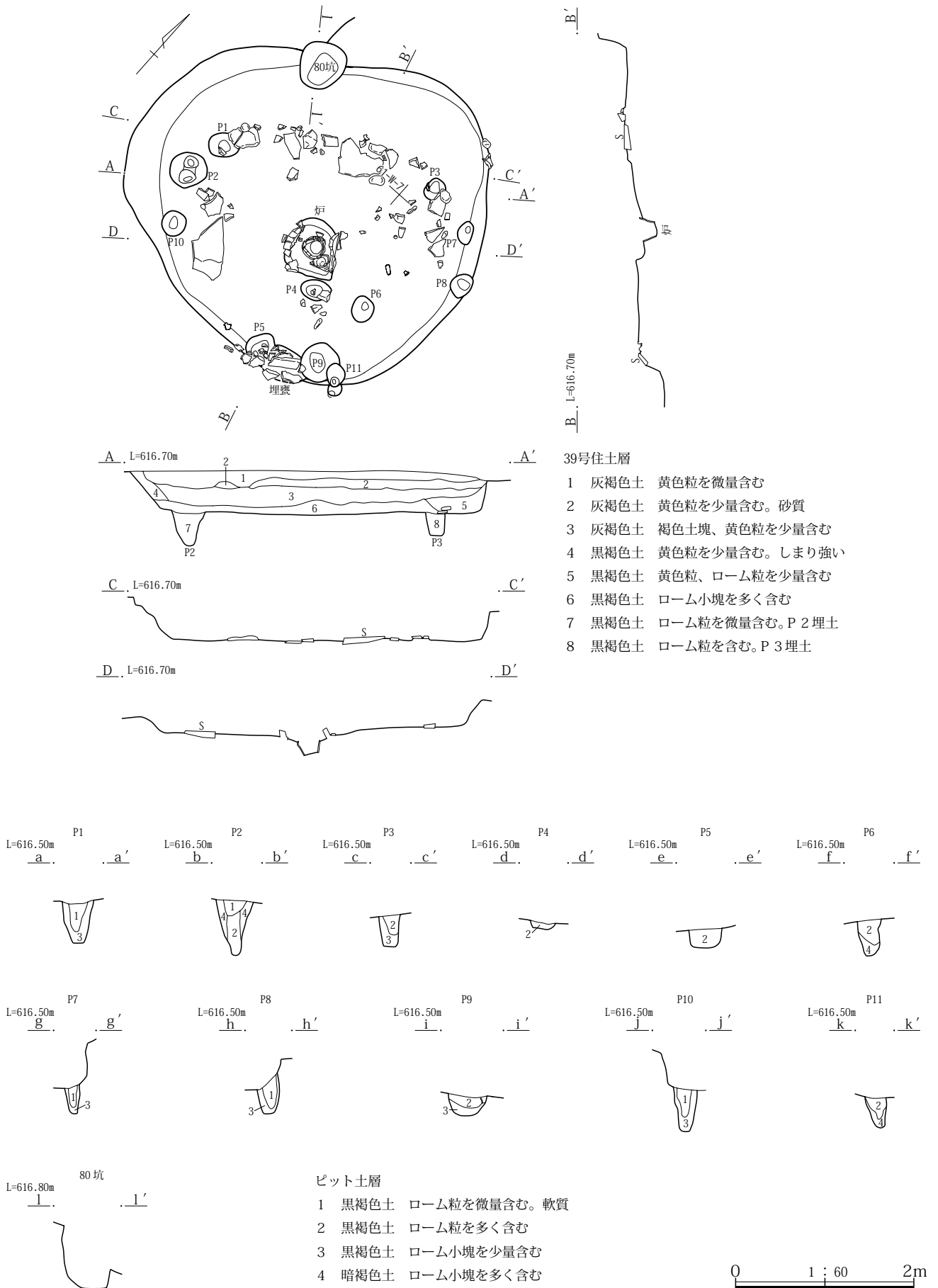
経過：遺構確認面は、Ⅲ層に相当する黒褐色土で行った。灰褐色土を主体とした埋土で、床面まで深く、良好な遺存状態を示していた。床面で敷石と炉跡を検出し、住居跡として確定し調査を進めた。炉跡南に、距離を置いて配石を伴う埋甕が検出されていたが、調査時では5号埋甕の単独遺構とした。しかしながら、炉跡軸線上に近い位置に配されているため、整理段階で住居内の出入口埋甕として変更した。

規模：主軸方位を北西に向けた不整形円形を呈し、平面規模は約405.0×370.0cmを測る。北東側が広く、南西側が狭い洋梨型の平面形であるが、これは南西側の出入口施設の存在が想定される形態である。深さは残りの良い北壁付近で50.0cmと、良好な遺存度を誇るが南東側では、斜面地形のため壁の検出が果たせなかった。壁の立ち上がりは、南東壁以外は極めて良好な状態でしっかりして

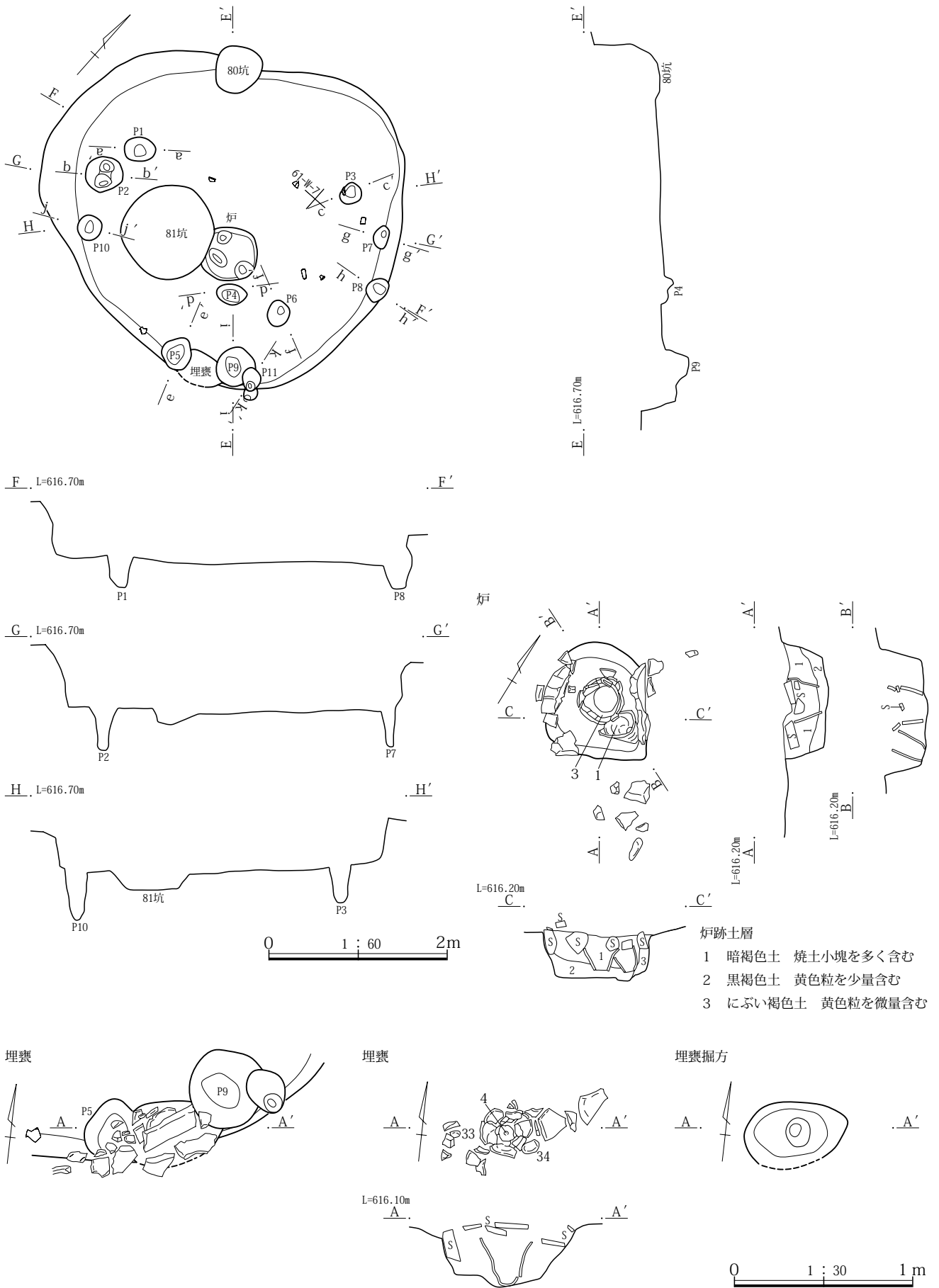


第153图 61区39号住居跡 (1)

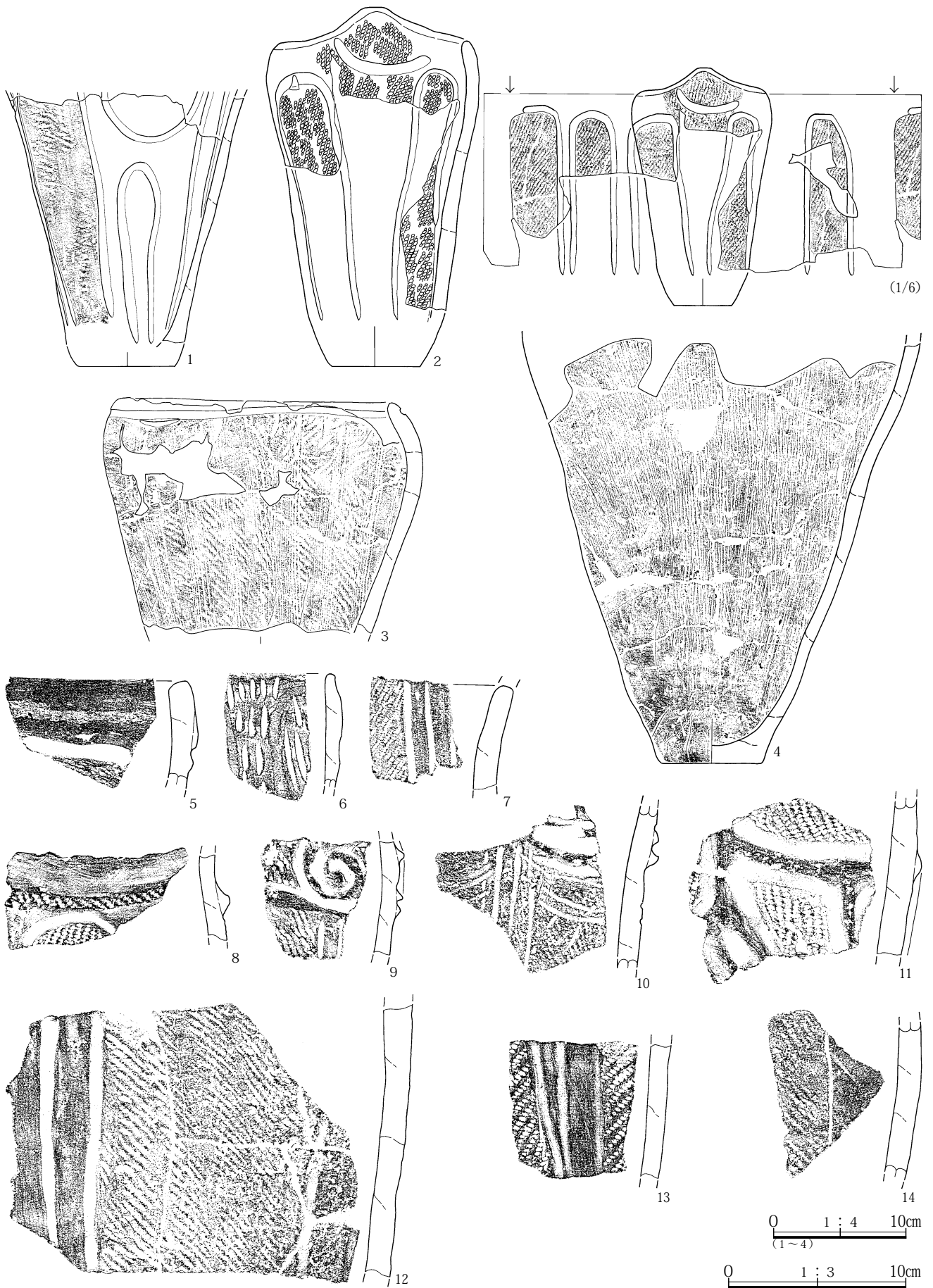




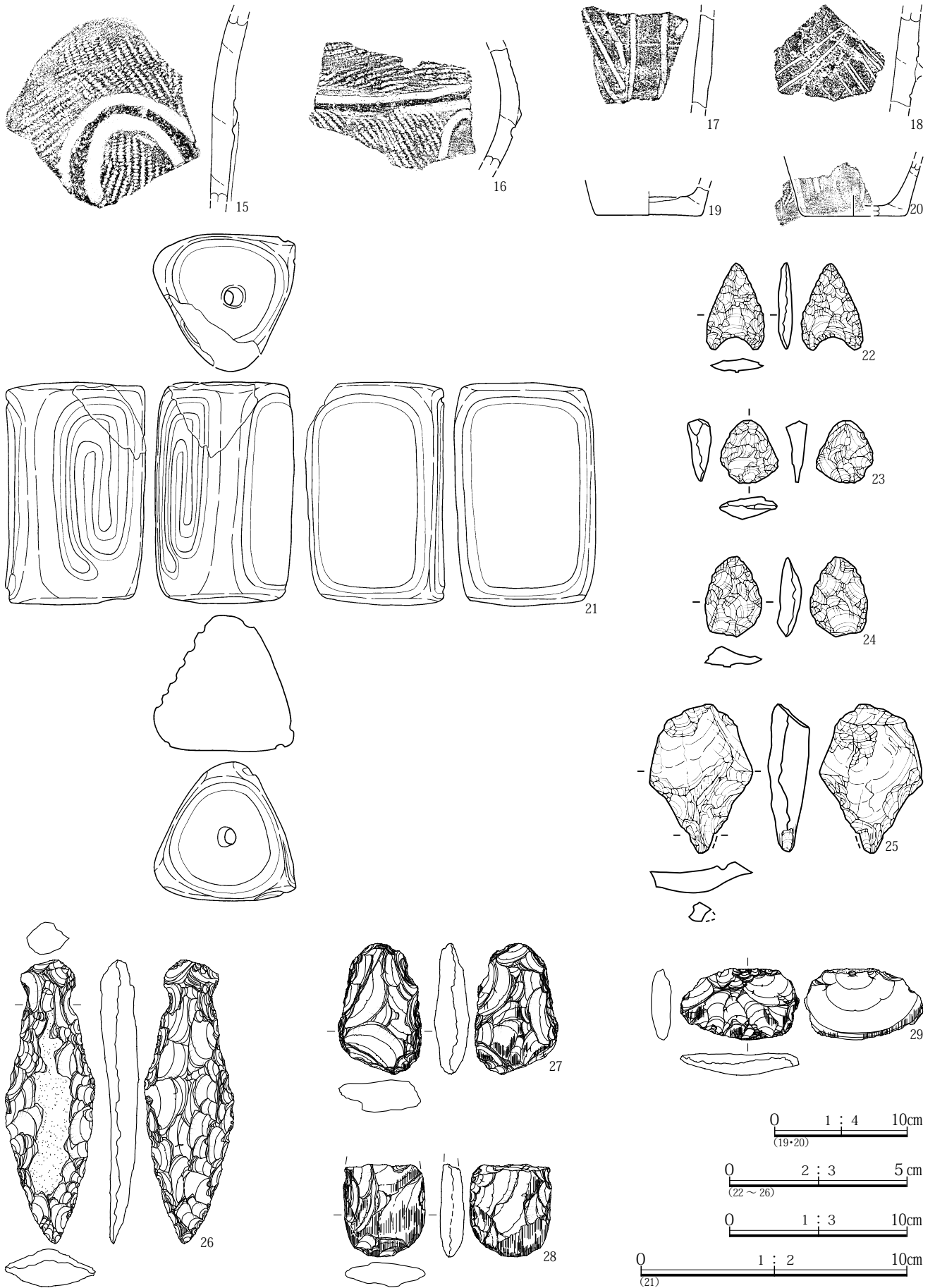
第154図 61区39号住居跡（2）



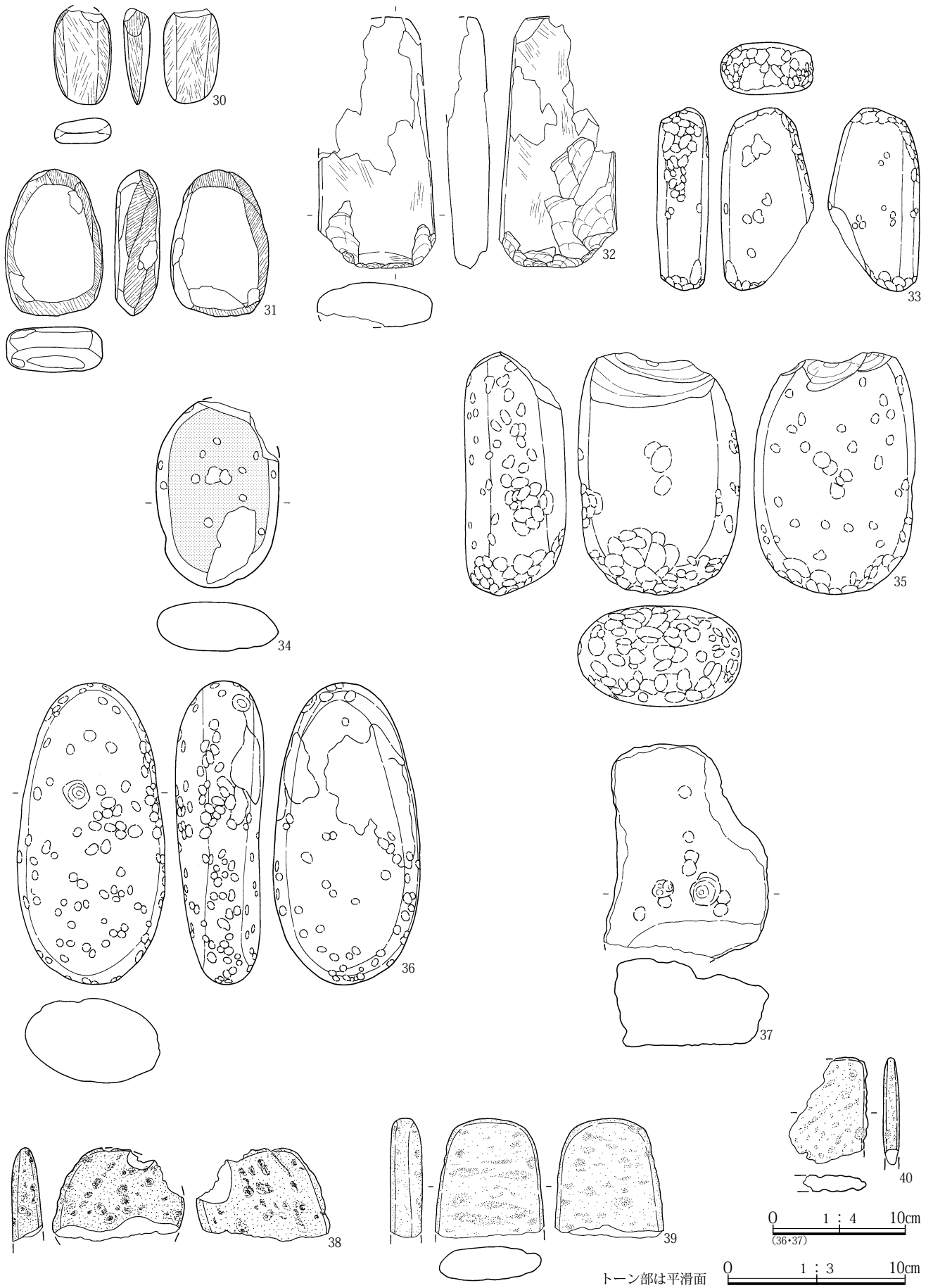
第155図 61区39号住居跡 (3)



第156図 61区39号住居跡出土遺物 (1)



第157图 61区39号住居跡出土遺物 (2)



第158図 61区39号住居跡出土遺物 (3)

いた。

重 複：北西に23号住と北東に41号住が重複する。

また、床面上には81坑が重なる。23号住との新旧は層位的な観察が果たせなかった。出土土器からは、おそらく本住居跡が新しいと考えたが、各出土土器に時間幅もあり、検討を要する。41号住とも土層観察を果たせなかったが、床面の切り合いが大きく41号住を壊す。出土土器からも本住居跡が新しい。81坑は本住居跡床下の確認である。

床 面：暗褐色土を地床とし、僅かな凹凸を見るもののほぼ平坦面を築く。硬化面は見られず、やや軟弱な床面が広がる。また、南壁を除く各壁より距離をやや於いて、敷石が「コ」字状に配される。敷石は大型の板石を中心に小型の板石を埋める例であるが、各辺が独立しており、間取りなどの影響が想起された。また、北側の敷石と北壁間は60cm程の距離を保つ。これも何らかの間取りあるいは北壁施設の影響が考えられる。

施 設：床面中央やや南寄り石囲い炉を見る。また南側に配石を伴う埋甕を設けている。柱穴は80坑を含めた12基のピットを調査した。

炉 跡：石囲い炉は北北西を主軸とした、不整形を平面形としている。平面規模は約60.0×58.0cmで、深さは24.0cmを測る。しっかりした掘り込みを示していた。炉石は北西辺と南東辺のみに平行した形状で板石状の大型角礫各1個が設けられていた。また南隅にも角礫1個が据えるように置かれていた。炉内には、深鉢体部下半(1)、と口縁部～体部上半(3)が正位で置かれていた。両個体及び炉石とも被熱痕跡が著しく認められた。

埋 甕：前述のように、5号埋甕とした別遺構を本住居跡帰属とした。主軸線上にもあり、また出土土器の時間差も大きな差が見られなかった。埋甕は住居跡ピットであるP5、P9に挟まれた箇所設けられていた。両ピットとも柱穴としてはやや規模が貧弱であり、主柱穴にはなり得ない。埋甕上層には2個の板石と円礫1個で蓋石状に土器を覆う。周辺には小型角礫も、埋甕を意識した状態で置かれていた。土器は大型深鉢体部下半(4)が正位で埋置されていた。また、磨製石斧(33)や磨石(34)が周辺角礫と共に出土している。

柱 穴：柱穴として12基のピットを位置付けたが、配置、規模が柱穴として妥当性を帯びるピットは、P1～P3、P6

～P8、P10、P11及び80坑が挙げられる。P6以外は壁柱穴としての性格が充てられよう。また、土坑を柱穴として変更した80坑は主軸線上に乗る奥壁柱穴にも相当すると考えている。また前述の埋甕に伴うP5とP9は出入口施設の一部を補強するピットと考えた。

遺 物：2個体の炉内土器(1・3)、埋甕(4)は居住に伴う所産である。いずれも、加曽利EⅢ式新段階の所産と判断した。出土遺物は平面的にも全面にわたり出土が広がり、埋土中より床面まで満遍なく出土している。その中で2は床面東側でまとまった状態で床直から、21の三角柱形土製品は床面北東側の床直上から出土した。石器では、磨製石斧(30～32)や大型石匙(26)、軽石製品(38～40)の出土があり多様性を見せる。

所 見：敷石住居跡である。出入口部の張出を見出せなかったが、埋甕を設け、住居平面形も洋梨型を呈することから、出入口部の強調と判断して良い。敷石は縁辺に数単位に分かれて敷かれるが、これも炉跡周辺の敷石とみなしたい。時期は出土土器から中期後葉と考えた。

#### 61区41号住居跡(第159図 PL.13・88)

位 置：調査区中央東寄りの61区V・W-7グリッドに位置する。西に23号住、東に31号住に挟まれた箇所である。南に39号住も重複する。また、自然流路である1号流路も重なる。周辺は南側への緩斜面地形にあるが、ほぼ平坦面での検出となった。遺構密集地点の中央に位置するといえよう。

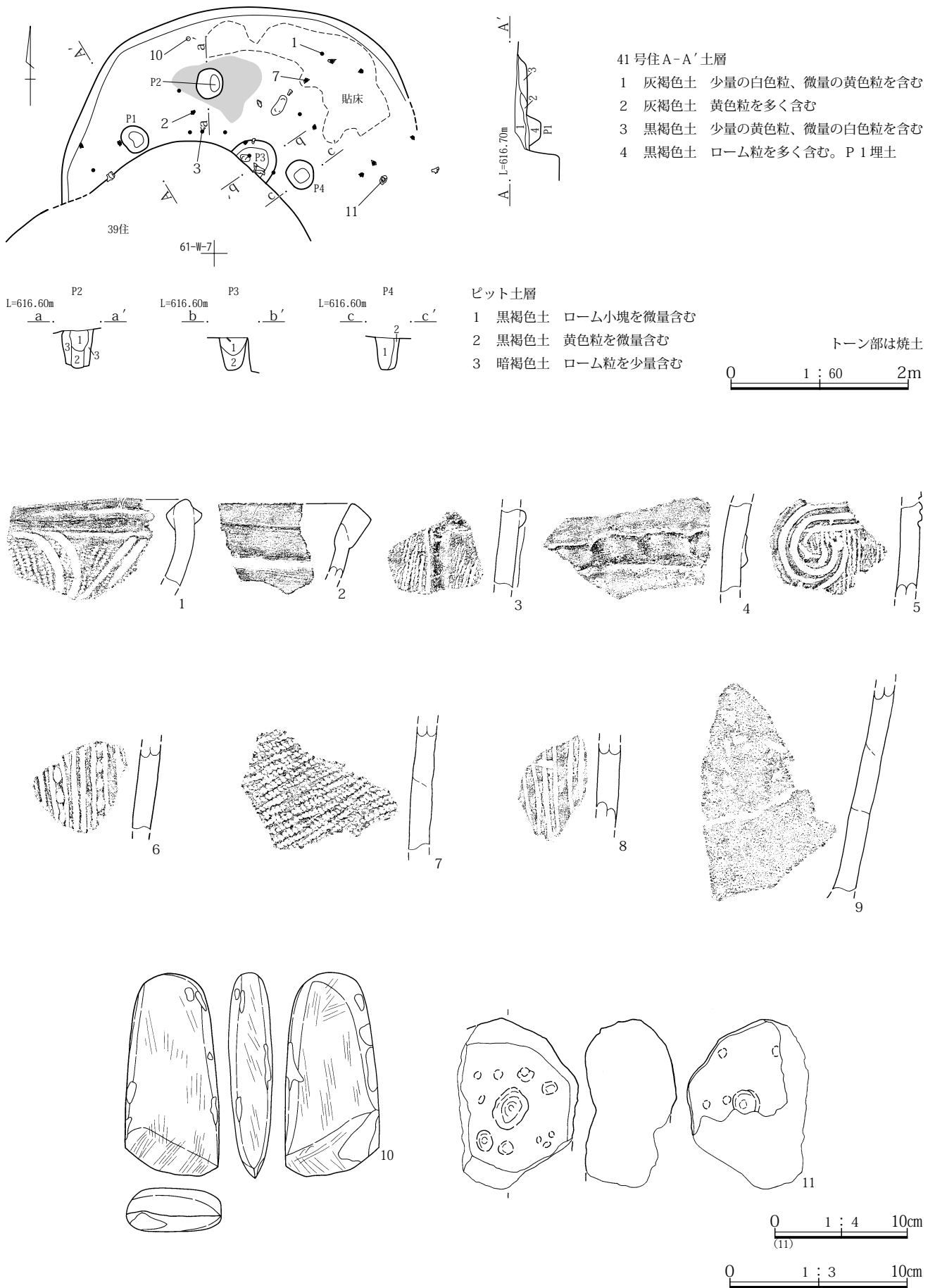
経 過：Ⅲ層に相当する黒褐色土で平面形の確認を行った。39号住調査中に、北側に平面形が延長した結果、床面と柱穴が確認されたため、住居跡として調査を進めた経緯がある。

規 模：39号住に大きく切られるため、全容の把握は控えたい。おそらく、径400cm程の円形を平面形とする小型の住居跡と思われる。深さも15.0cm程で、浅く遺存状態は良くない。

重 複：39号住に切られるが、23号住との新旧関係は不明である。出土土器からは23号住より古い様相を示している。

床 面：黒褐色土を地床とするが、一部北壁沿いに黄褐色ロームによる貼り床がなされる。ローム塊を主体とした薄い貼り床である。硬化面は見られなかった。また、

第3章 発見された遺構と遺物



第159図 61区41号住居跡及び出土遺物

P2周辺に焼土を見たが、こちらも薄い堆積で炉や施設としての可能性は低い。

施設：炉、壁周溝、埋甕などは検出できなかった。柱穴として4基のピットを得た。規模は相当するが、配置としては全体感が不明のため確定できない。可能性としてP1～P4を柱穴として位置付けておく。

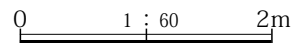
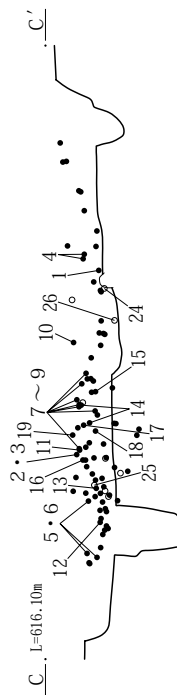
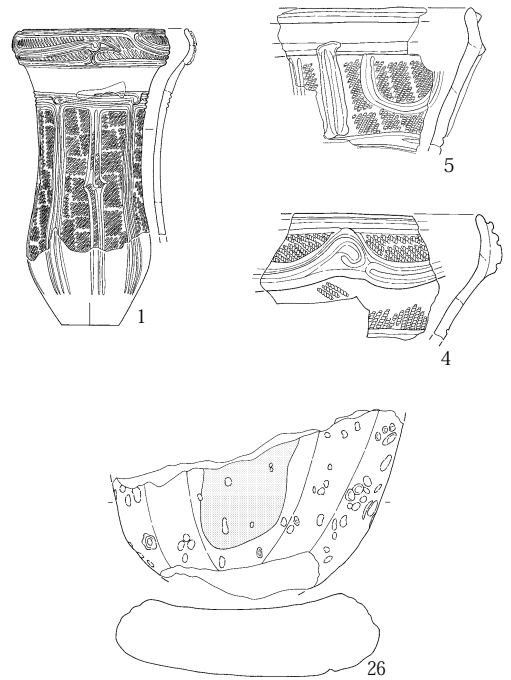
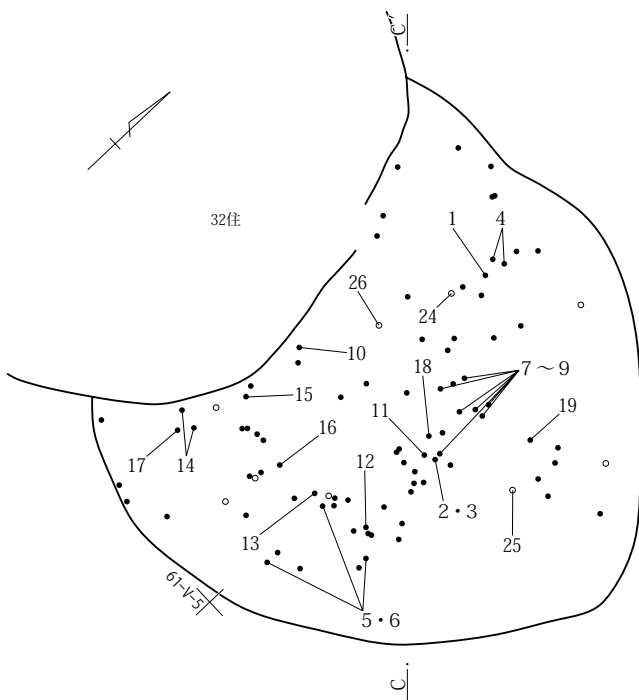
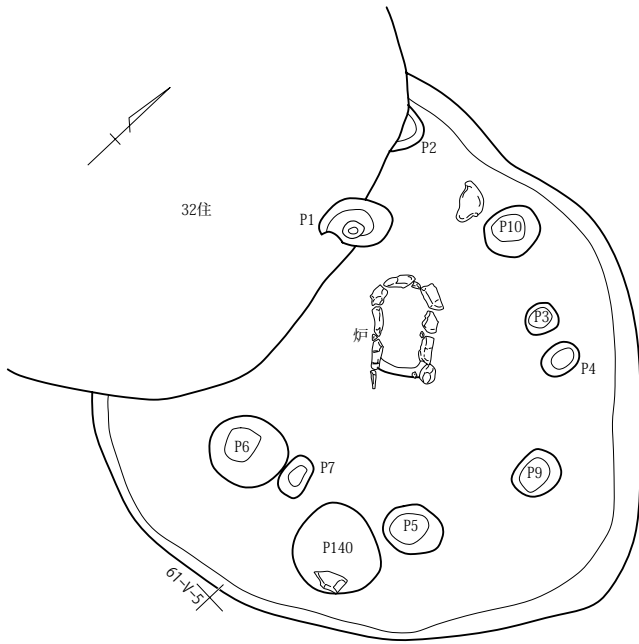
遺物：出土量は少なく平面的な偏りも無く埋土中の出土である。11点を図示したが居住に伴う例では無い。しかし、4の加曾利EIV式以外は比較的時期が近接してい

ることから、廃棄・流入の同時性が想起されよう。多くは加曾利EⅡ式に併行する。

所見：39号住北側で調査された小規模な住居跡である。炉や埋甕など主要な施設を持たないため、詳細は控える。時期は出土土器から中期後葉と判断した。

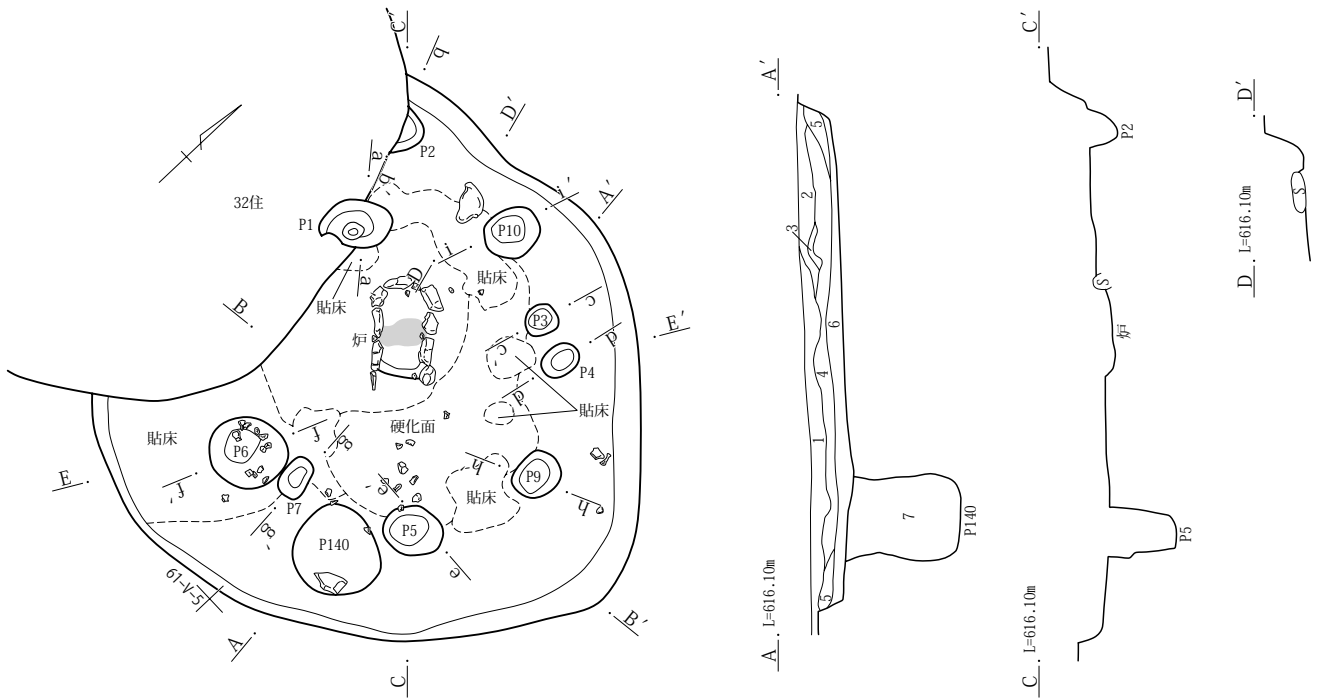
61区42号住居跡 (第160～164図 PL.11・88・89)

位置：調査区中央やや南東側寄りの61区U・V-5グリッドに位置する。西側の32号住と重複して調査され、その



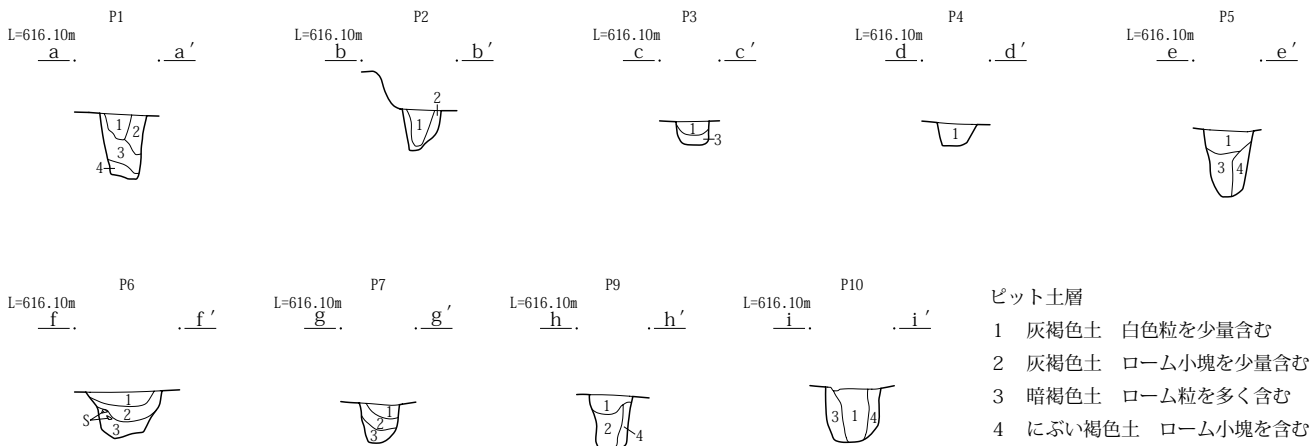
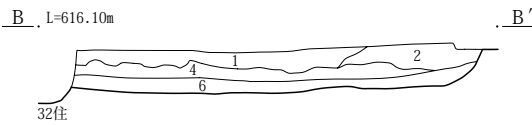
第160図 61区42号住居跡 (1)



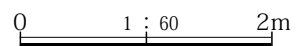


42号住土層

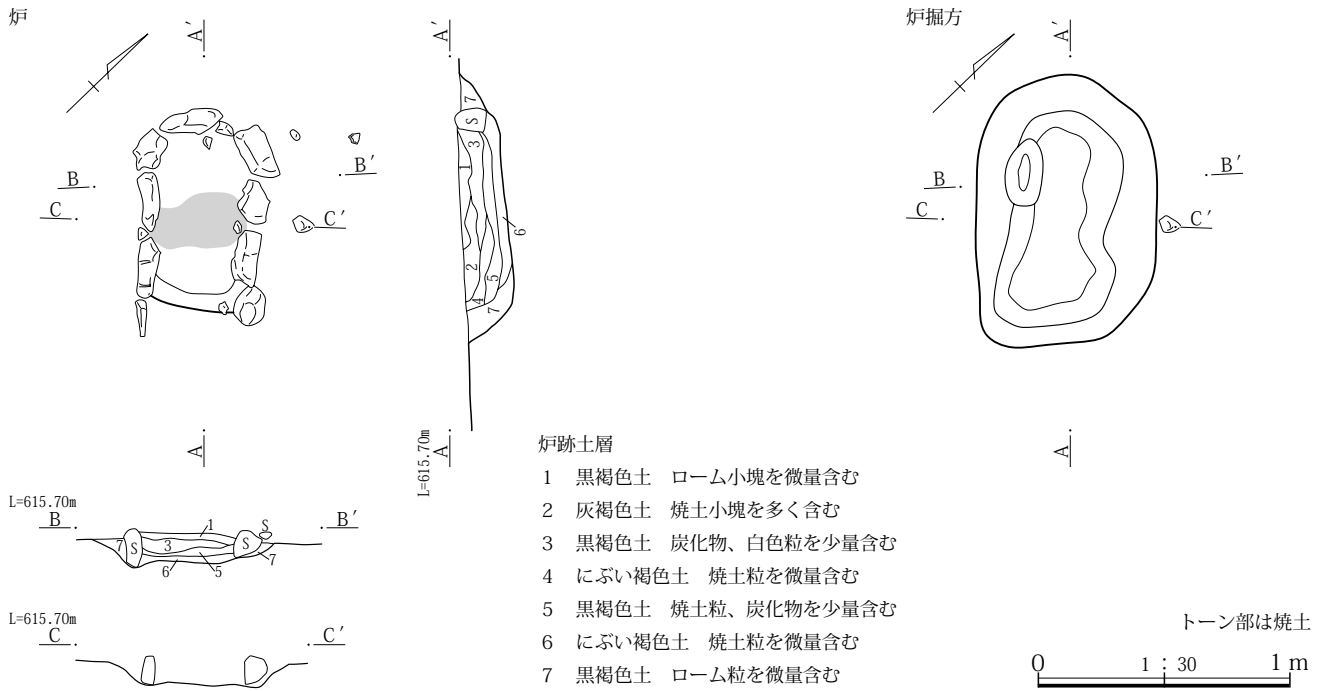
- 1 灰褐色土 黄色粒、白色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 灰褐色土 焼土塊を多く含む
- 4 灰褐色土 炭化物、ローム小塊を少量含む
- 5 暗褐色土 白色粒を極微量含む
- 6 暗褐色土 黄色粒、ローム粒を多く含む
- 7 黒褐色土 P140埋土



トーン部は焼土



第161図 61区42号住居跡(2)



第162図 61区42号住居跡 (3)

他に27号住が先行調査されている。

周辺は緩やかな南側への緩斜面地形でほぼ平坦面での調査だった。調査区中央の住居跡密集地点の中での検出である。

経過：27号住調査後の暗褐色土中で確認された。32号住検出作業と同時に調査を進め、32号住東側で新たに炉跡、床面、柱穴の検出に至った。西側を32号住に切られるものの、その他の壁、床面は良好に確認された。

規模：北西に主軸を向け、平面規模は約 $80.0 \times 410.0$ cmを測り、不整形を呈する。北東側壁にやや突出する傾向が見られるが、32号住重複のため全容把握はできなかった。深さも約33.0cmで比較的良好な遺存度を誇る。暗褐色土中の検出であるが、壁の立ち上がりもしっかりしていた。

重複：32号住との重複が顕著で、本住居跡が切られる新旧関係にある。出土土器からも本住居跡が古い。また西に接する32号住や27号住との新旧は、両住居跡調査後の本住居跡検出という層位を踏まえた作業工程からは、やはり本住居跡が古い様相を示すといえよう。

床面：暗褐色土を地床とするが、炉周辺に環状にローム塊が連なり薄い貼り床を構成していた。僅かな凹凸が見られたが、ほぼ平坦面を築く。硬化面は炉周辺の貼り床部を中心に認められた。

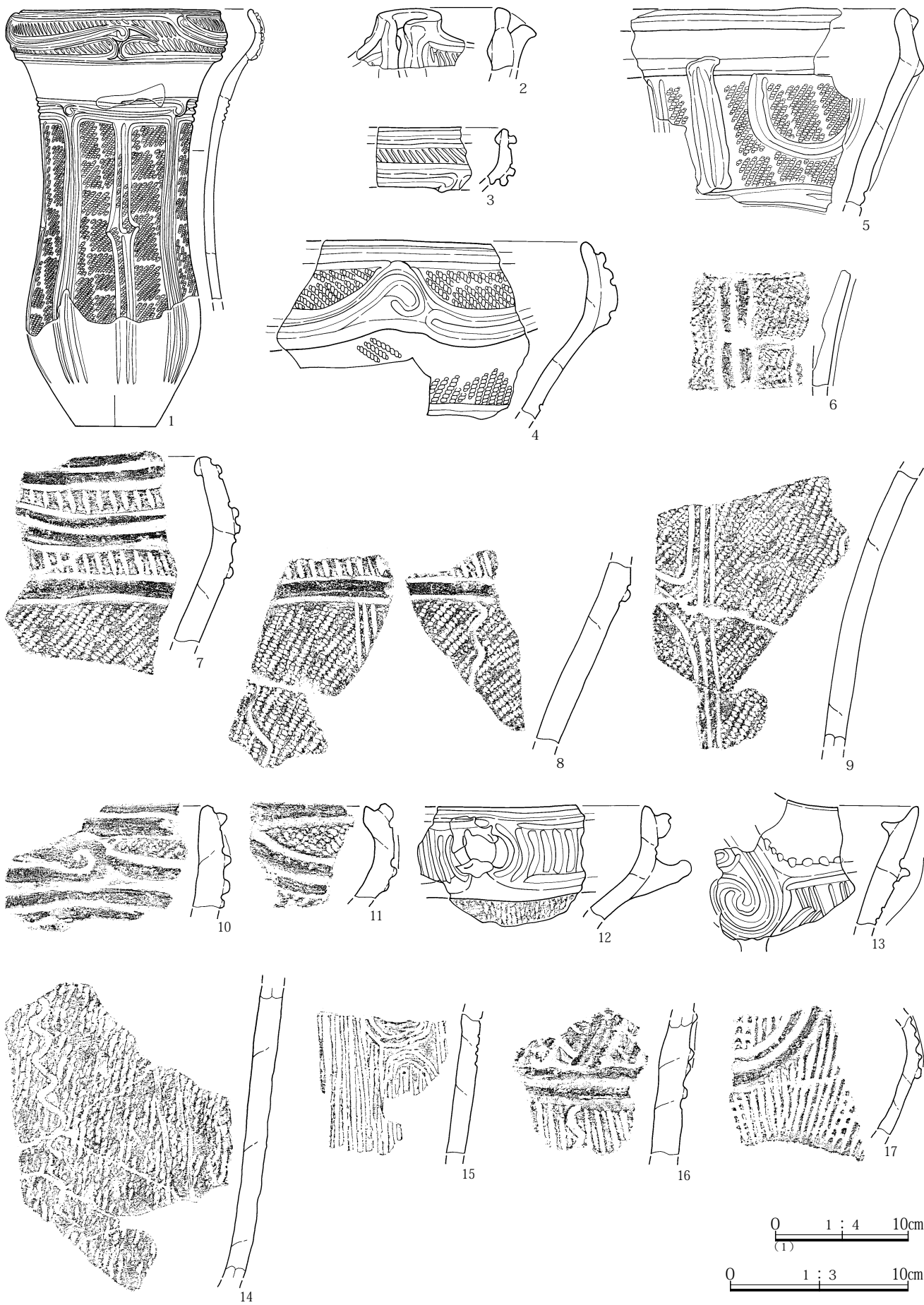
施設：壁周溝や埋甕は設けず、床面中央に石囲い炉を

見る。柱穴として9基のピットを確認した。

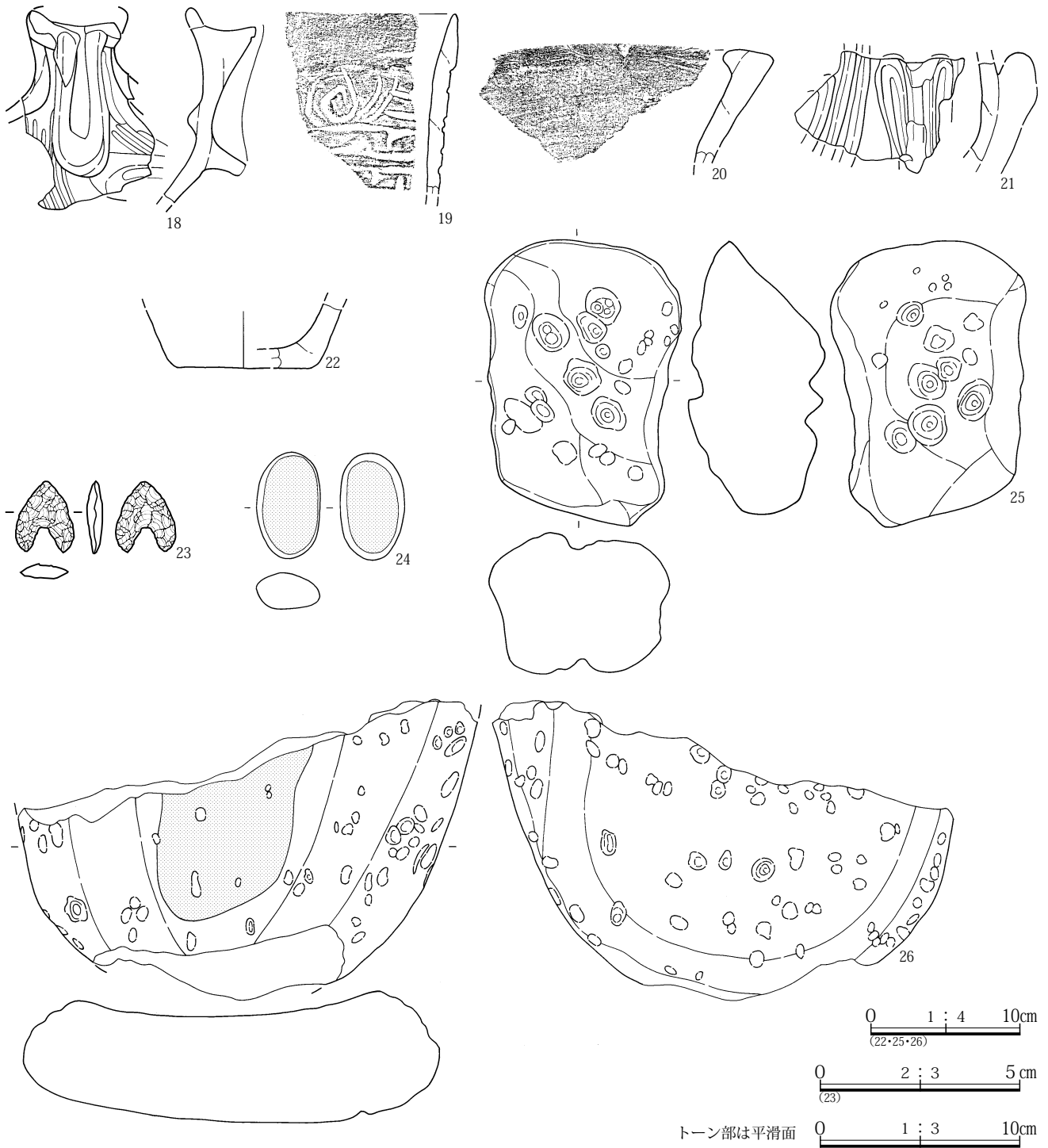
炉跡：床面中央やや北西寄りに、主軸を北西に向けて設けられる。平面規模は約 $80.0 \times 56.0$ cmで、縦長の長方形を呈す。短辺である南西辺を除く三辺に石囲いがなされ、概ね10石を持って囲われていた。炉石は大型円礫を主体にし、角礫を一部に混在させる構成である。また、石皿片(26)が北西辺中位に転用されていた。炉石は南東辺には設けられず開放された形態を示すが、南東隅の炉石が円礫で石材差及び色調差が見られ独立した印象を受けた。埋土は黒褐色土や灰褐色土を中心に焼土塊も含まれていた。

柱穴：9基のピットを検出したが、柱穴として良好な例としては、P1、P2、P5~P7、P9、P10が挙げられるが、32号住重複部に対応するピットが予想されたが、抽出できなかった。その中でP2とP5は住居主軸線上に乗る柱穴として位置付けられよう。

遺物：埋甕、炉内土器などを見ないため、居住に伴う例は無い。僅かに炉石に供された石皿片(26)など出土遺物の分布は広く、全面から見られ、埋土中から床直まで満遍なく出土している。出土土器の時間差も小さく、ほぼ短時間の一括廃棄、流入と捉えられよう。その中で、大木8b式の長胴型の深鉢(1)や加曾利I式深鉢口縁部破片(4)が北壁際で床直~床直上にまとまって出土している。



第163図 61区42号住居跡出土遺物 (1)



第164図 61区42号住居跡出土遺物 (2)

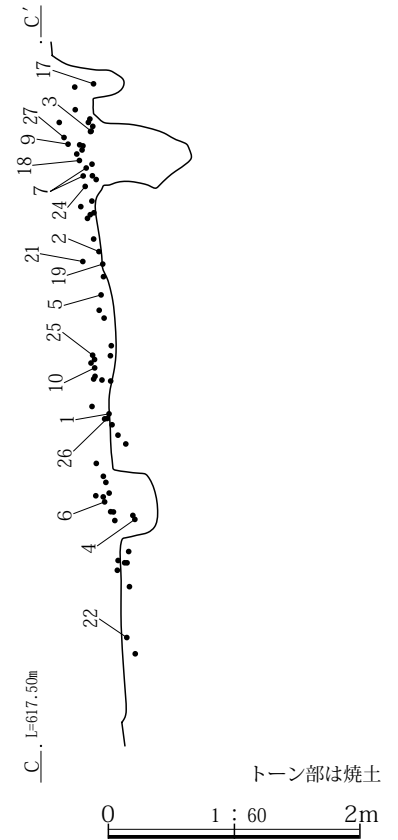
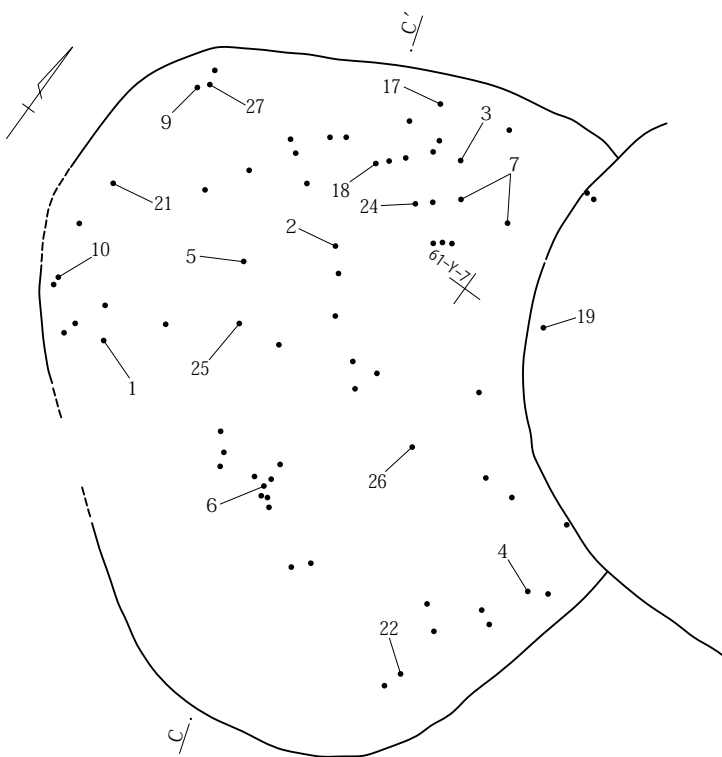
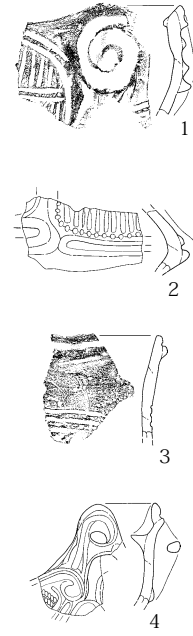
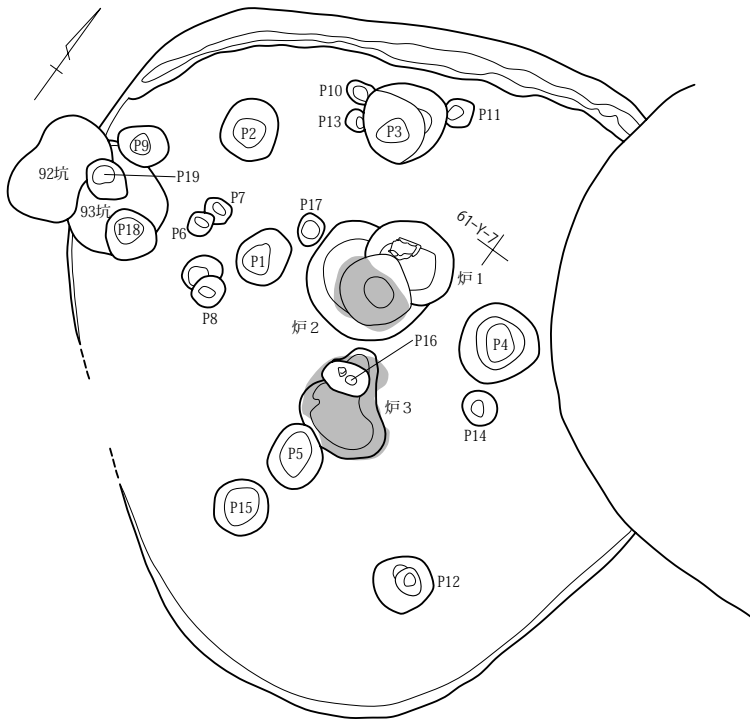
所見：住居跡密集地点の中で古手の住居跡である。縦長長方形の石囲い炉を設け、おそらく六角形の柱穴配置が予想される。出土土器の多くは加曾利Ⅰ式土器に併行することから、当該時期の所産と考えられよう。

61区43号住居跡 (第165～169図 PL.13・89・90)

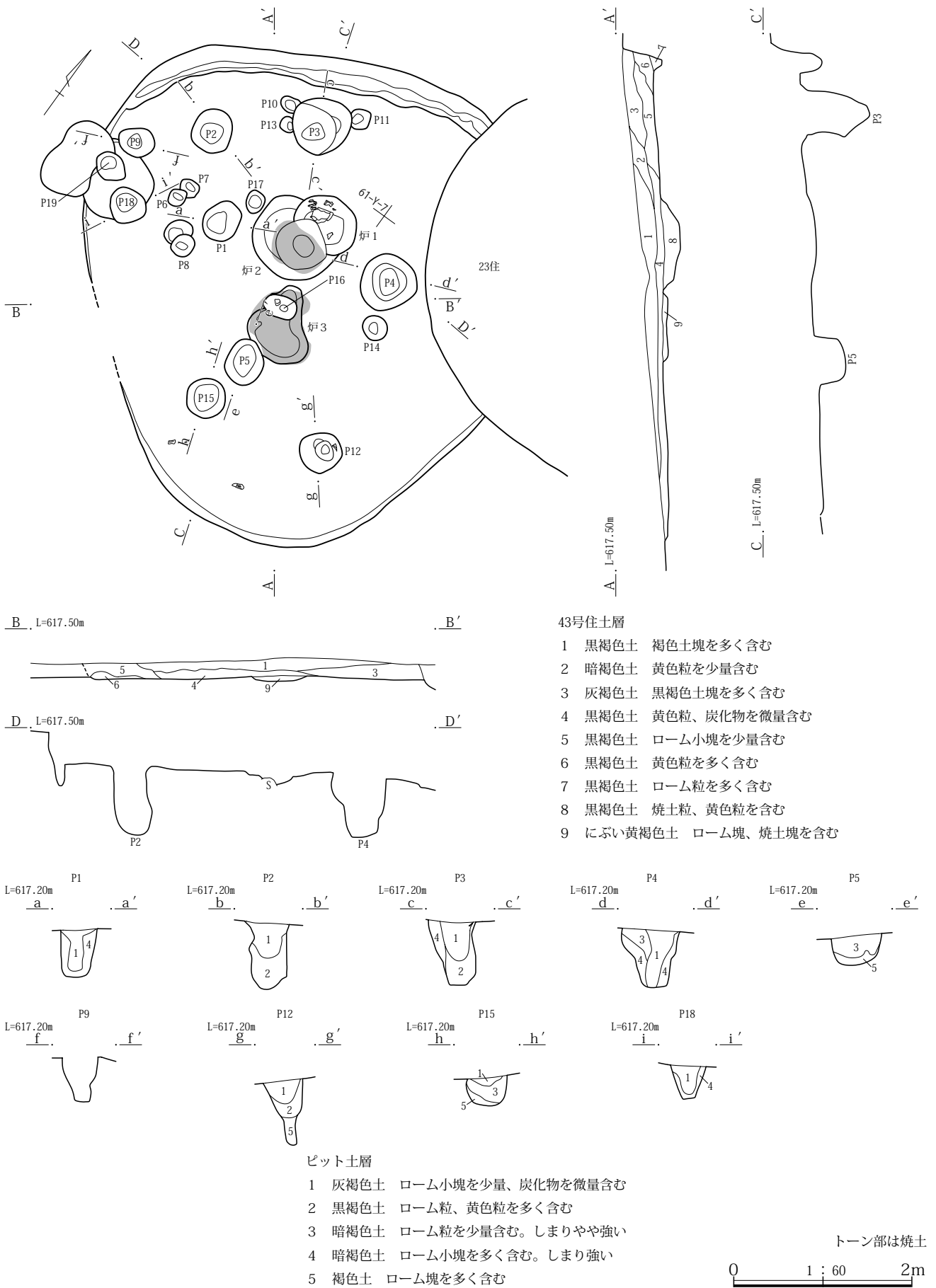
位置：調査区中央の住居跡密集地点内にある。61区と62区の境で61区X・Y-6・7グリッドに位置する。周辺は

南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の影響もありほぼ平坦地形での調査となった。周辺は東に23号住、南に46号住居跡や弥生中期に比定される40号住居跡、西に62区4号住居跡や18号住居跡が重複する。また、縄文時代後期に比定される2号掘立柱建物跡も重なる状況を示す。

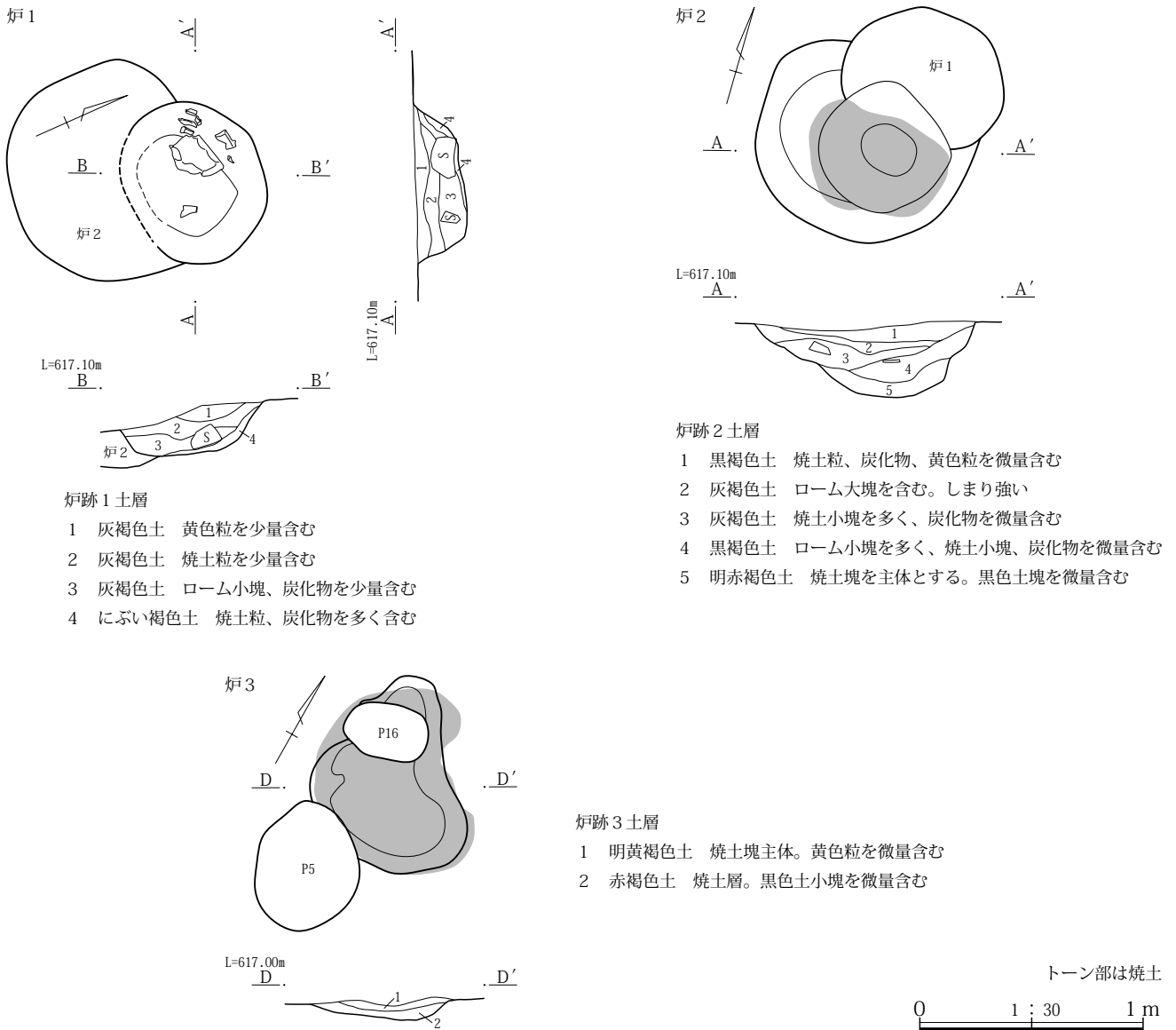
経過：ローム漸移層である暗褐色土で確認した。壁は北側のみが確認され、他は浅い掘り込みに止まるため、



第165図 61区43号住居跡 (1)



第166図 61区43号住居跡 (2)



第167図 61区43号住居跡 (3)

遺構平面形確認中に、地床炉としての焼土が露出したため住居跡として調査した。

規模：平面形は南側が突出する洋梨型の不整円形を呈する。平面規模は約553.0×(393.0)cmで、深さは約35.0cmを測るが、前述のように北壁以外の遺存度は良くなく、多くの床面は、確認面から5cm前後の深さで確認されている。

重複：東に重なる23号住に切られる新旧関係を示す。46号住は本住居跡調査後に検出された住居跡である。また、62区4号住や18号住とは重複部分の詳細な土層観察が果たせず不明である。なお、南に重なる40号住居跡は弥生時代の所産である。

床面：北側が黄褐色硬質ローム、南側が暗褐色土を基調とした地床である。南側へ僅かに傾斜するものの、ほ

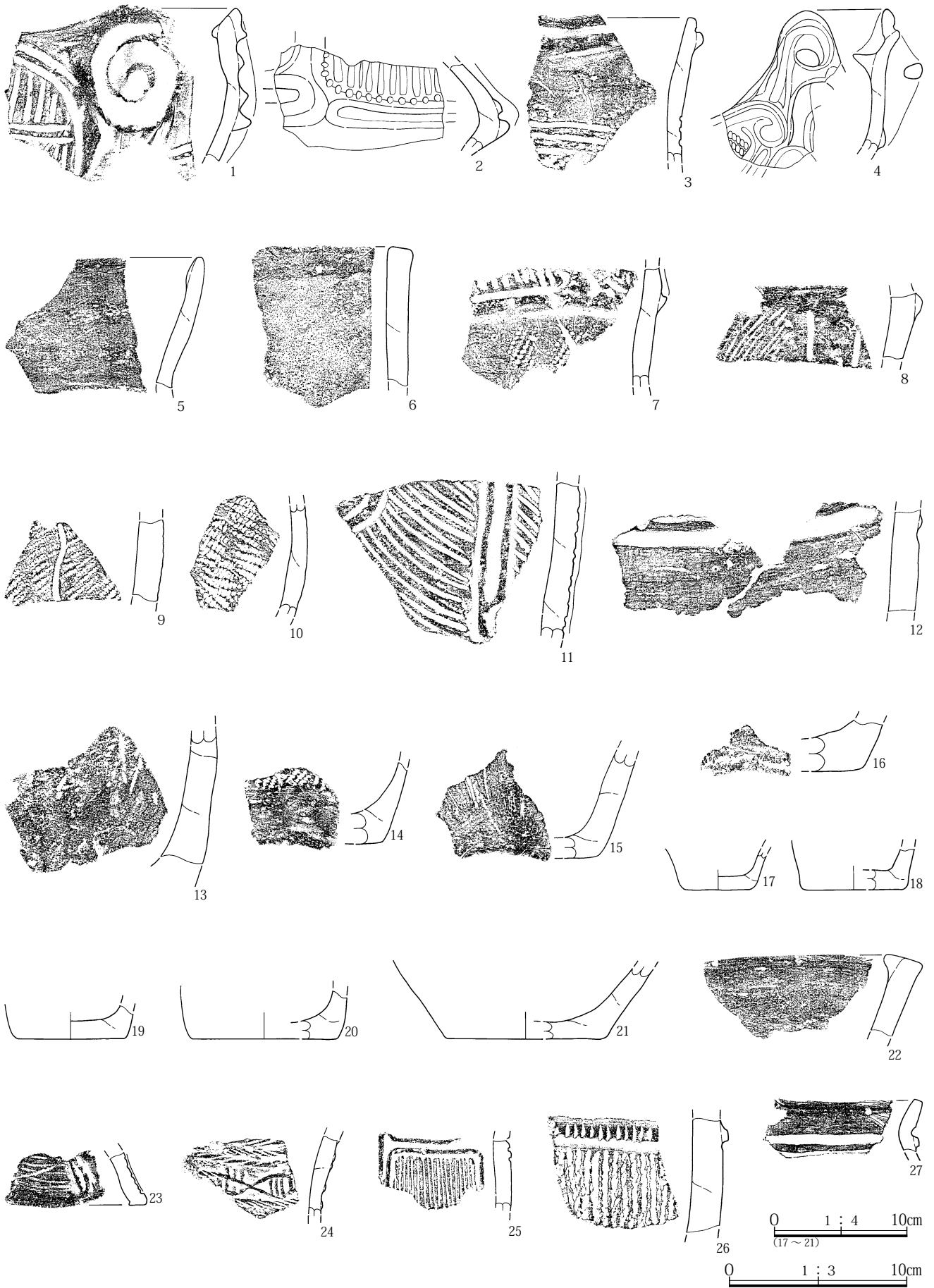
ぼ平坦面を築く。硬化面は顕著では無く全体に軟弱な床面である。

施設：床面中央部周辺に地床炉を3基確認している。壁周溝は北壁際に限られる。柱穴として18基のピットを調査した。

炉跡：床面上で3基の地床炉を調査した。いずれも住居跡主軸線上に乗る例である。

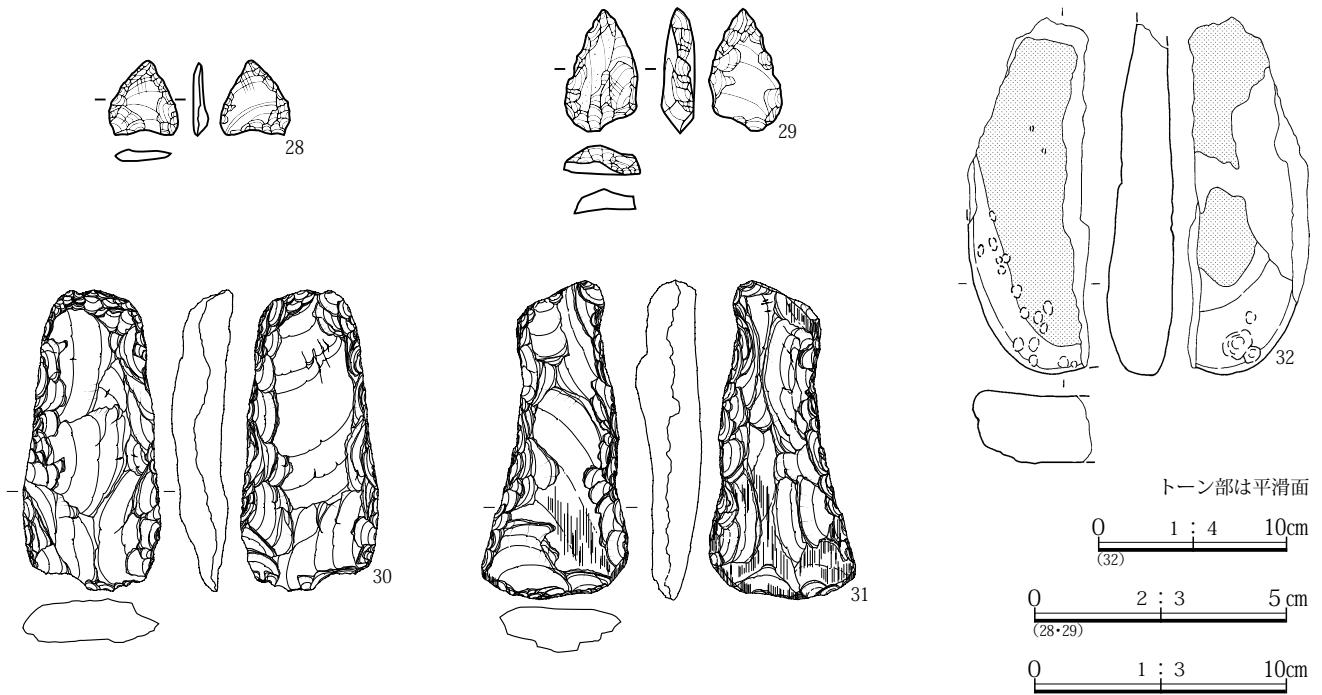
炉1はやや北寄りに炉2と重複した状態で検出された。長軸を北西に向けた不整楕円状を呈し、規模は約74.0×(62.0)cmを測る小型の炉跡である。深さは約25.0cmで壁の立ち上がりも良好だった。焼土粒を少量含む灰褐色土を埋土とする。

炉2は炉1に切られる新旧関係を示す。平面規模は約94.0×(80.0)cmを測り不整円形を呈す。深さは34.0cm



第168图 61区43号住居跡出土遺物 (1)





第169図 61区43号住居跡出土遺物（2）

で良好で皿状の断面形を示す。焼土の堆積が顕著で、焼土塊を含む灰褐色土を中層に見る。

炉3は床面中央やや南にある。炉2南に近接する。不整形の範囲で焼土が散布していた。規模は約86.0×74.0×10.0cmで堆積は極めて浅いが、底面は赤褐色を呈し基盤も焼土化していた。

壁周溝：北側壁際に顕著に設けられる。幅約30cm、深さ約20cmで、壁と一体化し直立気味に立ち上がる。検出は北壁際に限られたが、その他は23号住や46号住との重複などにより明瞭に確認できなかった。なお、拡張・移動痕跡は見られなかった。

柱 穴：検出された18基のピットのうち、柱穴として深さの妥当な例として図示した。配置上はP2～P4、P9、P12、P15、P18が良好な位置に設けられる。P1は柱痕が観察され柱穴として好例であるが、配置上はやや不適當である。

遺 物：平面的に偏りも無く住居跡全体から出土している。また埋土中から床直まで満遍なく見られ、居住に伴う出土状態を示した遺物は無かった。出土土器の多くは「郷土式」（1～3・5・6・11・13）、加曾利EⅡ式は7～10・12・14・15が該当しよう。また、「屋代類型」（4）も見られる。その他は、諸磯b式（18・19）や加曾利EⅠ式（11）、後期の破片（8）も見られるが流入であろう。

所 見：平面形が洋梨型を呈することから、中期末葉～

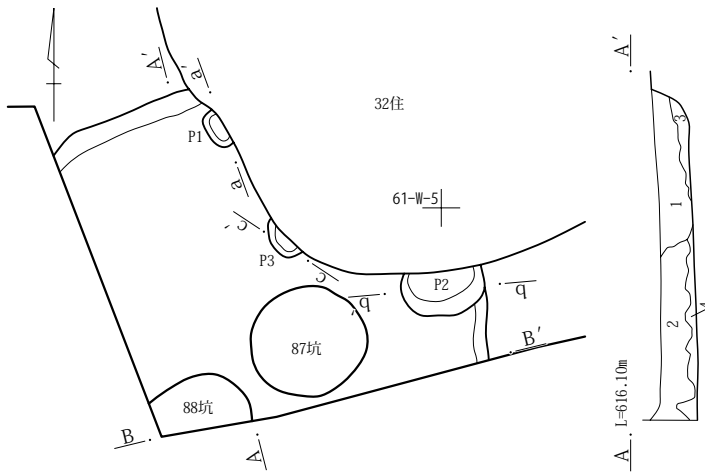
後期初頭の住居跡の可能性を見たが、炉跡の特徴や出土遺物から該当する時期の特徴は見出せなかった。北側壁は平面形として確定的であるが、その他の遺存度は良くなく浅いことから平面形は再検討する必要がある。さらに、出土土器から帰属する時期を中期後葉とするが、重複する23号住や46号住出土土器との整合性も矛盾がある。これも検討を要する。

#### 61区44号住居跡（第170図 PL.13・90）

位 置：調査区中央やや南東側寄りの南側壁際に27号住と32号住南西側で重複して調査された住居跡である。61区V-4、W-4・5グリッドに位置する。周辺は緩やかな南側への緩斜面地形でほぼ平坦面での調査だった。その他に北に47号住が近接し、南側と西側は未調査区となり調査区域外に延長する。

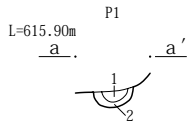
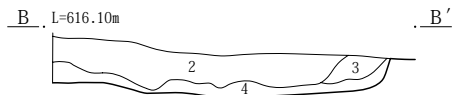
経 過：32号住調査後南西側に遺物の広がりを見ることから、ローム漸移層上位の黒褐色土中で平面形を確認した。炉跡、壁周溝などを見なかったが、北側と東側の一部に壁の立ち上がりを確認し、平坦な床面及びピットを検出したため、住居跡とした。

規 模：調査区域外に多くを延ばし、1/4に満たない一部分の調査に止まったため、平面形や規模は不明である。深さは約27.0cmを測るが、壁の立ち上がりはやや弱い印象を得る。



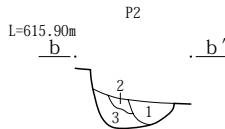
44号住居土層

- 1 黒褐色土 少量の黄色粒、微量の炭化物を含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土 褐色土大塊を少量含む



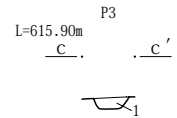
P 1 土層

- 1 灰褐色土 白色粒を少量含む
- 2 灰褐色土 ローム小塊を少量含む



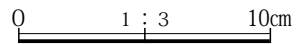
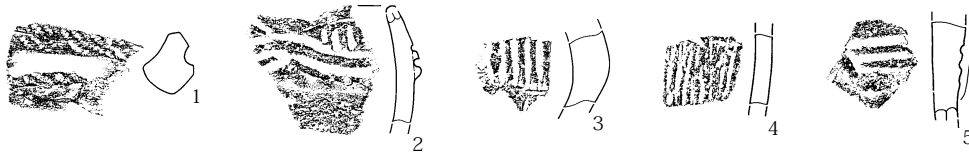
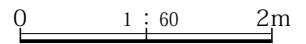
P 2 土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 2 灰褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム小を微量、黄色粒を少量含む

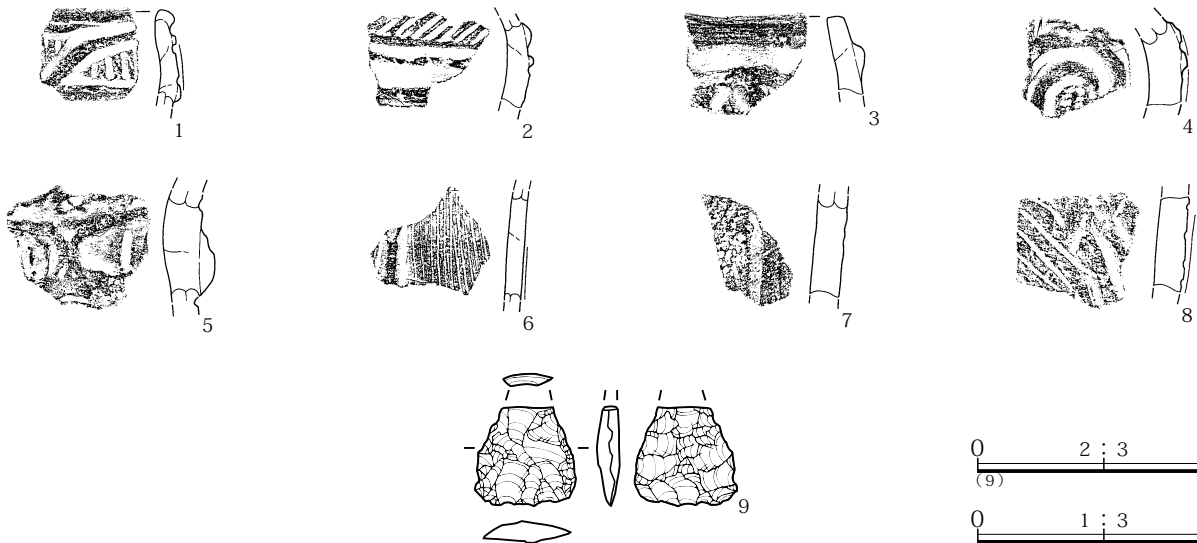


P 3 土層

- 1 灰褐色土 黄色粒を少量含む



第170図 61区44号住居跡及び出土遺物



第171図 61区45号住居跡出土遺物

重複：32号住居跡と重複する。調査手順からは32号住居に切られる新旧だが、土層としての保証は得られておらず、出土遺物も希薄なことから確定的ではない。また、87坑、88坑が床面上で重複するが、これも新旧は不明である。

床面：ローム漸移層下位の褐色土を地床とする。比較的凹凸を見るが全体的に平坦面を築く。硬化面は見られなかった。

施設：炉跡、壁周溝など主要な施設は検出されていない。柱穴として3基のピットを調査した。いずれも32号住居壁との重複部分断面にかかって検出された例である。配置、規模とも柱穴とは確定できず、可能性を示唆しておきたい。

遺物：埋土中より数点の土器小破片が出土しており、5点を図示した。加曾利EⅡ式（4）、曾利2式（3・5）、「郷土式」（2）に相当するが、一括性は弱い。

所見：全体を調査区域外へ大きく延長するため、詳細は不明である。時期はおそらく中期後葉と考えられる。

#### 61区45号住居跡（第171図 PL.13・90）

概要：調査区中央の43号住南西部の土層観察において、存在が窺われた住居跡である。ローム塊を含む灰褐色土を埋土とするが、床面範囲や炉跡、柱穴などを不明とする。埋土中の出土とされる遺物のみを掲載する。5は中期中葉の可能性があるが、他は中期後葉の所産である。

#### 61区46号住居跡（第172・173図 PL.14・90・91）

位置：調査区中央で前にも述べた43号住などと重複した状態で調査された。61区と62区の境であり、61区X・Y-6グリッドに位置する。周辺は南側への緩やかな斜面地形にあるが、重複住居跡の影響もありほぼ平坦地形での調査となった。

経過：ローム漸移層下位の暗褐色土で平面形の確認を行ったが、43号住などの重複もあり、詳細な平面形の把握に至らず、段差の少ない北壁、及び炉跡、埋甕が得られたため、住居跡として調査した。

規模：前述のように、平面形、深さは43号住との重複のため不明としたい。遺存度も不良である。

重複：43号住調査後に本住居跡の検出に至った経緯から、本住居跡が古いと位置付けたいが、問題も残る。そ

の他では62区2号住も西側で重複するが、新旧は不明である。

床面：石囲い炉を検出したため、周辺の床面レベルを踏襲して広がりを追った。その結果、暗褐色土を地床とし、南側への僅かな傾斜を見るが、ほぼ平坦面を築く床面を得た。硬化面としての広がりは見ず、全体に軟弱な床面である。

施設：石囲い炉、埋甕3基を得た。壁周溝や柱穴は確認できなかった。

炉跡：長軸方位を東北東に向けた不整楕円状の石囲い炉である。平面規模は約110.0×90.0cm、深さは約30cmを測る。掘り込みも良好でしっかりした壁を呈す。北辺と南辺に平行して、大型の板石状角礫を炉石として並べていた。東辺と西辺には炉石を設けていない。炉内には、北片際底面に口頸部～深鉢体部下半（4）が正位に据えられていた。おそらく、上下とも意図的な欠損と考える。炉内土器上半部及び炉石には被熱痕跡が見られた。埋土は黒褐色土を主体とし、焼土塊を含む褐色土が堆積する。埋甕：3基を調査した。埋甕1と埋甕3は近接するが、埋甕2は北に120cmほど距離を置く。

埋甕1は炉跡南約270cmにある。大型の深鉢（1）が正位の状態で径50cm程の円形土坑を掘り込みとして、埋置されていた。おそらく意図的な欠損を伴うと思われるが、顕著な痕跡は見られなかった。

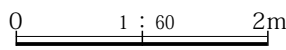
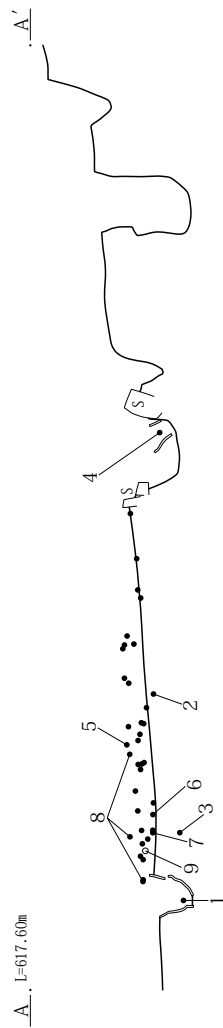
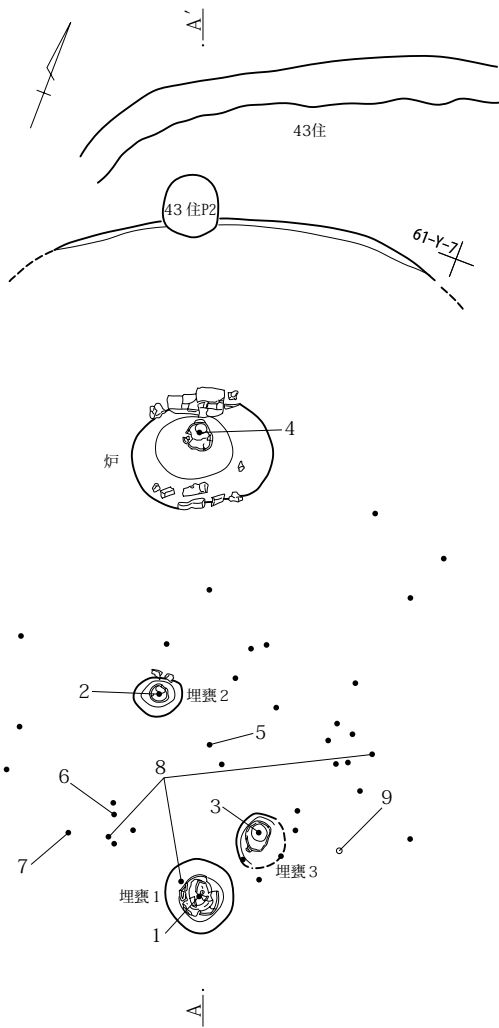
埋甕2は炉跡南約130cmにある。体部下半を逸した深鉢（2）が正位に埋置されていた。掘り込みは径40cm程の円形土坑で、北側壁上位に小型の角礫2個を置くが性格は不明である。

埋甕3は埋甕1の北に近接する。掘り込みの東半を調査に伴うサブトレンチで逸したため、詳細は不明だが、おそらく径40cm前後の不整円形を呈する掘り込みで、口縁部と体部下半を意図的に欠損した深鉢（3）を正位に埋置していた。

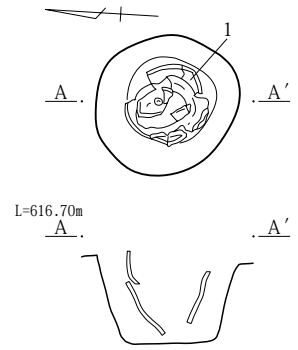
遺物：上記3基の埋甕と炉内土器の他、中期後葉の土器片4点と打製石斧1点を図示した。土器片はいずれも加曾利EⅢ式（5・8）、「郷土式」（6・7）である。

所見：炉跡が検出されているため、住居跡として位置付けたい。しかしながら、炉内土器と埋甕3基が必ずしも伴う例とは把握できず、問題が残る。炉内土器に近い時期の埋甕としたら埋甕3であり、加曾利EⅢ式古段階

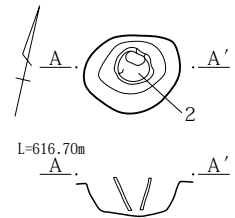
第3節 住居跡 (61区)



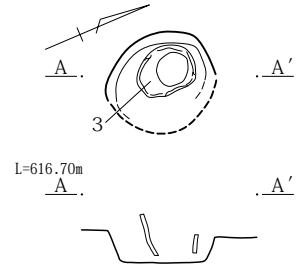
埋喪 1



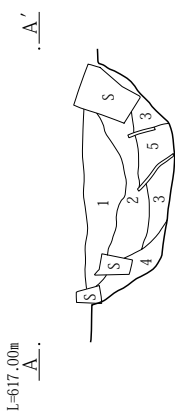
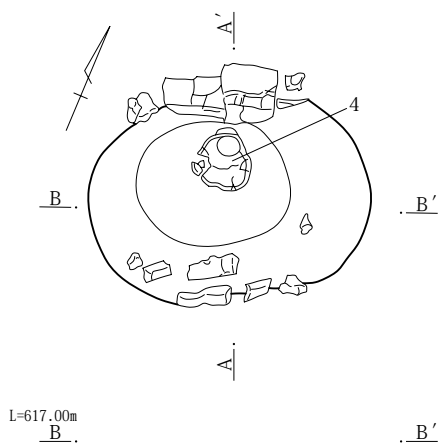
埋喪 2



埋喪 3

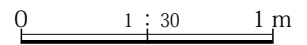
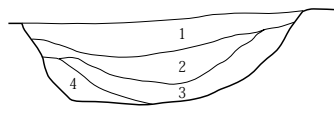


炉

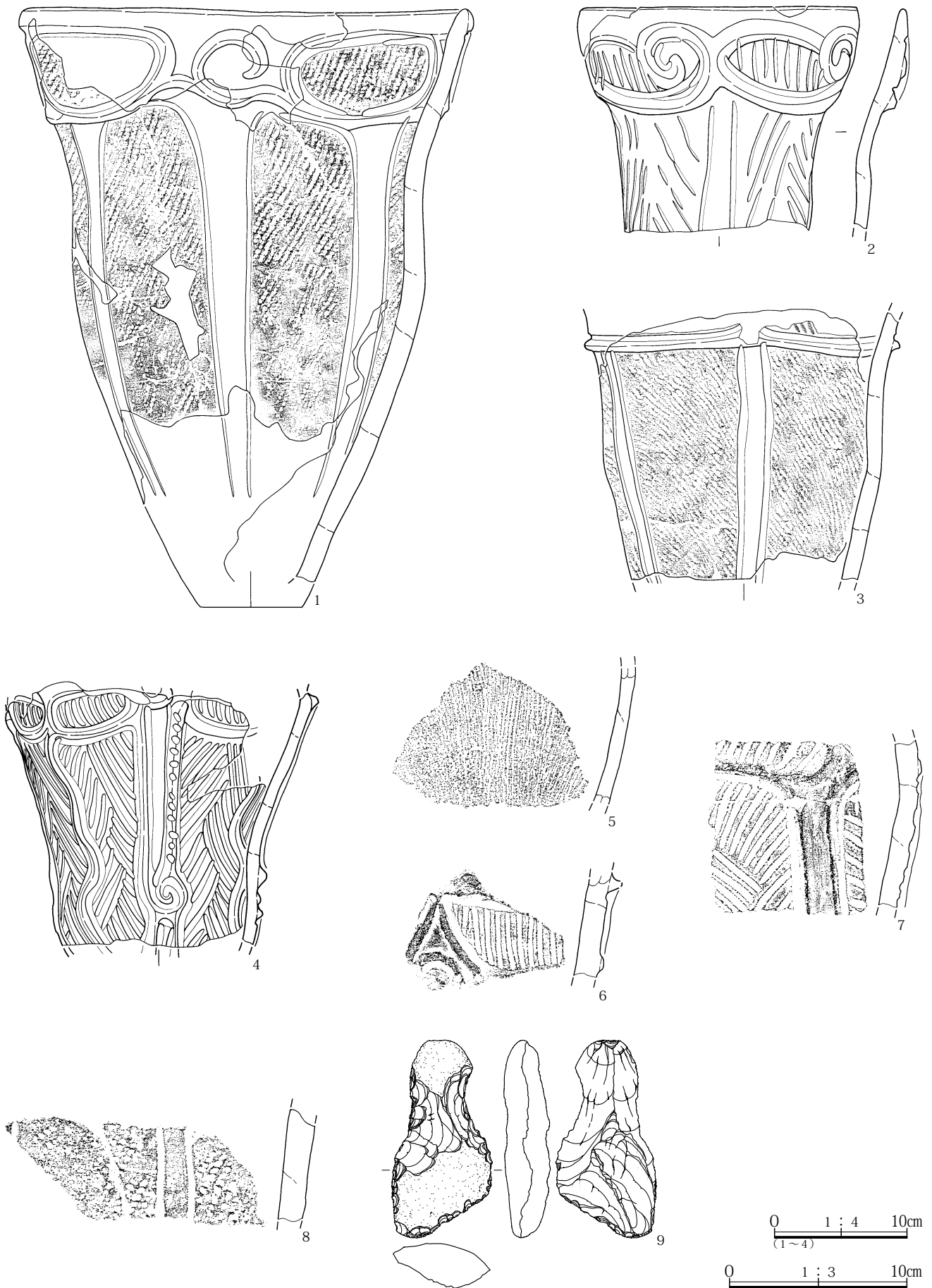


炉跡土層

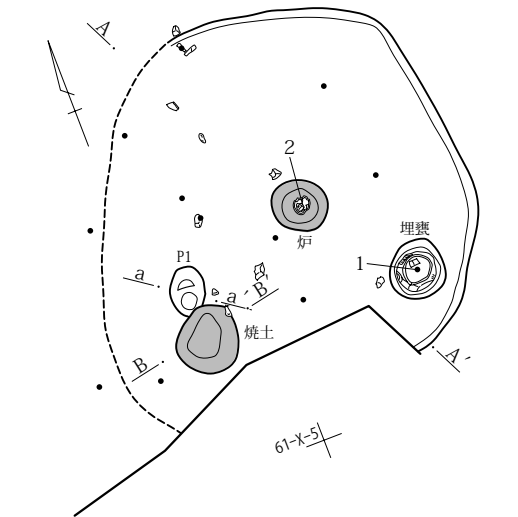
- 1 黒褐色土 白色粒を少量、黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 焼土塊を少量含む
- 3 褐色土 焼土塊を多く含む
- 4 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 5 黒褐色土 炉内土器埋土。黄色粒を少量含む



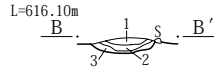
第172図 61区46号住居跡



第173図 61区46号住居跡出土遺物

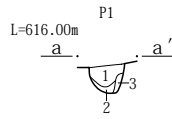


焼土



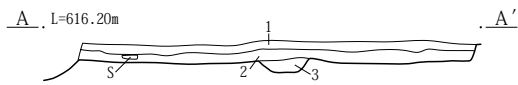
焼土土層

- 1 にぶい黄褐色土 焼土塊を多く含む
- 2 暗褐色土 焼土小塊を含む
- 3 黒褐色土 焼土粒を少量含む



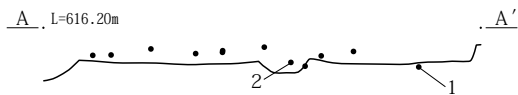
ピット土層

- 1 暗褐色土 ローム塊混じりの粘性土、しまり強い
- 2 黒褐色土 混入物少ない粘性土
- 3 暗黄褐色土 ローム土主体のきわめてしまり強い土

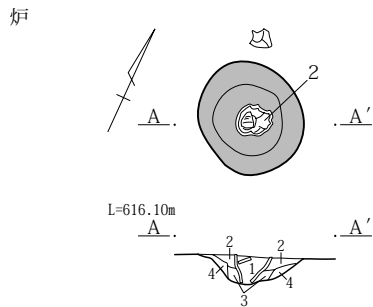
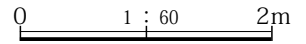


47号住土層

- 1 黒褐色土 ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む。炉跡埋土

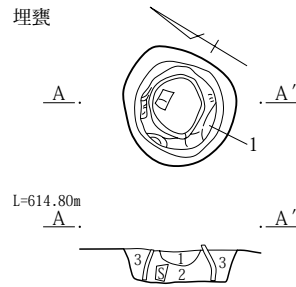


トーン部は焼土



炉跡土層

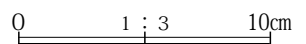
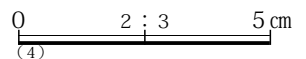
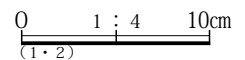
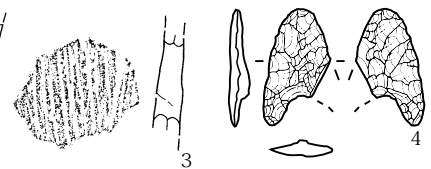
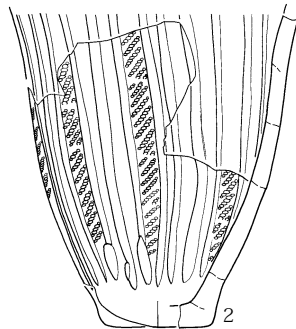
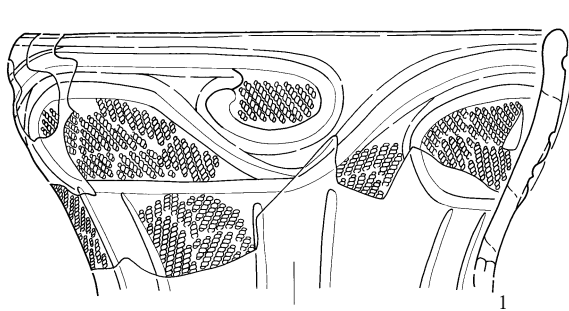
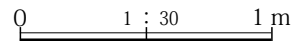
- 1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 暗褐色土 粘質土。焼土粒を含む。ややしまり強い
- 3 黒褐色土 混入物少なく、粘性強い
- 4 暗黄褐色土 ローム塊と黒色土塊を含む



埋喪土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を含む
- 2 黒褐色土 小礫を含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を含む

トーン部は焼土



第174図 61区47号住居跡及び出土遺物

に位置付けられる。埋甕1は加曾利EⅢ式新段階に併行し、埋甕2は「郷土式」の後半段階に位置付けられよう。同時期の所産とは捉えられない。さらに、炉跡長軸も東西に近い向きであり、これも他の住居跡との差が見出せよう。いずれにしても再検討が必要であろう。

61区47号住居跡（第174図 PL.14・91）

位置：調査区中央南寄りの61区W・X-5グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が広がるが、ほぼ平坦地形上での調査となった。東側に27号住、32号住、南に44号住が接するように、住居跡群の一隅にある。

経過：ローム漸移層である暗褐色土で平面形を確認した。掘り込みが浅く、遺構確認中に焼土に広がりが見られたため、炉跡の可能性を踏まえて住居跡として調査した。その結果、焼土の一つが地床炉となり、近距離に埋甕1基を見ることができた。ただし傾斜地形と近接する土坑群が影響し、西側の壁は逸失していた。また、南側は調査区域外に延びるため、未調査となっている。

規模：長軸を北東に向けた不整楕円状を平面形とする。平面規模は約一×315.0cmで小型である。深さは約18cmを測り、浅く壁の立ち上がりも弱く、遺存度は悪い。重複：前述の27号住、32号住、44号住が近接するが新旧は不明である。さらに北側には102坑、104坑、110坑等土坑群が接するが、土層による観察が果たせず、こちらも新旧は不明である。

床面：暗褐色土を地床とする。僅かな凹凸があり、南西への傾斜が見られるが、ほぼ平坦面を築く。硬化面は見られず、軟弱な床面が広がる。

施設：床面中央に地床炉、南東側に埋甕を見る。南西側にP1と焼土が確認されている。

炉跡：平面形は小型円形を呈し、規模は約46.0×40.0×12.0cmを測る。浅く断面形は皿状だが、底面中央に深鉢体部下半～底部（2）を炉内土器として埋置する。土器は強く被熱しておらず、上端のみが露出していた可能

性がある。埋土は焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。埋甕：炉跡南東約70cmの距離を置いて、径約45cmの円形土坑を掘り込みとした埋甕1基が設けられる。住居跡平面形を優先した長軸には乗らないが、北西を主軸とする他の住居跡の例と大きな差は無い。深鉢口縁部～体部上半（1）を逆位に埋置する。おそらく体部は意図的な欠損であろう。深鉢内部には小型の自然石が出土しているが、性格は不明である。

焼土：床面南側に焼土がまとまる。当初は住居跡炉跡としての可能性を求めたが、掘り込みも浅いため、焼土として位置付けた。径約50×45cm程の不整円形の範囲に小型の焼土塊が分布する。掘り込みは浅く、数cmに止まるため、床面上での焼土堆積と思われる。

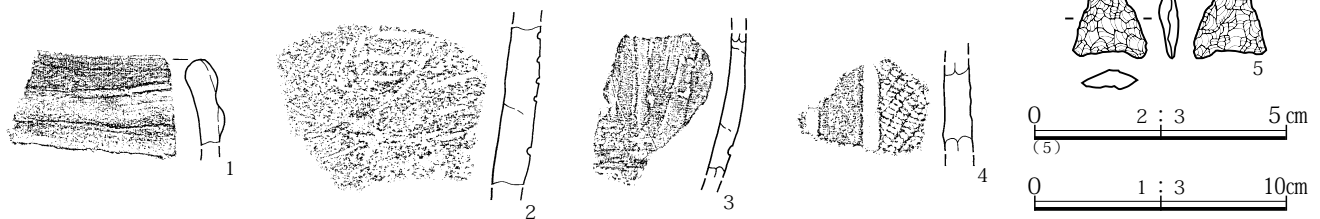
柱穴：焼土北に接してピットを1基検出したが、浅く柱穴としての妥当性は少ない。

遺物：炉内土器（2）と埋甕（1）以外に深鉢体部破片（3）、石鏃（4）を図示した。いずれも埋土中の出土である。炉内土器、埋甕とも加曾利EⅢ式に比定され、同時期の所産と捉えられよう。

所見：住居跡本体の遺存度は極めて悪く、壁周溝や柱穴を見ないため、詳細な平面形や規模の把握には至らなかった。その中で地床炉内の炉内土器と埋甕は、同時期の所産で良好な一括性を持つものと評価したい。時期は中期後葉であろう。

61区48号住居跡（第175図 PL.91）

概要：出土遺物のみが記録化されていた。遺構平面図や写真記録が無いため、出土遺物も遺構外として扱うべきと考えたが、61区45号住のように、他の住居跡土層などに痕跡が記録されている可能性もあり、ここでは遺物のみを掲載する。1、3、4が加曾利EⅢ式、2が「郷土式」である。



第175図 61区48号住居跡出土遺物